博　多　170

― 博多遺跡群 第 203 次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1405 集
〈第 2 分冊〉

2021

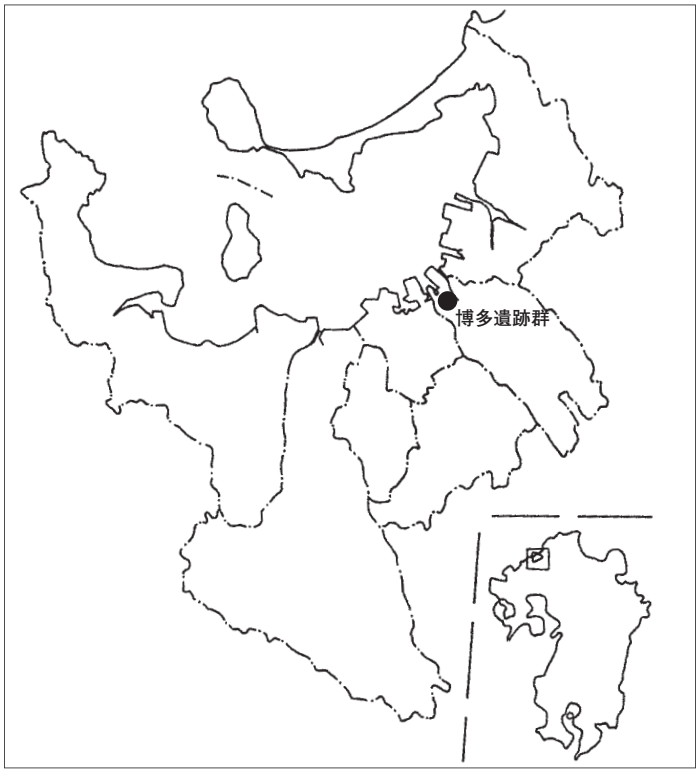
福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多　170

－博多遺跡群 第 203 次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1405 集

〈第 2 分冊〉



調査番号　1427
遺跡略号　HKT-203

2 0 2 1

福 岡 市 教 育 委 員 会

本文目次

第Ⅰ章　はじめに …… 第1分冊・1
　1.　調査に至る経緯 …… 1
　2.　調査の組織 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の記録 …… 9
　1.　調査の概要 …… 9
　2.　1区の調査 …… 11
　3.　2区の調査 …… 13
　4.　3区の調査 …… 35
　5.　4区の調査 …… 197
　6.　5区の調査 …… 227
　7.　6区の調査 …… 249
　8.　7区の調査 …… 295
　9.　8区の調査 …… 第2分冊・1
　10.　9区の調査 …… 121
　11.　10区の調査 …… 第3分冊・1
　12.　11区の調査 …… 39
　13.　12区の調査 …… 51
　14.　13区の調査 …… 131
　15.　14区の調査 …… 141
　16.　15区の調査 …… 169
　17.　16区の調査 …… 209
　18.　17区の調査 …… 229
　19.　18区の調査 …… 235
　20.　19区の調査 …… 271
　21.　20区の調査 …… 275
　22.　21区の調査 …… 287
　23.　22区の調査 …… 301
　24.　23区の調査 …… 311
　25.　24区の調査 …… 第4分冊・1
　26.　25区の調査 …… 44
　27.　26区の調査 …… 57
　28.　27区の調査 …… 65
　29.　28区の調査 …… 88
　30.　29区の調査 …… 96
　31.　30区の調査 …… 117
　32.　31区の調査 …… 120

33. その他の調査 …… 124
34. 金属製品・生産関連資料等について …… 128
35. 動物遺存体について …… 243
第Ⅳ章 まとめ …… 253
1. 弥生時代中期 …… 253
2. 弥生時代後期～古墳時代 …… 254
3. 古代 …… 257
4. 中世 …… 258
5. 近世 …… 260

〈付 編〉

1. 博多遺跡群第 203 次調査出土資料の鉛同位体比分析について …… 263
（国立歴史民俗博物館 齋藤 努）
2. 博多遺跡群第 203 次調査出土遺物の金属学的調査について …… 266
（大澤 正己・パリノ・サーヴェイ株式会社）
3. 博多遺跡群第 203 次調査出土の炭化種実について …… 292
（佐々木 由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ））
4. 博多遺跡群第 203 次調査出土試料の年代測定について …… 297
（山形大学高感度加速器質量分析センター）
5. 博多遺跡群第 203 次調査出土の人骨について …… 301
（九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）
6. 博多遺跡群第 203 次調査出土弥生中期人骨の年代学的調査について …… 316
（国立歴史民俗博物館 藤尾 慎一郎）
7. 博多遺跡群第 203 次調査出土弥生中期人骨のＤＮＡ分析について …… 323
（国立科学博物館 篠田 謙一）

9．8区の調査

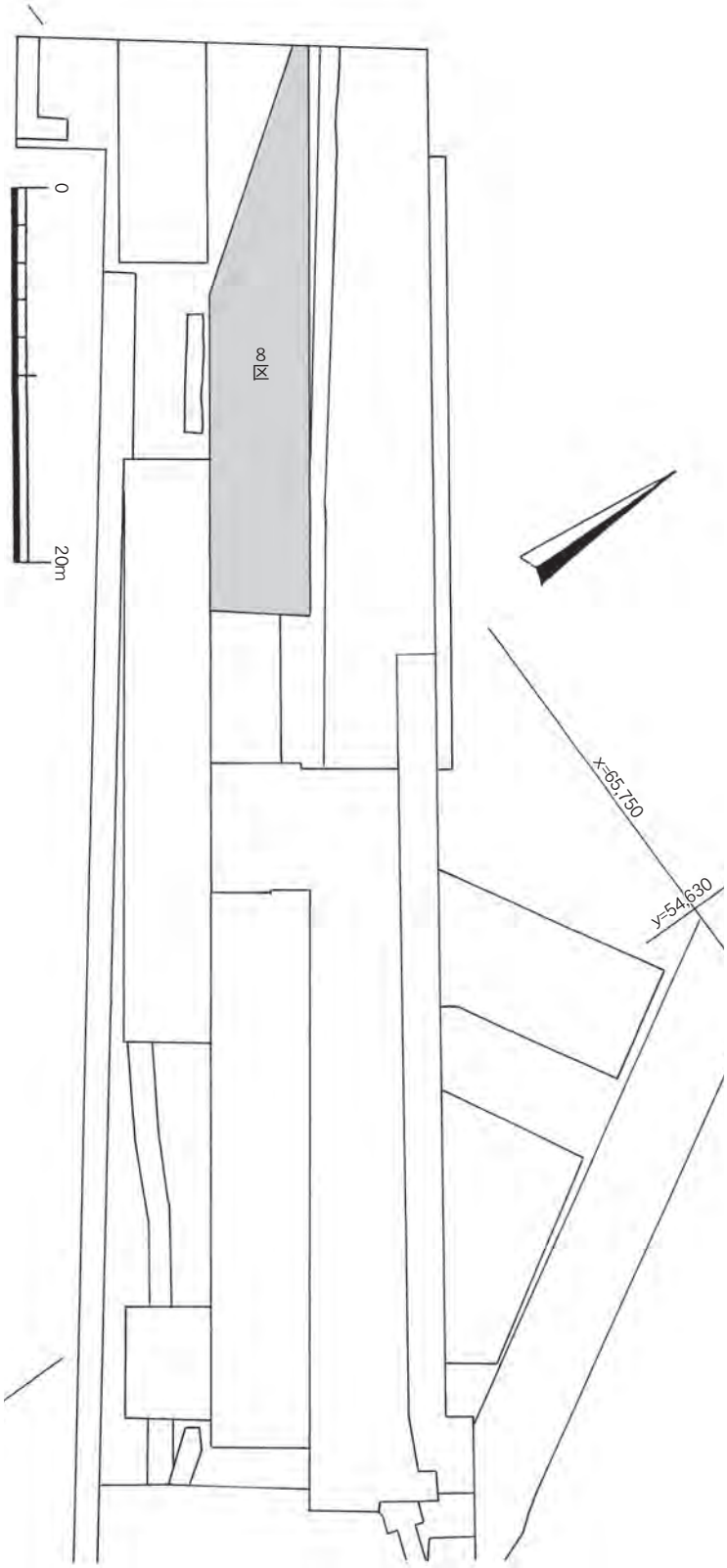


Fig.1　調査区位置図（1/400）

1）調査の概要

本調査区は事業地の西部に位置し、現況は道路で、4車線道路の上り内側車線部分に位置する。現有の道路を使用しつつ切り替えながら1車線分毎の調査実施であったため、幅5m弱の狭小な調査区となっている。

南東に調査3区、北西に調査2区が位置し、周囲は立会19区に囲まれている（Fig.1）。地表標高は5.5～5.2mを測り、北西に緩く下がる。調査区外周の鋼矢板土留め工事後1m程の表土・撹乱層の除去を重機で行った後、この面を調査第1面とし、さらに約1m下方の砂層上面まで5面にわたる調査を実施している。各面までの掘削は人力で実施している。

基本層序は（Fig.7）100㎝程の表土以下、40㎝程の暗灰褐色土（a層）、50㎝程の灰褐色砂質土と暗灰褐色土、暗褐色混土砂と暗灰褐色土の1～3㎝幅の互層の風成層（b1・b2層）、10㎝程の暗褐色混土砂を含む地山との暫移層（c層）、黄灰～黄白色粗砂の地山層（d層）となる。

調査第1面はa層上でEL4.5m程（Fig.2）、第2面はa層中位程の任意で設定したEL4.2m（Fig.3）、第3面はb1層上面でEL4.0m程（Fig.4）、第4面はb2層上面あたりでEL3.7m程（Fig.5）、第5面は地山層上面でEL3.4m程となる（Fig.6）。地形は調査9区西側を最高所として博多浜砂丘の北西側に緩く下がる。

Ph.1　調査区周辺（東から）

Ph.2　調査前風景（東から）

Ph.3　西部 1 面全景（東から）

Ph.4　西部 2 面全景（東から）

Ph.5　東部 1 面全景（東から）

Ph.6　東部 2 面全景（東から）

調査の測量基準線は工事の基準線に合わせ、任意で 2m グリッドを設定した。排土は場内処理であったため、調査は西半部から開始し、終了後東半部を反転し調査を実施した。平成 27 年 4 月 1 日より西半部の調査に着手し。4 月 17 日に第 1 面の全景を、5 月 8 日に第 2 面を、5 月 28 日に第 3 面を、6 月 6 日に第 4 面を、6 月 16 日に第 5 面の全景を撮影した。実測を完了後反転し東半部に着手し、6 月 29 日に第 1 面の全景を、7 月 6 日に第 2 面を、7 月 10 日に第 3 面を、7 月 21 日に第 4 面を、7 月 24 日に第 5 面の全景を撮影した。実測を完了後、調査機材を撤収し 7 月 31 日調査を完了した。調査面積は 138.49㎡である。

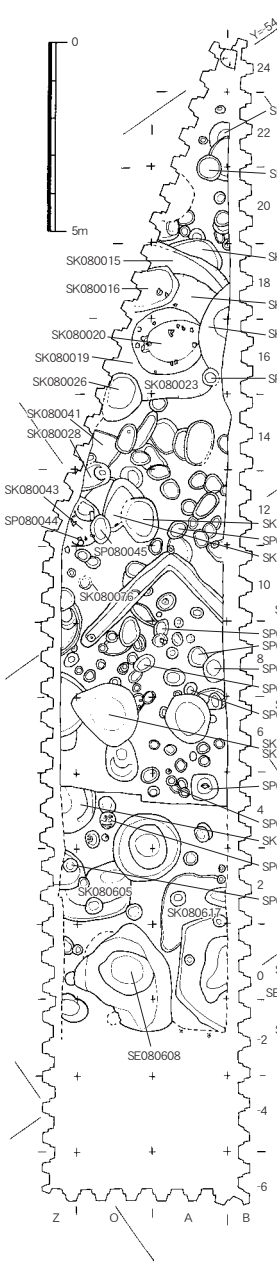


Fig.2
1 面全体図（1/200）

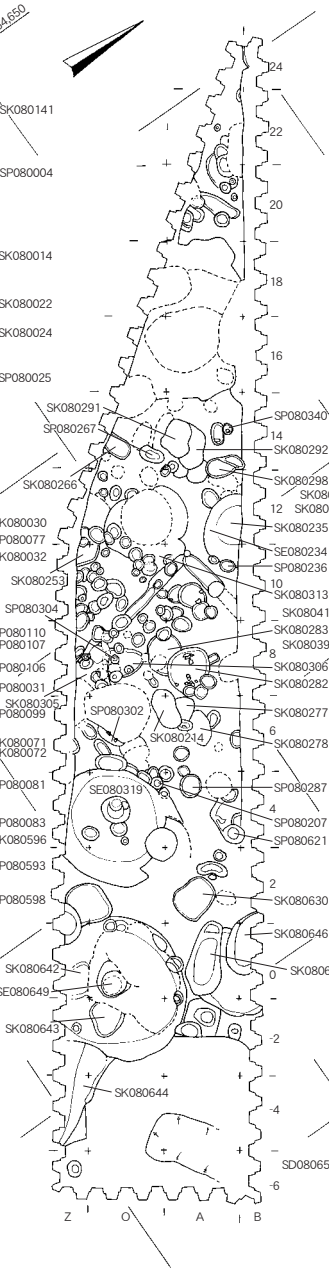


Fig.3
2 面全体図（1/200）

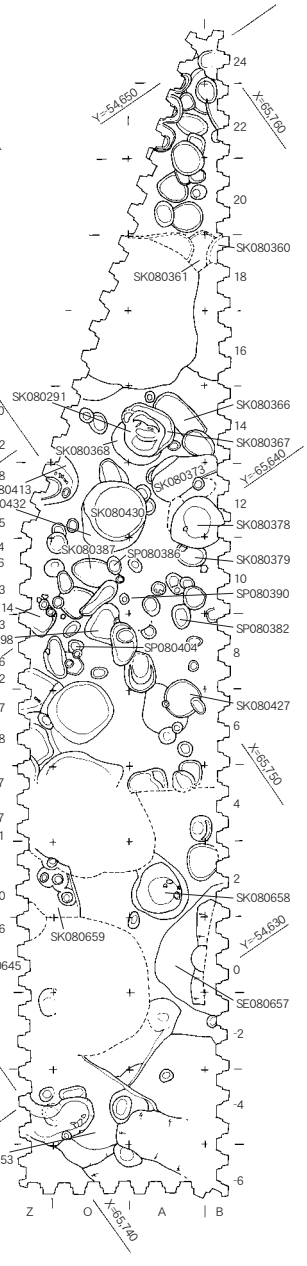


Fig.4
3 面全体図（1/200）

検出したおもな遺構は第５面を中心に弥生時代中期甕棺墓を３基、弥生時代終末期の土坑３基、第４～５面にかけて古墳時代前期の竪穴住居３軒・土坑９基・溝３条、第３～５面にかけて古墳時代後期の土坑４基、第２～４面を中心に古代の土坑 38 基・溝３条、第１～５面にかけて 11 世紀後半～ 12 世紀前半の（中世２）土坑 23 基・溝２条、12 世紀中頃～ 13 世紀前半の（中世 1）井戸３基・土坑 25 基・溝１条を、他柱穴を 128 基検出し、最盛期は中世で全体の 44% を占め、次いで古代が 36% で盛期となっている。13 世紀後半以降の遺構は、近世以外柱穴と遺物が少量有るのみで、おもだった遺構は検出されない。

遺物は中国製貿易陶磁器をはじめ、国産陶器・土師器・須恵器・瓦・ガラス器・鉄器等コンテナ 118 箱分出土した。特筆すべきは 11 世紀末

Ph.7　西部３面全景（東から）

Ph.8　東部３面全景（東から）

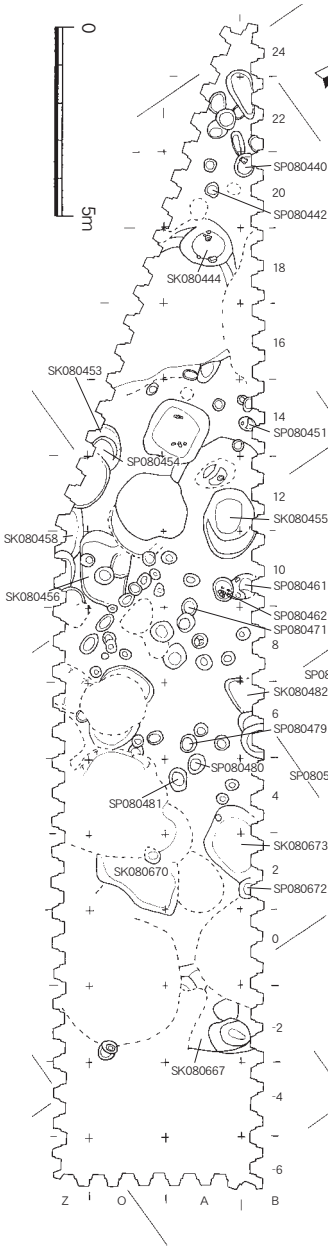


Fig.5
4 面全体図（1/200）

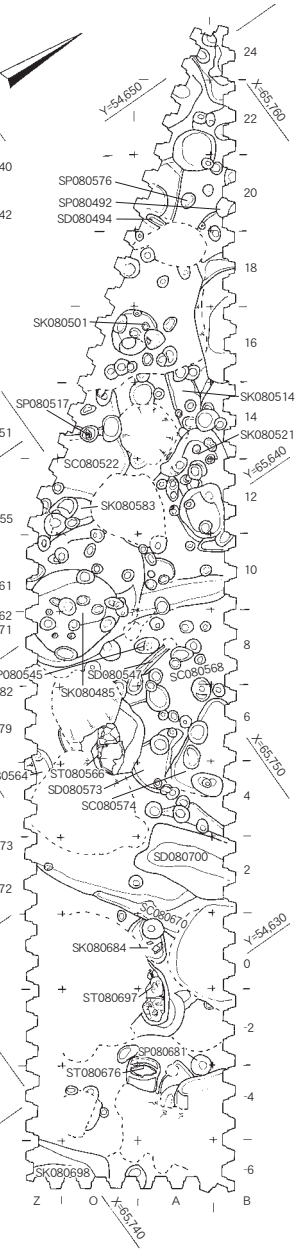


Fig.6
5 面全体図（1/200）

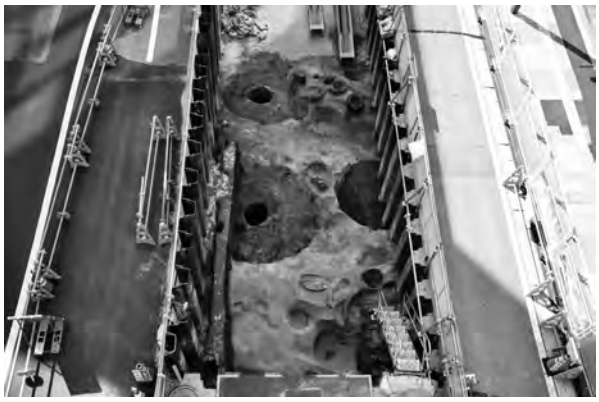
Ph.9　西部 4 面全景（東から）

Ph.10　東部 4 面全景（東から）

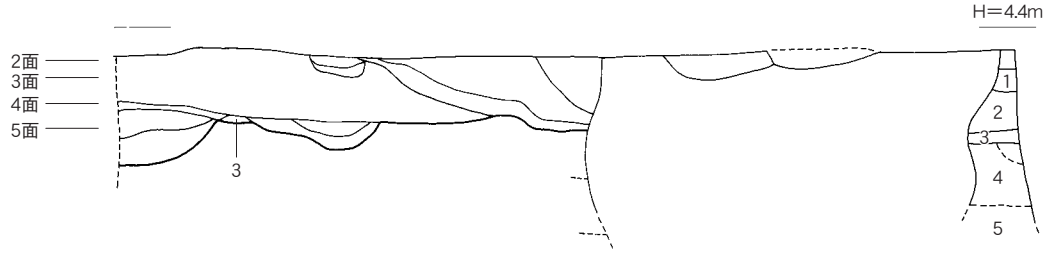
～ 12 世紀前半の遺構からの多くのガラス製造関連の遺物の出土で、9・13・15 区にかけてガラス小玉を中心とした工房の存在が考えられる。また、古代でも銅の鋳造関連遺物の出土が目立つ。遺物の詳細と考察はⅢ章 34 で纏めているため、本文中での紹介は省略している。

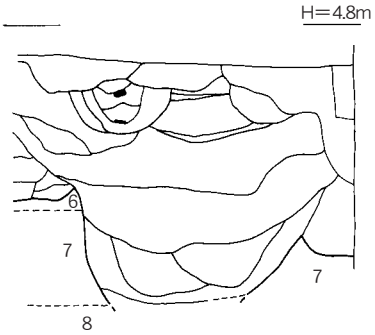
本報告は、同時期遺構が多面にわたって検出され、面毎の報告では煩雑となるため、各時期毎に纏めて報告をおこなう。

Ph.11　西部 5 面全景



Ph.12　東部 5 面全景（東から）





1　灰褐色砂質土と暗灰褐色土の互層
2　暗褐色混土砂と暗灰褐色土の互層
3　暗褐色混土砂に黄灰色細砂斑状に混入
4　黄灰色細砂（地山）
5　灰白色細砂（地山）
6　暗黄灰色砂（地山）
7　明黄灰色砂（地山）
8　灰色粗砂（地山）

0　2m

Fig.7　調査区土層断面図（1/60）

Ph.13　東部南壁土層断面（北から）

Ph.14　東部土層断面（西から）

2）中世（１）の調査

中世（１）は龍泉・同安窯系青磁が出現する 12 世紀中頃以降 13 世紀前半までの時期である。

検出した主な遺構は井戸３基・土坑 25 基・溝１条で、第１・２面を中心に、検出で見落とした遺構が最下面の第５面までに及んでいる。遺構全体の約 22% の量を占めており、前代の中国製白磁が突出する 11 世紀後半～ 12 世紀前半の中世（2）の時期とともに最盛期を示している。遺構は全面に広がっており、井戸は東半部に３基集中する。いずれも木桶を積み上げた井側と思われる。この部分は近世の井戸とも重複しており、水脈の位置が継続している。土壙は幅 1m 前後の廃棄土壙で、25 基検出した。西部を中心に分布している。溝は、中央部で直角に屈曲する幅 30 ～ 50㎝弱の溝を１条検出した。雨落ち溝とすると内側に建物が想定される。柱穴は径 20㎝前後のものが多数検出される。大多数は掘建柱建物に伴うと思われるが、幅 5m 弱の狭小な調査範囲と、根石を据えた柱列が並ぶ状況でもなく、建物の復原は難しい。

遺物としては９基の遺構から、ガラス小玉をはじめ、ガラス容器、玉未製品、ガラス素材、ガラス坩堝、炉壁等多くのガラス成品製作関連の多くの遺物が、前代を中心として本期まで、多量の炭粒・灰とともに検出されており、溶解炉本体の検出は見なかったが、出土遺物の状況から第 203 次調査区の本区・９・13・15 区を中心にガラス器製作工房の存在が類推される。遺物の量的には博多遺跡群内のみならず、市内遺跡で最多の量となっている。

（１）井戸

調査区東部の、南北幅 8m 程の範囲に３基集中しており、水脈がこの部分の地下を通っていたと思われ、近世井戸もこの部分に集中する。掘方は３～ 4m 弱の円形で、井側はいずれも径 70 ～ 90㎝の桶枠と思われるが木質は遺存しない。

SE080319（Fig.8　Ph.15）　２面目 O4 グリッドで検出され、径 3m の円形の掘方に径 65㎝の木桶を井筒として据えると思われるが木質は遺存しない。検出面から 1.5m までは掘削したが、地山が砂地で壁面も急角度であったため、安全を考慮してこれ以上の掘削はおこなっていない。

出土遺物（Fig.9･10　Ph.16）　１～ 24 は井筒内出土。1・2 は青磁で、1 は高麗青磁碗。口径 14.9 器高 4.3㎝を測る。体部は直線的に開き口縁は外反して平坦面をつくる。内面に圏線を１条施し見込みの釉を拭き取り、重ね焼きのため輪状に目跡が残り無釉の高台畳付けにも薄く目跡が残る。高台内は回転ケズリ。胎土は黒色微粒と白色小粒を多く含み黄灰色を呈し、灰オリーブの透明釉を内面から高台際まで掛ける。2 は龍泉窯系０類の碗。口径 12.3㎝で、口縁外面が若干肥厚する。外面口縁下に片切調の粗い５本単位の櫛描文を施し内面に１条と３条の圏線を施す。胎土は黒色微粒を含み灰色を呈し、灰オリーブの透明釉を内外に掛ける。3・4 は白磁碗。3 は口径 17.1 器高 7.0㎝を測る。口縁は小さく外反して平坦面をつくる。内面に圏線を１条施す。細く高い高台は内傾する。胎土は黒色微粒を多く含み灰白色を呈し、灰白色の透明釉を内面から高台脇まで掛ける。4 は高台部で径 5.8㎝を測る。見込みは段を成し、低い高台の畳付けは丸く仕上げる。胎土は精良で灰白色を呈し、浅黄色の透明釉を内面に掛け、貫入が多く入る。5 は天目碗口縁部。胎土は白色小粒を含み灰色を呈し、鈍い赤褐色の不透明釉を内外面に掛け、口唇は軽く拭き取る。6 は東播系の捏鉢。口径 30.6㎝を測る。口縁外面は斜めに面取りし黒変する。内外面に回転ナデを施す。胎土は径 1㎝までの石英・長石粒を多く含み粗い。灰白色を呈する。7・8 は瓦器。7 は丸底の皿で口径 10.0 器高 2.0㎝を測る。

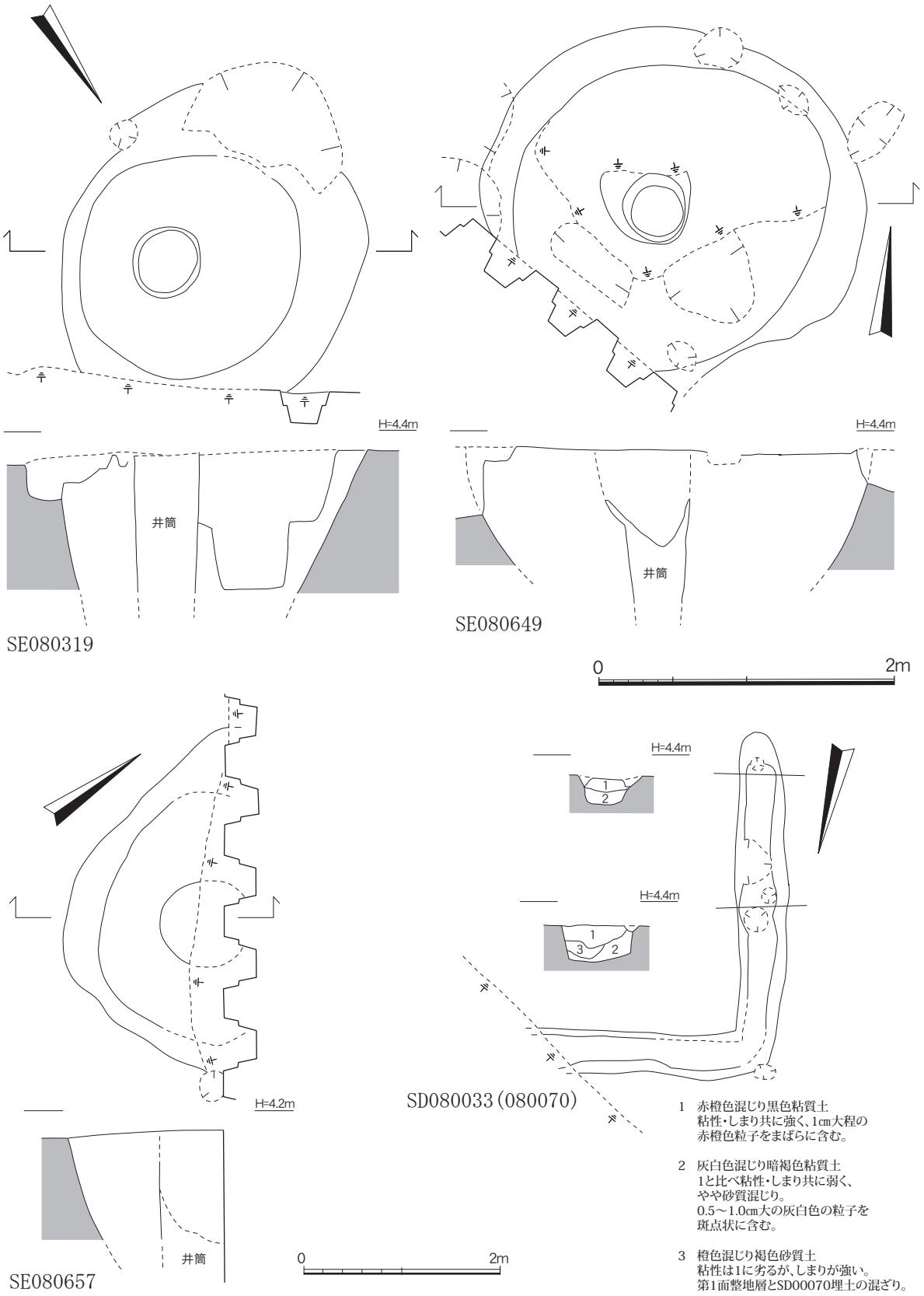


Fig.8　SE080319・080649・080657、SD080033実測図(1/60、土層断面は1/40)

Ph.15　SE080319（北から）

外面底部との境は稜を成し外底は回転ヘラ切り後ナデ。内面から体部外面までヨコケンマを施し、口縁内面から外面が黒変する。胎土は 1㎜までの白色粒を少量含む。黒変部以外は灰白～暗灰色を呈する。8 は埦。口径 16.6 器高 5.3㎝を測る。体部は比較的低く直線気味に延び、高台は細く高く若干外傾する。体部内外面にヨコケンマを施し、口縁内外面が黒変する。高台部は回転ナデを施す。胎土は白色粒を若干含む。内面は灰白、外面は黄灰色を呈する。9 ～ 20 は土師器。9 ～ 12 は低い器形の坏。9 は口径 17.0 器高 2.7㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は 0.5mm 以下の白色粒を含み、内面は橙色外面は鈍い橙色を呈する。10 は口径 13.3 器高 2.5㎝を測る。体部は緩く湾曲し外面中位に稜を成す。内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒・赤色粒を少量、雲母を多く含み、内外面は鈍い橙色を呈する。11 は口径 15.2 器高 2.6㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面を回転ナデ後内底を不定方向にナデ、回転糸切りの外底に板圧痕が一部残る。胎土は 2mm 以下の白色粒・微細な雲母を少量含み、内面外面は浅黄橙色を呈する。12 は口径 15.5 器高 2.5㎝を測る。体部は底部脇が湾曲し直線的に開き、内外面を回転ナデ後外面下半に回転ヘラナデ、内底をタテにナデ外底は回転糸切り。胎土は 2mm 以下の白色粒・赤色粒を少量、微細な雲母を多く含み、内面外面は鈍い橙色を呈する。13 ～ 20 は皿。13 は口径 9.5 器高 1.5㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量雲母を多く含み、内面は鈍い橙色外面は暗褐色を呈する。14 は口径 8.4 器高 1.2㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底にケズリ様の板ナデを施す。胎土は微細な白色粒・雲母を多く含み、内面は鈍い橙色外面は暗褐色を呈する。15 は口径 9.0 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量含み、内外面は灰褐色を呈する。16 は口径 8.4 器高 1.0㎝を測る。体部は緩く内湾して開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板

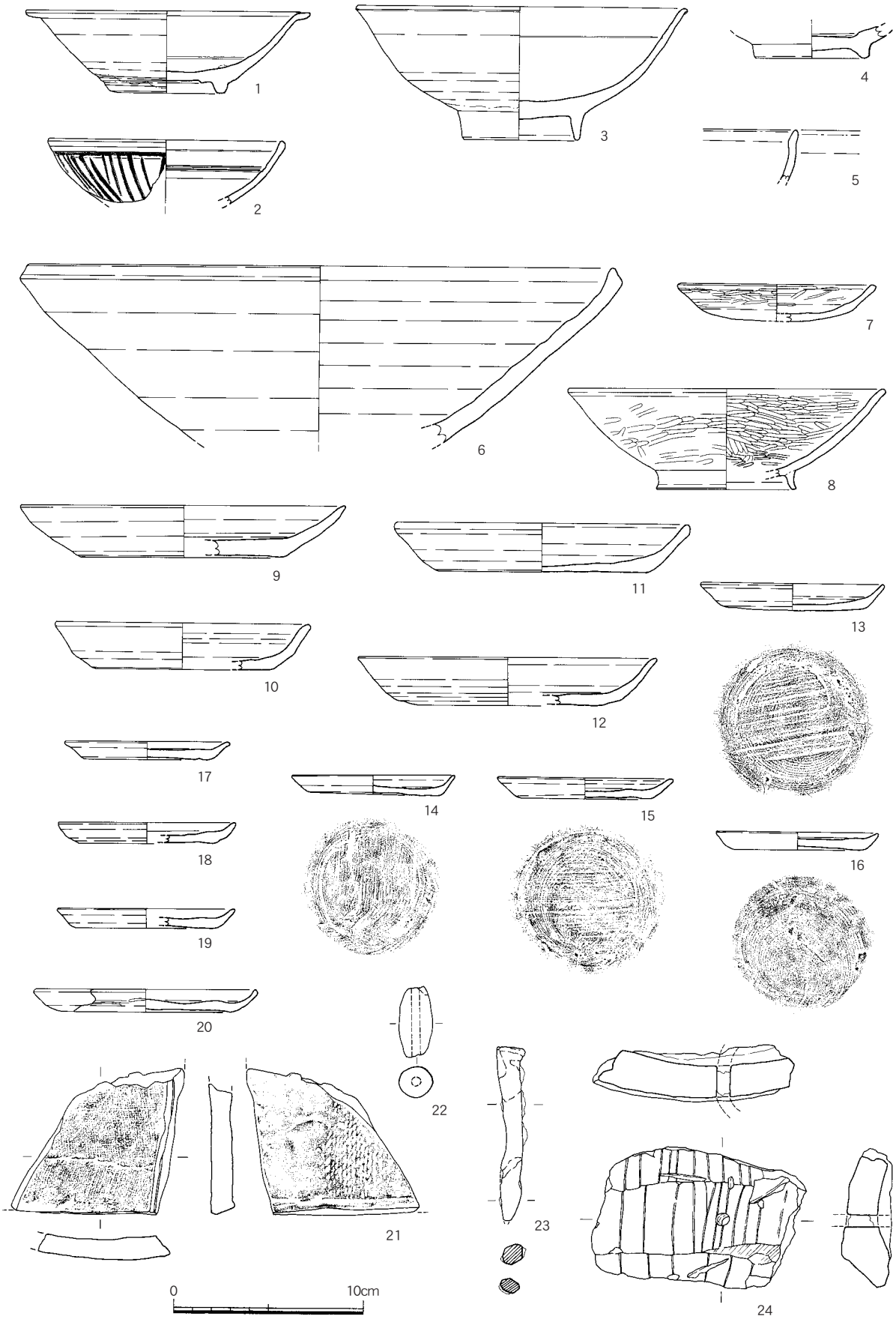


Fig.9　SE080319 出土遺物実測図 -1（1/3）

圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量雲母を多く含み、内外面は鈍い橙色を呈する。17 は口径 8.4 器高 1.0㎝を測る。体部は緩く外湾して強く開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量雲母を多く含み、内外面は鈍い橙色を呈する。18 は口径 9.2 器高 1.1㎝を測る。体部は緩く内湾して開き、内外面を回転ナデを施し外底は回転糸切り。胎土は 1㎜以下の白色粒・雲母を少量含み、内面は橙色外面は鈍い黄橙色を呈する。19 は口径 9.2 器高 1.1㎝を測る。体部は緩く外湾して開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒微細な雲母を少量含み、内面は橙色外面は鈍い黄橙色を呈する。20 は口径 11.5 器高 1.2㎝を測る。体部は緩く内湾して開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒を若干雲母を多く含み、内外面は黄橙色を呈する。21 は平瓦。厚 1.3㎝を測る。外面に縄目タタキ後一部ヨコナデを施し内面には布目圧痕が残る。下端面はヘラナデ、側面はヘラ切り後折断している。胎土は微細な白色粒を少量含み、内面灰白色外面灰色を呈する。22 は土師質の管状土錘。外径 1.8 孔径 4.5㎜長 3.8㎝重量 9.8g を測る。上下の孔左側が使用により欠ける。摩滅により調整は不明。23 は鉄釘。上端を屈曲し 1.5㎝角の頭部とする和釘で全長 9.0 径 1.2㎝を測る。24 は滑石製石鍋片転用の温石で、縦 11.2 横 7.5 厚 0.7㎝重量 280.5g を測る。破断面をケズリで整形し中央上位に径 7 ミリの穿孔を行い鉄輪を嵌め一部残存している。

25 ～ 42 は掘方出土。25・26 は白磁碗。25 は口径 15.8㎝を測り、口縁が小さく屈曲し外面の低い段下に回転ヘラケズリ後沈線を 2 条施した後 4 本単位の櫛描花弁文を施す。胎土は微細な黒色粒を少量含み灰白色を呈し、半濁の灰白釉を内面から外面下位まで掛ける。26 は低い器形の小碗で口径 13.4 器高 4.2㎝を測る。口縁は緩く外反し中位で緩い稜を成し、外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。内面に圏線 1 条と櫛描の花文を施し細く高い高台は脇が段を成す。胎土は黒色微粒を若干含み灰白色を呈し、灰オリーブの透明釉を内面から高台脇まで掛ける。27 ～ 29 は瓦器。27 は埦。口径 16.8 器高 6.1㎝を測る。高台は低く断面三角形を呈する。体部内外面に粗いヨコケンマを施し、口縁内外面が黒変する。高台部は回転ナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量含む。内面は灰白～黒灰外面は灰色～褐灰色を呈する。28 は楠葉系の埦。口縁内面に沈線を施し内外面に細かなヨコケンマを施す。胎土は微細な白色粒・雲母を若干含む。内外面は暗灰色を呈する。29 は丸底の皿で口径 9.8 器高 1.8㎝を測る。外面口縁下が窪み稜を成し外底は回転ヘラ切り後ナデ、板圧痕が残る。内面は細かな縦ケンマ体部外面は細かなヨコケンマを施す。胎土は微細な白色粒を少量含む。内外面は黒褐～黄灰色を呈する。30 ～ 38 は土師器。30・31 は低い器形の坏。30 は口径 15.4 器高 2.6㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量雲母を多く含み、内面は灰黄褐～暗褐色外面は浅黄橙色～灰黄褐色を呈する。31 は口径 15.8 器高 3.0㎝を測る。体部は緩く内湾して開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒・雲母を少量含み、内外面は浅黄橙色を呈する。32 ～ 38 は皿。32 は口径 9.3 器高 1.3㎝を測る。体部は緩く内湾して開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒赤色粒を少量微細な雲母を多く含み、内外面は鈍い橙色を呈する。33 は口径 8.9 器高 1.5㎝を測る。体部は内湾して強く開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。34 は口径 8.8 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量雲母を多く含み、内外面は鈍い橙色を呈する。35 は口径 9.5 器高 1.5

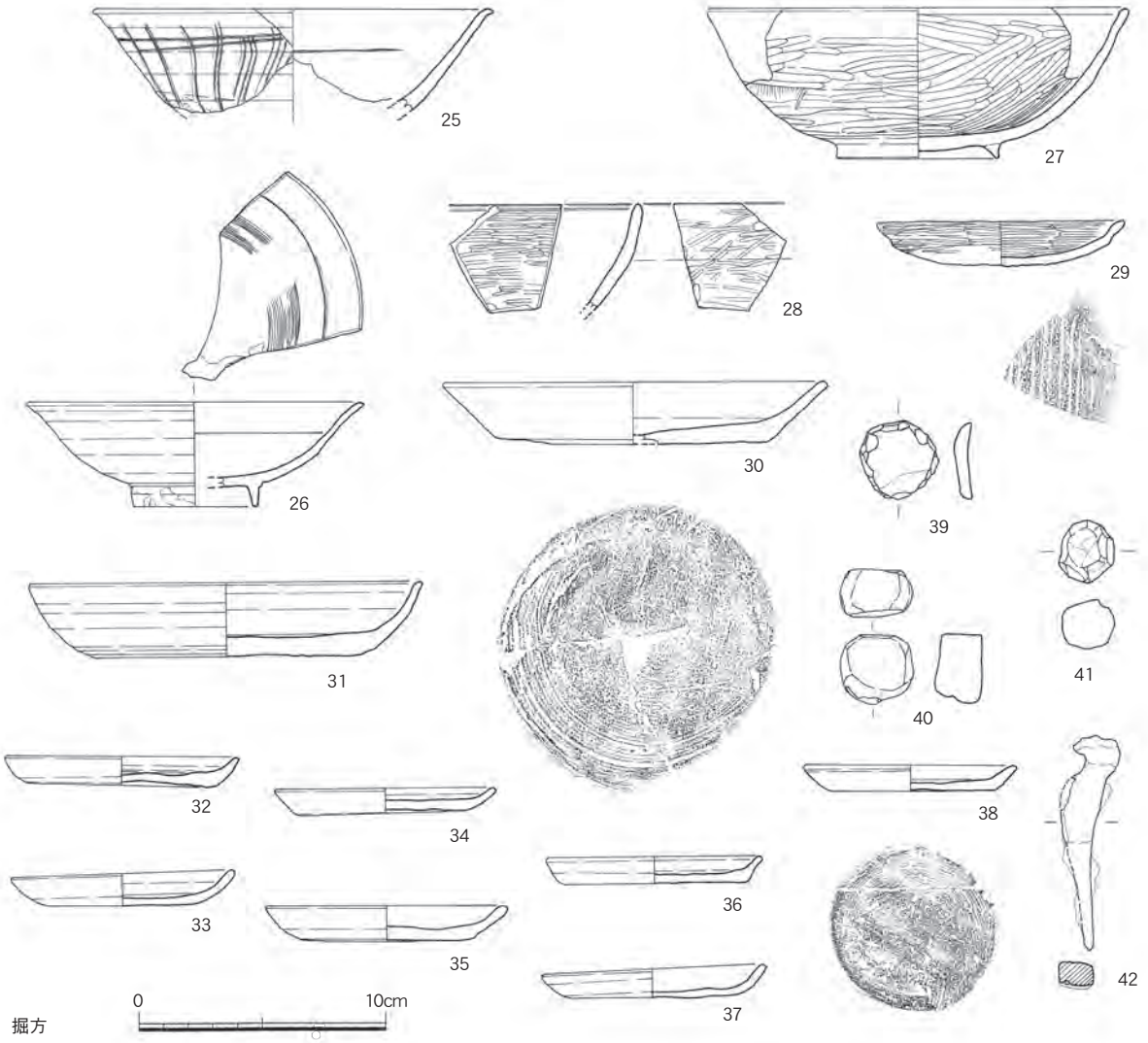
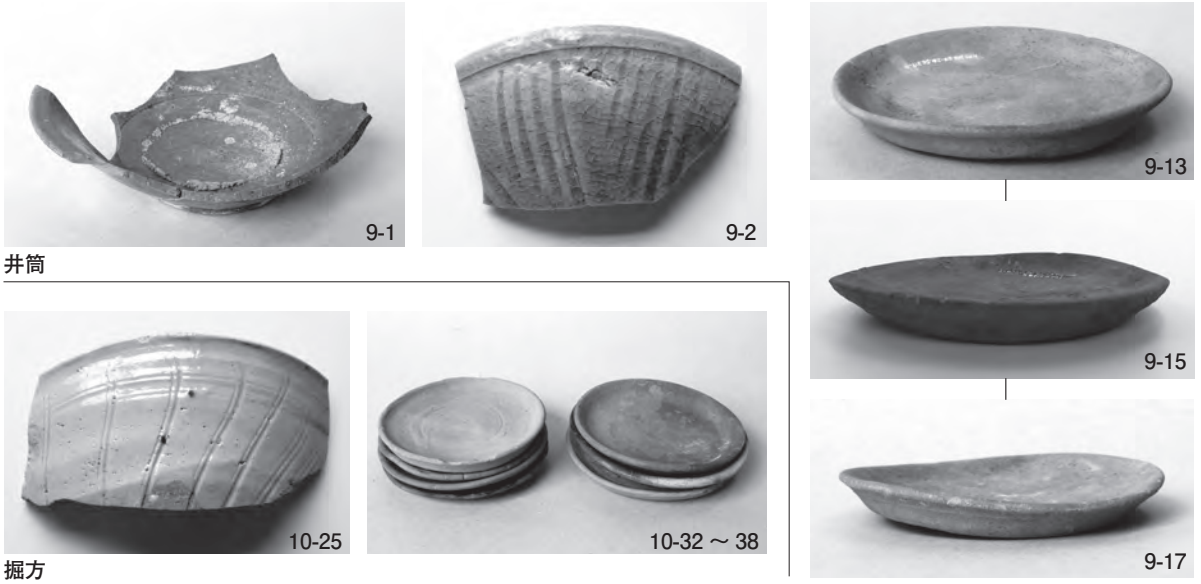


Fig.10　SE080319 出土遺物実測図 -2（1/3）



Ph.16　SE-319　出土遺物

㎝を測る。体部は緩く内湾して強く開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底は粘土を追加して補強し板圧痕が残る。内面には炭化物が付着する。胎土は微細な白色粒・雲母を少量含み、内面は浅黄橙色外面は灰白～灰黄褐色を呈する。36 は口径 8.5 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒赤色粒を少量含み、内外面は浅黄橙色を呈する。37 は口径 9.0 器高 1.3㎝を測る。体部は緩く内湾して開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒と微細な雲母を少量含み、内外面は橙色を呈する。38 は口径 8.4 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板ナデを施す。胎土は微細な白色粒・雲母を少量含み、内面は浅黄橙～鈍い橙色外面は鈍い黄橙色～灰褐色を呈する。39・40 は瓦玉。39 は丸底杯の底部片の転用で径 3.3 厚 0.8㎝ 6.2g を測る。外周を円形に打ち欠き整形する。40 は弥生甕棺片の転用で径 3.3 厚 2.0㎝ 17.5g を測る。外周を敲打後磨って円形に整形する。41 は滑石製の石玉で径 2.5 厚 2.0㎝ 14.5g を測る。全面をケズリと磨りで球形に整形する。42 は鉄釘。上端を屈曲し 1.8 × 0.9㎝角に頭部整形する和釘で全長 8.6㎝を測る。時期は 12 世紀後半を示す。

SE080649（Fig.8　Ph.17）　2 面目の O0 グリッドで検出され、径 3.95m の円形の掘方に径 60㎝の木桶を井筒として据えると思われるが木質は遺存しない。井筒の上位は径 90㎝程に広がっており、井筒の埋没前に壁面が崩落している。SE-319 同様に検出面から 1.6m までは掘削したが、地山が砂地で壁面も急角度であったため、安全を考慮してこれ以上の掘削はおこなっていない。

出土遺物（Fig.11　Ph.18）　43・44 は井筒内出土。43 は龍泉窯系青磁碗で、直口口縁の内面に片切彫の蕉葉文、外面に片切彫で櫛歯の脈入り蓮弁文を施す。胎土は微細な白色粒を含み灰色を呈し、オリーブ灰の透明釉を内外に掛ける。44 は土師器皿。口径 9.2 器高 1.1㎝を測る。体部は緩く内湾して開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板ナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を多く含み、内外面は褐色を呈する。

45 ～ 58 は掘方出土。45 ～ 47 は同安窯系青磁。45 は碗。口径 15.3㎝で、内面から外面上位に回転ナデ、以下に回転ヘラケズリを施し、外面に細かな縦櫛歯文、内面に 1 条の圏線後櫛描の花文を施す。胎土は白色黒色微粒を含み灰白色を呈し、明オリーブ灰の透明釉を内外に掛ける。46・47 は皿。46 は口径 9.9 器高 2.1㎝を測る。体部は緩く外反して開き下位で稜を成し外底から口縁下まで回転ケズリを施す。内面には圏線を 1 条、見込みにヘラ描の花文とジグザグの櫛点描文を施す。胎土は微細な白色黒色粒を含み灰白色、内面から外面屈曲部まで灰オリーブの透明釉を掛ける。47 は口径 10.9 器高 2.6㎝と、深い器形で外底から中位の稜まで回転ヘラケズリを施す。内面には見込みにヘラ描の花文とジグザグの櫛点描文を施す。胎土は微細な白色粒を含み鈍い黄橙色、内面から外底際まで緑灰色の透明釉を掛ける。48・49 は龍泉窯系青磁。48 は 0 類の碗。口縁は屈曲し溝縁状を成す。外面中位に回転ヘラケズリで浅い段を、片切調の粗い 3 本単位の縦櫛描文を施す。胎土は微細な白色黒色粒を含み灰白色を呈し、灰オリーブの透明釉を

Ph.17　SE080649（北から）

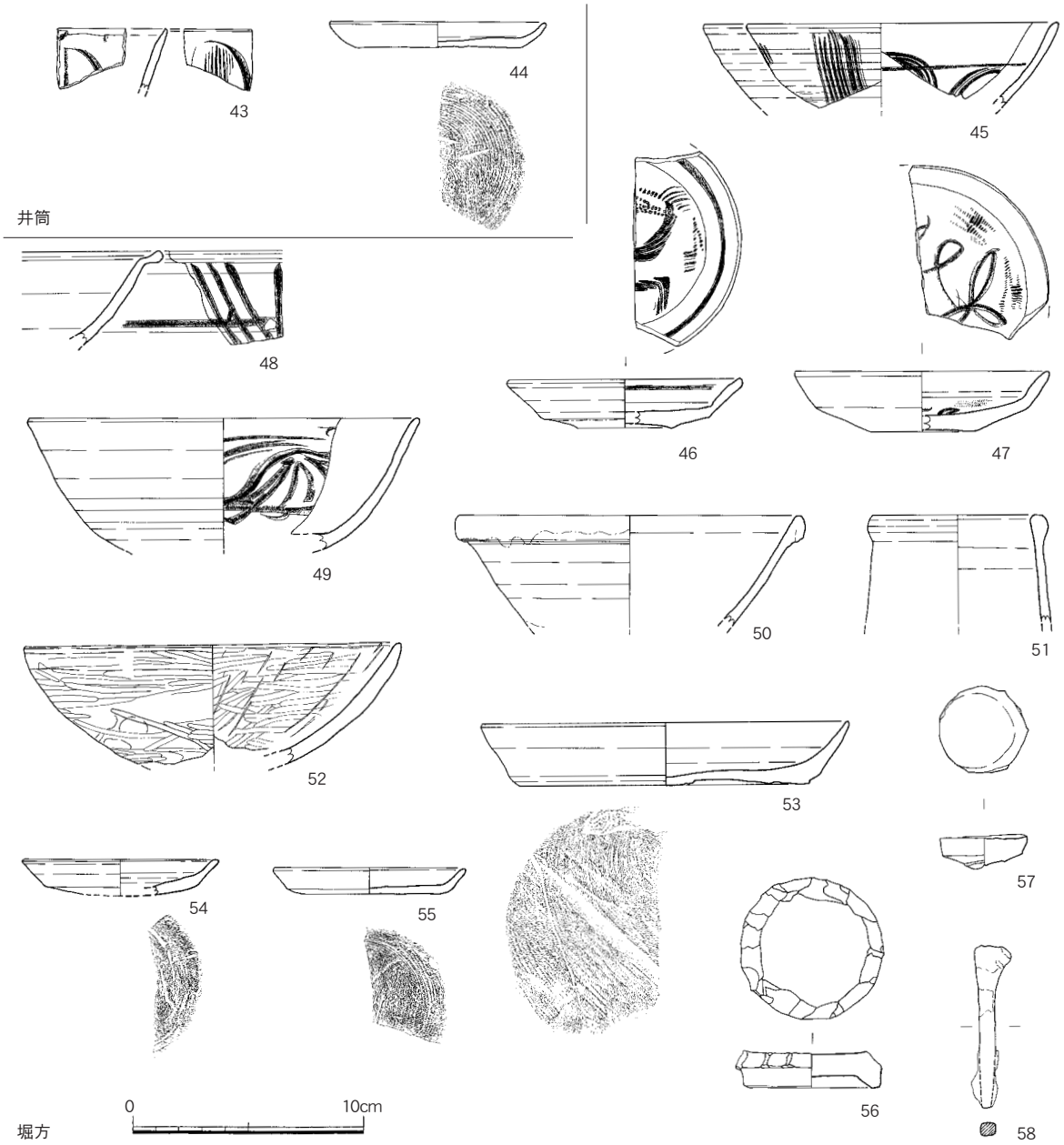
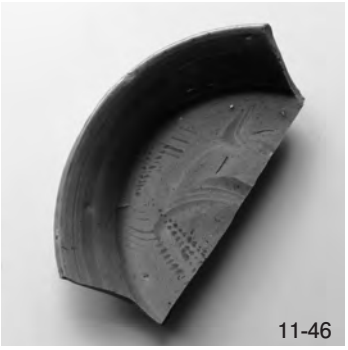
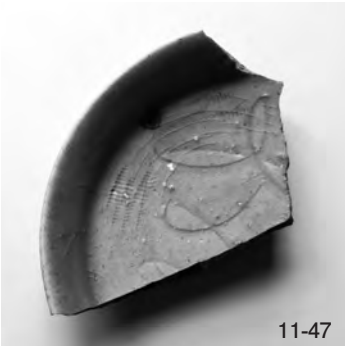
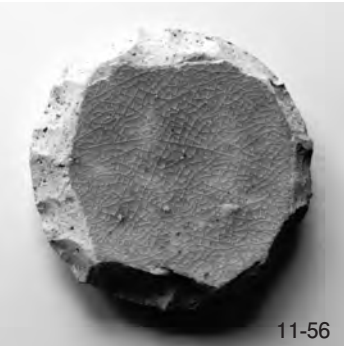


Fig.11　SE080649 出土遺物実測図 -3（1/3）

内外に掛け、貫入が多く入る。49 は口径 17.0㎝で、内面から外面上位に回転ナデ、以下に回転ヘラケズリを施し、内面にヘラ描の蓮華折枝文を施す。胎土は白色微粒を含み灰白色を呈し、オリーブ黄色の透明釉を内外に掛け貫入が多く入る。50 は玉縁の白磁碗。口径 14.6㎝で、内面から口縁外面に回転ナデ、以下に回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を含み、灰白の不透明釉を内外に掛けピンホールが多く入る。51 は中国褐釉陶器水注の口縁で口径 7.3㎝を測る。口縁は玉縁で、胎土に微細な白色黒色粒を含み全面に暗赤褐～赤黒色の不透明釉を掛ける。52 は瓦器埦。口径 16.2㎝を測る。器壁が厚く外面に指頭圧後粗いヨコケンマ、内面に粗いヨコケンマを施しコテ当て痕が多く残る。口縁内外面が黒変する。胎土は微細な白色粒黒色粒・雲母含む。内外面は灰白～灰色を呈する。53 ～ 55 は土師器。53 は坏。口径 16.0 器高 2.7㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕と籾圧痕が残る。胎土は 3㎜以下の白色粒、微細雲母







Ph.18　SE080649 出土遺物

を含み、内面は鈍い橙色外面は橙色を呈する。54・55 は皿。54 は口径 8.3 器高 1.5㎝を測る。外底は丸底で体部との境は稜を成し、体部は直線的に強く開く。内外面に回転ナデを施し、外底は回転ヘラ切りである。胎土は 1㎜以下の白色粒黒色粒・微細な雲母を含み、内面は鈍い黄橙色外面は橙色を呈する。55 は口径 8.3 器高 1.2㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ回転糸切りの外底に板圧痕が残る。胎土は微細な黒色粒雲母を含み、内外面は鈍い黄橙色を呈する。56・57 は瓦玉。56 は白磁碗高台の転用で径 5.2 厚 1.6㎝ 71.0g を測る。高台に沿って円形に打ち欠き整形する。57 は白磁碗高台内破片の転用で径 3.8 厚 1.4㎝ 20.40g を測る。粘土の剥離面をそのまま生かしている。58 は鉄釘。上端を屈曲し 1.5㎝角の頭部に整形する和釘で全長 7.0㎝を測る。時期は 12 世紀後半～ 13 世紀前半を示す。

SE080657（Fig.8　Ph.19）　3 面目の A0 グリッドの壁際で検出され、半分は調査区外に延びる。径 3.5m の掘方に径 85㎝の木桶を井筒として据えると思われるが木質は遺存しない。安全を考慮して検出面から 1.1m までの掘削で作業を止めている。

出土遺物（Fig.121　Ph.20-1）　59 ～ 64 は井筒内出土。59 は同安窯系青磁皿。口径 11.0 器高 2.2㎝を測る。体部は緩く外反して開き下位で稜を成し外底から口縁下まで回転ヘラケズリを施す。内面には見込みにヘラ描の花文とジグザグの櫛点描文を施す。胎土は精良で灰色、内面から外底際まで灰オリーブの透明釉を掛ける。60 は白磁碗の底部。高台径 6.2㎝を測る。高台は断面逆台形で低い。外面は回転ヘラケズリ、内面見込みに櫛描の花文を施す。胎土は微細な黒色粒を含み灰白色を呈し、灰白色の半濁釉を内面から高台脇まで掛ける。61 は中国無釉陶器短頸壺。口縁は玉縁状で口径 11.6㎝を測る。内外面に回転ナデを施し、胎土は白色黒色微粒を少量含み、内外面は鈍い橙色を呈する。62 は顎なしの軒平瓦で、厚 1.7㎝。凸面にナデ凹面にケズリを施す。瓦当面には雷文を施す。内外面で鈍い橙色を呈する。63 は滑石製の有溝石錘で、5.5 × 2.4 × 1.4㎝ 29.2g を測る。全面をケズリで整形する。64 は砂岩製の中砥石で、14.0 × 6.6 × 2.9㎝ 350.9g を測る。表裏両面と両側面を砥面とし、側面は叩石として転用している。

Ph.19　SE080657（南から）

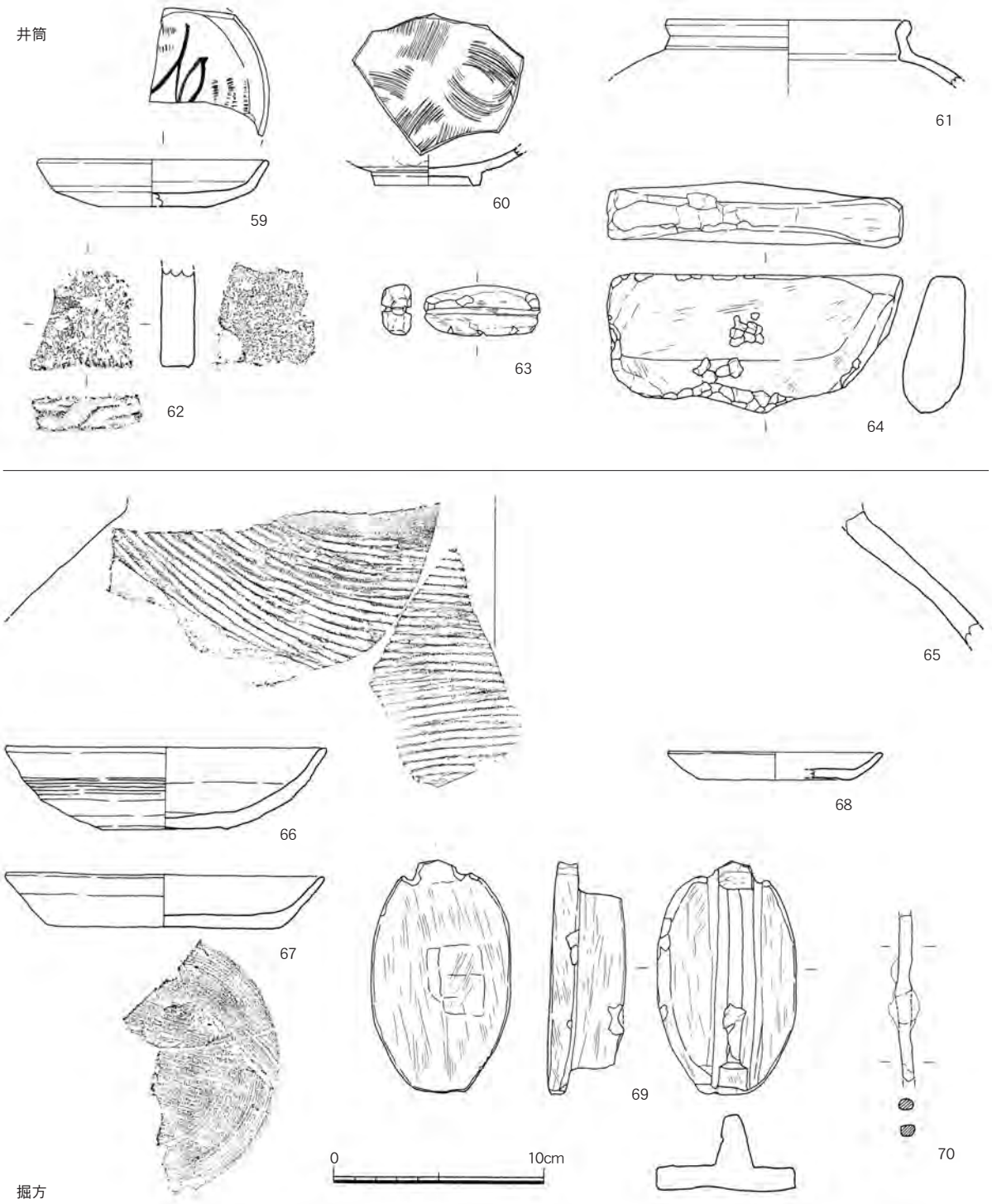
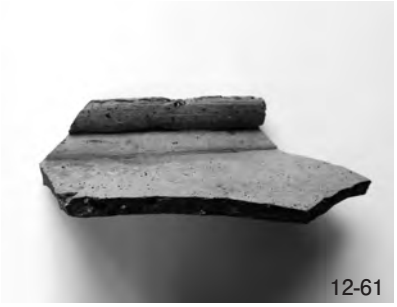


Fig.12　SE080657 出土遺物実測図 -4（1/3）

65 ～ 70 は掘方出土。65 は十瓶山系の須恵質大甕で、頸部径 35.2㎝を測る。外面頸部はヨコナデ以下に平行タタキを施す。内面はケズリ、頸部下はナデ消す。胎土は白色粒を少量含み内面は褐灰～黒褐色外面は灰色を呈する。66 は瓦器坏。口径 15.2 器高 3.9㎝を測る。体部内外面に粗いヨコナデを施し、外底は回転ヘラ切りで一部板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒黒色粒を若干含み、内外面は褐灰色を呈する。67・68 は土師器。67 は坏で口径 15.2 器高 2.5㎝を測る。体部は直線的に開き、



Ph.20-1　SE080657 出土遺物

内外面を回転ナデ後内底をタテにナデ、回転糸切りの外底に板ナデを施す。胎土は微細な白色粒を少量含み、内面は褐灰色外面は灰褐～鈍い橙色を呈する。68 は皿。口径 10.2 器高 1.3㎝を測る。体部は直線的に強く開き､内外面に回転ナデを施す。外底は回転糸切り。胎土は白色粒微細粒を少量含み、内外面は灰白色を呈する。69 は滑石Ⅱ類石鍋片転用のスタンプ型製品。灯心押さえか。11.0 × 6.6 × 3.6㎝ 63g を測る。石鍋の鍔部分を生かして取手状に加工し上方の両側に抉りを入れる。全面をケズリと磨りで整形する。70 は棒状の鉄製品で残存長 7.9㎝を測る。下半は 7 × 6 ミリの断面方形に、上半は 7 × 6 ミリの断面円形に整形される。時期は 12 世紀後半を示す。

（2）溝

溝は調査区中央部で矩形に曲がる小溝を 1 条のみ検出した。

SD080033（-070）（Fig.8　Ph.20-2）　1・2 面目の調査区中央部で検出された。SK-076 を切る幅 40 ～ 50㎝深さ 18 ～ 22㎝の小溝で、070 は同一の溝である。真北方向に約 5m 延びて東に直角に屈曲し調査区外に延びる。溝の周辺には柱穴が多数分布し、建物が集中する部分と思われる。土層は最下に地山の崩落土（3 層）が堆積し上部に砂質を帯びる粘質土が堆積（2 層）、さらに粘質土が堆積し（1 層）、一時期水が滞留したことを示しており、掘立柱建物の外側を区画する溝か建物の雨落ち溝と考えられる。

Ph.20-2　SD080033 土層断面（南から）

出土遺物（Fig.18　Ph.29）　土師器等出土しているが、図化に耐えるものは無い。167 は刃部が内湾する小型の鎌状の鉄器で 5.1 × 1.1 × 0.4㎝を測る。168 は板状鉄斧のタテ斧で、刃部両側がバチ状に膨らみ基部は 1.5㎝程短く斜めに切れる。13.2 × 5.5 × 1.8㎝を測る。時期は 12 世紀後半を示す。

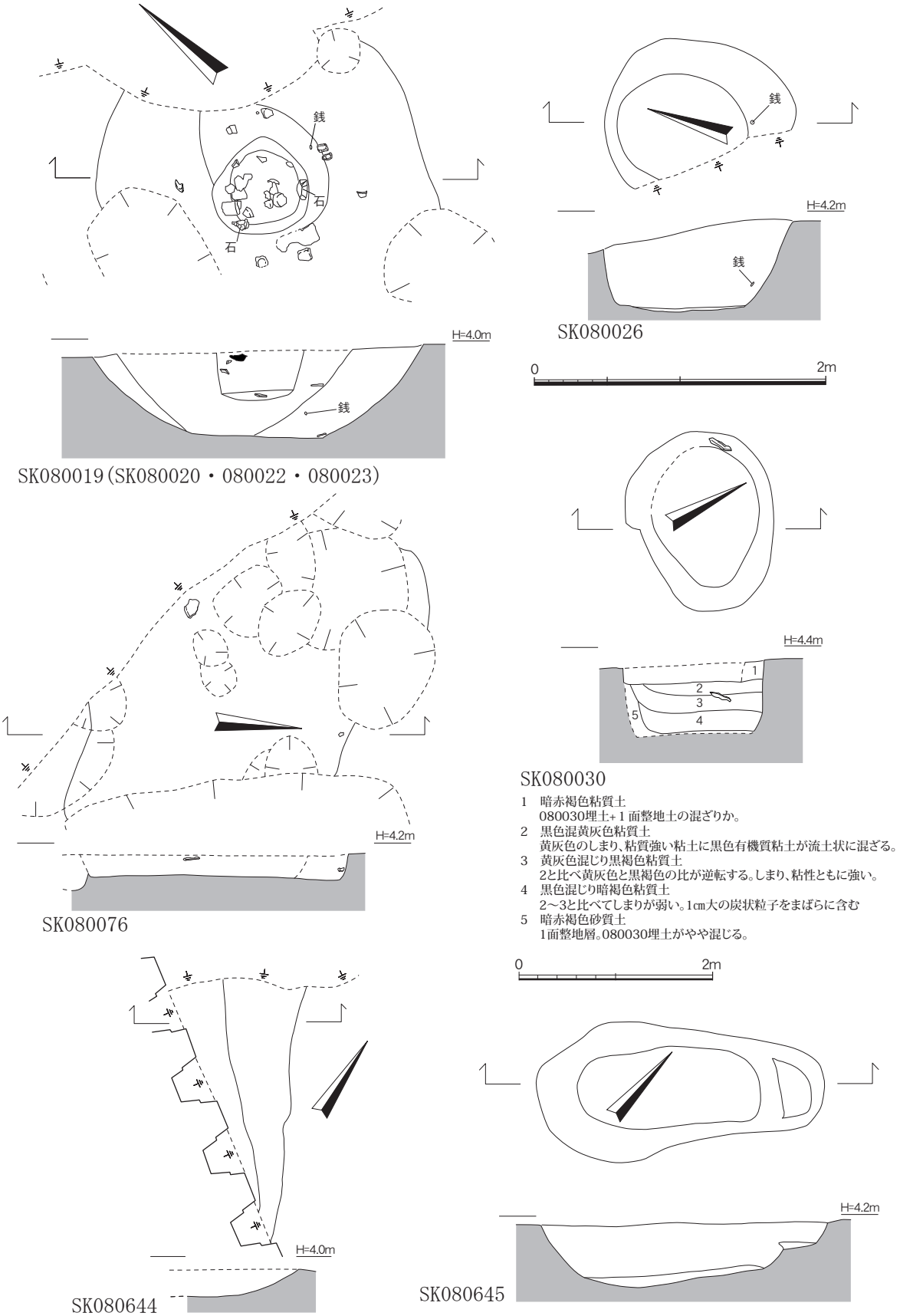


Fig.13　SK080019・080076・080644(1/60)
SK080026・080030・080645実測図(1/40)

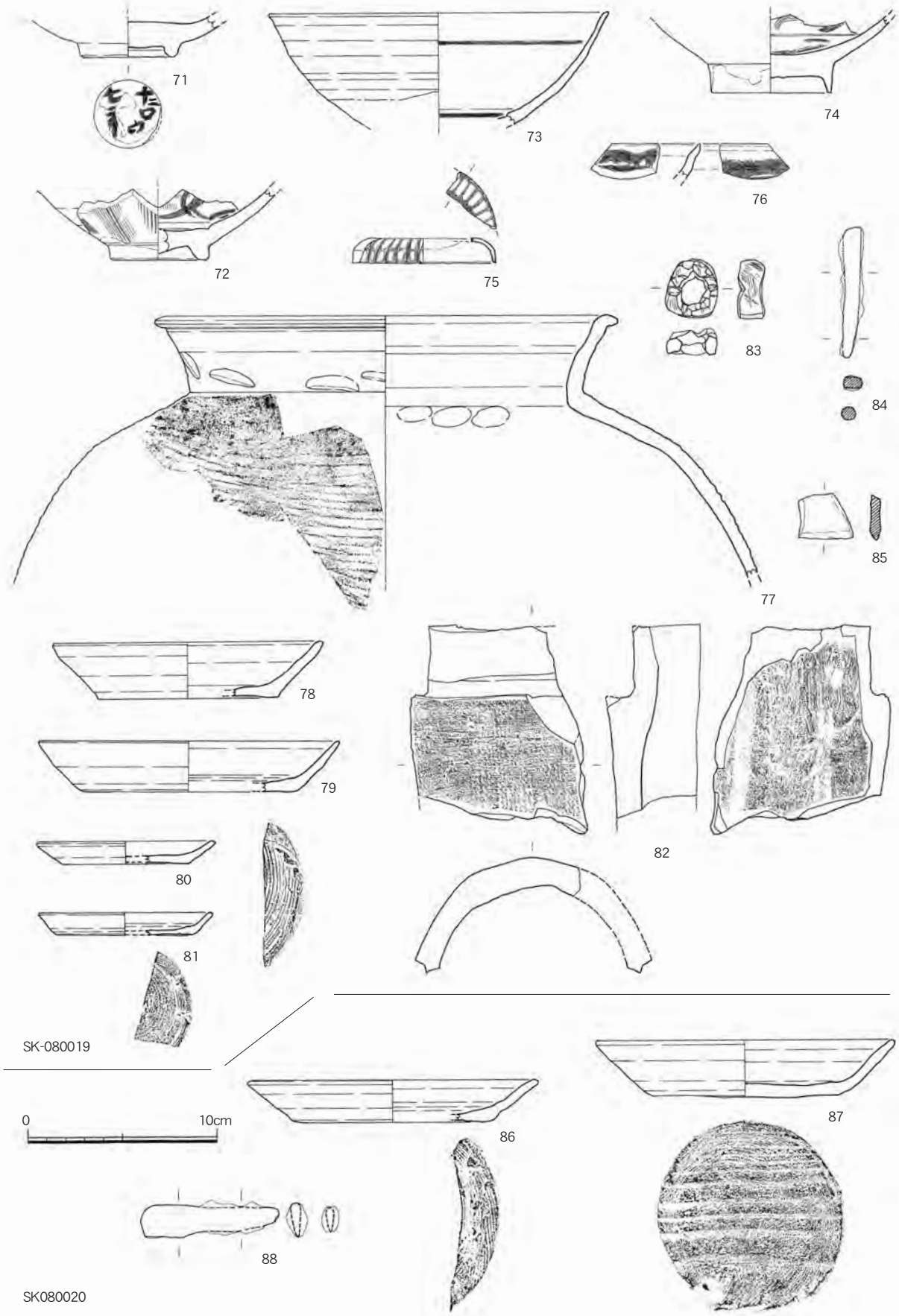


Fig.14　SK080019・080020 出土遺物実測図（1/3）

（3）土坑

土坑は中心となる遺構で、1・2面を中心に調査区全面に展開し、25基を検出した。大部分は廃棄用の土坑である。

SK080019（-020・-022・-023）（Fig.13）　1面目西部に位置し、平面は井戸状に見えるが深さは60㎝と浅く、-019・-020は土坑中央上位の堆積で、-022・-023は同一の土坑である。径2.38mの大型の円形土坑でSK-015・SK-501を切る。断面は深さ60㎝程の擂鉢状になる。

出土遺物（Fig.14　Ph.21）　71～85は-19出土。71・72は青磁碗。71は龍泉窯系碗底部で底径4.6㎝を測る。高台内は回転ケズリ。胎土は黒色微粒を少量含み灰白色を呈し、オリーブ黄色の透明釉を内面から高台際まで掛ける。高台内には「たロウ七郎」の墨書がなされる。72は同安窯系の碗底部。底径4.9㎝で外面は高台内から体部まで回転ヘラケズリ後細かな縦櫛歯文、内面に片切彫と櫛描で花文を施す。胎土は白色黒色微粒を含み黄灰色を呈し、オリーブ黄色の透明釉を内面から外面高台脇まで掛ける。73・74は白磁碗。73は口径18.0㎝で口縁端部が小さく緩く外反し、外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し内面口縁下と見込み脇に圏線を施す。胎土は淡黄色で1㎜以下の白色粒を少量含み、浅黄色の透明釉を内面から外面体部下位まで掛け貫入が多く入る。74は碗の底部。高台径6.3㎝を測る。高台は細く高くやや内傾する。内面下位に圏線を1条とこの上下に櫛描の花文を施す。胎土は微細な黒色粒を少量含み灰白色を呈し、灰色の透明釉を内面から高台際まで掛ける。75は青白磁の合子蓋。口径7.6器高1.3㎝を測る。型造りで花文を陽刻する。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、明緑灰色の透明釉を外面に掛ける。76は束口天目碗口縁で、胎土は微細な白色粒赤褐色粒を少量含み鈍い黄橙色を呈し、内外面に黒～褐色の不透明釉を掛け口唇は掻き取る。77は十瓶山系の須恵質甕で、口径23.3㎝を測る。口縁端部が小さく外方に屈曲し、口縁内外面に回転ナデ、外面にヘラ当痕が残る。外面体部に平行タタキ内面はケズリ、頸部下はナデ消す。胎土は2㎜以下の白色粒を少量含み内外面は暗灰色を呈する。口縁内面から外面は自然釉が掛かる。78～81は土師器。78・79は坏。78は口径14.2器高3.0㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施す。外底は回転糸切り。胎土は微細な白色粒・雲母を少量含み、内外面は鈍い黄橙色を呈する。79は口径15.8器高2.7㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施す。外底は回転糸切り。胎土は2㎜以下の白色粒を少量含み、内面は黄橙～浅黄橙色外面は灰黄～黒褐色を呈する。80・81は皿。80は口径9.3器高1.2㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施し、外底は回転糸切り後ナデる。胎土は1㎜以下の白色粒黒色粒を少量微細な雲母を多く含み、内面は鈍い橙色外面は鈍い黄橙色を呈する。81は口径9.1器高1.2㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面に回転ナデを施し、外底は回転糸切りである。胎土は微細な白色粒黒色粒を少量微細な雲母を多く含み、内面は橙色外面は鈍い黄橙色を呈する。82は丸瓦。幅12.5㎝程厚2.4㎝を測る。外面は縄目タタキ後ナデ、玉縁部はヨコナデ、内面は布目痕を縦にナデる。胎土は1㎜以下の白色粒を多量に微細な雲母を少量含み、内面は灰色外面は灰～暗灰色を呈する。83は環状の滑石製石錘。3.1×2.8×1.4㎝14.6gを測る。全面をケズリと磨りで整形する。管を輪切りにした状態で径1.2㎝程の孔の四方に紐掛けを削り込む。84・85は鉄器。84は釘の体部で残存長6.9㎝厚4㎜を測る。85は片刃の鉄片で2.4×2.9㎝厚5㎜を測る。86～88は-20出土。86・87は土師器坏。86は口径14.8器高2.3㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施す。外底は回転糸切り。胎土は2㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を多く含み、内外面は鈍い橙色を呈する。87は口径15.5器高3.1㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施す。外底は回転糸切り。胎土は6㎜以下

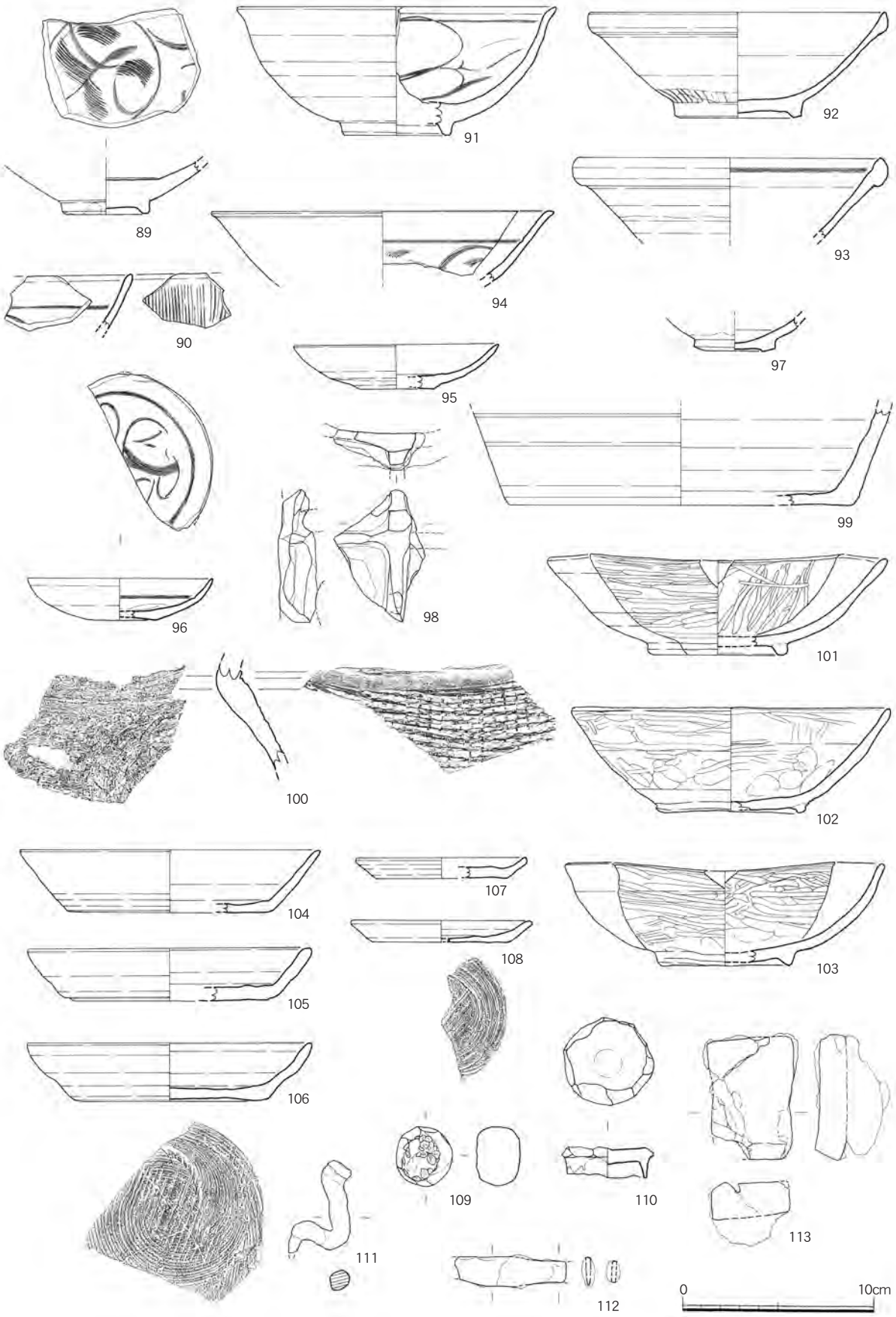


Fig.15　SK080022 出土遺物実測図（1/3）

Ph.21　SK080019・SK080022 出土遺物

の白色粒を少量微細な雲母を多く含み、内外面は浅黄橙～黒褐色を呈する。88 は鉄製刀子片。残存長 7.3 幅 1.8㎝厚 6㎜程を測る。89 ～ 113 は 022・023 出土。89･90 は同安窯系青磁碗。89 は碗底部。底径 4.2㎝で外面は高台内から体部まで回転ヘラケズリ、内面に片切彫と櫛描で花文を施す。胎土は微細な白色粒を含み灰色を呈し、オリーブ灰色の透明釉を内面から外面高台際まで掛ける。90 は口縁部で、外面に細かな縦櫛歯文、内面に 1 条の圏線を施す。胎土は白色黒色微粒を含み黄灰色を呈し、灰オリーブの透明釉を内外に掛け、貫入が多く入る。91 は龍泉窯系青磁。口径 16.6 器高 6.7㎝で、口縁が緩く外反する。高台内面から口縁下まで回転ヘラケズリを施し、内面にヘラ描の蓮華文を施す。胎土は黒色微粒を含み灰白色を呈し、明黄褐色の透明釉を内面から高台際まで掛け貫入が多く入る。92 ～ 95 は白磁。92・93 は玉縁の碗。92 は口径 15.5 器高 5.6㎝を測り、高台内面から口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を含み、灰白の透明釉を内面から外面体部下位まで掛けピンホールが少量入る。93 は口縁部で口径 16.0cm を測り、外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。口縁内面には圏線を 1 条施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰オリーブの透明釉を内面から外面体部中位まで掛けピンホールが多く入る。94 は口縁上面を水平に切る碗の口縁部で、口径 17.8cm を測り、口縁下内面には圏線を 1 条、以下に櫛描の花文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰白色の透明釉を内面から外面まで掛けピンホールが少量入る。95・96 は平皿。95 は口径 7.5 器高 2.4㎝を測り、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒をやや多く含み、灰白の透明釉を内面から外面体部下位まで掛ける。96 は口径 9.8 器高 2.2㎝を測り、外底は浅い碁笥底で回転ヘラケズリ後ナデを施す。内面に圏線を 1 条、以下にヘラ描の草花文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を含み、灰白の透明釉を内面から底部際まで掛け、ピンホールが多く入る。97 は天目碗底部で底径 4.3㎝を測る。胎土は微細な黒色粒を含み浅黄橙色を呈し、内面から高台脇まで黒色の不透明釉を掛ける。98・99 は高麗無釉陶器。98 は鉢の小片で外面に幅 2㎝程の突帯を十字に貼り、上下に径 1.2 ～ 3㎝前後の穿孔がある。全面ナデ調整で、胎土は 4㎜以下の白色粒と微細な雲母粒を含み内外ともに暗灰色を呈する。99 は平底の甕底部。底径 18.0㎝を測る。内外面に回転ナデを施し、外面に沈線を 2 条施す。一部タテナデ後底部際は回転ヘラケズリを施す。胎土は灰褐色で 2㎜以下の白色粒を含み、内底と外面に自然釉が掛かる。100 は東播系の甕小片。体部外面に木目直交の格子タタキ、内面は平行弧の当具痕をナデる。胎土は灰色で 2㎜以下の白色黒色粒を含む。101 ～ 103 は瓦器埦。101 は口径 17.6 器高 5.3㎝を測る。高台は低く、体部外面に粗いヨコケンマ内面に粗いタテケンマを施し、内面から外面口縁下まで黒変する。高台部は回転ナデを施す。胎土は微細な白色粒雲母を含む。内面は灰色外面は灰白色を呈する。102 は口径 16.7 器高 5.6㎝を測る。高台はさらに低く、体部内外面に指頭圧痕が多く残り粗いヨコケンマを施し、口縁内外面が黒変する。高台部周りは回転ナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒と微細な雲母を含む。内面は灰白外面は灰色を呈する。103 は口径 16.4 器高 6.7㎝を測る。高台は低く、体部内外面に指頭圧痕が残り粗いヨコケンマを施し、高台部周りは回転ナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を含む。内外面は灰色を呈する。104 ～ 108 は土師器。104・105 は坏で、104 は口径 15.6 器高 3.3㎝を測る。体部は直線的に強

く開き、内外面に回転ナデを施し、内底はタテにナデる。外底は回転糸切り後ナデる。胎土は微細な白色粒赤色粒を含み、内外面は鈍い黄橙色を呈する。105 は口径 14.8 器高 2.8㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面に回転ナデを施し、内底はタテにナデ、外底は回転糸切り後に板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒黒色粒雲母を含み、内外面は鈍い橙色を呈する。106 は口径 14.9 器高 3.1㎝を測る。体部は直線的に強く開き、下半が窪み境は稜線状になる。内外面に回転ナデを施し内底はタテにナデ、外底は回転糸切り後に板圧痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒黒色粒雲母を含み、内外面は浅黄橙色～灰色を呈する。107・108 は皿。107 は口径 8.9 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ内底にタテナデを施し、外底は回転糸切りである。胎土は 1㎜以下の白色粒黒色粒微細な雲母を含む。内外面は橙色を呈する。108 は口径 9.2 器高 1.2㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施し内底にタテナデ、外底は回転糸切り後板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒赤色粒雲母を含み、内外面は鈍い黄橙色を呈する。109 は粗粒砂岩製の石玉。3.1 × 3.0 × 2.4㎝ 29.8g を測る。表裏に平坦面が残り敲打と磨りで整形する。110 は白磁碗高台の転用の瓦玉で径 4.7 厚 1.6㎝ 28.3g を測る。高台に沿って円形に打ち欠き整形する。畳付も打ち欠く。111 ～ 113 は鉄器。111 は鉄釘。上端を屈曲し 1.2㎝角の頭部に整形する和釘で全長 14㎝程であるがS字に屈曲する。112 は刀子基部あたりの残片で、残存長 5.9㎝幅 1.5 厚 4㎜程を測る。113 は方形の鉄片で 6.5 × 4.6 × 1.8㎝を測る。時期は 13 世紀前半を示す。

SK080026（Fig.13　Ph.22）　1 面 Z14 グリッド壁際に位置し、SK-19 を切る。平面は円形で径 1.3m 深さ 60㎝を測る。

Ph.22　SK080026（北から）

出土遺物（Fig.16　Ph.25）　114 は龍泉窯系青磁碗口縁。緩く外反する口縁の内面に圏線 1 条、若干肥厚した外面口縁下面に片切彫で櫛歯の脈入り蓮弁文を施す。胎土は微細な黒色粒を含み灰白色を呈し、灰白色の透明釉を内外に掛ける。115 は白磁四耳壺の口縁部。径 9.5㎝を測る。口縁端部は屈曲し垂下する。外面頸部境は低い段を成す。116 は土師器坏。口径 14.6 器高 2.6㎝を測る。体部は口縁が緩く外湾し開き、内外面に回転ナデを施し、内底はタテにナデ、外底は回転糸切り後板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒微細な雲母を含み、内

Ph.23　SK080030（西から）

Ph.24　SK080030 遺物出土状況（西から）

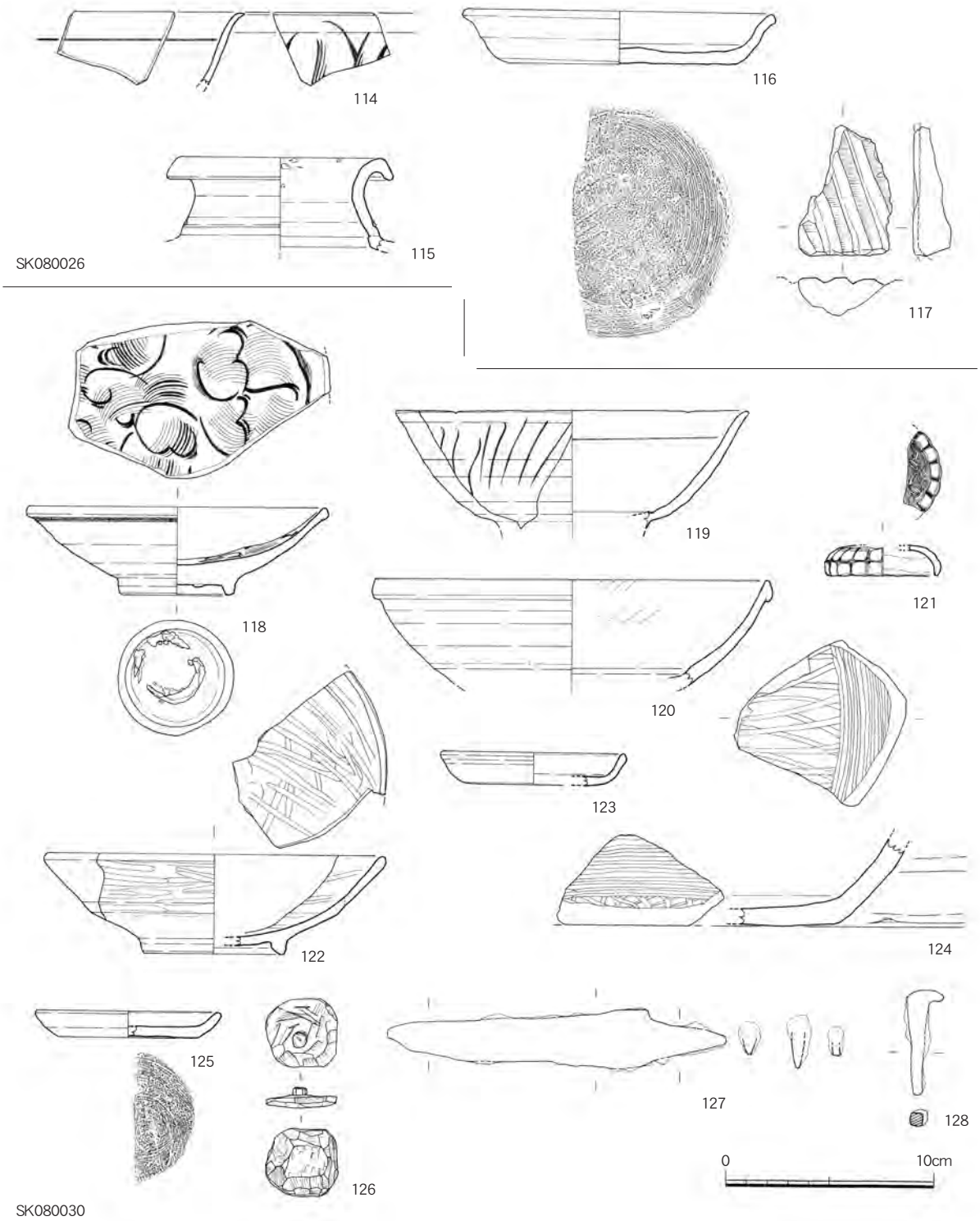


Fig.16　SK080026・080030 出土遺物実測図（1/3）

面は鈍い橙色外面は灰白色を呈する。117 は灰褐色中粒砂岩製の石造物片で・横方向の研磨後 1.7㎝間隔で幅 7㎜の溝を連続して刻む。石臼か。時期は 13 世紀前半を示す。

SK080030（Fig.13　Ph.23・24）　1 面 O12 グリッド壁際に位置し、SK-32 を切る。平面は楕円形で径 1.85 × 1.45m 深さ 75㎝を測る。黄灰色～黒色の粘質土が堆積する。

出土遺物（Fig.16　Ph.25）　118 は龍泉窯系 0 類の青磁碗。口径 14.2 器高 4.3㎝で、器形が低く口縁が直線的に強く開く。口縁端部は比較的小さな玉縁をなし、外面口縁下に圏線 1 条、内面に

ヘラ描きと櫛歯で草花文を施す。胎土は黒色微粒を含み灰色を呈し、灰オリーブの透明釉を内外面に掛け貫入が入る。高台内に輪状の目跡が残る。119・120 は白磁碗。119 は口径 16.9㎝で、直口口縁の口唇に輪花を刻み、口縁内面に圏線 1 条、外面体部にヘラ描花文を施す。胎土は黒色微粒を含み灰白色を呈し、灰白色の透明釉を内面から高台脇まで掛けピンホールが少量入る。120 は玉縁口縁の碗。口径 18.7㎝で、外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し、内面にヘラ当痕が残る。胎土は黒色微粒・気泡を含み灰白色を呈し、灰白色の透明釉を内面から外面体部下位まで掛けピンホールが多く入る。121 は青白磁の合子蓋。口径 5.8 器高 1.5㎝を測る。型造りで花文を陽刻する。胎土は灰白色で微細な茶褐色粒を少量含み、明緑灰色の透明釉を外面と内面天井に掛け、口唇部を掻き取る。122 ～ 124 は瓦器。122 は口径 16.0 器高 4.8㎝を測る埦。高台は低く口唇は肥厚する。体部中央は緩く稜を成す。体部内外面に粗いヨコケンマ、内面下半に縦ケンマを施す。高台部周りは回転ナデを施す。胎土は微細な白色粒黒色粒を含む。内面は灰オリーブ～灰色外面は黒灰色を呈する。123 は皿。口径 8.7 器高 1.6㎝を測る。口縁の開きは緩く口唇が肥厚する。体部内外面に回転ナデを施し、外底は回転ヘラ切りである。胎土は 1㎜以下の白色粒黒色粒を含み、内外面は灰白色を呈する。124 は和泉系の平鉢で、外面は回転ケズリ・ナデを施し内面体部はヨコケンマ内底は疎らなジグザグのケンマを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒褐色粒を含み、内面は黄灰外面は灰色を呈する。25 は土師器皿。口径 8.8 器高 1.3㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ内底にタテナデを施し、外底は回転糸切り後板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒黒色粒微細な雲母を含む。内外面は鈍い橙色を呈する。126 は滑石石鍋片転用の容器蓋。3.5 × 3.3 × 1.0㎝ 12.2g を測る。全面をケズリで整形し中央に径 7㎜の摘みを削り出す。側面と底面に石鍋の表面が遺存する。127・128 は鉄器。127

Ph.25　SK080026・SK080030 出土遺物

Ph.26　SK080076 鉄器出土状況（南から）

は刀子で全長 16.2 幅 2.8㎝厚 3㎜を測る。128 は釘。上端を屈曲し 1.7 × 1.2㎝角の頭部に成形する和釘で全長 5.0㎝体部 6㎜角を測る。時期は 12 世紀後半を示す。

SK080076（Fig.13　Ph.26）　1 面 O10 グリッドに位置する大型土坑で、整地層で有る可能性もある。2.7 × 2.5+ α m の不整方形で、深さは 30㎝程。底面は平坦である。

出土遺物（Fig.17　Ph.27）　129・130 は青磁。129 は龍泉窯系青磁碗。直口口縁の内面に圏線 1 条、以下に片切彫蓮華折枝文を施す。胎土は黒色微粒を含み灰白色を呈し、明オリーブ灰の透明釉を内

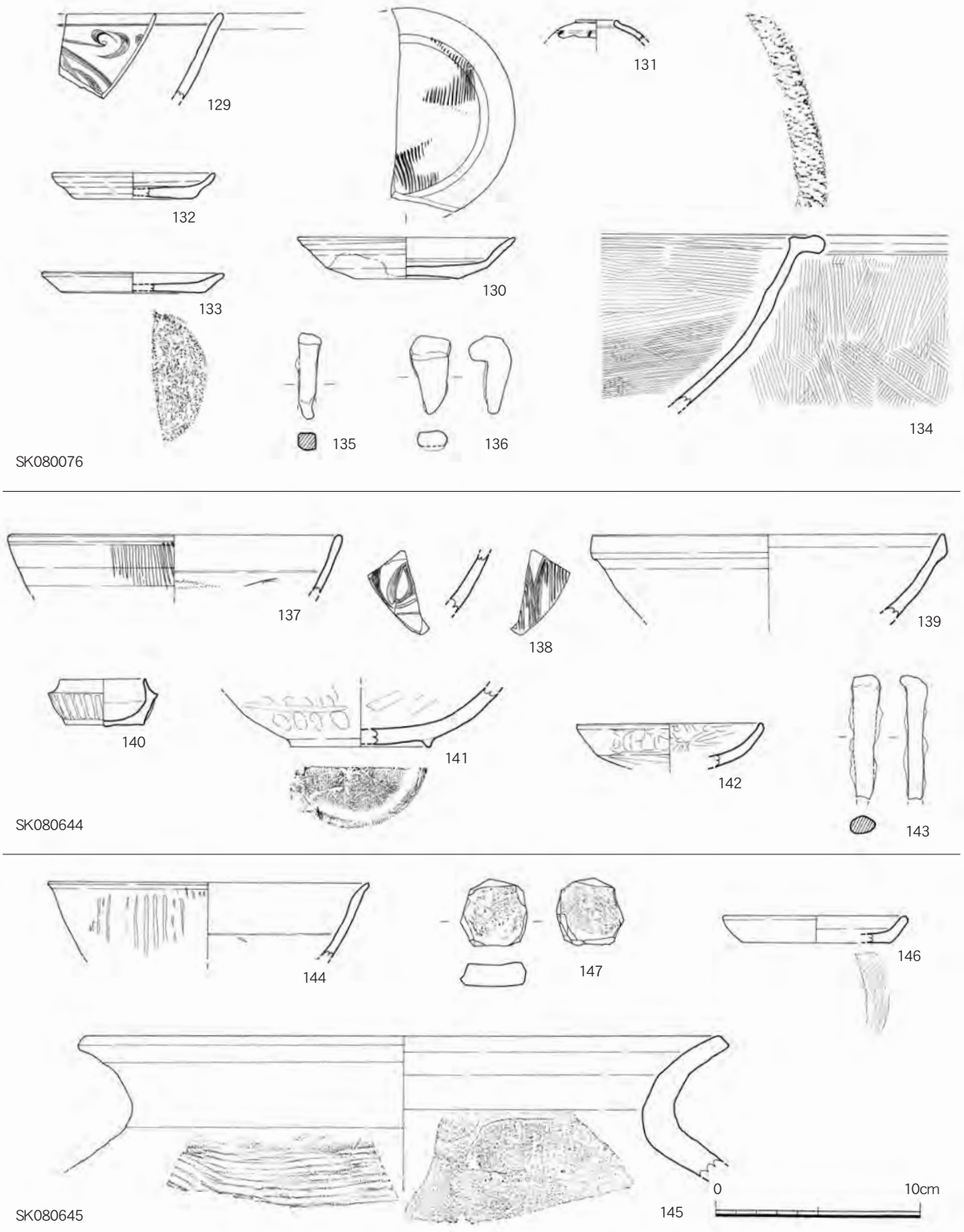


Fig.17　SK080076・080644・080645 出土遺物実測図（1/3）

外面に掛け貫入が入る。130 は同安窯系の平皿。口径 10.5 器高 2.1㎝を測り、外底は浅い碁笥底で回転ヘラケズリを施す。内面に櫛描の花文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を若干含み、オリーブ灰の透明釉を内面から底部際まで掛け貫入が入る。131 は青白磁袋合子で、短頸で口径 2.0㎝を測る。丸い体部外面には瓜割のタテ沈線を入れる。器壁は薄く、胎土は灰白色で微細な黒色粒を若干含

Ph.27　SK-080076・SK-080644 出土遺物

み、灰白の透明釉を外面から口縁内面まで掛け貫入が入る。132・133 は土師器皿。132 は口径 7.8 器高 1.2㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ内底にタテナデを施し、外底は回転糸切り後板圧痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒・微細な雲母を少量含む。内面は浅黄色外面は浅黄橙色を呈する。133 は口径 8.6 器高 1.0㎝を測る。体部は直線的にさらに強く開き、内外面に回転ナデ内底にタテナデを施し、外底は回転糸切り後板圧痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な雲母を少量含む。内外面は鈍い黄橙色を呈する。134 は土鍋。深い器形で短い L 字形の口縁上面に縄目圧痕を施すもので、体部外面に細かなタテハケ、内面にヨコハケを施す。胎土は 4㎜以下の白色粒を多量に微細な雲母を少量含む。内面は鈍い橙色～浅黄色外面は黒褐～暗褐色を呈する。外面下位に煤が付着する。135・136 は鉄器。135 は太い釘で上端を屈曲し 1.2㎝角の頭部に整形する和釘で全長 4.2㎝体部 9㎜角を測る。136 は楔状の平釘で、2㎝角の頭部に整形し、全長 3.8㎝幅 2.0 厚 1.2㎝と平たい。時期は 12 世紀後半を示す。

SK080644（Fig.13）　2 面東端部の壁際で検出し、半分は調査区外にある。平面は直線的で 2.75+ α × 1.3+ α m 深さ 25㎝を測る。溝の可能性もある。

出土遺物（Fig.17　Ph.27）　137・138 は青磁碗。137 は同安窯系の口縁部で、口径 16.4㎝を測る。外面に細かな縦櫛歯文、内面の 1 条の圏線下に櫛描花文を施す。胎土は黒色微粒を含み灰白色を呈し、灰オリーブの透明釉を内外に掛ける。138 は龍泉窯系。直口口縁の内面に片切彫の蕉葉文、外面に片切彫で櫛歯の脈入り蓮弁文を施す。胎土は精良で灰白色を呈し、オリーブ灰の透明釉を内外に掛ける。139・140 は白磁。139 は玉縁の白磁碗。口径 17.4㎝を測り、口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な黒色粒を若干含み、灰白の半濁釉を内外面に掛ける。140 は合子身。受部径 5.4 器高 2.2㎝を測り、外面受部下に型造りの花文を陽刻する。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰白色の透明釉を内面下半と外面受部下に掛け口縁から受部は掻き取る。141・142 は瓦器。141 は埦の底部。底径 7.2㎝を測る。高台は低く体部内外面に指頭圧痕が多く残り粗いヨコケンマを施す。内面にはヘラ当痕が残る。高台部周りは回転ナデを施し、高台内にヘラ記号がある。胎土は微細な白色粒黒色粒を含む。内面は灰白色外面は灰色を呈する。142 は皿。口径 9.4 器高 1.8㎝を測る。丸底で外面体部境が緩い稜を成し口縁は緩く内湾して開く。外底は回転ヘラ切り後ナデを施す。内外面は粗いヨコケンマを施す。胎土精良で内外面は灰～灰白色を呈する。143 は鉄釘。上端を屈曲し 1.3㎝角の頭部に整形する和釘で残存長 6.0㎝を測る。12 世紀後半を示す。

SK080645（Fig.13　Ph.28）　2 面東部 A0 グリッドに位置し、SE-657 を切る。平面は長楕円形で 1.97 × 0.97m 深さ 18 と 43㎝の 2 段となる。

出土遺物（Fig.17）　144 は同安窯系青磁碗の口縁部で、口径 15.8㎝を測る。外面に粗い縦櫛歯文、内面に 1 条の圏線を施す。胎土は精良で灰白色を呈し、オリーブ灰の透明釉を内外に掛ける。145

Ph.28　SK080645（北から）

は十瓶山系の須恵質甕で、口径 32㎝を測る。口縁は湾曲して外反し内外面に回転ナデ、外面体部に平行タタキ内面は平行弧の当具痕をナデ消す。胎土は 2㎜以下の白色粒を少量含み内面は灰白～灰色外面は紫灰色を呈する。146 は土師器皿。口径 9.0 器高 1.3㎝を測る。口縁は直線的に開き外底は回転糸切りを施す。内外面はヨコナデを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み内面は明褐灰色外面は灰褐色を呈する。147 は平瓦片を素材とした瓦玉。3.3 × 3.2 × 1.1㎝ 13.4g を測る。外周を打ち欠きで円形に整形する。時期は 12 世紀後半を示す。

（4）柱穴その他の出土遺物

148 は SP-043 出土の同安窯系の青磁小碗。口径 12.1 器高 5.0㎝を測り、口縁が緩く外反する。高台内面は兜巾状に削り、口縁下まで回転ヘラケズリを施し、内面に片切彫とヘラ描で花文を施す。器形は龍泉窯系を取るが文様・高台内の仕上げは同安窯系の要素である。胎土は 2㎜以下の白色粒を少量含み灰色を呈し、黄灰色の透明釉を内面から体部下位まで掛けピンホールが少量入る。149 は SP-044 出土の同安窯系の青磁平皿。口径 10.8 器高 2.4㎝を測り、体部が稜を成して屈曲し口縁が緩く外反する。外底は浅い碁笥底となり、回転ケズリ後ナデる。内面に片切彫とヘラ描で花文を施す。胎土は 3㎜以下の白色粒を少量含み灰白～橙色を呈し、灰色の透明釉を内面から底部際まで掛けピンホールが少量入る。二次被熱で変色し釉が部分的に剥離する。150 は SK-642 出土の龍泉窯系青磁平皿である。口径 10.2 器高 1.9㎝を測り、体部が稜を成して屈曲し口縁が直線的に強く開く。外底は浅い碁笥底となり、回転ケズリを施す。内面見込に櫛歯で花文を施す。胎土は黒色微粒を若干含み灰白色を呈し、明緑灰色の透明釉を内面から底部際まで掛ける。151 は撹乱内出土の高麗象嵌青磁碗。体部外面に圏線を 1 条施しその上部に多数のスタンプの亀甲繋文を施し白土で埋め、下部に白土と黒土で埋める蓮華文を連続施文する。内面は宝珠文を多数スタンプで押し白土で埋める。胎土は微細な黒色粒を若干含み灰色を呈し、オリーブ灰色の透明釉を内外に掛ける。152 は白磁の坏で、底径 7.0 ㎝を測る。体部は上位で段を成して肥厚し、下半に瓜割のタテ沈線を施す。外底は平高台で広めの畳付から上底となる。胎土は微細な白色粒を少量含み灰白色を呈し、淡黄色の半濁釉を内面と外面高台際まで掛ける。153 は SK-016 出土の白磁碗口縁部。小さく外反する口縁外面下に片切彫で櫛歯の脈入り蓮弁文を上下 2 段にわたって施文する。内面口縁下には圏線を 1 条施す。胎土は微細な黒色粒を若干含み灰白色を呈し、灰オリーブの透明釉を内外に掛ける。154 は撹乱内出土の磁州窯系の白地鉄絵の壺小片。淡黄灰色の黒色微粒を少量含むやや粗い胎土に白化粧土を掛け鉄絵具で施文する。内面は回転ナデで露胎。155 は SP-081 出土の中国陶器製の経筒蓋。口径 6.0 受部径 5.3 器高 3.0㎝を測る。蓋受けは断面逆台形で厚く、天井部は 2 段に、宝珠摘みは 4 段に成形される。外面口縁部に 2 条内面に 1 条沈線を施す。胎土は灰白色で微細な白色粒・雲母を少量含み、内外面は褐灰色を呈する。外面口縁部に灰黄褐色の不透明釉を掛ける。158 は SK-016 出土の瓦器皿。丸底の皿で口径 9.6 器高 2.4 ㎝を測る。体部との境は稜を成し外底は回転糸切り後板圧痕が残る。体部外面は回転ナデ内面は細かなケンマを口縁はヨコに以下はタテに施す。内面にヘラ描線がある。胎土は 1㎜以下の白色粒微細な雲母を少量含む。内面は灰白～暗灰色外面は暗灰～灰白色を呈する。157 は SK-028 出土の滑石製温

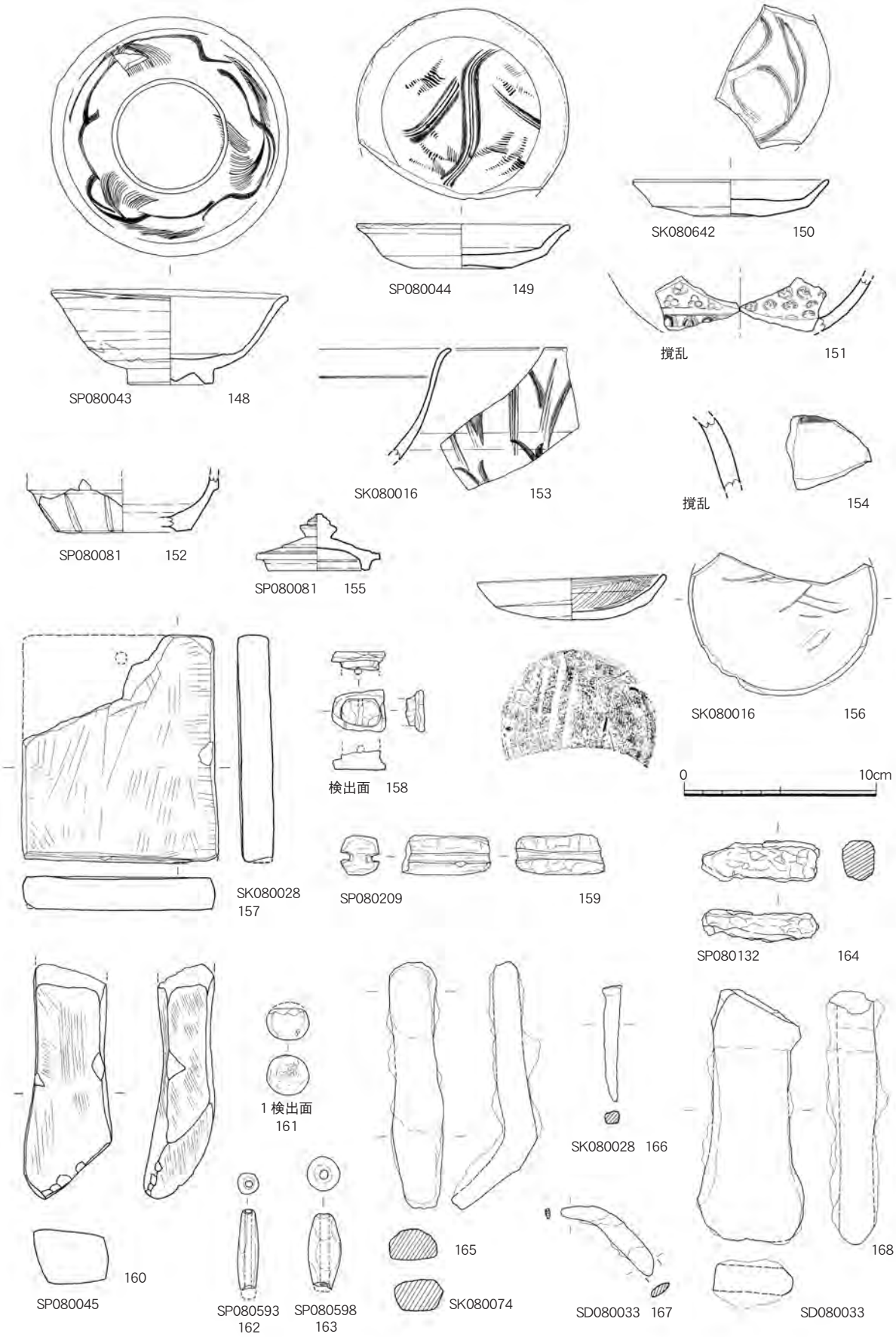
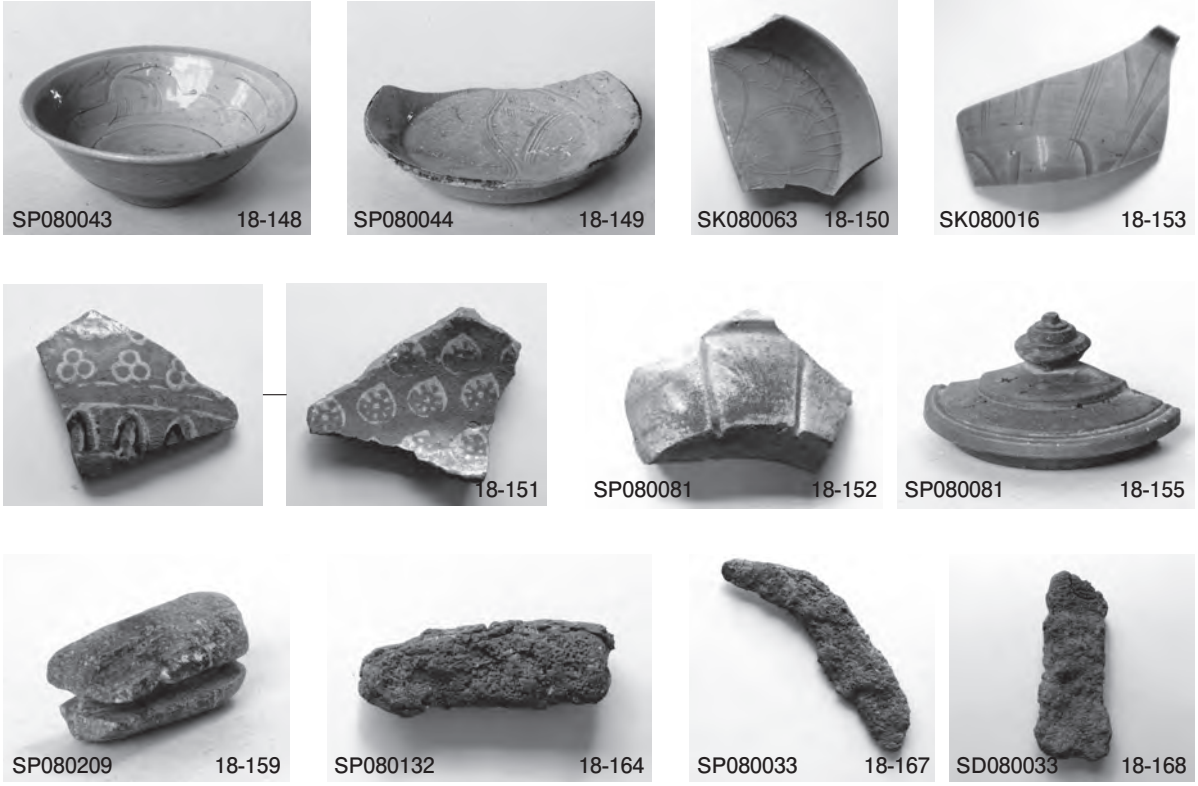


Fig.18　柱穴その他の出土遺物実測図（1/3）



Ph.29　柱穴その他の出土遺物

石。方形に成形され 11.9 × 10.3 × 1.7㎝を測る。全面ケズリ後磨りで仕上げる。158 は石鍋片転用の滑石製灯心押さえ。2.29 × 2.8 × 1.0㎝を測る。大きな摘みの中央には径 3㎜の穿孔がある。全面ケズリで仕上げる。159 は SP-204 出土の滑石製有溝石錘。方柱状で 4.6 × 2.1 × 2.0㎝ 29.6g を測る。160 は SP-045 出土の天草砥石。方柱状で 12.2 × 4.6 × 2.8㎝を測る。表裏と両側面を砥面とする。色調は淡灰褐色に赤褐色の縞模様が入る。161 は土師質の土玉。2.1 × 2.2 × 1.65㎝の球形で 7.86g を測る。全面にナデを施す。胎土は微細な白色粒赤色粒を少量含む。橙～鈍い黄橙色を呈する。162 は SP-593 出土の管状土錘。円柱状で 4.3 × 1.2㎝ 4g を測る。孔径は 4.3㎜を測る。ナデで成形し使用で両端が欠落する。橙色を呈する。163 は SP-598 出土の管状土錘。紡錘形で 3.0 × 1.7㎝ 10g を測る。孔径は 3.0㎜を測る。指頭圧とナデで成形する。灰黄～橙色を呈する。164 は SP-132 出土鉄器。鏨状を呈し方柱状で先端が尖る。6.2 × 2.1 × 1.6㎝ 36.6g を測る。165 は SK-074 出土の鎹の残欠と思われる鉄器。先端 5㎝程から屈曲し平坦で尖る。13.8 × 2.6 × 1.5㎝を測る。166 は SK-028 出土鉄釘。上端を屈曲し 1㎝角の頭部に整形する和釘で 6.0㎝を測る。

3）中世（２）の調査

中世（２）は中国製白磁が突出して出土する 11 世紀後半～ 12 世紀前半期とする。

検出した主な遺構は土坑 23 基・溝 2 条で、第 1 ～第 2・3 面を中心に、検出で見落とした遺構が最下面の第 5 面まで検出される。遺構全体の約 22% の量を占めており中世（1）期と同数で、ともに最盛期を示している。遺構は全面に広がっており、土壙は主に廃棄土壙で、中世（1）と比べ幅 2m 前後の大きな遺構が目立つ。23 基検出している。溝は、1 面目の調査区中央部と 5 面目西部で幅 40㎝前後の東西方向に延びる小溝 2 条を検出した。柱穴は径 20㎝前後のものが第 1 面・2 面目中央部に集中して中世（1）と重なって多数検出される。

遺物としては 3 基の遺構全てからガラス小玉・ガラス容器の製品と、ガラス坩堝、炉壁等が検出されガラス成品製作の開始期を示している。

（1）土坑

土坑は中心となる遺構で、2・3 面を中心に 1 ～ 5 面目の調査区全面に展開し、23 基を検出した。幅 2m 前後の大きな遺構が中世（1）期に比べ目立つ。大部分は廃棄用の土坑である。

SK080014（Fig.19）　1 面目西部 A18 グリッドに位置し、大半を SK-015 に切られる。平面は隅丸長方形で、1.2+ α × 1.168m を測り、深さ 46㎝で方位を南北方向とる。壁はほぼ垂直に立ち床面は平坦である。

出土遺物（Fig.20）　19 は越州窯系青磁 I 類碗の底部で高台径 5.3㎝を測る。高台内～体部下位まで回転ケズリ。見込に輪状の目跡が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒を若干含み灰色を呈し､灰オリーブの透明釉を全面に掛け畳付を掻き取る。170 は玉縁の白磁碗。口径 16.0㎝で玉縁はやや低い。外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒・気泡を少量含み、灰白色の透明釉を内面から外面体部下位まで掛けピンホールが少量入る。171 は瓦器埦。口径 15.0 器高 5.1㎝を測る。高台はやや低く外方に張る。体部内外面に粗いヨコケンマ、内面下半に縦ケンマを施す。高台部周りは回転ナデを施す。外底に板圧痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒黒色粒を少量含む。内外面灰白～黒褐色を呈する。172 は土師器丸底坏。口径 14.6 器高 3.0㎝を測り器形は低い。口縁は直線的に強く開き外底は回転ヘラ切りを施す。体部内外面はヨコナデ、以下の内面にタテナデを施し、外底に板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を多く含む。内外面は浅黄橙～鈍い黄橙色を呈する。173 は滑石石鍋片転用の石球。2.0 × 1.9 × 1.7㎝ 8.5g を測る。全面をケズリで整形し一部に煤が付着した石鍋表面が残る。時期は 12 世紀前半を示す。

SK080015（Fig.19）　1 面目西部 A18 グリッドに位置し、SK-014 を切り、大半を SK-019 に切られれ、調査区外の南北に広がる。平面は -019 同様、大型の円形であるが深さは 30㎝と浅く断面は船底形を成す。

出土遺物（Fig.20）　174 ～ 178 は白磁。174 は玉縁の白磁碗で、口径 16.0㎝を測る。外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を若干含み、灰白色の透明釉を内面から外面体部まで掛けピンホールがやや多く入る。175 は香炉蓋。口径 10.8㎝を測る。肥厚した口縁から段を成して薄い体部が内傾して延び、煙出しの透かしを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰白色の透明釉を外面と内面体部に掛け口唇は掻き取る。貫入が入る。176 は高台皿。口

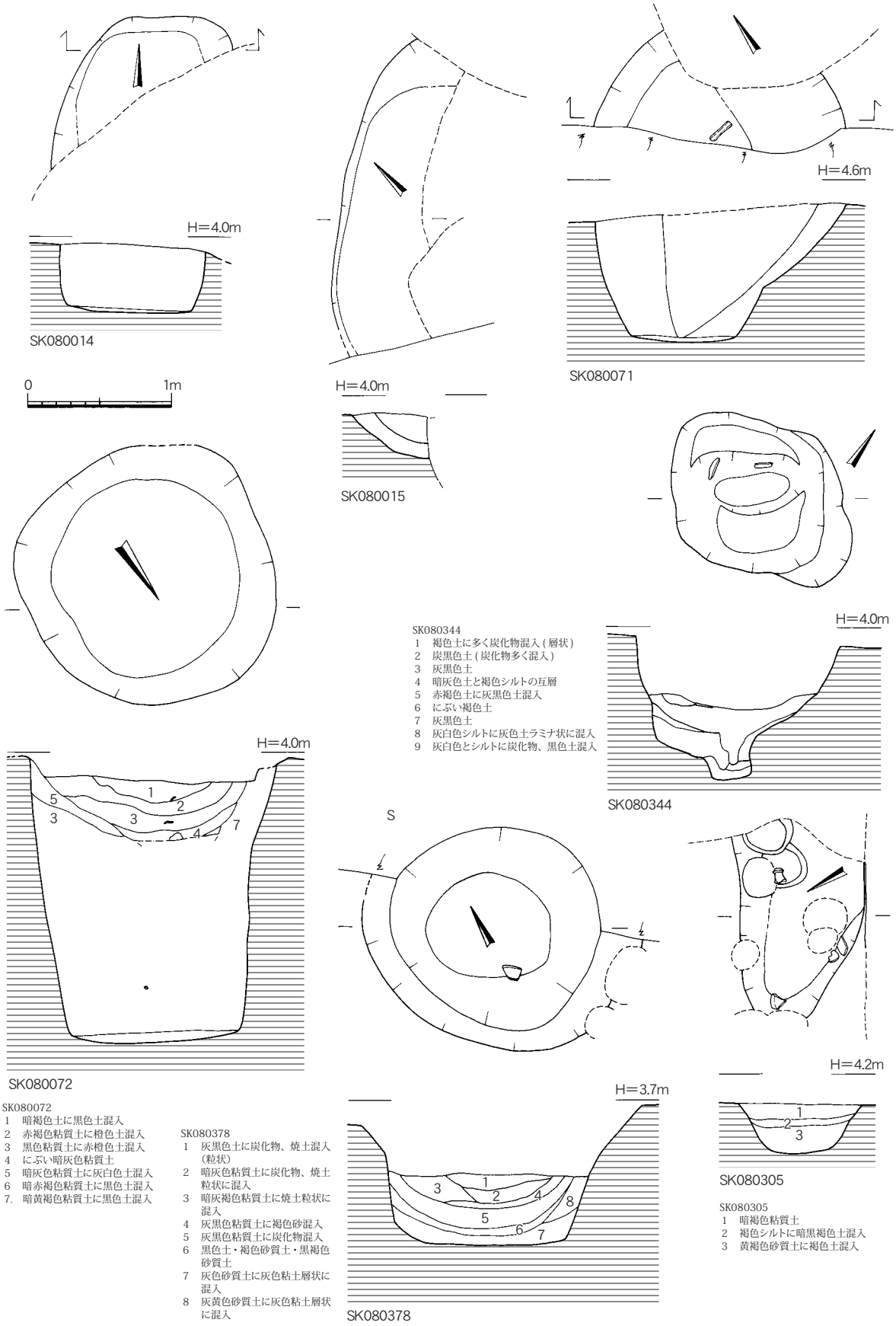


Fig.19　SK080014・080015・080071・080072・080234・080291・080305 実測図（1/40）

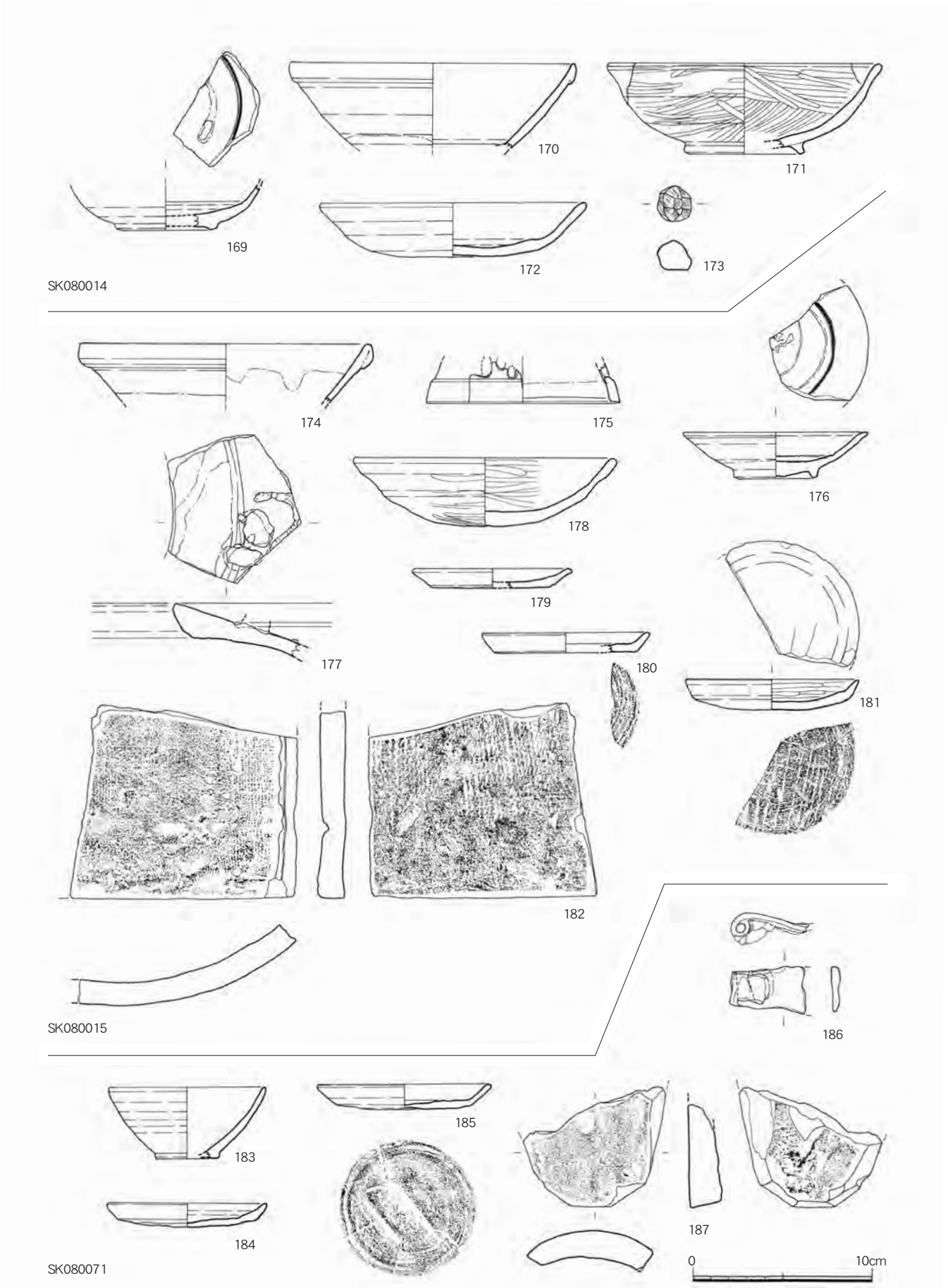
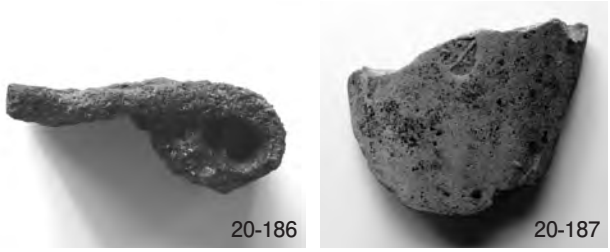


Fig.20　SK080014・080015・080071 出土遺物実測図（1/3）

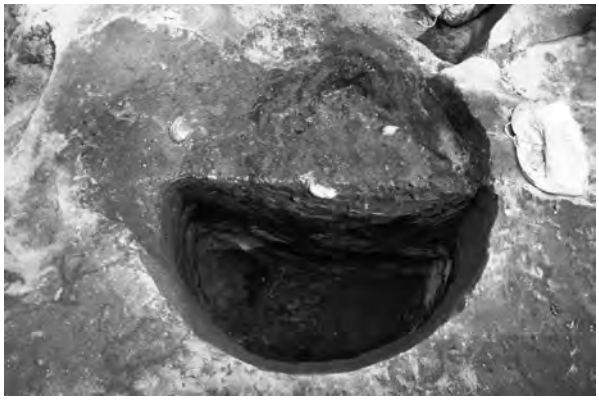


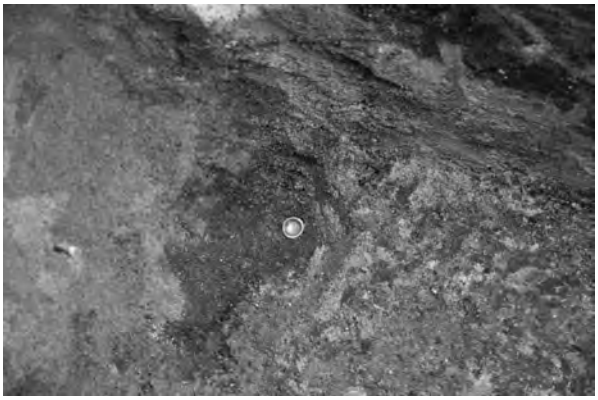
Ph.30　SK080071 出土遺物

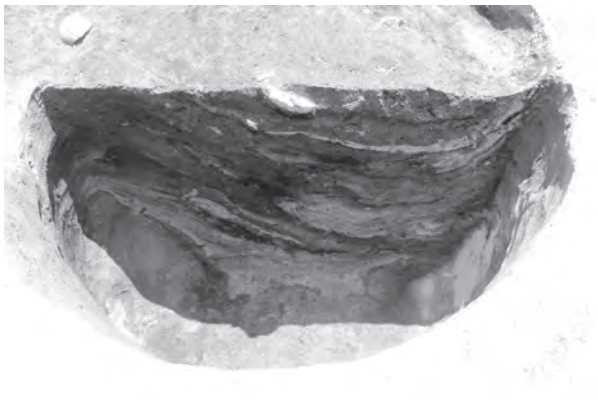
径 10.4 器高 2.6㎝を測る。体部は直線的に強く開き、高台内から口縁下まで回転ナデを施し、内面見込に圏線を 1 条施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰オリーブの透明釉を内面～外面体部下位に掛ける。見込は輪状に掻き取り中央に目跡が残る。178 は無頸の中国陶器四耳大甕口縁部。内外面回転ナデで、口縁下に沈線を 1 条施し、下に貼付した耳が焼成中に折れ焼き付き痕として残る。胎土は黄灰色で 2㎜以下の白色粒を少量含み、灰オリーブの不透明釉を沈線下に掛ける。露胎部は灰褐～黒褐色を呈する。178 ～ 180 は土師器。178 は土師器丸底坏。口径 14.4 器高 3.8㎝を測る。口縁は直線的に強く開き外面口縁下が若干窪む。外底は回転ヘラ切り後指頭圧・ナデを施し、内外面に粗いヨコケンマを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒赤色粒微細な雲母を少量含む。内面は浅黄橙外面は黄橙色を呈する。179・180 は皿。179 は口径 8.4 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ内底にケズリ後タテナデを施し、外底は回転糸切り後板圧痕が残る。胎土は微細な黒粒・雲母を少量含む。内外面は鈍い黄橙色を呈する。180 は口径 9.1 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面に回転ナデ、外底は回転糸切りを施す。胎土は微細な白色粒黒色粒・雲母を少量含む。内外面は鈍い黄橙色を呈する。181 は瓦器皿。丸底の皿で口径 9.8 器高 1.7㎝を測る。体部との境は稜を成し外底は回転糸切り後板圧痕が残る。体部外面は回転ナデ、内面はヨコケンマを施し、内面にヘラ描線がある。胎土は微細な白色粒・雲母を少量含む。内外面は灰白～暗灰色を呈する。182 は平瓦。厚 1.4㎝を測る。凸面は縄目タタキ後先端 5㎝程をナデ、凹面は布と紐目痕が残る。端部はヘラナデ、側面はヘラ切り後折断する。胎土は 1㎜以下の白色粒微細な雲母を少量含み、内外面は灰色を呈する。時期は 12 世紀前半を示す。

SK080071（Fig.19）　1 面目中央付近 Z6 グリッドに位置し、SK080072 に切られ、半分は調査区外に延びる。平面は円形で径 1.75m を測り、深さ 49㎝で比較的に深い。床面は平坦である。

出土遺物（Fig.20　Ph.30）　183 は白磁小碗。口径 8.6 器高 4.0㎝で器形が深い。高台は低く玉縁碗に近い。直口口縁で、外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し、下位はケンマを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰白色の透明釉を内面から外面体部中位まで掛け貫入が入る。本調査区では比較的目立つ遺物である。184・185 は土師器皿。184 は緩い丸底の低い器形で口径 8.9 器高


Ph.31　SK080072 ガラス容器出土（北から）


Ph.32　SK080072 ガラス容器出土状況（北から）



Ph.33　SK080072 土層断面（北から）

Ph.34　SK080072 完掘（北から）

1.4㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ、内底にタテナデを施し、外底は回転ヘラ切り後板圧痕が残る。胎土は 1.5㎜以下の白色粒・微細な雲母を少量含む。内外面は灰白を呈する。185 は口径 9.4 器高 1.4㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ内底にタテナデを施し、緩い丸底の外底は回転糸切り後板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒・雲母を少量含む。内面は浅黄橙～黒褐色外面は橙～黒褐色を呈する。186 は板状の鉄片で、4.3 × 1.9 ～ 2.6㎝厚 5㎜を測り端部を鍛造で径 6㎜に巻き熔着する。一部に藁が錆着する。187 は丸瓦から切り出した道具瓦で、先端部を丸く成形する。幅 6.7 厚 1.8㎝を測る。外面はナデ後花弁状の文様を印刻する。、内面は布目圧痕をナデ、側面はヘラケズリ後ナデる。胎土は 2㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を多く含む。内外面は灰黄色を呈する。時期は 12 世紀前半を示す。

SK080072（Fig.19　Ph.31 ～ 34）　1 面目中央付近で SK-071 の北側に位置しこれを切る。平面は円形で径 1.84 深さ 2.05m を測る井戸状の深い遺構で床面はやや窪む。土層断面図は中途であるが、炭灰層が互層で堆積し（1・3・6・7 層）、床上 30㎝程の位置でガラス製小容器を検出しており、ガラス製造に関連する遺構と思われる。遺物も多く含む。

出土遺物（Fig.21・22　Ph.35・36）　188 ～ 214 は上層出土。188 ～ 200 は白磁。188 ～ 191 は玉縁の碗。188 は口径 16.0 器高 6.2㎝を測り、玉縁は低く高台内面から体部上位まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を多く含み、灰白の半濁釉を内面から高台脇まで掛ける。189 は口径 16.1 器高 6.7㎝を測り、玉縁は比較的小さく高台内面から体部上位まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を含み、灰白の透明釉を内面から高台脇まで掛け貫入が入る。190 は口縁部で口径 15.6㎝を測り、玉縁は同じく比較的小さく口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を多く含み、灰白の透明釉を内面から外面まで掛け貫入が入る。191 は口径 16.0 器高 6.9㎝を測り、玉縁は比較的低く高台内面から口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で 4㎜以下の白色粒を少量微細な黒色粒を多く含み、浅黄色の不透明釉を内面から高台脇まで掛けるピンホールが多く入る。192 は口径 15.0 器高 5.2㎝で、直口口縁下の内面に圏線 1 条、外面体部中位まで回転ヘラケズリを施しさらにヘラ描花文を施す。胎土は微細な黒色粒を多く含み灰白色を呈し、灰白色の不透明釉を内面から高台際まで掛けピンホールが少量入る。193 は直口口縁で口径 15.9㎝を測る。外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な黒色粒を多く含み灰白色を呈し、灰白色の透明釉を内外面に掛けピンホールが少量入る。194・195 は SK-071 出土と同じ小碗で、194 は口径 88 器高 4.2㎝と深い器形で、

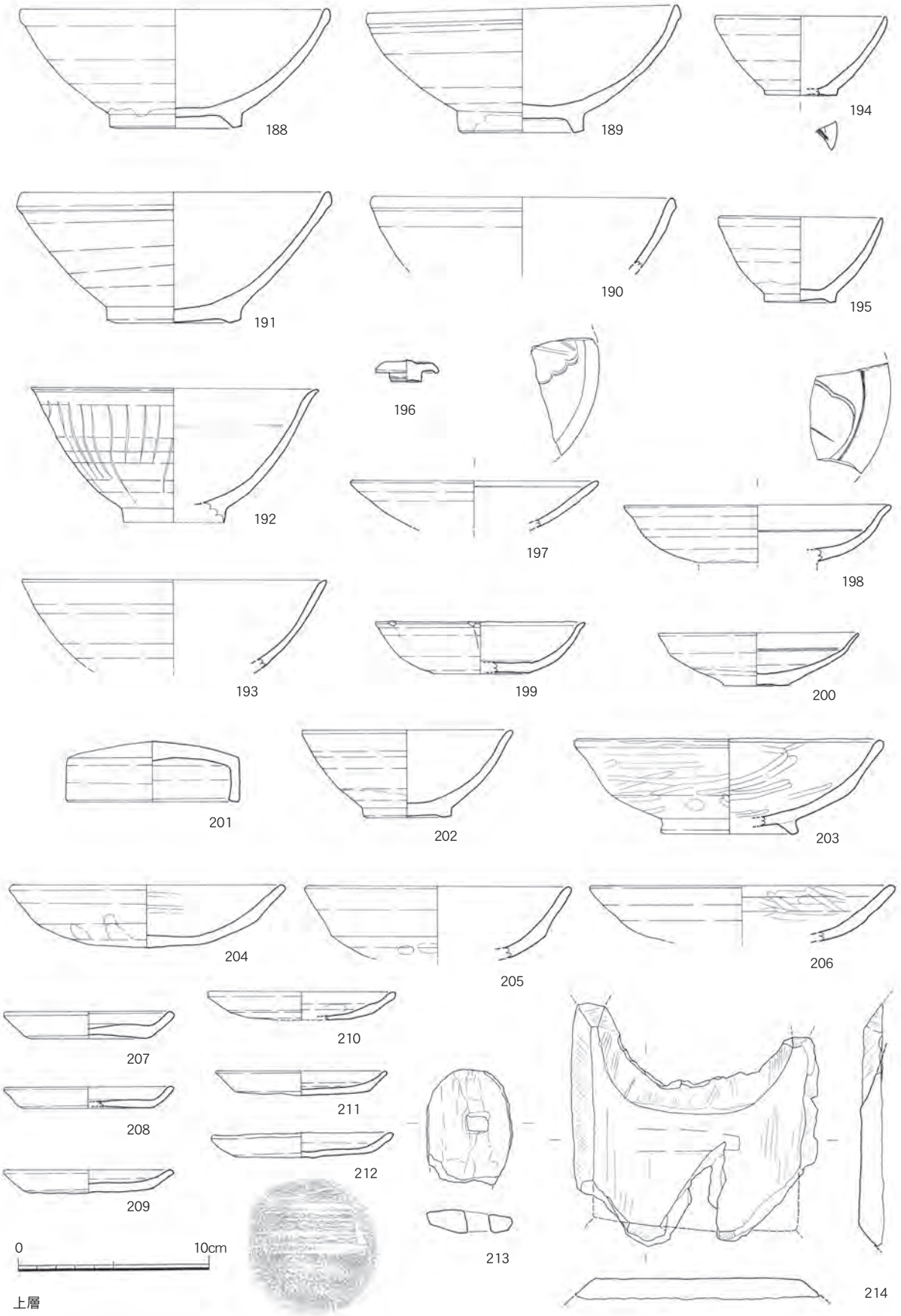
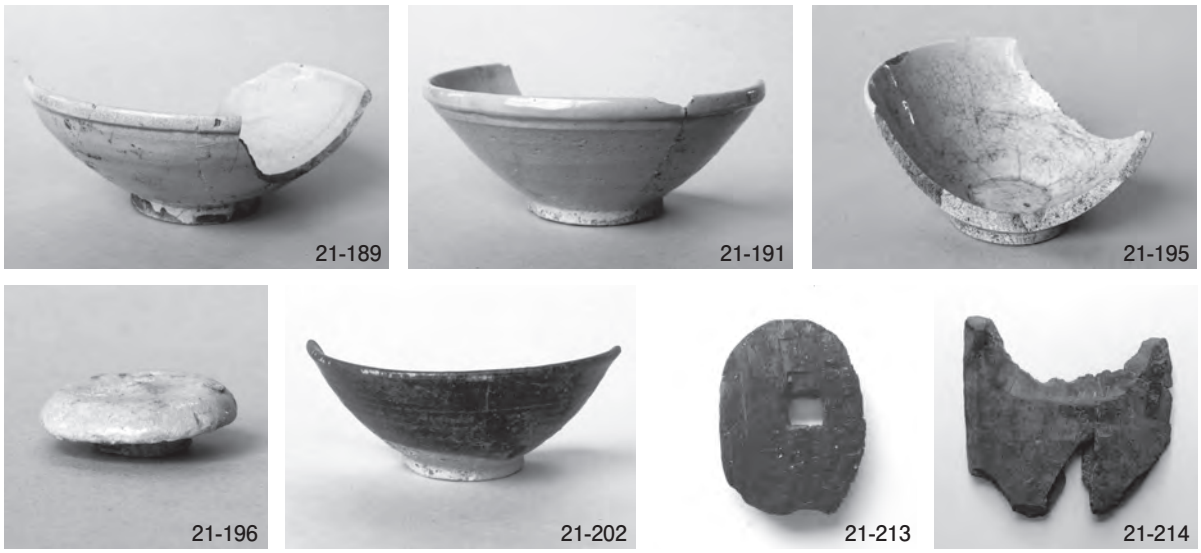


Fig.21　SK080072 出土遺物実測図 -1（1/3）



Ph.35　SK080072 上層出土遺物

低い高台内に墨書が有る。直口口縁で、外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は鈍い黄橙色で微細な黒色粒を多く含み、灰白色の透明釉を内面から外面体部中位まで掛け貫入が入る。195 は口径 8.4 器高 4.5㎝で高台はやや高い。直口口縁で、外面体部中位まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を多く含み、灰白色の透明釉を内面から外面体部下位まで掛け貫入が入る。196 は袋合子の蓋。口径 2.6 器高 1.2㎝を測り受部が径 1.7㎝の円筒形となる。口縁は傘状に開き天井部に低い摘み状の突出がある。回転ナデを施す。胎土は灰白色で 3㎜以下の白色粒・微細な黒色粒を少量含み、灰白色の不透明釉を外面口縁まで掛け、二次被熱を受ける。197・198 は高台皿と思われ、197 は口径 12.8㎝を測る。強く開く直口口縁で内面口縁下に圏線を 1 条施し以下に櫛歯で蕉葉文を描く。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰白色の透明釉を内外面に掛け貫入が入る。198 は口径 13.8㎝を測る。口縁は緩く外反して開き内面口縁下に圏線を 1 条施し以下に櫛歯で蕉葉文を描く。胎土は灰白色で微細な黒色粒を多く含み、灰白色の透明釉を内面～高台脇まで掛け貫入が入る。199・200 は平皿で、199 は口径 10.8 器高 2.7㎝を測る。外面に輪花状に口唇にヘラ押しを、以下にヘラ描きの縦線を施し内面見込に圏線 1 条を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰白色の透明釉を内面から底部際まで掛け外底は掻き取る。200 は口径 10.5 器高 2.8㎝を測る。体部は直線的に強く開き口縁は緩く外反して稜を成す。外面中位まで回転ケズリを施し、内面口縁下に圏線 1 条を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を多く含み、浅黄色の不透明釉を内面から体部中位まで掛ける。201 は中国褐釉陶器の壺蓋。口径 9.0 器高 2.8㎝を測る。口唇は面取りし、口縁は垂直に立ち稜を成して丸い天井部に連なる。回転ナデを施す。胎土は浅黄橙色で 2㎜以下の白色粒を少量微細な黒色粒を多く含み、鈍い赤褐色の不透明釉を外面口縁まで掛け口唇を掻き取る。202 は天目碗。口径 11.0 器高 4.6㎝を測る。直口口縁で体部は緩く内湾して開き底部は径 4.7㎝と広い。高台内は浅く、体部下位まで回転ケズリを施す。胎土は灰白色で 1.5㎜以下の黒色粒を多く含み、黒色の不透明釉を体部下位まで掛ける。203 ～ 212 は土師器。203 は埦。口径 15.6 器高 5.0㎝を測る。高台は径 7.3㎝と広く、やや高く外方に張る。体部は緩く屈曲して開き稜を成す。内外面に粗いヨコケンマを施す。高台部周りは回転ナデを施す。外面稜以下には指頭圧痕が残る。胎土は 4㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を多く含む。内面浅黄橙色外面黄橙色を呈する。204 ～ 206 は丸底坏。204 は口径 14.0 器高 3.3㎝を測る。浅い器形で口縁は直線的に強く開き底と体部境が稜を成す。外底は回転ヘラ切り後指

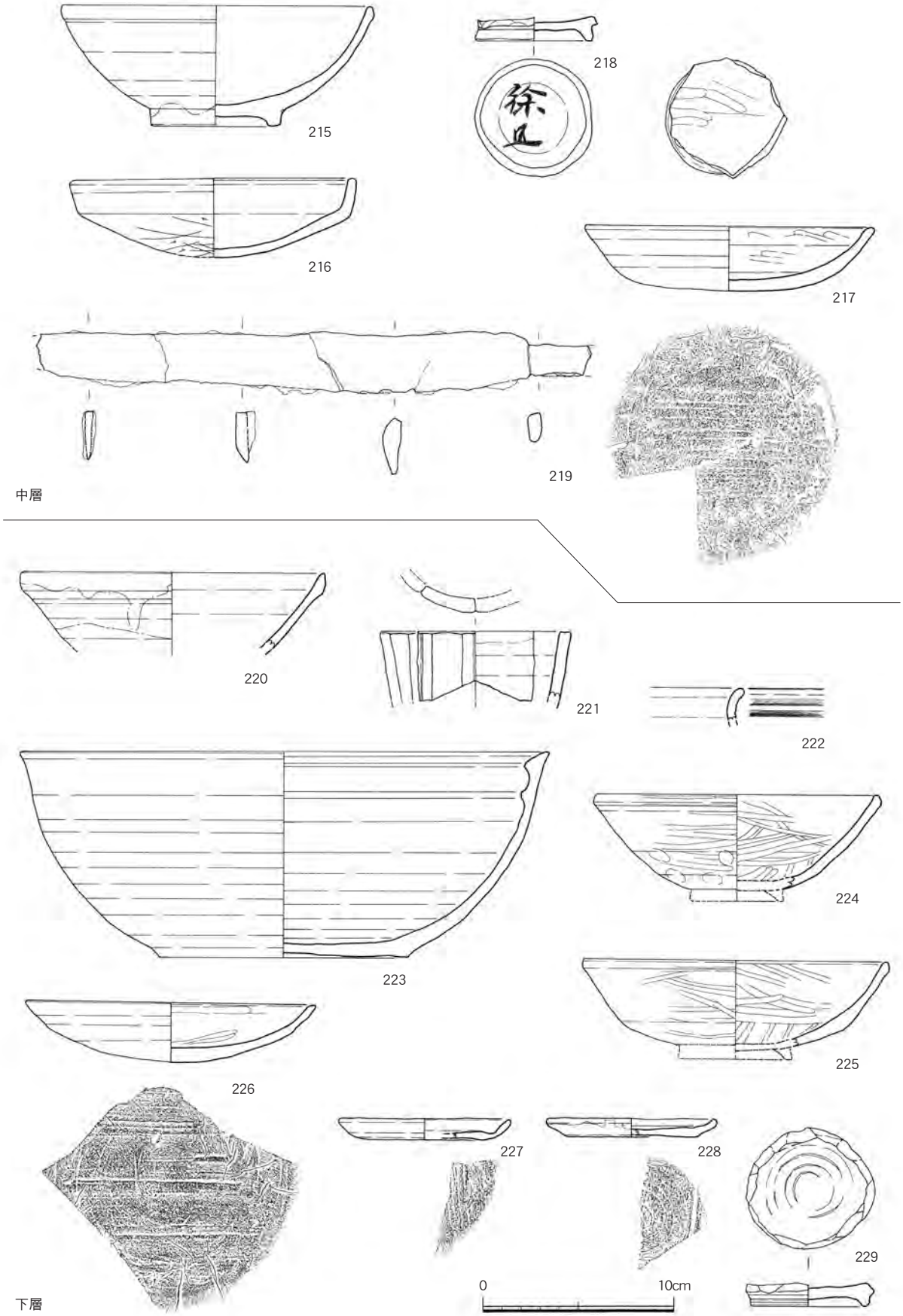
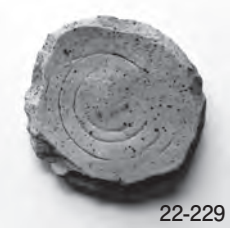


Fig.22　SK080072 出土遺物実測図 -2（1/3）



Ph.36　SK080072 出土遺物実測図

頭圧・ナデを施し、内外面にヨコケンマを施す。胎土は 5㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含む。内外面は浅黄橙色を呈する。205 は口径 13.6㎝を測る。口縁は直線的に開き底と体部境が稜を成す。外底は回転ヘラ切り後指頭圧・ナデを施し、内面にヨコケンマ外面に回転ナデを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒を少量微細な黒色粒・雲母を多く含む。内面は浅黄橙色外面は橙色を呈する。206 は口径 15.9㎝を測る。浅く大きな器形で口縁は直線的に強く開き底部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し板圧痕が残る。内外面に回転ナデ後内面に粗いヨコケンマを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を少量含む。内外面は橙色を呈する。207 ～ 212 は皿。207 は口径 8.7 器高 1.4㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施し、外底は回転ヘラ切り後板圧痕が残る。胎土は 5㎜以下の白色粒微細な黒粒・雲母を少量含む。内面は灰黄褐色外面は鈍い黄橙色を呈する。208 は口径 8.7 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ後内底にタテナデを施し、外底は回転ヘラ切り後板圧痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含む。内外面は浅黄橙色を呈する。209 は口径 8.7 器高 1.3㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ後内底にタテナデを施し、外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を多く含む。内外面は浅黄橙色を呈する。210 はやや大型の緩い丸底の皿で口径 9.8 器高 1.5㎝を測る。口縁は直線的に強く開き外底境は稜を成す。体部内外面は回転ナデ、内底にタテナデを施し、外底は回転ヘラ切り後板圧痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を少量含む。内面は鈍い黄橙色外面鈍い黄褐色を呈する。211 は口径 8.6 器高 1.3㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ後内底にタテナデを施し、外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量、雲母を多く含む。内面は淡黄色外面は浅黄橙色を呈する。212 は　口径 9.1 器高 1.4㎝を測る。体部は直線的に強く開き、外底は緩い丸みを残す。内外面に回転ナデ後内底にタテナデを施し、外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な微細な黒色粒・雲母を多く含む。内外面は鈍い黄橙色を呈する。213 は木製の円盤で、残存長 6.0 × 4.5 × 1.2㎝を測る楕円形で中央を 11 × 4㎜の方形に穿孔する。214 は剪

頭角錐形の石造物片で 13.0㎝角で上半は丸く抉っている。灰褐色の頁岩質砂岩製で敲き後ケズリ・ケンマで整形する。215 ～ 219 は中層出土。215 は玉縁白磁碗。口径 15.9 器高 6.3㎝を測り、玉縁は比較的小さく高台内面から体部上位まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を含み、浅黄色の透明釉を内面から高台脇まで掛け貫入が入る。216 ～ 218 は土師器。216・217 は丸底坏。216 は特異な形態で深い丸底から稜を成して屈曲し口縁がほぼ垂直に延びる。口径 14.5 器高 .4.2㎝を測る。外底は不定方向のケズリ、口縁内外はヨコナデ内底に不定方向のナデを施す。胎土は微細な雲母を多く含む。内外面は橙色を呈する。217 は口径 15.0 器高 .3.4㎝を測る。浅い器形で口縁は直線的に強く開き底と体部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し板圧痕が残る。外面体部に回転ナデ内面に粗いヨコケンマを施す。胎土は 5㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含む。内面は黄橙～鈍い橙色外面は鈍い黄橙色を呈する。218 は埦の底部を転用した瓦玉で径 6.0 厚 1.4㎝を測る。高台に沿って円形に打ち欠き成形し、高台内に「徐　花押」の墨書がある。色調は灰黄～黄灰色を呈する。219 は鉄包丁で残存長 29.0 幅 3.0 厚 5㎜を測り片刃である。220 から 229 は下層出土。220・221 は白磁。220 は玉縁碗口縁部。口径 15.8㎝を測り、玉縁は低く外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は鈍い黄橙色で微細な黒色粒を多く含み、浅黄色の半濁釉を内面から外面中位まで掛ける。二次被熱を受ける。221 は 16 面体の香炉。口径 9.8㎝を測り、8 本の縦割り線を施す。内面は回転ナデを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を多く含み、淡黄色の透明釉を外面に掛け口唇は掻き取る。222 は青白磁の香炉口縁。緩く外反した外面口縁下に幅広の沈線 2 条を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を多く含み、明緑色の透明釉を外面から口縁内面に掛ける。223 は中国陶器捏鉢。口径 27.3 器高 10.8㎝を測る。内外面に回転ナデを施し、内面下部が使用により摩滅する。胎土は赤褐色で 4㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内外面は赤褐～褐色を成す。224 ～ 229 は土師器。224・225 は埦。224 は口径 14.6㎝を測り、白磁玉縁碗の写しで、口縁の玉縁は比較的小さく外面体部下半に指頭圧ナデ後内外に粗いヨコケンマを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含む。内外面は浅黄橙色を呈する。225 は口径 15.8㎝を測る。体部は屈曲して稜を成し口縁は直線的に開く。口縁部が若干肥厚し外面に面取りを施す。体部稜線下はヘラ切り後指頭圧ナデで成形し疎らなヨコケンマ、以上は回転ナデ、内面は下位に粗いタテ、以上に粗いヨコケンマを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含む。内面浅黄橙色外面灰白色を呈する。226 は丸底坏。口径 15.0㎝を測る。浅い器形で口縁は直線的に強く開き底部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し板圧痕が残る。内外面に回転ナデ後内面に粗いヨコケンマを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含む。内面は鈍い橙色外面は鈍い褐色を呈する。227・228 は皿。227 は口径 8.8 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面に回転ナデを施し、外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒微・雲母を多く含む。内外面は灰黄褐色～鈍い黄橙色を呈する。

Ph.37　SK080234（080378）土層断面（南から）

Ph.38　SK080234（南から）

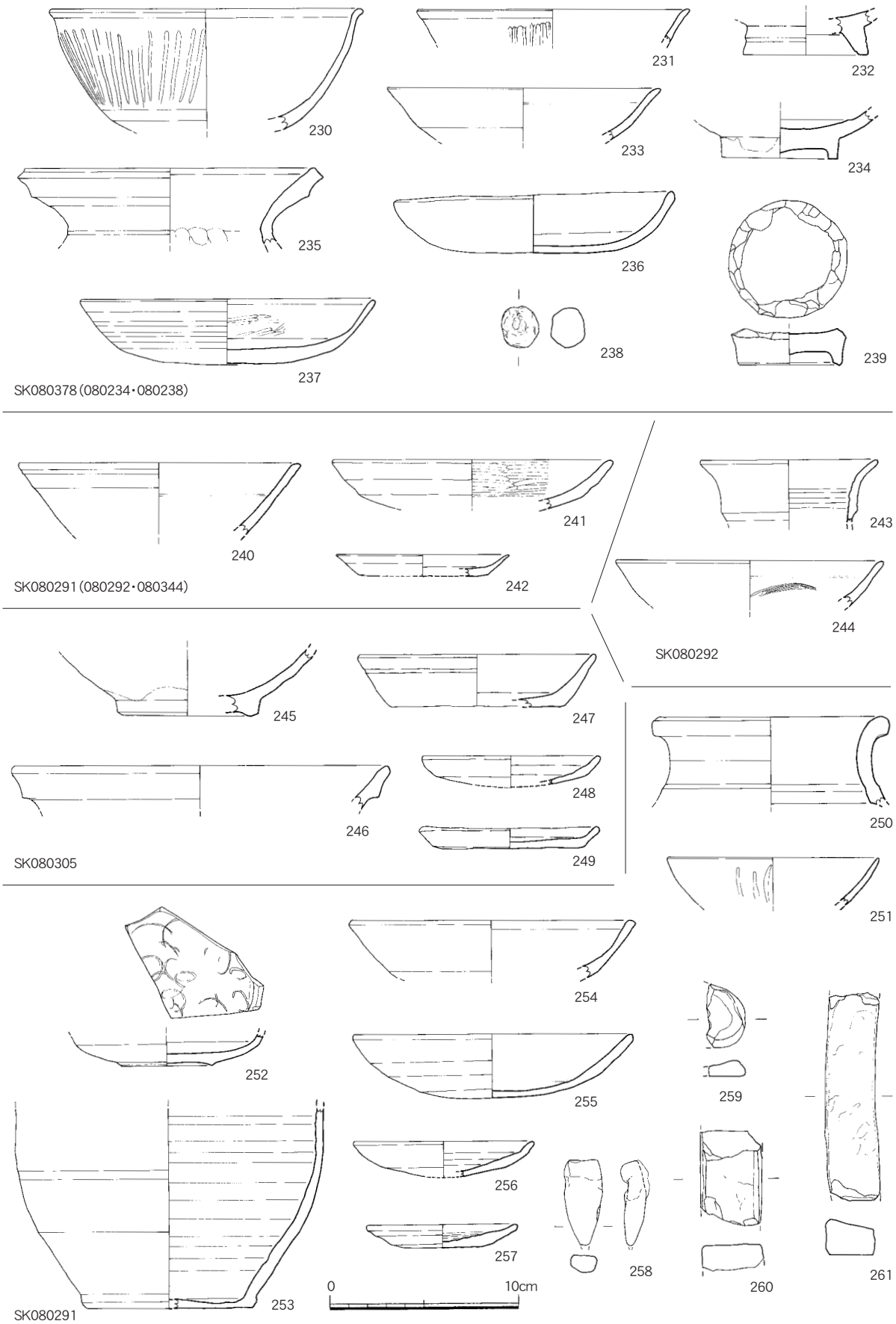


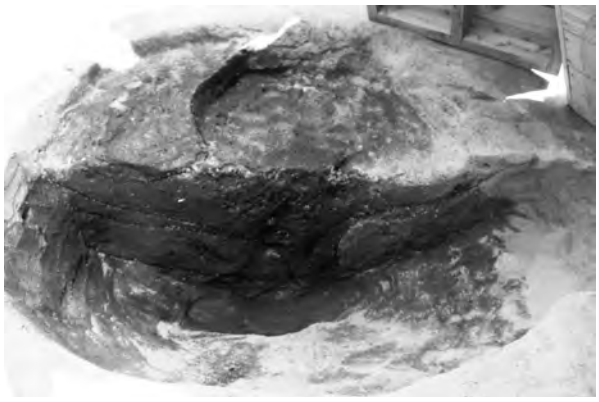
Fig.23　SK080378・080291・080292・080305 出土遺物実測図（1/3）

Ph.39　SK080234・080344 出土遺物

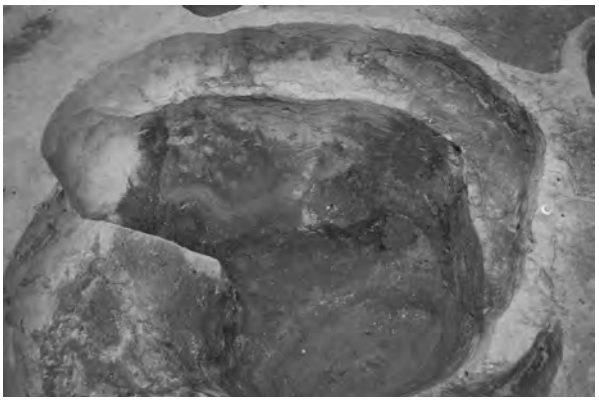
228 は口径 8.6 器高 1.0 ㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面に回転ナデを施し内底に不定方向ナデ、外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土 1㎜以下の白色粒・微細な雲母を多く含む。内面は黒褐外面は灰黄褐色を呈する。229 は碗の底部を転用した瓦玉で径 5.9 厚 124 ㎝を測る。高台に沿って円形に打ち欠き成形する。色調は浅黄橙色を呈する。他にガラス坩堝・ガラス製小容器が出土する。時期は 12 世紀前半を示す。

SK080234（-235・378）（Fig.19　Ph.37・38）　2 面目中央北の壁際で検出した。SK-235・378 は同一遺構である。平面は円形で径 1.65 と 1.46m の二重土壙で深さ 1.0m を測り床面は平坦である。土層断面は上位に炭粒･焼土粒を混入する灰層が互層で堆積し（2･3･5 層）、SK-072 と同様に、ガラス製造に関連する遺構の可能性がある。

出土遺物（Fig.23　Ph.39）　230 ～ 234 は青磁。230・231 は龍泉窯系 0 類の碗。230 は口径 16.4㎝を測る。口縁は小さく外湾し外面口縁下に片切調の粗い縦櫛描文を施す。胎土は微細な黒色粒を含み灰白色を呈し、明緑灰色の透明釉を内面から外面体部下位に掛ける。231 は口径 14.4㎝で、口縁外面は低い段で肥厚し以下に片切調の粗い縦櫛描文を施す。胎土は精良で鈍い橙色を呈し、明褐色の透明釉を内外面に掛ける。二次被熱を受ける。232 は高麗青磁碗底部。高台径 6.6㎝で、高い節高台を成す。胎土は白色粒を少量含み灰白色を呈し、緑灰色の透明釉を内外面に掛け畳付を掻き取る。233･234 は白磁。233 は小碗口縁部。口径 13.4㎝を測り、直口口縁で強く開き外面上位まで回転ケズリを施し内面口縁下には圏線を 1 条施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含み、灰白色の透明釉を内面から外面中位まで掛ける。234 は碗底部で高台径 6.3㎝で、やや高い高台が垂直に延び、高台内から外面に回転ケズリを施し、内面見込に圏線 1 条を施す。胎土は微細な黒色粒を少量含み灰白色を呈し、明青灰色の透明釉を高台脇まで掛ける。235 は須恵質甕の口縁部で径 16.0㎝を測る。口縁外面が肥厚し外面を窪ませ下端が稜を成す。内外面に回転ナデを施し外面に自然釉が掛かる。胎土は微細な黒色粒を少量含み灰白色を呈し灰～灰白色を呈する。236・237 は土師器丸底坏。236 は口径 14.8 器高 .3.3㎝を測る。浅い器形で緩い丸底から体部が緩く内湾して口縁が開き外底と体部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し体部内外に回転ナデを施す。胎土は白色粒を少量含み、内外面は灰白色を呈する。237 は口径 15.4 器高 .3.5㎝を測る。236 と同様の器形で、外底は回転ヘラ切り後ナデを施し外面体部に回転ナデを内面に



Ph.40　SK080344 土層断面（西から）



Ph.41　SK080344（東から）

粗いヘラケンマを施す。胎土は微細な白色・赤色粒・雲母を若干含み、内外面は橙色を呈する。238 は瓦片を転用した土玉。2.0 × 2.2 × 1.7㎝の球形で 6.7g を測る。全面にケズリ磨りを施す。灰白色を呈する。239 は白磁碗の底部を転用した瓦玉で径 6.2 厚 2.9㎝ 16.6g を測る。高台に沿って円形に打ち欠き成形する。色調は灰白色を呈する。他に熔解した鉛片が出土した。時期は 12 世紀前半を示す。

SK080291（-292・-344）（Fig.19　Ph.39）　2 面目中央部 A14 グリッドで検出した。SK-292・-344 は同一遺構である。平面は不整円形で径 1.38 × 1.04m 深さ 0.96m を測り 2 段に掘削される。

出土遺物（Fig.23）　240 は白磁碗口縁部。口径 15.0㎝を測る。直口口縁で口縁が直線的に延び強く開く。外面口縁下を浅く窪ませ下まで回転ケズリを施す。内面には圏線を 1 条施す。胎土は精良で灰白を呈し、内外面に灰白色の透明釉を掛ける。241・242 は土師器。241 は口径 14.6㎝を測る。浅い器形で口縁は直線的に強く開き底と体部境が緩い稜を成す。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し、内外面に回転ナデ後内面にヨコケンマを施す。胎土は微細な黒色粒・雲母を多く含む。内面は明褐灰～橙色外面は鈍い黄橙～赤橙色を呈する。242 は皿。口径 9.0 器高 1.2㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施し内底にタテナデ、外底は回転ヘラ切り後ナデを施す。胎土は微細な黒色赤色粒・雲母を少量含む。内面は鈍い橙色外面は鈍い褐色を呈する。243 は越州窯系青磁の壺口縁。口径 9.4㎝を測る。口縁は直口口縁で長く外反し内外面に回転ナデを施す。胎土は精良で灰色を呈し、外面から内面下位まで緑灰色の透明釉を掛ける。244 は白磁小碗の口縁部で口径 14.2㎝を測り、直口口縁で強く開き外面上位まで回転ケズリを施し内面口縁下には圏線を 1 条、以下に櫛描花文を施す。胎土は灰白色で精良、灰オリーブの透明釉を内外面に掛ける。250 ～ 261 は -344 出土。250 ～ 252 は白磁。250 は四耳壺の口縁部。径 12.6㎝を測る。緩く外反し口縁端部が肥厚して玉縁状を成す。内外面に回転ナデを施し、胎土は灰白色で精良、明緑灰色の透明釉を内外面に掛ける。252 は小碗の口縁部で口径 11.2㎝を測り、直口口縁で強く開き外面口縁下まで回転ケズリを施し、以下にヘラ描花文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を含み、灰白色の透明釉を内外面に掛ける。252 は微少な三角高台の皿。高台径 5.2㎝を測る。広い底部から稜を成して体部が屈曲し外方に開く。内面見込にヘラ描草花文を施す。胎土は灰白色で微細な白色黒色粒を含み、灰白色の半濁釉を内面から高台際まで掛ける。253 は中国陶器壺。平底で底径 9.2㎝を測る。内外面に回転ナデを施し胎土は白色・黒色粒を若干含み、内外面灰白色を呈する。254 ～ 257 は土師器。254・255 は丸底坏。254 は口径 15.2㎝を測る。浅い器形で口縁は直線的に開き底部境は稜を成す。内外面に回転ナデを施す。胎土は精良で、内面は浅黄橙色、

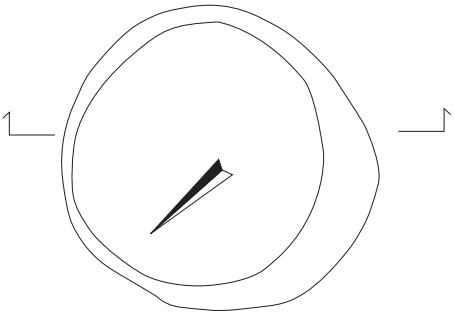
Ph.42　SK080430 土層断面（北から）

Ph.43　SK080430 完掘（西から）

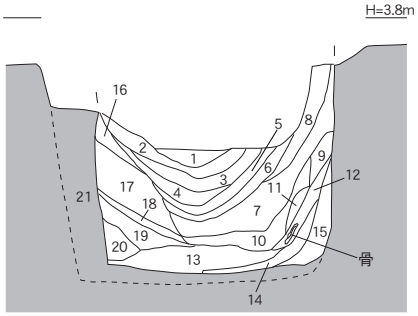
外面は浅黄橙～灰白色を呈する。255 は口径 14.8 器高 .3.4㎝を測る。口縁は直線的に強く開き底と体部境不明瞭である。外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。内外面にヨコナデ後内面にヨコケンマを施す。胎土は白色粒微細な黒色粒・雲母を若干含む。内外面は鈍い黄橙～灰白色を呈する。256・257 は皿。256 は丸底の皿で口径 9.6 器高 1.9㎝を測る。口縁は短く直線的に強く開き外底と体部境不明瞭である。体部内外面は回転ナデ、内底にタテナデを施し、外底は回転ヘラ切り後ナデる。胎土は微細な白色粒黒色粒を若干含む。内外面は鈍い黄橙色を呈する。257 は口径 8.0 器高 1.2㎝を測る。体部は直線的に強く開き、外底は緩い丸みを残す。内外面に回転ナデを施し、外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土は微細な褐色粒を若干含む。内外面は鈍い橙色を呈する。258 は楔状の鉄平釘で、2 × 1㎝角の頭部に整形し、全長 4.5㎝幅 2.0 厚 1㎝を測る。259 は円盤状の土製品で径 3.3㎝厚 8㎜を測り下面は平坦で上面が窪む。胎土は灰白色で白色粒を多量に含む。双六の駒と思われる。260・261 は柱状の土製品片で窯道具と思われる。260 は幅 3.3 厚 1.3㎝を測る。器表をナデで調整し胎土は白色粒を少量含み鈍い橙色を呈する。261 は幅 2.8 厚 1.9㎝を測る。器表をナデで調整し胎土は白色赤色粒を多く含み橙色を呈する。時期は 12 世紀前半を示す。

SK080305（Fig.19）　2 面目中央部 O8 グリッドで検出した。SK-072・071 に大半を切られる。平面は不整形、残存で 1.3+ α × 0.89+ α m 深さ 35㎝を測り、断面は船底型を呈する。

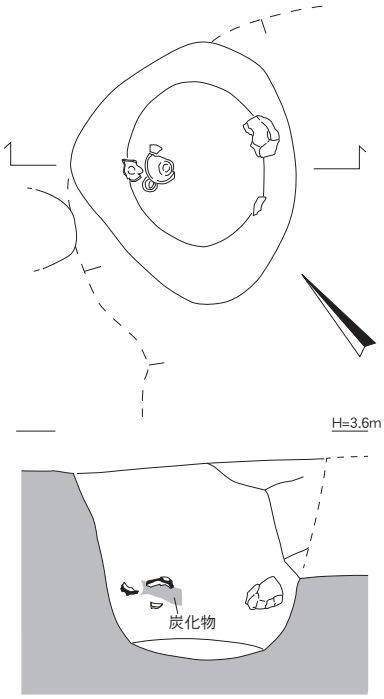
出土遺物（Fig.23）　245 は白磁大碗底部。高台径口縁部。口径 5.6㎝を測る。高台内を浅く、体部に回転ケズリを施す。胎土は微細な黒色粒を若干含み灰白を呈し、内面から高台脇まで淡灰白色の透明釉を掛ける。246 は高麗無釉陶器の甕口縁部。口径 20.0㎝を測る。口縁は外方に直線的に強く開き、外面下端が肥厚して稜を成す。内外面に回転ナデを施す。胎土は白色粒を少量含み、内外面暗青灰色を呈する。247 ～ 249 は土師器。247 は坏で口径 12.6 器高 2.7㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面に回転ナデを施し内底にタテナデ、外底は回転ヘラ切り後ナデを施す。胎土は白色粒・雲母を少量含む。内外面は淡橙色を呈する。248・249 は皿。248 は口径 9.4㎝を測る。緩い丸底の皿で口縁は直線的に開き外底境は稜を成す。体部内外面は回転ナデ、外底は回転ヘラ切り後ナデる。胎土は白色粒・雲母を少量含む。内面は灰白色外面は浅黄橙色を呈する。249 は口径 9.6 器高 1.1㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデを施し内底にタテナデ外底は回転ヘラ切り後ナデを施す。胎土は微細な白色黒色粒・雲母を少量含む。内外面は鈍い橙色を呈する。時期は 12 世紀初頭を示す。



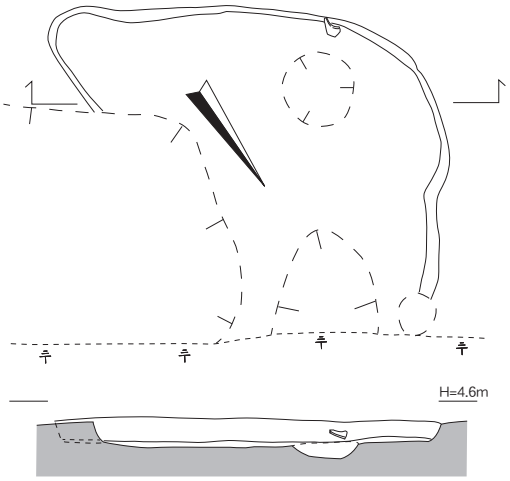
1 黒色炭化物層＋茶褐色粘質土
2 暗褐色粘質土に炭化物が混入
3 灰黒色粘質土に炭化物が粒状に混入
4 暗褐色粘質土に炭化物混入
5 暗黒色粘質土に褐色粘土混入
6 灰色粘質土に褐色粘土混入
7 灰色粘質土に黒褐色粘土混入
(しまり無し)
8 灰黒色粘質土＋褐色砂粒
9 褐色粗砂
10 灰色土に粗砂混入
11 灰色砂
12 炭化物層＋暗灰色土＋褐色砂
13 暗灰色砂土(やわらかい)
14 褐色砂層状＋炭化物＋灰色土
15 灰色砂質土に炭化物粒状に混入
(固くしまる)
16 褐色砂＋灰色土
17 灰色砂質土に炭化物粒状に混入
(15に類似)
18 灰色砂質土
19 暗灰色砂質土に炭化物層状に入る
20 褐色砂
21 褐色砂(地山)



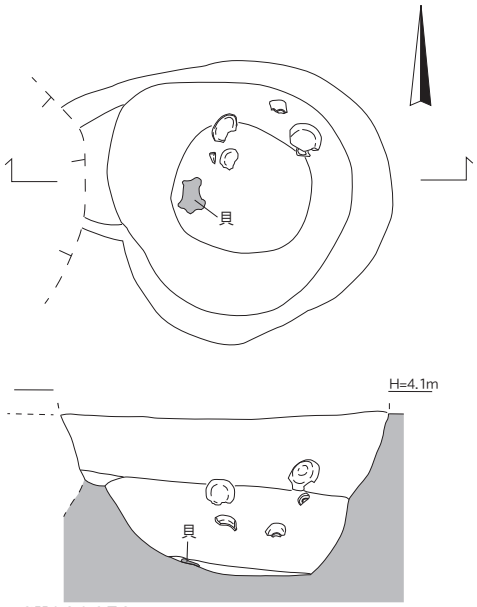
SK080430



SK080444

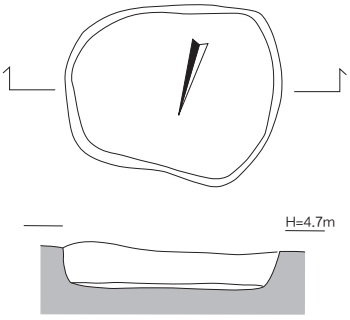


SK080617

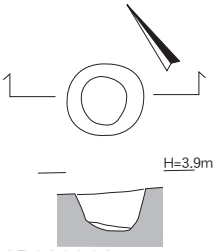


SK080658

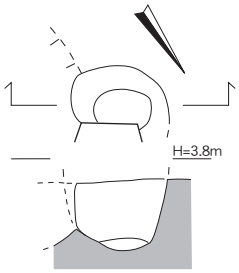
0 2m



SK080630



SP080302



SP080672

Fig.24　SK080430・080444・080617・080630・080658・SP080302・080672実測図(1/40)

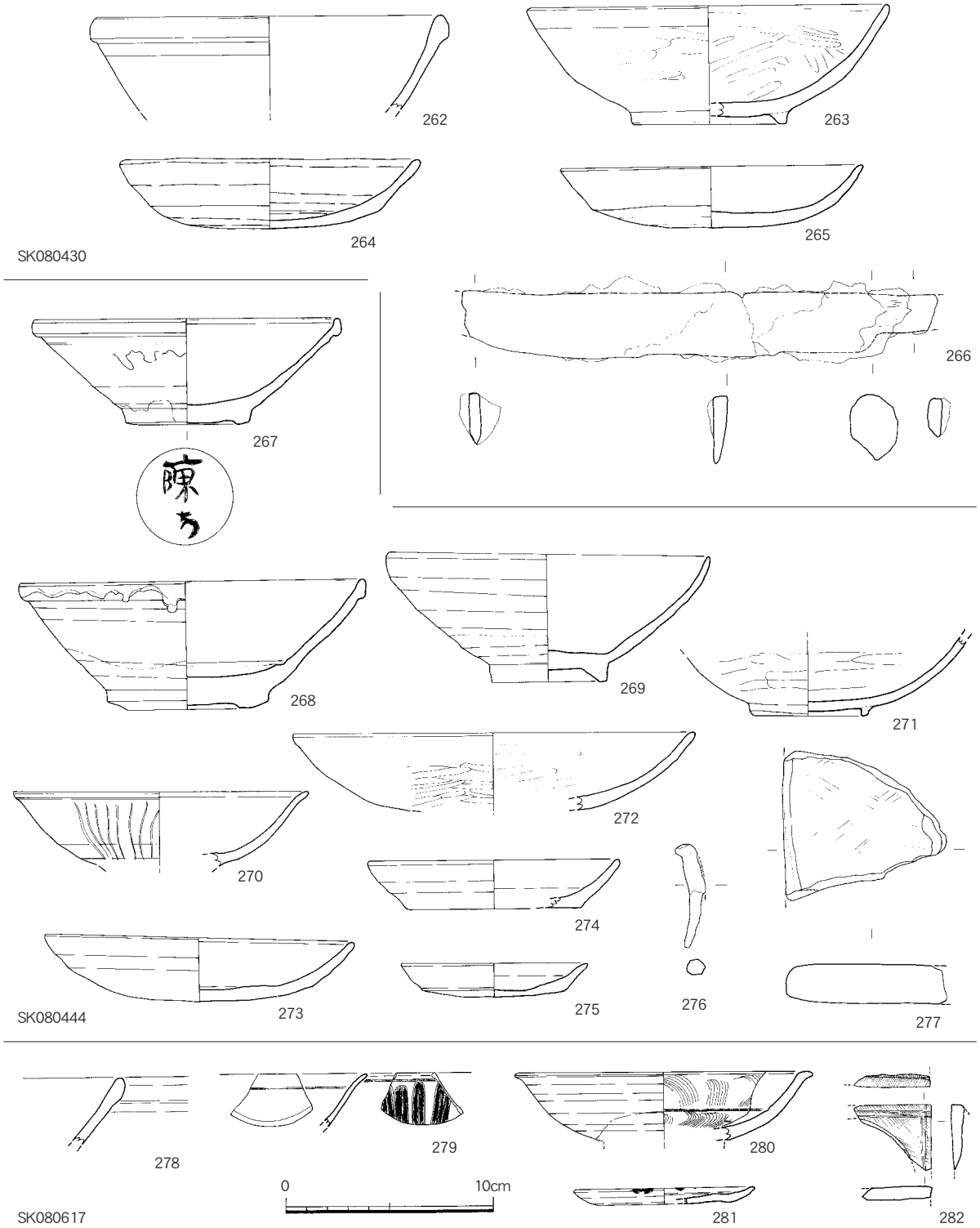


Fig.25　SK080430・080444・080617 出土遺物実測図（1/3）

SK080430（Fig.24　Ph.42・43）　3 面目中央付近に位置する。平面は円形で径 1.25 深さ 1.2m を測る井戸状の深い遺構で床面はやや窪む。土層断面は炭灰層が互層で堆積し（1・5・6・12・14・15 層）、SK-072 と同種で、ガラス製造に関連する遺構と思われる。

出土遺物（Fig.25　Ph.45）　262 は玉縁の白磁碗口縁。口径 14.4㎝を測り、外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を若干含み、灰白の透明釉を内外面に掛ける。263 は瓦器埦。口径 17.6 器高 5.7㎝を測る。高台は低く、体部内外面に粗いヨコケンマを施す。高

Ph.44　SK080444（西から）

台部周りは回転ナデを施す。胎土は白色粒を若干含む。内外面灰白～灰色を呈する。264･265 は土師器丸底坏。264 は口径 14.4 器高 3.4㎝を測り、浅い器形で口縁は直線的に強く開き底と体部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し内外面体部に回転ナデを施す。胎土は白色粒を少量含む。内面は鈍い黄橙色外面は鈍い橙色を呈する。265 は口径 14.6 器高 3.0㎝を測り、さらに浅い器形で口縁は直線的に強く開き底と体部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し内外面体部に回転ナデを施す。胎土は白色・微細な雲

Ph.45　SK080430・080444・080617 出土遺物

母を少量含む。内面は灰白色外面は浅黄橙色を呈する。266 は鉄製小刀。残存長で 21.8 幅 2.8㎝厚 7㎜を測る。時期は 12 世紀初頭を示す。

SK080444（Fig.24　Ph.44）　4 面目西部の A18 グリッドで検出された。SK-019 に切られる。平面は円形で径 1.04 × 0.88 深さ 1.03m を測る。底面は船底型で中位に遺物が集中して出土する。

Ph.46　SK080617（南から）

出土遺物（Fig.25　Ph.45）　268 ～ 270 は白磁碗。268 は玉縁の碗で口径 14.4 器高 6.2㎝を測る。高台内から外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し、内面見込に圏線を 1 条施す。胎土は灰白色で精良。灰白の不透明釉を内面から外面体部下位まで掛ける。釉が泡立ち二次被熱を受けている。269 は小振りな玉縁の碗で口径 15.0 器高 5.1㎝を測る。高台内から外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し、胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含む。灰白色の透明釉を内面から外面体部中位まで掛ける。269 は直口口縁

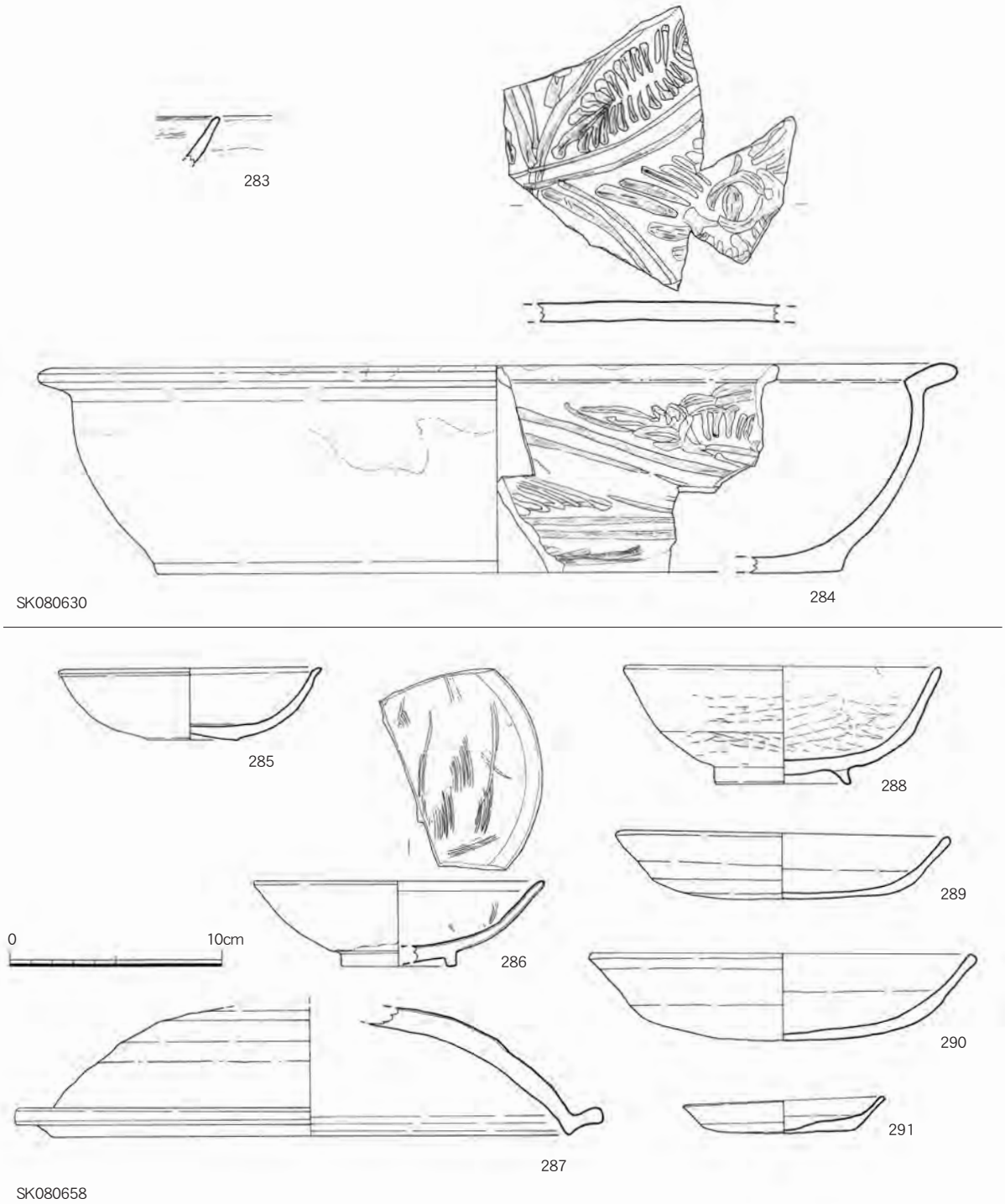


Fig.26　SK080630・080658 出土遺物実測図（1/3）

の碗で口径 15.8 器高 6.3㎝を測る。高台内から外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し、胎土は灰白色で精良。灰白～灰オリーブの半濁釉を内面から高台脇まで掛ける。270 は口径 14.2㎝の浅い碗で、直口口縁の外面体部中位まで回転ヘラケズリを施しさらにヘラ描花文を施す。胎土は精良で灰白色を呈し、灰白色の透明釉を内面から外面体部下位まで掛ける。271・272 は瓦器。271 は埦の底部。高台径 5.7㎝を測る。高台は小さな角高台で体部内外面に粗いヨコケンマを施す。高台部周りは回転ナデを施す。胎土は精良で、内外面暗灰色を呈する。272 は丸底坏で口径 19.5㎝を測る浅く大きな器形で口縁は強く開き、底と体部境は不明瞭である。外面下位にヨコヘラナデ、内面からに口縁内外面に丁寧なヨコケンマを施す。胎土は精良で内外面は暗灰色を呈する。273 ～ 275 は土師器。273 は丸底坏で口径 15.0 器高 3.4㎝を測る。浅い器形で口縁は強く開き、底と体

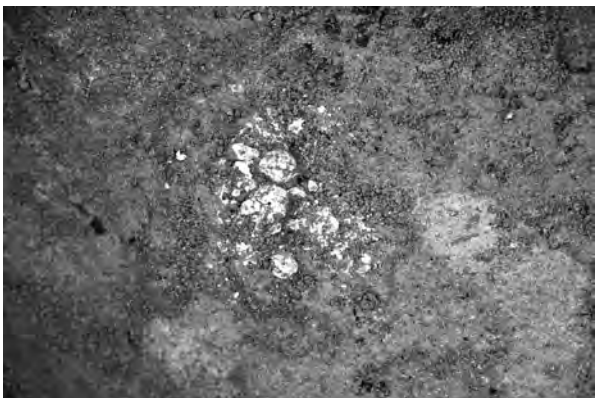
Ph.47　SK080630（北から）

部の境は無い。外底はヘラ削る後ナデ口縁内外は回転ナデを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒を含み内面は黄橙色外面は鈍い黄橙色を呈する。276 は鉄釘。上端を屈曲し 1㎝角の頭部に整形する和釘で長 4.9㎝を測る。277 は細粒砂岩の砥石片で厚 2.6㎝を測る。上下両面を砥面として使用する。時期は 12 世紀前半を示す。

SK080617（Fig.24　Ph.46）　4 面目西部の A18 グリッドで検出された。SK-019 に切られる。平面は円形で径 1.04 × 0.88 深さ 1.03m を測る。底面は船底型で中位に遺物が集中して出土する。

出土遺物（Fig.25　Ph.45）　278 ～ 280 は白磁。278 は玉縁の碗口縁部で外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を多く含み、明オリーブ灰の透明釉を内外面に掛ける。ピンホールが多く入る。279 は直口口縁の碗で器壁が薄い。口縁内と外面下に圏線を 1 条、外面の圏線以下に小さな鎬蓮弁をヘラで陰刻する。胎土は灰白色で微細な黒色粒を若干含み、オリーブ灰の透明釉を内外面に掛ける。ピンホールが少量入る。280 は高台皿で口径 14.0㎝を測る。口唇は小さな平坦面を造り端部が外方に突出する。外面口縁下まで回転ヘラケズリ、内面中位に圏線を 1 条施し上下に櫛描花文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を若干含み、灰白の半濁釉を内面から外面中位に掛ける。ピンホールがやや多く入る。281 は土師器皿。口径 8.4 器高 0.8㎝を測る。体部は直線

Ph.48　SK080658 遺物出土状況（南から）



Ph.49　SK080658 貝出土状況（南から）

的に強く開き、内外面に回転ナデを施し内底にタテナデ外底は回転糸切りを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒と微細な雲母を少量含む。内外面は橙色を呈する。口縁に小さな炭化物の焼き付きがあり灯明皿に使用される。282 は石硯の未製品片で直角の縁に沿って二重の沈線を線刻し、内側に海を掘り込んでいる。淡灰褐色の細粒砂岩製で各面にケズリと緩いケンマを施している。他にガラス小玉を検出している。時期は 12 世紀前半を示す。

SK080630（Fig.24　Ph.47）　2 面目東部の A2 グリッドで検出された。平面は隅丸方形で 1.13 × 0.94 深さ 0.24m と浅く底面は平坦である。

Ph.50　SK080630・080658 出土遺物

出土遺物（Fig.26　Ph.50）　283 は楠葉系の瓦器埦口縁。口唇内に沈線を施し、内外面に細かなヨコケンマを施す。胎土は精良で、内外面暗灰色を呈する。284 は磁灶窯系黄釉鉄絵盤。口径 43.0 器高 9.7㎝を測る。鍔口縁で平底を成す。全面に回転ナデを施し、内面に鉄絵で蕉葉文を描く。胎土・露胎部は灰白色で白色黒色褐色粒を多く含み、灰黄褐色の半濁釉を内面から外面中位までに掛ける。口縁上面は拭き取り目跡が多く並ぶ。時期は 12 世紀初頭を示す。

SK080658（Fig.24　Ph.48・49）　3 面目東部の A2 グリッドで検出され、SE-319 に切られる。平面は円形で 1.86 × 1.50 深さ 0.82m を測り、断面は船底型で中位に遺物が集中して出土する。

出土遺物（Fig.26　Ph.50）　285・286 は白磁。285 は平皿では口径 12.3 器高 3.4㎝を測る。体部は湾曲して開き口縁端部が若干外方に突出する。胎土は灰白色で微細な白色黒色粒を少量含み、灰白色の透明釉を内面から底部際まで掛け外底は掻き取る。286 は高台皿。口径 13.6 器高 4.0㎝を測る。直口口縁で湾曲して強く開く。外面口縁下まで回転ヘラケズリ、内面に櫛描文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を若干含み、灰白の透明釉を内面から高台脇まで掛ける。287 は中国褐釉陶器の甕蓋。口径 37.6 器高 12.4㎝を測る。口縁は屈曲し端部は鍔状に外方に跳ね上がる。内外面に回転ナデを施し、胎土は褐灰色で白色粒を多く含み、暗赤褐色の不透明釉を外面に掛ける。288 から 291 は土師器。288 は埦で口径 15.0 器高 5.6㎝を測る。高台はやや高いく外方に開く。体部は緩く屈曲して口縁は直線的に開く。体部稜線下はヘラ切り後指頭圧ナデで成形し疎らなヨコヘラナデ、内外面に粗いヨコケンマを施す。胎土は 4㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を多く含む。内面は鈍い浅黄橙色外面は浅黄橙～明褐色を呈する。289・290 は丸底坏。289 は口径 15.6 器高 3.2㎝を測る。浅い器形で口縁は直線的に強く開き底部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを、内外面に回転ナデを施す。胎土は白色粒を少量含む。内外面は灰白色を呈する。290 は口径 18.2 器高 4.0㎝を測る大型の器形で口縁は直線的に強く開き底部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを、内外面に回転ナデを施す。胎土は白色黒色粒を少量含む。内面は灰白外面は灰白～褐灰色を呈する。291 は皿。口径 9.4 器高 1.8㎝を測る。体部は直線的に強く開き、外底は丸みが残る。内外面に回転ナデを施し、

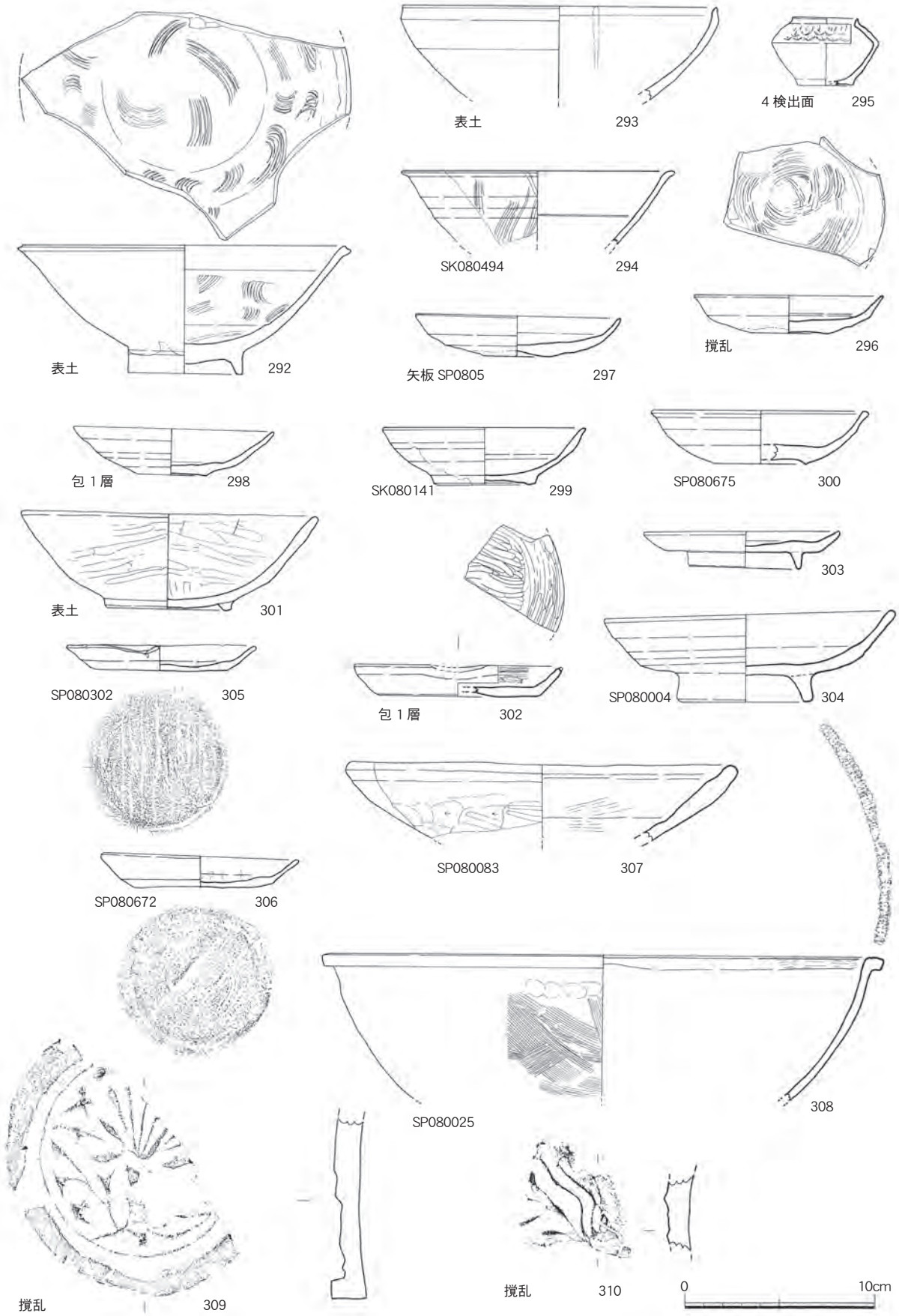
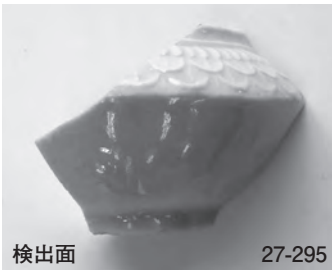
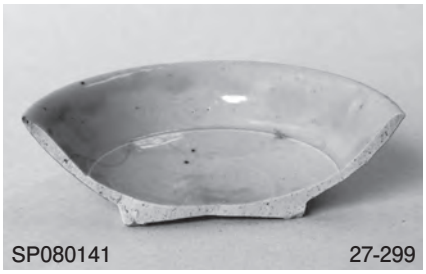
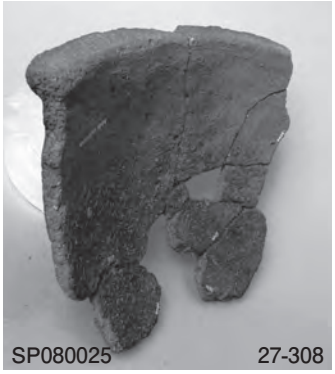


Fig.27　柱穴その他の出土遺物実測図 -1（1/3）







Ph.51　柱穴その他の出土遺物・1

外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒・雲母を少量多く含む。他にアサリ・カキ等の貝殻がまとまって出土した。時期は 12 世紀初頭を示す。

（２）柱穴その他の出土遺物（Fig.27）

SP080302（Fig.24）　２面目東部の O6 グリッドで検出される。円形で径 42 深さ 18㎝を測る。

出土遺物　305 は土師器皿。口径 10.0 器高 1.3㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ、外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土は精良で内外面浅黄橙色を呈する。

SP080672（Fig.24）　４面目東部の B2 グリッドで検出される。円形で径 53 深さ 38㎝を測る。

出土遺物　306 は土師器皿。口径 10.4 器高 1.8㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ、外底は回転ヘラ切り後板圧痕が残る。胎土は微細な白色粒・雲母を少量多く含む。

292 ～ 299 は白磁。292 は碗。口径 14.4 器高 6.6㎝を測り直口口縁で口唇が窪む。細く高い高台内から口縁下まで回転ナデを施し内面に櫛歯描きの花文を施す。胎土は灰白色で精良、明緑灰白の半濁釉を内面から高台脇まで掛ける。293 は碗。口径 14.6㎝を測り直口口縁で口唇外面を面取りする。内面に白堆線を施す。胎土は灰白色で精良、灰白の透明釉を内外面に掛ける。294 は５面 SK-494 出土。直口口縁の碗で口径 14.4㎝。口縁は直線的に強く開き口唇上面を平坦に切る。外面に櫛描花文を、内面中位に圏線１条を施す。胎土は灰白色で精良、灰白色の透明釉を内外面に掛ける。295 は袋合子。口径 3.4 器高 3.5㎝を測る。体部は稜を成し外面上位に型押しの花弁文を陽刻する。胎土は灰白色で精良、明緑灰色の不透明釉を口縁内面から底部際まで掛ける外底は掻き取る。296 は平皿。口径 12.0 器高 2.0㎝を測る。体部は中位で屈曲して口縁が直線的に強く開く。外面中位まで回転ケズリを施し、内面見込に櫛描花文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を含み、淡明青灰色の透明釉を内面から底部際まで掛ける。297 は矢板部 SP-005 出土。同系の平皿で口径 10.8 器高 2.8㎝を測る。外面中位まで回転ケズリを施す。胎土は灰白色で精良、灰白色の透明釉を内面から底部脇まで掛ける。298 は平皿。口径 10.4 器高 2.5㎝を測る。口縁が直線的に強く開き、外面口縁下まで回転ケズリを施す。胎土は灰白色で微細な

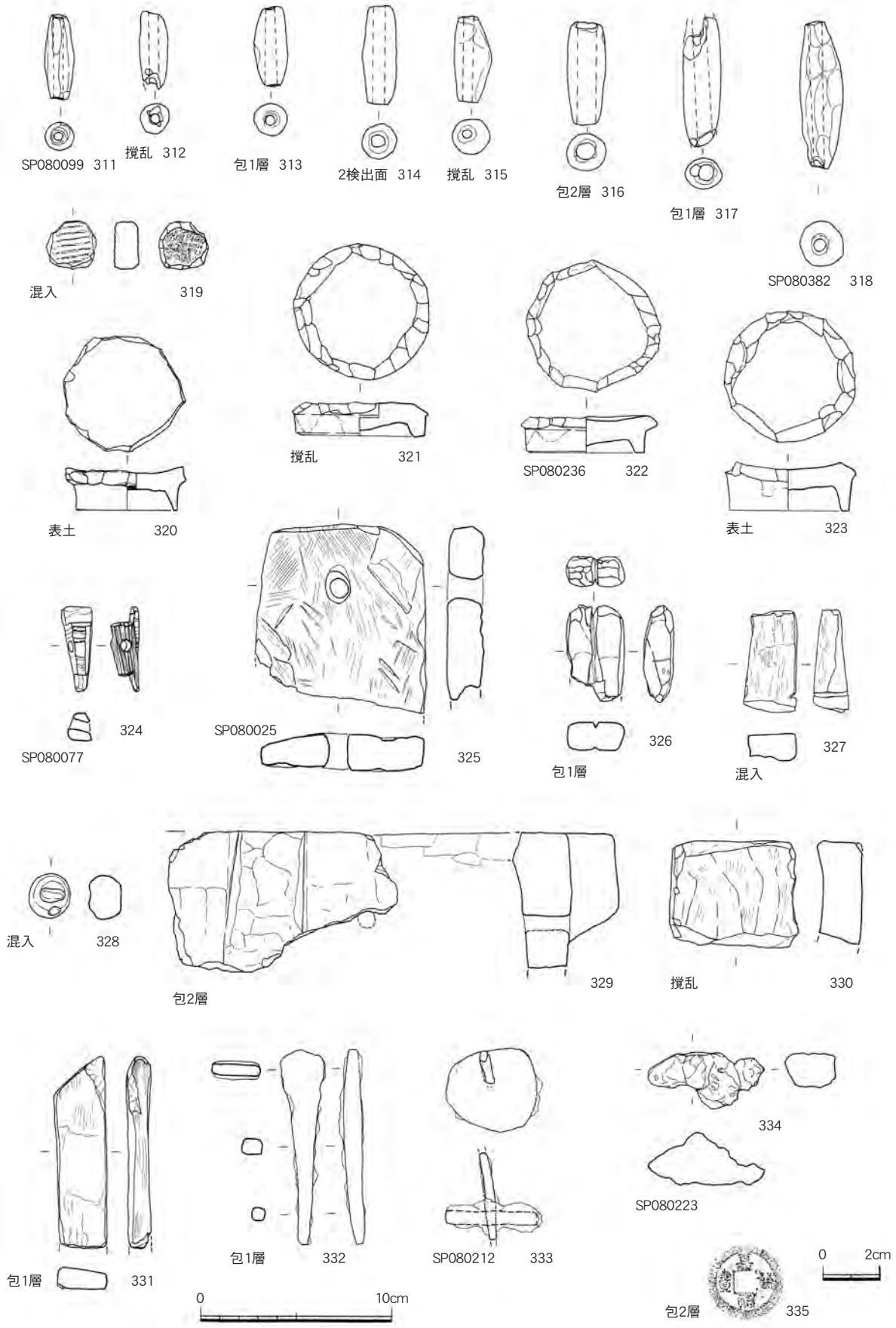
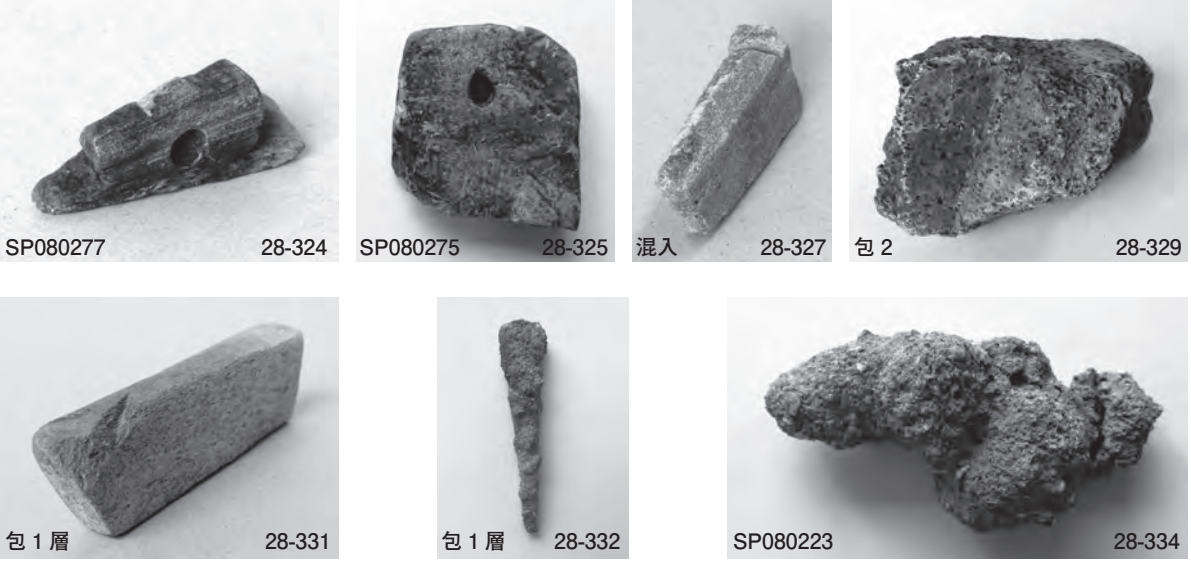


Fig.28　柱穴その他の出土遺物実測図 -2（1/3・1/2）

黒色粒を多く含み、灰白色の透明釉を内面から底部際まで掛ける。299 は 1 面 SP-141 出土。高台皿で口径 10.4 器高 3.0㎝を測る。高台内面から口縁下まで回転ケズリを施す。胎土は灰白色で精良、灰白色の透明釉を内面から高台際まで雑に掛ける。300 は 4 面 SP-672 出土。平皿で外底を回転ケズリで碁笥底とする。口径 11.4 器高 2.8㎝を測る。高台内面から口縁下まで回転ケズリを施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒を若干含み、灰白色の透明釉を内面から高台際まで雑に掛ける。301 は瓦器碗。口径 15.6 器高 5.0㎝を測る。高台は径 6.6㎝と広く、断面台形で低い。体部は緩く屈曲して開き稜は不明瞭。内外面に粗いヨコケンマを施す。高台部周りは回転ナデを施す。胎土は微細な白色粒・雲母を少量含む。内面灰色外面灰白～灰色を呈する。302 は瓦器皿。口径 10.9 器高 1.7㎝を測る。体部は直線的に開き口縁を抉って片口を造る。内外面に回転ナデを施し、外底は回転ヘラ切り後ナデ。内面口縁にヨコ内底にタテケンマを施す。胎土は 2㎜以下の黒色粒を多く微細な白色粒・雲母を少量含み異質である。内面は白～灰色外面灰黄～暗灰色を呈する。303 ～ 306 は土師器。303 は高台皿で口径 10.2 器高 5.8㎝を測る。高台は細く高い。口縁内外に回転ナデ内底をタテにナデ外底は回転ヘラ切り痕が残る。胎土は 4㎜以下の赤色粒を少量微細な雲母を多く含み、内外面は橙～鈍い橙色を呈する。304 は 1 面 SP-004 出土。高台坏で口径 15.1 器高 4.9㎝を測る。高台は径 6.3 高さ 1.6㎝と細く高い。体部は丸底坏で、屈曲して口縁が直線的に強く開く。内外に回転ナデ内底をタテにナデ外底は回転ヘラ切り痕が残る。胎土は 4㎜以下の砂粒を多く含み、内外面は浅黄橙色を呈する。307 は 1 面 SP-083 出土。土師質鉢で口径 19.6㎝を測り、口縁が直線的に強く開き口唇は肥厚し内側を窪める。口縁内外はヨコナデ外面下はヘラケズリ後緩いヨコケンマ内面は不定方向のハケ後ナデる。内外面は鈍い黄～黒褐色を呈する。外面に煤が付着し調理に用いている。308 は 1 面 SP-025 出土の土鍋。口径 58.1㎝を測り、深い器形で短い L 字形の口縁上面に縄目圧痕を施す。体部外面に細かなナナメハケ、内面にヨコハケ後ヨコナデを施し、中位以下は器壁が剥離する。胎土は 9㎜以下の白色粒を多量に

Ph.52　2 面紡錘車出土状況（南から）



Ph.53　柱穴その他の出土遺物

籾殻と微細な雲母を少量含む。内面は鈍い褐色外面は黒褐色を呈する。外面下位に煤が付着する。309・310 は中国系花卉文軒丸瓦。309 は径 14.2 厚 1.8 を測る。胎土は灰白色で白色黒色粒を若干含み、外面は暗灰色内面は灰色を呈する。310 は瓦当の小片。胎土は灰白色で白色黒色粒を少量含み、外面は灰色内面は灰白色を呈する。311 ～ 318 は管状土錘。全てナデ調整。311 は 1 面 SP-099 出土。4.5 × 1.5㎝孔径 5.4㎜ 8.7g を測る。312 は 4.1 × 1.5㎝孔径 5.0㎜ 7.4g を測る。313 は 4.2 × 1.8㎝孔径 5.3㎜ 11.77g を測る。314 は 5.2 × 1.8㎝孔径 6.0㎜ 15.6g を測る。315 は 4.5 × 2.0㎝孔径 5.0㎜ 7.46g を測る。316 は 5.4 × 2.0㎝孔径 10.0㎜ 16.5g を測る。317 は 6.8 × 2.0㎝孔径 7.5㎜を測る。318 は 3 面 SP-382 出土。7.8 × 2.3㎝孔径 7.0㎜を測る。319 ～ 323 は瓦玉。319 は陶器甕片を転用。2.5 × 2.6 × 1.3㎝ 10.5g を測る。外周を敲打と磨りで円形に整形する。320 は白磁碗底部の転用。6.0 × 6.3 × 2.1㎝ 73.4g を測る。高台に沿って敲打し円形に整形する。321 も白磁碗底部の転用。7.0 × 7.0 × 1.8㎝ 87.3g を測る。高台に沿って敲打し断面亀甲状に整形する。322 は 2 面 SP-236 出土。白磁碗底部の転用で 6.0 × 7.0 × 1.8㎝ 97.24g を測る。高台に沿って敲打し円形に整形する。323 は白磁碗底部の転用。6.9 × 6.9 × 2.6㎝ 105.7g を測る。高台に沿って敲打し円形に整形する。324 ～ 330 は滑石製品。324 は 1 面 SP-077 出土。石鍋の鍔部分を転用した灯心押さえで 4.4 × 1.69 × 1.5㎝ 11.1g を測る。取手中央に径 5㎜の穿孔を施す。全面ケズリで整形する。325 は 1 面 SP-025 出土の温石。全面ケズリと磨りで隅丸方形に整形し、幅 8.9 厚 1.9㎝を測り中央上位に径 1.0㎝の穿孔を施し孔の上方が擦れる。326 は有溝石錘。5.2 × 3.1 × 1.6㎝ 35.5g を測る。全面ケズリで整形する。329 は 7.9 × 11.9㎝のⅠ類石鍋片。口径 29.2㎝に復原され 6.5 × 4.0 × 2.3㎝の方柱状の取手が削り出される。転用の素材として整形され取手中央に径 8㎜の穿孔が施される。330 は 5.6 × 6.7 × 2.3㎝の方形の石鍋片で転用の素材として整形されている。327 は碇石の雛形残片で、幅 2.8 厚× 1.8㎝の偏平な裁頭角錐状に整形され側面に縄掛けの溝を刻む。花崗岩製。328 は緑色片岩製の石球。2.3 × 2.1 × 1.7㎝ 11.95g を測る。全面磨りで整形し上面に窪みをつける。331 は灰色片岩製の砥石。幅 2.8 厚 .3㎝を測る。上面を斜めに整形し上下両面と両側面を砥面とする。332 は斧剪型の鉄製品で、10.1 × 2.3 × 0.9㎝を測る。断面は先端も基部も方形に整形される。333 は鉄製紡錘車で錘は径 4.3 厚 0.7㎝を測り、径 5㎜の鉄製紡茎が残存する。334 は 1 面 SP-223 出土の流出滓で 6.0 × 2.8 × 1.8㎝を下面に砂粒が付着 335 は「嘉祐通寶」の宋銭。径 2.7㎝を測る。

4）古代の調査

8 世紀から 10 世紀を中心とした時期で、越州窯系青磁・新羅土器・緑釉陶器・灰釉陶器・都城系土師器・瓦・製塩土器・鋳造関係遺物・墨書土器・硯等、官衙を示唆する遺物が出土する。

検出した主な遺構は土坑 39 基・溝 3 条で、風成層 b 層下の第 3 面を中心に、第 2 面から最下面の第 5 面まで検出される。遺構全体の約 36% の量を占めており、中世を中世（1)・(2）期に分ければ、最大の遺構数である。遺構は全面に広がっているが中央部に集中する傾向にある。土坑は廃棄土坑が中心で、中世（2）の様な大型な遺構は少ない。本調査では該期の井戸も少なく、生活の中心域からははずれているようである。溝は、3･5 面目の調査区東部で幅 3m 程の大溝が東西方向に検出される。柱穴は径 50㎝前後のものが多く中央部を中心に多数検出される。

遺物は金属鋳造関係の遺物が注目される。8 世紀後半～ 9 世紀初頭の遺構から金属用坩堝（取瓶）を 18 基遺構から、鉄滓を 6 基の遺構から検出し、そのうち 3 基はセットで出土する。

（1）土坑

遺構の大部分を土坑が占め 3 面を中心に 2 面～ 5 面目の調査区全面に展開し、39 基が検出されている。大部分は廃棄用の土坑である。

SK080214（Fig.29　Ph.54・55）　2 面目中央部 A6 グリッドに位置する。平面は楕円形で、1.1 × 0.74m を測り、深さ 24㎝で断面は逆台形で、上面に多くの遺物が堆積する。

出土遺物（Fig.30　Ph.56）　336・337 は須恵器。336 は大型の高台坏で底径 9.8㎝を測る。高台脇が緩い稜を成し回転ヘラケズリを、内面は回転ナデ後内底を不定方向にナデる。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な黒色粒を多く含み、内外面は灰色を呈する。337 は坏で口径 13.2 器高 4.2㎝を測る。口縁は直線的に開き、体部内外面は回転ナデ、内面口縁下に沈線を 2 条施し内底は回転ナデ後不定方向にナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含み、内外面は灰オリーブ～灰色を呈する。338 ～ 352 は土師器。338 は都城系の坏で、口唇内面に沈線を施す。内外面は回転ナデ後緩いヨコケンマを施す。胎土は微細な白色粒黒色粒・雲母を含み、内外面は橙色を呈する 339 ～ 342 は坏。339 は口径 15.0 器高 3.5㎝を測る。口縁は直線的に開き、体部内外面は回転ナデ後粗い回転ヘラナデを施し、外面中位に沈線を 3 条施す。外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内外面は明赤褐色を呈する。340 は口径

Ph.54　SK080214 遺物出土状況（北から）

Ph.55　SK080214 遺物出土状況（東から）

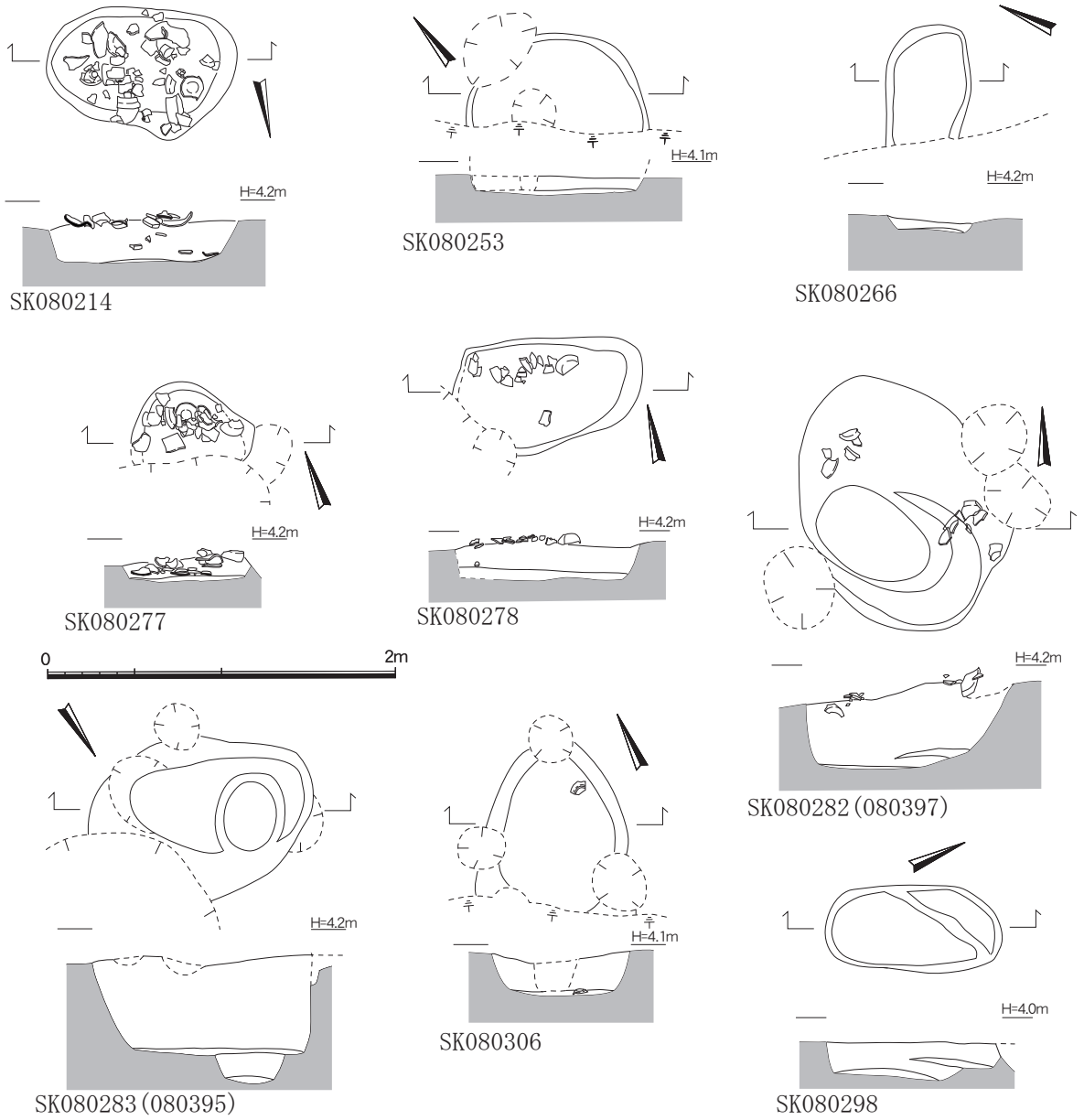


Fig.29　SK080214・080253・080266・080277・080278・080282・080283・080298・080306実測図(1/40)

13.7 器高 2.9㎝を測る。体部は緩く湾曲し外方に開き、体部外面は板ナデ様の粗い回転ナデ、内面は回転ヘラナデ後ケンマを施し外底は回転ヘラケズリ後ナデる。胎土は 1㎜以下の白色赤色粒微細な雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。341 は口径 12.9 器高 3.3㎝を測る。体部は緩く湾曲し外方に強く開き、体部内外面は回転ヘラナデ、外底は回転ヘラケズリ後ナデる。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。342 は口径 13.5 器高 3.1㎝を測る。体部は直線的に強く開き、体部内外面は板ナデ様の粗い回転ナデ後外面下位は回転ヘラケズリで稜を成す。内面は緩いケンマを施し、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は 2㎜以下の白色赤色粒微細な雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。343・344 は高台坏。343 は底部。高台径 8.7㎝で，体部は高台際から立ち上がる。高台周りは回転ナデ、内面は回転ナデ後緩いケンマを施す。胎土は微細な白色赤色黒色粒・雲母を多く含み、内面は橙色外面は黄灰色を呈する。344 は口径 17.1 器高 7.3㎝を測る。高い

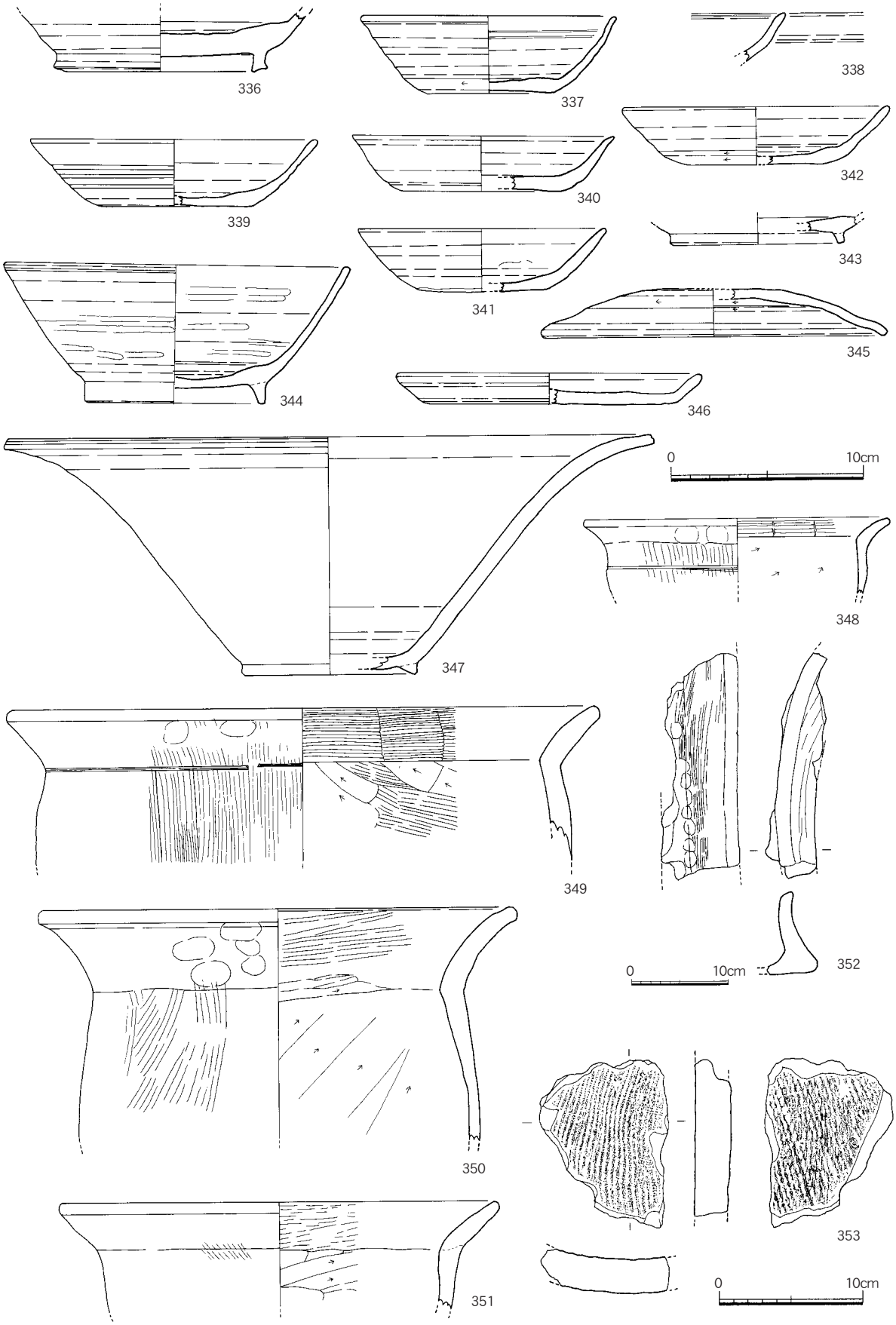
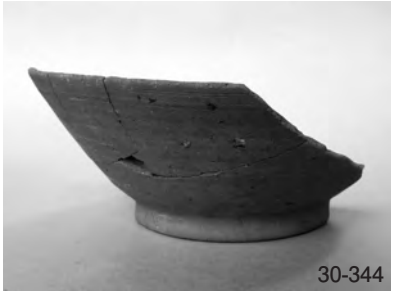
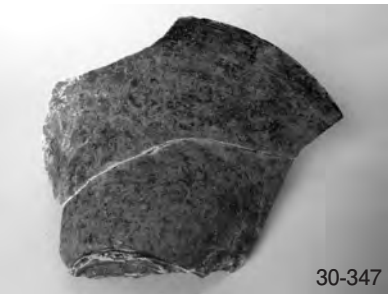


Fig.30　SK080214 出土遺物実測図（1/3・1/4・1/6）





Ph.56　SK080214 出土遺物

高台脇から体部が直線的に開き、外面口縁下に沈線を 1 条施す。内外面は回転ナデ後粗いヨコケンマ、高台周りは回転ケズリ後回転ナデを施す。胎土は 3㎜以下の白色赤色粒微細な雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。345 は坏蓋。口径 17.5 器高 2.5㎝を測る。口唇の返しは名残程度で、口縁は緩く湾曲する。天井から体部中位までは回転ヘラケズリで境は稜を成す。口縁外面は回転ナデ、内面は緩いヨコケンマを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。346 は皿。口径 15.5 器高 1.65㎝を測る。体部は強く開き、口縁内外は回転ナデ、内面は緩いヨコケンマを施し内底は不定方向にナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は 1㎜以下の白色黒色粒微細な雲母を含み、内外面は橙色を呈する。437 は鉢。口径 33.5 器高 12.6㎝を測る。径 18.6㎝の低い高台脇から盃状に体部が直線的に開き、上位から緩く外反する。口唇に凹線を施す。体部外面はカキメ後粗い回転ナデ、内面は回転板ナデ後粗い回転ナデ、口縁はケンマを施す。内面中位まで炭化物が付着する。胎土は微細な白色黒色粒・雲母を少量含み、内面は黄橙～暗褐色外面は鈍い黄褐色を呈する。348 ～ 351 は甕。348 は口径 15.4㎝を測る。口縁外面下に沈線を 1 条、内面は屈曲して稜を成す。粗いハケメを口縁内面はヨコ外面口縁以下にはタテに施し、内外を緩くナデる。内面体部はヘラケズリ後ヘラナデを施す。口縁下に指頭圧痕が残る。胎土は 4㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内外面は橙～明黄褐色を呈する。349 は口径 30.4㎝を測る。口縁外面下に沈線を 1 条、内面は屈曲して稜を成す。ハケメを口縁内面はヨコ、外面口縁以下にはタテに施し、口縁下に指頭圧痕が残る。内面体部はナナメハケ後ヘラケズリを施す。胎土は 3㎜以下の白色赤色粒微細な雲母を多く含み、内面は鈍い黄橙色外面は橙色を呈する。350 は口径 24.6㎝を測る。口縁がやや長く、内面は屈曲して稜を成す。ハケメを口縁内面はヨコ、外面口縁以下には粗くタテに施し、口縁内外を緩くナデる。口縁下に指頭圧痕が残る。内面体部はナナメヘラケズリを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な黒色赤色粒・雲母を多く含み、内面は灰黄褐～橙色外面は鈍い橙～橙色を呈する。口縁外面に炭化物が付着する。351 は口径 22.4㎝を測る。胴が張らず、口縁内面は屈曲して稜を成す。ハケメを口縁内面はヨコ、外面口縁以下にはナナメに施し、口縁内外を緩くナデる。内面体部はナナメヘラケズリを施す。外面は器表が剥離し内面に炭化物が付着する。胎土は 4㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内外面は暗赤灰～橙色を呈する。352 は大型の移動式竈の焚口部破片。残存長で 23.4㎝を測り高さ 6.5㎝の庇が巡る。外面はハケ後緩いナデ、内面はナデを施す。庇内面に煤が付着する。胎土は 5㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内外面は鈍い赤褐～橙色を呈する。353 は平瓦片。厚 3.2㎝を測る。凸面にナナメ縄目タタキ、凹面は布目圧痕に粗いタテハケを施す。胎土は 5㎜以下の白色黒色粒を多く含み、凹面は鈍い黄橙色凸面は灰白色を呈する。時期は 8 世紀後半を示す。

SK080253（Fig.29）　2 面目中央部 Z10 グリッドに位置する。壁際で検出され半分は調査区外

に延びる。平面は円形で径 1.04m を測り、深さ 10㎝と浅く底面は平坦である。

出土遺物（Fig.31　Ph.59）　354 は越州窯系青磁水注。口径 11.6㎝を測る。口縁はほぼ垂直に延び端部が緩く外反する。内外面は回転ナデで、肩部に径 2.6㎝の注口の剥離痕が残る。胎土は鈍い橙色で微細な黒色粒を少量含み、内外面に黄褐色の透明釉を掛ける。355・356 は玄界灘式の焼塩壺。355 は口縁片で端部が内反する。外面は指頭圧とナデ、内面に目の細かい布目圧痕が残る。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。356 は胴下部で、径 5.5㎝厚 1.5㎝と厚い。外面は指頭圧とナデ、内面に目の粗い布目圧痕が残る。胎土は 5㎜以下の白色黒色粒を多く含み、内外面は橙色を呈する。時期は 8 世紀後半～ 9 世紀前半を示す。

SK080266（Fig.29）　2 面目中央部 O14 グリッドに位置する小型の土坑で、壁際で検出され半分は調査区外にある。平面は方円形で、0.64+ α × 0.5m を測り、深さ 8㎝で浅く底面は平坦である。断面は逆台形で、上面に多くの遺物が堆積する。

出土遺物（Fig.30）　357 は土師器坏蓋。大型の蓋で口径 24.8㎝を測る。口縁は短く屈曲して稜を成し返しは無い。口縁内外は回転ナデ、体部内外は回転ケズリ後粗いヨコケンマを施す。胎土は 1㎜以下の白色を少量微細な雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。358 は須恵器坏蓋。浅い器体で直口口縁を成す。口径 19.8㎝を測る。口縁外面に浅い沈線を 1 条施す。内外面は回転ナデを施す。胎土は 3㎜以下の白色微細な黒色粒を雲母を多く含み、内面は灰白外面は灰白～褐灰色を呈する。359・360 は玄界灘式の焼塩壺。359 は口縁片で端部が面取りされ内面に突出する。外面は指頭圧とナデ、内面に目の細かい布目圧痕が残る。胎土は 3㎜以下の白色粒多く微細な雲母を少量含み、内外面は橙色を呈する。360 は胴部で、径 6.7㎝厚 0.7㎝と薄い。外面は指頭圧とナデ、内面に目の細かな布目圧痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。時期は 8 世紀後半～ 9 世紀初頭を示す。

SK080277（Fig.29　Ph.58）　2 面目中央部 A6 グリッドに位置する小型の土坑で SK-214・282 に切られる。平面は不整形で、0.9 × 0.5m を測り、深さ 18㎝で浅く底面は平坦である。断面は逆台形で、遺物が多く出土する。

出土遺物（Fig.30　Ph.59）　361・362 は長門系緑釉。361 は平皿。口径 12.6 器高 2.1㎝を測る。平高台から体部が強く外反し口縁端部は小さく屈曲して端部が垂下する。全面に回転ナデを施し内面は緩いヨコケンマを施す。胎土は灰白色で 3㎜以下の白色を少量含み、内外面に浅黄橙色の薄い透明釉を掛けるが剥落が著しい。362 には埦口縁部小片。口縁は直線的に開き口唇内面をナナメに面取りし小さな沈線を 1 条施す。内外面に回転ナデ後緩いヨコケンマを施す。胎土は浅黄橙色で微細な黒色粒を若干含み、内外面に淡黄色の薄い透明釉を掛ける。363・364 は須恵器。363 は坏蓋で直口口縁を成し、返しの名残がある。口径 13.8㎝を測る。内外面に回転ナデを施す。胎土は 2㎜以下の白色黒色粒を少量含み、内外面は灰白～黄灰色を呈する。364 は甕。頸部が屈曲せず、なだらかに外反する口縁に連なる。口縁外面は平行タタキ後内外に回転ナデを施し、体

Ph.57　SK080277 遺物出土状況（北から）

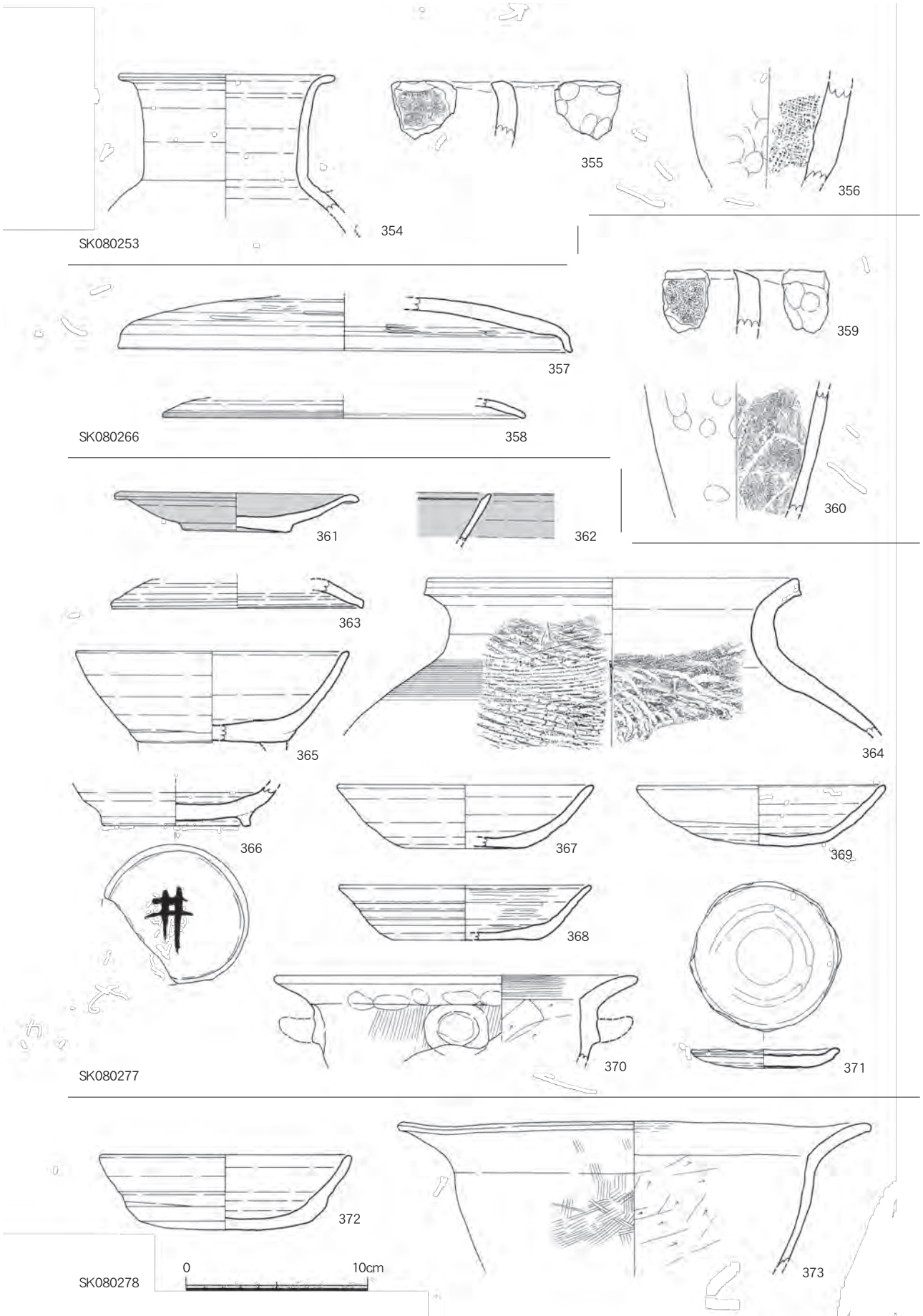
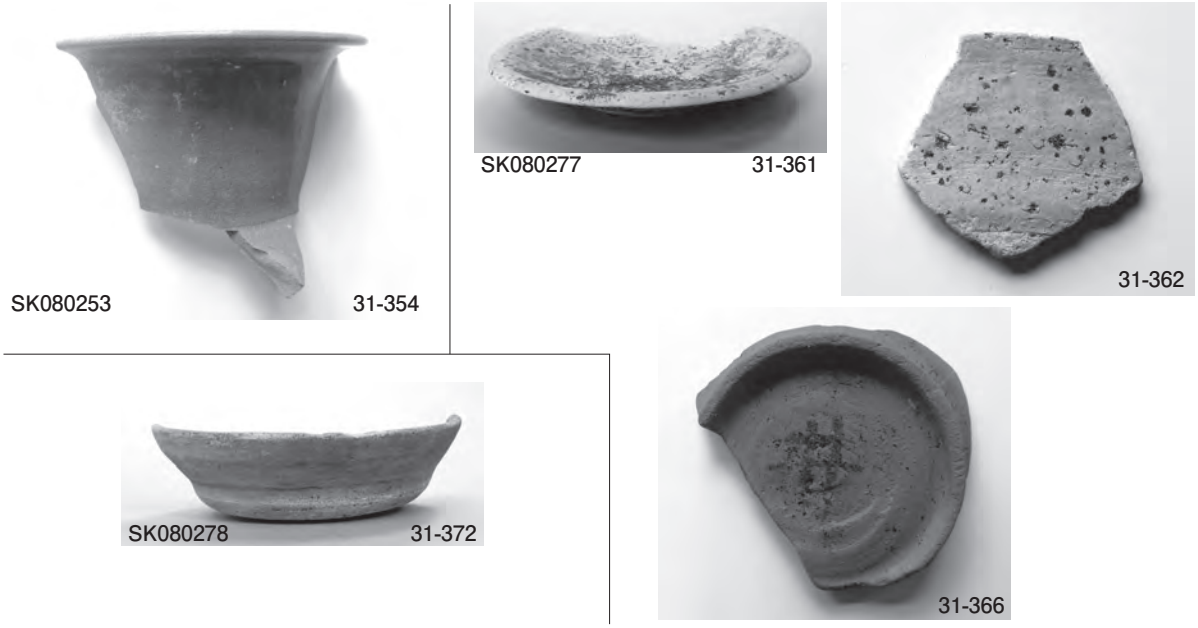


Fig.31　SK080253・080266・080277・080278 出土遺物実測図（1/3）

部外面は木目直交平行タタキ後カキメを施す。内面には同心円当具痕が残る。胎土は 3㎜以下の白色黒色粒微細な雲母を多く含み、内面は橙色外面は鈍い橙色を呈する。焼成は甘い。365 ～ 371 は土師器。365・366 は高台坏。365 は高台を欠失する。口縁は直線的に開き口径 14.8㎝を測る。内外面に回転ナデを施し、厚い内底は不定方向のナデ、外底は回転ヘラ切りを施す。胎土は 4㎜以下の白色赤色粒を多く含み、内面は明赤褐色外面は橙色を呈する。366 は底部。高台径 8.0㎝を測る。外面は高台上が稜を成し、不定方向のナデ、内外面に回転ナデ、内底に不定方向のナデを施す。高台内には「井」の墨書がある。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含み、内外面は明赤褐色を呈する。367 ～ 369 は坏。367 は口径 14.0 器高 3.5㎝を測る。体部はやや丸みを帯びて強く開き、体部内外面は回転ナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内面は浅黄橙から橙色外面は橙色を呈する。368 は口径 13.8 器高 3.0㎝を測る。体部はやや外反して強く開き、体部内外面は回転ナデ後内面は回転ヘラナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。外面中位に沈線 3 条を施す。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。369 は丸底で口径 13.4 器高 3.4㎝を測る。底部からなだらかに連なって体部がやや丸みを帯びて強く開く。体部内外面は回転ナデ後内面に回転ヘラナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は 5㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。370 は把手付甕で、把手部分を欠失する。口径 19.5㎝を測り胴が張らず、口縁内面は屈曲して稜を成す。ハケメを口縁内面はヨコ、外面口縁以下にはタテに施し、口縁内外を緩くナデる。外面には指頭圧痕が残る。内面体部はナナメヘラケズリを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な黒色粒・雲母を多く含み、内面は橙色外面は鈍い

Ph.58　SK080278 遺物出土状況（北から）



Ph.59　SK080253・080277・080278 出土遺物

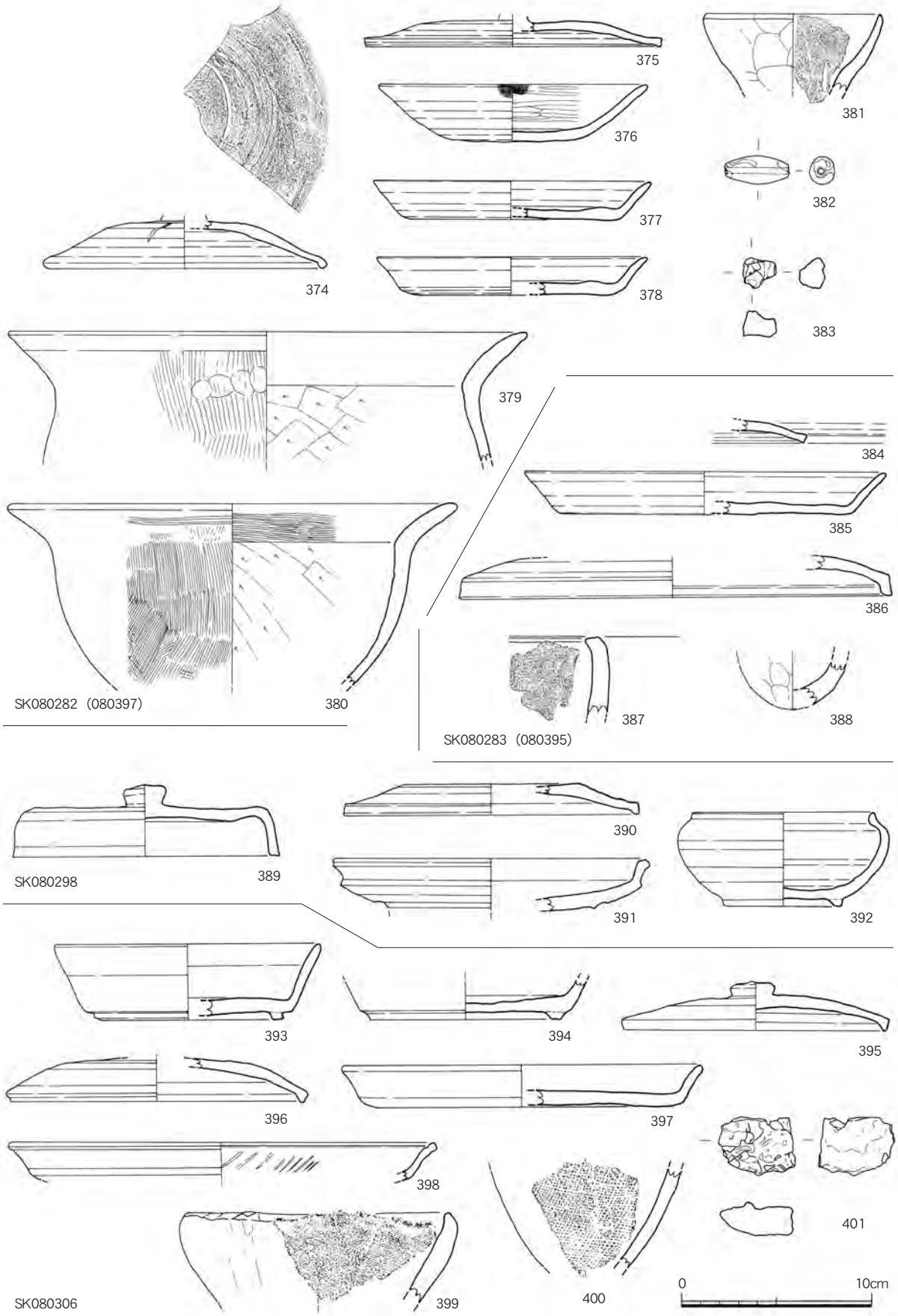


Fig.32　SK080282・080283・080298・080306 出土遺物実測図（1/3）

赤褐色を呈する。371 は坏の底部を転用した土器片円盤。径 8.3 器高 1.2㎝を測る。外周を打ち欠きで円形に整形する。時期は 9 世紀初頭を示す。

SK080278（Fig.29）　2 面目中央部 A6 グリッドに位置する小型の土坑で、SK-277 に切られる。平面は隅丸台形で、1.08 × 0.68m を測り、深さ 26㎝で浅く断面は逆台形で、上面に多くの遺物が堆積する。

出土遺物（Fig.30　Ph.59）　372 は関東系の須恵器坏。口径 13.6 器高 4.1㎝を測る。外底は緩い丸底で体部との境は稜を成し、体部が直線的に開き中位が凹線状に窪む。口縁内外面は回転ナデ、外面中位はケズリ様の回転板ナデ、以下に回転ヘラケズリを施し、内面中位以下は回転ナデ後粗いヘラナデを施す。胎土は微細な白色粒・雲母を若干含み、内面は灰白色外面は灰白～黄灰色を呈する。焼成は甘い。373 は土師器甕。口径 25.5㎝を測る。胴が張らず、口縁は長めで内面は屈曲して稜を成す。ハケメを口縁内面はヨコ、外面口縁以下にはタテ・ナナメに施し、口縁内外をナデる。内面体部はナナメヘラケズリを施す。外面は煤が付着する。胎土は 2㎜以下の白色粒微細な雲母を多く含み、内外面は暗赤褐色を呈する。他に銅坩堝が出土する。時期は 9 世紀初頭を示す。

SK080282（－ 397）（Fig.29）　2 面目中央部 A8 グリッドに位置する土坑で、SK-277・－ 283 を切る。－ 397 は同一遺構である。平面は円形で、1.38 × 1.0m を測り、深さ 48㎝で断面は船底型。上面に遺物が堆積する。

出土遺物（Fig.32　Ph.60）　374・375 は須恵器坏蓋。374 は口径 14.5 器高 2.5㎝を測る。口縁の返しは短く口縁内外は回転ナデ、外面天井から体部中位までは回転ケズリ後天井部は回転ナデを加えヘラ記号がある。内面はナデる。胎土は微細な白色粒を若干含み、内面は暗灰色外面は灰～暗灰色を呈する。口縁内外は灰被りとなる。375 は口径 15.5 器高 1.4㎝と薄い器形で、口唇は窪ませ返しは痕跡程度で、体部内外面は回転ナデ、外面天井～体部中位まで回転ヘラケズリ後天井は回転ナデを施す。内面上位はナデを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を若干含み、内外面は灰色を呈する。口縁内外は灰被りとなる。376 ～ 381 は土師器。376 は坏。口径 14.0 器高 3.0㎝を測る。体部は直線的に強く開き、体部内外面に回転ナデ後、内面は粗いヨコケンマ、内底はナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒微細な雲母を少量含み、内外面は橙～鈍い橙色を呈する。377・378 は皿。377 は口径 14.5 器高 2.1㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ、内底はナデ後粗いヘラナデ、外底は回転ヘラケズリ後粗いナデ・ヘラナデを施す。胎土は微細な白色粒・雲母を若干含み、内面は灰白色外面は黄灰色を呈する。378 は口径 14.0 器高 2.0㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ、内底はナデ後細かなヘラナデ、外底は回転ヘラケズリ後粗いナデ・ヘラナデを施す。胎土は微細な白色粒・雲母を若干含み、内面は灰白色外面は褐灰色を呈する。379・380 は甕。379 は口径 27.2㎝を測る。口縁内面は屈曲して稜を成し、内外はヨコナデ、外面口縁以下はタテハケを施し、頸部に指頭圧痕が残る。煤が付着する。内面体部はナナメヘラケズリを施す。胎土は 5㎜以下の白色粒を含み、内外面は鈍い橙色を呈する。380 は胴が張らず、浅い器形で内面は屈曲して稜を成す。細かなハケメを口縁内外面はヨコ、外面口縁以下にはタテに施し、口縁内外を緩くナデる。内面体部はナナメヘラケズリを施す。外面は煤が付着する。胎土は 1㎜以下の白色粒微細な雲母を少量含み、内外面は鈍い橙色を呈する。381 は円錐形の焼塩壺。口径 9.0㎝厚 0.6㎝と薄い。外面はケズリ後ナデ、内面下は稜を成し、上位はナナメヘラナデでヘラ当痕が残り以下はヨコナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量微細な雲母を若干含み、内外面は明赤褐色を呈する。

382は紡錘形の管状土錘。全面ナデで調整し3.4 × 1.5㎝孔径3.5㎜ 5.6gを測る。383は鉄滓小片で1.8 × 1.6 × 1.3㎝ 4.3gを測る。鈍い褐色を呈する。時期は9世紀初頭を示す。

SK080283（－395）（Fig.29）　2面目中央部A8グリッドに位置する土坑で、SK－282に切られる。－395は同一遺構である。平面は円形で、1.3 × 0.9mを測り、深さ52㎝で断面は逆台形。底面に径46深さ20㎝の小穴があり、大型建物の柱穴の可能性もある。

出土遺物（Fig.32　Ph.60）　384・385は須恵器。384は坏蓋片。薄い器形で、口唇は面取りし両端が膨らみ返しは無い。内外面を回転ナデ後、外面に粗いヘラナデを施す。胎土は2㎜以下の白色粒を少量含み、内外面は灰色を呈する。385は皿。口径18.8器高2.3㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ、内底はナデ、外底は回転ヘラケズリ後ナデを施す。胎土は2㎜以下の白色粒を少量・微細な赤色粒・雲母を若干含み、内外面は鈍い橙～灰白色を呈する。386～388は土師器。386は坏蓋。大型の蓋で口径22.8器高2.2㎝を測る。口縁は短く屈曲して稜を成し返しは無い。口縁内外は回転ナデ、体部内外は回転ナデ後粗いヨコケンマを施す。胎土は1㎜以下の白色を少量微細な雲母を多く含み、内外面は橙色を呈する。387・388は玄界灘式の焼塩壺。387は口縁片で端部が面取りされ内面に突出する。外面は指頭圧とナデ、内面に布目圧痕が残る。胎土は微細な白色粒・雲母を少量含み、内外面は鈍い黄橙色を呈する。388は丸底の底部で、径5.6㎝厚1.0㎝を測る。外面は指頭圧とナデ、内面は摩滅する。胎土は3㎜以下の白色粒を少量微細な赤色粒・雲母を若干含み、内面は浅黄橙色外面は鈍い黄橙色～灰褐色を呈する。時期は9世紀初頭を示す。

SK080298（Fig.29）　2面目西部A14グリッドに位置する小型の土坑で、平面は楕円形で、1.03 × 0.48mを測り、深さ20㎝で底面は平坦で二段掘りとなる。

出土遺物（Fig.32　Ph.60）　全て須恵器で、389は壺蓋。口径14.0器高3.8㎝を測る。口唇は平坦で口縁は2.6㎝ほぼ垂直に延び平坦な天井部部へと連なる。中央に径2.3㎝の宝珠摘みを設ける。口縁内外面を回転ナデ、外面天井に回転ヘラケズリ内面に不定方向ナデを施す。胎土は微細な白色

Ph.60　SK080282・080298・080306出土遺物

黒色粒を若干含み、内外面は灰色を呈する。390 は坏蓋。口縁の返しは低く、直線的な体部から稜を成して平坦な天井部に連なる。口径 15.6 器高 1.6㎝を測る。体部内外面に回転ナデ、外面天井に回転ヘラケズリ内面に不定方向ナデを施す。白色粒を若干含み、内面は青灰色外面は灰色を呈する。391 は高台付皿の体部の転用硯。口径 16.6 器高 2.6㎝を測る。口唇は平坦で外方に肥厚し口縁下で稜を成して屈曲し丸い底部に連なる。高台ははがれる。口縁内外面を回転ナデ、外底に回転ヘラケズリ内面に不定方向ナデを施し、内底は使用により鏡面状に研磨される。胎土は微細な白色粒を若干含み、内面は赤灰色外面は暗灰黄～赤灰色を呈する。392 は短頸壺。口径 9.6 器高 5.0㎝を測る。胴部が上位で強く張り低い高台を設ける。体部内外面に回転ナデ、高台内は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は灰色を呈する。時期は 8 世紀後半～末を示す。

SK080306（Fig.29）　2 面目中央部 O8 グリッドに位置する小型の土坑で、SK－306 に切られる。平面は楕円形で、残存で 0.98+ α × 0.78m を測り、深さ 20㎝で断面は逆台形で底面はやや窪む。

出土遺物（Fig.32　Ph.60）　393 ～ 397 は須恵器。393・394 は高台坏。393 は口径 14.0 器高 4.0㎝を測る。高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ、内底はナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒を少量含み、内外面は青灰色を呈する。394 は底部。高台径 10.4㎝を測る。高台は底部際から若干内側に設ける。体部内外面に回転ナデ、内底はナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色黒色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。395・396 は坏蓋。395 は口径 14.0 器高 2.5㎝を測る。口縁の返しは低く、直線的な体部からなだらかに天井部に連なる。中央に偏平な径 2.3㎝の宝珠摘みを設ける。口縁内外面に回転ナデ、外面体部中位から天井に回転ヘラケズリ内面に不定方向ナデを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内面は灰色外面は青灰～灰色を呈する。396 は口径 16.0 器高 2.2㎝を測る。口縁の返しは低く、直線的な体部からなだらかに天井部に連なる。口縁内外面に回転ナデ、外面体部中位から天井に回転ヘラケズリ内面に不定方向ナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。397 は大型の皿。口径 19.0 器高 2.2㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ、内底はナデ、外底は回転ヘラケズリ後ナデを施す。胎土は 4㎜以下の白色粒を少量み、内外面は灰白色を呈する。398 ～ 400 は土師器。398 は都城系の皿。口径 22.6 を測る。体部は稜を成して緩く外反し口縁は肥厚して内面に沈線を 1 条施す。体部内外は回転ナデ後ヨコヘラナデを施し、内面に斜めの暗文を施す。胎土は微細な白色を少量含み、内面は橙色外面は鈍い橙色を呈する。399・400 は焼塩壺。399 は円錐形で口径 14.6㎝厚 1.1㎝を測る。外面はヘラナデ、口縁は斜めに粗く面取りし、内面は布目圧痕が残る。玄界灘式との過渡的な形態を示す。胎土は 5㎜以下の白色粒を多く含み、内面は鈍い橙色外面は灰褐色を呈する。400 は玄界灘式の胴部下位片で径 10.1㎝を測る。外面は指頭圧とナデ、内面に粗い布目圧痕が残る。胎土は白色粒を少量含み、内外面は鈍い橙色を呈する。401 は埦形滓の小片で丸い底面に砂粒粘土が熔着する。時期は 8 世紀後半を示す。

Ph.61　SK080367（北から）

SK080361（Fig.33）　3 面目西部 A18 グリッドに位置する小型の土坑で、SK－360・444 に切られる。平面は円形で、残存で 0.92+ α × 0.90m

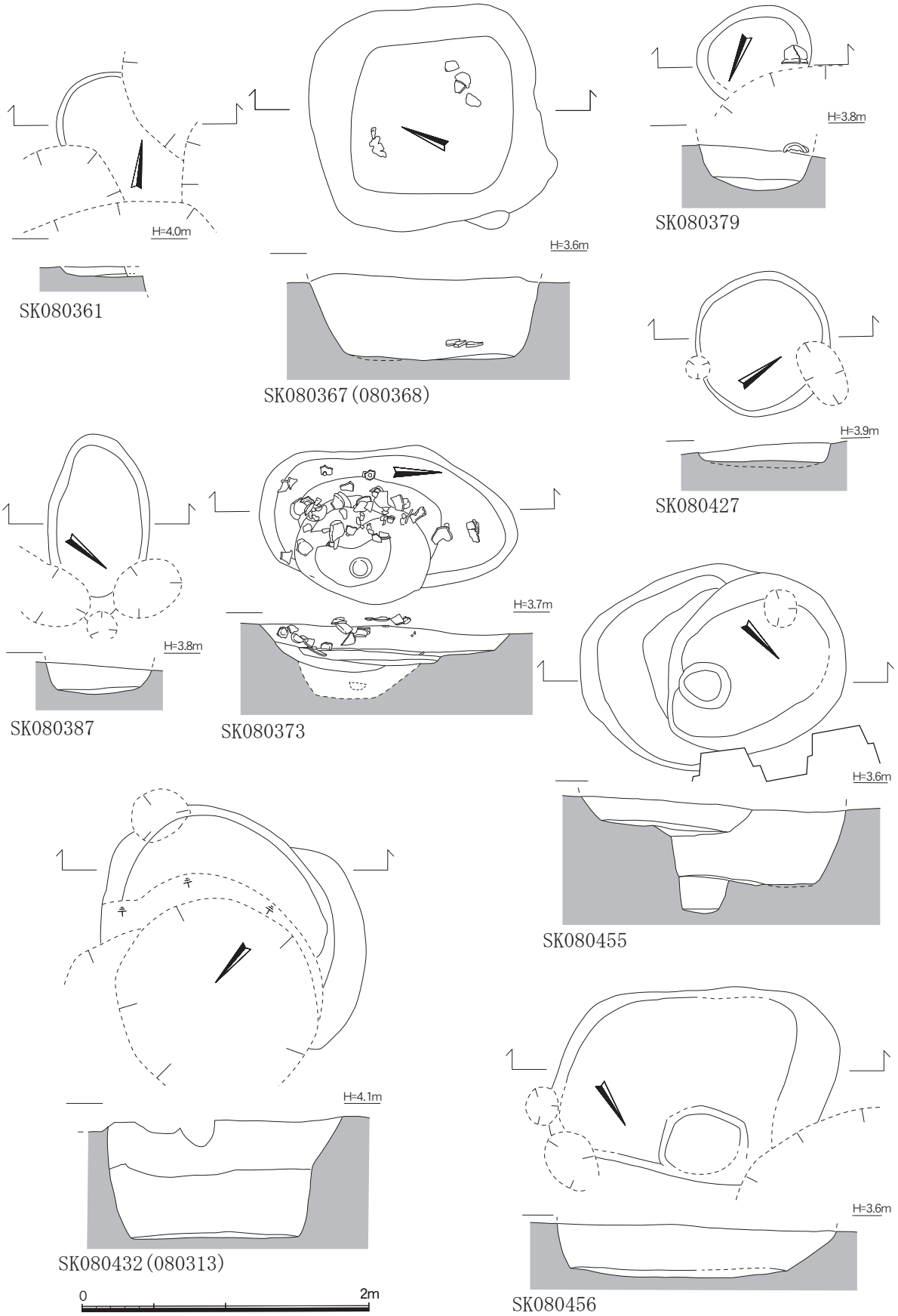


Fig.33　SK080361・080367・080373・080379・080387・080427・080432・080455・080456実測図(1/40)

を測り、深さ 8㎝浅く底面は平坦である。

出土遺物(Fig.34)　402 は須恵器坏蓋。口径 13.2㎝を測り、返しは低い。内外面は回転ナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰色を呈する。403 は玄界灘式の胴部下位片で厚 1.0㎝を測り底部側が薄い。外面は指頭圧とナデ、内面に粗い布目圧痕が残る。胎土は白色黒色粒を多く含み、内面は灰赤色外面は橙色を呈する。時期は 8 世紀後半を示す。

SK080367（-368）(Fig.33　Ph.61)　3 面目中央部 A14 グリッドに位置する土坑で、SK－344 に切られ－366 を切る。平面は隅丸方形で、1.6 × 1.57m を測り、深さ 56㎝で断面は逆台形を呈する。底面近くに遺物が集中する。

出土遺物（Fig.34）　404 は須恵器高台坏底部。高台径 7.6㎝を測る。高台は底部際から若干内側に設ける。体部内外面に回転ナデ、内底はナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒を少量含み、内外面は灰色を呈する。他に獣骨が出土する。時期は 8 世紀後半を示す。

SK080373（Fig.33　Ph.62）　3 面目中央部 A12 グリッドに位置する土坑で、平面は楕円形で、1.82 × 1.1m を測り、深さ 35㎝で断面は舟底形を呈し、遺物が多く出土する。

出土遺物（Fig.34・35　Ph.65）　405 ～ 426 は上層出土。405 ～ 420 は須恵器。405 ～ 409 は高台坏。405 は口径 12.0 器高 3.3㎝を測る。高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は灰色を呈する。406 は口径 16.6 器高 5.0㎝を測る大型で、高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は白色黒色粒を若干含み、内面は灰白色外面は明褐灰色を呈する。焼成はやや甘い。407 は口径 17.2 器高 5.6㎝を測る。高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は褐灰色を呈する。408 は口径 13.2 器高 3.4㎝を測る。高台は底部際から若干内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ外底～体部下位には回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色黒色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。409 は口径 12.6 器高 4.3㎝を測る。高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒微細な黒色粒を若干含み、内面は灰白色外面は灰色を呈する。410 は短頸壺の口縁部。口径 9.6㎝を測る。胴部が上位で強く張り、体部内外面に回転ナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。411

Ph.62　SK080373（西から）

Ph.63　SK080373（西から）下面

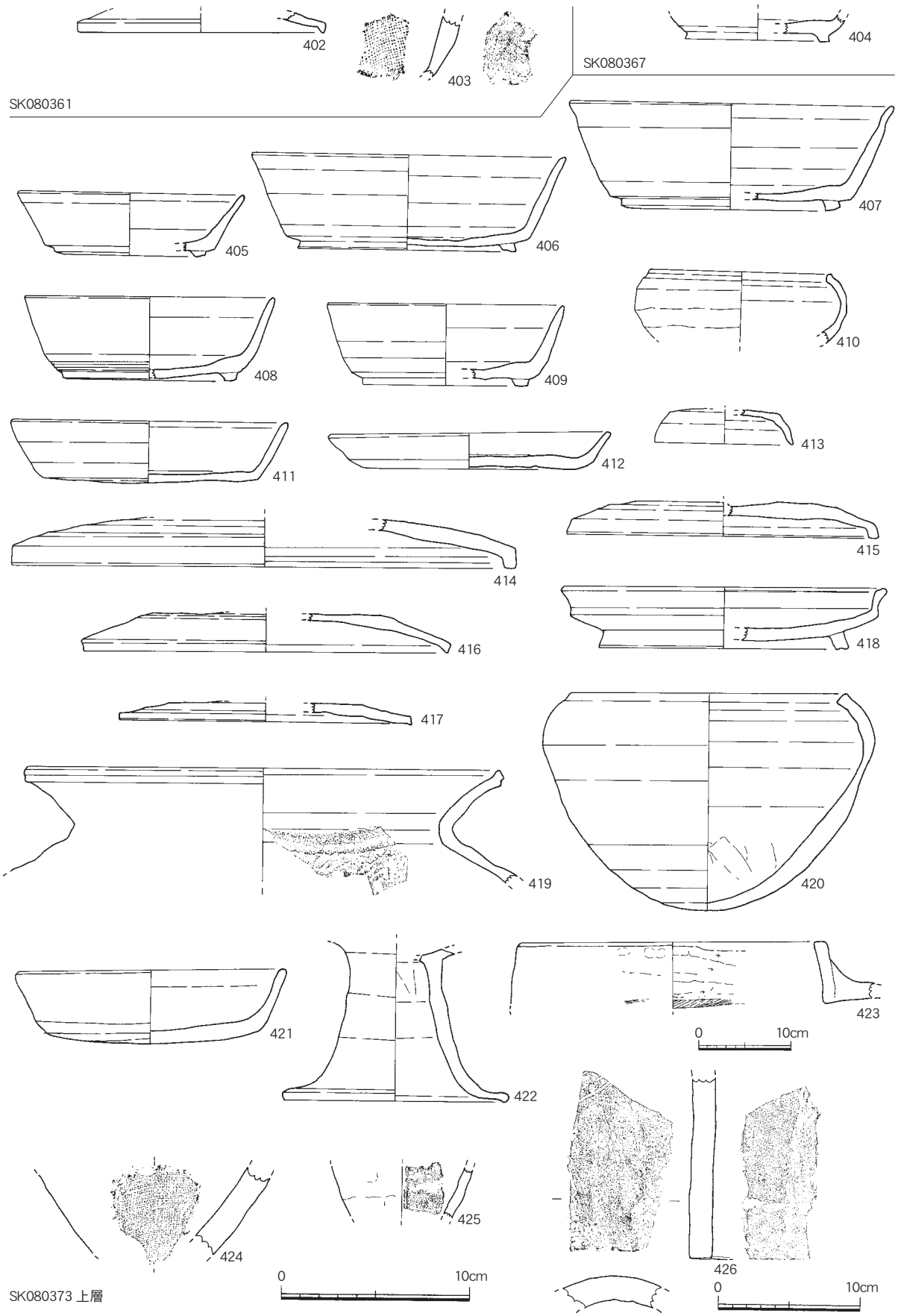


Fig.34　SK080361・080367・080373 出土遺物実測図（1/3・1/4・1/6）

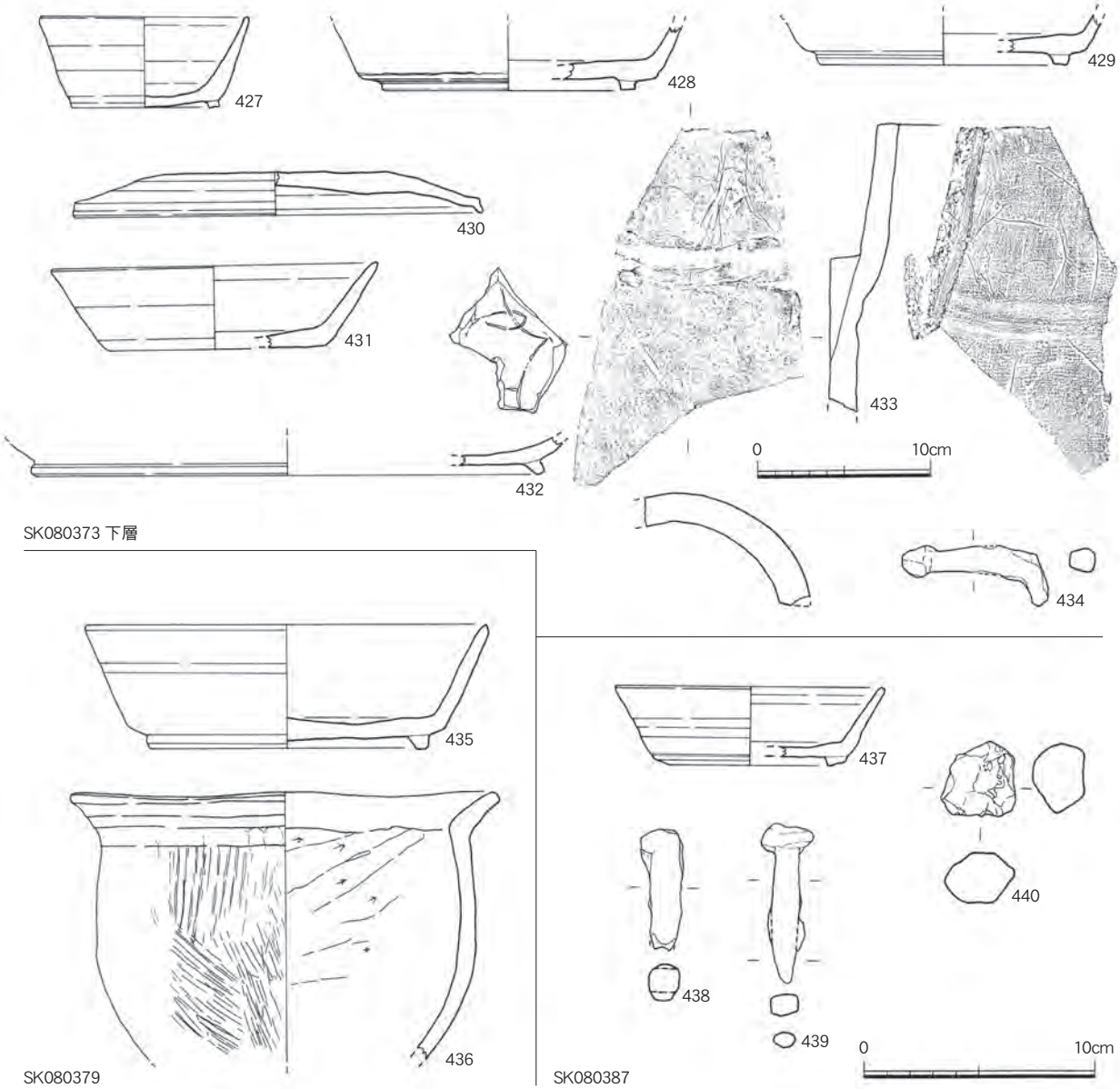
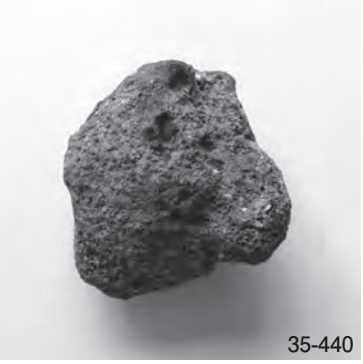


Fig.35　SK080373・080379・080387 出土遺物実測図（1/3・1/4）

は坏。口径 14.6 器高 3.3㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ、内底は不定方向ナデ外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒微細な黒色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。焼成はやや甘い。412 は皿。口径 14.9 器高 2.0㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面と内底に回転ナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色黒色粒を少量含み、内面は青灰色外面は灰白色を呈する。焼成はやや甘い。413 は無頸壺蓋。口径 7.4 器高 1.8㎝を測る。体部は緩く湾曲して開き、平坦な天井部と稜を成して連なる。体部内外面に回転ナデ、天井から体部中位まで回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は灰～灰白色を呈する。414 ～ 417 は坏蓋。414 は大型の蓋で口径 26.8㎝を測る。口縁は短く屈曲して稜を成し返しは無い。口縁内外は回転ナデ、体部中位まで回転ヘラケズリ、内面はナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰～灰白色を呈する。415 は口径 16.5 器高 1.8㎝を測る。口縁は短く屈曲して稜を成し返しは無い。口縁内外は回転ナデ、天井から体部中位まで回転ヘラケズリ、内面はナデを施す。胎土は微細な白色粒を若

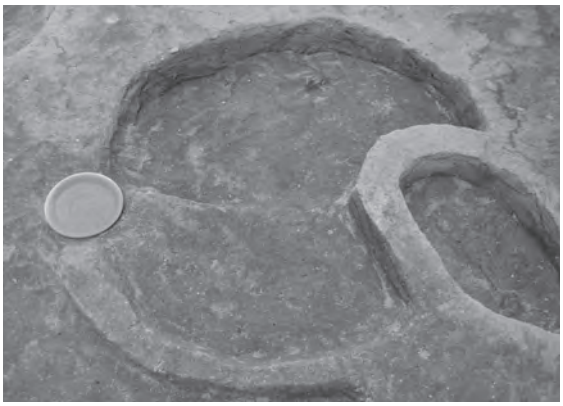
干含み、内外面は灰白色を呈する。416 は口径 19.6 器高 2.0㎝を測る。口縁の返しは低く、直線的に延びる体部が稜を成して平坦な天井部に連なる。体部内外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を少量含み、内外面は青灰色を呈する。417 は口径 15.4 器高 3.2㎝を測る薄い器形で、口唇は窪ませ返しは痕跡程度で、体部内外面は回転ナデ、外面天井部は回転ヘラケズリを施す。内面上位はナデを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は灰色を呈する。418 は高台付皿。口径 17.2 器高 2.0㎝を測る。口唇は平坦で内傾し沈線を 1 条施す。口縁下で稜を成して屈曲し丸い底部に連なる高台はやや高く外方に張る。口縁内外面を回転ナデ、外底に回転ヘラケズリ内面に磨り摩滅が見られ硯の可能性がある。胎土は白色黒色粒を若干含み、内面は灰色外面は灰褐色を呈する。419 は甕口縁部。口唇部が肥厚して上方が突出し口唇に稜を成す。口縁内外面は回転ナデを施し、体部外面はタタキ後ナデ、内面には同心円当具痕が残る。胎土は白色粒を若干含み、内面は灰色外面は自然釉で黒色を呈する。420 は鉄鉢形の鉢で口径 14.6 器高 11.4㎝を測る。口唇は平坦で内傾し、狭い丸底から肩が強く張る。体部内面下半はナナメケズリ後外面中位まで回転ナデを、外底～胴部下位まで回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰白～灰色を呈する。421 ～ 425 は土師器。421 は坏。口径 14.4 器高 4.0㎝を測る。やや丸い底部から体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ、内底はナデ後粗いヘラナデ、外底は回転ヘラケズリ後粗いナデ・ヘラナデを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は橙色を呈する。422 は高坏脚部。径 12.0 高 9.5㎝を測る。平坦な端部は短く、体部は径 9.5㎝と太い。全面に回転ナデを施し、内面上位はヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内面は橙色外面は淡赤橙色を呈する。423 は移動式竈口縁部。口径 32.2㎝を測り焚口に厚さ 1.8㎝の庇が巡る。外面はハケ後緩いナデ、内面はヨコケズリを施す。庇内面に煤が付着する。胎土は白色粒を多く含み、内外面は灰褐色を呈する。424・425 は焼塩壺。424 は円錐形の胴部破片で厚 1.4㎝と厚い。外面はヘラナデ、内面は布目圧痕が残る。胎土は白色黒色赤色粒を多く含み、内外面は灰褐色を呈する。425 は玄界灘式の胴部下位片で径 7.4㎝を測る。外面は指頭圧とナデ、内面に細かな布目圧痕が残る。胎土は微細な白色粒を少量含み、内面は鈍い橙色外面は褐灰色を呈する。426 は丸瓦片。厚 1.7㎝で外面はタテケズリ後ナデ、内面に細かな布目圧痕・紐圧痕が残る。胎土は白色黒色粒を若干含み、内面灰白色外面は褐灰色を呈する。427 ～ 434 は下層出土。427 ～ 431 は須恵器。427 ～ 429 は高台坏。427 は口径 9.2 器高 3.9㎝を測る。高台は底部際から若干内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒を少量含み、内面は灰白色外面は灰色を呈する。428 は高台径 11.0㎝を測る。高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を少量含み、内外面は灰色を呈する。429 は高台径 11.0㎝を測る。高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒を少量含み、内外面は灰白色を呈する。430 は坏蓋。口径 19.0 器高 1.9㎝を測る。口縁の返しは低く外端が窪む。口縁内外は回転ナデ、天井から体部中位まで回転ヘラケズリ、内面はナデを施す。胎土は白色粒を少量含

Ph.64　SK080379（東から）



Ph.65　SK080373・080379・080387 出土遺物

み、内外面は紫灰色を呈する。431 は坏。口径 14.2 器高 3.6㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ、内底は不定方向ナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を少量含み、内外面は灰白～灰色を呈する。432 は都城系土師器高台付皿の底部。大型の皿で高台径 22.4㎝を測る。緩い丸底で高台は小さく外方に張る。体部内外は回転ナデ後ヨコヘラナデを施し、内面に螺旋状の暗文を施す。胎土は微細な白色を少量含み、内面は鈍い橙色外面は褐灰色を呈する。433 は丸瓦。幅約 14㎝厚 1.6㎝を測る。凸面は縄目タタキ後ナデ、玉縁部はヨコナデ、凹面は布目圧痕が残る。胎土は 5㎜以下の白色粒を若干含み、内面は灰色外面は橙色を呈する。434 は鉄釘。頭部は 1.3㎝角ほどに大きく造り体部は断面 1㎝角程で現況で 6.3㎝を測る。他に銅坩堝・表面が熔解した土器片・桃核が出土する。時期は 8 世紀後半を示す。



Ph.66　SK080427（東から）

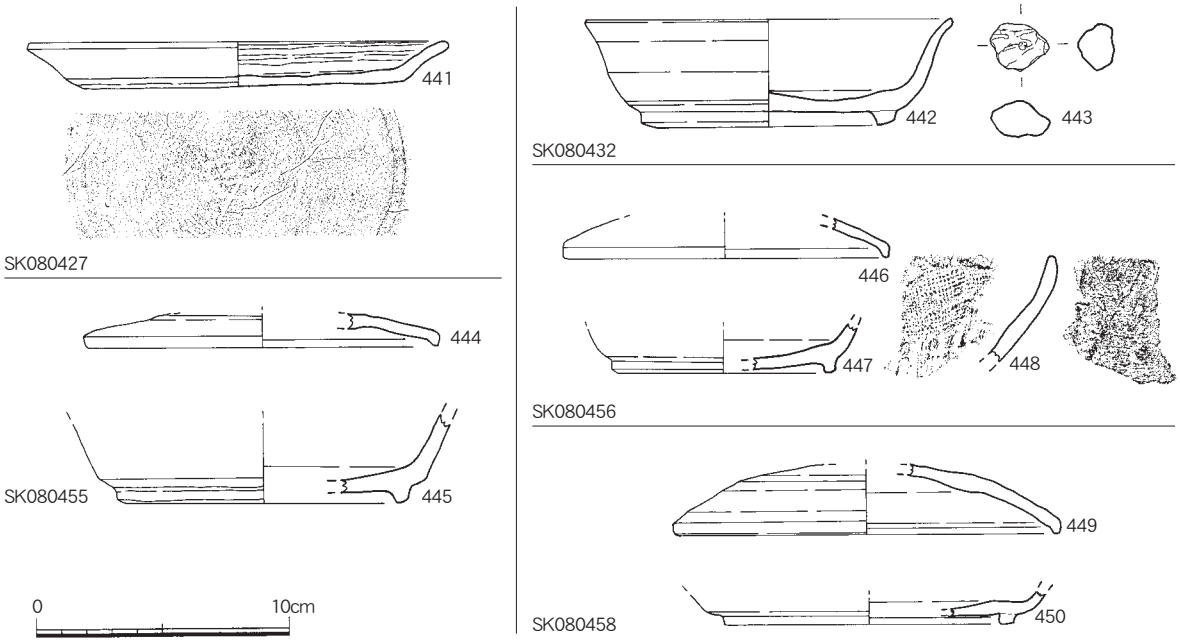


Fig.36　SK080427・080432・080455・080456・080458 出土遺物実測図（1/3）

SK080379（Fig.33　Ph.64）　3 面目中央部 A10 グリッドに位置する小型の土坑で、SK-378 に切られる。平面は円形、0.82 × 0.46+ α m を測り、深さ 30㎝で断面は舟底形を呈する。

出土遺物（Fig.35　Ph.65）　435 は高台坏。口径 17.4 器高 5.4㎝を測る。高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリ後ナデを施す。胎土は微細な白色黒色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。436 は土師器甕。口径 18.6㎝を測る。口縁内面は屈曲して稜を成し、内外はヨコナデ、外面口縁以下は粗いタテハケを施し、頸部に指頭圧痕が残る。内面体部はナナメヘラケズリを施す。胎土は白色粒を多く含み、内外面は鈍い橙色を呈する。時期は 8 世紀後半を示す。

SK080387（Fig.33　Ph.64）　3 面目中央部 O10 グリッドに位置する小型の土坑で、SK-388 に切られる。平面は楕円形で、1.25 × 0.7 を測り、深さ 28㎝で断面は逆台形を呈し、底面は若干窪む。

出土遺物（Fig.35　Ph.65）　437 は須恵器高台坏。口径 11.6 器高 3.4㎝を測る。高台は底部際に接する。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒を多く含み、内外面は灰色を呈する。438・439 は鉄釘。438 は 1.3㎝角の棒上部をそのまま 1.5㎝程直角に曲げ頭部とする。残存長で 5.1㎝を測る。439 は 1.2㎝角の棒上部を直角に曲げ頭部を 2.1㎝角程に叩き広げる。残存長で 7.0㎝を測る。440 は鉄塊系の鉄滓で 3.2 × 3.3 × 2.2㎝ 26.7 g を測る。メタルが残り磁着する。鈍い黄褐色。時期は 8 世紀後半を示す。

Ph.67　SK080455（南から）

SK080427（Fig.33　Ph.66）　3 面目中央部 A6 グリッドに位置する土坑で、平面は円形で、径 1.0m

を測り、深さ 12㎝と浅く底面は平坦で有る。

出土遺物（Fig.36　Ph.69）　441 は土師器皿。口径 16.6 器高 1.8㎝を測る。体部は直線的に強く開き、体部内外面に回転ナデ、内底は不定方向ナデ、外底は回転ヘラケズリを施し、中央にヘラ刻みが 3 本入る。胎土は微細な白色粒・雲母を多く含み、内外面は鈍い橙色を呈する。他に銅坩堝をが 2 点出土している。時期は 8 世紀後半を示す。

SK080432（-313）（Fig.33）　3 面目中央部 O12 グリッドに位置する大型の土坑で、SK-430 に大半を切られる。平面は円形で、径 1.62 を測り、深さ 80㎝と深く断面は逆台形を呈する。

出土遺物（Fig.36　Ph.69）　442 は須恵器高台坏。口径 14.4 器高 4.2㎝を測る。高台は底部際に接する。体部は緩い S 字を描いて開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリ後ナデを施す。胎土は白色粒を含み、内面は灰白から灰色外面は灰白色を呈する。443 は鉄塊系の鉄滓で 1.9 × 2.4 × 1.4㎝ 6.1 g を測る。メタルが残り磁着する。鈍い褐色を呈する。時期は 8 世紀後半を示す。

SK080455（Fig.33　Ph.67）　4 面目西部 A16 グリッドに位置する大型の土坑で、平面は楕円形で、径 1.85 × 1.4m を測り、深さ 18㎝と 50㎝の 2 段となっている。殊に下段は径 1.4m の円形の床面に径 33㎝深さ 26㎝の小穴が有り、SK-283 と同様で大型建物の柱穴の可能性も考えられる。

出土遺物（Fig.36　Ph.69）　444・445 は須恵器。444 は口径 14.0 器高 1.5㎝を測る。口縁の返しは低く、直線的に延びる体部が稜を成して平坦な天井部に連なる。体部内外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリを施す。胎土は精良で、内外面は灰色を呈し、外面は自然釉が掛かる。445 は高台坏底部。高台径 11.5㎝を測る。高台は底部際から内側に設ける。体部は直線的に開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、外底には回転ヘラケズリ後ナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰色を呈する。時期は 8 世紀後半を示す。

SK080456（Fig.33）　4 面目中央部 O10 グリッドに位置する大型の土坑で、平面は隅丸方形で 1.95 × 1.4m を、深さは 40㎝を測り断面は逆台形を呈する。

出土遺物（Fig.36）　446・447 は須恵器。446 杯蓋は口径 12.9㎝を測る。口縁は小さく屈曲して稜を成し、直線的に体部が高く延びる。内外面は回転ナデを施し、胎土は精良で、内面は明灰色外面は灰白色を呈する。外面は灰被りとなる。470 は高台坏底部。高台径 8.8㎝を測る。低い高台は底部際から若干内側に設ける。体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底に不定方向ナデを外底には回転ヘラケズリを施す。胎土は精良で、内外面は灰色を呈する。448 は円錐形の土師器焼塩壷口縁。厚 0.6㎝と薄い。外面はケズリ後ナデ、内面に布目圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒を含み、内外面は橙色を呈する。他に銅坩堝が出土する。時期は 8 世紀後半を示す。

Ph.68　SK080485（北から）

SK080458（Fig.37）　4 面目中央部 Z12 グリッドに位置する土坑で、壁際で検出され大部分は調査

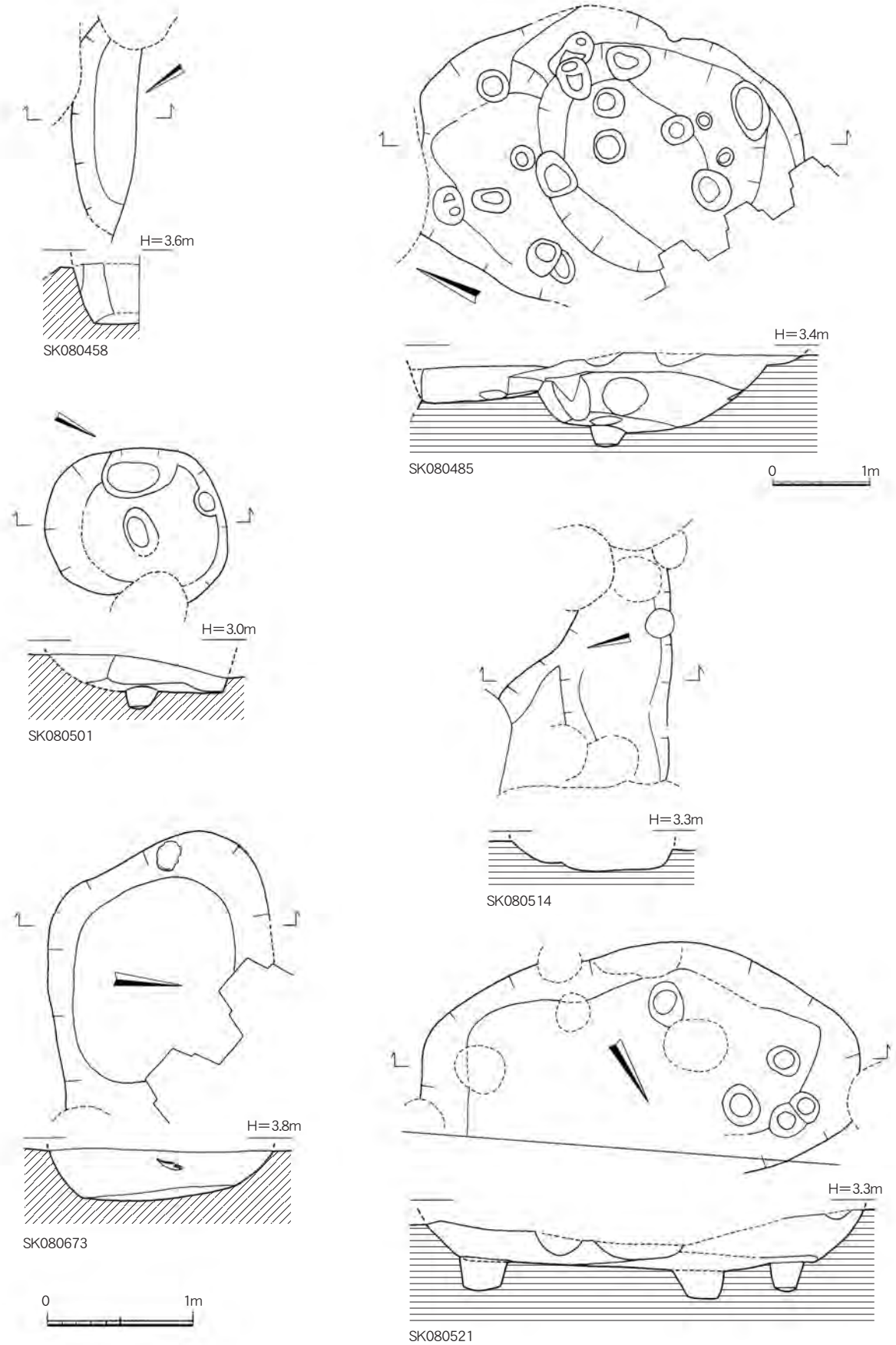


Fig.37　SK080458・080485・080501・080514・080521・080673　実測図（1/40・1/60）

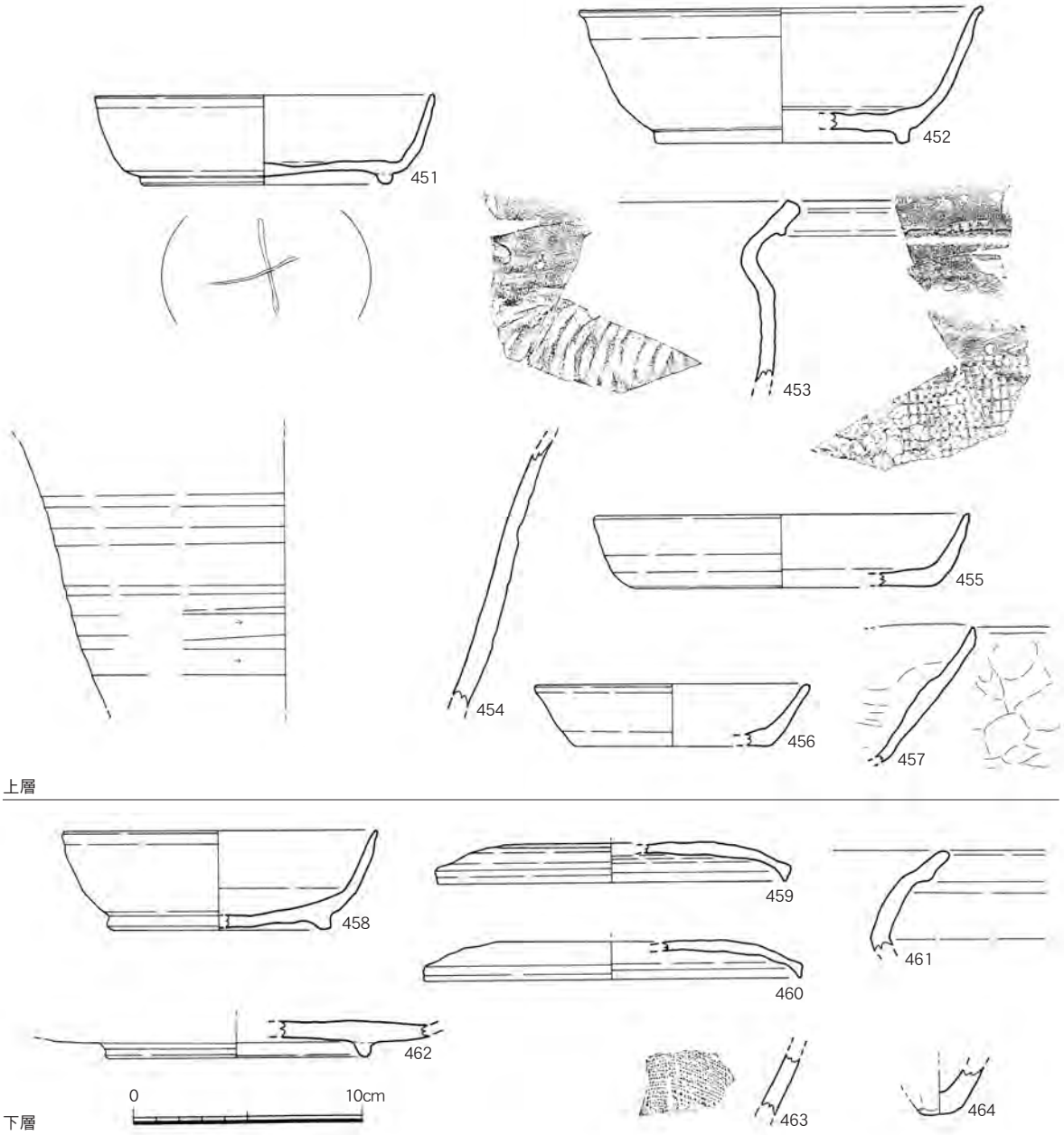
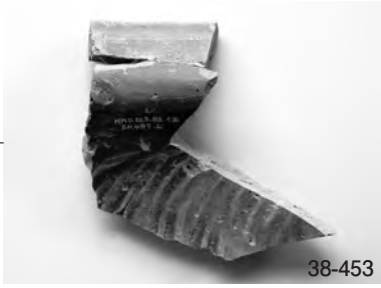
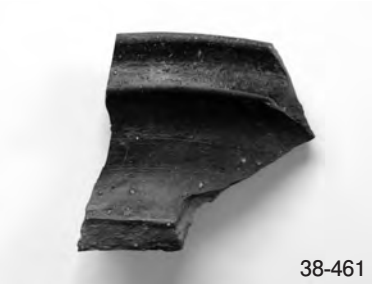


Fig.38　SK080485 出土遺物実測図（1/3）

区外に延びる。平面は隅丸方形で、残存で 1.28+ α × 0.4+ α m を、深さは 40㎝を測り断面は逆台形を呈する。

出土遺物（Fig.36）　449・450 は須恵器。449 は口径 16.1㎝を測る。口縁の返しは低く、直線的に延びる体部から天井部になだらかに連なる。体部内外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ内面は不定方向ナデを施す。中央には摘みの痕跡がある。胎土は精良で、内面は浅黄色外面は灰褐色を呈する。450 は高台坏底部。高台径 11.4㎝を測る。低い高台は底部際から内側に設ける。体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底に不定方向ナデを外底には回転ヘラケズリ後ナデを施す。胎土は精良で、内外面は暗灰褐色を呈する。時期は 8 世紀後半を示す。





Ph.69　SK080427・080432・080485 出土遺物

SK080485（Fig.37　Ph.68）　5 面目中央部 O10 グリッドに位置する大型の土坑で、SK-430・-432 に切られ SD-543 を切る。平面は楕円形で、径 2.62+ α × 2.04m を測る。断面は深さ 25㎝と 56㎝の 2 段となっており 2 段目は径 1.8 m程の円形で、別遺構の可能性もある。遺物を多く出土する。

出土遺物（Fig.38　Ph.69）　451 ～ 457 は上層出土。451 ～ 454 は須恵器。451・452 は高台坏で 451 は口径 14.8 器高 3.9㎝を測る。高台は底部際の内側に施す。体部は緩く湾曲して開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリ後ナデを施す。高台内に「十」の墨書がある。胎土は白色粒を若干含み、内外面は青灰色を呈する。外面は灰被りとなる。452 は口径 17.6 器高 5.9㎝を測る大型で、高台は底部際に施す。体部は緩く湾曲して開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリ後丁寧なナデを施す。胎土は微細な白色粒を多く含み、内面は鈍い黄橙外面は灰白色を呈する。453 は甕口縁部片。口縁外面は肥厚して段を成し、側面が窪んで下端が突出する。胴部は張らず肩部が稜を成す。口縁内外は回転ナデ、外面胴部に格子目叩き、内面には平行弧線の当具痕が残る。胎土は精良で、内外面は灰白色を呈する。454 は鉢の胴部。直線的に開き、外面上半に丁寧な回転ナデ下半に丁寧な回転ヘラケズリを施し内面はヨコ・ナナメにナデる。胎土は精良で、内外面は灰白色を呈する。455 は黒色 B

Ph.70　SK080501（北から）

Ph.71　SK080521（南から）

類の坏。口径 14.4 器高 3.2㎝を測る。体部は緩く湾曲してやや開き、体部内外面に回転ナデ、他は摩滅して調整不明。胎土は精良で、内外面は黒色を呈する。456・457 は土師器。456 は坏。口径 12.0 器高 3.2㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を含み、内外面は鈍い黄灰色を呈する。457 は円錐形の土師器焼塩壺口縁片。厚 0.6㎝と薄い。外面はケズリ後ナデ、内面に布目圧痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒を含み、内外面は橙色を呈する。458 ～ 464 は下層出土。458 ～ 460 は須恵器。458 は口径 13.8 器高 4.4㎝を測る。高台は底部際

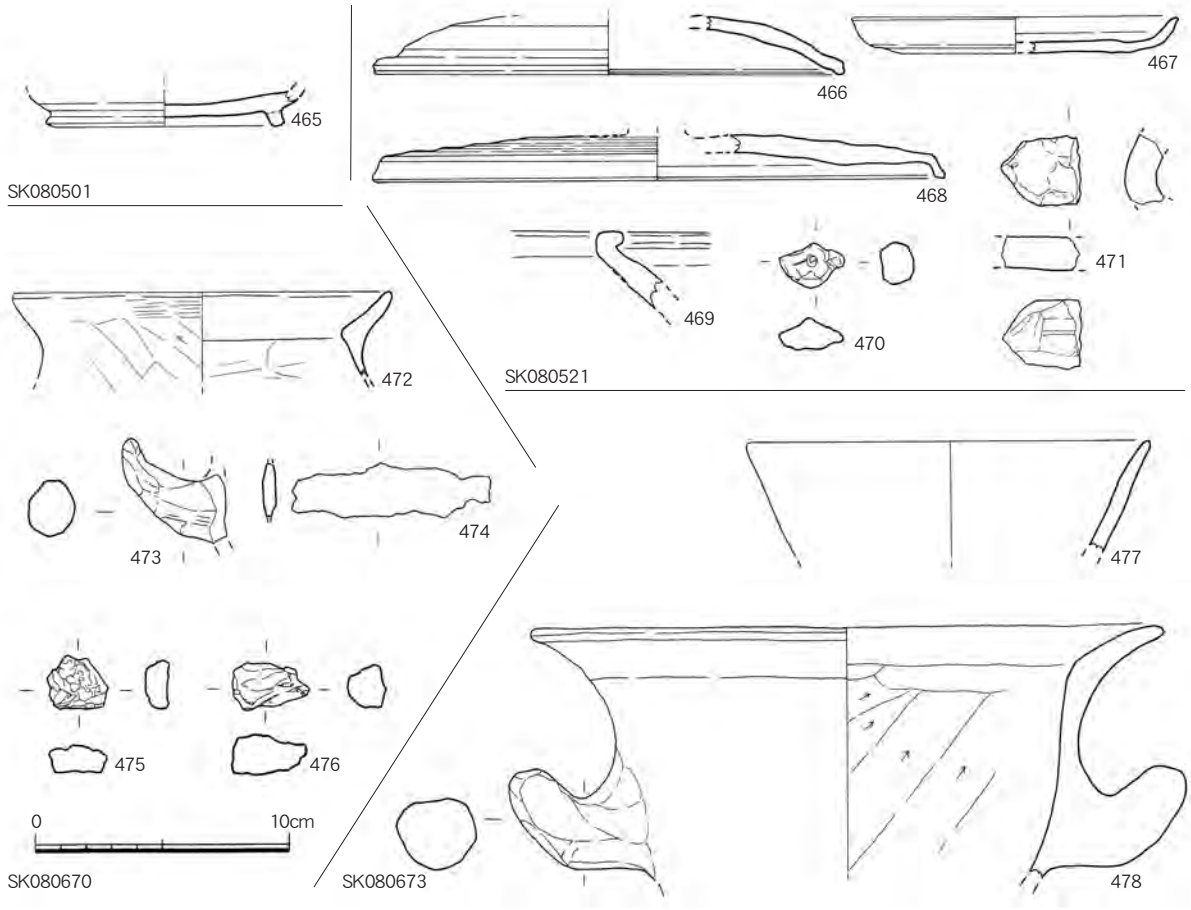
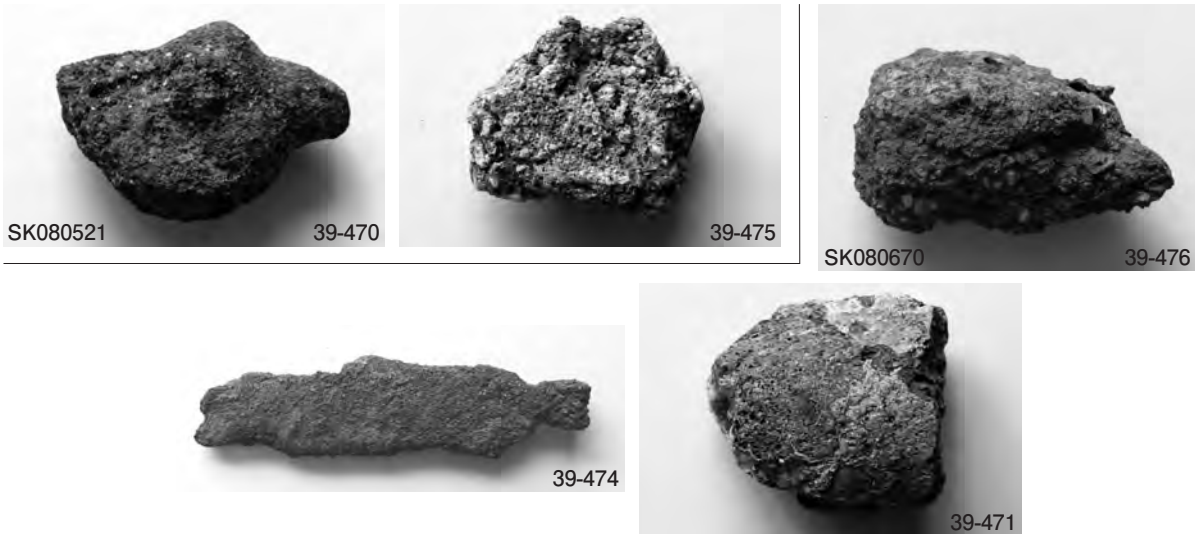


Fig.39　SK080501・080521・080670・080673 出土遺物実測図（1/3）

Ph.72　SK080521 遺物出土状況（東から）

の内側に施す。体部は緩く湾曲して開き、体部内外面と高台周りに回転ナデ、内底は不定方向のナデ、外底には回転ヘラケズリ後ナデを施す。胎土は精良で、内外面は灰白色を呈する。459・460 は坏蓋。459 は口径 15.2 器高 1.7㎝を測る。口縁の返しは退化し内面への肥厚となる。体部は緩く湾曲し平坦な天井部に連なる。口縁部内外面は回転ナデ、天井部から体部上位までは回転ヘラケズリを施し、内面は不定方向のナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色黒色粒を少量含み、内外面は暗



Ph.73　SK080521・080670 出土遺物

Ph.74　SK080673（南から）

灰色を呈する。460 も同形で口径 16.5 器高 1.7㎝を測る。口縁部内外面は回転ナデ、天井部から体部上位までは回転ヘラケズリを施し、内面は不定方向のナデを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒を含み、内外面は灰色を呈する。461 は高麗無釉陶器壺口縁。口縁外面が肥厚し下端が段を成す。内外面回転ヨコナデで、胎土は精良。内外面は塗布したベンガラの還元焼成で不透明の黒色釉状になる。462 ～ 464 は土師器。462 は高台付皿底部。小さな高台で径 11.6㎝を測る。高台外と内面はケンマ、高台内は回転ケズリを施す。胎土は精良で内外面明橙色を呈する。463・464 は玄界灘式の焼塩壺。463 は胴部下位片で厚 0.7㎝と薄い。外面は器表が剥落し、内面に粗い布目圧痕が残る。胎土は粗い白色粒を含み、内面は明赤褐色外面は鈍い橙色を呈する。464 は尖底に近い径 1.8 厚 1.0㎝の丸底の底部。内外面は指頭圧とナデを施す。胎土は粗い白色粒を含み、内外面淡黄色を呈する。他に銅坩堝が出土する。時期は 8 世紀後半を示す。

SK080501（Fig.37　Ph.70）　5 面目西部 O16 グリッドに位置する小型の土坑で、平面は円形で、径 1.25 × 1.0m を測る。深さ 24㎝と浅く断面は舟底形を成す。

出土遺物（Fig.39）　465 は須恵器高台坏。高台径 9.4㎝を測る。高台は底部際の内側に施し、低く外方に張る。調整は摩滅のため不明。胎土は 4㎜以下の白色粒を多く含み、内外面は灰褐色を呈する。時期は 8 世紀前半を示す。

SK080514（Fig.37）　5 面目西部 A14 グリッドに位置する土坑で、SK-521 に切られる。平面は長台形で、幅 0.55 ～ 1.3 × 1.65+ α m を測る。深さ 16㎝と浅く断面は舟底形で、溝の可能性もある。

出土遺物　土師器高台坏底部片が出土している。高台径 12.6㎝を測り高台は底部際に施し、低く外方に張る。内外面に丁寧なヘラナデを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。時期は 8

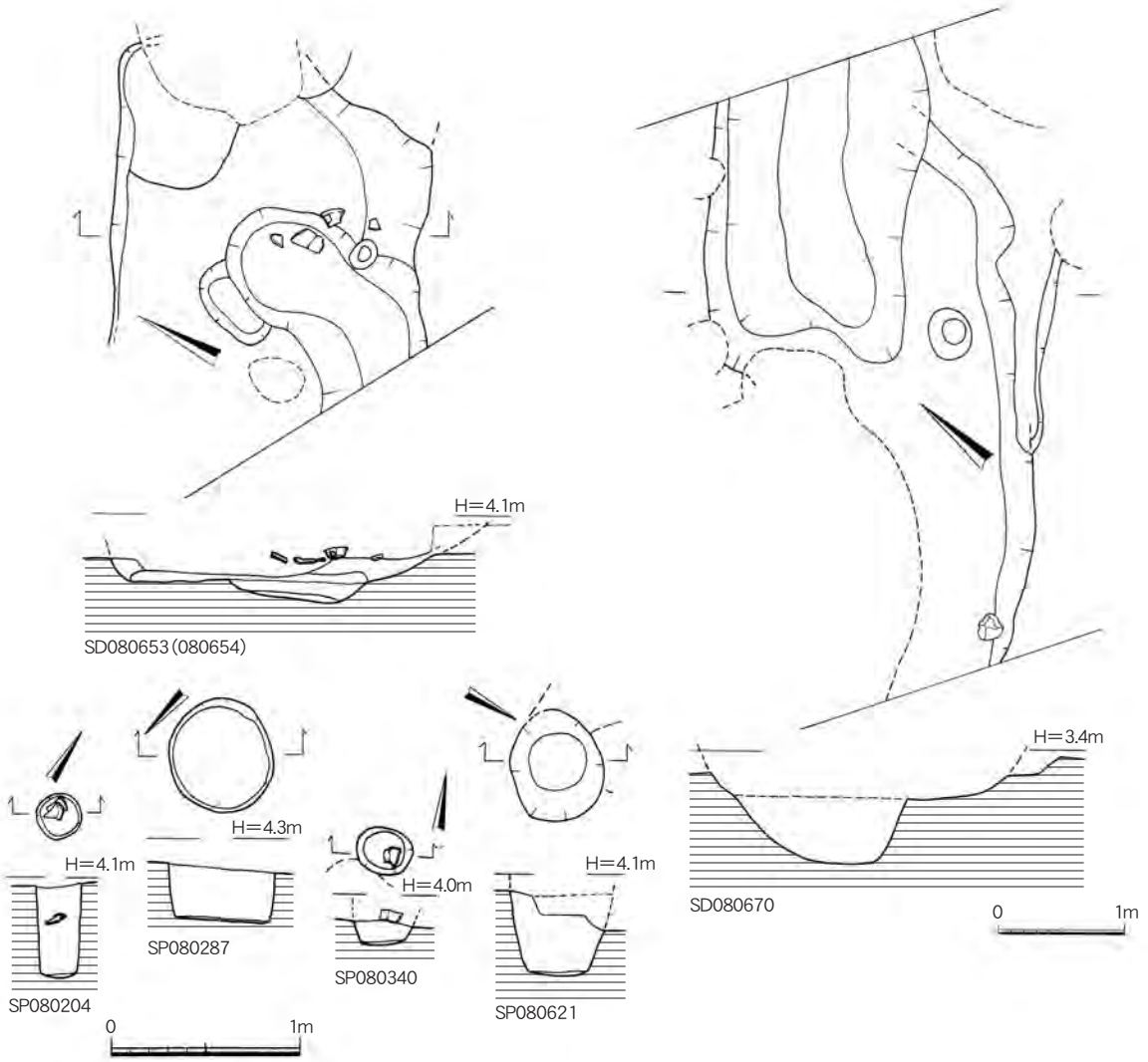


Fig.40 SD080653・080670、SP080204・080287・080340・080621 実測図（1/40・1/60）

世紀後半を示す。

Ph.75　SD080653 遺物出土状況（西から）

SK080521（Fig.37　Ph.71）　5 面目中央部 A12 グリッドに位置する大型の土坑で、SK-455 に切られる。平面は楕円形で、径 3.0 × 1.65m を測る。深さ 45㎝で断面は舟底形を成す。

出土遺物（Fig.39　Ph.73）466・467 は須恵器。466 は坏蓋。口径 18.6㎝を測る。口縁の返しは低く、緩く湾曲する体部から天井部になだらかに連なる。口縁内外面は回転ナデ、天井部から体部上位までは回転ヘラケズリ内面は不定方向ナデを

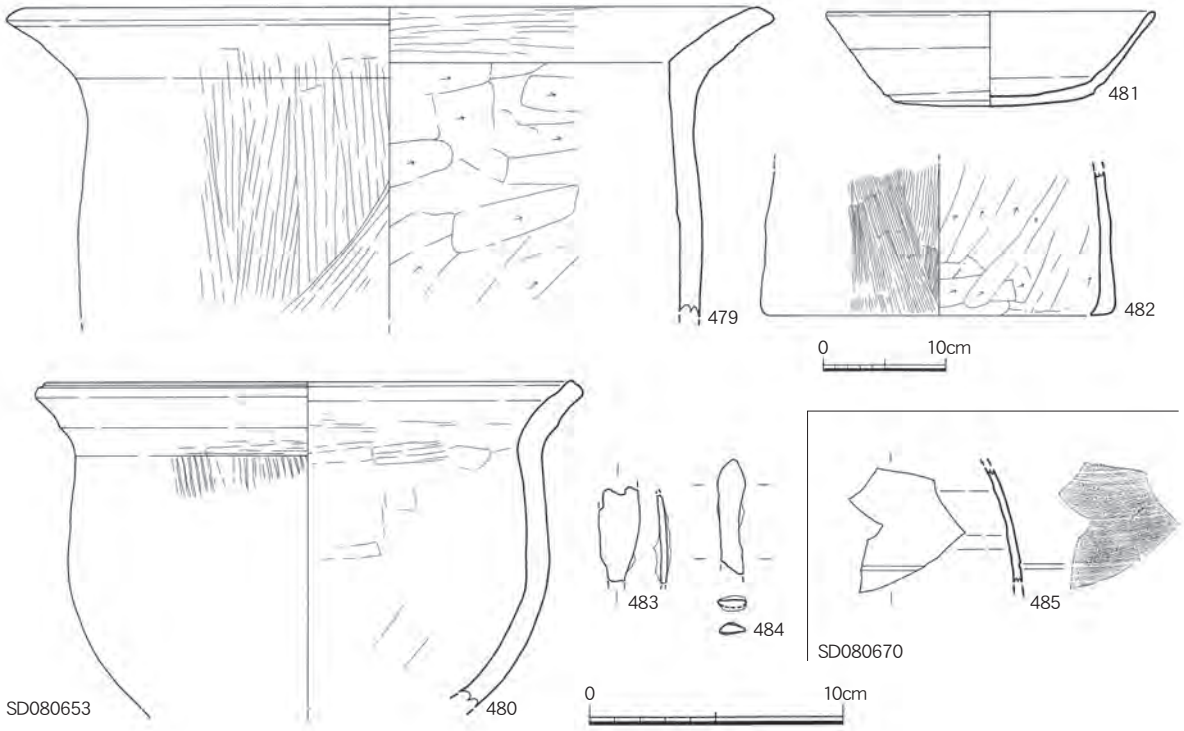


Fig.41　SD080653・080670 出土遺物実測図（1/3・1/6）

Ph.76　SK080653・SD080670 出土遺物

施す。胎土は精良で、内外面は灰色を呈する。467 は皿。口径 13.0 器高 1.4㎝を測る。体部は緩く湾曲して開き、体部内外面と内底に回転ナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な黒色粒を含み、内外面は灰白色を呈する。468・469 は土師器。468 は大型の坏蓋。口径 22.6㎝を測る。口縁は短く屈曲して稜を成し返しは無い。口縁内外は回転ナデ、直線的な体部から天井まで回転ヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。胎土は精良で、内外面は鈍い橙色を呈する。469 は短頸壺の口縁部。強く張った胴から口縁を短く屈曲し端部が外方に突出する。内面境は稜を成す。摩滅のため調整は不明。胎土は 2㎜以下の白色粒を多く含み、内外面は灰黄色を呈する。470 は鉄滓の小片。2.5 × 1.6 × 1.3㎝ 5.3g を測る。砂粒が付着し鈍い橙色を呈する。471 は鞴羽口片。先端は熔解してガラス化し黒色を呈する。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量含み、内面は浅黄橙色外面は灰白～灰赤色を呈する。他に銅坩堝 3 点が出土する。時期は 8 世紀後半を示す。

Ph.77　SD080670（北から）

SK080673（Fig.37　Ph.71）　4 面目東部 A2 グリッドに位置する大型の土坑で、壁際で検出され一部は調査区外にある。平面は楕円形で、径 1.7 × 1.52+ α m を測る。深さ 35㎝で断面は舟底形を成す。

出土遺物（Fig.39）　477 は須恵器高台坏口縁。口径 16.0㎝を測る。口縁は直線的に開き、内外面は回転ナデを施す。胎土は精良で、内外面は灰色を呈する。焼成はやや甘い。478 は甑口縁。口径 25.0㎝を測る。すぼまった胴部から口縁がやや長く外反し内面は稜を成す。胴中位に長さ 5.5㎝径 3㎝程の把手を貼付する。口縁部内外面ヨコナデ、内面頸部以下にナナメヘラケズリを施す。胎土は

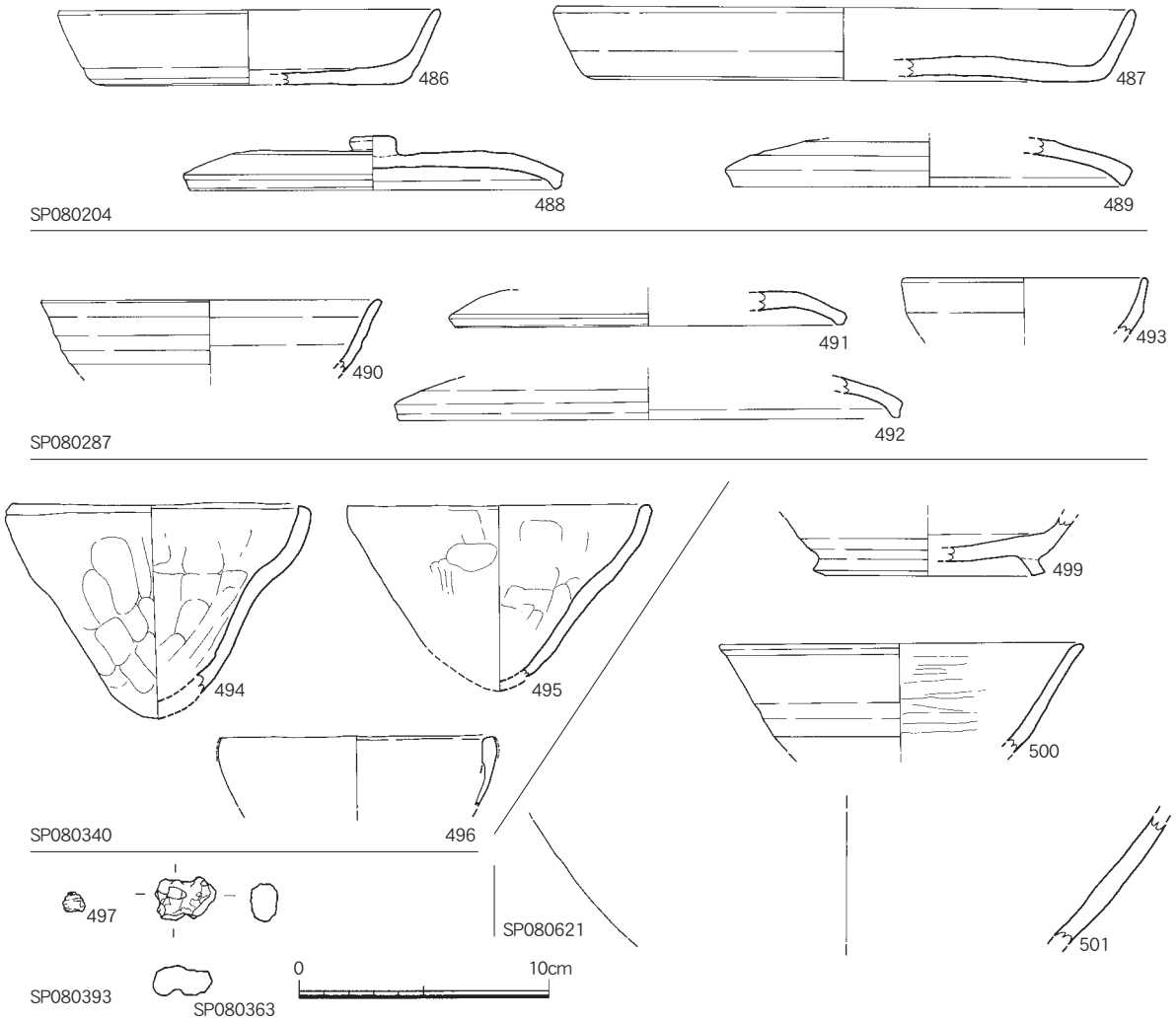
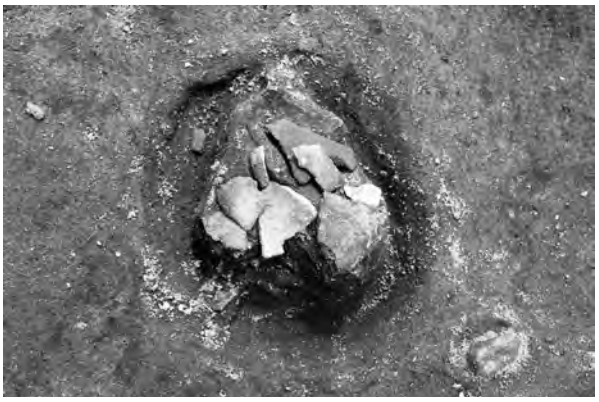


Fig.42　SP080204・080287・080340・080393・080621・080363 出土遺物実測図（1/3）

Ph.78　SP080340・080393 出土遺物

Ph.79　SP080287 出土状況（南から）



Ph.80　SP080340 遺物出土状況（西から）

3㎜以下の白色粒を多く含み、内外面は黒褐色を呈する。内外に炭化物が付着する。他に坩堝が出土する。時期は 8 世紀後半を示す。

（2）溝

溝は調査区東部第 3 面で磁北方向に直交する SD － 653・-655 と第 5 面中央部で SD － 670 の 3 条を検出している。いずれも幅 3m 前後の大溝である。

SD080653（-654）（Fig.40　Ph.75）　3 面 O4 グリッドに位置する幅 2.5 深さ 20㎝の大溝で、方位 N-80°-E にとり、SD-655 を切る。内部に幅 1m 深さ 23㎝の小溝 -654 が有る。切り合いの可能性もあるが時期差は無い。上面で遺物が多く検出される。

出土遺物（Fig.41　Ph.76）　479 ～ 482 は土師器。479・480 は甕。479 は口径 30.2㎝を測る。胴の張りは弱く、口縁内面は屈曲して稜を成し、口縁内面にヨコハケ後内外にヨコナデ、外面口縁以下は粗いタテハケを施し、内面体部はヨコヘラケズリを施す。胎土は白色粒を多く含み、内面は褐灰色外面は暗赤灰～灰褐色を呈する。外面に煤が付着する。480 は口径 21.6㎝を測る。胴の張りは弱く浅い器形である。口縁内面の屈曲は緩く、口縁内外面にヨコナデ、外面口縁以下は粗いタテハケを施すが大部分が剥落する。内面体部はヨコヘラケズリ後ナデる。胎土は白色粒を多く含み、内面は鈍い橙色外面は暗赤灰から灰褐色を呈する。外面に煤が付着する。481 は坏。口径 13.0 器高 3.7㎝を測る。丸底気味の底部から稜を成して体部は直線的に強く開き、体部内外面に回転ナデ、内底はナデ外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は白色粒を少量含み、内外面は浅黄橙色を呈する。482 は小型の移動式竈底部。底径 27.8㎝を測る。体部は直線的にやや内傾し端部は平坦で端部が内側に突出する。外面に粗いタテハケ内面にナナメヘラケズリを施す。胎土は白色粒を多く含み、内面は褐灰色外面は鈍い橙～灰褐色を呈する。483・484 は鉄器。483 は鉈か。両端を欠くが、幅 1.6㎝厚 2㎜の柳葉形で縦に緩く湾曲する。484 は小さな柳葉形の長頸鏃で、刃部長 1.5 幅 1.1㎝厚 1.5㎜を測る。時期は 9 世紀後半を示す。

SD080670（Fig.40　Ph.75）　4 ～ 5 面 O2 グリッドに位置する幅 2.7m 深さ 20㎝の大溝で、方位 N-58°-E にとり、SD-700 を切る。遺物は少ない。

出土遺物（Fig.41　Ph.76）　土師器・須恵器を少量出土するが図化に耐える資料が無い。485 は新羅焼壺小片。内外面に回転ナデを施し、外面に沈線を 1 条施す。器壁は 3㎜と薄く、胎土は精良で

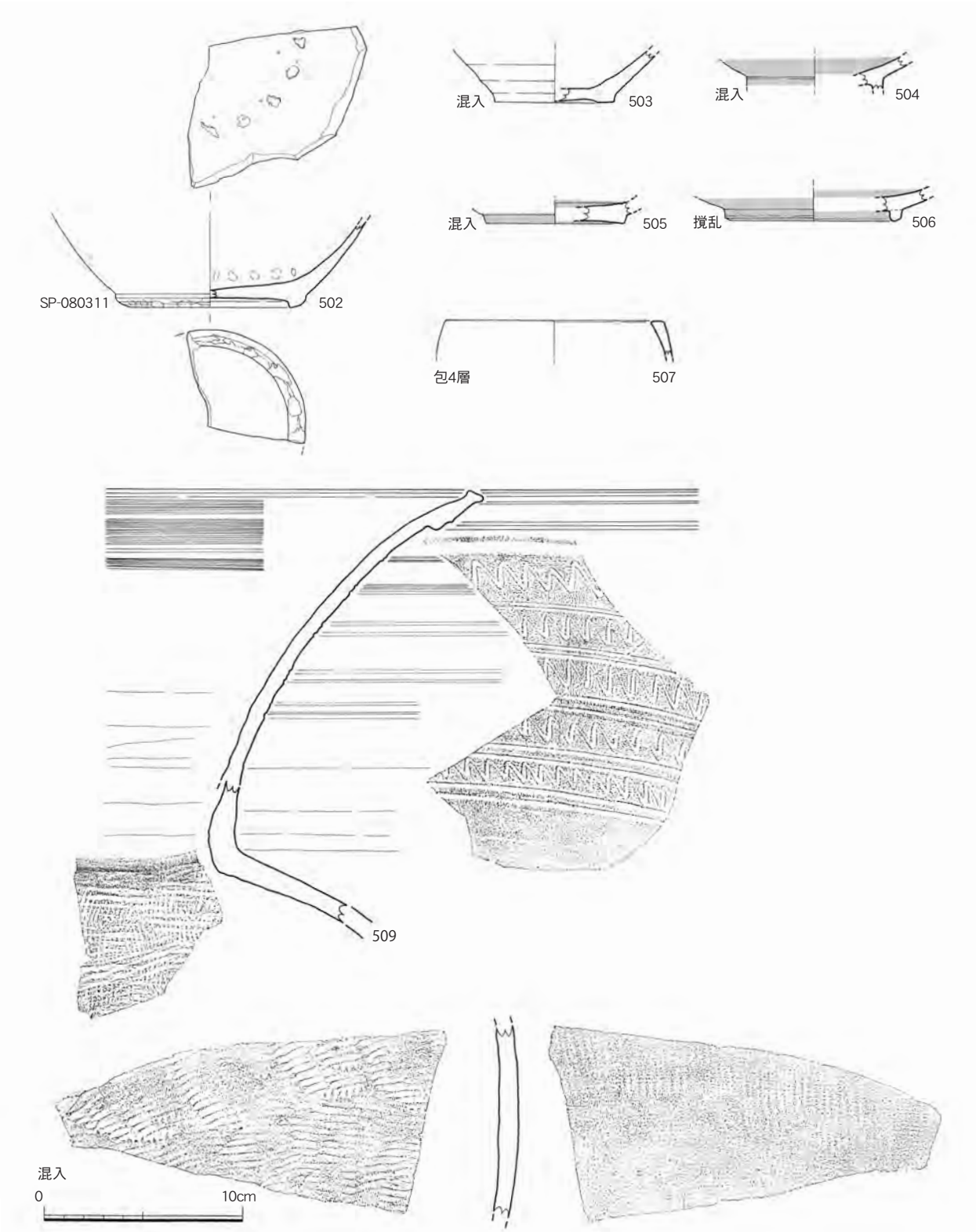


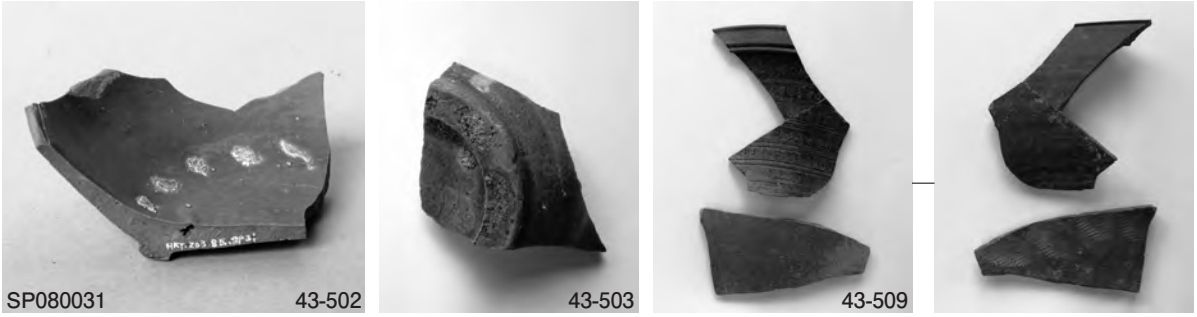
Fig.43　柱穴その他の出土遺物実測図 -1　(1/3)

紫灰色を呈し、内外面は暗灰色を呈する。他に銅坩堝・鉄滓を出土する。8 世紀後半か。

3）柱穴その他の出土遺物（Fig.42 ～ 47）

SP080204（Fig.40）　2 面目中央部の O8 グリッドで検出される。円形で径 24 深さ 52㎝を測る。

出土遺物　486 ～ 489 は須恵器。486・487 は皿。486 は口径 10.0 器高 1.3㎝を測る。体部は直線的に強く開き、内外面に回転ナデ、外底は回転ヘラ切り後ナデ板圧痕が残る。胎土は精良で内外面



Ph.81　柱穴他出土遺物 -1

は浅黄橙色を呈する。焼成は甘い。487 は口径 23.2 器高 2.9㎝を測る。体部は直線的に開き、体部内外面に回転ナデ内底に不定方向ナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。488･489 は坏蓋。口径 15.2 器高 2.2㎝を測る。口縁の返しは退化し、直線的な体部から平坦な天井部に連なる。中央に径 1.9㎝の摘みを施す。体部内外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ内面は不定方向ナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。489 は口径 16.2㎝を測る。口縁の返しは退化し、緩く湾曲する体部に連なる。体部内外面は回転ナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。焼成は甘い。時期は 9 世紀初頭を示す。

SP080287（Fig.40　Ph.79）　2 面目東部の A2 グリッドで検出される。円形で径 56 深さ 30㎝を測る。

出土遺物　490・491 は須恵器。490 は坏。口径 13.6㎝を測る。体部は直線的に開き、内外面に回転ナデ、外面は稜を成す。胎土は精良で内外面は灰色を呈する。491 は坏蓋。口径 15.8㎝を測る。口縁の返しは退化し、緩く湾曲する体部が平坦な天井部に連なる。体部内外面は回転ナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内面は青灰色外面は暗青灰色を呈する。492・493 は土師器。492 は口径 20.2㎝を測る大型で口縁の返しは低く、緩く湾曲する体部に連なる。体部内外面は回転ナデを施す。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は橙色を呈する。493 は坏。口径 9.8㎝を測る。体部は緩く湾曲し外面口縁下が稜を成す。胎土は精良で内外面は橙色を呈する。他に銅坩堝が 3 点出土する。時期は 9 世紀初頭を示す。

SP080340（Fig.40　Ph.80）　2 面目西部の A14 グリッドで検出される。円形で径 28 深さ 12㎝を測る。焼塩壺が集中して出土する。

出土遺物　494 ～ 496 は円錐形の土師器焼塩壺。494 は口径 12.2 器高 10.7㎝厚 0.6㎝を測る。外面はケズリ後ナデ、口縁は緩く湾曲し内面口縁下は稜を成す。内面上位はナナメヘラナデでヘラ当痕が残り以下はケズリ後ヨコナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を若干含み、内外面は灰白色を呈する。495 は口径 12.2㎝厚 0.6㎝と薄い。外面はケズリ後ナデ、口縁は緩く湾曲し、内面上位はナナメヘラナデ以下はケズリ後ヨコナデを施す。胎土は白色粒を多く含み、内面は淡橙色外面は明褐灰

Ph.82　柱穴他出土遺物 -2

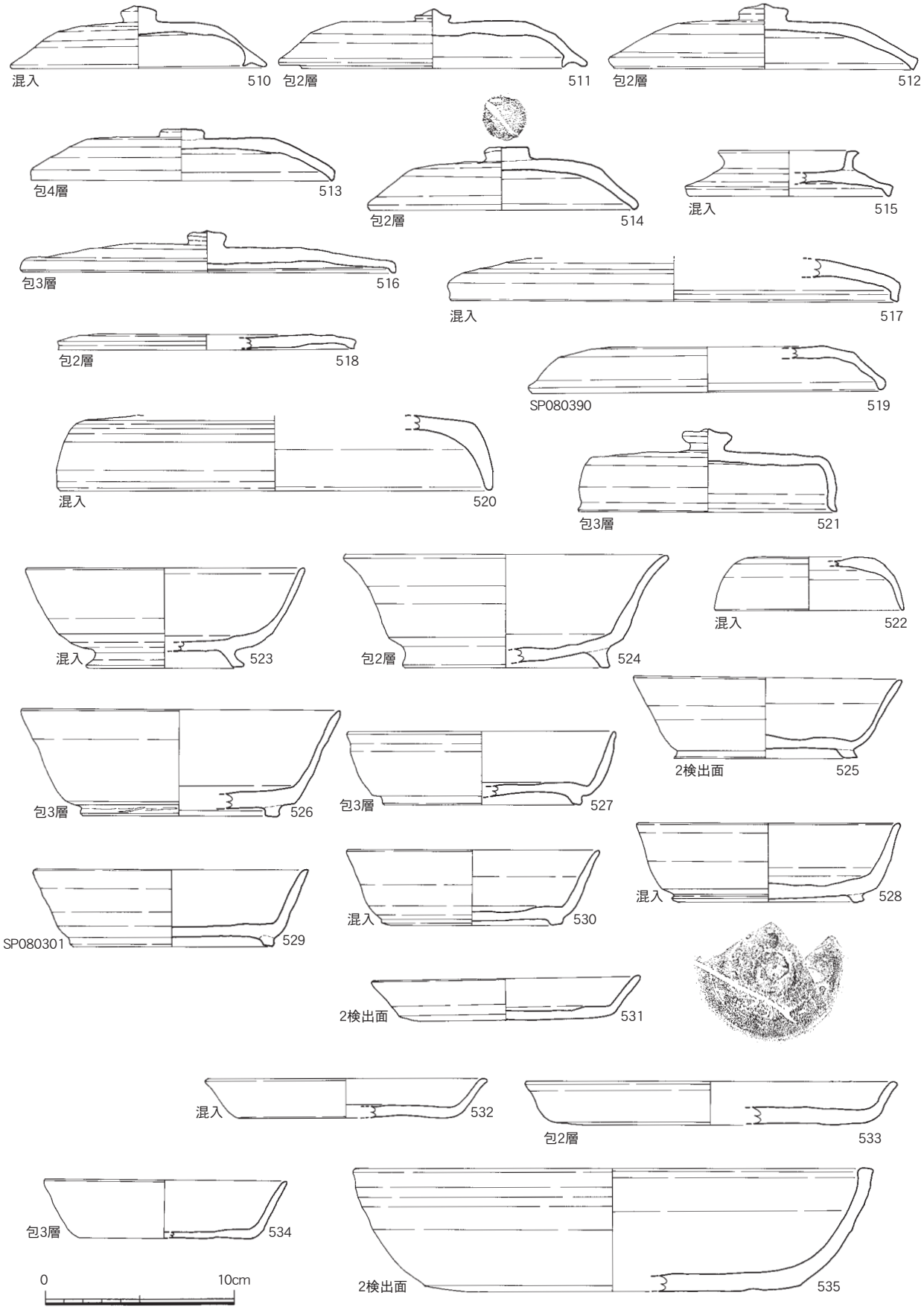


Fig.44　柱穴その他の出土遺物実測図 -2（1/3）

色を呈する。496 は口径 11.0㎝厚 0.6㎝と薄い。内外面器壁が荒れ調整は不明。胎土は白色粒を多く含み、内面は淡橙色外面は明褐灰色を呈する。時期は 8 世紀後半を示す。

SP080621（Fig.40）　2 面目東部の A2 グリッドで検出される。円形で径 52 深さ 45㎝を測る。

出土遺物　499・500 は土師器。499 は高台坏。高台径 9.4㎝を測る。高台は底部際の若干内側に施し、外方に強く張る。外底と体部は回転ケズリ内面と高台周りは回転ナデを施す。胎土は精良で、内面は浅黄橙色外面は淡橙色を呈する。500 は坏。口径 14.6㎝を測る。体部は直線的に開き、端部は若干外方に反る。内外面に回転ナデ後内面に緩い回転ヘラナデを施す。胎土は精良で内外面は橙色を呈する。501 は陶質土器壺胴部。内外面に丁寧なケンマを施す。胎土は砂質で精良。内外面は灰白色を呈する。時期は 9 世紀初頭を示す。

497 は SP-393 出土の溶解銅の滴。6 × 9㎜を測る。498 は SP-363 出土の流出滓。2.4 × 1.7 × 1.5㎝ 4.7g を測る。暗赤褐色を呈する。502・503 は越州窯系青磁碗。502 は後代遺構に混入。底径 7.9㎝で灰色の胎土に灰オリーブの不透明釉を掛け見込と畳付に目跡が残る。503 は後代遺構に混入。径 6.0㎝の削り出し高台で灰色の胎土に灰オリーブの不透明釉を掛ける。504 ～ 506 は緑釉陶器。504 は後代遺構に混入。高台径 6.8㎝の埦で灰白の胎土に淡灰緑色の薄い釉を掛ける長門系。505 は後代遺構に混入。径 7.0㎝の平高台の埦で黄灰色の胎土に灰黄色の釉を掛ける京都系。見込が鏡面状に摩滅し硯に転用される。506 は撹乱内出土。高台径 8.8㎝の埦で灰白の胎土に淡緑色の薄い釉を掛ける長門系。507 は包 4 層出土。口径 11.0㎝の灰釉陶器の鉢。黄灰色の胎土にオリーブ灰色の釉を外面に掛ける。509 は後代遺構に混入。陶質の甕で口縁沈線間に波状文、体部外面に木目直交タタキとカキメ内面に平行線の当具痕が残る。内面灰褐色外面は灰色で口縁は黒色。510 ～ 542 は須恵器。510 ～ 519 は坏蓋。510・512 は口縁内に受部を持つ。512 ～ 516・518・519 は口縁に低い返しを持つ。517 は口縁が屈曲する。514 は摘み上面にヘラ書き沈線を施す。515 は輪状の摘みを持つ。510 は後代遺構に混入。口径 13.6 器高 3.3㎝。白色粒を若干含み紫灰～暗青色を呈す。511 は包 2 層出土。口径 16.4 器高 3.1㎝。白色粒を若干含み灰白～青灰色を呈す。512 は包 2 層出土。口径 16.3 器高 3.4㎝。微細な白色黒色粒を若干含み褐灰～灰白色を呈す。513 は包 4 層出土。口径 16.1 器高 2.7㎝。微細な白色粒を少量含み灰～灰白色を呈す。514 は包 2 層出土。口径 14.3 器高 3.3㎝。白色粒を若干含み青灰～暗青色を呈す。515 は後代遺構に混入。口径 11.0 器高 2.4㎝。白色粒を若干含み灰～暗灰を呈す。516 は包 3 層出土。口径 20.0 器高 2.0㎝。胎土は精良、灰色を呈す。517 は後代遺構に混入。口径 23.6㎝。白色粒を含み灰～灰白色を呈す。518 は包 2 層出土。口径 135.6 器高 0.8㎝。白色粒を少量含み灰～暗青色を呈す。519 は SP-390 出土。口径 19.2 器高 2.4㎝。白色粒を少量含み灰褐～灰色を呈す。520 ～ 522 は壺蓋。520 は後代遺構に混入。口径 22.6 器高 4.0㎝。白色粒を多く含み灰～褐灰を呈す。521 は包 3 層出土。口径 13.8 器高 4.4㎝。胎土は精良で青灰色を呈す。522 は後代遺構に混入。口径 9.9 器高 2.9㎝。胎土は微細な白色黒色粒を少量含み灰～灰赤色を呈す。523 ～ 530 は高台坏。523 は後代遺構に混入。口径 14.6 器高 5.3㎝。白色粒を多く含み灰褐～暗灰色を呈す。524 は包 2 層出土。口径 17.2 器高 6.0㎝。白色粒を少量含み紫灰～灰白色を呈す。525 は 2 検出面出土。口径 14.2 器高 4.4㎝。白色粒を若干含み灰～暗灰色を呈す。526 は包 3 層出土。口径 17.0 器高 5.7㎝。微細な白色黒色粒を多く含み暗灰褐色を呈す。527 は包 3 層出土。口径 14.3 器高 3.9㎝。胎土は精良で灰色を呈す。528 は後代遺構に混入。口径 13.8 器高 4.3㎝。微細な白色黒色粒を含み灰～灰黄を呈す。529 は SP-301 出土。口径 10.4 器高 4.1㎝。白色粒を若干含み青灰～暗青色を呈す。530 は後代遺構に混入。口径 13.3 器高 4.0㎝。白色粒を少量含み暗青色を呈す。528 は高台内にヘラ書きがある。531 ～ 533 は皿。531 は 2 検出面出土。口径 14.2 器高

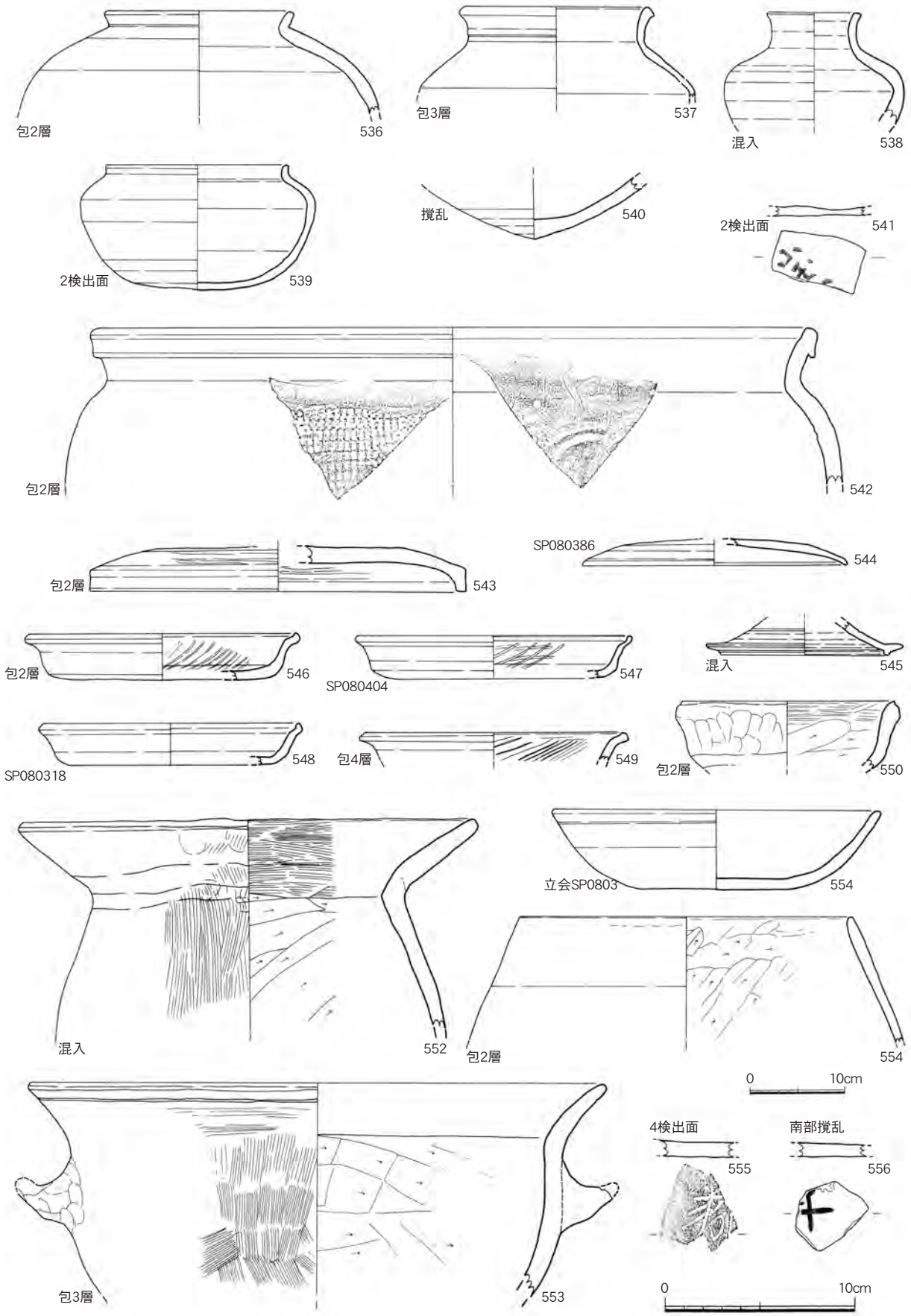
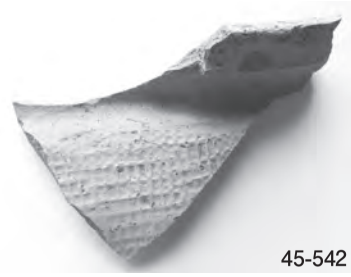
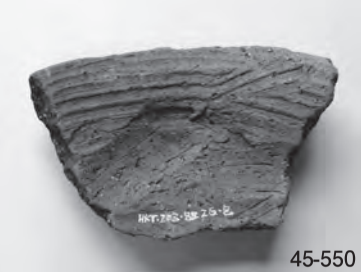


Fig.45　柱穴その他の出土遺物実測図 -3（1/3・1/6）





Ph.83　柱穴他出土遺物 -3

2.2㎝。白色粒を若干含み灰～灰白を呈す。532 は後代遺構に混入。口径 14.7 器高 2.1㎝。白色粒を少量含み黄灰～暗灰を呈す。533 は包 2 層出土。口径 19.6 器高 2.3㎝。白色粒を若干含み灰白～青灰色を呈す。534 は包 3 層出土の坏。口径 13.0 器高 3.1㎝。胎土は精良で灰白色を呈す。内底にヘラ書きがある。535 は 2 検出面出土の鉢。口径 27.4 器高 6.5㎝。白色粒を若干含み灰白～鈍い橙を呈す。536 ～ 539 は壺。536 は包 2 層出土。短頸壺で口径 10.0㎝。白色粒を若干含み紫灰～暗青灰色を呈す。白磁万年壺の写しと思われる。537 は包 3 層出土。短頸壺で肩が稜を成す。口径 10.4㎝。微細な白色粒を多く含み黒灰色を呈す。538 は後代遺構に混入。小壷では口径 4.7㎝。白色粒を少量含み灰色を呈す。539 は 2 検出面出土。器形の平たい短頸壺で。口径 11.6 器高 6.6㎝。白色粒を若干含み青灰～暗青色を呈す。540 は撹乱内出土。鉄鉢形の鉢底部で尖底。胎土は精良で灰白～青灰色を呈す。541 は 2 検出面出土。皿か坏の外底に「小玉□」の墨書がある。胎土は精良で灰白色を呈す。542 は包 2 層出土の甕。短頸で口径 38.4㎝。胎土は精良で灰白を呈す。543 ～ 568 は土師器 543 ～ 546 は坏蓋。543 は包 2 層出土。口縁が屈曲する。口径 19.8 器高 2.8㎝。白色粒を含み橙～鈍い橙色を呈す。544 は SP080386 出土。直口口縁で口径 14.0 器高 1.4㎝。白色粒を含み橙～鈍い橙色を呈す。545 は後代遺構に混入。口径 8.8㎝で受部を設けて天井は高く延び形態は経筒の蓋に近い。微細な白色赤色粒を少量雲母を多く含み橙色を呈す。546 ～ 549 は都城系の皿で内面に暗文を施す。546 は包 2 層出土。口径 14.6 器高 2.4㎝。胎土は精良赤橙色を呈す。547 は SP-404 出土。口径 14.6 器高 2.3㎝。胎土は精良橙色を呈す。548 は SP-318 出土。口径 14.0 器高 2.2㎝。胎土は精良橙色を呈す。549 は包 4 層出土。口径 14.2㎝。胎土は精良赤橙色を呈す。550 は包 2 層出土の未使用の銅取瓶。口径 11.8㎝。外面は指頭圧とナデ内面は口縁にヨコハケ以下にケズリを施す。白色粒を若干含み褐灰色を呈す。551 は立会 SP080003 出土の坏。口径 17.4 器高 4.2㎝。微細な白色粒を若干含み灰白～褐灰色を呈す。552・553 は甕。552 は後代遺構に混入。口径 23.8㎝。白色粒を含み橙～鈍い橙色を呈す。553 は包 3 層出土。把手を持つ浅い器形で口径 30.63㎝。白色粒を少量含み明黄褐から明褐色を呈す。554 は包 2 層出土の移動式竈。口径 34.8㎝。白色粒を多く含み黄橙～褐灰色を呈す。555 は 4 検出面出土。皿の外底に「郡」のヘラ書きがある。那珂郡か。白色粒を多く含み鈍い橙色を呈す。556 は撹乱内出土。坏の外底に墨書文字の一部が残る。白色粒を少量含み橙色を呈す。557 ～ 567 は焼塩壺。557 ～ 562 は円錐形の、563 ～ 567 は玄界灘式である。

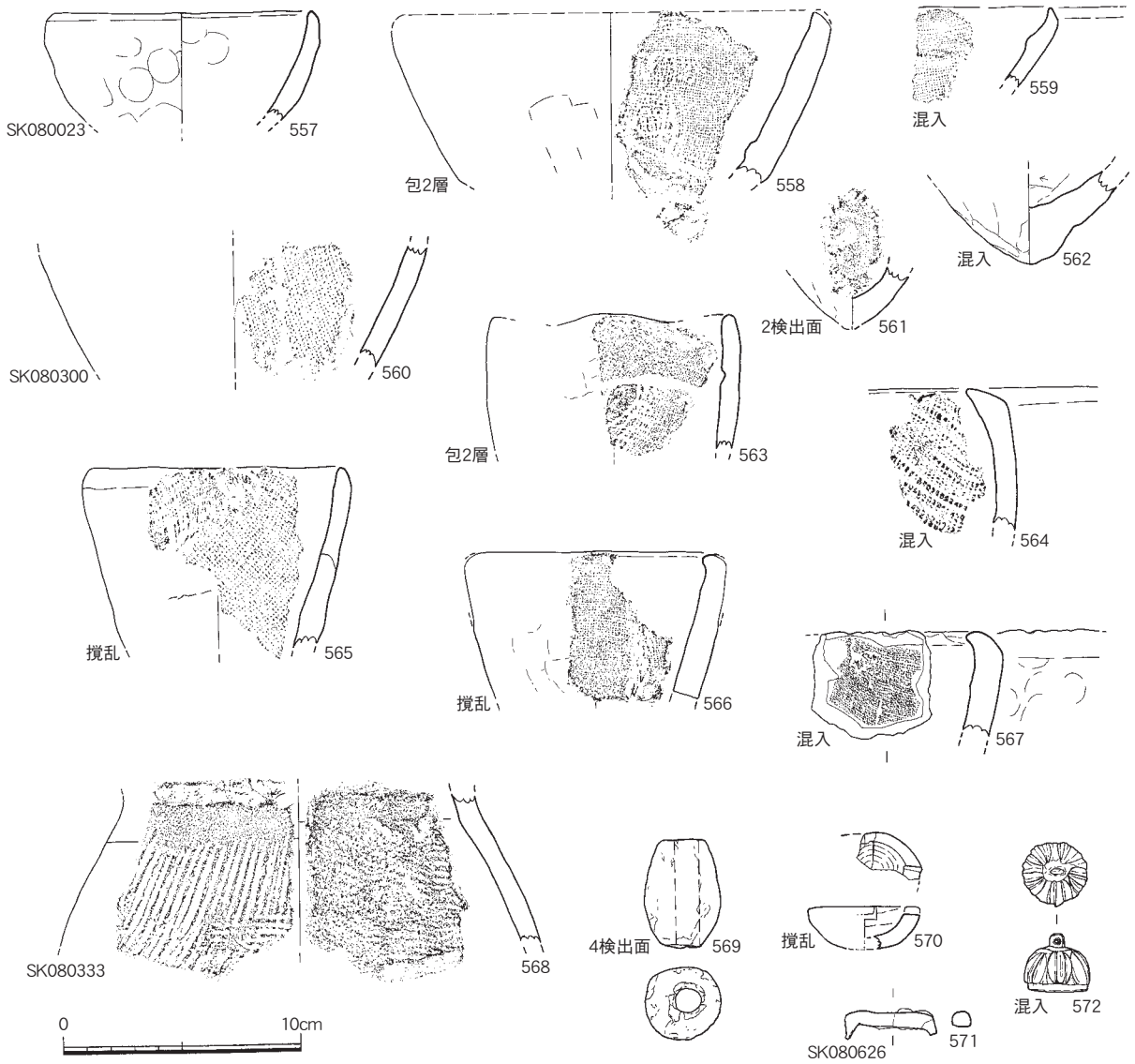
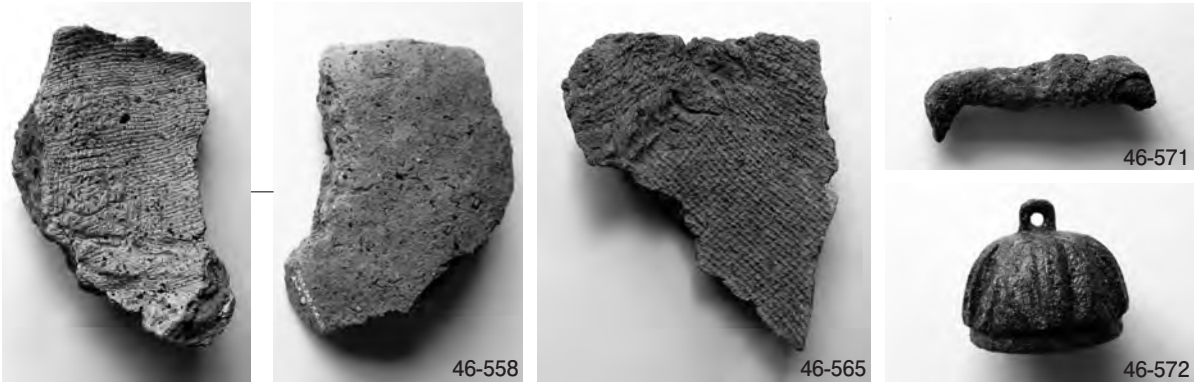


Fig.46　柱穴その他の出土遺物実測図 -4（1/3）



Ph.84　柱穴他の出土遺物 -4

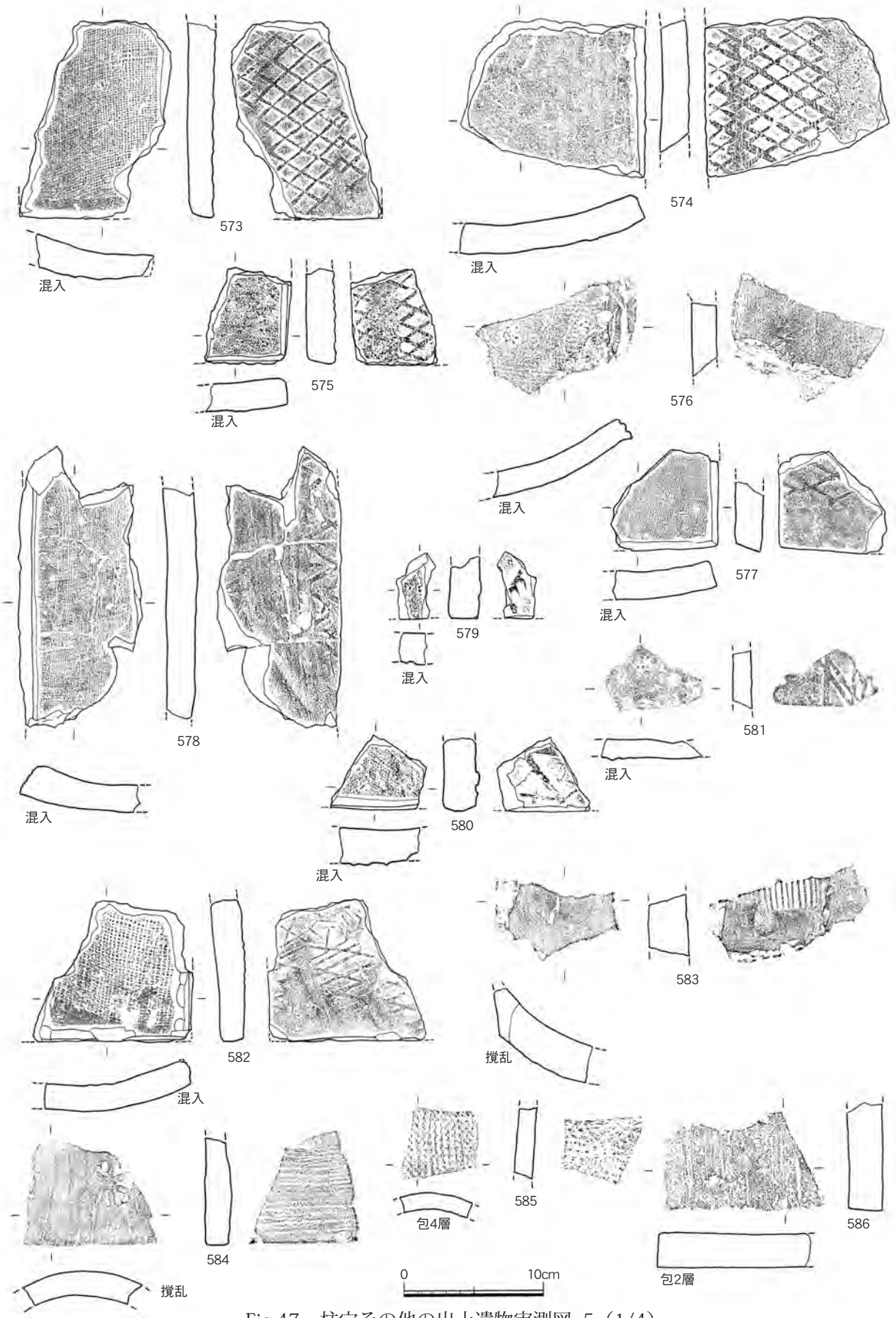
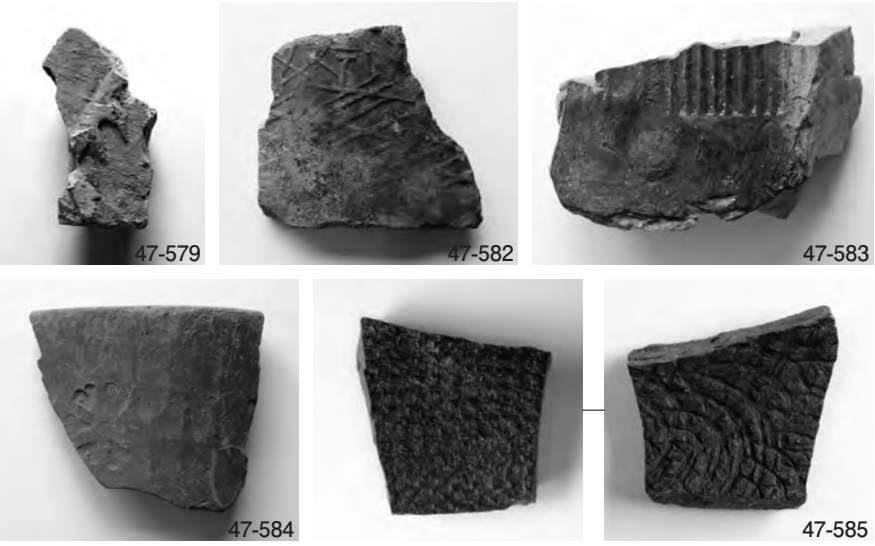


Fig.47　柱穴その他の出土遺物実測図 -5（1/4）

557・562 以外は内面に布目圧痕を残す。557 は後代遺構に混入。口径 10.8 厚 0.8㎝。内面はナデ。微細な白色黒色粒を含み灰白～黄橙色を呈す。558 は包 2 層出土。口径 18.4 厚 1.2㎝の大型。559 は後代遺構に混入。口縁部片で厚 0.7㎝。560 は SP-300 出土。胴部片で厚 0.9㎝。561・562 は尖底の底部。561 は 2 検出面出土。厚 1.1㎝。562 は後代遺構に混入。厚 2.3㎝。563 は口径 10.4 厚 0.8㎝。564 は口縁小片。後代遺構に混入。厚 1.2㎝。565 は撹乱内出土。口径 11.2 厚 0.8㎝。566 は包 2 層出土。口径 11.0 厚 1.2㎝。567 は口縁部小片。後代遺構に混入。厚 1.2㎝。568 は SP-333 出土。玄界灘式の甕胴部。頸部径 14.8 厚 0.9㎝。外面に木目直交のタタキ内面に平行弧線の当具痕が残る。569 は 4 検出面出土の管状土錘。3.2 × 3.0㎝孔径 1.0㎝ 42.5g を測る。570 は撹乱内出土。土製の鋳型で鈴と思われる。口径 4.6 器高 1.8㎝厚 6㎜を測る。内面は回転ヘラナデで整形。合わせ形で右に湯口上下に合わせの見当を刻む。胎土は微細な白色粒を少量含み灰白色を呈する。571 は SK-626 出土。小型の鉄鏃で 3.9 × 1.1㎝厚 0.8㎝を測る。572 は後代遺構に混入の銅製権。径 2.7 高 2.5㎝ 54.5g を測る。陽刻の花弁で飾る傘型の体部上に小さな偏平鈕を持ち円形の平台が付く。573 ～ 586 は瓦。574 ～ 584 は平瓦。573 ～ 575 は中形の斜格子叩きで 573 は後代遺構に混入。厚 2.1㎝。白色黒色粒を含み灰黄褐～褐灰色を呈す。574 は後代遺構に混入。厚 2.0㎝で側面はヘラナデ。白色黒色粒を含み灰白～黄灰色を呈す。575 は後代遺構に混入。厚 2.1㎝。白色粒を多く含み灰～黒灰色を呈す。576・577 は大形の斜格子叩きで 576 は後代遺構に混入。厚 1.7㎝。側面は粗いヘラナデ。白色粒を多く含み灰白～鈍い黄橙色を呈す。577 は後代遺構に混入。厚 2.1㎝で側面はヘラナデ。白色黒色粒を含み黄橙色を呈す。578 は後代遺構に混入。特大の斜格子叩きで中心に十字が入る。厚 2.5㎝。側面はヘラ切り後折断。白色粒を多く含み灰色を呈す。579 は後代遺構に混入。木葉文の叩きで厚 2.2㎝。白色粒を多く含み浅黄～橙色を呈す。580 は特大の斜格子叩きで中心に十字が入る。厚 2.7㎝。側面は丸くヘラナデ。白色粒を多く含み黄灰色を呈す。581 は後代遺構に混入。特大の不規則な二重斜格子叩きで厚 1.3㎝。白色粒を多く含み褐灰色を呈す。582 は後代遺構に混入。不規則な二重斜格子叩きで厚 2.1㎝。「今行」の逆字体銘があり斜ヶ浦瓦窯産。白色粒を多く含み灰～オリーブ黒色を呈す。側面はヘラ切り後折断。583 は撹乱内出土。平行叩きで厚 2.6㎝。側面はヘラナデ。白色粒を少量含み鈍い橙～黒灰色を呈す。584・585 は丸瓦。584 は凸面に平行叩き後タテヘラナデ後花文の印刻。凹面は平行当具痕が残る。側端面はヘラナデ。厚 1.8㎝。微細な白色褐色粒を少量含み橙～鈍い橙色を呈す。585 は包 4 層出土。須恵器瓦。凸面に格子目叩き凹面は同心円当具痕が残る。厚 1.2㎝。暗青灰色を呈する。586 は包 2 層出土。塼で、表裏はヘラケズリ、側端面はヘラナデ。厚 2.5㎝を測る。白色粒を多く含み灰赤～鈍い橙色を呈す。



Ph.85　柱穴他出土遺物 -5

5）古墳時代後期の調査

6 世紀から 7 世紀を中心とした時期である。まとまった遺構は土坑のみで 4 基と、弥生時代終末期と並んで最小期である。遺跡群全体での傾向で、かなり少ないが柱穴は 29 基あり、風成層 b 層下の第 3 面を中心に、第 2 面から最下面の第 5 面まで検出される。遺構は西部から中央部を中心に検出される傾向にある。土壙も大型のものは少ない。

遺物は遺構の数に比べて多く、須恵器土師器の他比較的多くの半島系土器が出土している。鉄滓を 1 点と、著しく被熱した土器片も検出している。

（1）土坑

柱穴以外の遺構を土坑が占め 4 基検出した。3 面を中心に 5 面目までの中西部で 3 基、東部で 1 基検出している。大型の土坑は少ない。

SK080413（Fig.48　Ph.86）　3 面目中央部 A12 グリッドに位置する。壁際で検出されたため半分は調査区外に延びる。平面は円形で、1.56 × 1.0m+ α 深さ 26㎝を測る。断面は逆台形で、中位で多くの遺物が堆積する。

出土遺物（Fig.49　Ph.87）　587 は須恵器壺蓋。口径 11.5 器高 4.0㎝を測る。口縁は中位でほぼ直線的に延び直口である。体部内外面は回転ナデ、天井から体部上位に回転ヘラケズリを施す。胎土は 4㎜以下の白色粒を多く含み、内面は青灰色外面は褐灰色を呈する。天井に直線 3 本組のヘラ記号がある。588・589 は土師器。588 は坏蓋。口径 10.8 器高 3.2㎝を測る。天井部は丸く、なだらかにやや湾曲する直口口縁が開く。体部内外面は回転ナデ、天井は手持ちのヘラケズリを施す。胎土は白色粒を少量含み、内面は橙色外面は灰赤色を呈する。天井に 587 と同様の直線 3 本組のヘラ記号がある。589 は特異な器形の高坏で、口径 14.7 脚径 11.6 器高 11.2㎝を測る。坏部は丸く、口縁下で緩く屈曲して直口口縁が短く延びる。開く脚部端部の内側に径 9.3㎝の小さな高台を設ける。坏

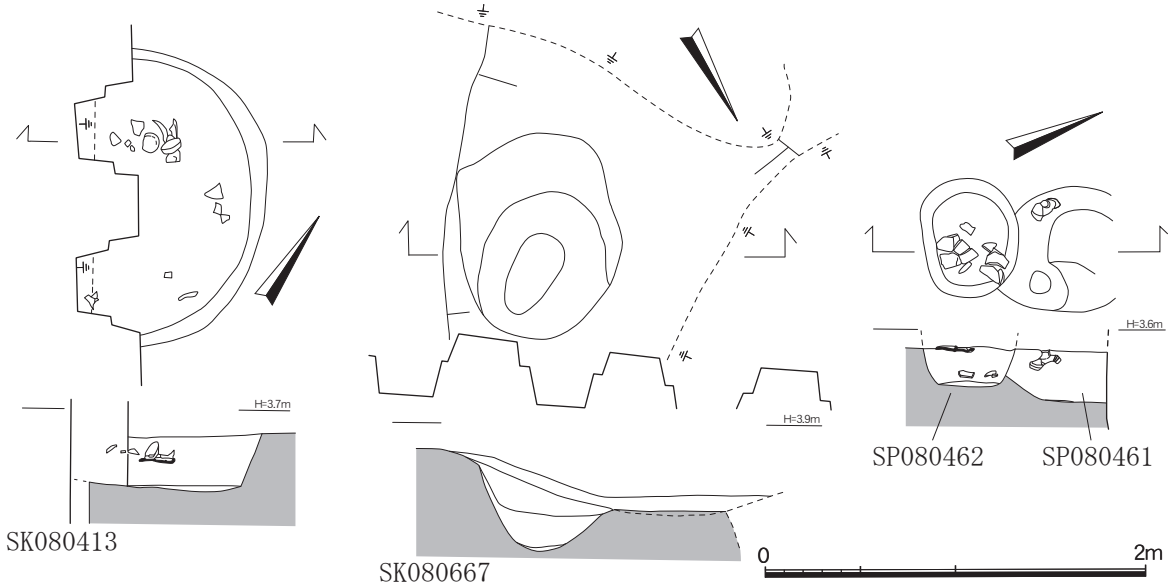


Fig. 48　SK080413・080667・SP080461・080462実測図(1/40)

Ph.86　SK080413（北から）

部と脚内外面は回転ナデ坏部外面下位にカキメを施し脚部上位の内外面にはシボリ痕が残る。胎土は微細な白色粒雲母を含み、内外面は橙色を呈する。545 はこれより一回り小さいが同種の脚部と思われる。時期は 7 世紀前半を示す。

SK080667（Fig.48）　4 面目東部 A－2 グリッドに位置する。壁際で検出され、また大半を撹乱と SE-657 に切られ全容が明らかでない。一部残る壁面は直線的である。残存で 1.50+ α × 1.60+ α m 深さ 30㎝を測る。断面は浅い皿状となる。上層に黒灰色砂質土、下層に灰色暗灰色砂質土の互層が堆積する。

出土遺物（Fig.49　Ph.87）　590 は須恵器坏蓋。口径 14.0 器高 3.1㎝を測る。口縁は直口口縁で体部が緩く湾曲して天井にいたる。口縁部内外面は回転ナデ、外面上位は回転ヘラケズリを施す。

Ph.87　SK080413・080667、SP080461・080462 出土遺物

Ph.88　SP080462（左・東から）

胎土は微細な白色粒を含み、内外面は黒褐色を呈する。591 は土師質の土製品の小片で、頸部で径 6.2 ㎝を測る。脚状部は片口の可能性もある。外面は指頭圧後ナデ、体部内面はヨコナデ、以下はヨコ・ナナメケズリを施す。全体が高温の被熱で陶器状に堅く焼締まり、体部内面の一部が厚さ 1㎜程赤化しやや融解している。胎土は黒灰色で硬く、内面は暗灰色外面は褐～黒褐色を呈する。鋳造関係遺物と思われる。時期は 7 世紀初頭を示す。

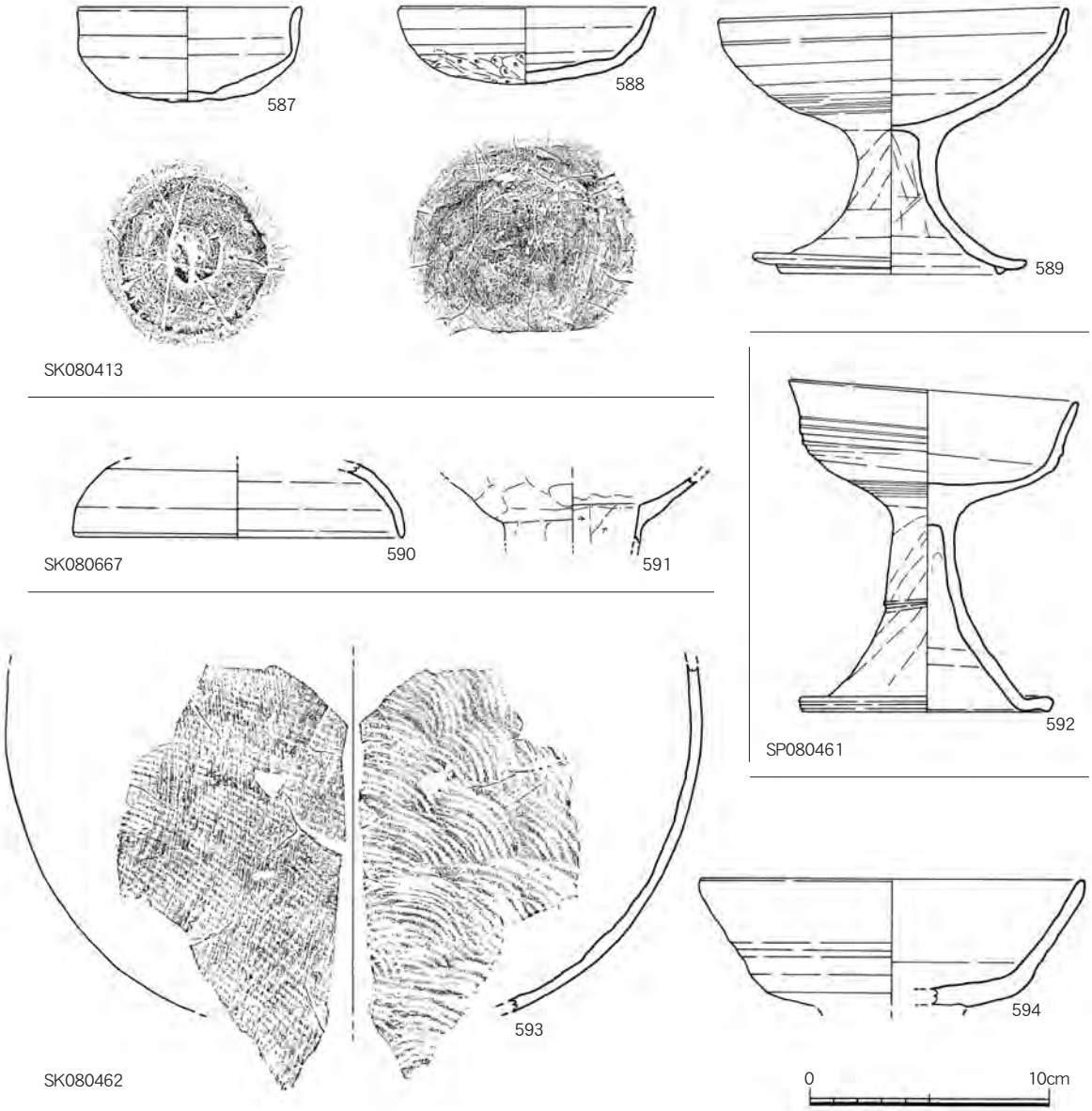


Fig.49　SK080413・080667、SP080461・080462 遺物実測図（1/3）

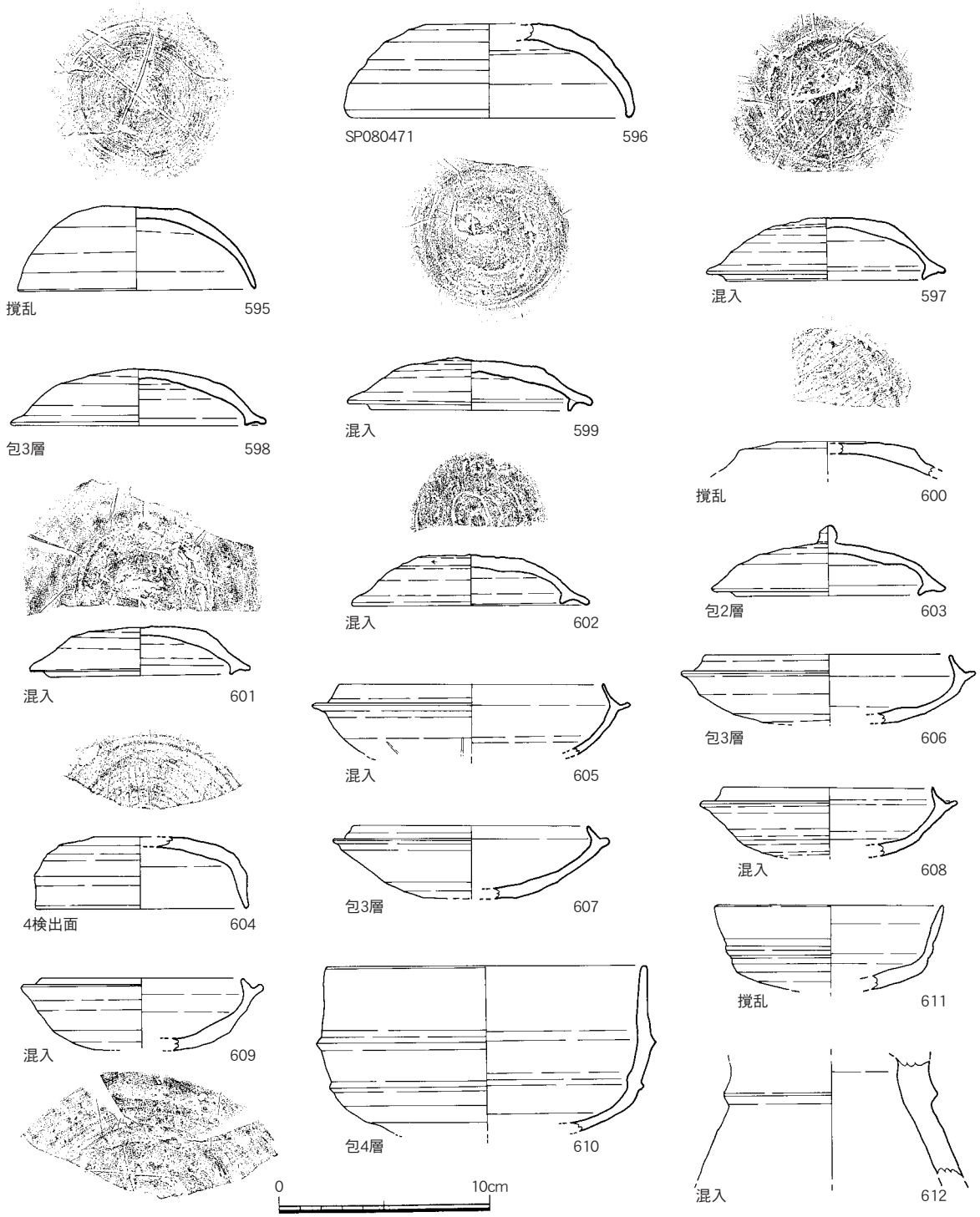


Fig.50　柱穴その他の出土遺物実測図 -1（1/3）

（2）柱穴その他の遺物（Fig.49 ～ 52）

SP080461（Fig.48　Ph.88）　4 面目中央部の B10 グリッドで検出される。壁際で検出され一部は調査区外となる。SP-462 に切られる。円形で径 65 深さ 28㎝を測る。

出土遺物（Fig.49　Ph.87）　592 は須恵器無蓋高坏。口径 14.7 脚径 11.6 器高 11.2㎝を測る。

Ph.89　柱穴他出土遺物 -1

坏部は丸い底部から屈曲して稜を成し、直口口縁がやや外反して開く。外面稜線上に 3 条、脚中位に 2 条沈線を施す。坏部と脚部下位の内外面に回転ナデ、坏部下位にカキメ、脚部内外面にはシボリ痕が残る。胎土は微細な白色粒を若干含み、内外面は明青灰～暗青灰色を呈する。他に金属坩堝が 3 点出土する。時期は 7 世紀初頭を示す。

SP080462（Fig.48　Ph.88）　4 面目中央部の A10 グリッドで検出される。SP-461 を切る。円形で径 63 × 48 深さ 22㎝を測る。

出土遺物（Fig.49　Ph.87）　593 は陶質土器甕胴部。胴径 28㎝を測る。外面は木目直交のタタキ後カキメ、内面に平行弧線の当具痕が残る。器壁は厚 6㎜と薄い。胎土は精良で内面は灰色外面は褐灰色を呈する。594 は軟質土器高坏の坏部で口径 16.2 器高 5.3㎝を測る。やや丸い底部から屈曲して稜を成し、直口口縁が強く直線的に開き、体部下位が凹線気味に窪む。内外面に回転ナデ、稜線下に回転ヘラナデを施す。胎土は微細な白色を若干含み、内外面は橙色を呈する。時期は 7 世紀初頭を示す。

595 ～ 615 は須恵器。595 は坏蓋。口径 11.2 器高 4.0㎝。体部内外面は回転ナデ、天井から体部上位に回転ヘラケズリ。天井部に「×」のヘラ記号がある。596 は蓋。口径 13.8 器高 4.4㎝。体部内外面は回転ナデ、天井から体部上位に回転ヘラケズリ。597 は坏蓋。口径 9.2 器高 3.0㎝。体部内外面は回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ後内外にナデ。天井部に 3 本単位のヘラ記号がある。598 は坏蓋。口径 12.1 器高 2.7㎝。体部内外面は回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。599 は坏蓋。口径 11.6 器高 2.5㎝。体部内外面は回転ナデ、天井に回転ヘラケズリ。天井部に「×」のヘラ記号がある。600 は坏蓋の天井部。体部内外面は回転ナデ、天井に回転ヘラケズリ。天井部に 7 本平行したヘラ記号がある。601 は坏蓋。口径 8.5 器高 2.3㎝。体部内外面は回転ナデ、天井部から体部上位に回転ヘラケズリ。天井部に「×」のヘラ記号がある。602 は坏蓋。口径 10.9 器高 2.5㎝。体部内外面は回転ナデ、天井から体部上位に回転ヘラケズリ。天井部に「○」のヘラ記号があり灰を被る。603 は坏蓋。口径 11.0 器高 3.3㎝。体部内外面は回転ナデ、天井部から体部中位まで回転ヘラケズリ。604 は壺蓋。口径 10.0 器高 3.4㎝。体部内外面は回転ナデ、天井から体部中位に回転ヘラケズリ。天井部に 5 本平行したヘラ記号がある。605 は　坏身。口径 12.4 器高 3.3㎝。体部内外面は回

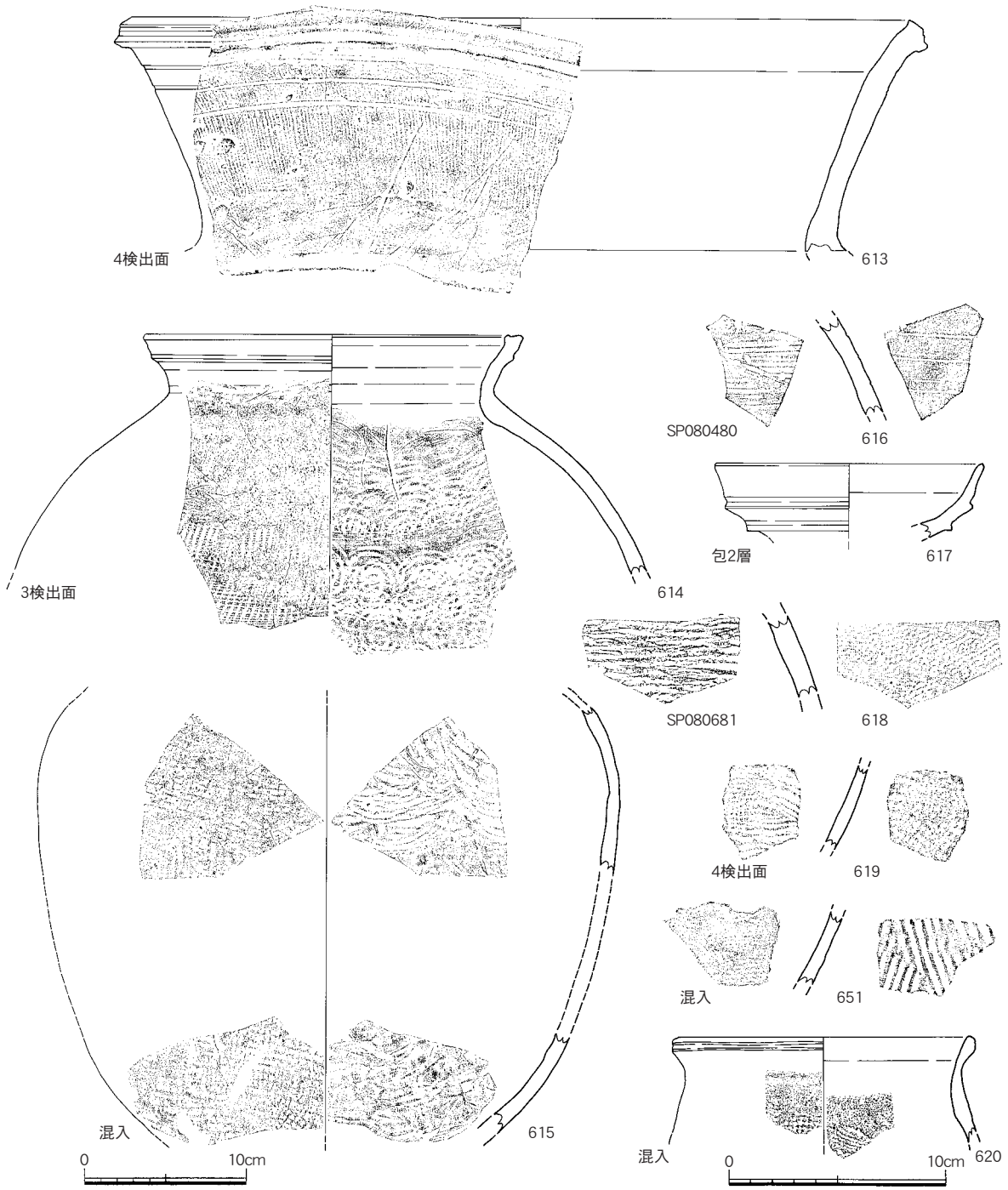
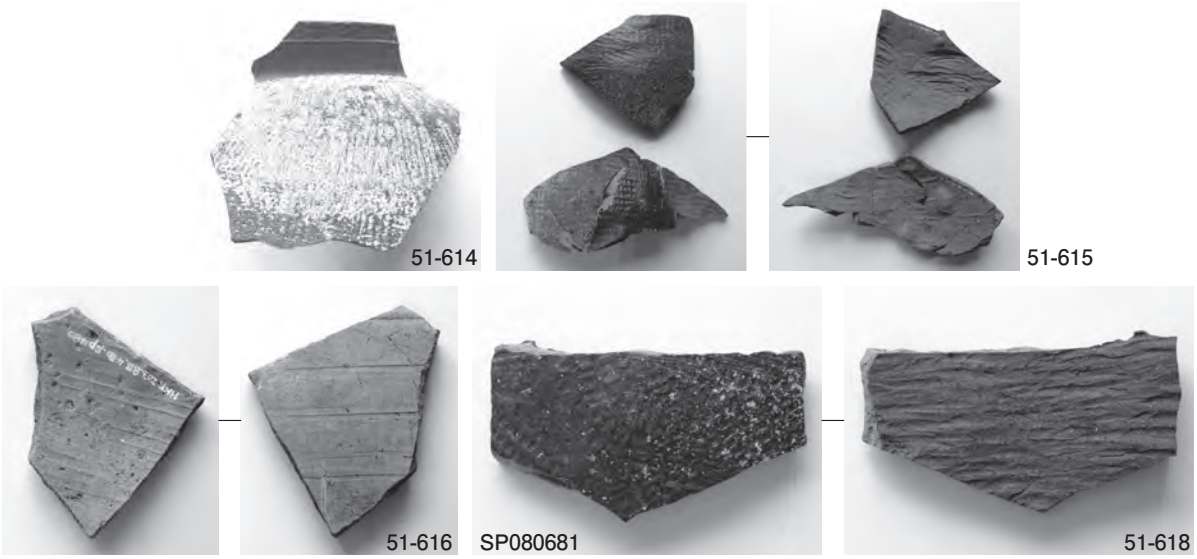


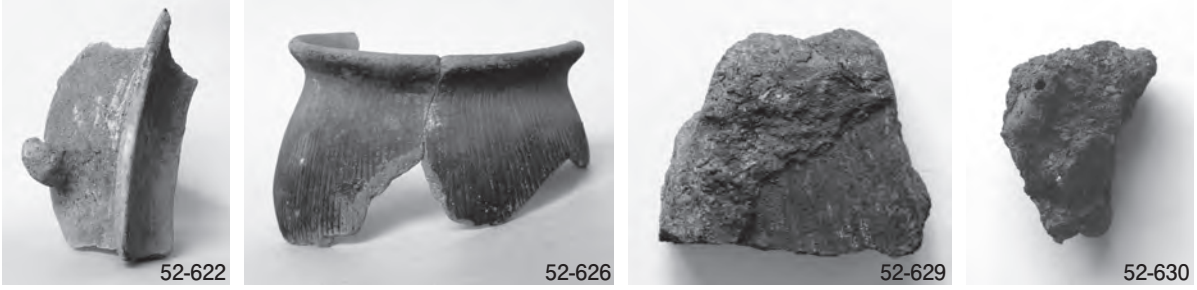
Fig.51　柱穴その他の出土遺物実測図 -2（1/4・1/3）

転ナデ。体部下位にヘラ記号が一部残る。606 は低い器形の坏身。口径 11.8 器高 4.2㎝。体部内外面は回転ナデ、外底から体部下位まで回転ケズリ。607 は坏身。口径 11.4 器高 3.3㎝。体部内外面は回転ナデ､外底から体部下位まで回転ケズリ。内底は不定方向ナデ。608 は坏身。口径 9.8 器高 3.3。体部内外面は回転ナデ、外底から体部下位まで回転ケズリ後回転ナデ。609 は坏身。口径 11.4 器高 3.4㎝。610 は脚付鉢の体部。口径 15.0㎝。体部内外面は回転ナデ、外底は回転ケズリ。611 は　無蓋高坏の坏部。口径 10.8㎝。体部の内外面に回転ナデ、外底は回転ケズリ。612 は筒形器台の頸部。突帯部で径 10.0㎝。内外面に回転ナデ。613 は甕口縁部で口径 50.0㎝。内外面に回転ナデ。614 は



Ph.90　柱穴他出土遺物 -2

甕口縁部で口径 13.4㎝。口縁内外面に回転ナデ。胴部外面は木目直交の平行タタキ後回転ナデとカキメ、内面に同心円当具痕が残り部分的に回転ナデ。胴部に自然釉が掛かる。615 は甕胴部で 36.0㎝を測る。外面は格子目タタキ、内面に平行弧線の車輪文当具痕が残る。616 は陶質土器甕胴部片。外面に丁寧な回転ナデ後浅い 4 条の沈線。内面は平行当具痕を部分的にナデ。617 は陶質土器高坏坏部。口径 12.4㎝を測る。外面屈曲部とその下に小さな三角突帯 2 条を削り出す。内外面に回転ナデ。618 は陶質土器甕胴部片。外面に格子目タタキ後カキメ。内面は平行線当具痕が残る。自然釉が掛かる 619 は軟質土器甕胴部片。外面に格子目タタキ、内面には平行線当具痕。651 は軟質土器甕胴部片。外面に木目直交の平行タタキ、内面には平行弧線当具痕が残る。620 は軟質土器甕口縁部。口径 13.4㎝。口縁外面が玉縁状に肥厚し浅い沈線を 2 条施す。口縁部内外はヨコナデ、胴部外面に木目直交の平行タタキ、内面には平行弧線当具痕が残る。621 から 628 は土師器。621 は坏。口径 13.0㎝。口縁内外はヨコナデ、外底に手持ちヘラケズリ。622 は大型の移動式竈の焚口片。幅 6㎝の庇が巡り長さ 5.5㎝の小さな把手を貼付する。外面はタテハケ後ナデ、内面はナナメヘラケズリ。623 ～ 626 は甕。623 は口径 23.8㎝。口縁内外はヨコナデ胴外面にタテハケ内面にナナメヘラケズリを施す。624 は口径 31.0㎝。口縁内面の稜は緩く、口縁内外はヨコナデ胴外面にタテハケ内面にタテヘラケズリ。625 は口径 15.0㎝。口縁内外はヨコナデ、胴外面は剥離で調整不明、内面にタテケズリ。626 は口径 12.9㎝。口縁内外はヨコナデ胴外面にタテハケ内面にナナメケズリ。627・628 は甑。627 は口径 24.6㎝。長さ 6㎝の把手を貼付する。口縁内外面はヨコナデ、以下の外面はタテハケ、内面はタテヘラケズリ。628 は口径 23.3㎝。長さ 4㎝の把手を貼付する。口縁内外面は



Ph.91　柱穴他出土遺物 -3

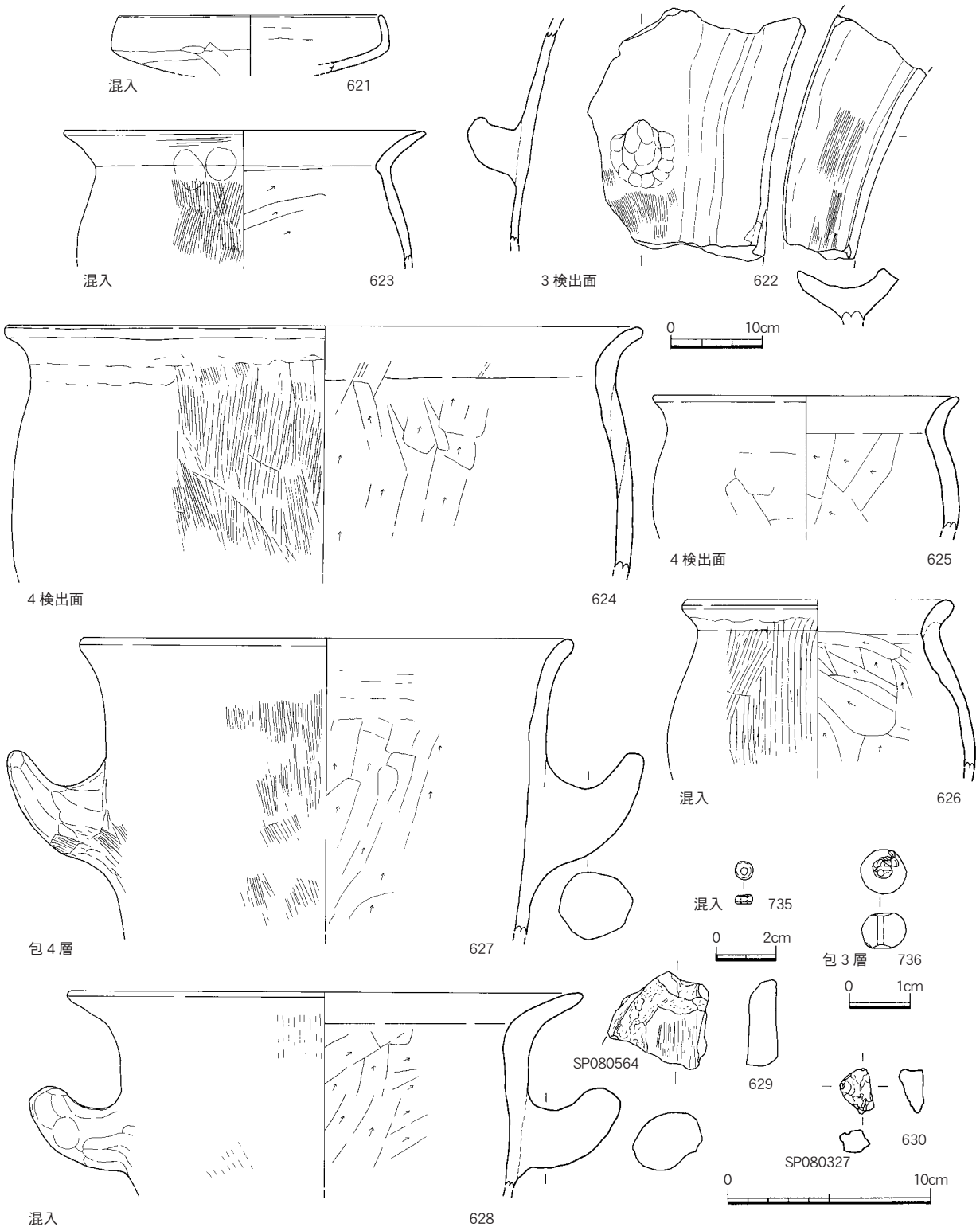


Fig.52　柱穴その他の出土遺物実測図 -3（1/2・1/3・1/6・1/1）

ヨコナデ、以下の外面はタテハケ後ヨコナデ、内面はナナメヘラケズリ。629　は高温の被熱で内面が融解する甕胴部片。胎土は精良で、内外面は暗褐～黒褐色断面は黒灰色を呈する。630 は鍛冶滓小片 2.3 × 1.7 × 1.2㎝ 4.3g を測る。暗赤褐色を呈する。735 は滑石臼玉。径 5.8 孔径 2.7 厚 2.7㎜を測る。736 は瑪瑙製の丸玉。径 14 孔径 2 厚 12.5㎜を測る。上面を幅 3㎜溝状に磨る。

６）古墳時代前期の調査

古墳時代前期と弥生終末期は小片の遺物での時期区分が難しいため、便宜上内面がハケメ調整のみのものを終末期に、内面にケズリ調整があれば前期と分別している。

遺構は竪穴住居３軒・土坑９基・溝３条と、全体の約 12% を占める。風成層ｂ層下の第３面から第４・５面を中心に検出される。遺構は、竪穴住居４軒は主に調査区中央から東部に纏まり、他の遺構は調査区全面に展開する。

遺物は山陰から近畿・東海地方までの外来系土器が少なからず出土し、半島系土器も少量含む。金属坩堝が遺構内から６点検出されており検討を要する。鉄器も１点出土している。

（１）竪穴住居

後代遺構からの削平が著しく、全体を知れるものは一つもない。平面形が方形で、浅く底面が平坦なものを竪穴住居とした。調査区第５面の中央から東部にかけて３軒、西部で１軒検出した。方向は地形に沿って南北方向にとる。

SC080522（Fig.53　Ph.9）　調査区中央寄りの O14 グリッドに位置する。SK-583 を切る。壁際で検出されたため半分は調査区外に延びる。平面は方形で角は隅丸状となる。1.95+ α × 1.3+ α m 深さ 16㎝を測る。床面は東に緩く下がる。狭い範囲での検出のため主柱穴は検出されない。

出土遺物（Fig.58）　676 は布留式系の直口口縁壺小片で、器壁が薄く口縁は直線的に開き口唇は窪み両端が若干突出する。口縁内面にヨコナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量含み、内外面は灰黄色を呈する。時期は前期前半を示す。

SC080568（-547）（Fig.53　Ph.93・94）　調査区中央の A6 グリッドあたりに位置する。SC－574 に切られる。-547 は壁溝で、同一遺構である。平面は方形と思われるが、壁面が壁溝を持った１辺しか遺存しない。残存で 2.4+ α × 1.34+ α m 深さ 5㎝を測る。径 20 ～ 40㎝程の柱穴がいくつかあるが主柱穴は判然としない。壁溝は幅 16㎝深さ 5㎝未満と浅く南端上部が径 40㎝程焼け、炉跡と考えられる。

出土遺物（Fig.54　Ph.95）　631 は近畿系二重口縁壺の口縁片。外面にタテハケ後内外を丁寧にナデ、櫛描波状文を施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。632・633 は高坏坏部小片。632 は外面にヨコナデ、内面にヨコハケを施し、内外面にタテ方向の暗文を施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。633 は外底との境が稜を成し、体部外面にタテハケ後内外面にヘラナデを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。634 は坏。口径 16.0㎝を測る。内外面に丁寧なヨコナデを施す。胎土は精良で、内外面は暗灰橙色を呈する。635 は在地甕の小片。口縁内面にヨコイタナデ後内外にヨコナデ、胴部外面にナナメハケ内面にヨコハケを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量含み、内外面は暗褐色を呈する。636・637 は布留式系の甕口縁

Ph.92　SC080522（北から）

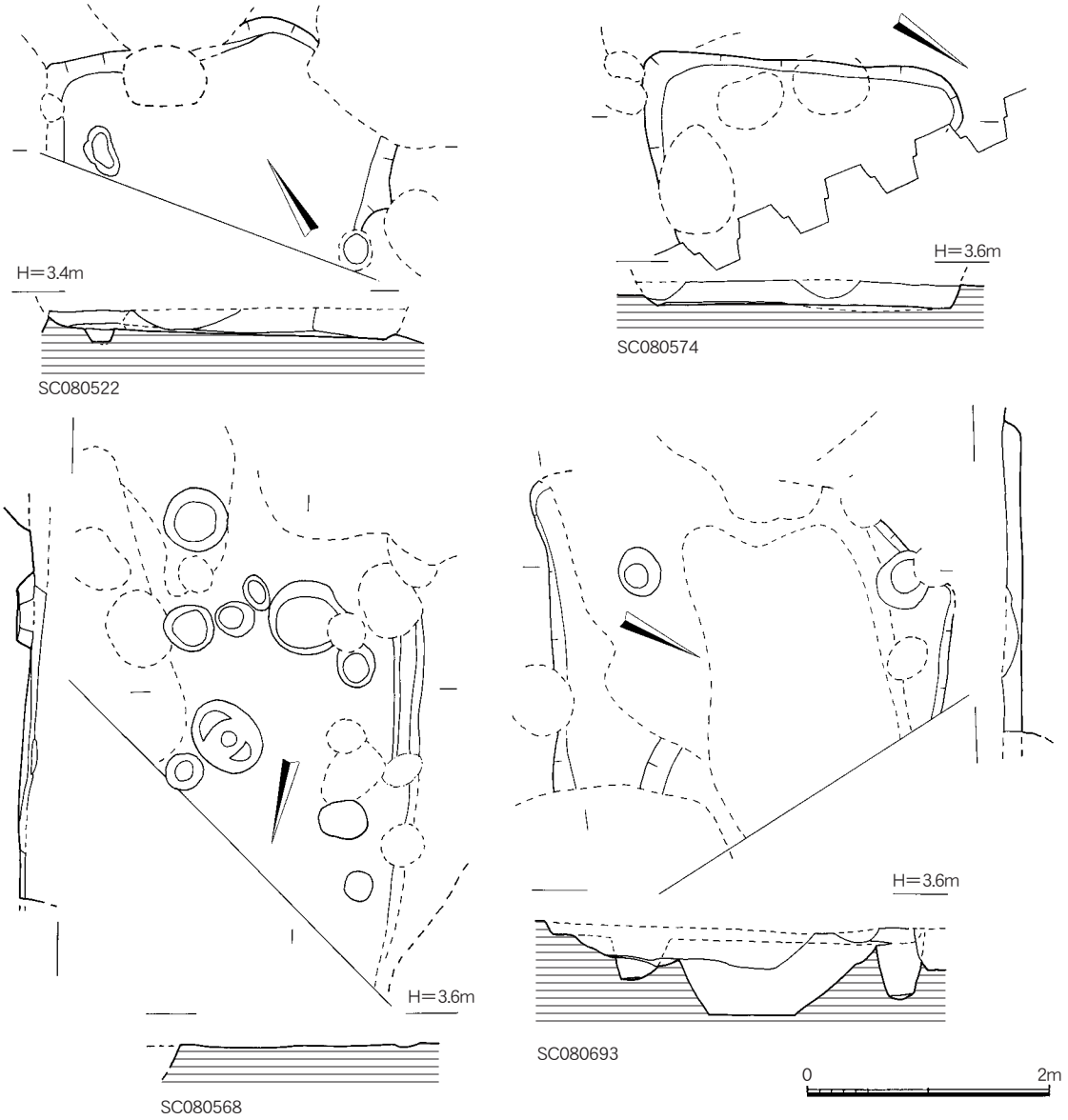


Fig.53　SC080522・080568・080574・080693 実測図（1/60）

小片で、636 は器壁が薄く、口唇内端を引き出す。内外面にヨコナデを施し、外面に煤が付着する。胎土は精良で、内面は鈍い黄橙色外面は黒色を呈する。637 は口唇内端が若干突出し、内外面にヨコナデを施す。胎土は精良で、内面は明褐灰色外面は鈍い橙色を呈する。638 は布留式系の甕胴部小片で、外面に左上がりの平行タタキ後上部にヨコナデ以下にヨコハケを施し、ヘラ描きの波状文を施す。内面はナナメヘラケズリ後ヨコナデを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒を多く含み、内面は褐灰色外面は明黄褐色を呈する。639 は幅 3.4㎝の方形の縁金状の鉄製品で 7㎜の直口部から体部が外方に開く。厚 1.5 ～ 2.5㎜を測る。

SC080574（Fig.53　Ph.96）　調査区中央の A4 グリッドあたりに位置する小型の住居で、SC－568 を切る。平面は方形で、壁際で検出されたため大半が調査区外に延びる。残存で 1.8 × 1.6+ α m 深さ 12㎝を測る。狭小の範囲のため柱穴は検出されていない。

出土遺物（Fig.54　Ph.95）　640 は二重口縁壺の口縁片。外面下端に小さな刻目を施すが、全体に器壁が荒れ調整は不明。胎土は 2㎜以下の白色粒を多く含み、内外面は鈍い黄褐色を呈する。

641・642 は丸底坩。641 は口径 12.6㎝を測る。外面はタテハケ後口縁上下にヨコナデ、内面は丁寧なナデを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。642 は口径 14.2㎝を測る。外面は丁寧なヨコヘラナデ、、内面は口縁にヨコイタナデ後全体を丁寧にナデる。胎土は精良で、内面は明黄褐色外面は橙色を呈する。643 は高坏坏部小片。外面にヨコナデ、内面にヨコイタナデ後タテ方向の暗文を施す。胎土は精良で、内面は鈍い黄色外面は鈍い黄橙色を呈する。644 は低脚坏の脚部。脚部中央に径 7㎜の穿孔がある。坏内面と脚外面は丁寧なナデ、脚内面は接合部に粗いナデ以下にナナメハケを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量含み、内外面は橙色を呈する。645 は坏。口径 12.2㎝を測る。内面から口縁外面に丁寧なヨコヘラナデを、外面口縁以下に粗いヘラナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を含み、内外面は橙色を呈する。646 は布留式系の甕口縁小片で、器壁が薄くやや外湾気味に開き、口唇内端が突出する。外面に斜位の平行タタキ痕が残り内外面にヨコナデを施し、外面に煤が付着する。胎土は精良で、内面外面は灰白色を呈する。他に金属坩堝が出土する。時期は前期前半を示す

SC080693（Fig.53　Ph.97）　調査区東部の A0 グリッドに位置する。SE-657・SD-670 に遺構の大半を切られる。平面は北側隅が 130°を測る不整方形で、2.2 × 1.75+ α m 深さ 7㎝を測る。中心部分を SD-670 に切られるため主柱穴は明らかでない。

出土遺物(Fig.54)　647 は丸底坩の口縁片。内外面は丁寧なヨコヘラナデを施す。胎土は精良で、内外面は明橙色を呈する。648 は坏で口径 12.6㎝を測る。内外面は丁寧なヨコヘラナデを施す。胎土は精良で、内面は橙色外面は鈍い橙色を呈する。649 は坏で口径 9.2㎝を測る。内面から口縁外面は丁寧なヨコナデを、以下に粗いナデを施す。胎土は精良で、内外面は明黄褐色を呈する。650 は山陰系の低脚坏の脚部。脚径 8.9㎝で内面中央がへそ状に窪む。内外面に丁寧なヘラナデを施し、内面には放射状にヘラ当て痕が残る。胎土は精良で、内外面は褐色を呈する。時期は前期前半を示す。

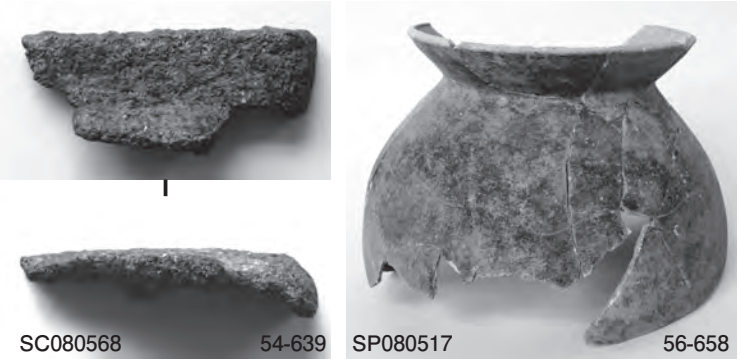
（2）土坑

土坑は第 5 面を中心に第 3 面から検出され、西部に 2 基、中央部に 3 基、東部に 4 基と、東部から中央寄りに分布する。大半は廃棄土坑である。

SK080453（Fig.55）　4 面目西部寄りの O14 グリッドに位置する。SK-413 に切られ、壁際で検出されたため半分は調査区外に延びる。平面は円形で、1.15+ α × 0.7+ α m 深さ 20㎝を測る。断

Ph.93　SC080568（南から）

Ph.94　SC080568 炉跡（東から）



Ph.95　SC080568、SP080517 出土遺物

面は逆台形で、底面は平坦である。

出土遺物（Fig.56）　652 は布留式系の甕口縁小片で、口唇は平坦で内端が若干突出し、口縁内外面にヨコナデを施す。胎土は精良で、内外面は鈍い黄橙色を呈する。653 は土師器丸底坩で、口縁が大きく開き体部は小さく偏平な器形である。口径 13.4㎝を測る。口縁内面にヨコイタナデ後内外全面に丁寧なヨコ

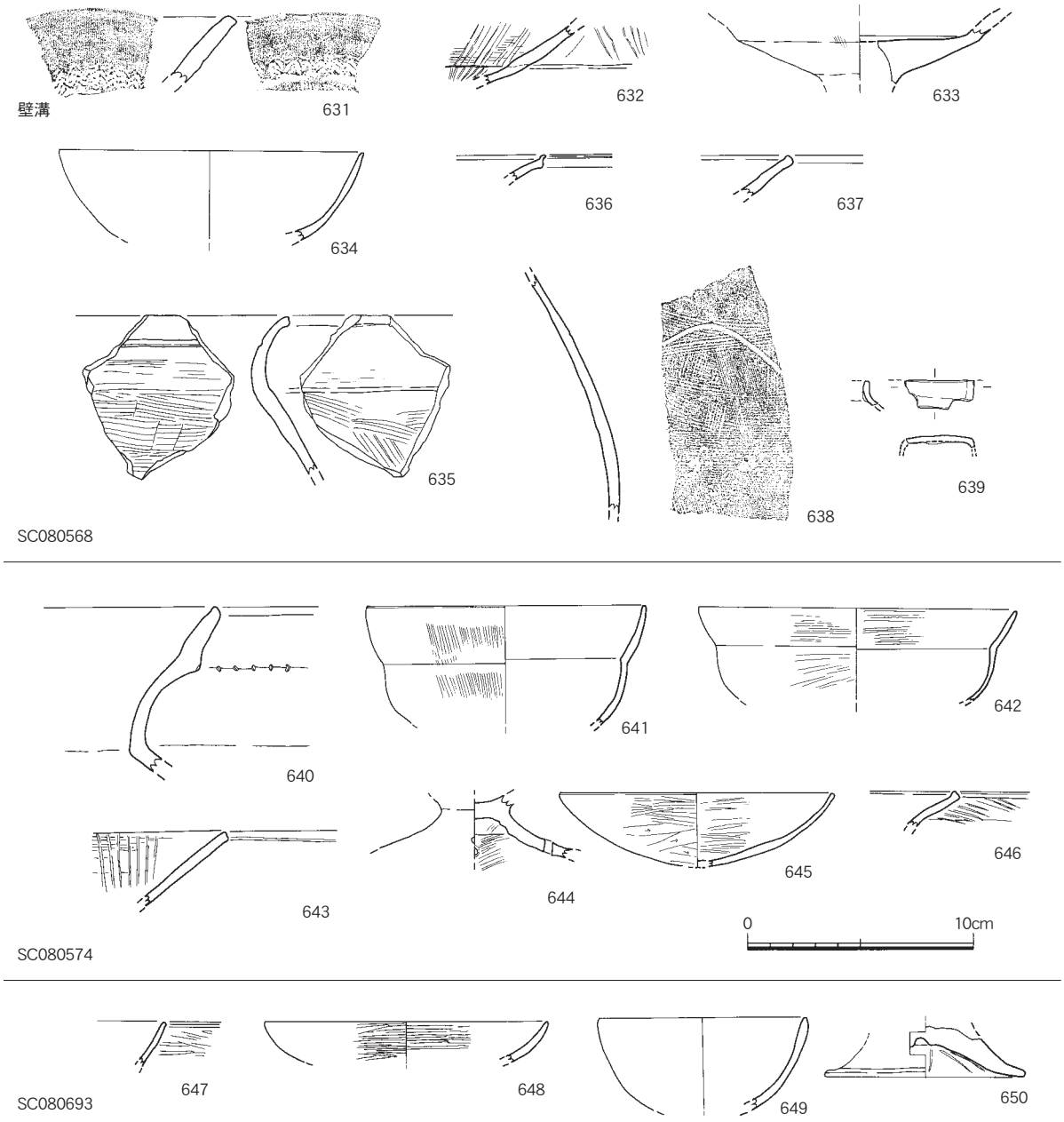


Fig.54　SC080568・080574・080693 出土遺物実測図（1/3）

Ph.96　SC080574（西から）

Ph.97　SD080670･SC080693（東から）

ヘラナデを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈し、外面に煤が付着する。前期前半を示す。

SK080583（Fig.55）　5 面目中央部 O12 グリッドに位置する。SC-522 に切られ、壁際で検出されたため半分は調査区外に延びる。壁面は 1 辺しか残っておらず、これが直線的に延びるため平面は方形と思われる。現況で 1.5+ α × 0.85+ α m 深さ 12㎝を測る。壁面は直線的で底面も平坦なため竪穴住居の可能性もある。断面は逆台形で、底面は平坦である。

出土遺物（Fig.56）　654 は布留式系の甕口縁で、口径 13.8㎝。口縁は内湾気味に開き口唇は窪み内端が突出する。口縁内面にヨコハケ後内外面にヨコナデを施す。胎土は精良で、内面は褐灰色外面は鈍い黄橙色を呈する。655 は布留式系の直口口縁壺小片で、器壁が薄く口縁は直線的に開き口唇は窪み両端が若干突出する。口縁内面にヨコナデを施す。胎土 1㎜以下の白色粒を少量含み、内面は灰黄色外面浅黄色を呈する。656 は庄内系小形器台の体部で、口径 10.2㎝を測る。口唇内端が大きく垂直に延び若干外方に引き出す。内外面に丁寧なヨコヘラナデ後内面口縁以下に放射状の暗文を施す。胎土は精良で、内面は明褐色外面は褐色を呈する。時期は前期前半を示す。

SK080684（Fig.55　Ph.98）　5 面目中央 A0 グリッドに位置する。SE-64・SC-693 に切られる。平面は不整円形で、1.26 × 0.84+ α m 深さ 30㎝を測る。断面は逆台形で、底面は平坦で西に下がる。

出土遺物（Fig.56）　657 は在地系の甕底部。径 8.2㎝の小さなレンズ底を成し、外底はタテハケ以上にナナメハケを施し、内面はタテハケ後疎らなナナメイタナデ、内底に指頭圧痕が多く残る。胎土は 1㎜以下の砂粒を含み、内面は暗褐灰色外面は鈍い褐～黄橙色を呈する。他に内面ケズリの破片を多く出土し、時期は前期前半を示す。

Ph.98　SK080684（南から）

（3）溝

溝は少なく、第 5 面の中央部で 1 条、東部で直角に交わる 2 条の計 3 条を検出した。

SD080573（Fig.55）　5 面目東部の A-4 グリッドに位置する。大溝 SD-700 に近接して直交する位置にある。幅 0.34 ～ 1.3m 深さ 16㎝で -700 方向

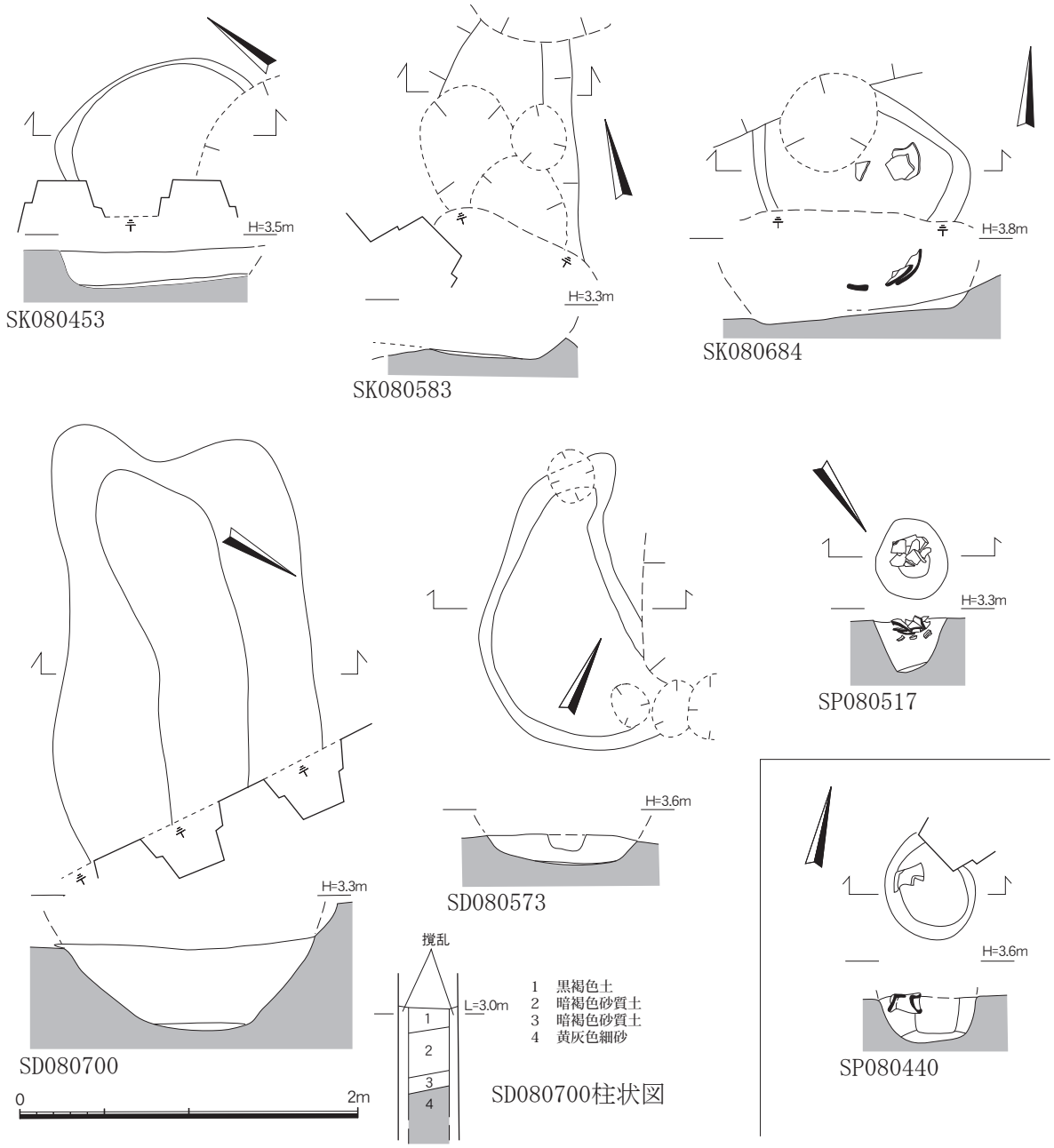


Fig.55　SK080453・080583・080684、SD080573・080700
SP080517・080440実測図(1/40)

に広がる。方位をN-5°-Wにとる。

出土遺物（Fig.57）　659は布留式系の甕口縁小片で、口唇内端が若干突出し、口縁内外面にヨコナデを施す。胎土は精良で、内外面は浅黄橙色を呈する。660は高坏坏部片で、外面下位で低い段を成す。内外面に丁寧なヨコヘラナデを施す。胎土は精良で、内外面は浅黄橙色を呈する。時期は前期前半を示す。

SD080700（Fig.55　Ph.99）　5面目東部のA2グリッドに位置する。SD-670と重なってこれに切られるため遺構の上位を欠失する。現況で幅1.5m深さ78㎝で東に延びる。埋土の堆積は上位から1層-黒褐色土・2層-暗褐色砂質土・3層-黄灰色細砂の地山土を混じる漸移層となる。方位をN-58°-Eにとる。

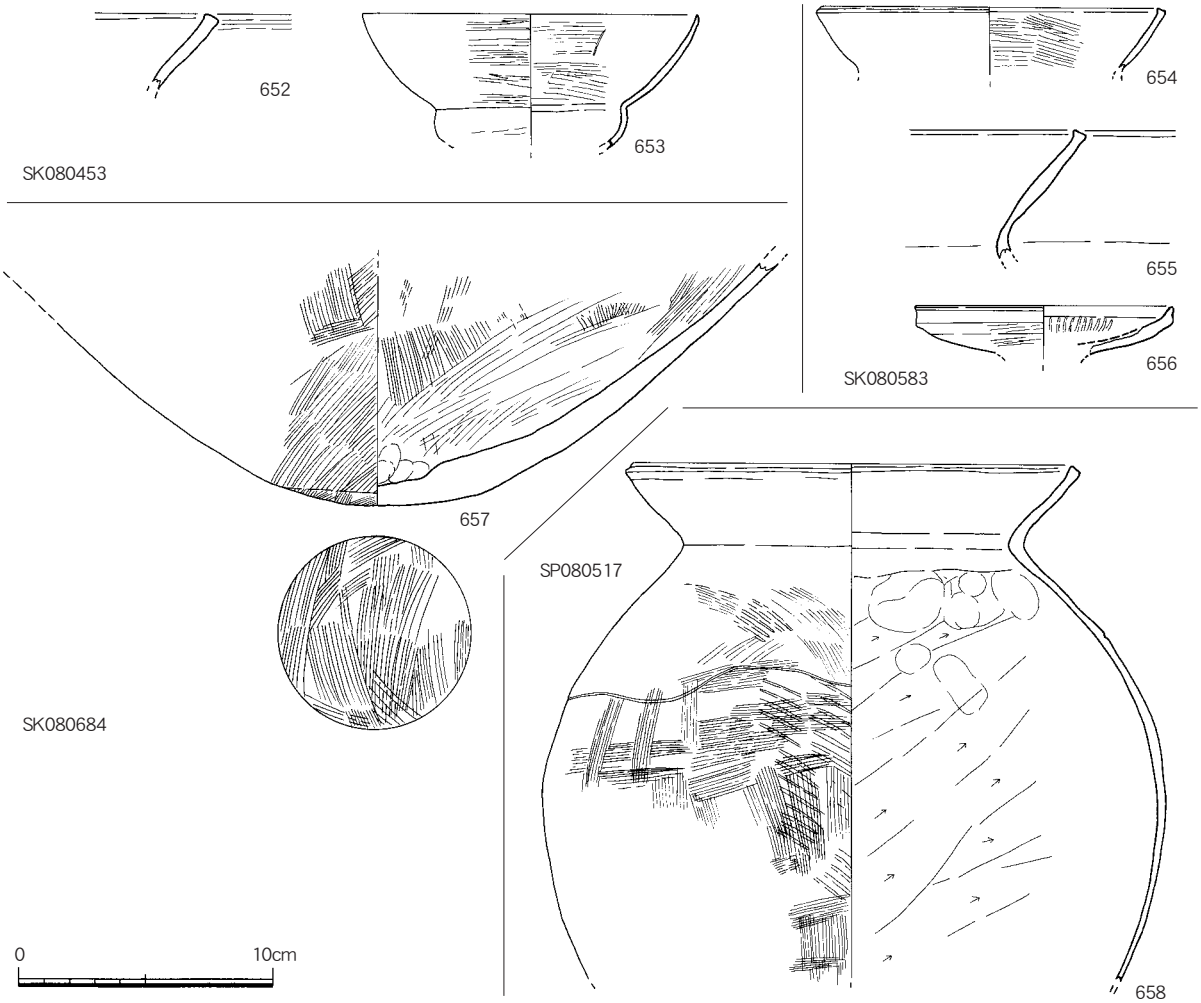


Fig.56　SK080453・080583・080684、SP0080517 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.57）　661 は壺の口縁片。外湾する口縁の口唇端面が窪む。内外面にヨコナデ・ケンマを施す。胎土は精良で、内外面は暗褐色を呈する。662 は長頸壺の胴部で径 10.8㎝を測る。外面上半にナナメハケ後頸部下に細かなヨコヘラナデ、下半に粗いヨコヘラナデ、内面上半に 2 段のケズリ様のヨコヘラナデ、下半にナデを施す。境に接合痕が残る。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。663 ～ 665 は丸底坩。663 口径 9.8㎝を測る。外面はタテハケ後細かなヨコケンマ、内面は丁寧なナデを施し口縁にナナメの暗文を施す。胎土は 2㎜以下の白色粒を少量含み、内外面は橙色を呈する。664 は低い器形で口径 14.8㎝を測る。外面は細かなタテハケ後内外面に細かなヨコケンマを施す。胎土は精良で、内外面は明黄褐色を呈する。665 は外面は細かなタテハケ後細かなヨコケンマを、内面は口縁に細かなヨコハケ以下に丁寧なナデを施す。胎土は精良で、内外面は明赤褐褐色を呈する。666 は近畿系有段口縁鉢の口縁部。口縁は緩

Ph.99　SD080700（手前・南から）

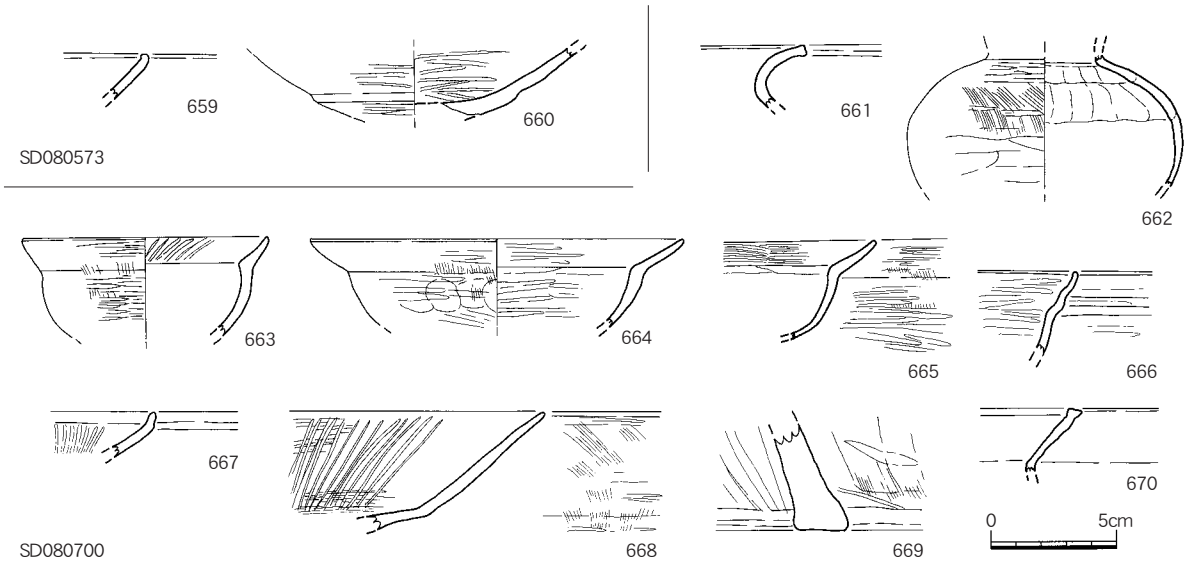


Fig.57　SD080573・080700 出土遺物実測図（1/3）

い「S」字を描き器壁が薄い。内外面に丁寧なヨコケンマを施す。胎土は精良で、内外面は赤褐色を呈する。667 は庄内系小形器台の口縁片で、口唇内端が垂直に延び、内外面に丁寧なヨコケンマ後内面に放射状の暗文を施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。668 は高坏坏部小片。外面にナナメハケ後丁寧なヨコケンマ、内面に細かなヨコハケ後放射状の暗文を施す。胎土は精良で、内外面は赤褐色を呈する。669 は支脚の下端部片。外面にケズリ様の粗いタテナデ、内面にはシボリ痕が残る。胎土は 2㎜以下の白色粒を多く含み、内面は橙色外面は暗褐色を呈する。670 は布留式系の甕口縁小片で、平坦な口唇端部が窪み両端がやや突出する。口縁内外面にヨコナデを施す。胎土は 1㎜以下の白色粒を多く含み、内面は鈍い黄橙色外面は褐灰色を呈する。時期は前期前半を示す。

（4）柱穴その他の遺物（Fig.56 ～ 59　Ph.101）

SP080517（Fig.55　Ph.100）　5 面目中央部の O14 グリッドで検出される。SC-522 を切る。上面で破砕された甕が出土する。円形で径 42 深さ 30㎝を測る。

出土遺物（Fig.49　Ph.87）　592 は布留式系の甕。口径 18.0㎝。口縁は内湾気味に開き口唇は窪み内端が突出する。内面頸部は稜を成さない。胴の張りは中位にある。口縁内面から外面頸部下までヨコナデ、胴部に平行タタキ後細かなヨコハケ後ヘラ描きの波状文を施す。内面頸部下に円形の無文当具痕が残り以下にナナメヘラケズリを施す。胎土は 2㎜以下の白色粒を含み、内面は灰黄褐色外面は鈍い黄褐～褐色を呈する。時期は前期前半。

671 は包 4 層出土の在地系の二重口縁壺。頸部で径 15.8㎝測る。口縁屈曲は緩く外面口縁部にヨコハケ以下にタテ・ナナメハケ部分的に緩くナデる。口縁屈曲部に浅い沈線を 1 条施す。内面は口縁部にヨコハケ頸部にナナメハケ後部分的に緩くナデ、以下にナナメケズリ後不定方向にナデる。胎土は白色粒を含み、内外面は灰白～鈍い黄橙色を呈する。672 は SP-442 出土の近畿系の二重口縁壺。口径 26.6㎝測る。長く水平に延びた屈曲から稜を成して端部が窪む口縁が外反する。外面は粗いタテハケ後緩くナデ上下にジグザグの暗文を施し、内面は粗いヨコハケ後緩くナデ上下にジグザグの暗文を施す。胎土は白色粒を多く含み、内面は黒色外面は褐灰～鈍い橙色を呈する。673 は後代遺構に混入の小形の二重口縁壺。口径 12.2㎝測る。口縁がほぼ垂直に立ち上がる。内外面にヨコナデ施す。胎土は白色粒を少量含み、内外面は鈍い橙色を呈する。674 は包 3 層出土の近畿系の二重

Ph.100　SP080517

口縁壺の頸部。頸部径 8.8㎝を測る。胴部に口頸部を乗せたため段を成す。器壁は薄く頸部内面～外面にヨコナデ内面頸部下にヨコケズリを施す。胎土は白色粒を含み、内外面は灰黄色を呈する。675 は後代遺構に混入の山陰系の直口壺口縁。口径 10.0㎝測る。口縁は若干外傾して平坦口縁が直線的に立ち上がる。内外面にヨコナデ後外面にタテ暗文を施す。暗文部は黒色に変化する。胎土は白色粒を若干含み、内外面は明赤灰色を呈する。677 は SP-492 出土の丸底坩。口径 11.0㎝を測る。外面は細かなヨコケンマ内面は細かなヨコハケ後頸部にヨコケンマを施す。胎土は微細な白色粒を少量含み、内外面は黄褐色を呈する。678 は包 3 層出土の丸底坩。口径 10.8㎝を測る。外面上半は細かなヨコケンマ以下はタテケズリ後ヘラナデ、内面は丁寧なナデを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。679 は撹乱内出土の直口口縁が強く開く鉢口縁。口径 17.2㎝を測る。内外面にヨコナデを施す。胎土は精良で、内面は鈍い橙色外面は明褐灰色を呈する。680 は後代遺構に混入の近畿系有段口縁鉢の口縁部。口径 16.0㎝を測る。口縁は長めの屈曲部から外反気味の直口口縁が高く延びる。内面口縁部に細かなヨコハケ以下にタテハケ後全面に丁寧なヨコケンマを施す。胎土は精良で、内外面は鈍い橙色を呈する。681 は包 4 層出土の近畿系脚坏坩。口径 12.0㎝を測る。口縁が大きく開き体部は小さい。口縁内面にヨコイタナデ後丁寧なタテケンマ、外面に丁寧なヨコケンマを施す。胎土は精良で、内面は赤橙色外面は橙色を呈する。682 は後代遺構に混入の近畿系の高坏脚部。外面は細かなタテハケ後下位にヨコハケ、内面はタテヘラケズリを施す。胎土は精良で、内外面は明褐灰色を呈する。683 は後代遺構に混入の坏。口径 9.7 器高 3.8㎝を測る。内面から外面上半は丁寧なヨコナデ以下はタテケズリを施す。胎土は精良で、内外面は鈍い橙色を呈する。684 は包 4 層出土の丹塗高坏の坏部。口径 18.8㎝を測る。内外面に丹塗磨研を施す。胎土は精良で、内外面は赤色を呈する。685 は SP-492 出土の坏。口径 14.6 器高 2.8㎝を測る。内面はヨコナデ後放射状の暗文を施し、外面は丁寧なヨコケンマを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。687 は SP-576 出土の坏口縁部片。内面は細かなタテハケ後丁寧なヨコケンマ後放射状の暗文を施し、外面はヘラケズリ後丁寧なヨコケンマを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。688 は後代遺構に混入の丹塗の低脚坏。口径 16.0㎝を測る。体部下位にヘラケズリ後全面に細かな丹塗磨研を施す。胎土は精良で、内外面は赤橙色を呈する。689・690 は包 4 層出土の山陰系鼓形器台。689 は口径 18.6㎝を測る。内面はヨコケズリ後口縁部をヨコナデ、外面はヨコナデ後緩いヨコケンマを施す。胎土は白色粒を多く含み、内外面は灰白色を呈する。690 は包 4 層出土で脚径 17.4㎝を測る。端部内面から外面にヨコナデ、内面上位にナナメケズリを施す。胎土は白色粒を多く含み、内外面は灰白色を呈する。691 ～ 694 は庄内系小形器台。691 は後代遺構に混入で口径 10.6㎝を測る。口縁が大きく外反する。内外面に丁寧なヨコヘラナデを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。692 は包 4 層出土で口径 9.2㎝を測る。口唇内端が垂直に延び若干外反する。内外面に丁寧なヨコヘラナデを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。693 は包 3 層出土で口径 9.4㎝を測る。口縁は短く外反する。体部外面はヘラケズリ後ヨコナデ、内面は細かなナナメハケ後放射状の暗文、口縁内外はヨコナデを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。694 は包 4 層出土で脚部。径 12.6㎝を測る。直線的に開き、外面に細かなタテハケ、内面上半はナナメケズリ下半はヨコハケ後緩くナ

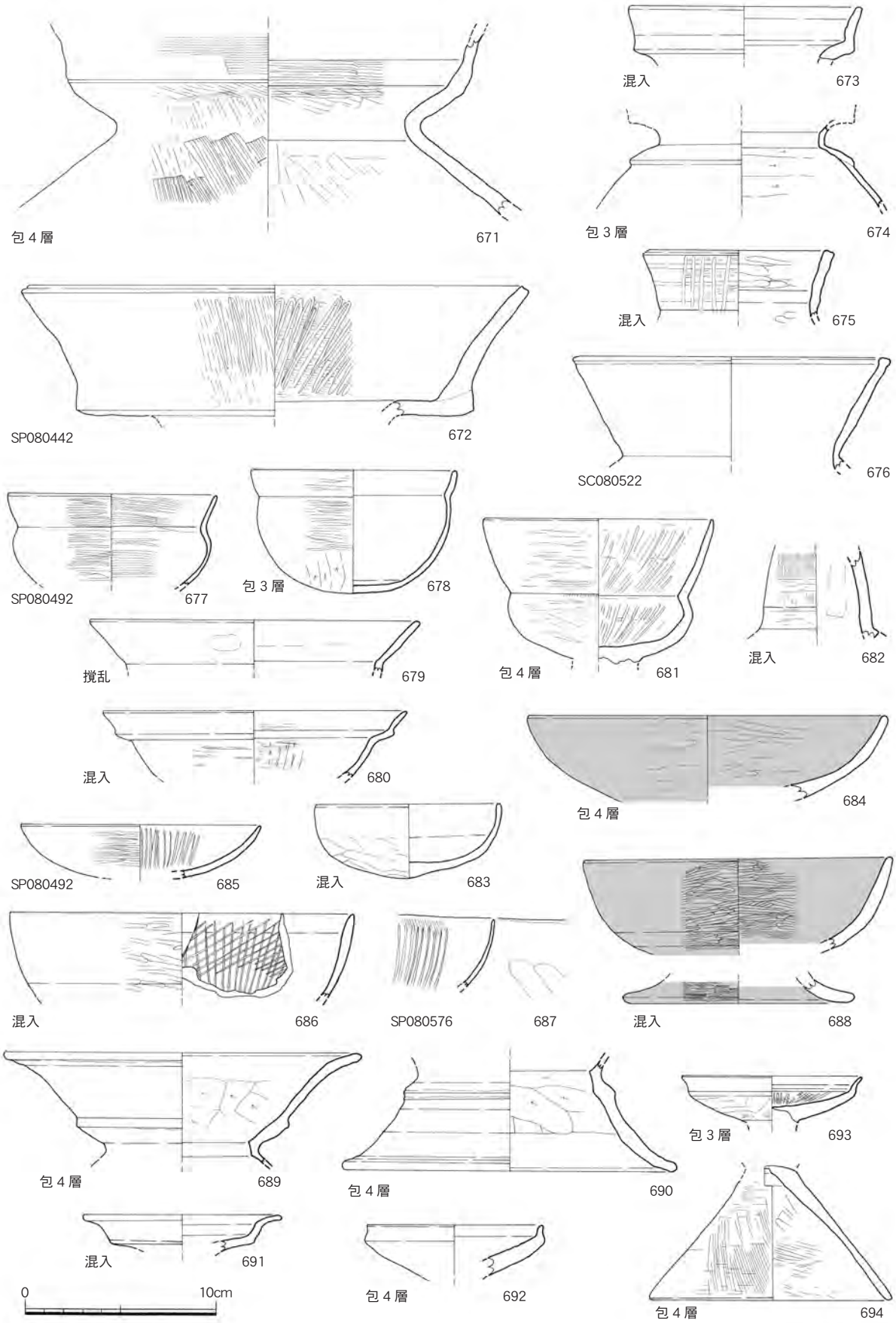
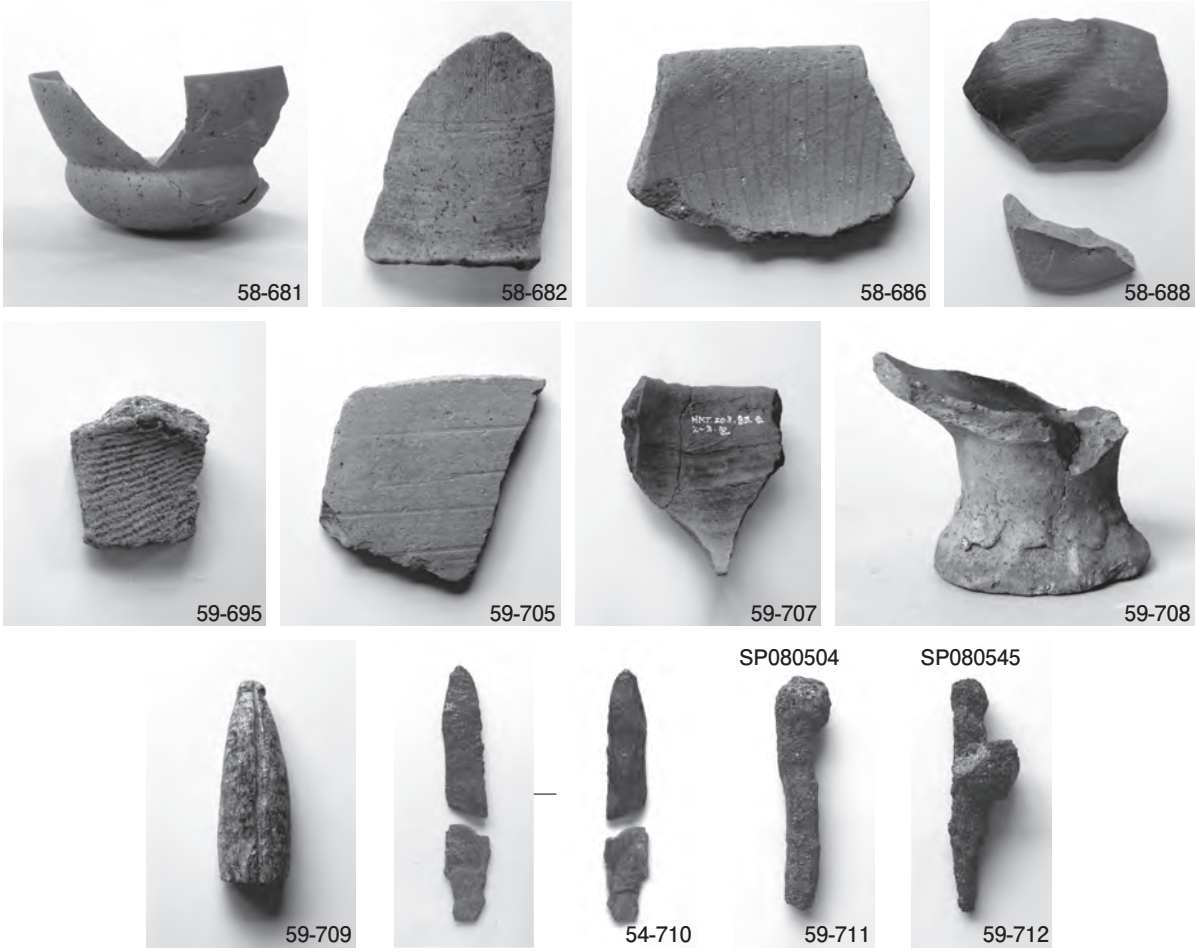


Fig.58　柱穴その他の出土遺物実測図 -1（1/3）

デる。胎土は白色黒色粒を少量含み、内面は明橙色外面は明赤褐色を呈する。695 は後代遺構に混入の東東海系甕の頸部片。外面に極細の縄文を施し内面頸部にヨコハケ後ナデを施す。胎土は白色粒を多く含み、内外面は黄橙色を呈する。696 は後代遺構に混入の布留式系の甕。口径 18.0㎝を測る。口縁は内湾気味に開き口唇は平坦で内端が突出する。口縁内面から外面頸部下までヨコナデ、以下にタテハケ、内面は頸部稜線下にナナメケズリを施す。胎土は白色粒を若干含み、内面は鈍い橙色外面は鈍い黄橙色を呈する。697 は包 4 層出土の大形の布留式系の甕胴部。頸部で径 22.0㎝を測る。外面上位にヨコハケ以下にタテハケを施しヘラ描きの波状文を施す。内面はナナメケズリを施す。胎土は白色粒を多く含み、内面は灰白色外面は鈍い黄橙色を呈する。698 は SP-545 出土の近畿系の甕口縁部。口径 18.8㎝を測る。口縁は外反して開き口唇は平坦で両端が突出する。口縁外面はタテハケ後緩いナデ、内面はヨコハケ後緩いナデを施す。胎土は白色粒を若干含み、内外面は灰褐色を呈する。699 は後代遺構に混入の布留式系の甕口縁部。口径 29.0㎝を測る。口唇は窪み両端が突出する。口縁外面はヨコナデ後頸部にハケ工具の角で列点を施す。内面は細かなヨコハケを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。外面に煤が付着する。700 は後代遺構に混入の近畿系の甕口縁部。口径 25.8㎝を測る。口唇は平坦で内端が突出する。口縁外面は指頭圧後ヨコナデ、以下にタテハケを、内面口縁部は細かなヨコハケを頸部稜線下にはタテケズリを施す。口縁下にハケ工具で多重沈線を描く。



Ph.101　柱穴他出土遺物

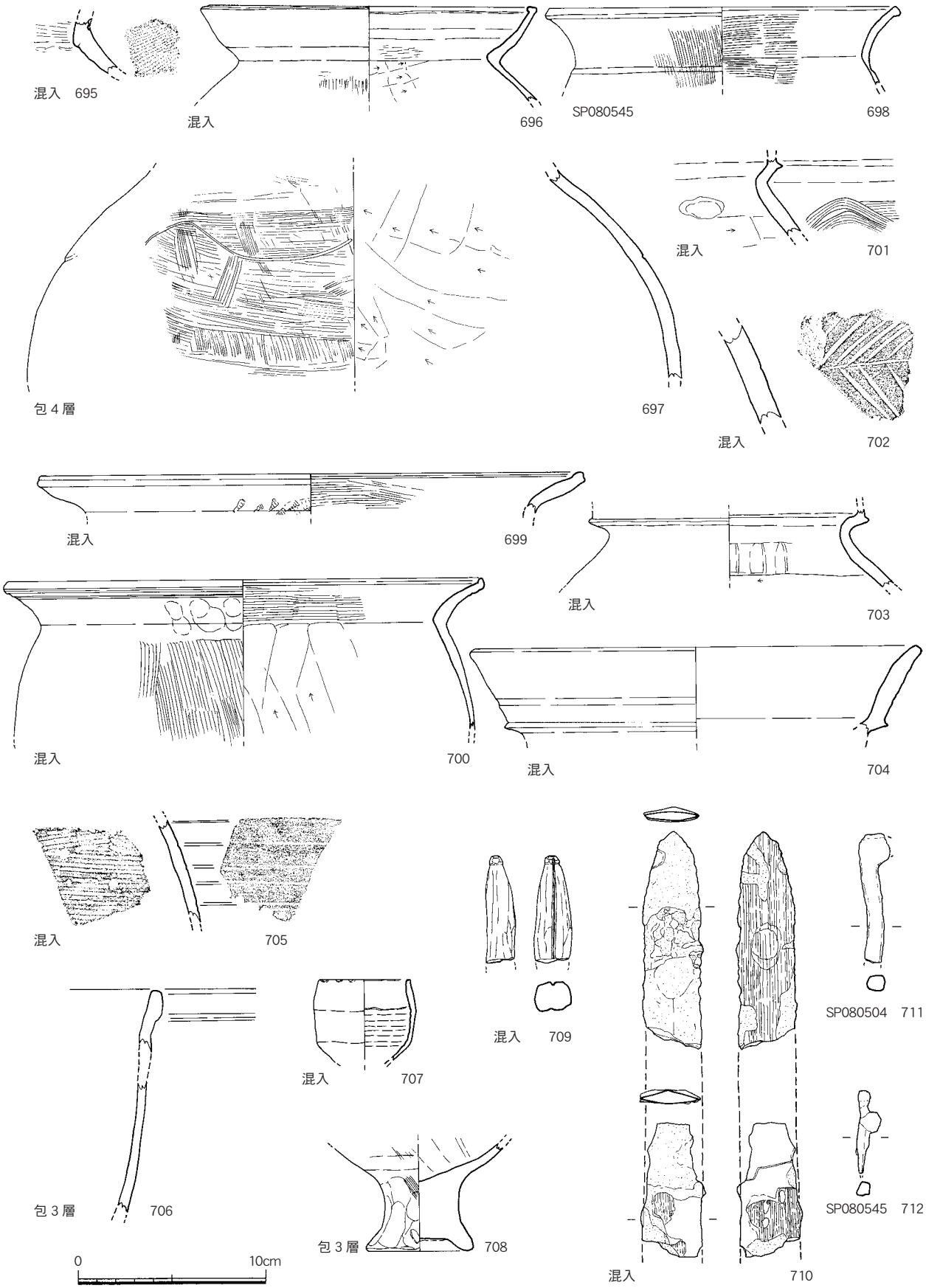


Fig.59　柱穴その他の出土遺物実測図 -2（1/3）

胎土は 3㎜以下 の白色粒を含み、内面は鈍い橙色外面は暗褐色を呈する。701 は後代遺構に混入の山陰系甕の小片で、外面から頸部内面はヨコナデ、以下にヨコケズリを施し、外面胴部にヨコハケ後ハケ工具で波状文を描く。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量含み、内外面は黄橙色を呈する。702 は後代遺構に混入の山陰系大甕の胴部小片で、外面はヨコナデ後ヘラ描きの有軸羽状文、内面にヨコケズリを施す。胎土は微細な白色粒を多く含み、内面は褐灰色外面は明褐灰色を呈する。703 は後代遺構に混入の山陰系の甕で、頸部で 13.6㎝を測る。外面から頸部内面はヨコナデ、稜を成さない頸部に指頭圧痕が残り以下の胴部上位からヨコケズリを施す。胎土は白色粒を多く含み、内面は灰白色外面は明褐灰色を呈する。704 は後代遺構に混入の山陰系の甕で、口径 24.0㎝を測る。内外面にヨコナデを施す。胎土は白色粒を少量含み、内面は灰白色外面は明褐灰色を呈する。705 は後代遺構に混入の瓦質土器の甕小片で、外面に丁寧なケンマ後浅い多重沈線を 5 条施し、内面に平行線当具痕が残る。胎土は 1㎜以下の白色粒を少量含み、内外面は灰黄色を呈する。706 は包 3 層出土の瓦質土器の口縁が玉縁状に肥厚する鉢小片で口縁内外は丁寧なヨコナデ、胴部内外面は丁寧なヘラナデを施す。胎土は精良で灰色、内外面は暗灰～暗青灰色を呈する。707 は後代遺構に混入の製塩土器か。器壁は薄く口径 5.0㎝を測る。外面にタテ・ヨコの粗いナデを、内面口縁部にナデ、以下に細かいヨコヘラナデを施す。胎土は 3㎜以下の白色粒を含み、内面は鈍い橙色外面は褐灰色を呈する。708 は包 3 層出土の瀬戸内系製塩土器脚部。上げ底の底径 6.1㎝を測る。外面に粗い指頭圧とナデ、一部にハケメが残る。内面はナナメイタナデで一部が黒化する。胎土は 2㎜以下の白色粒を多く含み、内面は暗灰黄色外面は灰黄色を呈する。709 後代遺構に混入の滑石製の有溝石錘で、全面ケズリで成形し、紡錘形の先端に紐掛を削り出す。残存で 5.7 × 2.1 × 1.6㎝を測る。710 は鉄剣。中央部 O4 グリッドに位置する近世井戸 SE-597 の混入品で、残存で 18.7 × 3.2㎝厚 7 ～ 4.5㎜を測る。裏面の鎬が低く、この面に木質が錆着する。木質は表面には一部で、剣身が薄いため副葬用に作製され、これを直に木棺に副葬した可能性がある。711 は SP-504 出土の鉄鏃の残片。残存で 19.6 径 0.9㎝を測る。712 は SP-545 出土の鉄釘。頭部を 6 × 6㎜程度の角柱状に成形し、身部は幅 4㎜で全長 4.4㎝を測る。

7）弥生時代終末期の調査

終末期は、土坑３基、柱穴は 12 基あり、第５面で検出される。遺構は全体で疎らに分布する。北や東の調査区では数倍は検出されており、今回の調査では中心から外れている。遺物も最少である。

土坑は西部の A22 グリッドで SK-487 の１基、東部の O-4・A-4 グリッドで SK-678・682 の２基が検出されるのみで、いずれも後代の遺構に切られ残欠が残るのみで、図化に耐える資料も無い。

（１）柱穴その他の出土遺物

SP080440（Fig.55　Ph.102）　５面目西部 B20 グリッドに位置する。まとまった遺物を検出した唯一の遺構で、平面は円形で、径 56㎝深さ 28㎝を測る。上面で完形に近い器台を検出している。

出土遺物（Fig.60　Ph.103）　714 は丸底の坏で口径 11.2 器高 3.6㎝。外面はヨコナデ後粗いヨコケンマ、内面は細かなナナメハケ後放射状の暗文を施す。715 は器台で口径 12.2 器高 16.1㎝。。脚部は幅広く径 13.5㎝を測り、径 6.2㎝のくびれに直線的に延びる。外面はタテハケ内面口縁部はヨコハケ、脚部下半はヨコ・ナナメハケ上半はナデでシボリ痕が残る。716 は甕口縁部。口径 24.2㎝。外面はヨコヘラナデ、内面は粗いタテハケ後内外に緩くヨコナデを施す。

717 は直口壺。口径 13.0㎝。口縁内面に細かなナナメハケ外面にタテハケ後口縁内外にヨコナデ、外面にはヨコケンマ後ジグザグの暗文を施す。胴下半には緩いヨコケンマを、胴内面には指頭圧後ナナメハケを施す。内外面は橙色を呈する。718 は 715 と同形の器台。口径 11.6 器高 14.7㎝。口縁外面は細かな、以下に粗いタテハケを施し、内面口縁部は細かなヨコハケ、脚部は粗いナナメナデを施す。口唇にはハケ工具で刻目を施す。719 は袋状口縁の支脚。口径 5.2㎝。口縁内外面はヨコナデ、外面脚部は平行タタキ後粗いナデ、内面は粗い指頭圧・ナデを施す。内外面は被熱で赤灰色を呈する。720 は小形の逆「く」字口縁壺。口径 8.5㎝。内外面にヨコナデを施す。721 は嘴状支脚。径 5.2㎝の上面に 1.5㎝程の嘴状突起を作り平行タタキを施す。中央に径 6㎜の焼成前穿孔がある。脚部外面は平行タタキ、内面は粗い指頭圧・ナデを施す。722 は大甕の口縁部。口径 38.6㎝。口縁外面上位はヨコ以下にタテハケ、内面はヨコハケを施し、内外面を緩くナデる。口唇にはハケ工具で十字の刻目を施す。723 は五様式甕の底部。底径 3.7㎝。外面はヨコナデ内面はヨコヘラナデで放射状にヘラ当て痕が残る。724 は甕胴部片を転用した土器片円盤。3.3 × 3.7 × 0.6㎝ 10.2g。外周を打ち欠きで円形に成形する。725 は礫岩円礫を用いた凹石。11.6 × 8.8 × 5.7㎝。上下中央が使用で凹み下端を叩きで著しく使用する。726 は花崗岩円礫を用いた凹石。13.4 × 8.3 × 5.27㎝ 225g。６面に少数の叩き痕が残るが使用は浅い。

Ph.102　SP080440（南から）

Ph.103　SP080440 他出土遺物

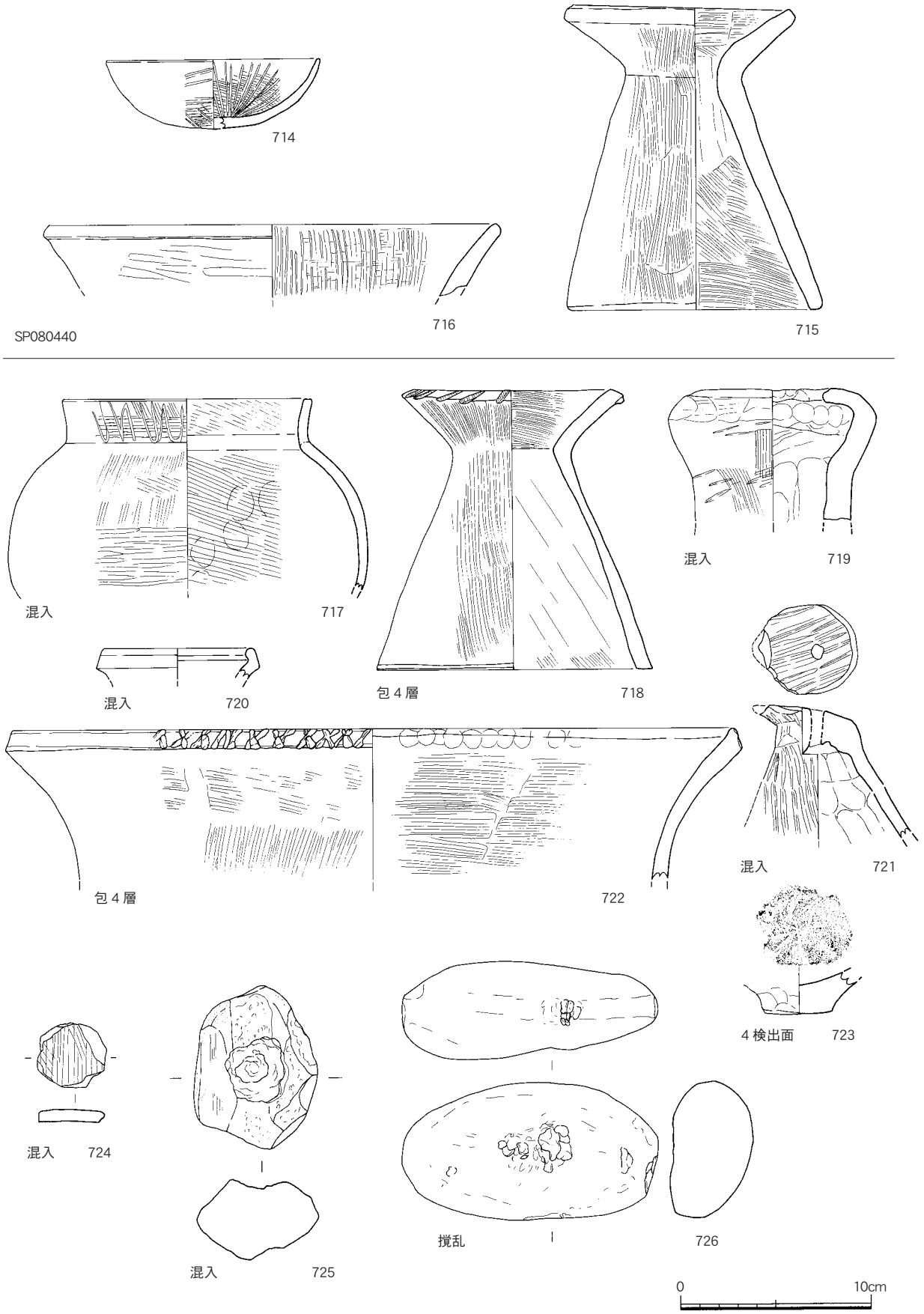


Fig.60　SP080440 その他の出土遺物実測図（1/3）

8）弥生時代中期の調査

弥生時代中期は、調査区の中部から東部にかけて３基の甕棺墓のみを検出した。調査区の軸線に沿って、長さ 7m 程の直線上に分布している。ST-566 と ST-677 が地形に沿う方向に軸線をとり、ST-676 はこれの直交方向にある。時期は中期前葉で 1 基、中葉で 1 基、後葉で 1 基ずつの検出である。他に井戸混入で中期前葉の甕棺片が、撹乱内から中期前葉の甕棺片と臼歯を、東端部の土坑から中期中葉の甕棺片が出土しており、さらに 4 基存在した可能性がある。

（1）甕棺墓

ST080566（Fig.61・62　Ph.104 ～ 109・114）　5 面目中央部 O6 グリッドに位置し、SK-072 と SE-319 に切られる。墓壙は残存で 2.02+ α × 1.47m を測る大形の楕円形、深さは上甕部で 48㎝下甕部で 60㎝を測る二段掘りで底面はほぼ水平である。棺は撹乱で上方を欠く。中形棺と大形棺を呑口式に組み合わせた成人棺で、ほぼ水平の 13°の傾斜で、頭位を N-118° -E の等高線に平行する方位にとる。内部からは下甕の下位近くで腐食した頭蓋骨の一部が検出されている。上甕は口径 51㎝復原で器高 67.5㎝を測る中形の甕で口縁は逆 L 字形を成す。口縁下に小さな三角突帯を 2 条施し外面にタテハケを内面はナデを施す。外面に黒色顔料を塗布する。下甕は口径 64.7 内径 52㎝を測る大形の甕で口縁は T 字形で内側が大きく張り出す。胴中位下に小さな三角突帯を 1 条施し内外面にナデを施す。時期は中期前葉を示す。

Ph.104　ST080566 検出状況（東から）

Ph.105　ST080566 棺内（東から）

Ph.106　ST080566（南から）

Ph.107　ST080566 棺内（南から）

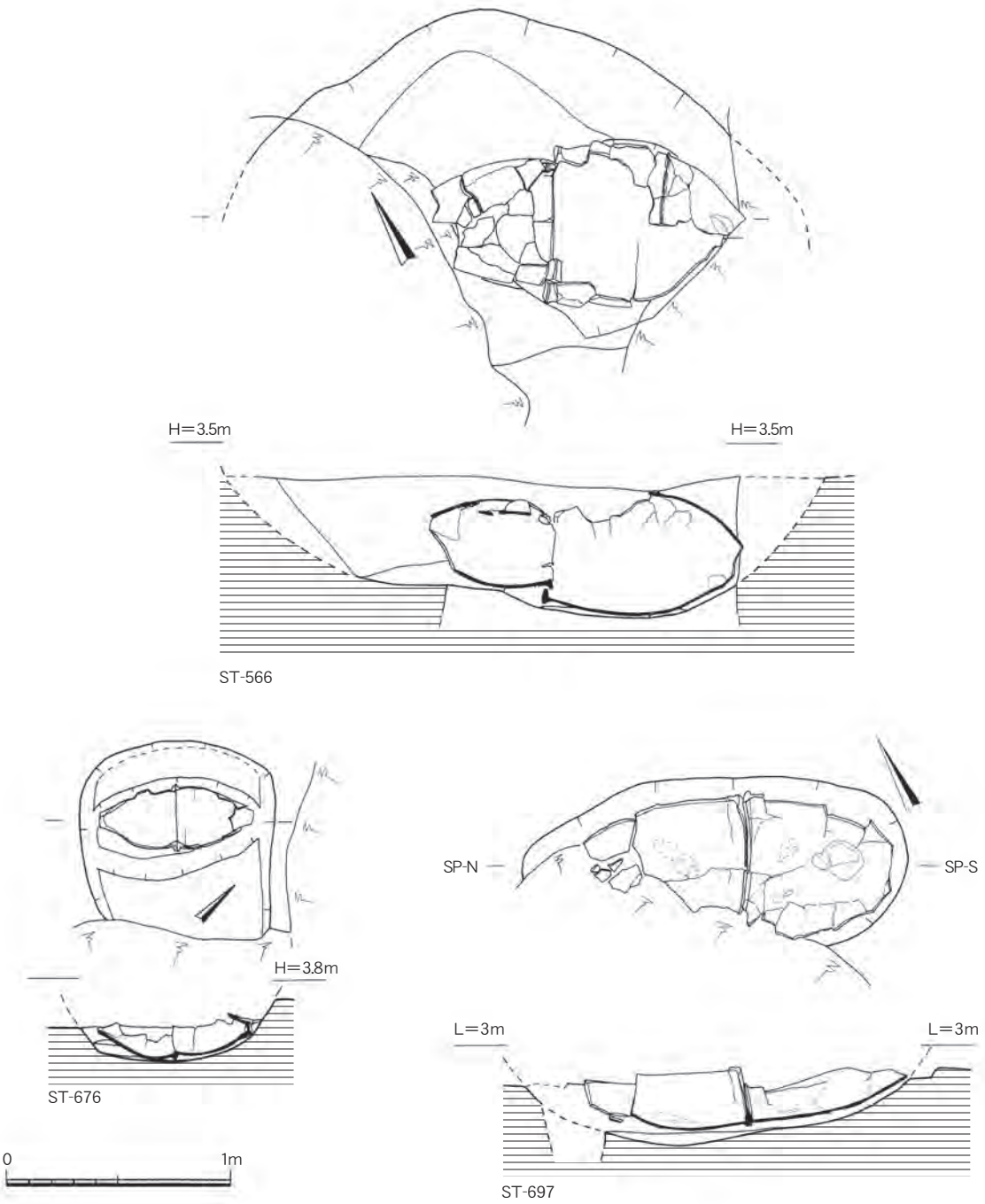


Fig.61　ST080566・080676・080697 実測図（1/30）

ST080676（Fig.61・62　Ph.112 ～ 111・114）　5 面目東部 A-4 グリッドに位置し、成人棺 ST-697 とは直交の位置関係にあり、これの 80㎝程上方に位置する。墓壙は残存で 0.82 × 0.85+ α m 深さ 14㎝の隅丸方形の中央寄りに 0.75 × 0.45m15㎝の楕円形の墓壙を設ける二段掘りで底面はほぼ水平である。棺は後代の削平で上半を欠く。小形甕同士の合口の小形棺で、ほぼ水平の傾斜で、頭位を N-48° -E に方位にとる。内部からの検出物は無い。

上甕は口径 29.6 器高 33.6㎝を測る小形の甕で、口縁は逆 L 字形を成す。外底は若干上げ底となる。外面にタテハケを内面はナデを施し、口縁内外はヨコナデを施す。下甕は口径 29.0 器高 33.0㎝を測る小形の甕で口縁は逆 L 字形を成す。外面にタテハケを内面はナデを施し、口縁内外はヨコナデを施す。時期は中期後葉を示す。

Ph.108　ST080566 頭骨（南から）

Ph.109　ST080566 堀層（南から）

Ph.110　ST080676・080697

Ph.111　ST080696（東から）

ST080697（Fig.61・62　Ph.112・113・114・115）　5 面目東部 A-2 グリッドに位置し、SE-649 に切られる。墓壙は 1.71 × 0.96m の楕円形で、深さは上甕部で 13㎝下甕部で 24㎝を測る断面舟底形で底面は下甕下中央部に下がる。棺は大形棺同士の合口の成人棺で、水平の傾斜で、頭位を N-120° -E の等高線に平行する方位にとる。内部からは、上甕の中位で左側頭部を上にした頭蓋骨と口縁近く長管骨を、下甕中央で長管骨を検出。上甕は口径 60.0㎝の大形の甕で口縁はＴ字形で内側が大きく張り出す。胴中位下に小さな三角突帯を 1 条施し内外面にナデを施す。上下棺とも外面に黒色顔料が一部残存する。下甕は口径 69.4㎝の大形の甕で口縁は両側に張り出すＴ字形を成す。胴中位下に小さな三角突帯を 1 条施し内面にナデ外面にタテハケメを施す。時期は中期中葉を示す。

Ph.112　ST080697（西から）

Ph.113　ST080697（南から）

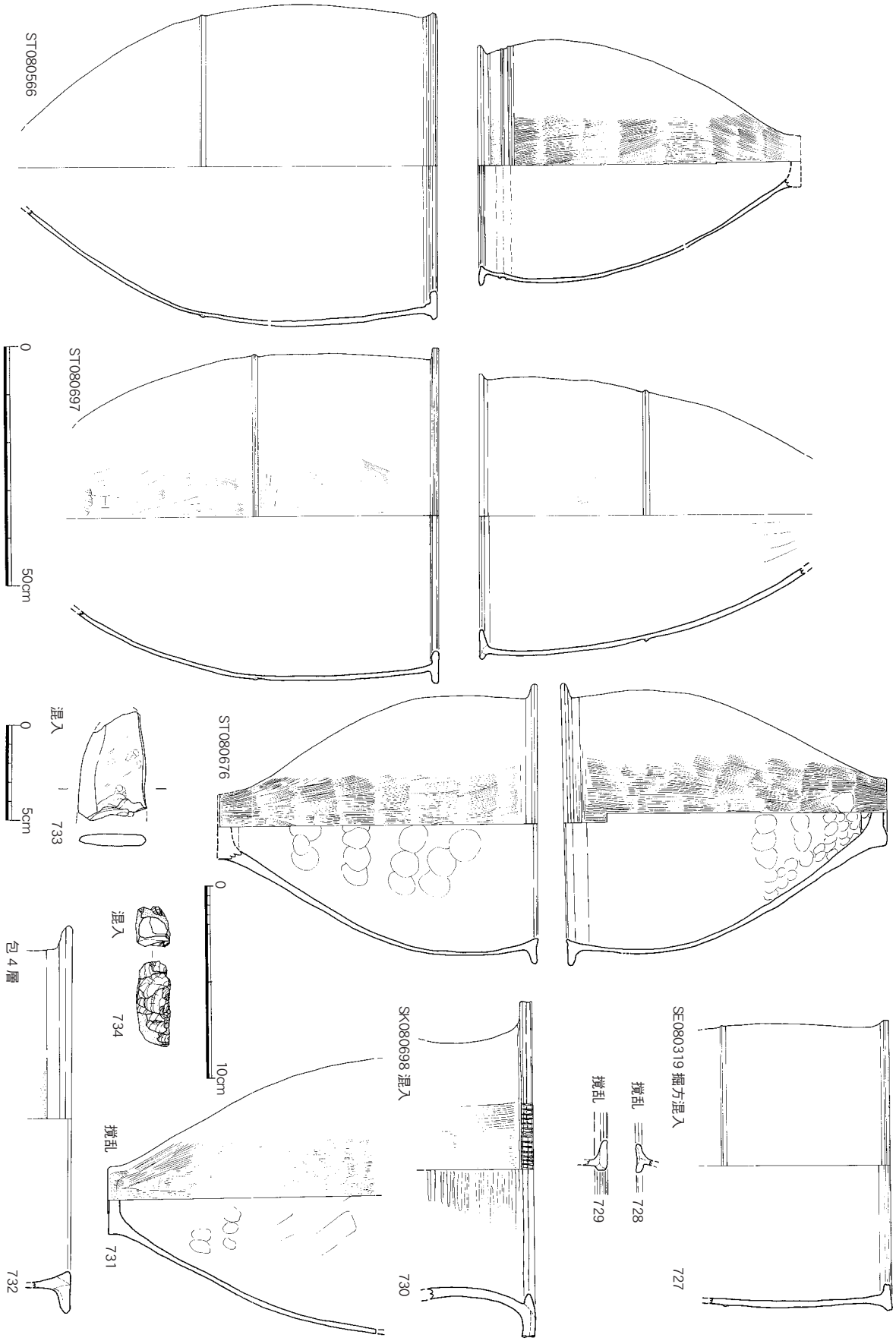
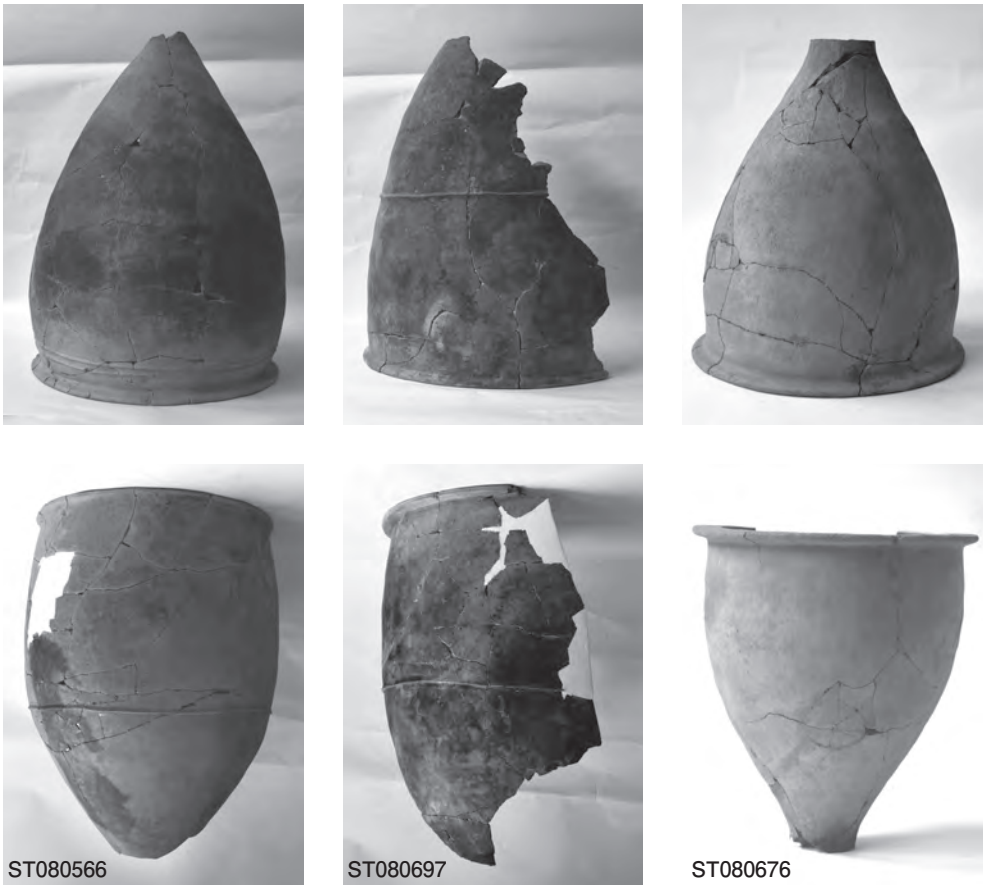


Fig.62　ST080566・080676・080697 他　甕棺実測図（1/12・1/6・1/3）



Ph.114　ST080566･080697･080676 出土甕棺

Ph.115　ST080697 頭骨（西から）

（２）その他の出土遺物（Fig.62）

727 は ST-566 を切る井戸 SE-319 から出土した成人棺片で、口径 61.0㎝の大形の甕で口縁は内側にやや強く張り出すＴ字形を成す。胴中位下に小さな三角突帯を１条施し内外面にナデを施す。時期は中期前葉。728・729 は A ～ 0-4 グリッドの撹乱内から出土した。甕棺片で、728 は大形の甕の口縁片で、口縁は若干外傾し両側に強く張り出すＴ字形を成す。内外面にヨコナデを施す。729 も大形の甕で、口縁は水平で内側が強く張り出すＴ字形を成す。内外面にヨコナデを施す。他に成人の臼歯１本が出土しており、合口の成人棺が存在した可能性がある。時期は中期前葉。730 は東端部の SK-689 に混入した大型の壺で口径 34.6㎝を測る。鋤先口縁で端部に刻目を施す。内面から口縁外面は丁寧なケンマ、以下にタテハケを施して黒色顔料が塗布される。大きさと黒色顔料から棺の可能性が高い。時期は中期中葉。731・732 は A-4 グリッドの撹乱内から出土した小形の甕で、731 は底径 6.9㎝を測る。薄い底部で外面にタテハケ内面にナデを施す。732 は口径 40.0㎝の小形の甕で口縁は逆Ｌ字形を成す。口縁内外面にヨコナデ外面口縁下にタテハケを施す。728・729 と同じ撹乱からの出土であり、小形棺の可能性が高い。時期は中期後葉を示す。733 は凝灰質砂岩製の石包丁。幅 3.5㎝厚 6㎜を測る。734 は黒曜石石核。厚 1.9㎝の板状の原石で、表皮を残したまま２辺に剥離を行う。4.5 × 1.8㎝を測る。

9）小結

今回の調査では、5 面にわたって弥生時代中期から 12 世紀中頃～ 13 世紀前半を中心とした遺構を検出した。13 世紀後半以降の遺構は、近世以外、遺物が少量有るのみで、遺構は検出されない。

中世（1）の 12 世紀中頃以降 13 世紀前半までの時期では、この時期のみ SE-319・649・657 の 3 基の井戸がある。井戸は東半部に 3 基集中する。いずれも木桶を積み上げた井側と思われる。この部分は近世の井戸とも重複しており、水脈の位置が継続している。溝は、中央部で直角に屈曲する幅 30 ～ 50㎝弱の溝 SD-033 を 1 条検出した。内側に建物が想定される。遺物としては 9 基の遺構から、ガラス小玉をはじめ、ガラス容器、玉未製品、ガラス素材、ガラス坩堝、炉壁等多くのガラス成品製作関連の多くの遺物が、多量の炭粒・灰とともに検出されており、出土遺物の状況から第 203 次調査区の本区・ 9 ・13・15 区を中心にガラス器製作工房の存在が推測され、関連遺物の量は博多遺跡群内のみならず、市内遺跡で最多の量となっている。他に 155 の中国陶器製の経筒蓋がある。経筒は同じく陶製を埋納した遺構が第 50 次・107 次調査で検出されているが、銅製の写しは本例のみである。

中世 11 世紀後半～ 12 世紀前半期では土坑 23 基を主に検出した。中世（1）と比べ幅 2m 前後の大きな遺構が目立つ。遺物としては 3 基の遺構全てからガラス小玉・ガラス容器の製品と、ガラス坩堝、炉壁等が検出されガラス製品製作の開始期を示している。

古代では、越州窯系青磁、新羅土器、長門・京都系緑釉陶器、灰釉陶器、都城系土師器、瓦、製塩土器、鋳造関係遺物、墨書土器・陶硯等、官衙を示唆する遺物が出土する。検出した遺構は全体の約 36% の量を占めており、最大の遺構数である。溝は、3･5 面目の調査区東部で幅 3m 程の大溝が東西方向に検出される。遺物は金属鋳造関係の遺物が注目される。 8 世紀後半～ 9 世紀初頭の遺構から金属用坩堝（取瓶）を 18 遺構から、6 基の遺構から鉄滓が検出され、銅製品鋳造関係が示唆される。372 は関東系の須恵器である。近年太宰府市周辺で検出されるようになり、本市でも再検討が必要な資料である。391・418 の高台付の皿は同型でともに硯として使用されており、当初から陶硯として作成された可能性がある。これも再検討が必要な資料である。555 の「郡」ヘラ描き土器は「那珂郡」の可能性もある。572 の銅製権は築港線 1 次調査で同型が出土し 10 世紀初頭に当てられている。685 は須恵器の初期瓦である。

古墳時代後期では遺物は遺構の数に比べて多く、比較的多くの半島系土器が出土している。鉄滓を 1 点と、著しく被熱した土器片も検出している。

古墳時代前期は唯一 4 軒の竪穴住居を検出し、遺物は山陰から近畿・東海地方までの外来系土器が少なからず出土し、半島系土器も少量含む。金属坩堝が遺構内から 6 点検出されており検討を要する。鉄器も 1 点出土している。東部で直交する溝 SD-670・573 がある。周辺ではキャナル内の 142 次で前方後円墳と思われる周溝が、185 次では方形周溝墓の一部が検出されており、710 の鉄剣と合わせ方形周溝墓の存在を考慮する必要がある。

弥生時代終末期は、遺構は全体で疎らに分布する。北や東の調査区では数倍は検出されており、今回の調査では中心から外れている。遺物も最少である。

弥生時代中期は、中期前葉～後葉の 3 基の甕棺墓のみを検出し、土坑・住居等の生活遺構は検出されない。甕棺墓は調査区の軸線に沿って、長さ 7m 程の直線上に分布している。他に ST-566 を切る井戸 SE-319 から中期前葉の甕棺片が、A ～ 0-14 グリッドの撹乱内から中期前葉の甕棺片と臼歯を、東端部の SK-689 から中期中葉の甕棺片が出土しており、さらに 4 基存在した可能性がある。

10. 9 区の調査

1）概要（Fig.1　Ph.1~7）

9 区は西工区東端部の中央に位置する。南北方向 5.0m、東西方向 30.0m の長方形の調査区である。調査区南側は 3・4 区（発掘調査）、13 区（立会調査）、北側は 12 区（発掘調査）と接する。

土留め矢板設置のため、発掘調査に先行して、調査区 4 辺に幅約 80cm のトレンチを設定し、道路面から約 1.5m 下までの立会調査を平成 27 年 3 月 10 日・11 日に行った（Ph.3~6）。南側は一部、3・4 区と接するため、連続する遺構を確認することを目的としたが、立会調査では整合性をとることができなかった。遺構面は、先行して行った発掘調査、今回の立会調査の結果より、5 面を設定した。矢板打設後、重機による表土剥ぎを行い、排土は場外へ搬出した。調査面積は 170.8㎡である。

発掘調査は平成 27 年 4 月 1 日から 8 月 28 日までである。排土処理の関係で調査区を東側と西側で 2 分割し、まず、西側の調査を第 1 面から第 6 面まで行い、排土はベルトコンベアーで東側へ送り、溜まった段階で、その都度、重機により鋤き取り、場外へ搬出した。西側の調査終了後、引き続き東工区の第 1 面からの調査を行った。

基本層序は反転を行ったほぼ中央部で記録した。土層は道路面から深さ約 60cm まではアスファルトとコンクリート路盤、海砂、その下に厚さ 30~40cm 程度の黒褐色粘質土、灰褐色粘質土が堆積し、第 1 面へと至る。道路面の高さは西端が東端より 40cm ほど高く、第 1 面は道路面より約 1.0m 下で検出し、同様に西から東へと傾斜する。第 1 面の標高は約 4.3~4.8m（東端・西端以下同）の灰褐色土、灰茶褐色粘質土の上面、第 2 面は 4.1~4.5m の茶褐色土の上面、第 3 面は 3.9~4.3m の暗茶

Ph.1　9 区遠景（南東から）

Ph.2　9 区遠景（北西から）

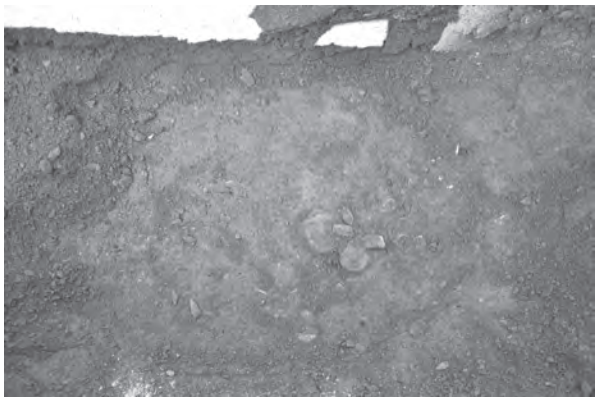
褐色土の上面、第４面は 3.8~4.0m の暗黄褐色シルトの上面、第５面は 3.7~3.9m の明黄褐色シルト（東側）および明黄褐色砂の砂丘面（西側）上面、東側のみ第６面は標高 3.4m の明黄褐色砂の砂丘面上面である。徐々に砂丘が傾斜を始める東側では、遺構の切り合いが激しく、砂丘面に達しなかったため、第６面を設定した。

第１面で検出した主な遺構は、井戸瓦を用いた近世・近代の井戸、大量の遺物が廃棄された土坑である。近世の遺構は、いずれも多量の瓦が廃棄され、柱穴には、この瓦を柱の根固めとして利用しているものもあった。他に古代末から中世 (11 世紀後半から 12 世紀) にかけての土坑も確認でき、遺構は密集した状況である。第２面では、古代末から中世の土坑、ピットが調査区全面に広がる。貿易拠点としての機能をもつ中世前半期の博多が最も繁栄した時期である。13 世紀中頃から 14 世紀初頭にかけての土坑も少数であるが、検出した。第３面も引き続き、古代末から中世にかけての遺構が主体をなす。遺構は井側に桶、水溜に曲物を用いた井戸、多量の土師器や陶磁器が廃棄された土坑である。なお、この面では、古墳時代、古代の遺構も少数ながら、みられるようになる。ここで特筆すべきは、古墳時代前期の特異な埋葬状況を示す土壙墓の検出である。第４面になると主体は古墳時代、古代となり、第５面では弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居、土坑等の遺構が調査区全域で検出され、大量の遺物が出土した。調査区西側では、本調査区の遺構の初源である弥生時代中期の甕棺墓を４基検出した。東側では遺構の密度が濃く、第５面で地山である砂丘面に達しなかったため、第６面を設定し、調査を行った。９区の出土遺物で最も古いものは縄文時代後期の黒曜石の石刃である。弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶器のほか、人骨、獣骨、魚骨、石器、鉄器、金属器、銅銭、ガラス製造関連遺物、鉄滓がコンテナケース 187 箱分出土する。

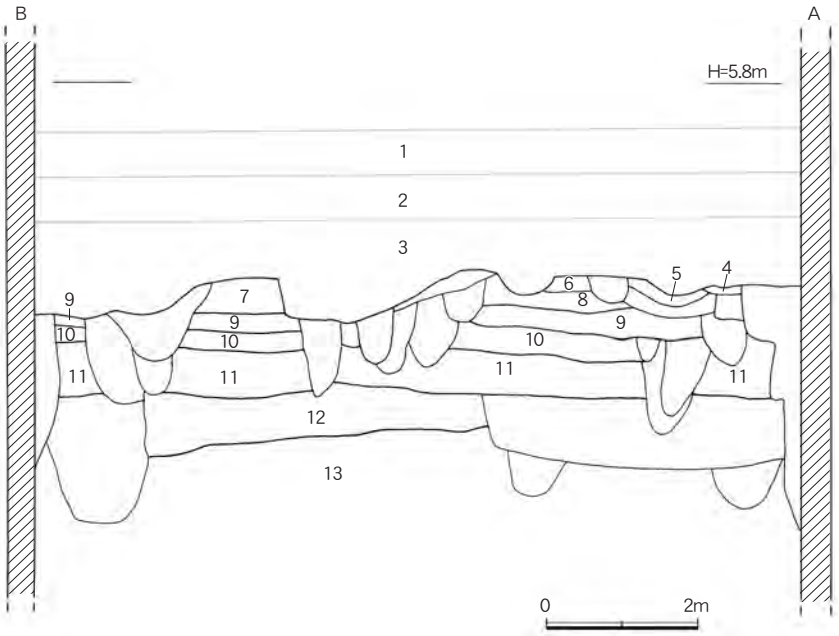
Ph.3　９区確認調査状況（南西から）

Ph.4　９区確認調査西側 Tr 南壁（北から）

Ph.5　９区確認調査南側（南東から）



Ph.6　確認調査北側土坑（南から）



1　アスファルト・コンクリート路盤
2　盛土（海砂）
3　黒褐色粘質土
4　黄色粘質土と白色粘質土に焼土混入（1面）
5　黄色・白色粘質土に灰褐色土、炭化物混入（1面）
6　灰褐色土に黄色土粒状に混入（1面）
7　灰茶褐色粘質土にオリーブ灰色土・黄灰色土斑状に混入（炭化物・焼土少量含む）（1面）
8　茶褐色土に灰色粘質土・オリーブ灰色粘土混入
9　茶褐色土に灰色粘土混入（2面）
10　暗茶褐色土に灰色粘土混入（3面）
11　暗黄褐色シルト（4面）
12　明黄褐色シルト（5面）
13　明黄橙色砂（砂丘面）（6面）

Fig.1　調査区土層実測図（1/100）

Ph.7　３区調査区土層（南東から）

2）第 1 面の調査（Fig.2　Ph.8・9）

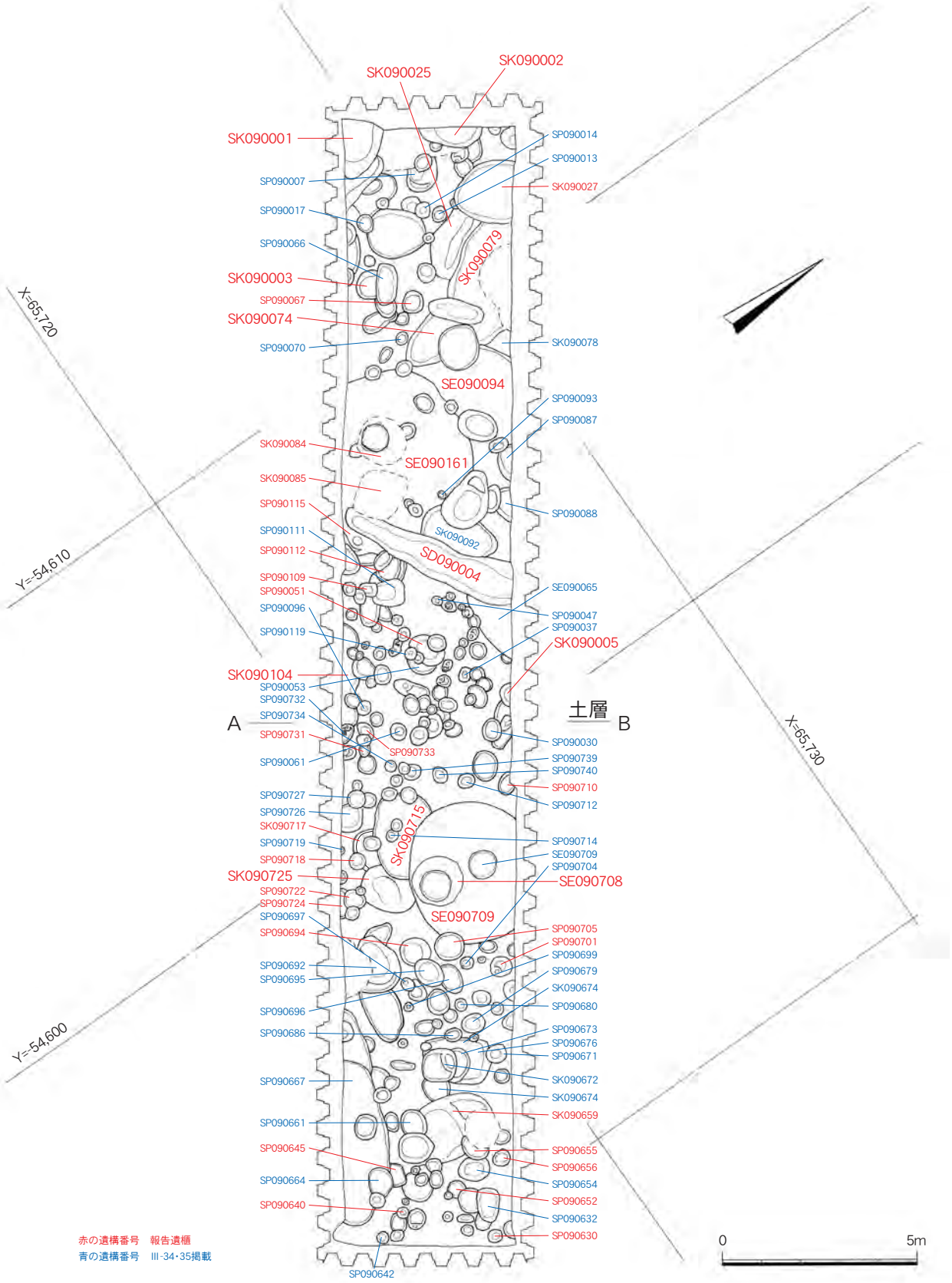
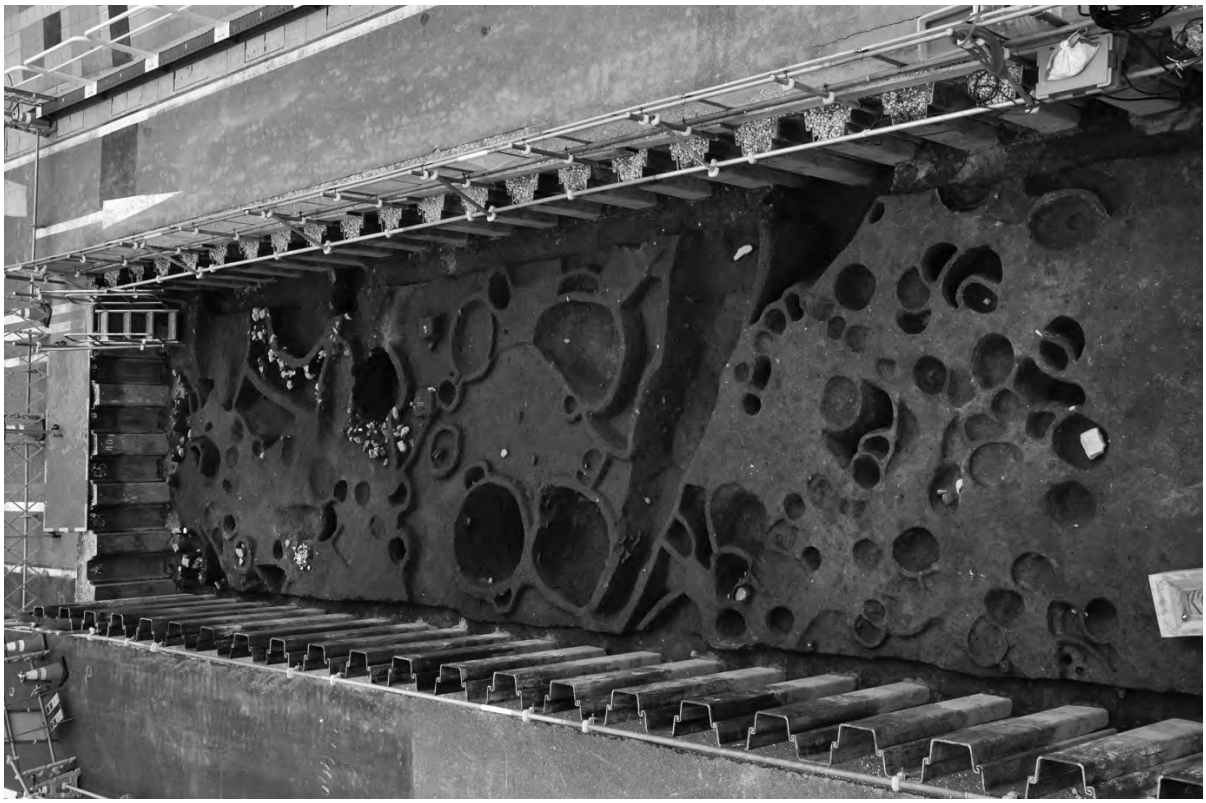
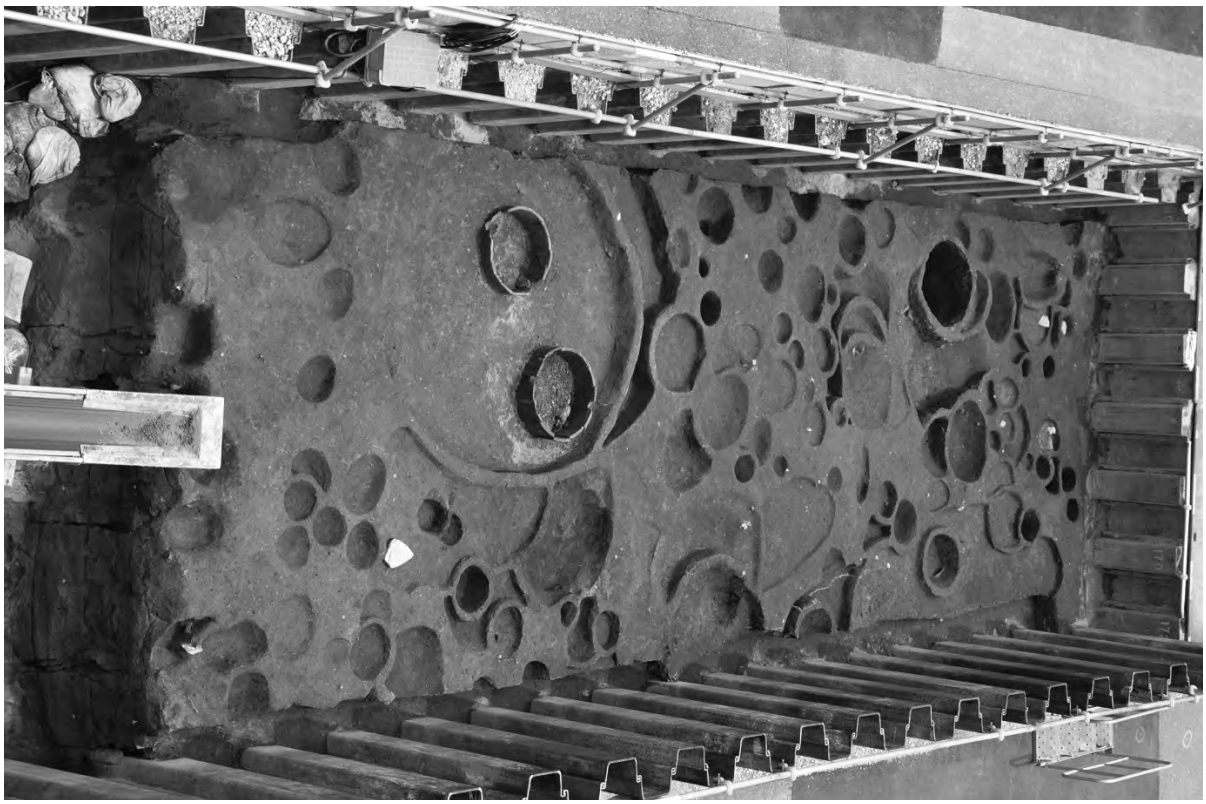


Fig.2　第 1 面全体図（1/150）



Ph.8　西側 1 面全景（南東から）



Ph.9　東側 1 面全景（南西から）

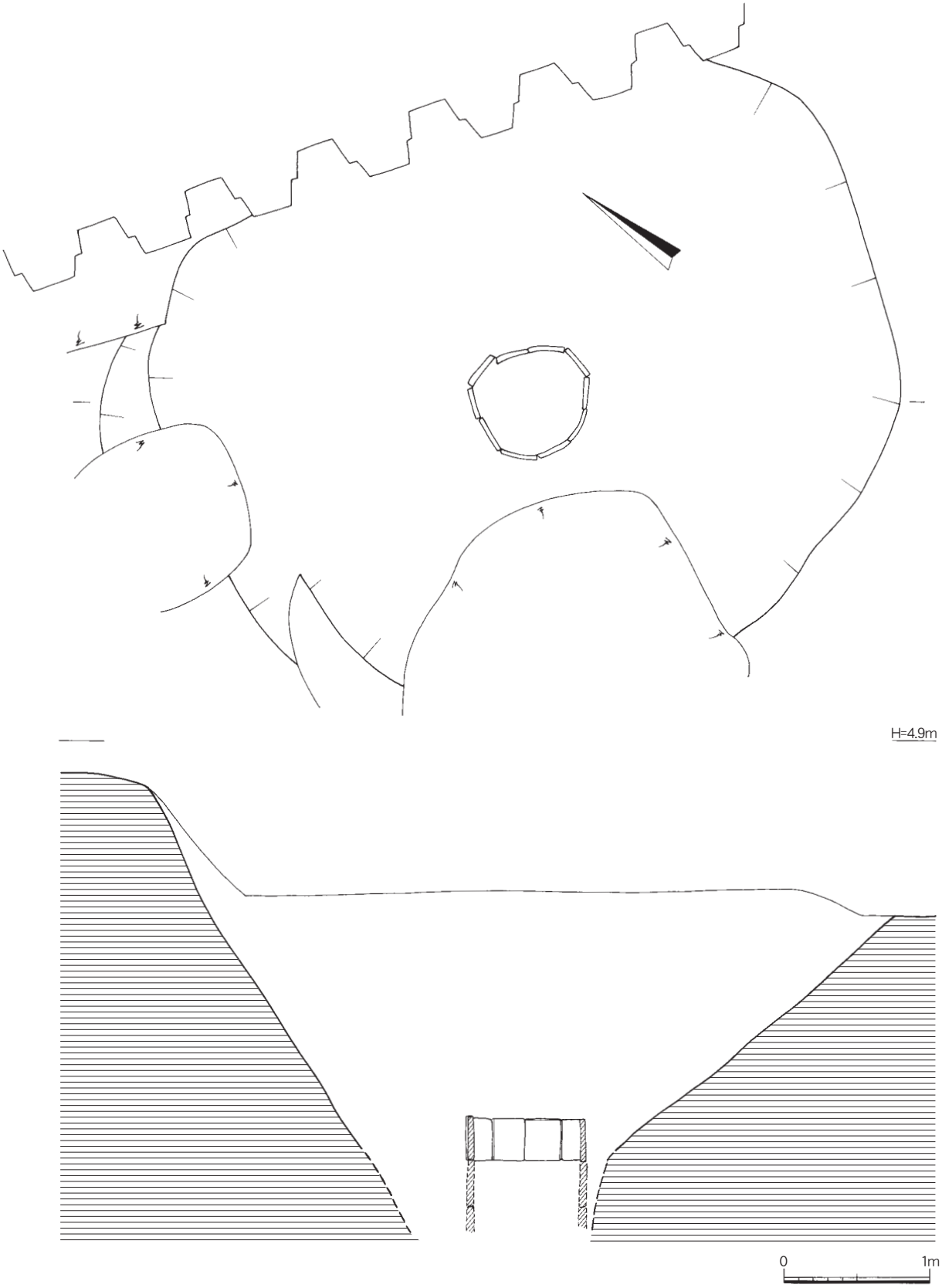
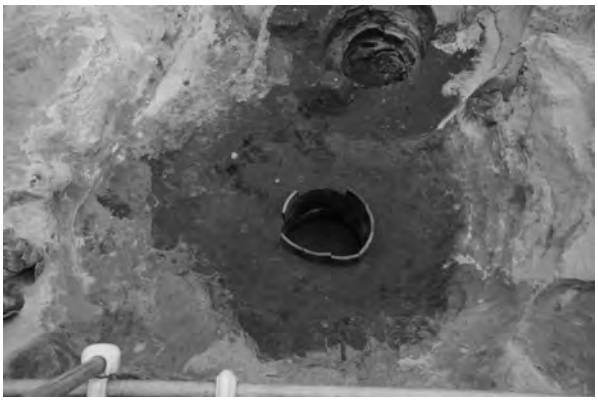


Fig.3　SE090094 実測図（1/40）



Ph.10　SE090094（北東から）

Ph.11　SE090094 井側（西から）

第 1 面は道路面から約 1.0m 下の炭化物、焼土が混入する黄色粘質土、白色粘質土、灰褐色土、茶褐色粘質土からなる整地層の上面で設定した。標高は西側で 4.8m、東側で 4.3m を測り、東側へと傾斜する。検出した主な遺構は井戸 3 基、溝 1 条、土坑 10 基、ピットである。井戸は近世、近代のもので、井側には瓦を用いる。調査区を横断する溝も近世の瓦が多量に廃棄されていた。他は 11 世紀後半から 12 世紀にかけての土坑である。

（1）井戸（SE）

SE090094（Fig.3　Ph.10・11）　調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延び、南側は SE090161 に切られる瓦組の井戸である。掘方の平面形は東西方向が 4.9m、南北方向が約 4.3m の楕円形を呈する。壁の傾斜は西側が急で、東側は比較的緩やかである。井側は掘方のほぼ中央に位置し、遺構面から約 2.3m 下で検出した。底面では東壁に接する。厚さ 4cm、幅 25cm、高さ 30cm の瓦質の瓦を 10 枚使用し、直径 75cm の円形を組む。上層の覆土は炭化物、焼土、灰白色粘質土を多量に含み、黄灰色、灰黒色粘質土を主体とする。崩落の危険があるため、標高約 1.6m までの掘削に留めた。

出土遺物（Fig.4・5　Ph.12）　1~4・26 は井側内から出土した遺物である。1 は白磁皿Ⅲ類の底部片で、内面見込みの釉を輪状に掻き取る。2 は白磁皿Ⅵ類の底部片で、底部はわずかに突き出す。胎土はやや粗く、黄灰色を呈し、化粧土が施され、黄色味の強い釉がかかる。高台には墨書が残り、「清」ではないかと思われる。3・4 は回転糸切り底の土師器で、外底部に板状圧痕を有する。3 は小皿で、復元口径は 8.0cm を測り、胎土に微細な金雲母を多量に含み、色調は明橙色を呈する。4 は坏で、復元口径は 13.2cm、器高は 3.1cm を測り、器壁が厚い。胎土は粗く、色調は暗橙色である。26 は鉄製の刀子である。柄に木質が残る。5~25 は井側より上層から出土した遺物である。5・6 は回転糸切り底の土師器である。5 は小皿で、口縁部内外面には煤の付着があり、燈明皿として使用される。復元口径は 8.4cm を測り、胎土は 3 に類似するが、色調は橙色である。6 は坏で、外底部に板状圧痕を有する。口径は 15.3cm を測り、底部付近は強い回転ナデで調整される。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、赤褐色を呈する。7 は防長産の緑釉陶器の口縁部片で、淡橙色の軟質な胎土に濃緑色の釉がかかる。8~10 は内面見込み部分の釉を輪状に掻き取る白磁で、8 は皿Ⅲ類、9・10 は碗Ⅷ類である。11 は越州窯系青磁碗の底部片である。胎土は精良で灰色から暗紫灰色を呈し、暗緑色の釉が全面に施釉される。高台内には細長い目跡が残り、見込みは細線で文様が描かれる。12・13 は龍泉窯系青磁である。12 は型押しの鉢で、口縁は花弁状に波打つ。13 は碗Ⅱ -c 類で、体部外面は鎬蓮弁を有し、内面見込みに印刻を有する。14 は同安窯系青磁碗の底部片で、高台内に墨書が残る。15 は染付皿である。16~19 は陶磁器を用いた瓦玉で、16・17 は白磁碗Ⅳ類、18 は白磁皿Ⅲ類、

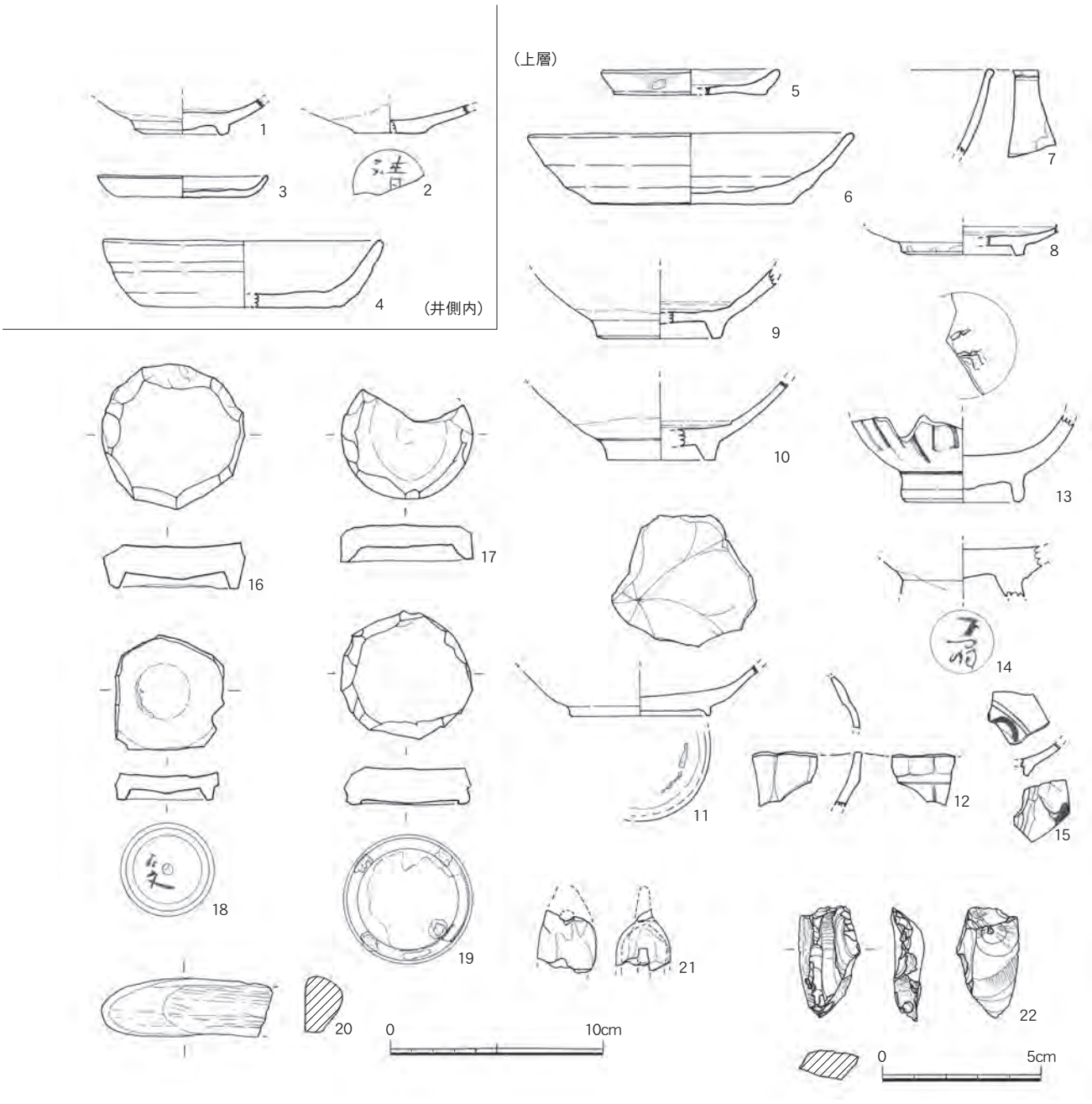
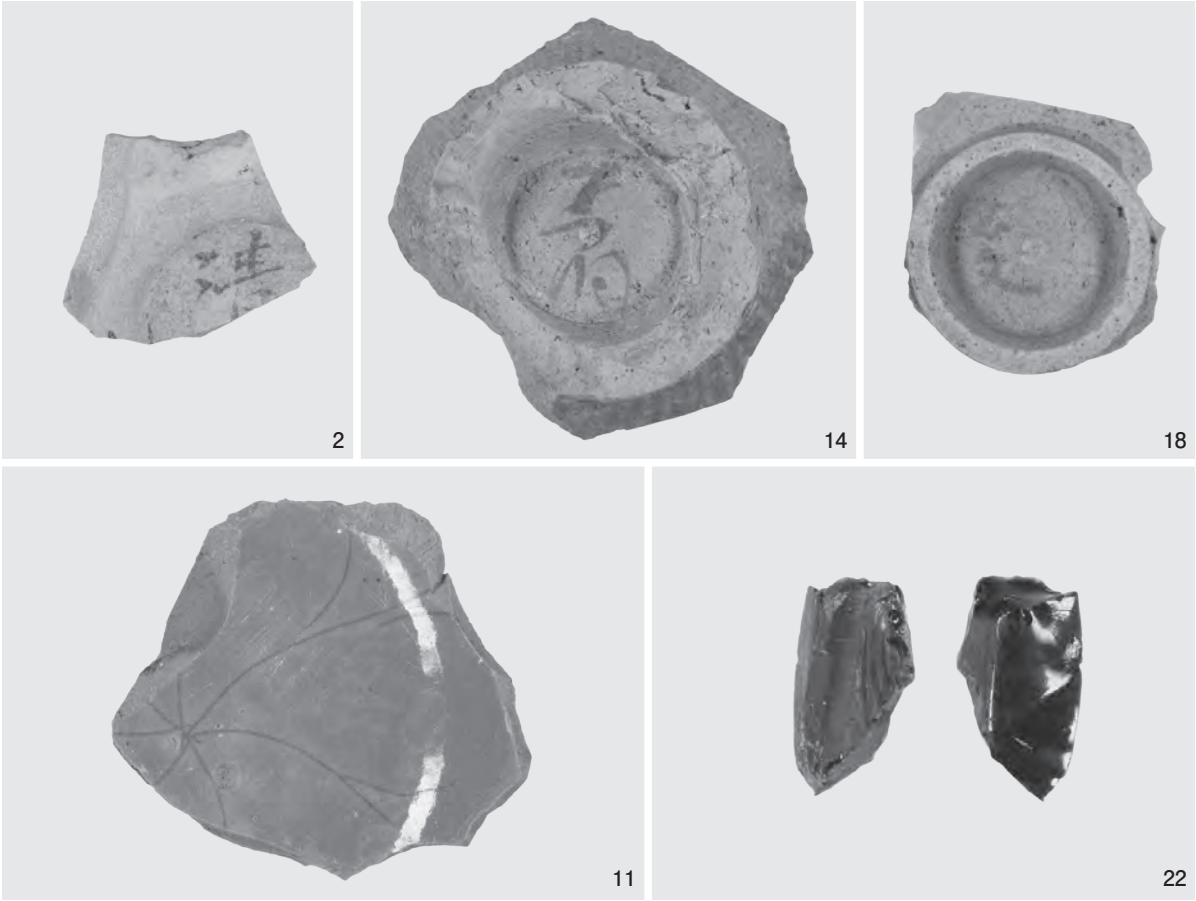


Fig.4　SE090094 出土遺物実測図①（1/3・1/2）

19 は龍泉窯系青磁碗の体部縁辺を丁寧に打ち欠く。18 は高台内に墨書を有する。重さはそれぞれ 103.4g、55.2g、34.9g、86.4g である。20 は粘板岩製の手持ち砥石の破片である。全ての面がよく使用され、すり減る。現状で 48.9g を量る。21 は土製の鈴で、下半部を欠損する。摘み部には穿孔を有し、色調は明橙色を呈する。22 は黒曜石で、使用痕のある剥片である。不純物、白色砂粒を含み、漆黒色を呈する。上部を欠損し、現状で 6.0g を量る。背面左側と右下端、腹面左側に自然面が残り、自然面の状況から角礫と思われる。背面右側に使用痕が認められる。なお、背面には風化した剥離面も残す。23~25 は燻し瓦である。23・24 は丸張筋彫りの鬼瓦の小片か。ともに型づくりで、内面は粗い工具によるナデで調整される。23 は外面に、箆で文様が施される。25 は軒平瓦である。他にイルカ・クジラ類の骨が出土する。遺物の主体は肥前陶磁器であり、井戸の時期は近世である。



Ph.12　SE090094 出土遺物

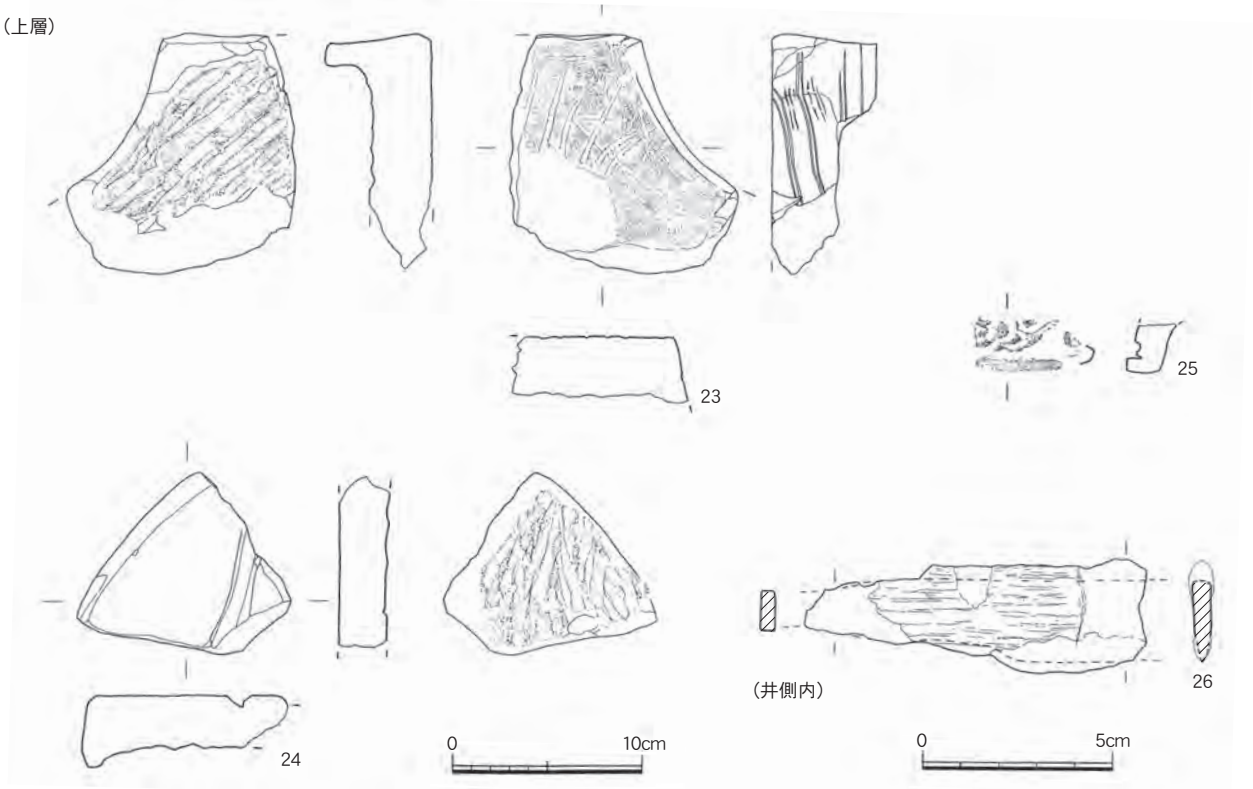


Fig.5　SE090094 出土遺物実測図②（1/4・1/2）

Ph.13　SE090708・090709（南東から）

Ph.14　SE090708 井側（北から）

Ph.15　SE090709 井側（西から）

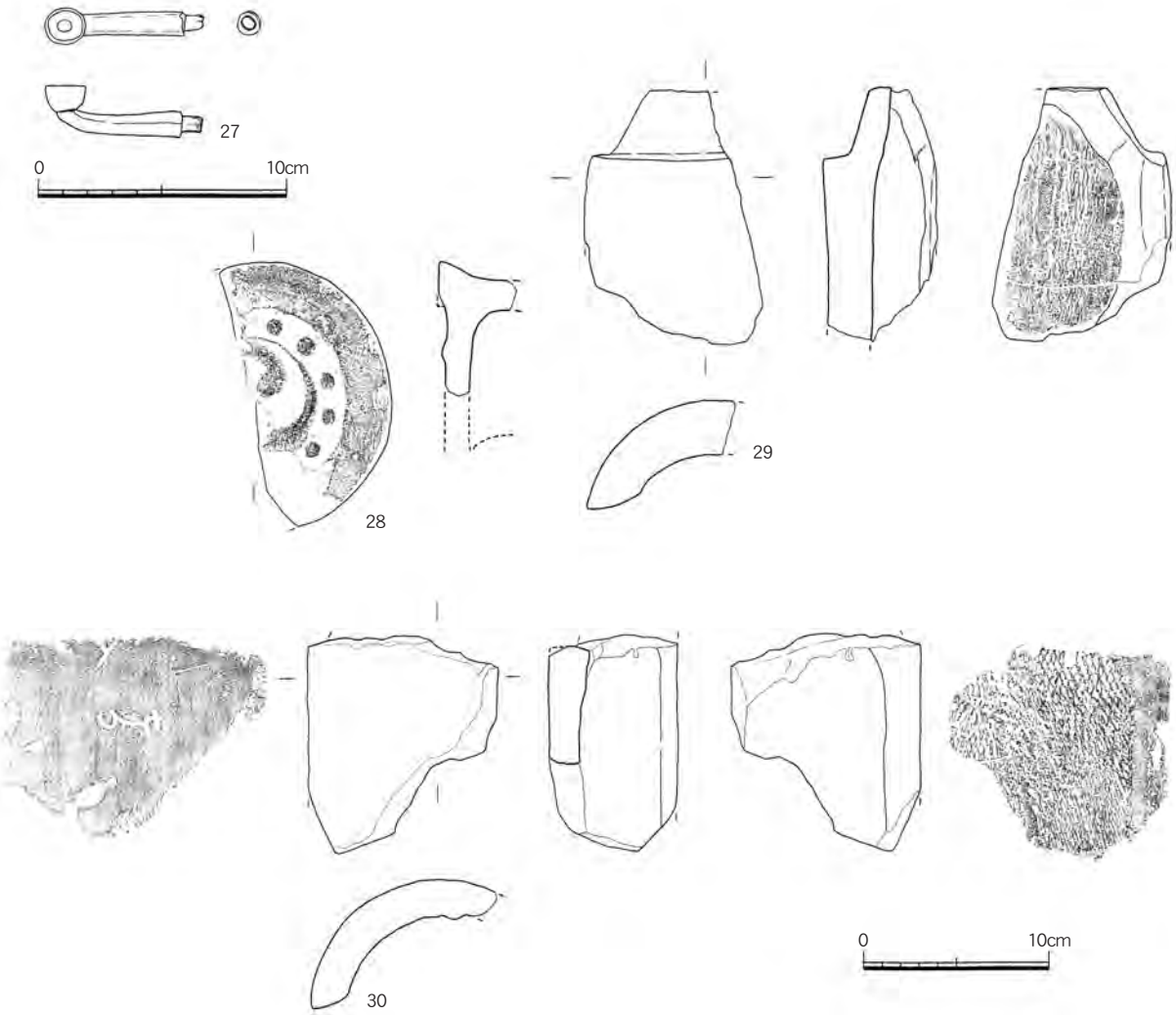


Fig.6　SE090709 出土遺物実測図①（1/3・1/4）

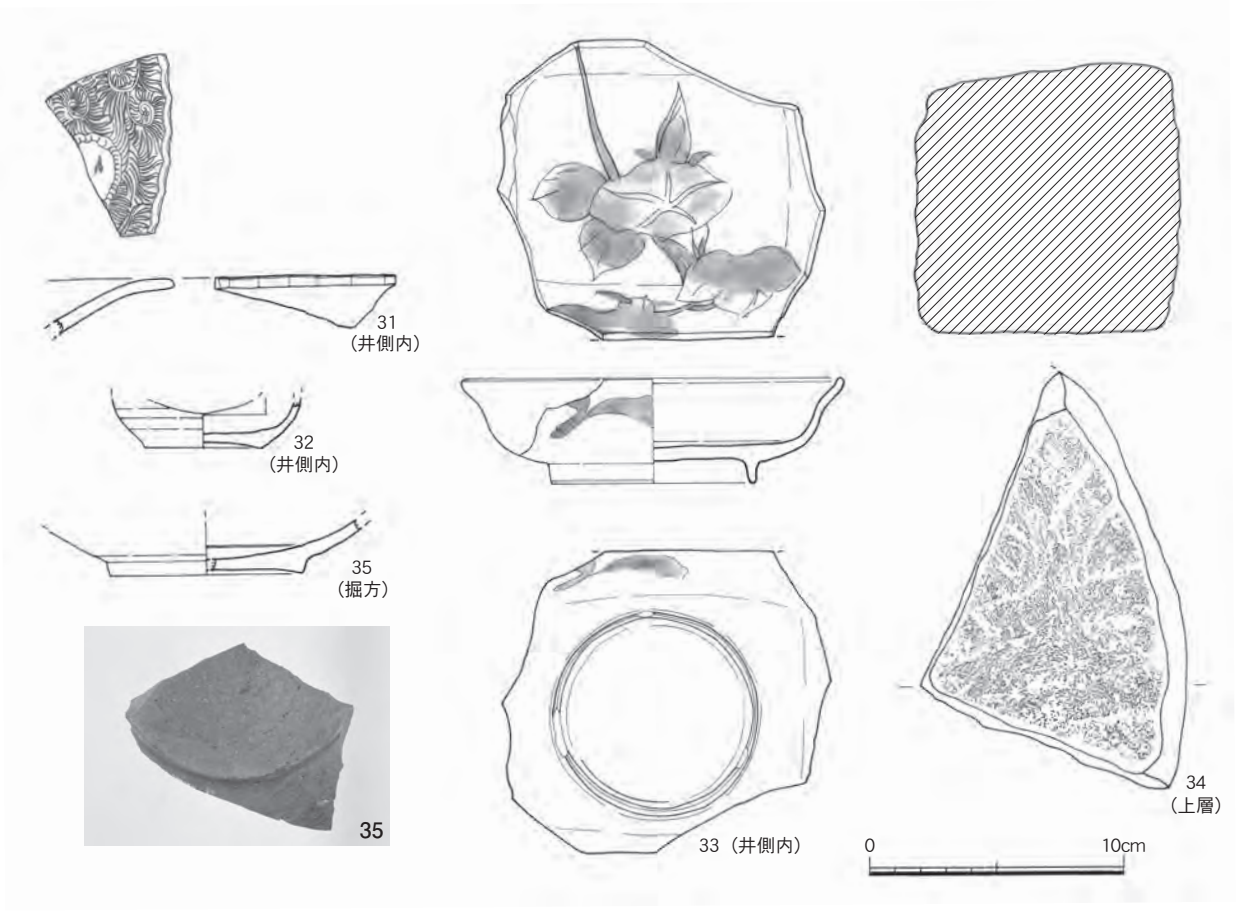
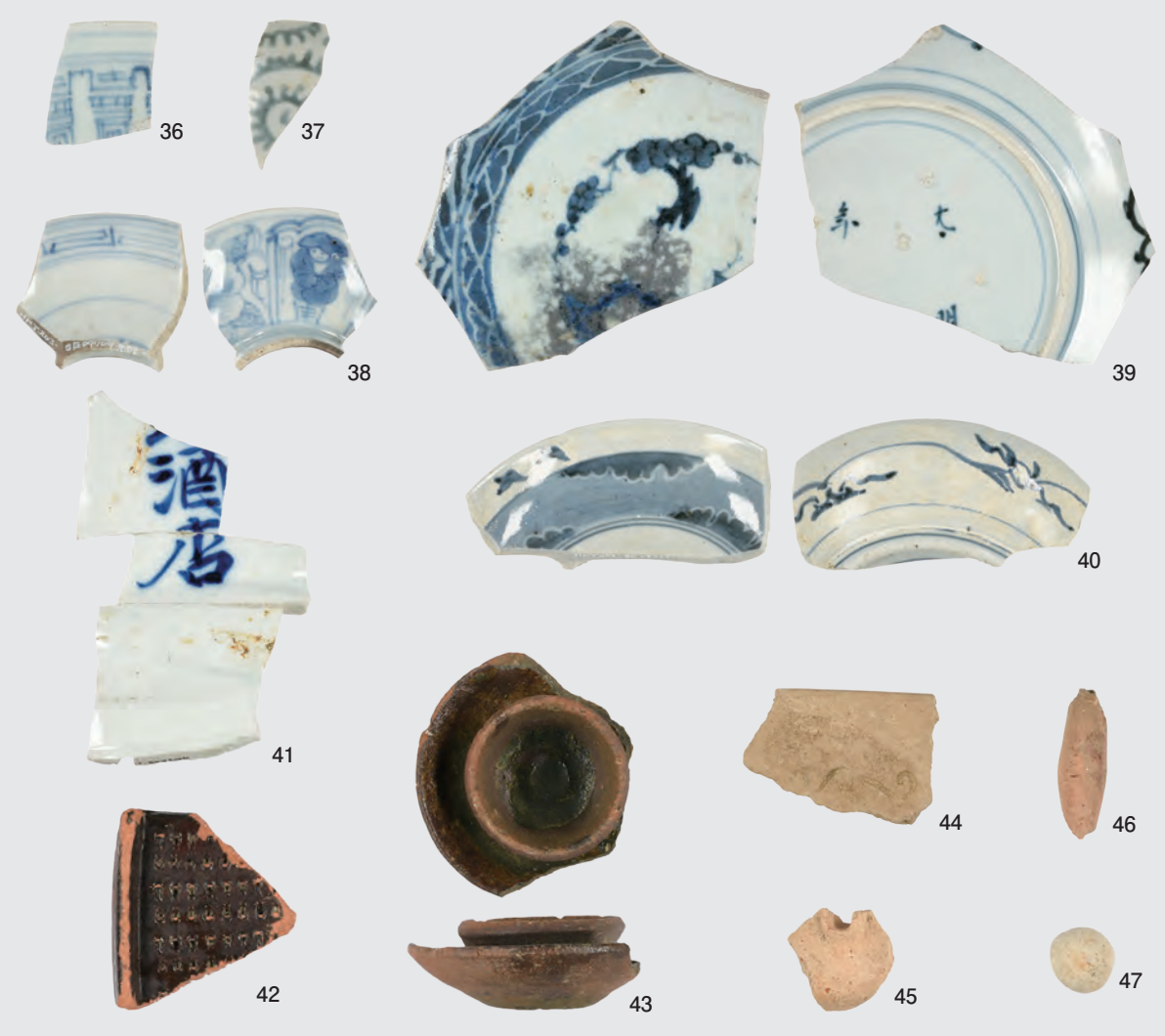


Fig.7　SE090709 出土遺物実測図②（1/3）

SE090709（Fig.3　Ph.13・15）　調査区中央に位置し、北側は調査区外へ延びる。瓦組の井戸である。掘方の平面プランは楕円形で、長径 3.6m、短径 3.0m を測り、井側はやや北側よりに設けられる。幅約 23cm、高さ 24.5cm、厚さ 3cm の井戸瓦を 9 枚と幅約 1/2 の井戸瓦 1 枚、計 10 枚で直径約 75cm の井側を作る。近世の井戸で、水溜までは掘削しなかった。なお、井戸より出土した炉壁について金属学的調査を行った（付編 2 参照）。

出土遺物（Fig.6・7　Ph.16）　27 は青銅製の煙管の雁首で、木製の羅宇の一部が残る。雁首は、鍛造で、火皿と雁首は別に製作し接合する。湾曲した脂返しを持ち、火皿と繋げる。28 は燻した軒丸瓦で、内区に三つ巴を配し、巴の回転方向は逆時計回りに尾を引く。29・30 は丸瓦で、凸面はナデ、凹面は布目が残る。29 は燻され、30 はにぶい橙色を呈する。また、30 の凸面には「七□□」のスタンプが押される。31~33 は肥前系陶磁器で、31 は口縁部をなぶり口にした青磁の皿で、口縁端部から外面にかけて淡緑色の釉がかかる。内面は染付で、花文を描く。32 は一時焼成の陶器の底部片で、底部には回転糸切りが残る。胎土は精良で、淡橙色を呈する。33 は型押しの高台付皿で、内外面に朝顔を描く。花は桃色、葉は藍色である。34 は砂岩製の石臼片である。上臼で、上面は中央に向かって、わずかに窪む。下面は二次加工の可能性もあるが、溝状の擦痕が残る。35 は古代の灰釉陶器である。回転ヘラ切りの円盤状の底部を有し、灰色・暗橙色の胎土に灰色の釉がかかる。36~47 は写真のみであるが、36~41 は肥前陶磁器である。36~38 は染付碗で、36 の外面は線描きで文様が施され、37 は蛸唐草文、38 は人物と花文を描く。39・40 は染付皿で、39 は「太明年製」の 2 行 4 字銘の銘款が、高台内に存し、ハリが残る。体部外面には唐草文、内面見込みには梅枝を描く。40 は外面に唐草文、内面に草と鳥の文様を施す。41 は酒樽で、「□□酒店」と銘が入る。42 は陶器の卸金で、

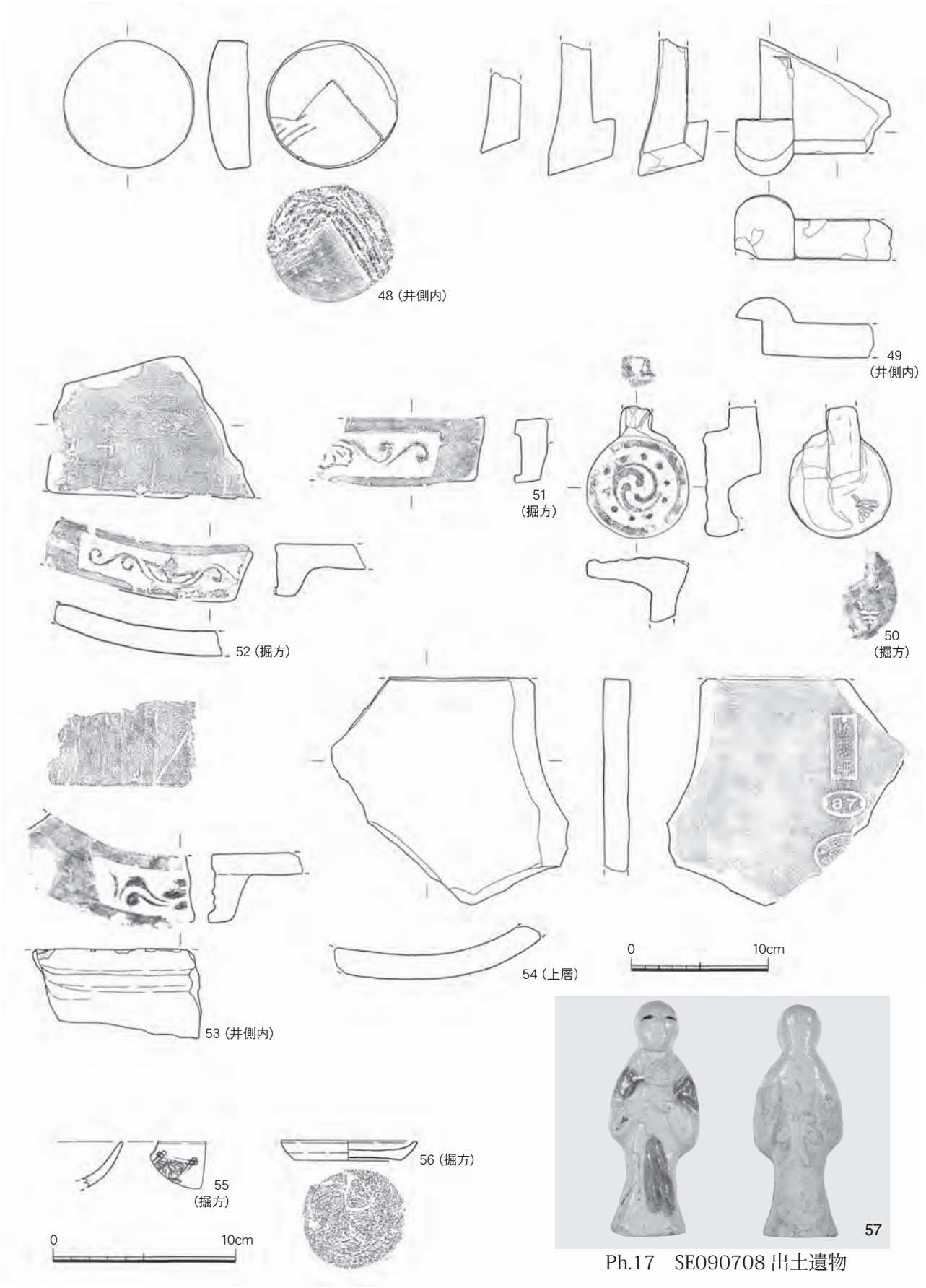


Ph.16　SE090709 出土遺物

明橙色の胎土に暗赤褐色の釉がかかる。43 は灯火器で、受部内面に黄褐色の釉がかかる。44 は火鉢の小片である。45 は土鈴の小片で、赤褐色粒を含む精良な胎土で、色調は橙色を呈する。46 は管状土錘で端部をわずかに欠損するが、現存で長さ 4.5cm、重さは 8.0g を量る。47 は土玉で、直径 2.0cm を測る。胎土は精良で、白橙色を呈する。重さは 5.0g である。他に博多火鉢、移動式竈、桟瓦、鉄釘等が出土し、井戸の時期は 19 世紀前半と考えられる。

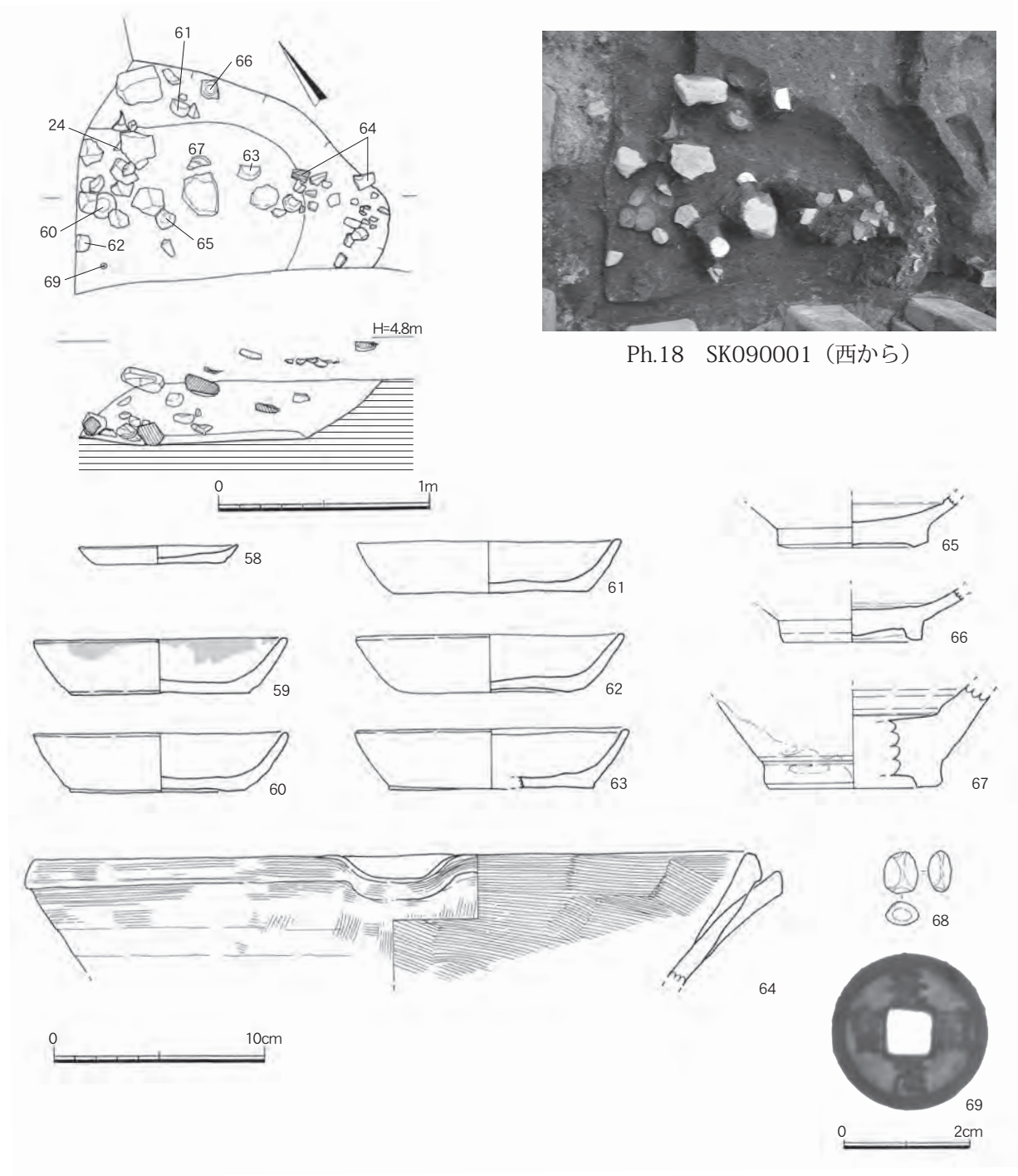
SE090708（Fig.3　Ph.13・14）　調査区中央に位置し、SE090709 が廃絶された後、その掘方内に SE090708 が造られる。掘方は直径 1.25m と狭く、やや南側よりに直径 80cm の井側を設置する。幅約 20cm、高さ 24.5cm、厚さ 3cm の井戸瓦を 12 枚並べる。近代の井戸で、水溜までは掘削しなかった。

出土遺物（Fig.8　Ph.17）　48~54 は燻し瓦である。48 は万十の巴瓦で、胴部を欠損する。全面、丁寧なナデで調整する。49 は紐付の熨斗瓦の小片で、棟の最下段に使用されたものである。凸面にはスタンプのわずかな痕跡があるが、詳細は不明である。50 は目板唐草の熨斗瓦で、大棟の雨熨斗の下に使い、小巴文と唐草模様を付けたものである。小巴文は内区に三つ巴を配するが、巴の回転方向が逆時計回りに尾を引き、10 個の珠文を配する。51~53 は軒平瓦で、唐草文を配し、51・52 は中央に三葉を描く。54 は平瓦で、凸面中央部分に 3 つのスタンプが残る。上から角印で「検査之証」、中央が丸印で「87」、下は丸印であるが、欠損のため不明である。55 は肥前陶磁の碗の口縁部



Ph.17　SE090708 出土遺物

Fig.8　SE090708 出土遺物実測図（1/3・1/4）



Ph.18　SK090001（西から）

Fig.9　SK090001 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/1）

片で、桐文のコンニャク版が施される。56 は回転糸切り底の土師器の小皿で、ほぼ完形品である。口径 7.3cm、器高 1.0cm を測る。胎土は金雲母、赤褐色粒を多量に含み、色調は明褐色である。57 は女性が犬を抱いている人形である。胎土は精良で、白橙色を呈し、前面と背面は背中まで白色釉がかかる。背面の腰から下は施釉されていない。目は茶色、着物には緑色が施される。底部中央には約 1mm の小さな穿孔を有する。井側内からは魚骨・鳥骨が出土する。（Ⅲ -35 参照）。他に桟瓦、鉄釘等が多量に出土する。

（2）土坑（SK）

SK090001（Fig.9　Ph.18）　調査区北西端に位置し、南側、西側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈すると思われる。東西方向 1.5m 以上、南北方向 1.0m 以上、深さは 30cm を測る。ただし、遺物の出土状況より、掘り込み面は 20cm 以上上からと思われる。壁面は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は炭化物を多量に含む灰黒色土を主体とする。大量に破損した土師器、陶磁器等とともに拳から頭大の礫岩や玄武岩が認められる。また、南西端の床面付近で、銅銭が出土する。遺物は北東側から中心に向かって廃棄された様相を呈する。

出土遺物（Fig.9）　58~63 は回転糸切り底の土師器である。58 は小皿で、口径は 7.6cm を測り、色調は明橙色を呈する。59~63 は坏で、口径は 12.0~13.0cm を測り、59 は底部に板状圧痕を有する。62・63 は多量の金雲母を含み、色調は 61 が橙色、他は明橙色を呈する。59 は内外面に多量の煤が付着し、灯明皿として使用される。64 は瓦質土器で、片口の鉢である。65~67 は白磁である。65 は碗Ⅳ類の底部片で、見込みに目跡が残る。66 は碗Ⅷ類で、内面見込みの釉を環状に掻き取り、それにそって目跡が残る。また、高台外底部と高台内にも目跡を有する。67 は壺の底部片である。68 は砂岩製の磨石である。黒色を呈し、磨いた箇所は光沢を帯びる。重さは 4.6g を量る。69 は北宋代の銅銭で、「景祐元寳」（初鋳年 :1034 年）である。他に鉄釘、周防産緑釉陶器が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀後半と考えられる。

SK090002（Fig.10　Ph.19）　調査区西端に位置し、遺構の大半は西側の調査区外へ延びる。南北方向で 1.6m、東西方向で 0.55m 以上を測り、南側にテラスを有する。底面、テラスともにほぼ平坦で、深さは約 30cm である。遺物は床面付近ではなく、上層に集中しており、礫岩、砂岩、玄武岩とともに出土する。覆土は下層が焼土を少量含む灰色粘質土、遺物を多量に含む上層は炭化物、白灰色粘質土を含む、黄灰色粘質土を主体とする。

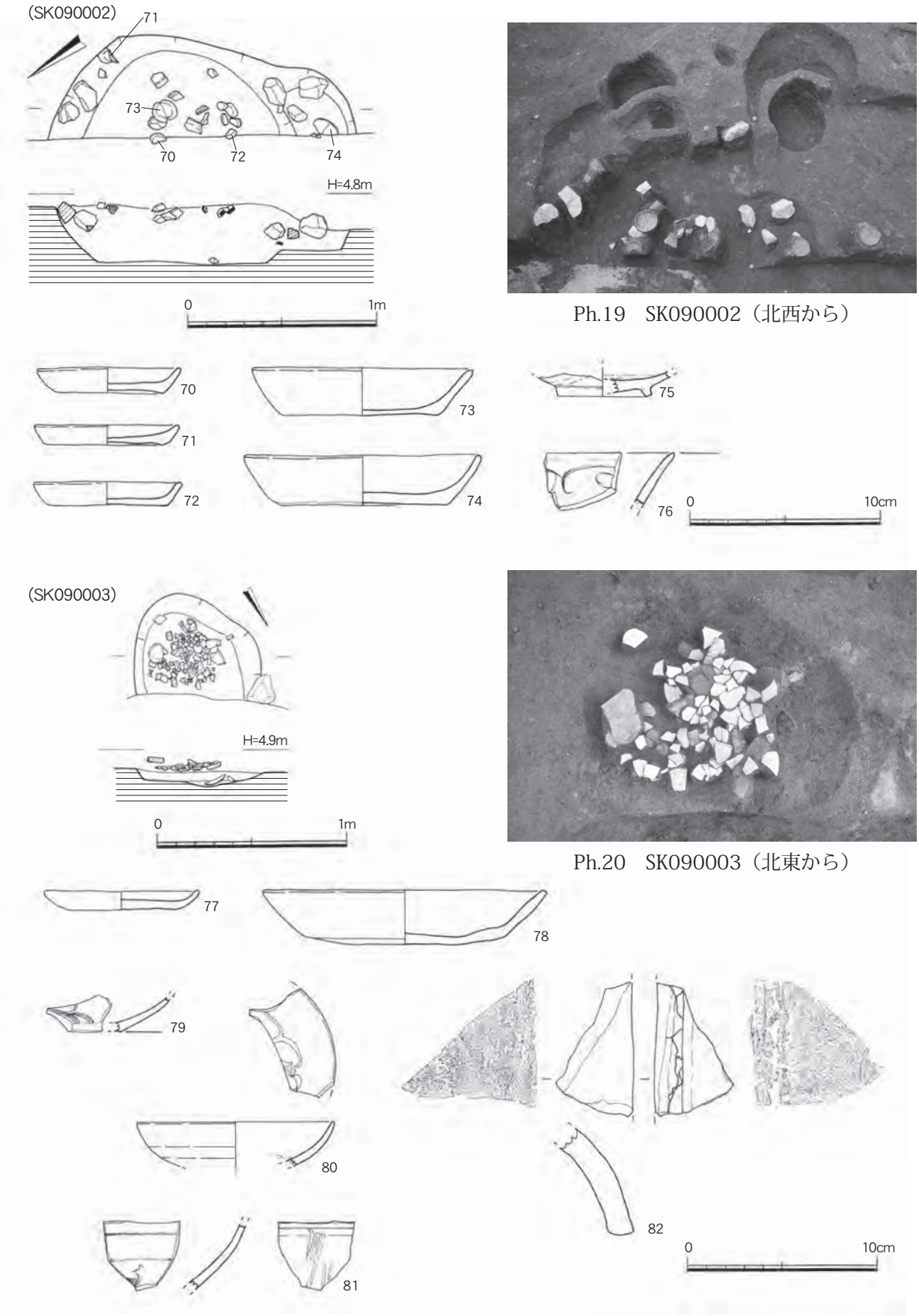
出土遺物（Fig.10）　70~74 は回転糸切り底の土師器である。胎土にすべて金雲母を含み、71・74 は多量の赤褐色粒も含む。70~72 は小皿で、口径は 7.6~7.8cm を測り、色調は橙色を呈する。73・74 は坏で、口径は 11.6、12.5cm を測り、明橙色を呈する。75 は白磁皿Ⅲ類の底部で、内面見込みの釉を環状に掻き取る。76 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ -2 類の口縁部片である。他に同安窯系青磁、中国の施釉陶器片が出土し、土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀後半と考えられる。

SK090003（Fig.10　Ph.20）　調査区西側に位置し、北側を他の遺構に切られる。平面プランは楕円形を呈すると思われ、長径 0.55m 以上、短径 0.65m を測る。遺存状況は悪く、深さは 5cm 程度である。他の廃棄土坑と異なり、出土遺物は白磁を中心とし、小片が多く、接合できるものも少ない。覆土は灰黄褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.10）　77・78 は回転糸切り底の土師器である。77 は小皿で、復元口径 8.2cm を測り、底部にすだれ状の板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。細かく割れており、器面は被熱のためか、剥離する。78 は坏で、糸切り後、外底部中央にナデを行い、板状圧痕を残す。体部は外側に大きく開き、復元口径は 15.0cm を測る。79・80 は白磁皿で、Ⅵ -2a 類、Ⅶ類である。81 は同安窯系青磁碗である。82 は瓦質の丸瓦で、凸面には縄目、凹面には布目が残る。土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀中頃から後半と考えられる。

SK090005（Fig.11　Ph.21）　調査区中央北側に位置し、北側は矢板で削平される。平底の甕が埋置されたもので、掘方は甕にあわせて掘られ、直径 0.65m を測る。遺存状況は悪く、上半は大きく削平され、掘方の深さも 18cm 程度である。覆土は灰色土を主体とする。

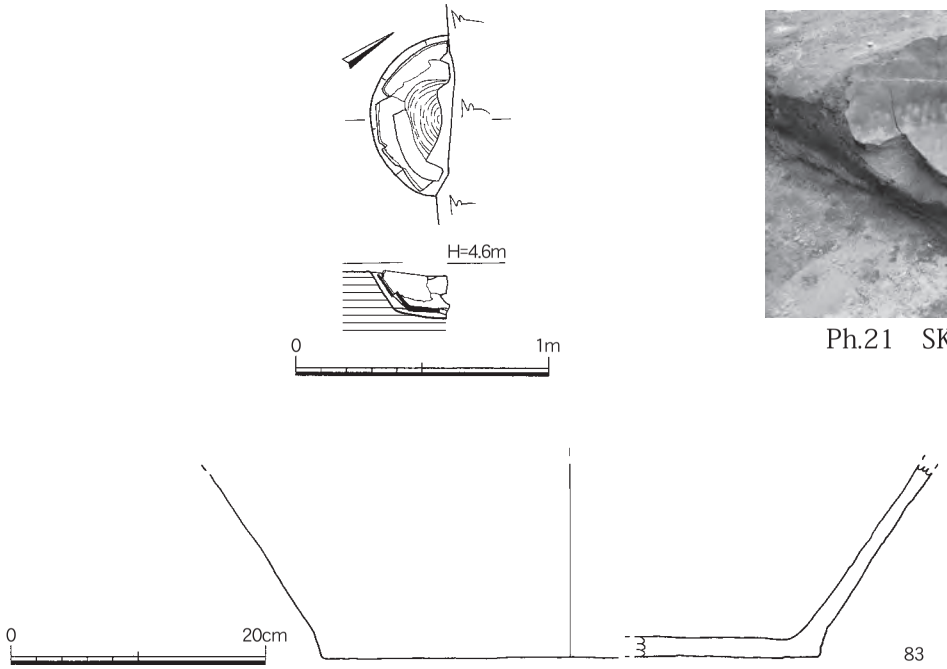
出土遺物（Fig.11）　83 は瓦質土器の大甕である。平底を呈し、復元底径は 39.8cm を測る。胎



Ph.19　SK090002（北西から）

Ph.20　SK090003（北東から）

Fig.10　SK090002・090003 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.21　SK090005（北から）

Fig.11　SK090005 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/6）

土は白色砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈する。内外面ともに刷毛目で調整したのち、部分的に指オサエが残る。遺構の時期は近世と考えられる。

SK090025（Fig.12）　調査区西側に位置し、北側を他の遺構に切られる。平面プランは楕円形を呈すると思われ、長径 1.7m 以上、短径 1.1m、深さ 0.4m を測る。断面は船底状を呈する。覆土は炭化物と橙褐色粒を含む灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.12）　84~86 は土師器である。84 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 8.8cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。金雲母を含み、明橙色を呈する。85 は回転糸切り底の坏で、口径は 15.5cm を測り、体部は大きく外に開き、口縁は外反する。橙色を呈し、微細な金雲母を多く含む。86 は高台付椀の口縁部片である。回転ナデで調整され、外底部には指ナデが部分的に施される。87 は瓦器の皿で、口径 9.8cm を測る。丁寧なナデで調整し、口縁部から底部外面にかけて磨きを施す。88 は施釉陶器の壺の口縁部片で、肩部に把手が付き、頸部に 1 条の突帯が巡る。胎土は灰色・明褐色を呈し、灰緑色の釉が外面にかかる。89 は陶器の底部片で、白色砂粒を多く含む褐色の胎土に灰白色の釉が内外面にかかる。一部、被熱を受ける。90~92 は白磁である。90 は碗Ⅴ-2a 類、91 は碗Ⅳ類、92 は水注の底部片で、黒色砂粒を含む灰白色の胎土にやや青味がかった白濁色の釉がかかる。93 は柳葉形の有茎式鉄鏃で、身に厚みがあり、茎は断面方形を呈する。94 は瓦質の丸瓦で、凸面には縄目、凹面には布目が残る。95 は敲石である。1 面に敲打の痕跡が残る。また、その周辺は部分的に砥石として使用している。破損後、火を受けたため、赤褐色を呈する。重さは現状で 362.64g である。他にガラス滓、ガラス坩堝、珪石、炉壁（Ⅲ-34 Fig.32-632）が出土する。これらの出土遺物から土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる

SK090074（Fig.13　Ph.22）　調査区中央に位置し、北側と西側は他の遺構に切られる。底面は平坦を呈しており、壁は緩やかに立ち上がる。深さは約 15cm を測る。出土遺物は土師器の小片が多く、礫岩、花崗岩も含まれる。覆土は炭化物を含む灰黒色土である。

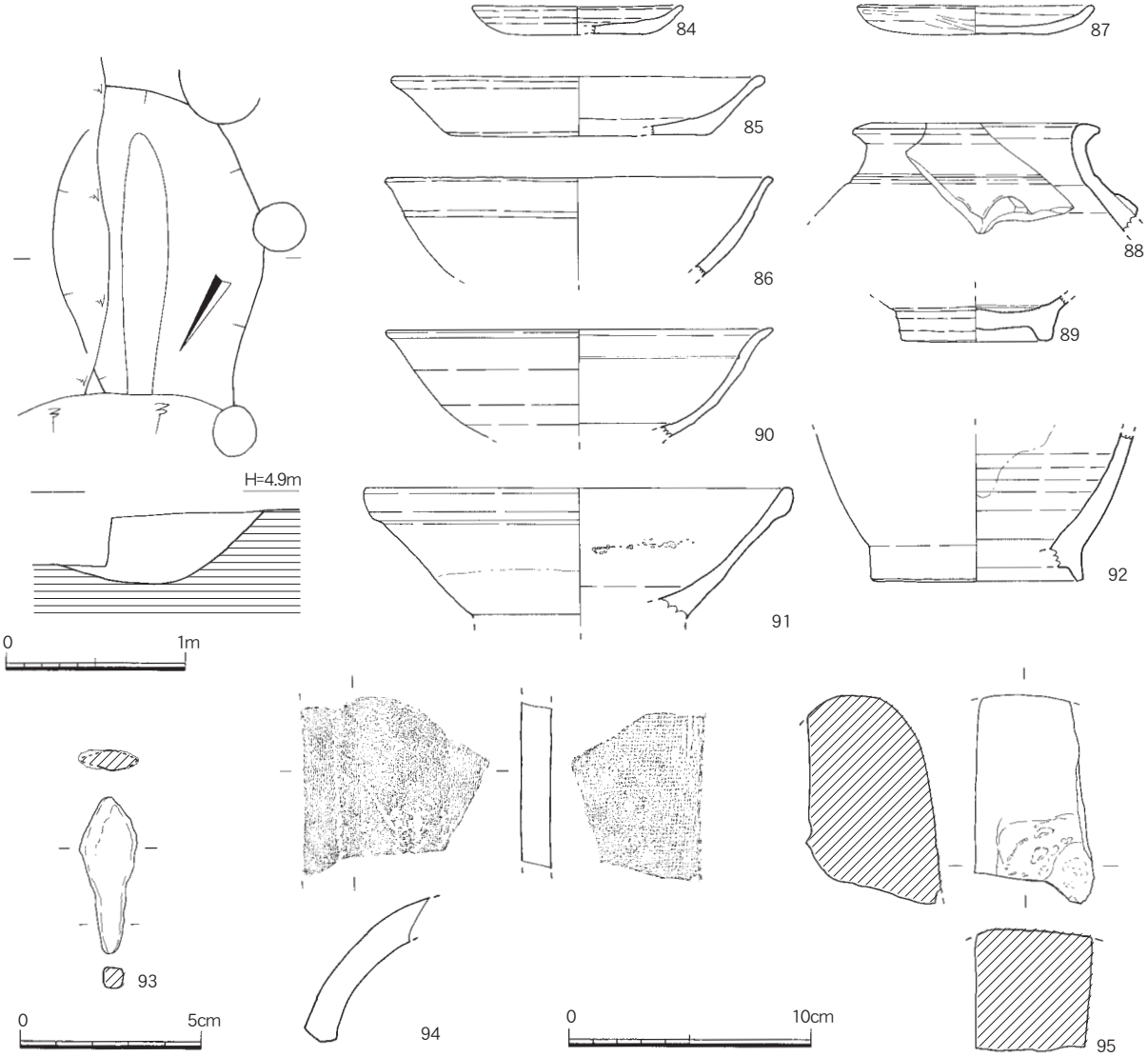
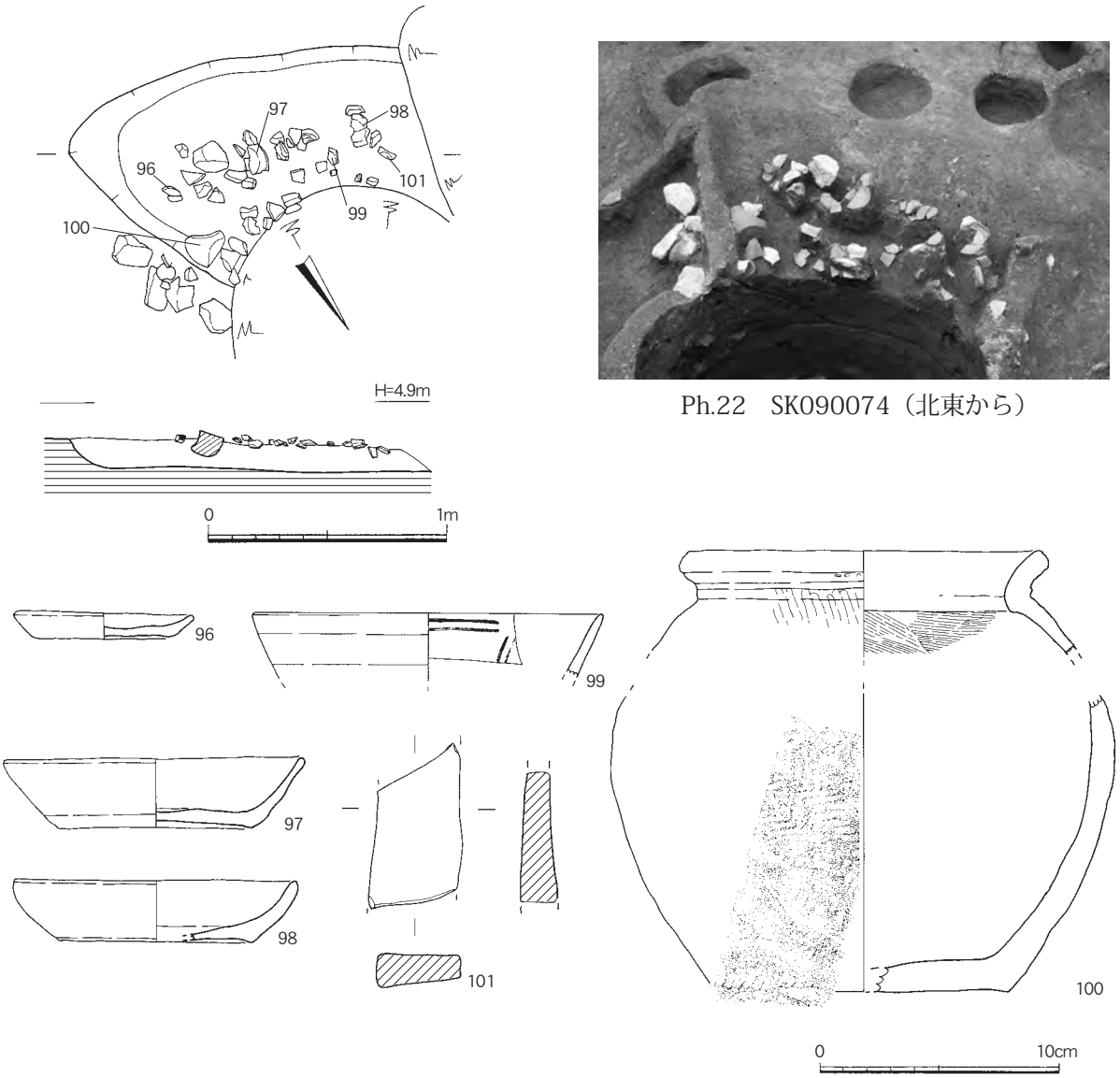


Fig.12　SK090025 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/2）

出土遺物（Fig.13）　96~98 は回転糸切り底の土師器である。96 は小皿で、口径は 7.6cm を測る。胎土に微細な金雲母を多量に含み、色調は橙色を呈する。97・98 は坏で、口径は 12.7cm、12.0cm である。97 の体部は底部から直線的に延び、98 は内湾気味に立ち上がる。99 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4b 類の口縁部片で、内面に雲文が描かれる。100 は瓦質土器の甕である。平底を呈し、外反する口縁をもつ。体部外面は山形の叩きの後、部分的にナデが施される。体部内面はナデで調整され、口縁部には横方向の刷毛目調整が残る。101 は手持ち砥石で、両端部は欠損する。粘板岩製で、白色、黄橙色、橙色と層状に重なる。4 側面が使用されており、凹状に窪み、滑らかとなる。現状で 50.5g を量る。他に青白磁、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、瓦器椀、ガラス小玉（Ⅲ-24 Fig.22-498）が出土する。土坑の時期は回転糸切り底の土師器しか出土しないこと等から 12 世紀後半と考えられる。

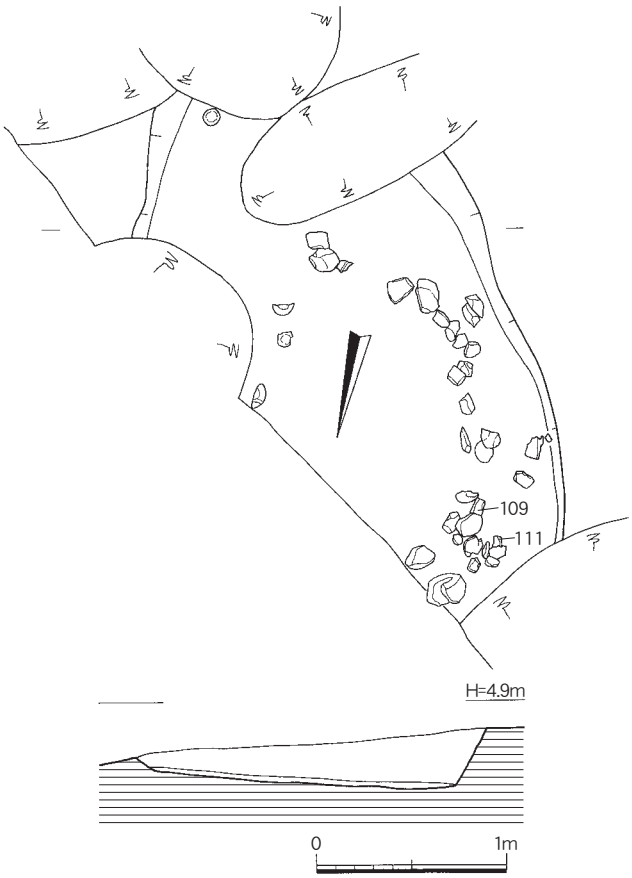
SK090079（Fig.14　Ph.23）　調査区西側に位置し、北側、西側を他の遺構に切られる。覆土は炭化物、焼土を含む灰黒色土であり、少量の土師器、陶磁器とともに大量の拳大の玄武岩、花崗岩、砂岩が出土する。南東に位置する SK090074 と底面の高さもほぼ同レベルであり、類似した覆土であることから同一プランの可能性がある。ただし、出土遺物の構成等は異なっているので、ここでは別の遺構として報告する。



Ph.22　SK090074（北東から）

Fig.13　SK0900074 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.14）　102~108 は土師器である。102~105 は回転糸切り底の小皿で、口径は 7.7~8.2cm を測る。102~104 の体部は底部から直線的に外に開くが、105 は内湾気味に体部中位に段をもって立ち上がる。105 は底部に板状圧痕を有し、色調は明橙色である。他は橙色を呈する。106・107 は回転糸切り底の坏で、口径 12.4cm、12.6cm を測る。ともに金雲母を含み、色調は 106 が明橙色、107 が橙色を呈する。108 は甕で、口縁は頸部で緩やかに外反する。内面は横方向の刷毛目で調整されるが、外面は多量の煤が付着しており、調整は不明である。109・110 は瓦質の擂鉢である。109 の内面と外面口縁下は細かい刷毛目で調整され、内面に 3 条の擂目が残る。口縁端部は凹線が巡る。焼成は良好で、色調は黒色、灰黒色を呈する。110 は片口の鉢で、内面には 4 条の擂目を有する。胎土に白色砂粒、黒色粒を多量に含み、色調は灰橙色を呈する。111 は施釉陶器の皿の口縁部片である。胎土に黒色粒、白色砂粒を含み、色調は橙色である。内面から外面中位まで黄褐色の釉薬がかかり、底部に垂れる。112 は須恵質の丸瓦片で、凸面は細かい格子目叩き、凹面には布目が残る。113 は硯の小片で、陸部が残る。縁は細く、幅 2.0mm を測る。色調は灰褐色を



Ph.23　SK090079（北東から）

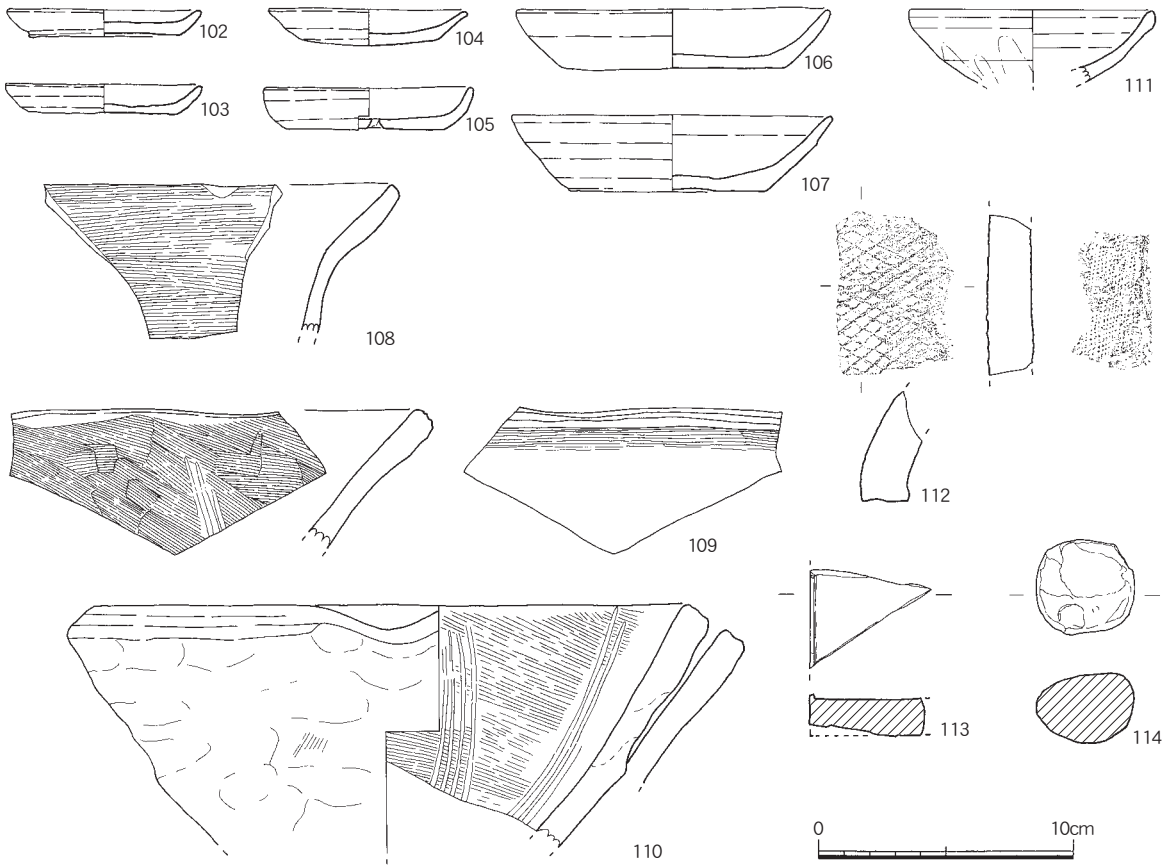


Fig.14　SK090079 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

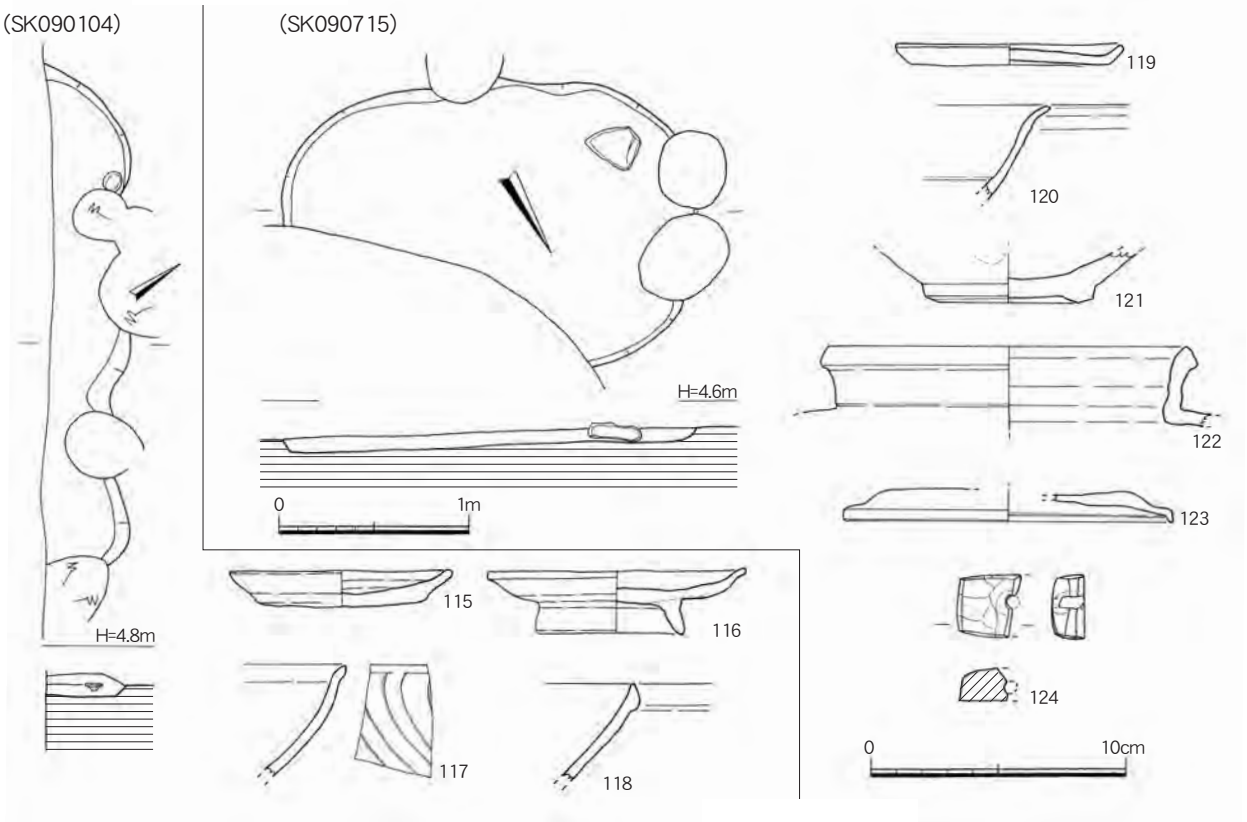


Fig.15　SK090104・090715 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

呈しており、石材は山口県の「赤間石」と思われる。114 は砂岩製の石球である。断面は略楕円形を呈し、使用された痕跡か、凹状に窪んだ箇所が複数認められる。重さは 48.2g である。他に白磁碗Ⅳ類、鎬蓮弁を有する龍泉窯系青磁、鉄釘、鉄滓、炉壁、ガラス坩堝、ヒトの歯（Ⅲ -3 参照）が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 13 世紀前半と考えられる。

SK090104（Fig.15）　調査区中央南側に位置し、南側は調査区外へ延びる。東西の一辺は約 2.7m、南北は 0.4m 以上、深さは 0.1m と遺存状況は悪い。覆土は炭化物、焼土を含む灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.15）　115・116 は土師器である。115 は回転ヘラ切り底の小皿で、底部に板状圧痕を有する。口径 8.8cm を測り、色調は淡橙色である。116 は高台付小皿で、口径 10.2cm、底径 6.0cm、器高 2.5cm を測る。胎土は精良であり、色調は橙色を呈する。皿内面に直径約 6.0cm の重ね焼きの痕跡が残り、縁は明橙色、内部は暗橙色を呈する。117・118 は白磁で、117 は碗Ⅻ -1b 類、118 は碗Ⅳ類である。他に鉄釘が出土する。回転糸切り底の土師器が出土しないことから土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK090715（Fig.15）　調査区中央に位置し、北側を SE090709 に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 2.2m、短径 1.5m を測る。底面はほぼ平坦で、深さは 8cm である。土坑の西側には一辺 20cm、厚さ 8cm の偏平な片岩を検出した。覆土は炭化物を含む灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.15）　119 は回転糸切り底の小皿で、底部に板状圧痕を有する。復元口径は 7.0cm、胎土に多量の金雲母を含み、橙色を呈する。120・121 は白磁で、120 は小碗で口縁は緩やかに外反し、見込みに段を有する。橙色の胎土に化粧土を施し、灰白色の釉がかかる。121 は碗Ⅳ類の底部片である。122・123 は下層の遺物の混入と考えられる須恵器である。122 は壺、123 は坏蓋で、天井はヘラ切り未調整である。124 は穿孔を有する滑石製品で、半分は欠損する。形状は長方形、断面は台形を呈すると考えらえる。破面で上下方向の穿孔があることも確認でき、穿孔の縁で紐ずれの痕跡も残

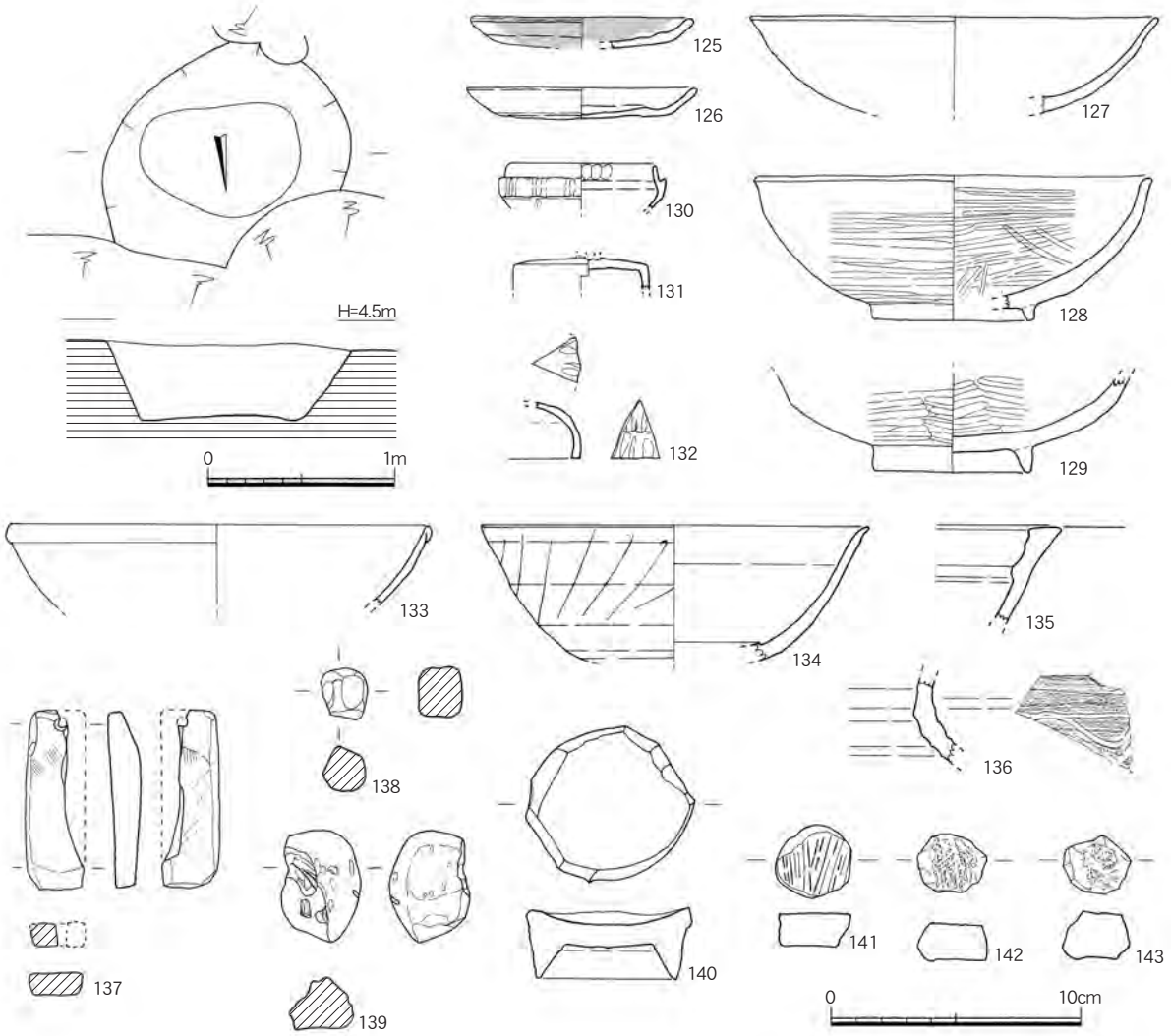
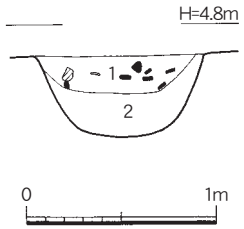


Fig.16　SK090725 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

る。現状で、重さ 12.8g を図る。他に白磁碗Ⅱ・Ⅴ類、中国の陶器、炉壁が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀前半と考えらえる。

SK090725（Fig.16）　調査区中央に位置し、西側と南側を他の遺構に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径約 1.4m、短径約 1.1m を測る。断面は逆台形を呈し、深さは 40cm である。覆土は炭化物を含む灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.16）　125~129 は土師器である。125・126 は回転ヘラ切り底の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。口径は 9.0cm、9.2cm を測り、色調は橙色である。125 は灯明皿として使用されており、口縁部内外面に煤が付着する。127~129 は椀で、127 は丁寧なナデで調整される。128 は回転ナデで調整した後、細かく密な磨きが施され、光沢をもつ。129 は他と比べ器壁が厚く、長く太い高台を付す。128 に較べると幅広の磨きを施す。130 は青白磁の合子の身である。型作りで、体部を菊花状とする。131~134 は白磁である。131・132 は合子の蓋で、131 は天井部に摘みを有する。132 は型作りで体部を菊花状とし、窪んだ部分は釉薬がやや青味を帯びる。133 は碗Ⅱ類、134 はⅤ-2b 類である。135 は無釉陶器の鉢で、口縁内面に一条の突起を有する。胎土に白色砂粒を多く含み、色調は灰色である。136 は高麗陶器の甕の頸部片で、1 条の沈線と 2 条の波状文を巡らす。暗紫灰色の粘りを帯びた胎土で、内外面ともに灰黒色を呈する。137 は粘板岩製の石製品で、上部に穿孔を有する。1/2 程度欠損するが、



SD090004
1　灰色粘質土（瓦多量に混入、炭化物・焼土少量含む）
2　やや粘質を帯びる黄灰色土（瓦少量混入、焼土・炭化物多量に含む）

Fig.17　SD090004 実測図（1/40）

Ph.24　SD090004 土層（北東から）

Ph.25　SD090004（北東から）

Ph.26　SD090004 出土遺物

長方形を呈し、横断面は方形である。縦断面の下面は直線的で、上面は弧を描く。よく研磨され、擦痕も残る。現状で重さ 26.3g である。138 は砂岩製の石球で、直方体をなす。面は平坦ではなく、窪んでおり、8.9g を量る。139 は軽石であるが、使用痕等は認められない。重さは 7.1g である。140~143 は瓦玉である。140 は白磁碗の底部片を使用し、体部縁辺を丁寧に打ち欠く。141 は土器片を利用したものか、上面には刷毛目調整が残る。142・143 は瓦質の平瓦を使用し、凸面はタタキが残るが、凹面は磨滅のため、不明である。重さはそれぞれ 101.6g、14.1g、11.2g、11.4g である。他に瓦器椀、鉄釘、鉄滓、ガラス坩堝、焼粘土塊が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半と考えらえる。

（3）溝（SD）

SD090004（Fig.17　Ph.24・25）　調査区中央に位置し、北東側は調査区外へ延びる。溝は調査区南西側で始まり、長さ 4.7m を検出した。直線的に延び、主軸方位は N-58°-W である。幅は南西側で 0.5m、北東側で 1.2m を測る。底面は南西側で標高 4.5m、北東側で 4.2m と傾斜をもつ。断面「U」字状を呈し、土層は大きく 2 層に分かれる。上層は炭化物、焼土を少量含む灰色粘質土で、瓦が多量に出土する。下層は炭化物、焼土を多量に含むやや粘質を帯びた黄灰色土で、少量の瓦が出土する。

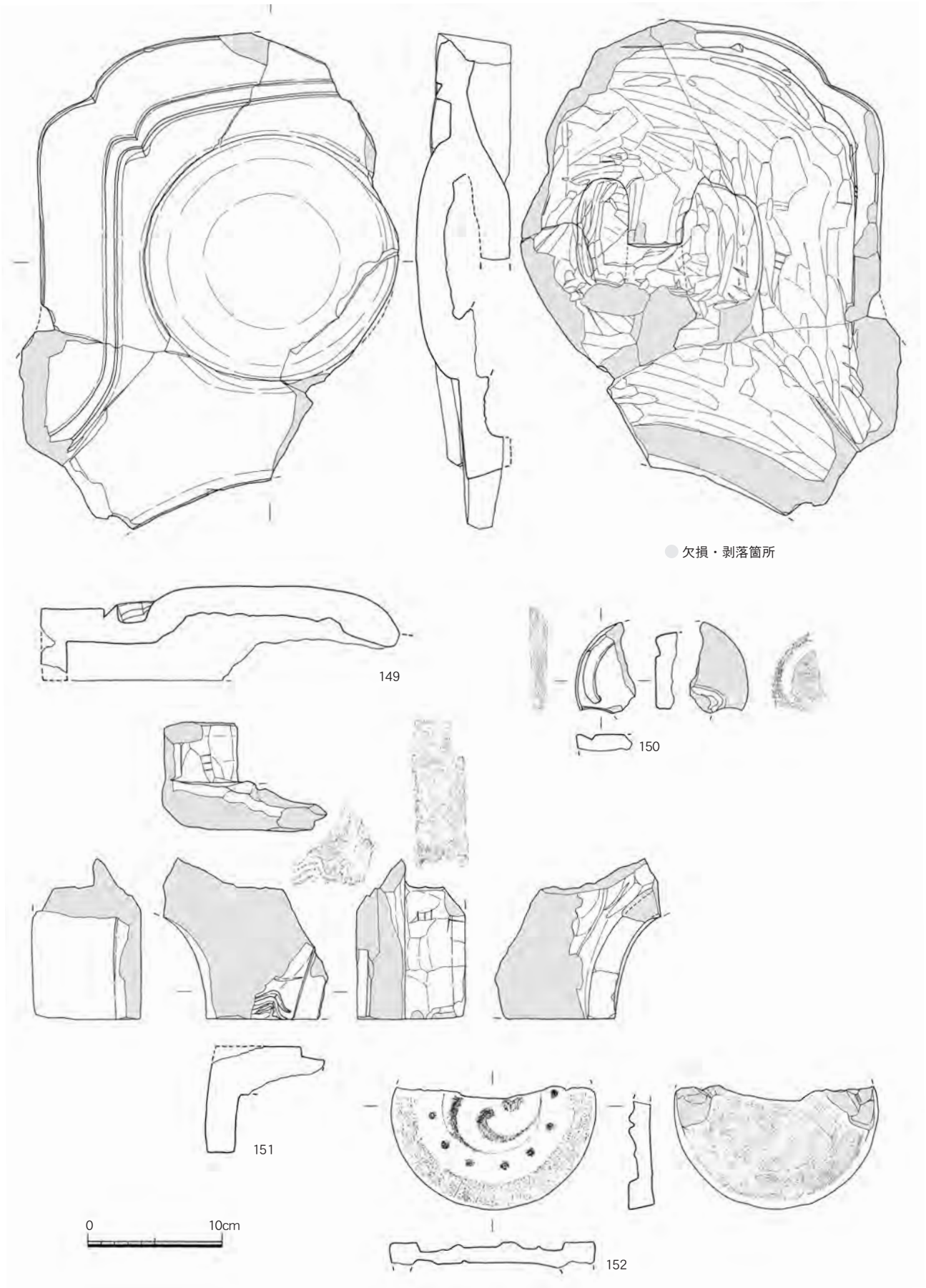


Fig.18　SD090004 出土遺物実測図①（1/4）

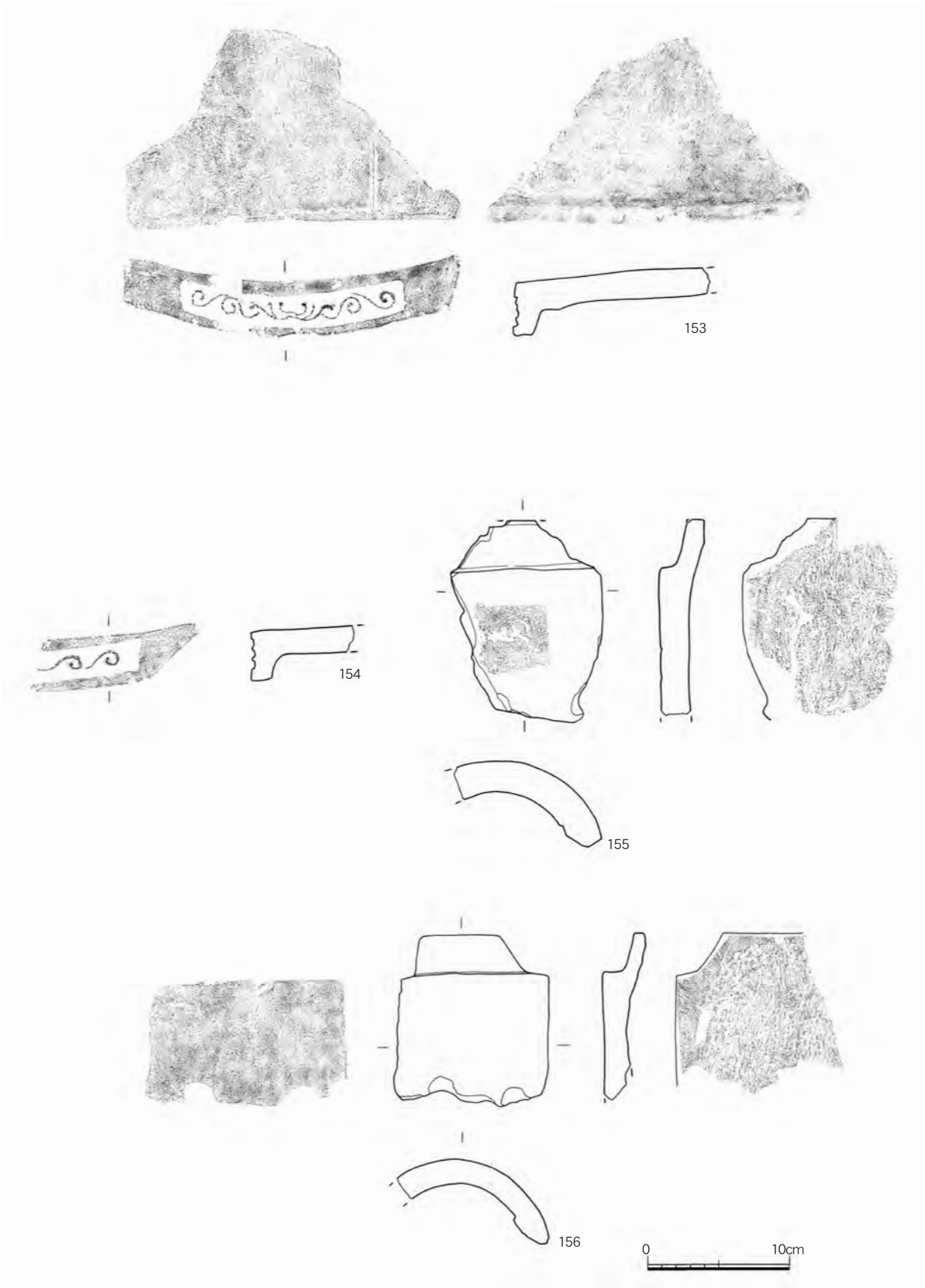


Fig.19　SD090004 出土遺物実測図②（1/4）

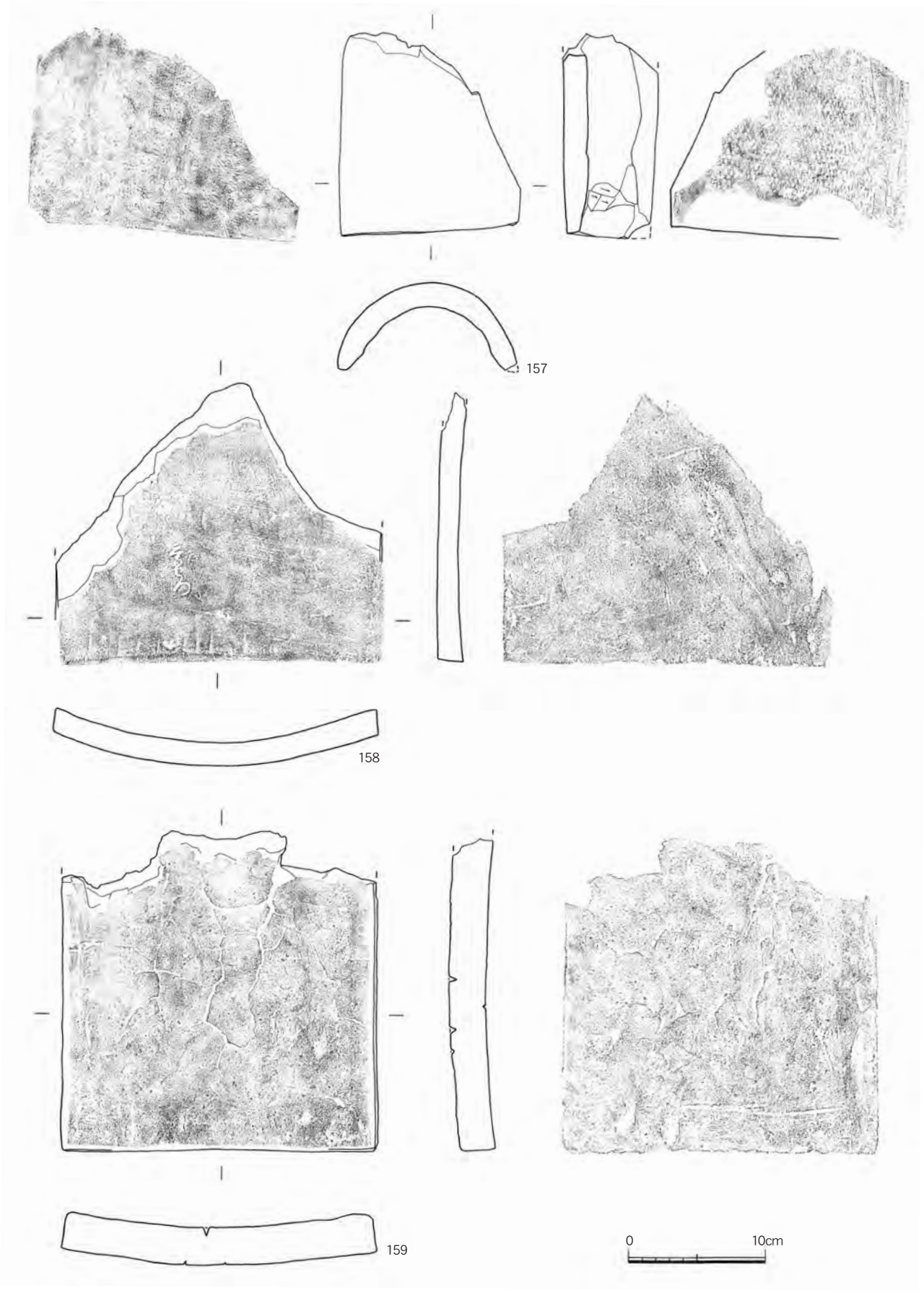


Fig.20　SD090004 出土遺物実測図③（1/4）

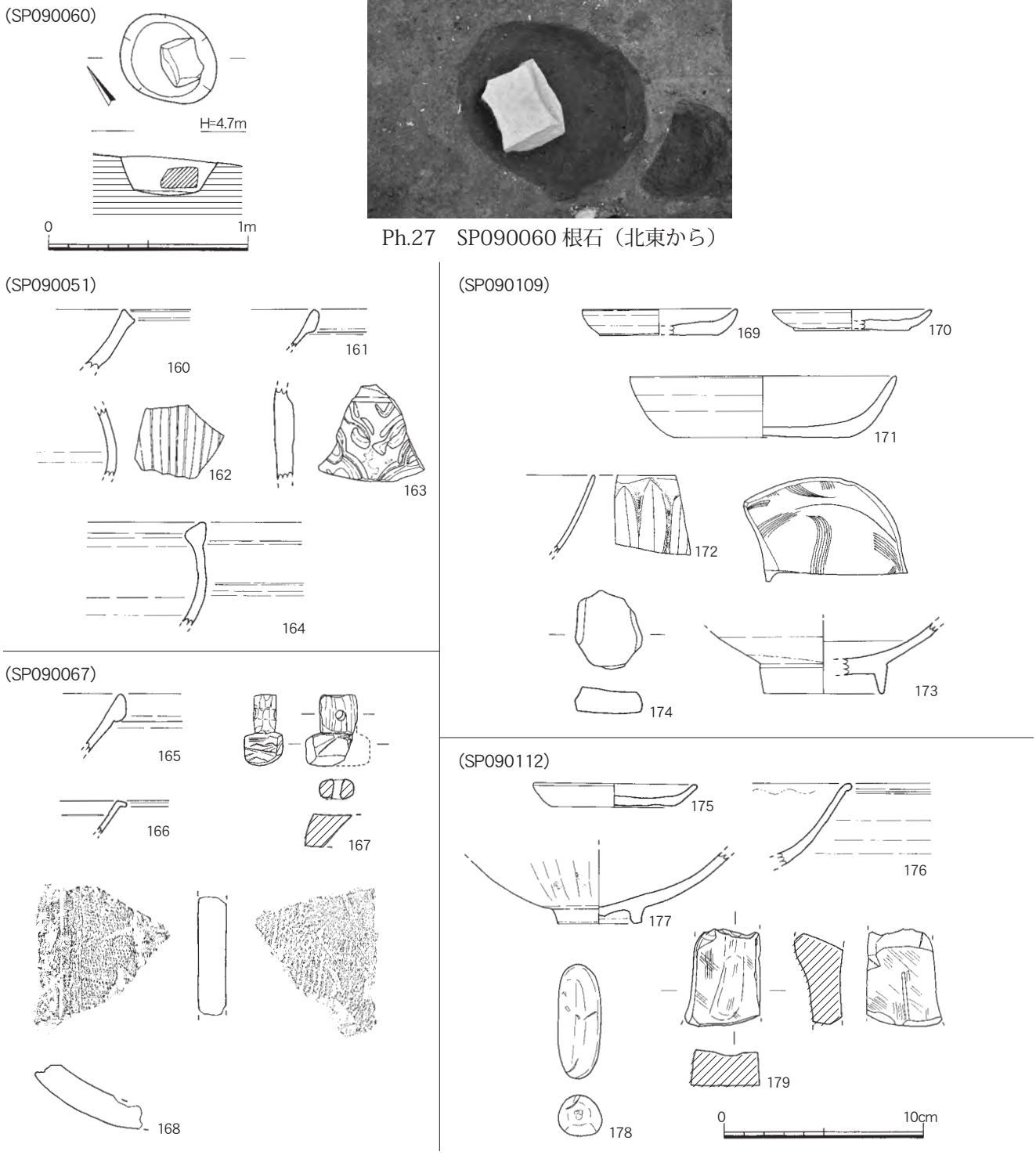
出土遺物（Fig.18~20　Ph.26）　144・145 は肥前陶磁器の染付である。144 は皿で、見込みと体部内面に草花文、体部外面に圏線と草文を描き、高台内に圏線を巡らす。145 は鉄釉天目形碗で、内面は染付、口縁部内面から体部外面まで茶褐色の釉を施すが、高台部分は施釉しない。146 は壺の底部片である。碁笥底を呈し、全面に茶褐色の釉がかかり、上半は青銅色の釉が施される。147 は褐釉陶器の鉢で、内面には櫛による波状文を施し、見込み部分に砂目が残る。148 は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径 7.0cm、器高 1.4cm を測る。金雲母、赤褐色粒を多量に含み、色調は明橙色を呈する。灯明皿として使用され、わずかであるが、口縁部外面に煤が付着する。149~159 は燻し瓦である。149 は黒餅文の鬼瓦で、型造りである。黒餅の背面には、把手が付けられる。150・151 は飾り瓦と思われる。外面に 150 は唐草状、151 は波状の文様が施される。152 は軒丸瓦で、三巴文を内区に配するが、巴は逆時計回りに長く尾を引く。巴文の周囲には珠文を施し、珠文数は 12 と思われる。裏面は部分的に工具による強いナデが施される。153・154 は軒平瓦である。153 は上向きの 5 葉の花弁を配する均整唐草文と思われるが、中心の花弁が失われる。欠損した痕跡はなく、版の段階ですでに失われたものと考えらえる。154 は小片のため、全体は不明であるが、唐草文が描かれる。155~157 は丸瓦で、凸面は丁寧な板ナデ、凹面は布目が残る。155 の凸面には「□左衛門」の文字銘を有する。158・159 は平瓦で、158 は厚さ 1.8cm を測り、凸面、凹面ともに板ナデで仕上げる。凹面中央には「□左衛門」の文字銘が残る。159 は厚さ 2.8cm と厚く、158 同様、板ナデで調整するが、焼成の段階で、ひび割れる。失敗品か。これらの出土遺物から溝の時期は 17 世紀前半と考えられる。

（4）柱穴（SP）

SP090060（Fig.21　Ph.27）　調査区中央に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 45~55cm を測る。断面は逆台形をなし、深さは 18cm である。やや東よりに一辺 20~25cm の偏平な片麻岩を水平に埋置する。根石と考えられる。柱穴からは回転糸切り底及び回転ヘラ切り底の土師器、瓦器、白磁小片が出土し、時期は 12 世紀前半と考えられる。

SP 出土遺物（Fig.21）　160~164 は SP090051 出土である。160 は須恵質土器の鉢、161 は白磁碗Ⅳ類、162 は青白磁の壺で、外面に蓮弁状の鎬を施す。163 は白磁の壺の体部片で、外面は片彫りで文様を描き、上位で段を有する。164 は施釉陶器の盤で、全面に黄褐釉がかかる。165~168 は SP090067 出土である。165 は白磁碗Ⅳ類、166 は白磁碗Ⅴ -4 類、167 は滑石製のスタンプで、一部欠損する。スタンプ面は 1.7cm × 3.2cm の長方形と考えられる。面はやや凸状を呈する。摘みは断面楕円形で、中位に 0.5cm 孔を穿つ。現状で重さは 16.8g である。168 は瓦質の平瓦である。169~173 は SP090109 出土である。169~171 は回転糸切り底の土師器で、169・170 は小皿、171 は坏である。169・171 は外底部に板状圧痕を有する。172 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ -b 類、173 は白磁碗Ⅴ類である。174 は瓦玉で、無釉陶器を打ち欠いたものか。重さは 21.3g を量る。175~179 は SP090112 出土である。175 は回転糸切り底の土師器の小皿、176 は白磁碗Ⅴ -3 類、177 は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁を有する。高台畳付けは焼成後、薄く剥ぐように打ち欠かれる。178 は砂岩製の敲石か。側面、下端にわずかに敲打痕が残る。重さは 38.8g である。179 は粘板岩製の砥石で、両端は欠損する。側面の 4 面はよく使用されており、凹状に窪む。また、研磨による幅 2.0mm の溝、多くの擦痕が残る。

SP090123（Fig.22　Ph.28・29）　調査区西側に位置し、1 面と 2 面の間で検出した。同じ建物を構成する柱と考えられる SP090124 とは、芯々で 1.7m を測る。他に対となる柱穴を確認することはできなかった。柱穴は直径 25~30cm の円形で、深さは 16cm である。燻された瓦が幾重にも重なるが、もともとは中央に瓦を平積みし、周囲の瓦はそれを取り囲むように立て、瓦の小片で隙間を充填



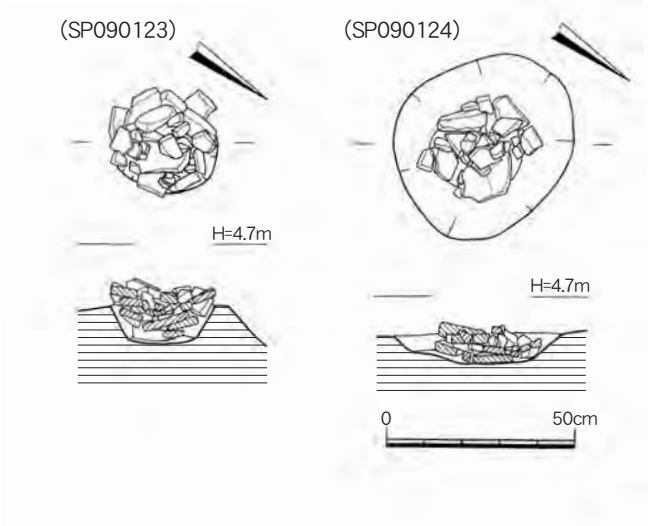
Ph.27　SP090060 根石（北東から）

Fig.21　SP090060 実測図（1/30）および第 1 面 SP 出土遺物実測図①（1/3）

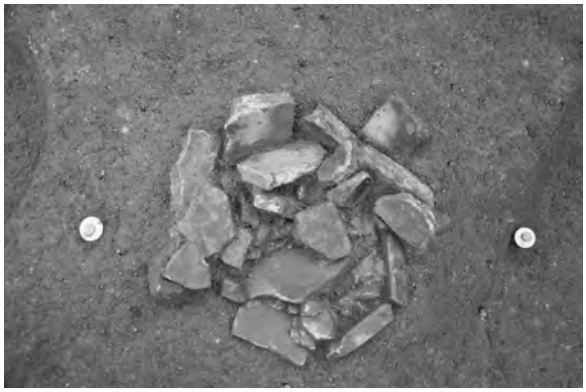
していたと思われる。覆土は灰色粘質土を主体とし、炭化物を含む。柱の木質等を確認できなかった。

出土遺物（Fig.22）　182・183 は瓦質の平瓦で、板ナデで仕上げられる。他に土師器の細片、高麗陶器等が出土するが、柱穴の時期は近世と考えられる。

SP090124（Fig.22　Ph.28・30）　調査区西側に位置し、前述の SP090123 と対となる柱穴である。直径 45~50cm の円形で、深さ 8cm を測る。SP090123 と異なり、燻された瓦は全て平積みされ、隙間

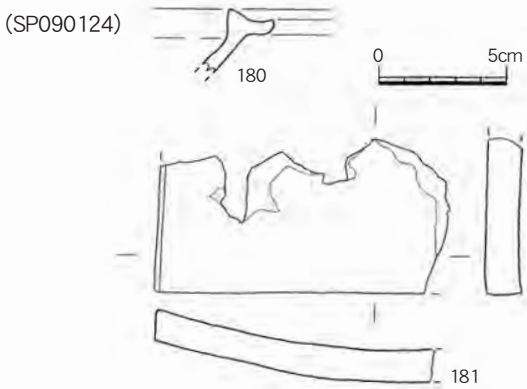


Ph.28　SP090123・090124（東から）



Ph.29　SP090123（北東から）

Ph.30　SP090124（北東から）



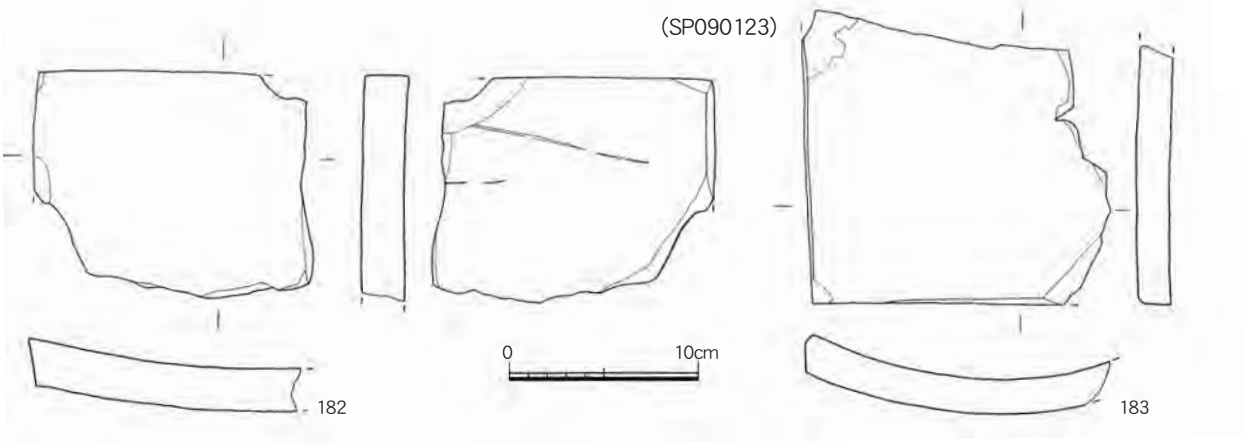


Fig.22　SP090123・090124 実測図（1/20）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

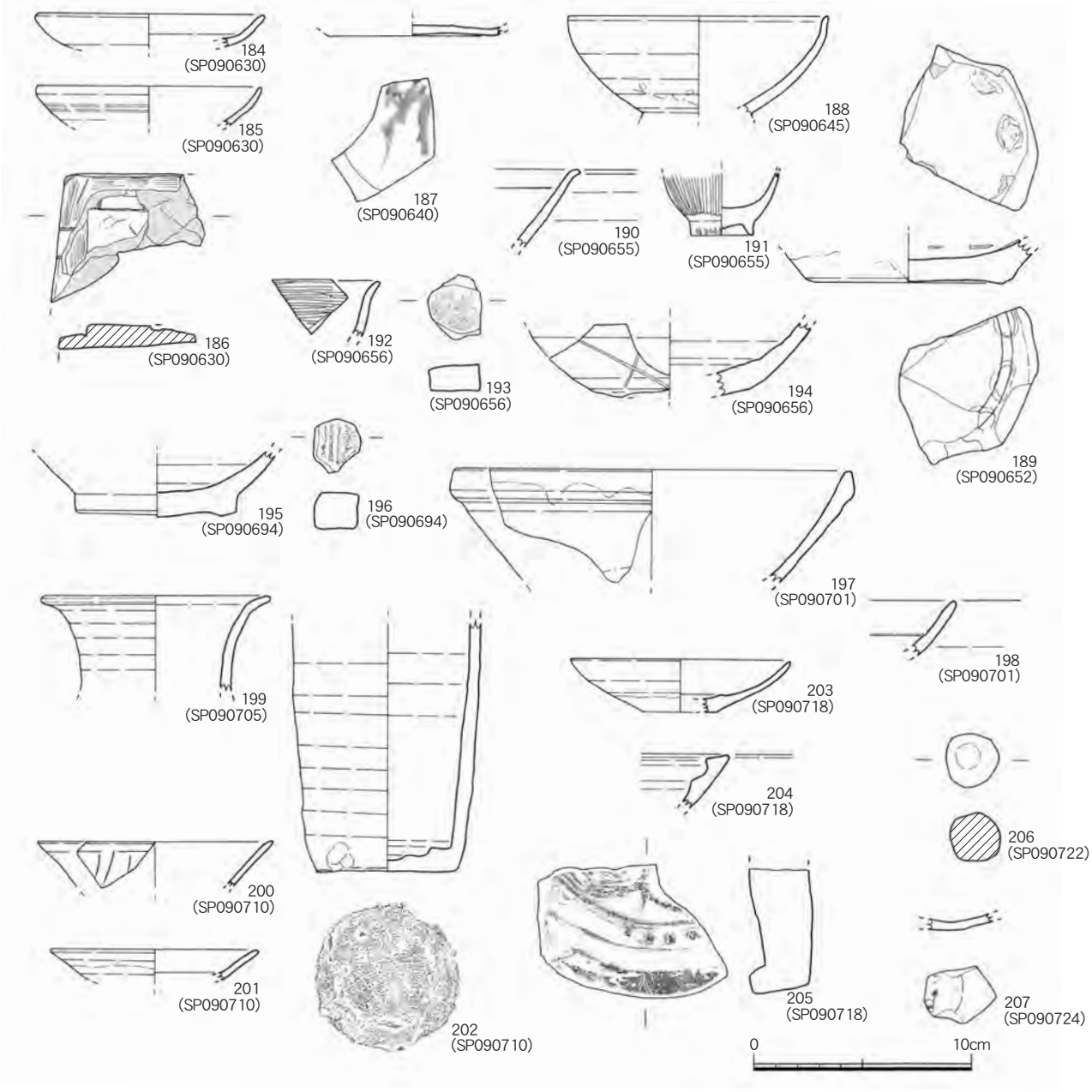


Fig.23　第 1 面 SP 出土遺物実測図②（1/3）

は小片で充填される。壁の立ち上がりも緩やかである。覆土は炭化物の小塊を含む灰色粘質土である。

出土遺物（Fig.22）　180 は無釉陶器の鉢である。胎土に白色、黒色、橙色の砂粒を多く含み、色調は明橙色を呈する。181 は瓦質の平瓦で、板ナデで仕上げられる。柱穴の時期は近世と考えられる。

SP 出土遺物（Fig.23・24　Ph.31）　184~186 は SP090630 出土で、184 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿、185 は白磁皿Ⅶ類である。186 は滑石製品の小片である。周縁は幅約 1.0cm で中央より 5.0mm 低く、下面は剥離しており、廃棄後、煤が付着する。187 は SP090640 出土の回転ヘラ切り底の土師器片である。外底部に墨痕が残る。188 は SP090645 出土の天目茶碗で、黒釉の地に銀色の細い筋が多数現れる禾目天目である。189 は SP090652 出土の越州窯系青磁碗で、見込みと外底部に目跡が残る。190・191 は SP090655 出土である。190 は白磁碗Ⅴ -2 類、191 は白磁の合子の身で、外面に細かい縦の沈線が施される。192~194 は SP090656 出土である。192 は瓦器椀、

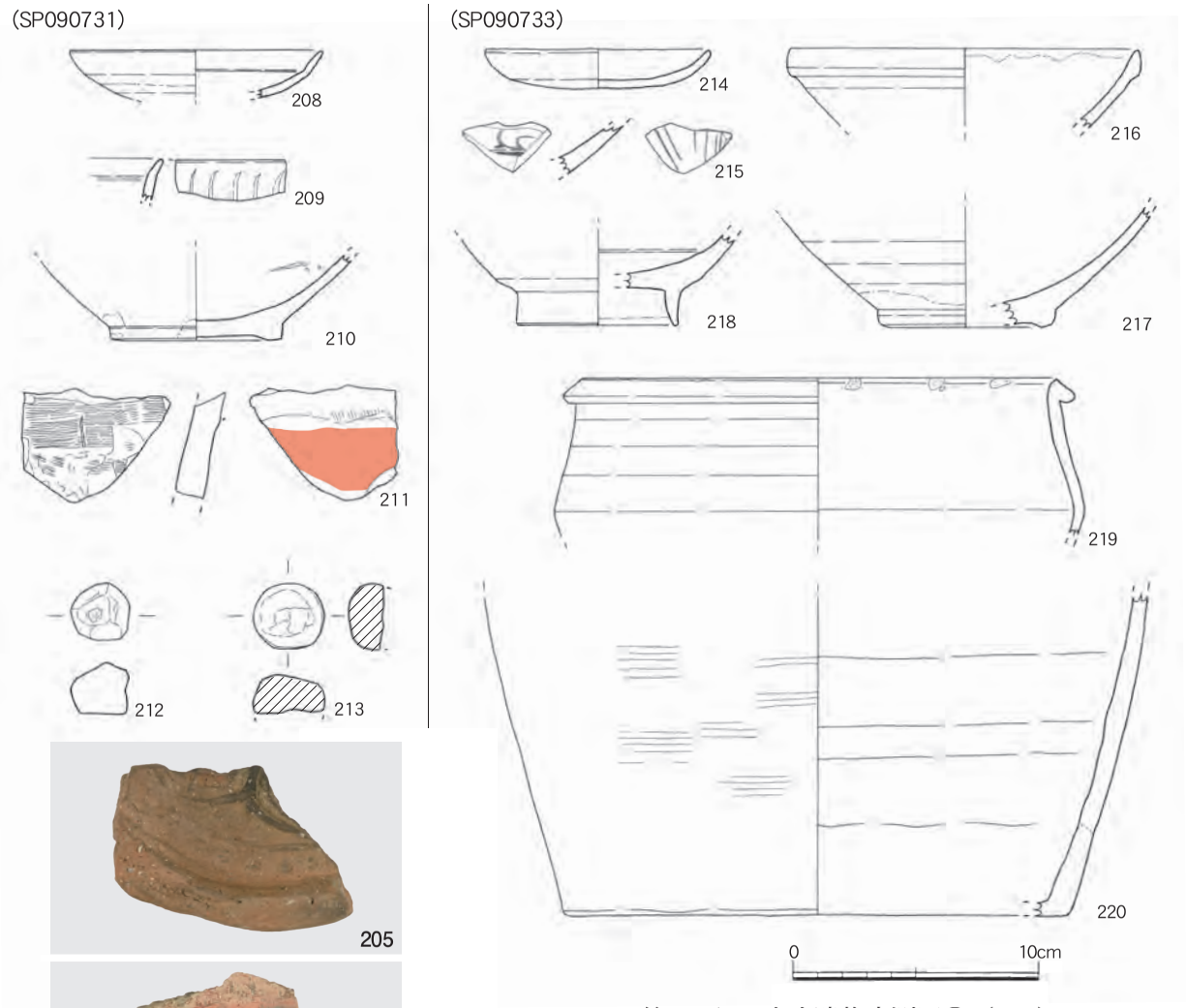
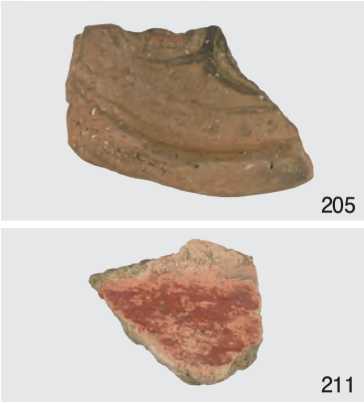


Fig.24　第 1 面 SP 出土遺物実測図③（1/3）



Ph.31　第 1 面 SP 出土遺物

193 は暗緑色の釉が施釉された陶器の体部片を用いた瓦玉である。重さは 11.71g である。194 は須恵器の壺の底部片で、外面にヘラ記号を有する。195・196 は SP090694 出土である。195 は白磁碗Ⅳ類、196 は瓦質の平瓦を用いた瓦玉で、重さは 10.47g である。197・198 は SP090701 出土である。197 は白磁碗Ⅳ類、198 は白磁皿Ⅶ類で、貫入が全面に入る。199 は SP090705 出土の越州窯系青磁の壺の口縁部片である。200~202 は SP090710 出土である。200 は白磁の小碗で、外面に縦箆花弁文を施す。201 は白磁皿Ⅵ類、202 は褐釉の小口瓶である。底部は糸切り、底部と体部の境には 3 箇所、指頭痕が付く。203~205 は SP090718 出土である。203 は白磁皿Ⅵ -1b 類、204 は無釉陶器の捏鉢である。205 は土師質の軒丸瓦片で、内区との境に圏線を有し、外区に珠文を配置する。外面は強いナデで調整される。内区は文様が描かれるが小片のため、不明である。胎土に白色砂粒、赤褐色粒、金雲母を多量に含み、色調は暗褐色を呈する。206 は SP090722 出土の砂岩製の石球で、重さは 15.85g である。207 は SP090724 出土の土師器の小片で、外面に墨痕が残る。208~213 は SP090731 出土で、208 は白磁皿Ⅴ -1a 類、209 は外面に縦箆花弁文を有する白磁碗、210 は白磁碗Ⅳ類である。211 は円筒埴輪の小片で、外面は赤色顔料が施される。212 は瓦質の平瓦を用いた瓦玉で、重さは 11.26g である。213 は滑石製の石球で、半分欠損する。現状で 20.12g を量る。214~220 は SP090733 出土である。214 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。215 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、216・217 は白磁碗Ⅳ類、218 は広東系の白磁碗である。219 は暗灰緑色の釉がかかる陶器の鉢で、口縁部に胎土目が残る。220 は高麗陶器である。

3）第 2 面の調査（Fig.25　Ph.32・33）

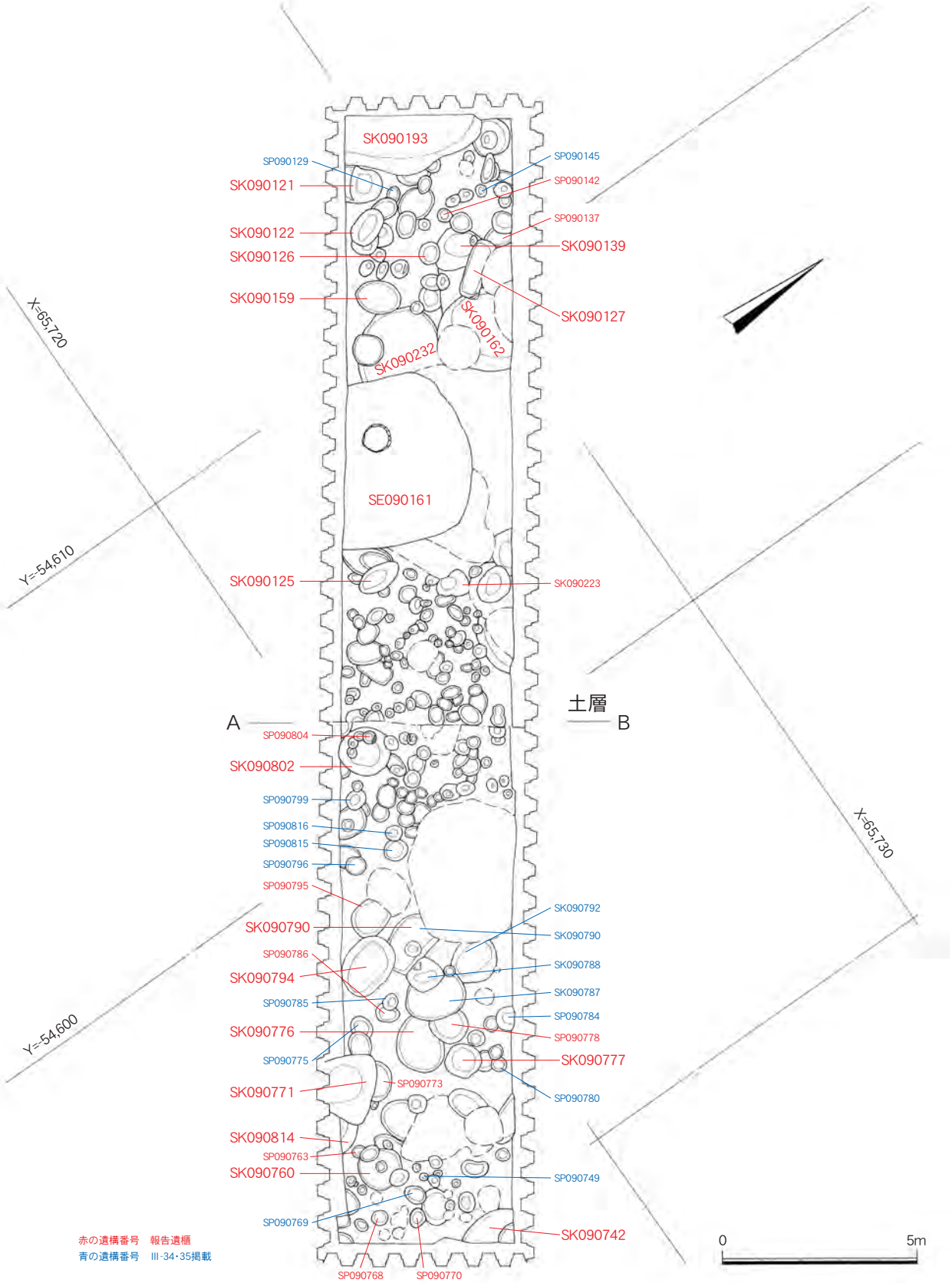
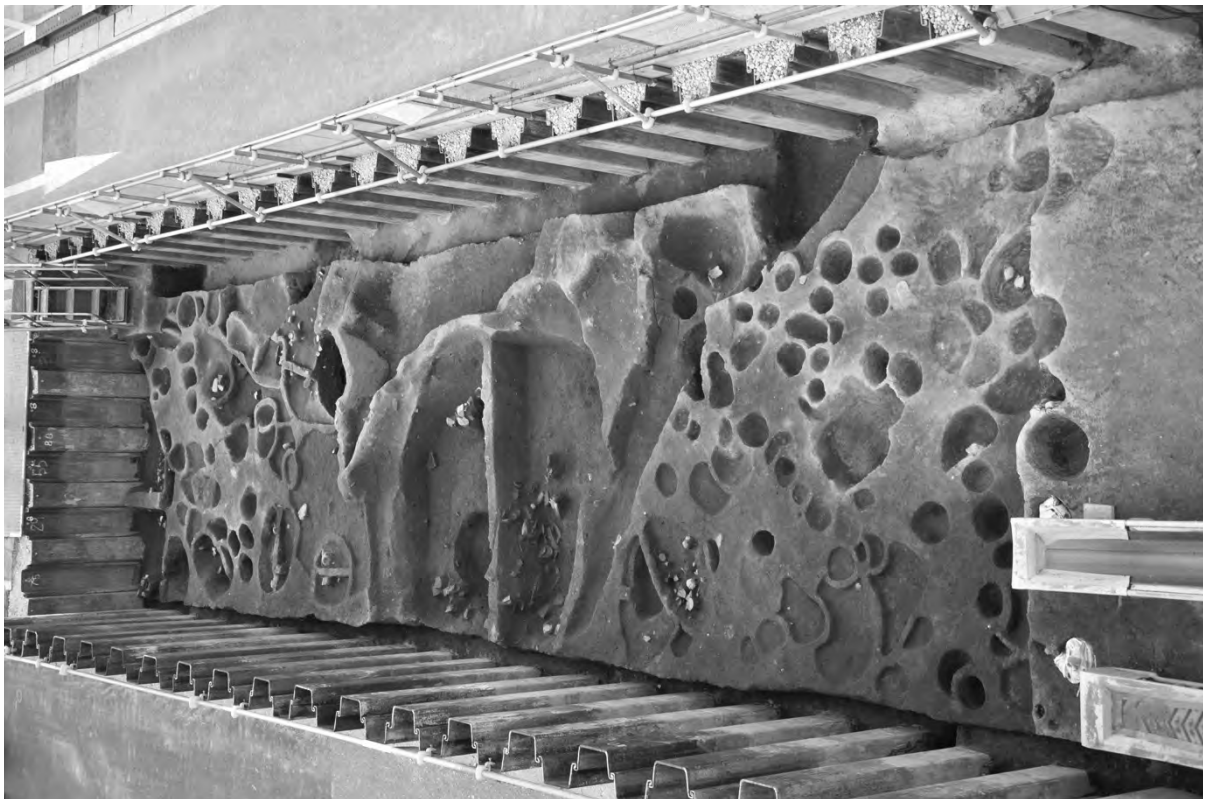
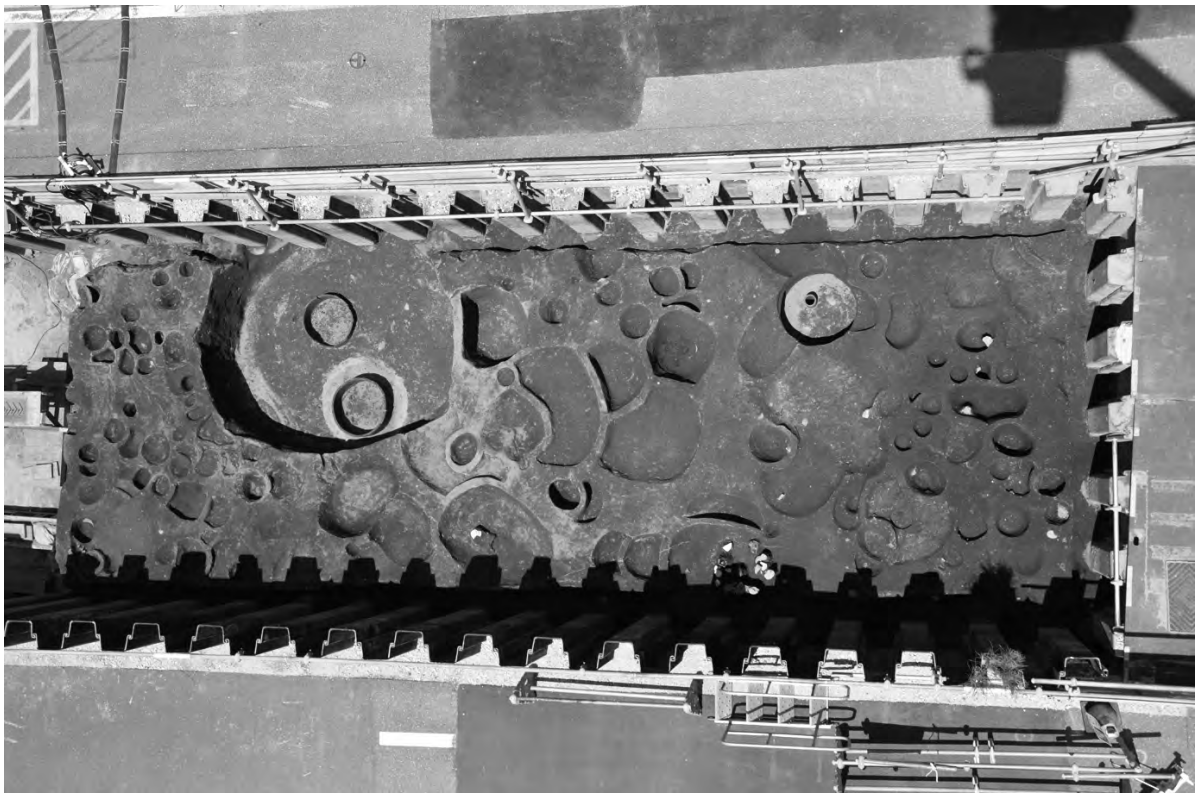


Fig.25　第 2 面全体図（1/150）



Ph.32　西側 2 面全景（南東から）



Ph.33　東側 2 面全景（南から）

第 2 面は道路面から約 1.2m 下の灰色粘土が混入する茶褐色土の上面で設定した。標高は西側で 4.5m、東側で 4.1m を測り、東側へと傾斜する。検出した主な遺構は井戸 1 基、土坑 19 基、ピットである。井戸は井戸瓦を用いた近世のもので、土坑は主に 12 世紀前半から中頃にかけてが多く、その前後の 11 世紀後半と 13 世紀中頃から 14 世紀初頭のものが散見する。なお、古代のピットが少数であるが、この面から確認できる。

（1）井戸（SE）

SE090161（Fig.26　Ph.34~39）　調査区中央に位置し、南側は調査区外へ延びる瓦組の井戸である。掘方の平面形は隅丸方形を呈し、東西方向の一辺が 4.3m、南北方向が約 3.2m 以上を測る。井側は掘方の西寄りに作られ、遺構検出面から約 1.0m 下の標高 3.7m 付近で確認した。土師器の小皿がまとまって廃棄されており、拳大の花崗岩、砂岩や瓦片が混入していた。そこから約 1.2m 下で、二重の瓦組の井側が残存する。厚さ 3cm、幅 23cm、高さ 28cm の燻した瓦を内側 10 枚、外側 11 枚使用し、直径約 70cm の円形を組む。灰黒色粘質土、黄灰色粘質土を主体とする覆土で、大量の瓦、陶磁器、土師器が出土する。標高 1.7m で湧水したため、それ以上は掘削しなかった。

出土遺物（Fig.27~34　Ph.40）　221~232 は上層でまとまって出土した回転糸切り底の土師器の小皿である。同一工人の手によるものと思われ、口径 8.0~8.4cm、器高 1.2~1.5cm を測る。底部内面は回転ナデで仕上げるが、底部と体部の境と中央部が凹み、器面が波打つ。胎土は金雲母と赤褐色粒を多く含み、色調は明橙色である。また、233~235 は上層出土の遺物であるが、233・234 の土師器小皿も前述の小皿群と同様の特徴をもつ。235 は肥前陶器の碗で、灰橙色の胎土に灰緑色の釉が全面にかかり、畳付けの釉は掻き取る。畳付けには砂目が残る。器面全体に細かい貫入が入る。236~256 は中層出土の遺物である。236 は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径 7.5cm を測る。胎土に少量の金雲母を含み、色調は明橙色から灰橙色を呈する。237 は防長産の緑釉陶器で、灰橙色の軟質な胎土に濃緑色の釉がかかる。外面に 1 条の沈線が入る。238~240 は明代の染付で、238・239 の外面は唐草文、240 は芭蕉葉文が描かれる。241~243 は白磁である。241 は底部片で、見込みに箆描文を施し、釉薬は体部下半までかかる。242 は皿Ⅵ類の底部片で、体部下半から外底部に墨書が残る。243 は皿Ⅸ -1c 類である。244 は越州窯系青磁の小壺である。無頸壺で、口縁上面は平坦におさめる。灰色の精良な胎土に濃緑色の釉が口縁部内面から外面に施釉される。245 は同安窯系青磁碗の底部片で、高台内に墨書が残る。246~248 は龍泉窯系青磁である。246 は碗の口縁部片で、外面は雷文、内面は蓮弁状の文様を施す。247 は皿の口縁部片で、口縁は緩やかに外反する。精良な灰色の胎土に明緑色の釉が厚くかかる。248 は小碗の口縁部片で、やや青味がかる緑色釉が厚く施される。249 は瀬戸焼の水注の小片である。体部中位には櫛目による沈線が巡る。黒色粒を含む灰白色の胎土に淡緑色の釉がかかる。250 は土師質土器の鉢で、外面にはスタンプが残る。胎土に赤褐色粒を多量に含む。251 は無釉陶器の瓶で、口縁部を欠損する。回転ナデで整形され、底部と体部の境は面取りし、丁寧に仕上げる。胎土の色調は赤褐色、外面は暗灰褐色を呈する。252 は小型の滑石製石鍋である。体部外面は丁寧なノミ痕が施されるが、内面の調整は粗く、溝状の削りが残る。外面には多量の煤が付着し、底部の器面は剥落する。253 は陶器を用いた円盤状製品である。側面を打ち欠き、重さは 18.10g を量る。254 は上端に穿孔を有する土錘で、下端を欠損し、現状で重さは 9.53g である。断面は円形で、縦方向のナデで仕上げ、丁寧に作られる。255 は弥生土器の大甕の口縁部片で、外面は縦方向の沈線を入れる。256 は土師器の二重口縁壺の口縁部片である。257~293 は燻し瓦である。257 は鬼面文の鬼瓦の小片で、厚さ 1.5cm の粘土板に粘土を貼り付けて顔を整形する。立体的な造りで、目玉は刳り抜き、眉は櫛目を入れ、毛を表現する。鼻は横

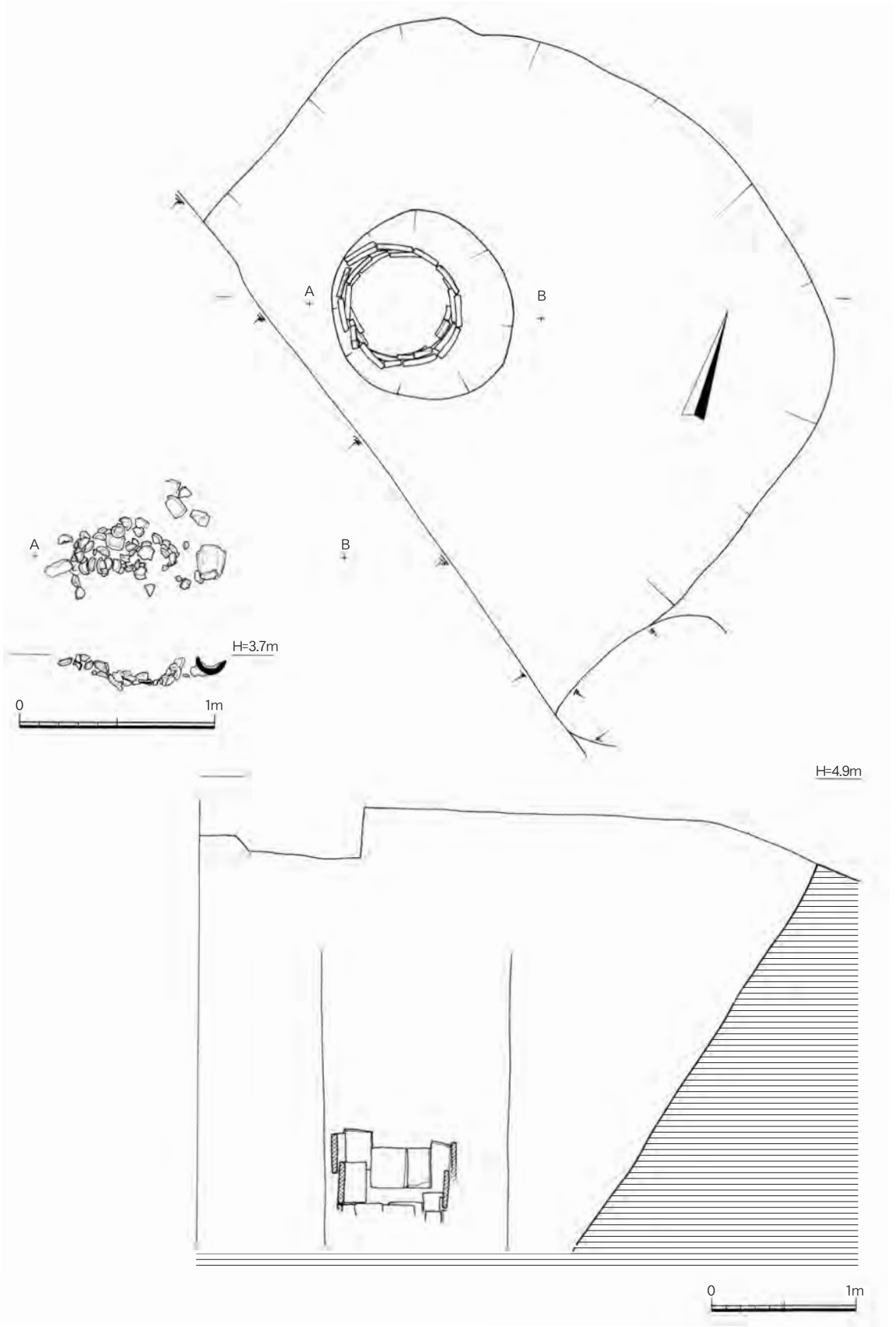


Fig.26　SE090161 実測図（1/40・1/30）

Ph.34　SE0900161（南東から）

Ph.35　SE0900161 井側上層（北西から）

Ph.36　SE090161 井側（南西から）

Ph.37　SE090161 土層（南東から）

Ph.38　SE090161 井側（南東から）

Ph.39　SE090161 井側（東から）

に大きく開く鼻孔である。表は丁寧に磨かれ、裏面はナデで調整される。258 は表、裏ともに器面が大きく剥がれるが、表面に一部、櫛目文が残る。また、表面の剥がれた箇所に中空となるパーツが貼り付けられていたことが窺える。釘穴を有する。259 は鬼瓦の足の部分で、厚さ 3.0cm の粘土板を削ったり、貼り付けたりして、文様を付ける。削った部分に描かれるのは葉脈と思われる。裏面の調整は工具による粗いナデである。260 は、粘土板に雲文を貼り付けて文様を描く。裏面は剥落する。261 は厚さ 3.5cm の粘土板に櫛目文様を描き、貼り付けた箇所は剥がれる。1.3 × 0.6cm の長方形の目釘穴を有する。裏面は工具によるナデが施される。粘土板の厚さ、櫛目文、目釘穴は 258 と類似する。262 は覆輪

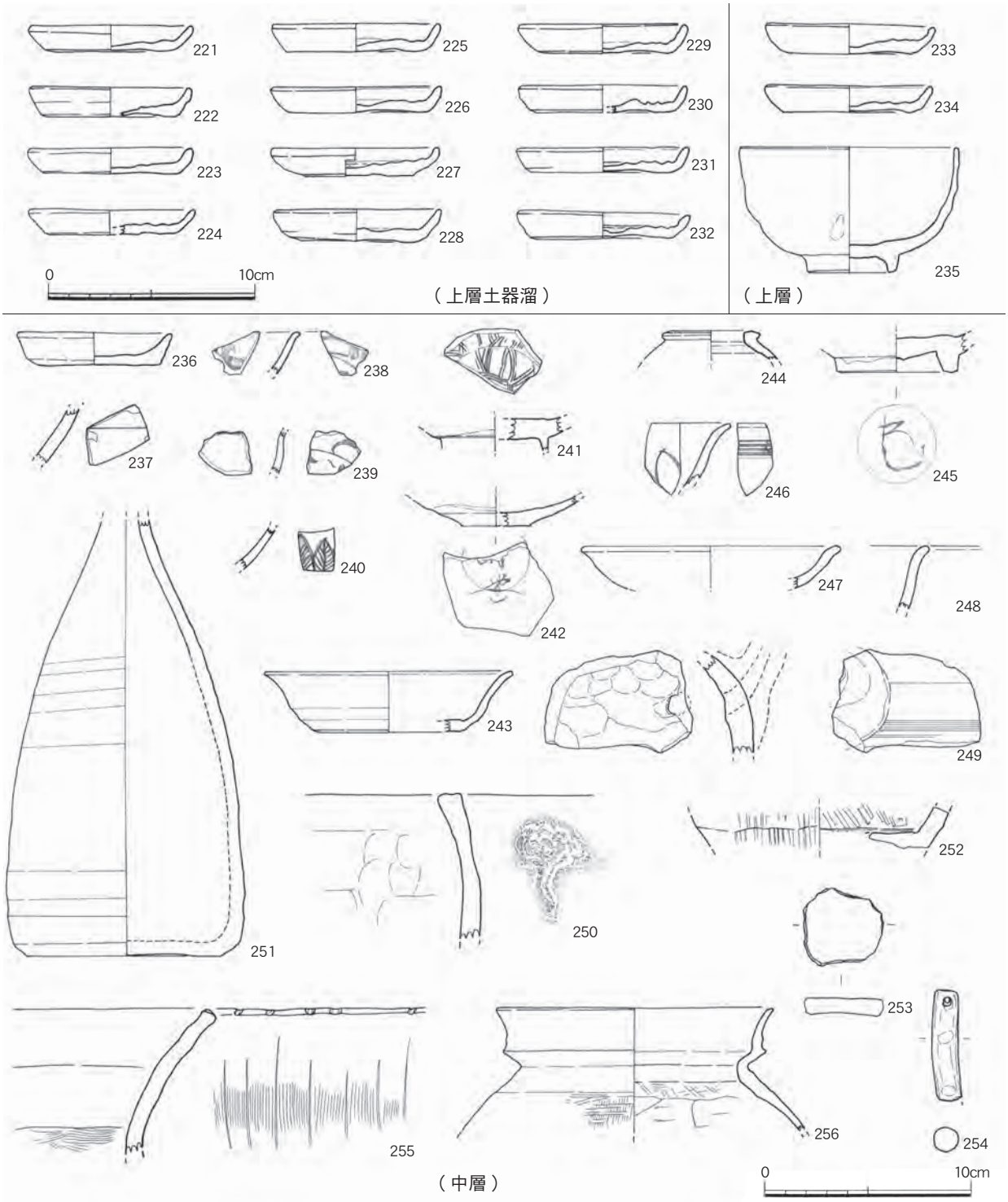


Fig.27　SE090161 出土遺物実測図①（1/3）

付の頭部片で、259 と類似した文様をもち、背面の調整も同じであることから同一製品の可能性がある。263 は厚さ 1.3cm の粘土板を使用し、雲文を貼り付ける。264 は頭部の小片で、厚さ約 2.0cm の粘土板に高さ 3.0cm、厚さ 1.5cm の板状にした粘土を貼り合わせて土台とし、側面に沿って、彫刻刀で沈線を巡らす。265 は頭部片で、幅 2cm の突出した縁取りを行う。裏面は、工具と指によるナデで調整する。266 は厚さ約 3.0cm の粘土板の中央部を削り、櫛目を描く。267~273 は鬼瓦の細片である。268 は表の器面が剥げるが、側面のカーブにあわせて 1.2cm 内側に僅かな段が入る。269 は把手部である。274~278 は軒平瓦で、唐草文を配し、278 は中央に梅花文を描く。274 は焼成が良好であり、灰黒色

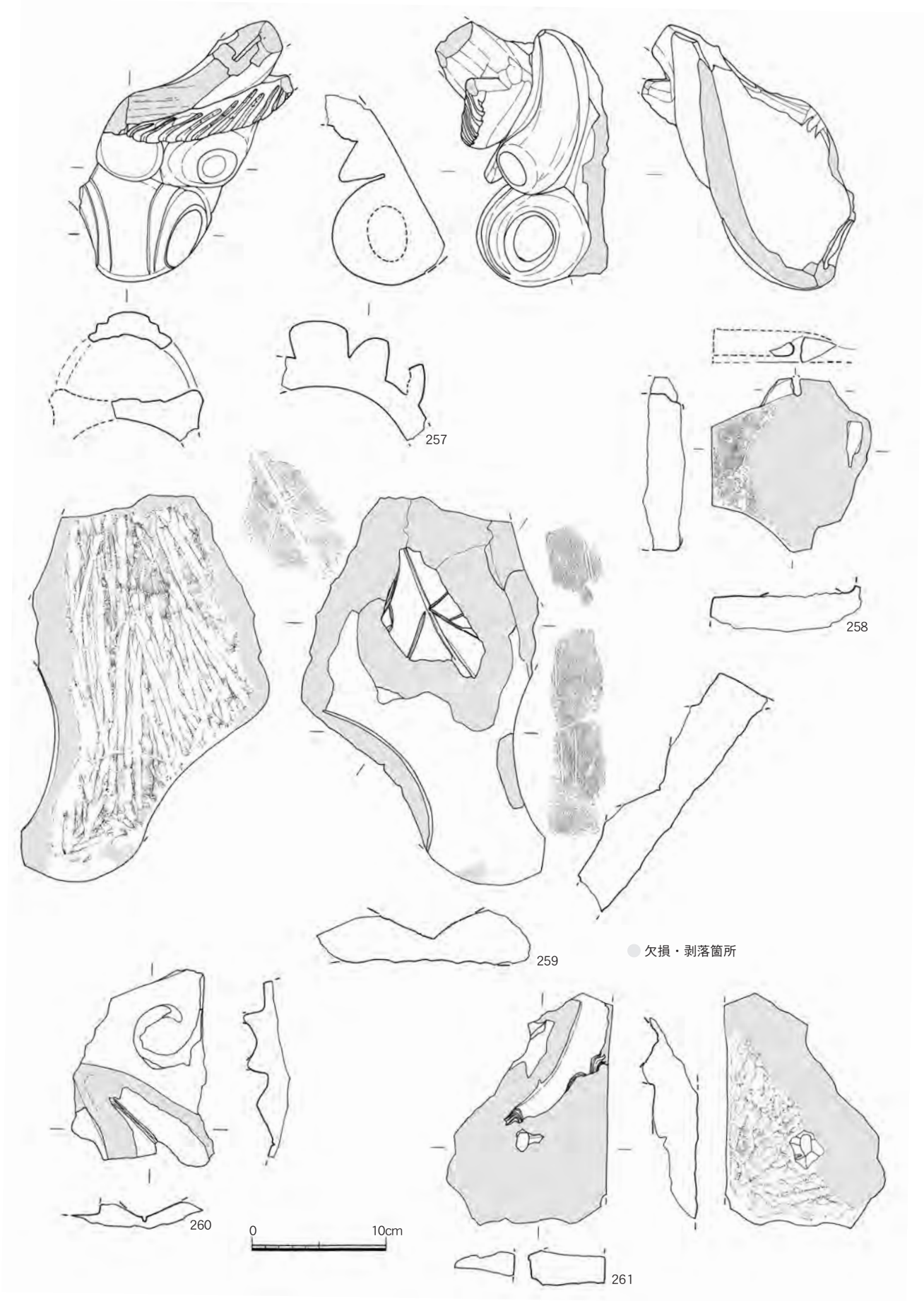


Fig.28　SE090161 出土遺物実測図②（1/4）

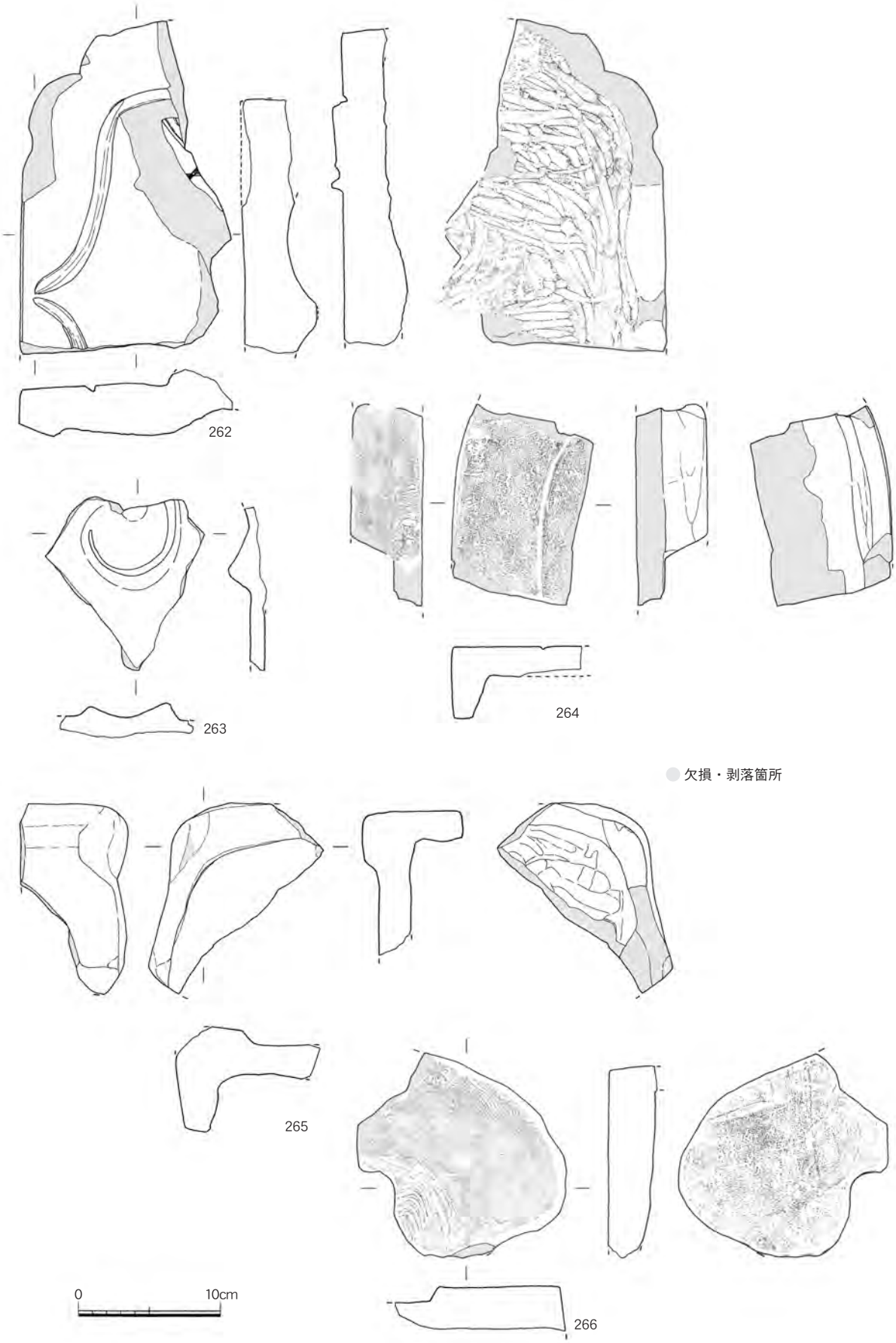


Fig.29　SE090161 出土遺物実測図③（1/4）

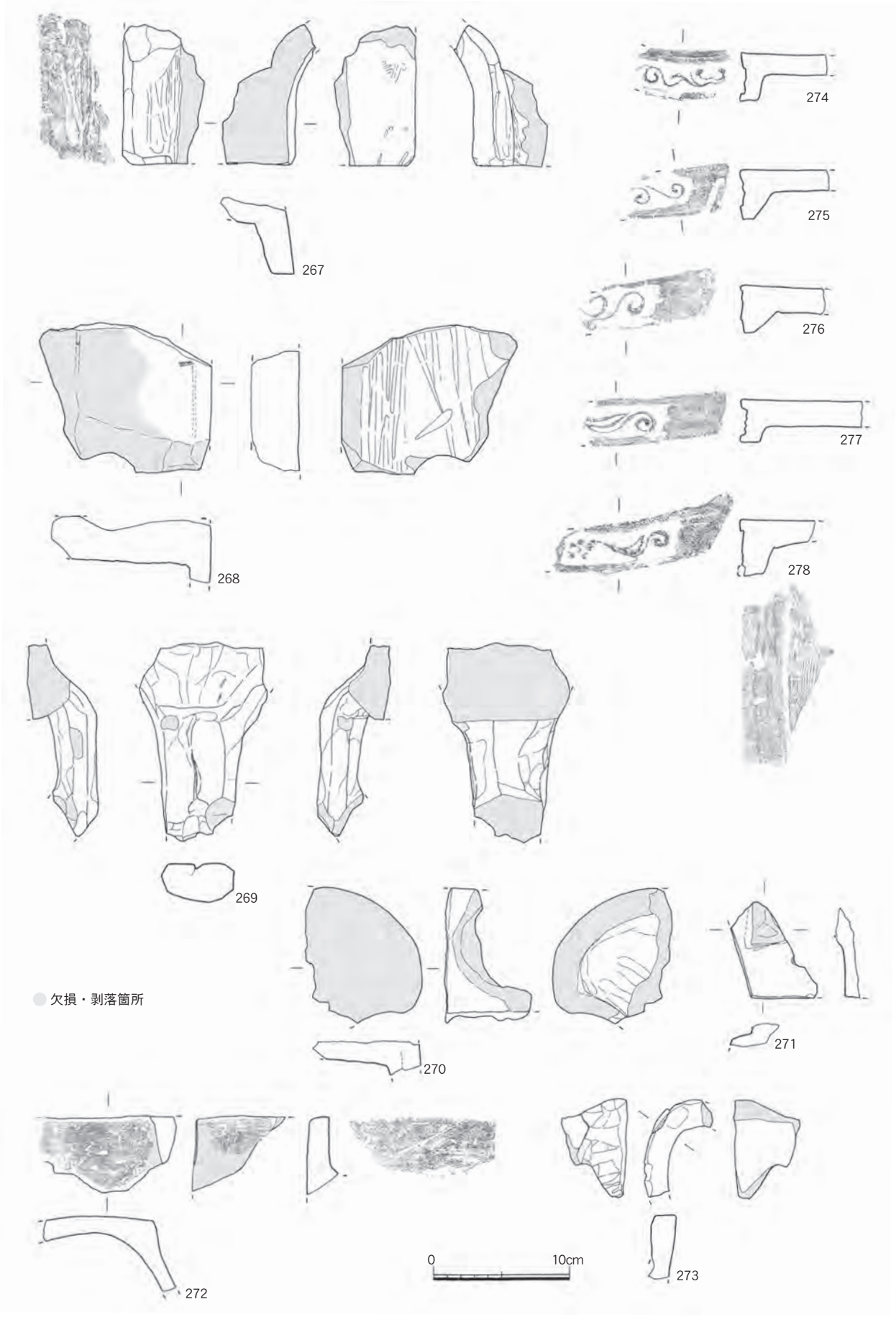


Fig.30　SE090161 出土遺物実測図④（1/4）

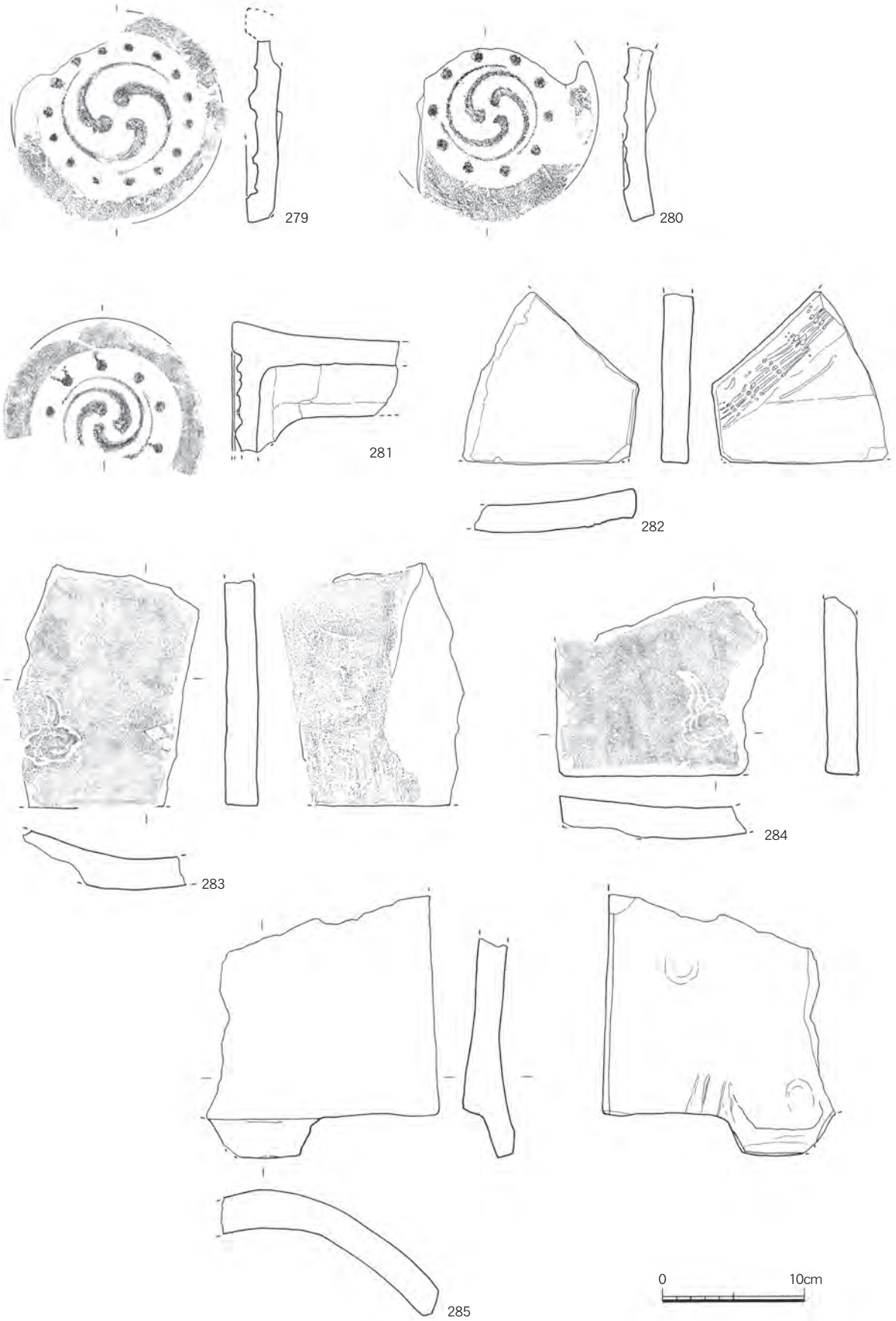
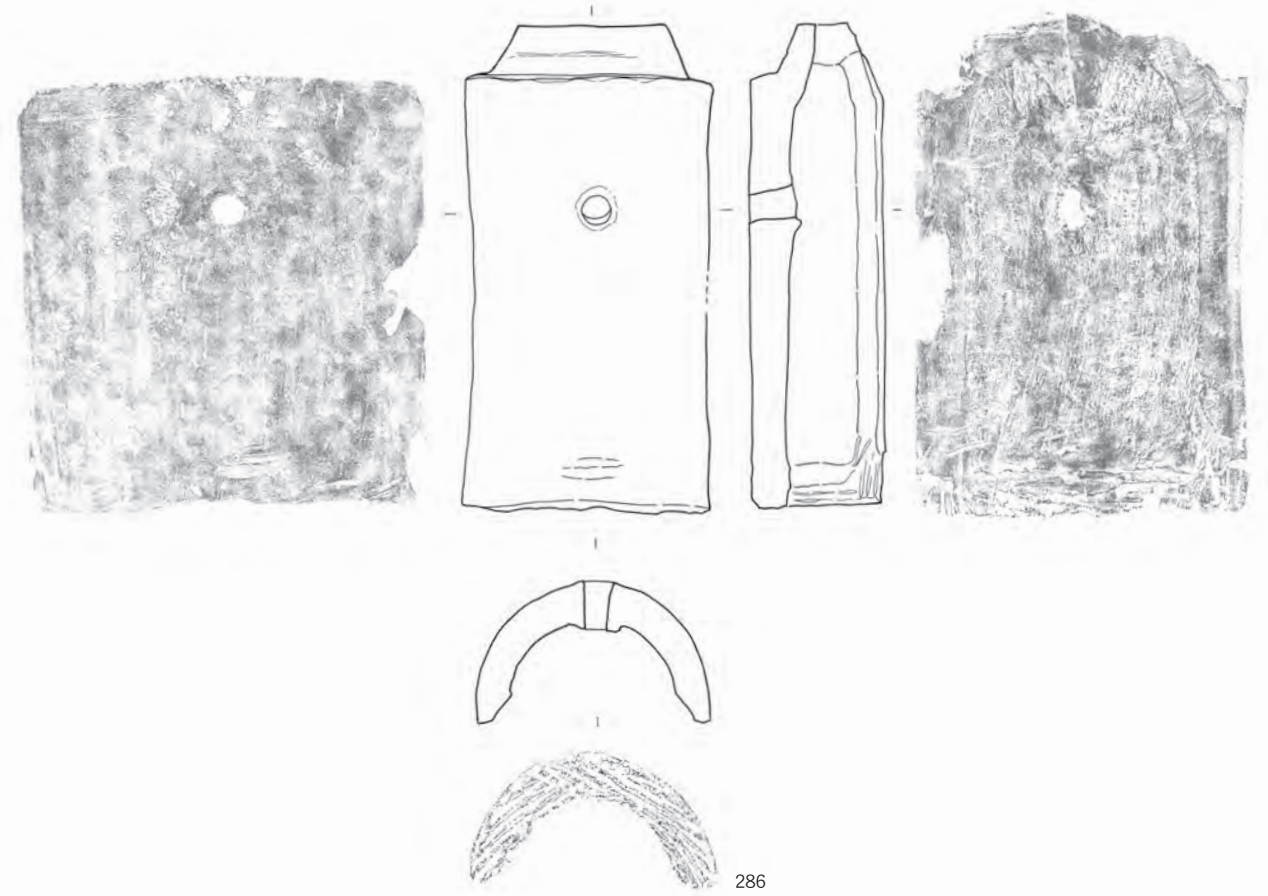


Fig.31　SE090161 出土遺物実測図⑤（1/4）



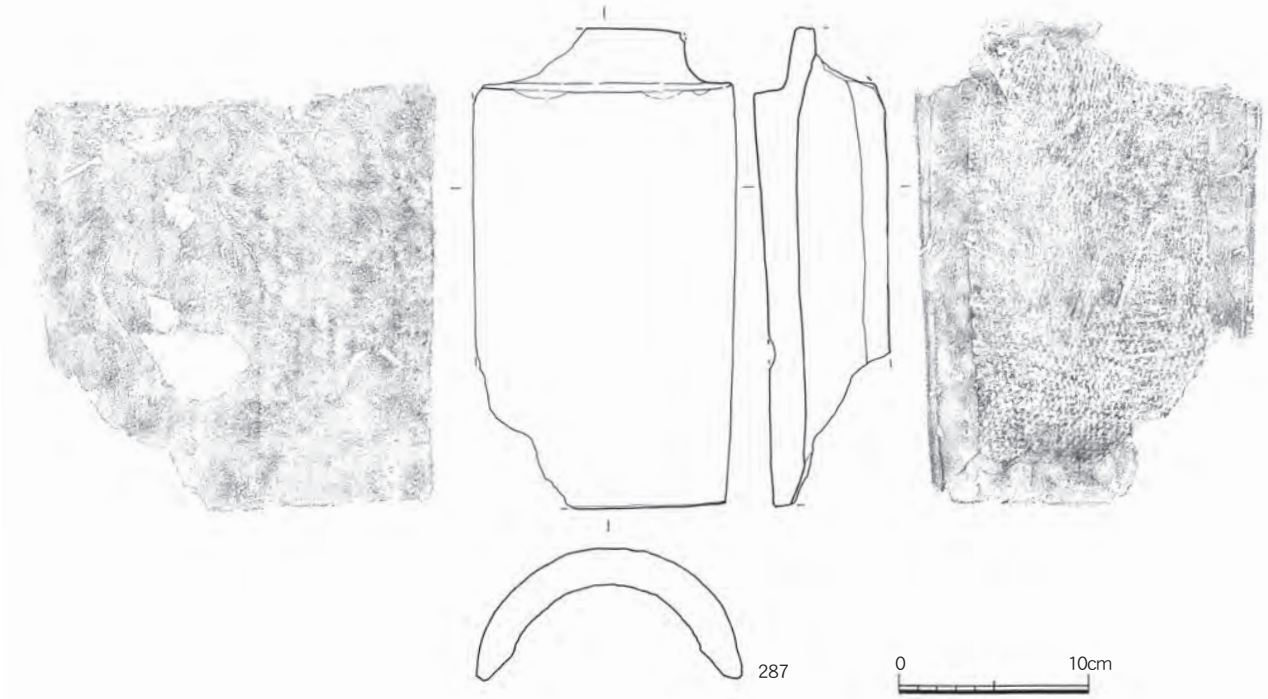


Fig.32　SE090161 出土遺物実測図⑥（1/4）

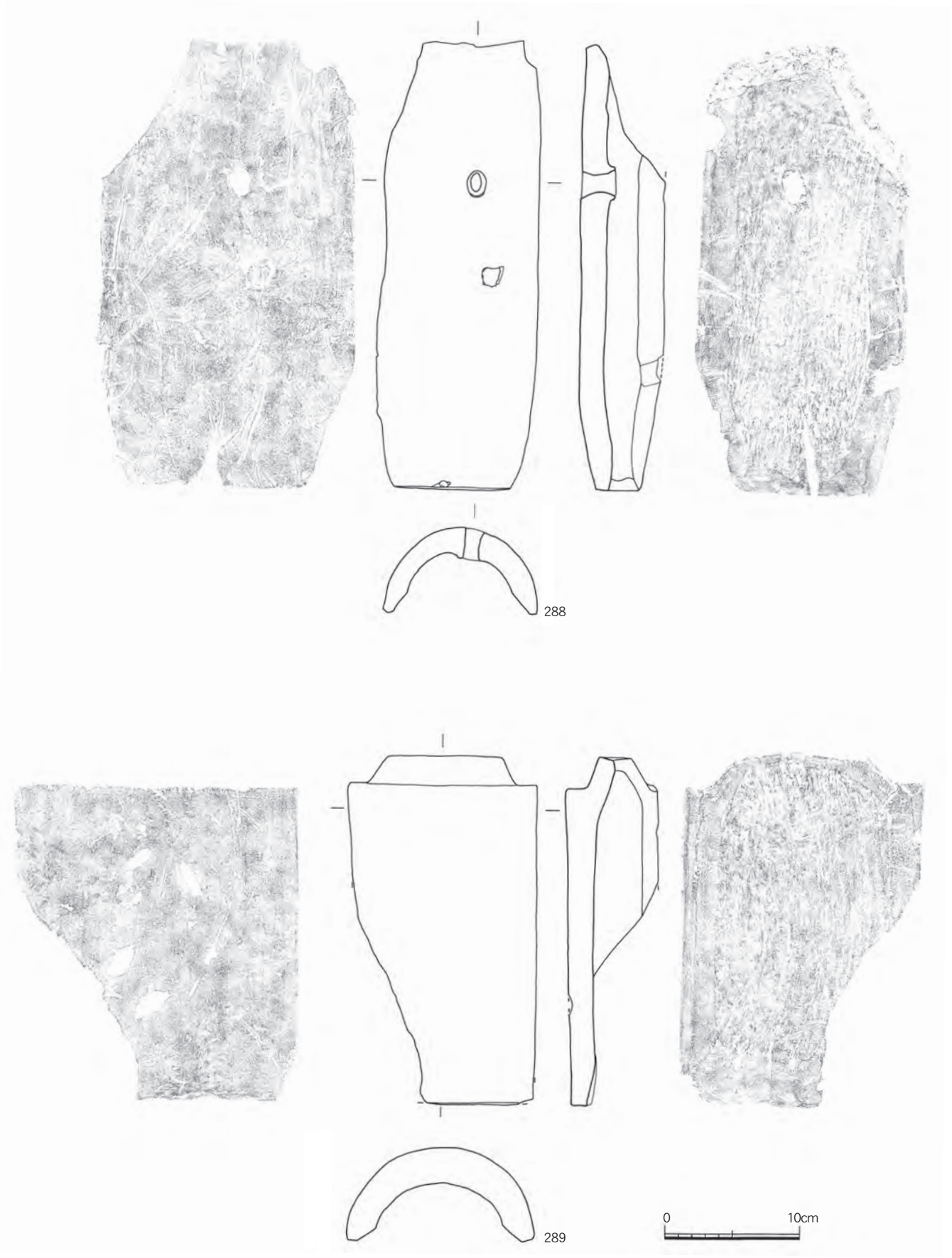


Fig.33　SE090161 出土遺物実測図⑦（1/4）

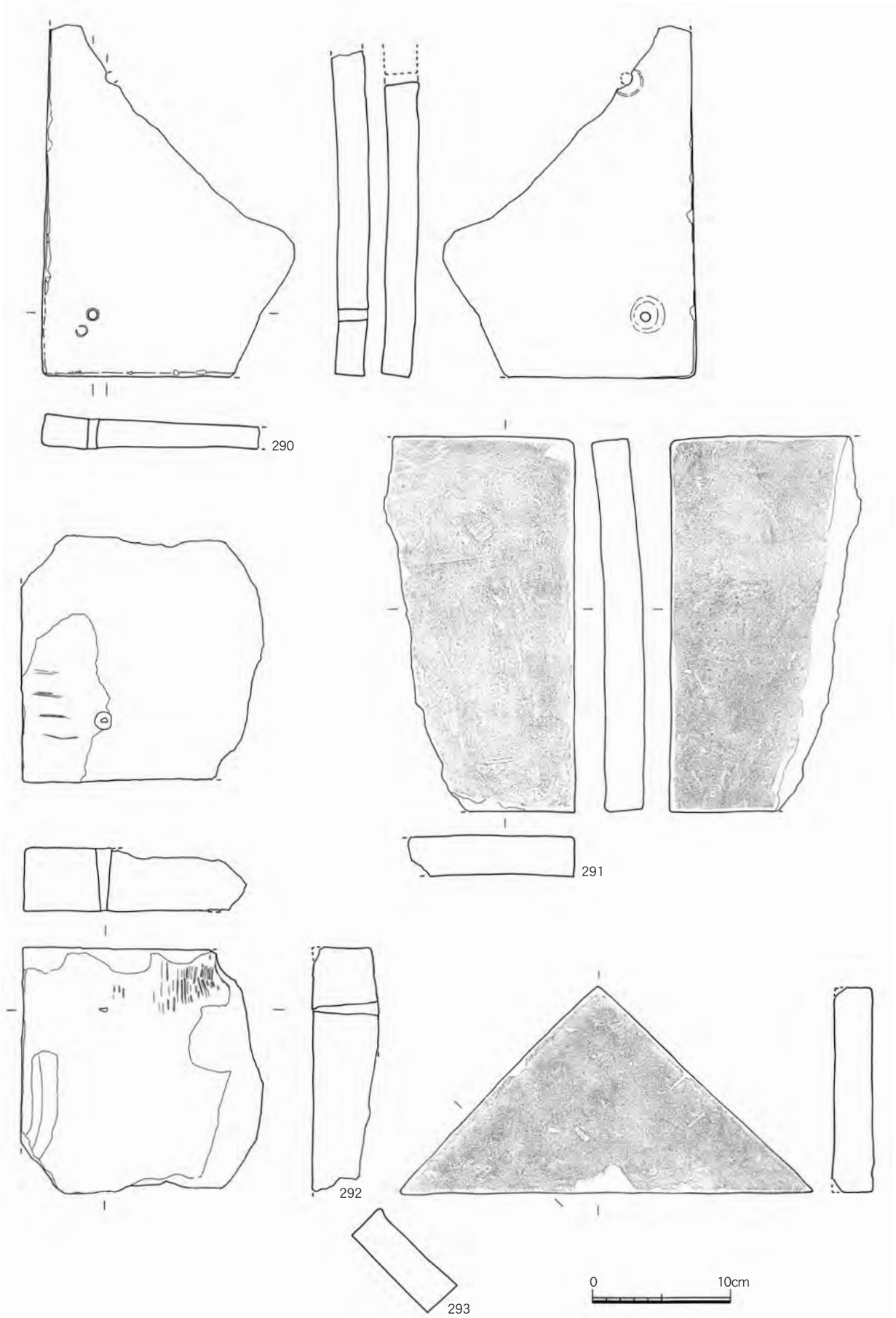
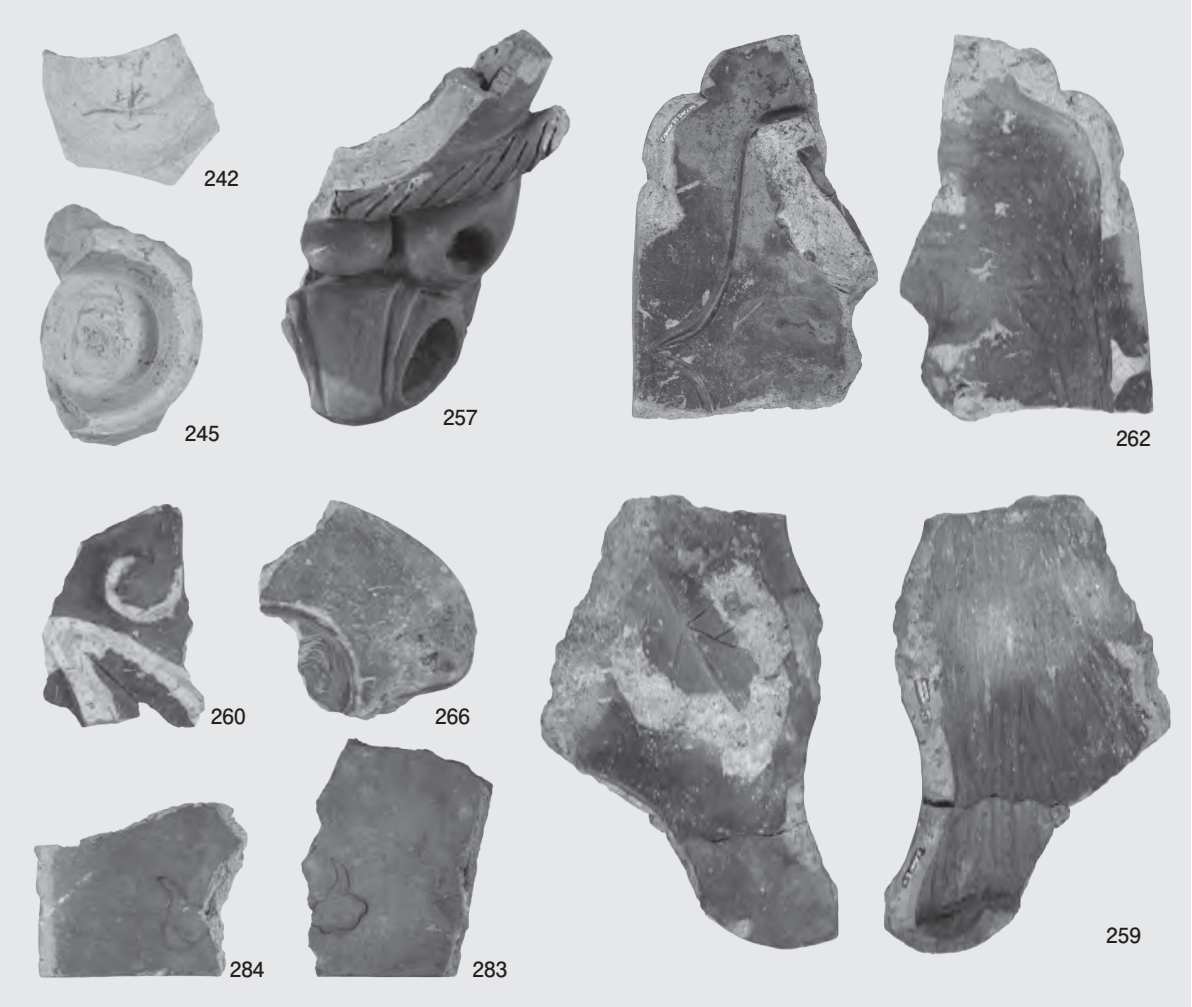


Fig.34　SE090161 出土遺物実測図⑧（1/4）



Ph.40　SE090161 出土遺物

を呈する。他は、白灰色である。調整は 278 の凸面に刷毛目調整が残るが、他は全て丁寧なナデを行う。279~281 は三巴文を内区に配するが軒丸瓦である。巴文の周囲には珠文を施し、珠文数は 279 が 15、他は 10 である。ナデで調整され、281 の胴部凹面には布目の痕跡がわずかに残る。282 は隅瓦で、凸面の先端には 4 条の櫛目を入れ、接合面を幅 3.0cm で作った痕跡が残る。ただし、取り付け部の側面には剥がれた痕跡はなく、瓦当ではないと思われる。283・284 は平瓦で、全体をナデで仕上げる。凹面には雲文のスタンプが施され、同一のものと考えられる。285 は棟に使用される亀伏間瓦である。全体は丁寧なナデで調整し、角は面取りを行い、丸味を帯びるよう仕上げる。286~289 は丸瓦で、凸面はナデで調整し、凹面には布目が残る。角は面取りを行い、丸味を持たせたものが多い。なお、286 の頭の端部と凹面には櫛目が入り、瓦当を接合していた痕跡が残ることから、軒丸瓦に使用された可能性がある。286・288 は釘穴を有する。290~292 は平瓦である。290 は長さ 25cm、厚さ 2.2cm を測り、下隅には直径 8.0mm の穿孔を有する。なお、約 7.0mm 離れた箇所には同じ道具を使用し、開けようとして辞めた痕跡が残る。また、穿孔より 17.0cm 離れた上端も一部欠損するが、同様の穿孔がある。291 は長さ 27.0cm、厚さ 2.8cm を測り、焼成良好で黒色を呈する。292 は厚さ 4.5cm と厚く、ナデで仕上げるが、部分的に工具痕が残る。また、直径 1.2cm の穿孔を片面から行う。焼成はあまく、色調は灰色を呈する。293 は三角形を呈し、厚さ 2.8cm を測る。丁寧なナデで調整される。これらの出土遺物より、井戸の時期は 17 世紀中頃から 18 世紀中頃と考えられる。

Ph.41　SK090121 土層（南西から）

Ph.42　SK090122（西から）

Ph.43　SK090122 土層（北から）

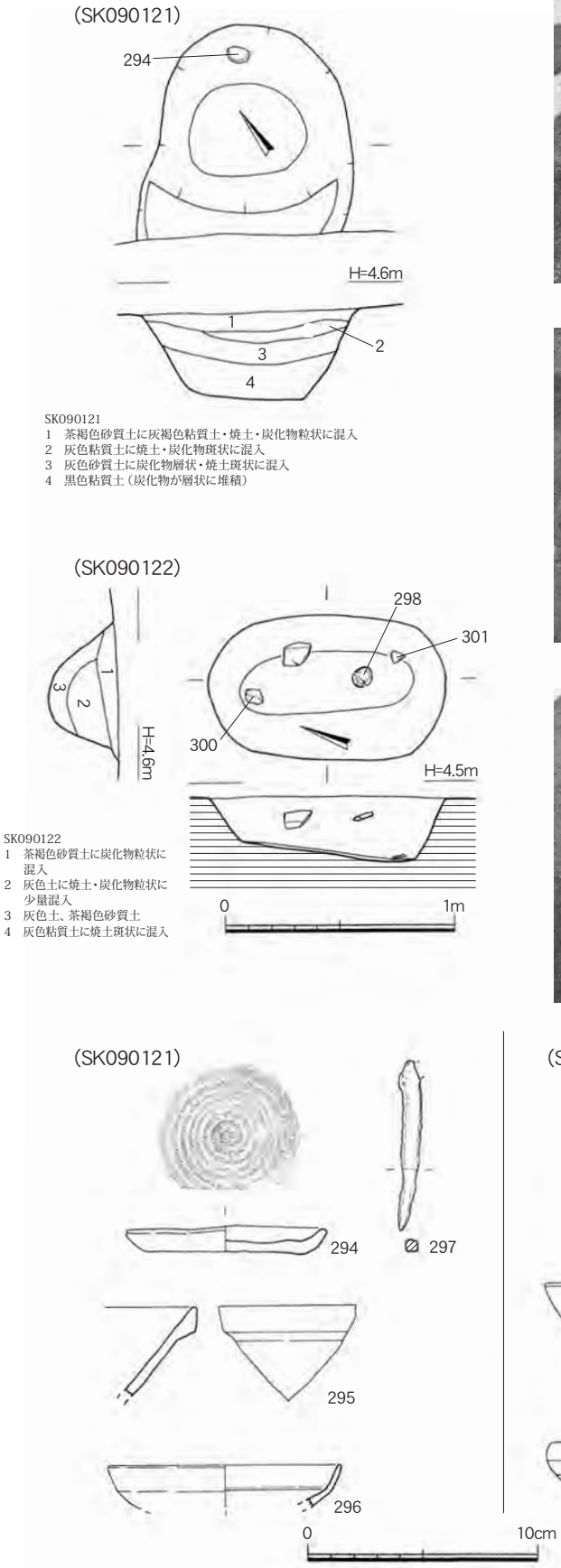
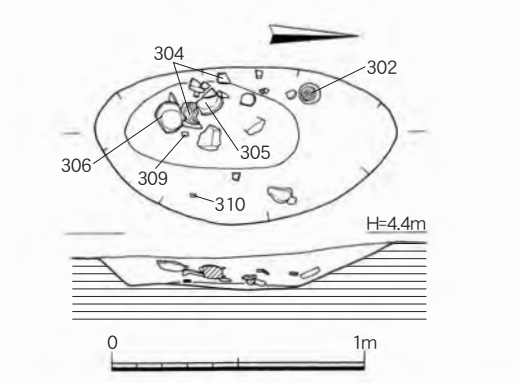


Fig.35　SK090121・090122 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.44　SK090125（東から）

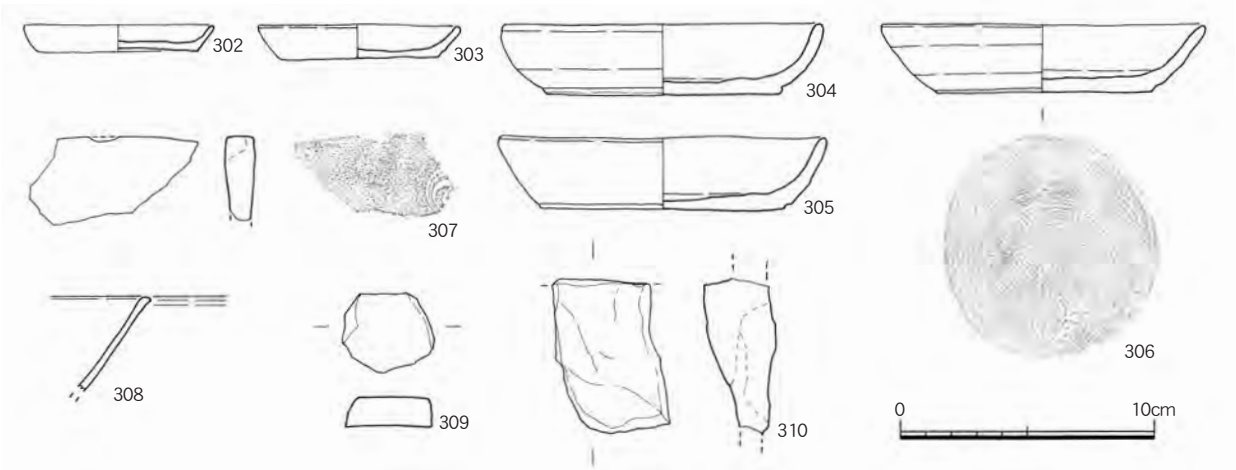


Fig.36　SK090125 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

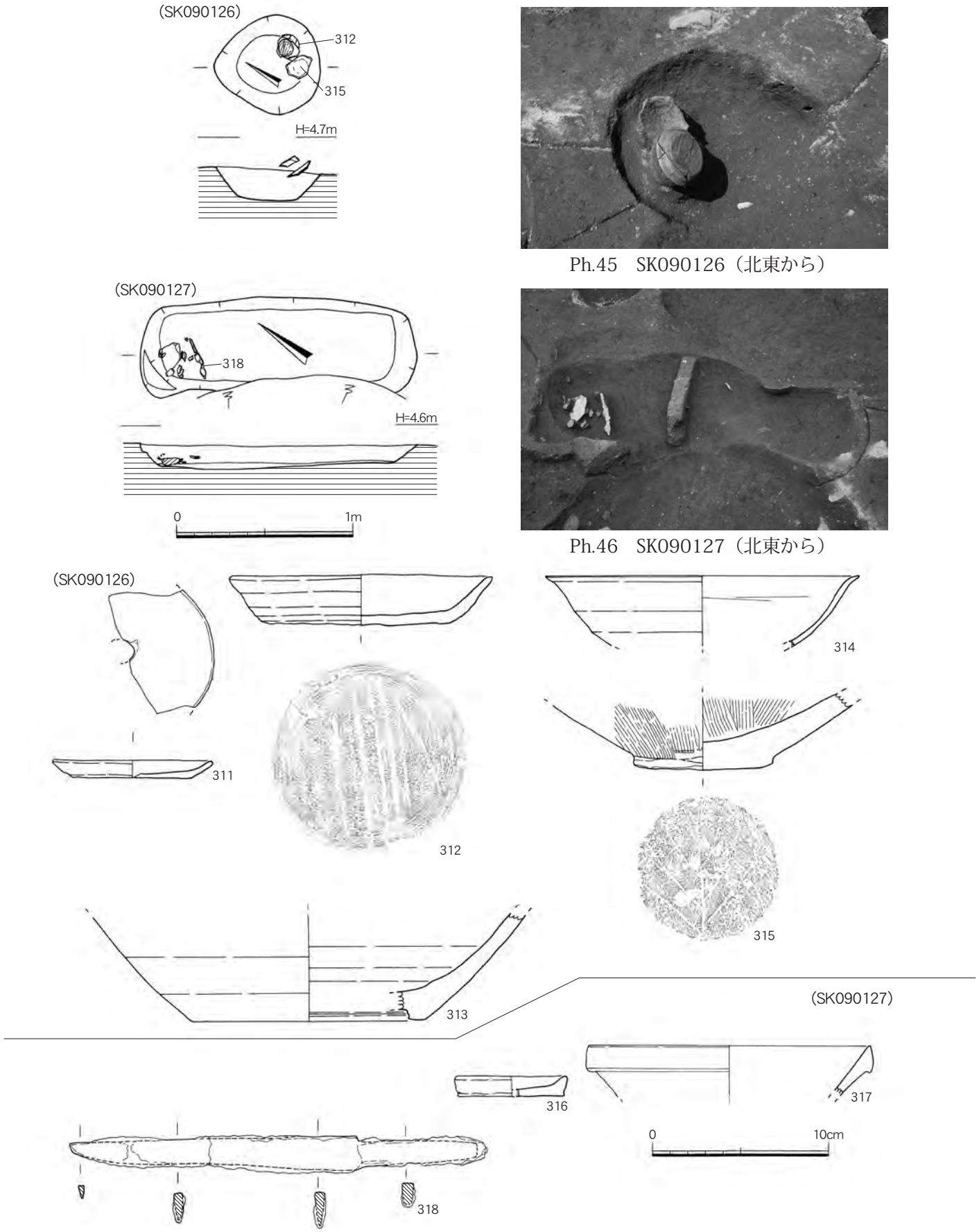
（2）土坑（SK）

SK090121（Fig.35　Ph.41）　調査区西側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.9m 以上、短径 0.9m、深さは 35cm を測る。断面は逆台形を呈し、南側にテラスを有する。覆土は上層が焼土、炭化物を含んだ茶褐色砂質土、灰色粘質土を主体とし、下層は炭化物を多量に含む黒色粘質土となる。

出土遺物（Fig.35）　294 は回転糸切り底の小皿で、口径は 8.7cm を測り、胎土に金雲母を多量に含み、色調は橙色を呈する。内面は丁寧な回転ナデで仕上げられ、均等の渦文を描く。295・296 は白磁で、295 は碗Ⅳ類、296 は皿Ⅶ類である。297 は鉄釘である。頭部を欠損する。出土遺物より土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK090122（Fig.35　Ph.42・43）　調査区西側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.05m 以上、短径 0.65m を測る。深さは北側が 20cm、南側が 28cm で、底面は南側へと傾斜する。覆土は上層が炭化物を斑状に含む茶褐色砂質土、中層が焼土、炭化物を少量含む灰色土、下層が灰色粘質土である。

出土遺物（Fig.35）　298~300 は土師器である。298 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 9.5cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に少量の金雲母、白色粒を含み、色調は暗橙色を呈する。299 は回転糸切り底の坏で、復元口径は 14.6cm を測る。胎土はわずかに金雲母、赤褐色粒を含み、色調は淡橙色である。300 は丸底坏で、復元口径は 16.8cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。内



Ph.45　SK090126（北東から）

Ph.46　SK090127（北東から）

Fig.37　SK090126・090127 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

面は丁寧なナデで調整され、滑らかである。胎土は精良で、色調は橙色を呈する。301 は白磁碗Ⅳ類である。他に黒色土器 A・B 類、瓦器、青磁碗が出土し、土坑の時期は 12 世紀中頃と思われる。

SK090125（Fig.36　Ph.44）　調査区中央に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.15m、短径 0.65m を測る。深さは 12cm しか残っておらず、異存状況は悪い。廃棄された土師器は出土状況より南西側から廃棄されたと考えられる。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.36）　302~306 は土師器である。302・303 は回転糸切り底の小皿で、302 は完形品である。口径は 7.5cm、7.9cm を測る。304~306 は回転糸切り底の坏で、口径は 12.6~12.9cm を測る。304・305 の体部の立ち上がりは内湾するが、306 は直線的に外に開く。307 は瓦質土器で、角型の火鉢か。外面に巴文のスタンプが残る。308 は白磁碗Ⅴ -2 類である。309 は施釉陶器を使用した瓦玉である。外面は白濁した灰緑色釉がかかり、内面は褐色を呈する。重量は 17.2g である。310 は土師質の丸瓦の胴部の尻部片で、玉縁部を欠損する。土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK090126（Fig.37　Ph.45）　調査区西側に位置する。平面プランは略円形を呈し、直径 0.55~0.6m を測る。断面は逆台形で、深さは 18cm である。ほぼ完形の土師器の坏が廃棄され、覆土は炭化物を含む灰色土である。

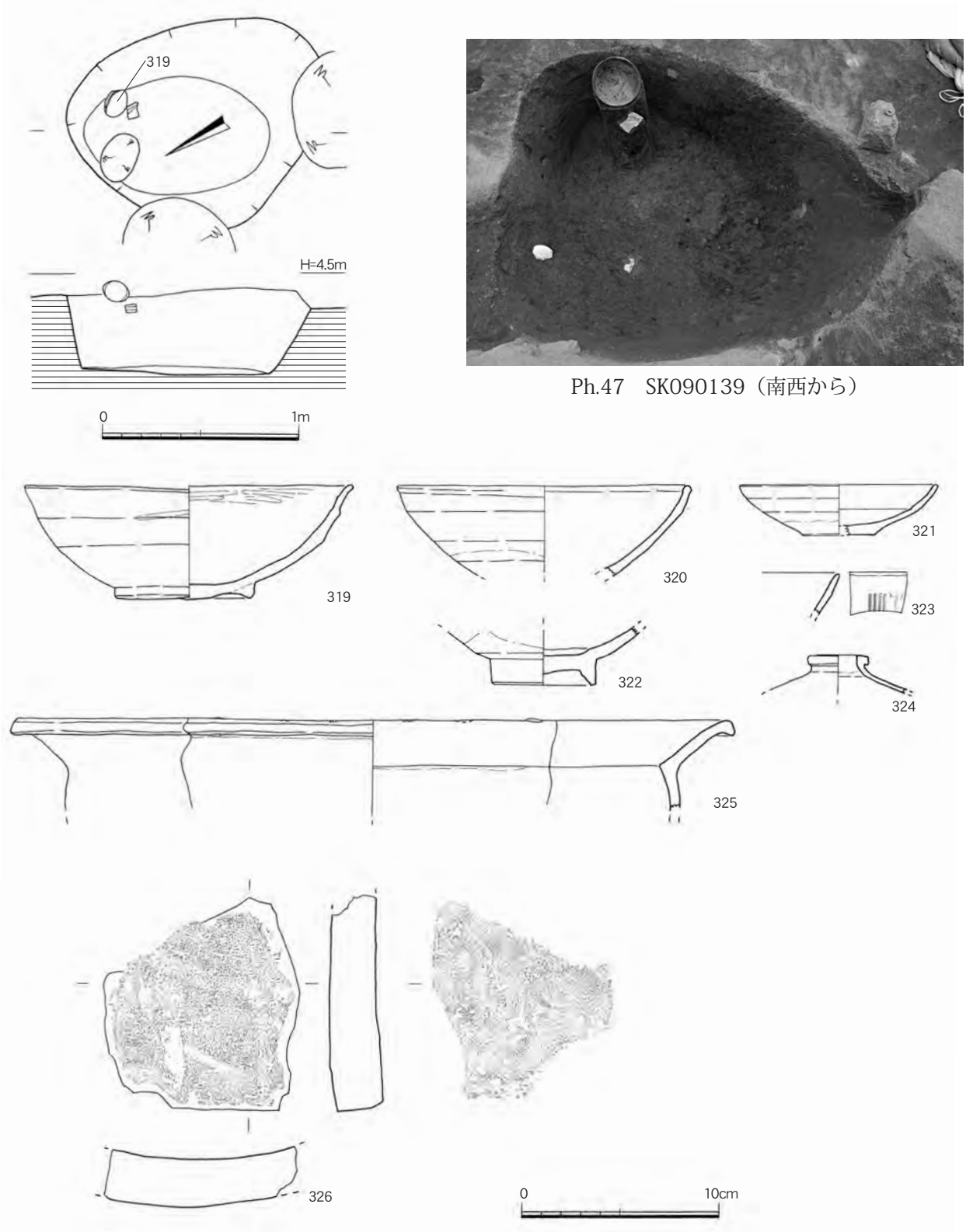
出土遺物（Fig.37）　311・312 は土師器である。311 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 9.0cm を測り、外底部は部分的にナデを施す。中央に焼成後、直径 1.2cm の穿孔を行っている。312 は回転糸切り底の坏で、外底部に板状圧痕を有する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。色調は明橙色である。313 は無釉陶器の浅鉢で、碁笥底である。胎土は黒色粒を多量に含み、赤褐色を呈する。焼成後の色調は外面が黄橙色、内面は茶褐色である。314 は白磁碗Ⅴ -2 類である。315 は下層の遺物の混入品で、弥生土器の壺の底部片である。外底部には葉脈の圧痕が残る。他にガラスの坩堝片、鉄滓等が出土する。土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK090127（Fig.37　Ph.46）　調査区西側に位置し、北側は他の遺構に切られる。平面プランは隅丸長方形を呈し、長辺 1.5m、短辺 0.48m、深さ 14cm を測る。北側に一辺約 10cm、厚さ 5cm の偏平な砂岩を置き、その周囲からは土師器細片やほぼ完形の鉄製の小刀も出土した。出土遺物は細片ばかりであるが、遺構のプランから土壙墓の可能性も考えられる。

出土遺物（Fig.37）　316 は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径は 6.4cm を測る。体部は底部から上方に摘み上げただけの形状を呈する。少量の金雲母を含み、色調は橙色である。317 は白磁碗Ⅳ類の口縁部片である。318 は鉄製の小刀で、全長 23.2cm、刃部の長さ 16.5cm を測る。土坑の時期は 12 世紀前半と考えらえる。

SK090139（Fig.38　Ph.47）　調査区西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.75m、短径 1.4m を測る。断面は逆台形を呈し、深さは 55cm である。覆土は炭化物を多く含む灰黒色土を主体とする。ほぼ完形の瓦器椀（319）が上層より出土する。

出土遺物（Fig.38）　319 は瓦器椀で、わずかに口縁部を欠損する。低い断面三角形の高台が付く。器壁は厚く、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁で緩やかに外反する。内外面ともに横方向の疎らな磨きを行う。320・321 は白磁である。320 は碗Ⅱ類の口縁部片で、内面から体部下半にかけて化粧土を施す。321 は皿Ⅵ -1a 類である。322 は越州窯系青磁碗の底部片で、体部下半まで釉薬がかかる。323 は同安窯系青磁碗の口縁部片で、外面に縦の櫛目文を有する。324 は施釉陶器の無頸壺である。胎土は精良で、灰色を呈する。外面から口縁内面まで褐釉がかかり、口縁端部の釉は掻き取られる。325 は施釉陶器の盤の口縁部片である。口縁端部上面と下面に砂目が残る。黒色粒、白色粒を含む粗い胎土に緑灰色の釉がかかる。326 は瓦質の平瓦である。凸面は工具によるナデで調整し、凹面

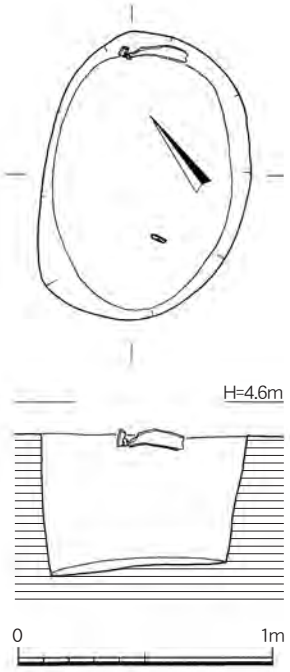


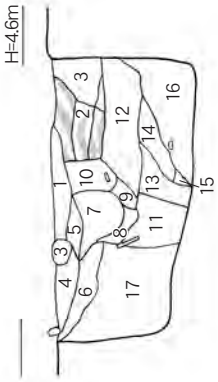
Ph.47　SK090139（南西から）

Fig.38　SK090139 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

は細かい布目が残る。他に回転糸切り底、ヘラ切り底の土師器、鉄滓が出土する。これらの出土遺物から土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK090159（Fig.39　Ph.48~50）　調査区西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.1m、





SK090159
1 黄褐色砂質土
2 灰色土と黄色シルトの互層
3 灰色土に茶褐色シルト混入
4 灰黒色粘質土に炭化物混入
5 茶褐色土に炭化物・灰黒色土混入
6 灰色土と茶褐色シルトに炭化物・焼土少量粒状に混入
7 灰黒色粘質土にオリーブ灰色土・黄色土・炭化物粒状に混入
8 茶褐色砂質土に炭化物混入
9 灰黒色土に炭化物混入
10 灰色粘質土に炭化物混入
11 灰色粘質土にオリーブ灰色土・炭化物混入
12 茶褐色土に黄色砂斑状に、炭化物・焼土粒状に混入
13 灰色粘質土に1cm大の焼土・炭化物混入
14 灰色粘質土に炭化物・焼土粒状に混入
15 茶褐色砂質土
16 灰色粘質土に1cm大の炭化物・焼土混入
17 茶褐色砂質土に炭化物混入

Ph.48　SK090159（南東から）

Ph.49　SK090159 獣骨出土状況（南西から）

Ph.50　SK090159 土層（北西から）

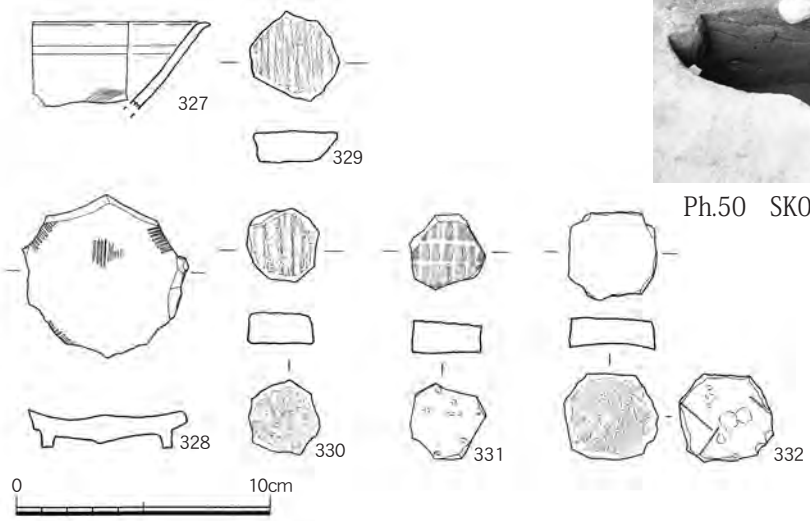


Fig.39　SK090159 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

短径 0.8m を測る。断面は逆台形で、深さは 55cm である。土層からは中央に直径 20cm 程度の柱状の痕跡（7~11 層）がうかがえ、その両側は埋土である。柱状の痕跡は炭化物を多く含む粘質土を主体とする。両側の埋土はシルト・砂質土を主体とし、粘質土を部分的に含む。北側上層からはウマの骨（Ⅲ -35 参照）、南側上層からはガラス玉（Ⅲ -34 Fig.22-489）とイノシシ・シカの骨（Ⅲ -35 参照）が出土した。なお、陶磁器、瓦を用いた瓦玉がまとまって出土する。

出土遺物（Fig.39）　327 は白磁碗Ⅴ -2 類の口縁部片である。328~332 は瓦玉である。重さは 56.9g、15.3g、12.1g、13.9g、20.0g である。328 は白磁碗Ⅵ -1b 類の高台部を使用し、縁辺を丁寧に打ち欠いて円盤状にする。329・330 は瓦質の平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。

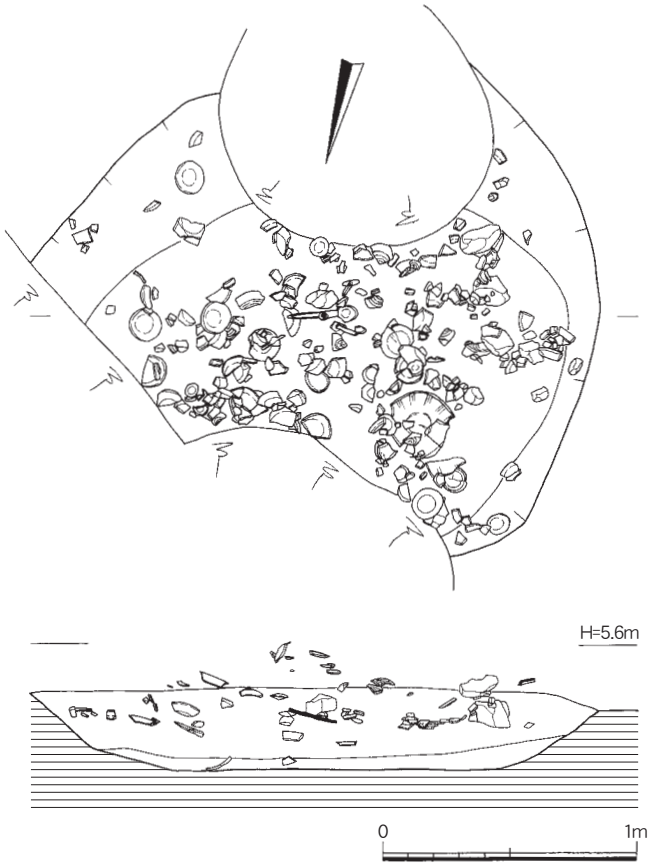


Fig.40　SK090162 実測図（1/30）

凸面には平行タタキが残り、凹面はナデで調整される。331・332 は施釉陶器の体部片を使用し、円形に近づくよう周辺を打ち欠く。331 の外面は格子目が残り、濃緑色の釉がかかる。332 は内外面ともに工具によるナデで仕上げられ、内面に濃緑色の釉が垂れる。外面に施釉されていないことから、底部に近い破片と考えられる。他に回転ヘラ切り底の土師器、瓦器、滑石片、ガラス小玉、ガラス坩堝、珪石、炉壁、粘土塊、鉄釘、鉄滓、獣骨が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半と考えらえる。

SK090162（Fig.40　Ph.51~56）　調査区西側に位置し、南側と北東側を他の遺構に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.8m 以上、短径 2.1m を測る。壁面は緩やかな傾斜をもち、深さは 33cm である。覆土は炭化物を含んだ灰黒色土を主体とし、土坑からは礫岩とともに大量の土師器、陶磁器、鉄器、銅銭、獣骨（Ⅲ -35 参照）、ガラス玉（Ⅲ -34 Fig.22-488）が散乱した状況で出土した。

出土遺物（Fig.41・42　Ph.57）　333~364 は回転糸切り底の土師器である。338・340・341・344 は完形品である。333~345 は小皿で、333 は底径に比して器高が高く、他は底径に比して器高が低い。333 は口径 6.5cm、底径 5.1cm、器高 1.6cm を測る。胎土に多量の金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。334~344 は口径 7.3~8.7cm、底径 5.2~6.5cm、器高は 1.0~1.6cm である。335・338 は外底部に板状圧痕を有する。335・338・342・343 は内底部に平行なナデが施されていることから、手持ちで仕上げるが、他は回転ナデで仕上げる。344 は回転中に口縁部に工具が当たったのか、一端が凹み、底部と同じ高さとなる。345 は内底部に箆による刻みが残る。342 は胎土に金雲母と赤褐色粒を含むが、他は金雲母のみである。色調は 335・340・342・345 が明橙色、他は橙色を呈する。

Ph.51　SK090162 上層（北から）

Ph.54　SK090162 下層（北東から）

Ph.52　SK090162 上層中央金属器（北から）

Ph.55　SK090162 下層東側銅銭（南西から）

Ph.53　SK090162 上層中央ガラス小玉（北から）

Ph.56　SK090162 下層 R131 瓦質擂鉢出土状況（北西から）

341 は内底部に少量の煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えらえる。346~364 は坏である。口径は 10.4~13.4cm を測り、349・351・356~358・363 は外底部に板状圧痕を有する。354 は底部中央に穿孔を有し、内外面両方から打ち欠く。また、347・349・356・358 の内底部は平行ナデを行う。胎土は 348 が金雲母と赤褐色粒を含み、351・363・364 は金雲母を多量に含む。346・356・358・364 は煤が付着しており、燈明皿として使用される。364 には墨で、内面 2 本、外面 4 本の細い線が引かれる。365・366 は瓦質土器である。365 は片口の捏鉢の口縁部片、366 は擂鉢の底部片である。366 はよく使用されており、底部付近の擂目は潰れる。367~370 は白磁である。367 は合子の蓋で、復元口径 8.8cm を測る。灰白色の胎土に、乳白色の釉が外面にかかる。368 は碗Ⅷ類で、内面見込みの釉を環状に掻き取る。369 は輪花を有する碗で、内外面に化粧土を施す。370 は碗Ⅳ類

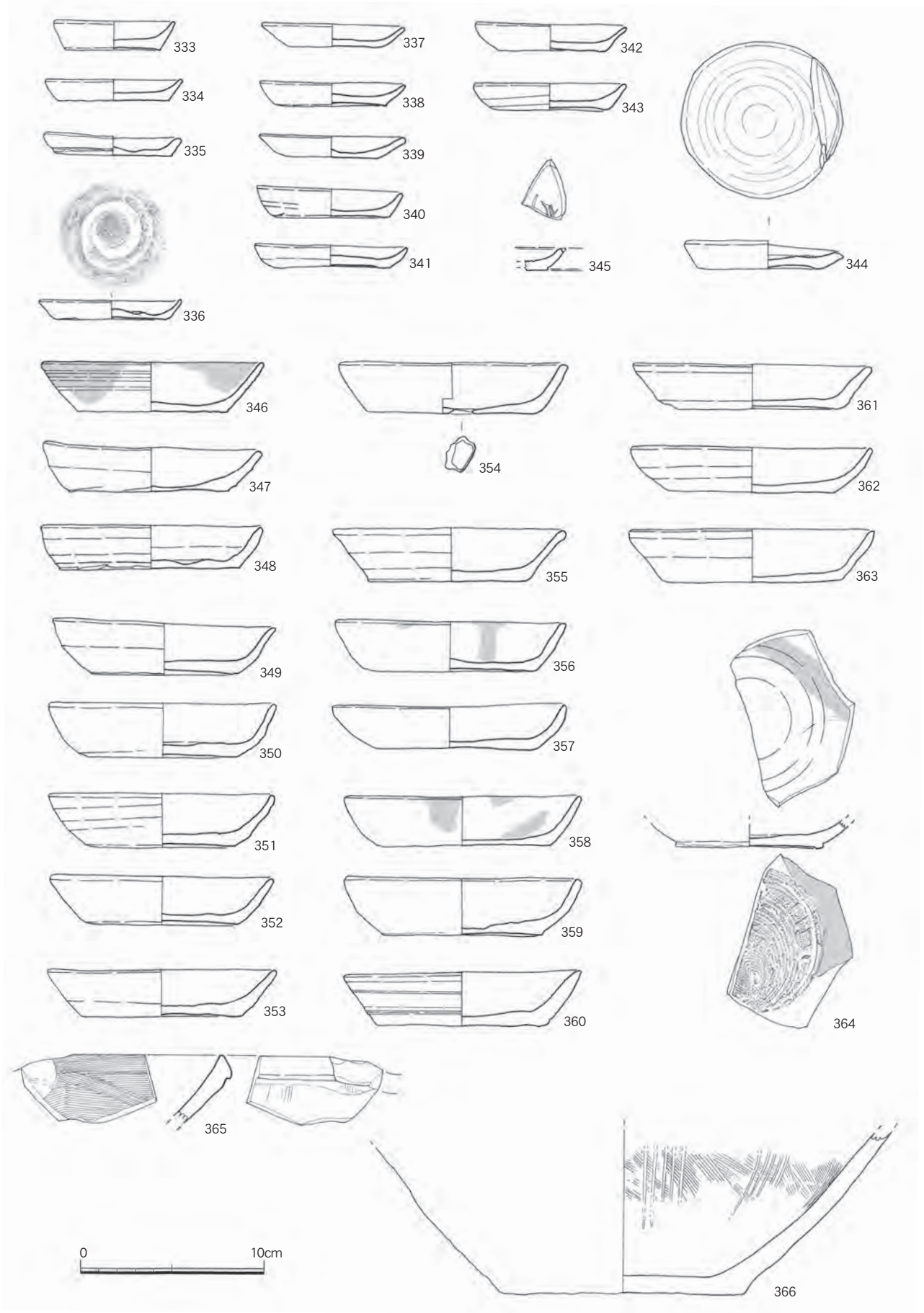


Fig.41　SK090162 出土遺物実測図①（1/3）

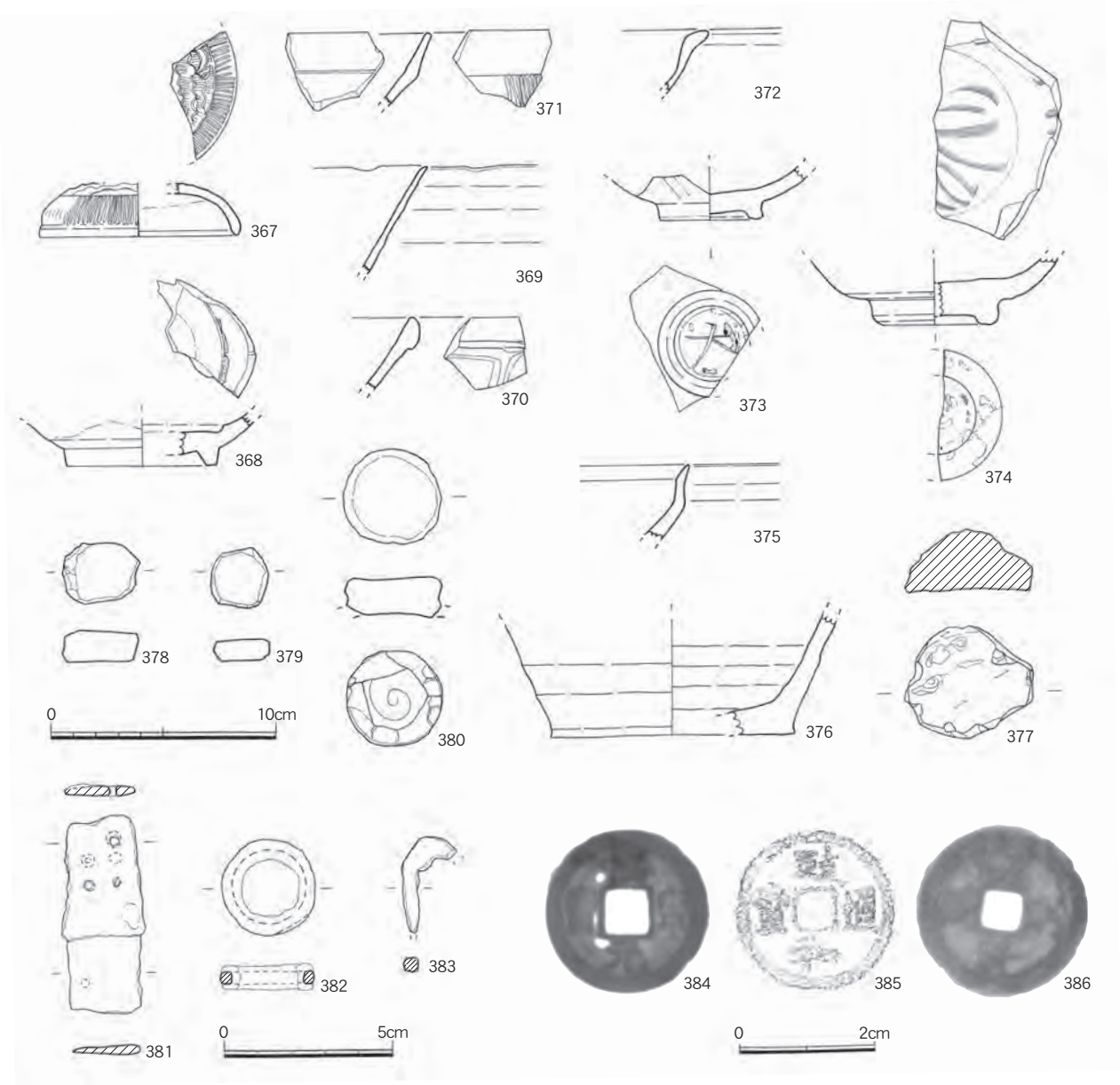
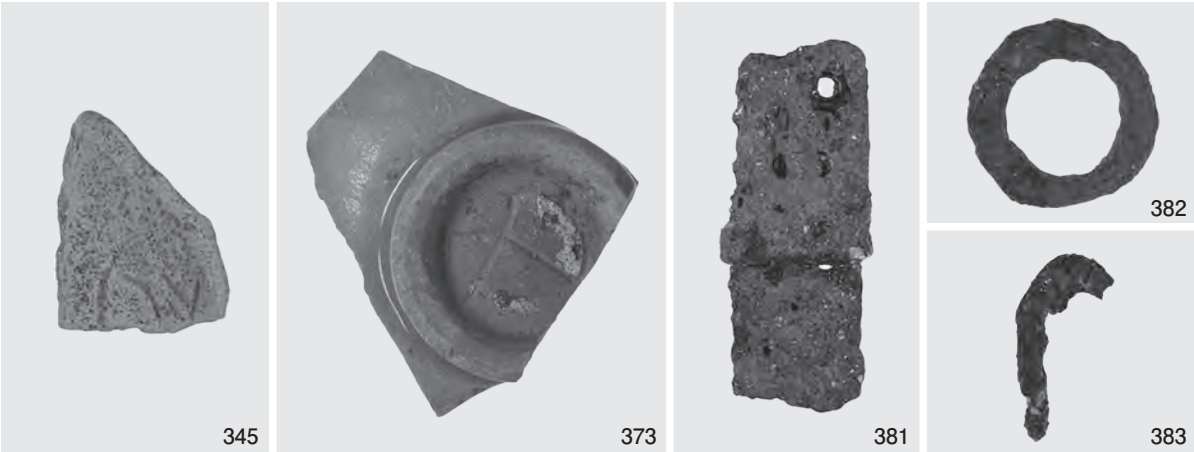
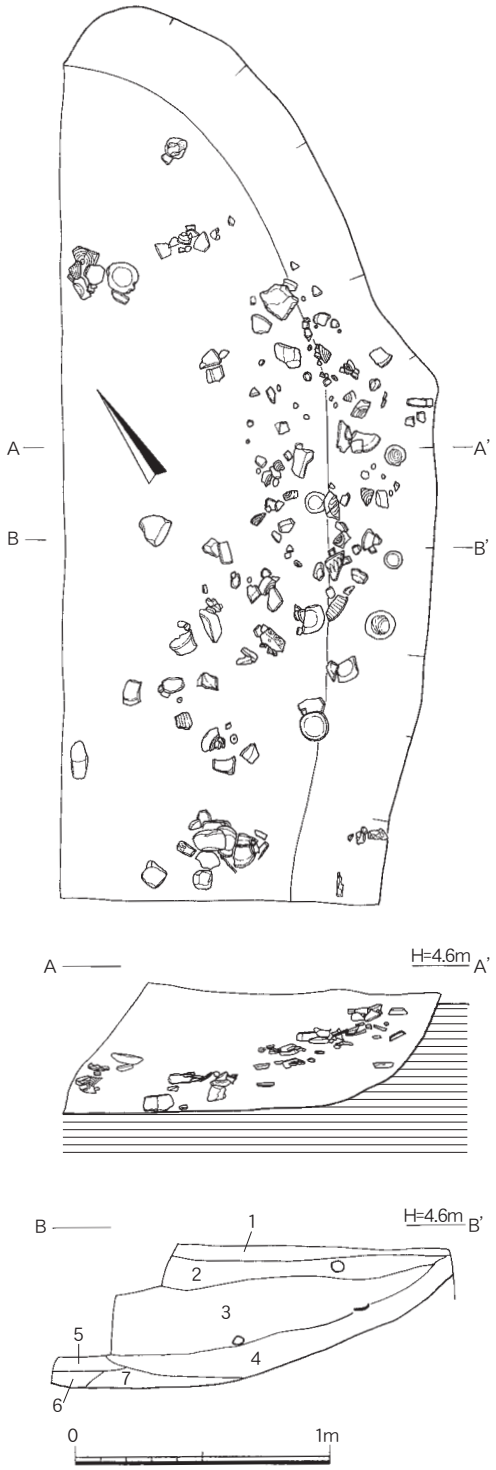


Fig.42　SK090162 出土遺物実測図②（1/3・1/2・1/1）

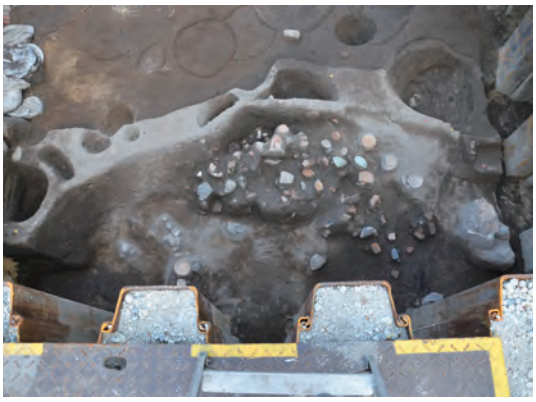


Ph.57　SK090162 出土遺物



SK090193
1　黄灰色粘質土に炭化物少量含む
2　灰色粘質土に焼土粒状に混入
3　黄灰色粘質土に黄色土粒状、黄色砂斑状に混入
4　灰色粘質土に炭化物（5cm大）少量、焼土粒状に含む
5　灰黒色土（やや粘質おびる）
6　灰黒色砂質土
7　黄褐色土と灰黒色土（やや粘質おびる）

Fig.43　SK090193 実測図（1/30）



Ph.58　SK090193 遺物出土状況（北西から）

Ph.59　SK090193 遺物出土状況（北東から）

Ph.60　SK090193 銅銭出土状況（南西から）

Ph.61　SK090193 土層（南西から）

の口縁部片で、外面口縁下を削りだし、鎬を付ける。371 は同安窯系青磁碗の口縁部で、外面に縦の櫛目文を有する。372~374 は龍泉窯系青磁である。372 は坏Ⅲ-2 類で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は鋭く外反し、上面は平坦面をなす。373 は碗Ⅲ-2 類で、外面に鎬蓮弁を有し、高台内に「天」のヘラ描きがある。374 は碗Ⅰ-2 類で、高台内に目跡が残る。375 は天目茶碗で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部で外反する。黒釉の地にやや粗な銀色の細い筋が多数現れる。376 は褐釉陶器の壺の底部片である。377 は軽石の磨石である。平坦面になるまで、よく使用され、器面は滑らかであるが、擦痕等はうかがえない。重さは 18.2g である。378~380 は瓦玉で、378・379 は褐釉陶器、380 は龍泉窯系青磁の蓋の摘みを使用する。重さは 17.1g、9.8g、41.1g を量る。381~383 は鉄製品である。381 は小札で、幅 2.0cm を測り、径 0.3cm の目釘穴が 2 列並ぶ。382 は環状を呈し、径 2.8cm を測る。厚さはX線で約 0.3cm の断面方形を呈する。383 は鉤状の鉄棒である。断面は方形状を呈する。384~386 は銅銭である。384 は北宋代で、「熙寧元寶」（初鋳年 :1068 年）である。385 は北宋代で、「政和通寶」（初鋳年 :1111 年）である。386 は「口平元口」銹化が進み銭文は不明である。他に白磁碗Ⅸ類、ガラス小玉（Ⅲ-34 Fig.22-488）、ガラス坩堝、鉄滓が出土する。土坑の時期は　出土遺物から 13 世紀中頃から 14 世紀初頭と考えられる。

SK090193（Fig.43　Ph.58~61）　調査区西側に位置し、西側と南側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈すると思われ、長径 3.5m 以上、短径 1.5m 以上、深さは 50cm を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。床面には 7 層のやや粘質を帯びた灰黒色土が 10cm 程度堆積し、その上層に炭化物、焼土を含んだ 4 層の灰色粘質土、3 層の黄灰色粘質土が溜まる。遺物は東側上層から西側下層へ流れ込んだ様相を呈し、土層では 3 層がこれにあたる。

出土遺物（Fig.44）　387~404 は土師器である。387~391 は回転糸切り底の小皿で、388~390 はほぼ完形品である。口径は 7.4~8.2cm を測り、391 のみ外底部に板状圧痕を有する。色調は 387・391 が橙色、他は明橙色である。392 は回転ヘラ切底の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。口径 8.8cm を測り、胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、色調は橙色である。393~402 は回転糸切り底の坏で、口径は 12.0~13.0cm を測る。394・397・400~402 は外底部に板状圧痕を有し、394 の板目は細かく簾状である。397 は灯明皿として使用されたため、口縁に少量の煤が付着する。403 は大型の回転糸切り底の坏で、口径 16.0cm、器高 3.4cm を測る。体部は回転ナデで仕上げられ、胎土に金雲母、白色砂粒を多く含む。404 は丸底坏で、復元口径 16.3cm、器高 3.9cm を測る。内面には焼成後の古い傷が残る。405~408 は白磁である。405 は碗Ⅸ類で、口縁部周辺の釉を掻き取る。406・407 は碗Ⅳ類、408 は碗Ⅴ類の底部片で、408 は見込みに目跡が残る。409~412 は龍泉窯系青磁である。409・410 は碗Ⅱ-b 類で、体部外面に鎬蓮弁文を有し、弁の中心線は稜をなす。青味を帯びた濃緑色の釉がかかる。411 は碗Ⅲ-2 類で、体部外面に幅の細い鎬蓮弁文を有する。青緑色の釉がかかり、全面に細かい貫入が入る。412 は碗Ⅰ類の底部片である。413 は土師質土器の鍋で、口縁上面には巴文のスタンプを有する。外面は刷毛目で調整され、口縁下に直径 5.0mm の孔を内面から外面に向かって穿つ。414 は砂岩製の石臼の小片で、幅 5.0~8.0mm の溝を刻む。415 は黒石の碁石で、楕円形を呈する。よく磨かれるが、器面には気泡が多く、部分的に茶色を呈する。重さは 3.8g である。416・417 は銅銭である。416 は北宋代で、「至和通寶」（初鋳年 :1054 年）である。417 は「開元通寶」（初鋳年：621 年）である。418 は断面方形の鉄釘である。先端部は直角に曲がる。419 は下層の遺物の混入で、二重口縁壺の口縁部片で、口縁下位に円形竹管文を貼り付ける。東海系の可能性も考えられる。内外面ともに横方向の丁寧なナデが施される。胎土は金雲母、白色砂粒を含み、色調は外面が明橙色、内面は暗橙色である。他に外面縄目タタキの瓦質の瓦片、炉壁、鉄滓が出土する。土坑の時期は 13 世紀中頃から 14 世紀初頭と考えらえる。

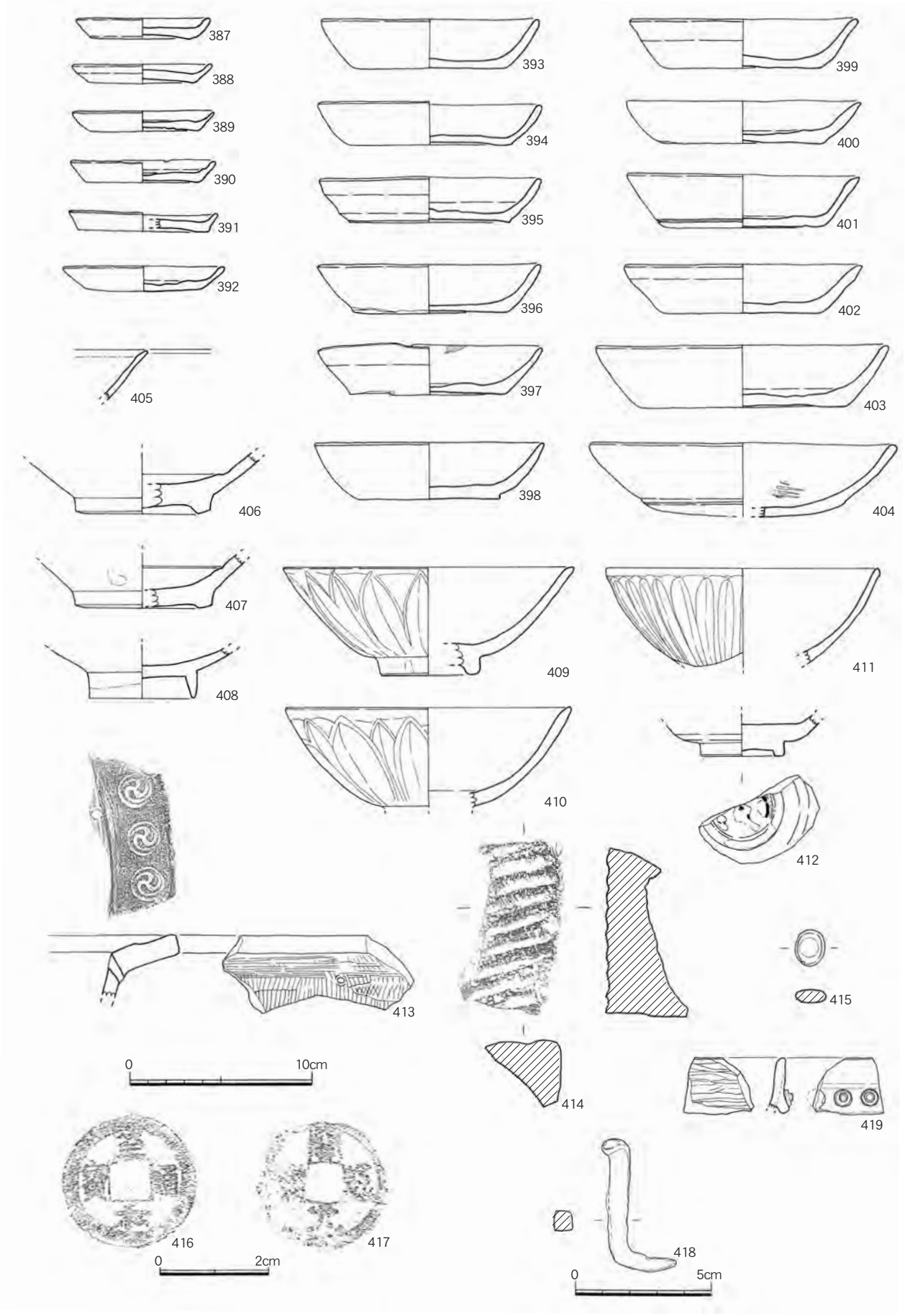


Fig.44　SK090193 出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）

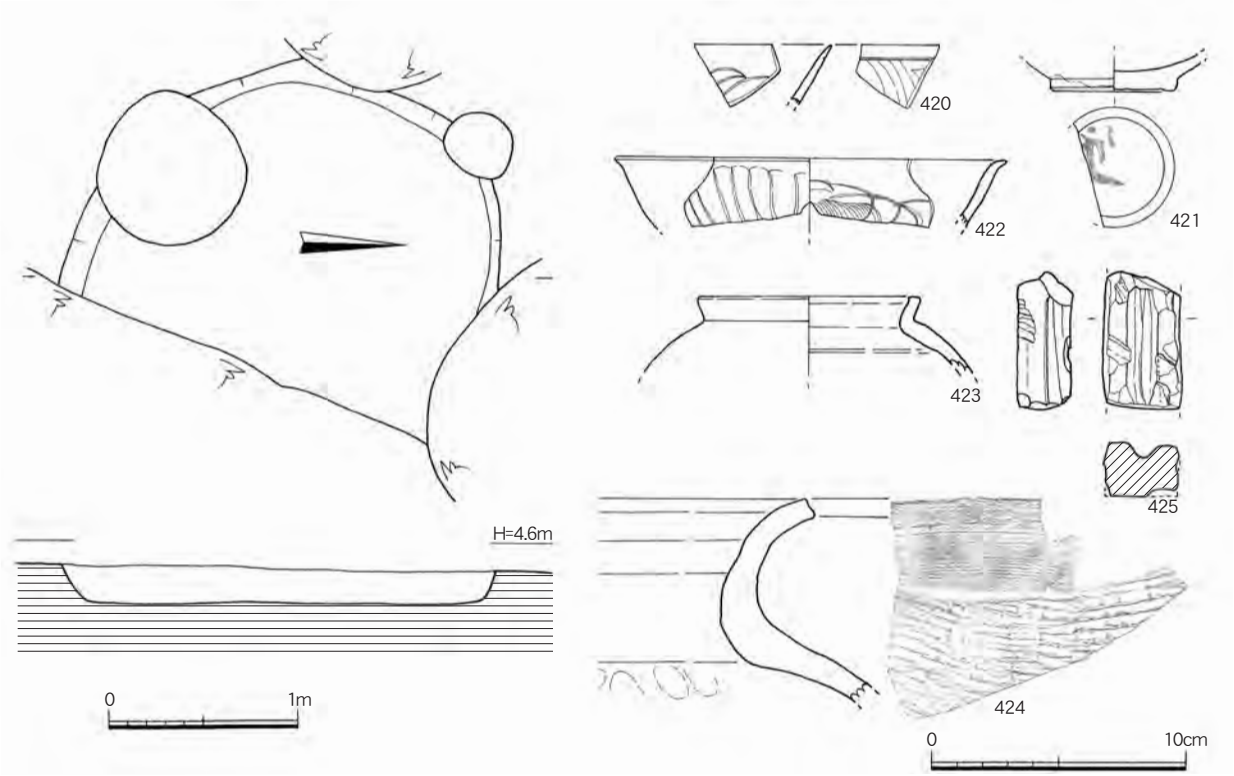


Fig.45　SK090232 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK090232（Fig.45）　調査区西側に位置し、東側は SE090161 に切られる。平面プランは楕円形を呈すると思われ南北方向約 2.2m、東西方向 1.6m 以上を測る。深さも 20cm と遺存状況は悪い。覆土はわずかに炭化物を含む灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.45）　420・421 は白磁である。420 は小碗で、外面は片彫り、内面は箆で文様が描かれる。灰白色の精良な胎土に、やや灰色を帯びた白色釉がかかる。421 は皿Ⅱ類の底部片で、高台内に墨書が残る。422 は同安窯系青磁碗で、体部外面に幅広の縦の櫛目文を施し、内面は櫛状と箆状の施文具により花文を描く。423・424 は下層の遺物の混入と考えらえる須恵器である。423 は小壺の口縁部片で体部から口縁が短く立ち上がり、端部は平坦におさめる。回転ナデで調整される。424 は甕の口縁部片で、体部外面は平行タタキ、内面は縦方向の指ナデが残る。425 は滑石製石鍋の転用で、砥石として使用される。石鍋外面と思われる面には幅 1.0cm、深さ 0.5cm の断面「U」字状の窪みがあり、擦痕が残る。他に回転ヘラ切り底の土師器、黒色土器 B 類が出土する。土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK090742（Fig.46）　調査区北東端に位置し、北側と東側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈すると思われる。深さは 10cm を測る。覆土は灰黒色土を主体とし、炭化物の塊や黄褐色土を斑状に含む。

出土遺物（Fig.46）　426 は丸底坏で、復元口径 14.3cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に細かい金雲母を含み、色調は橙色である。427 は白磁碗で、器壁は厚く、灰白色の胎土に灰緑色の釉がかかる。外面下半は露胎である。見込みは段を有する。428 は白磁皿Ⅲ類で、内面見込み部分の釉を輪状に掻き取る。見込みには目跡も残る。429 は越州窯系青磁の壺の肩部片である。頸部に 2 条の横方向の凸線を巡らせ、縦方向に 2 条 1 単位の凸線を入れ、体部を分割する。他に白磁碗Ⅱ・Ⅳ類、瓦器椀、ガラス坩堝が出土する。土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

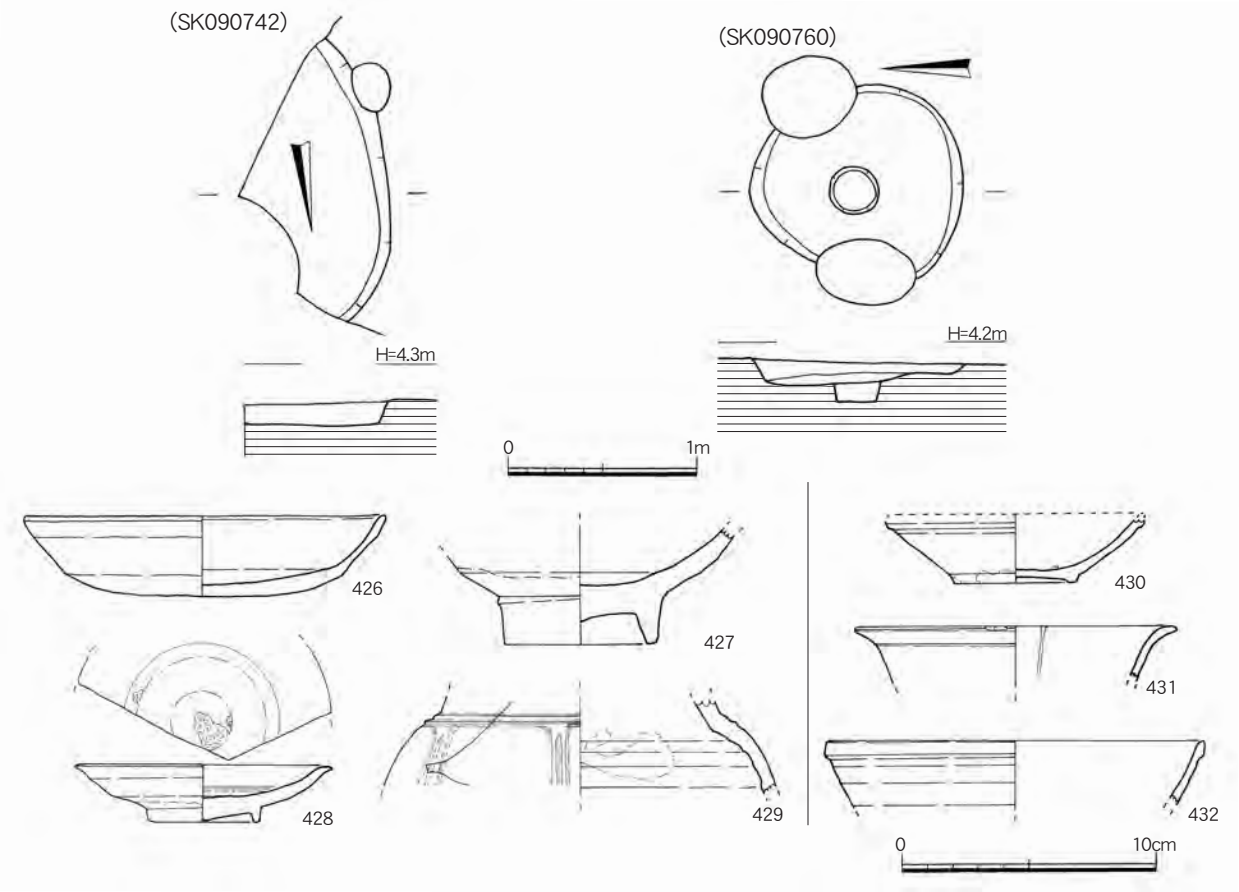


Fig.46　SK090742・090760 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK090760（Fig.46）　調査区東側に位置する。平面プランは円形を呈し、直径約 1.0m、深さは 10cm を測る。床面中央に直径 25cm、深さ 10cm のピットを有する。覆土は炭化物や黄褐色土を斑状に含む灰黒色土で、ピットは炭化物と赤褐色土を多く含んだ茶褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.46）　430~432 は白磁である。430 は皿Ⅱ -1b 類で玉縁の口縁をもつ。見込みに胎土目が残る。431 は小碗で、口縁に輪花を有し、内面に白堆線が入る。微細な黒色粒を含む白灰色の胎土に白濁色の釉がかかる。432 は碗Ⅱ類で、小さな玉縁の口縁をもつ。灰色の胎土に化粧土をかけ、やや白濁色の釉がかかる。全面に細かい貫入が入る。他に回転ヘラ切り底の土師器、瓦器、黒色土器 A 類が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

SK090771（Fig.47~49　Ph.62~82）　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、東西方向 1.7m、南北方向 1.4m 以上を測る。断面は逆台形で、深さは 0.8m である。廃棄土坑で、大量の遺物が出土した。土層は大きく 4 層に分かれる。上層（第 1 面）は掘削面から 35cm 下までの炭化物を含む茶褐色土、中層（第 2・3 面）は 55cm 下までの大量の焼土ブロック、炭化物の塊を含む灰褐色粘質土、下層（第 4 面）は 70cm 下までの炭化物を含む灰黒色土、最下層はほとんど遺物を含まない暗灰色砂質土である。出土した遺物も層毎に異なり、上層（第 1 面）からは白磁、瓦器、土師器等、中層（第 2・3 面）からはガラス製品および製造に関する遺物で、玉、未成品、滓、坩堝、原料となる硅石、石英、鉛等が出土する。下層（第 4 面）からはシカと魚類の骨がまとまった状態で出土した。シカは肋骨・頭骨・上顎骨・下顎骨・歯・指骨がみられ、中には切断痕が認められる。魚類の骨は、タイ類、サメ・エイ類が確認できた。なお、最下層からはウサギの上腕骨も出土し、当時の豊かな食生活がうかがえる。土坑は掘削後、まず鹿

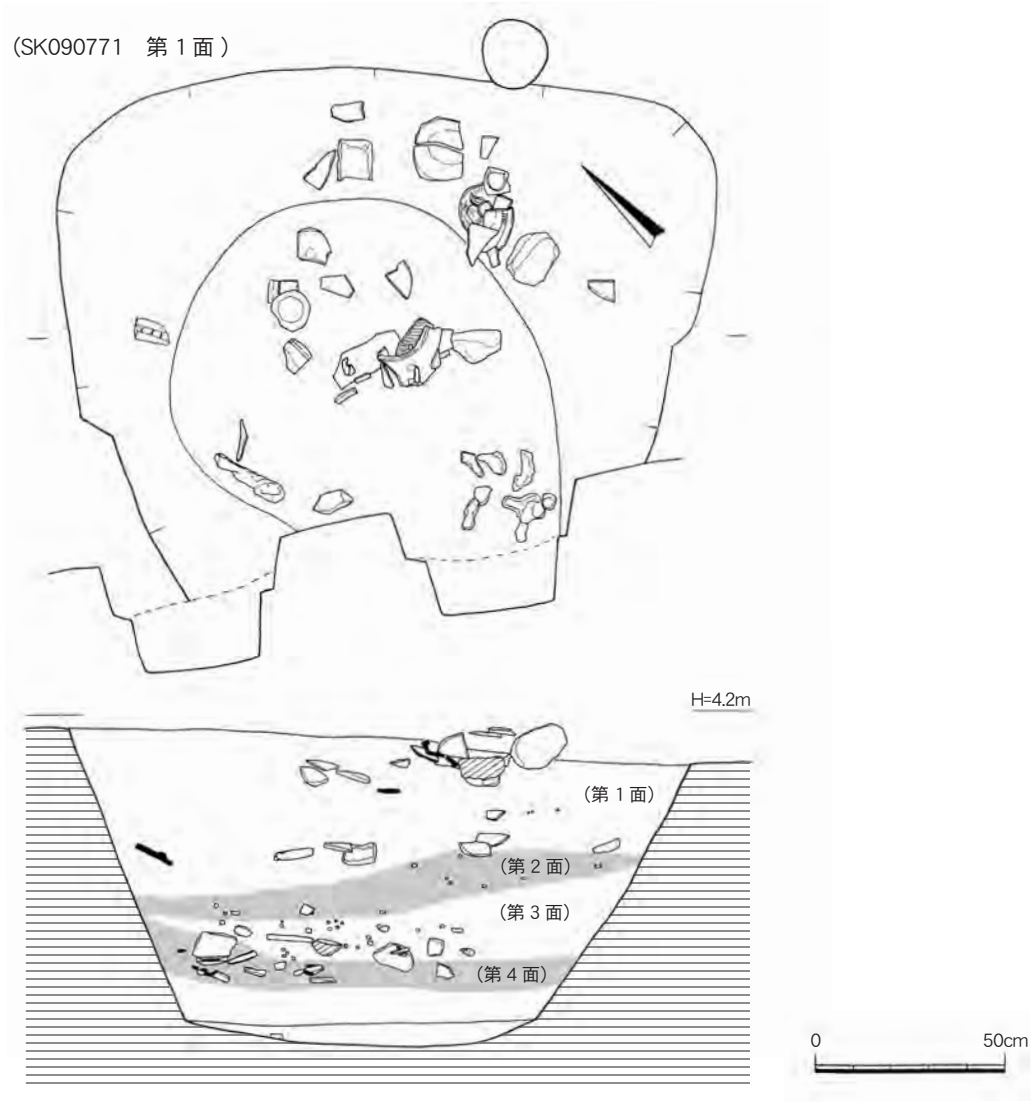


Fig.47　SK090771 第 1 面実測図（1/20）

Ph.62　SK090771 第 1 面（北東から）

Ph.63　SK090771（南西から）

等の解体若しくは食事後の残滓が廃棄され、その後、ガラス製造に関する遺物が捨てられる。ガラス製造に関しては、ガラスの原料となる石英や鉛が出土していることから、ガラス製品をガラス素材から作るだけではなく、ガラスを原料から作り出していた可能性が考えられる。調査区ではガラスの製造に関する遺構は確認できなかったが、炉壁や坩堝が大量に出土しており、近くに工房があっ

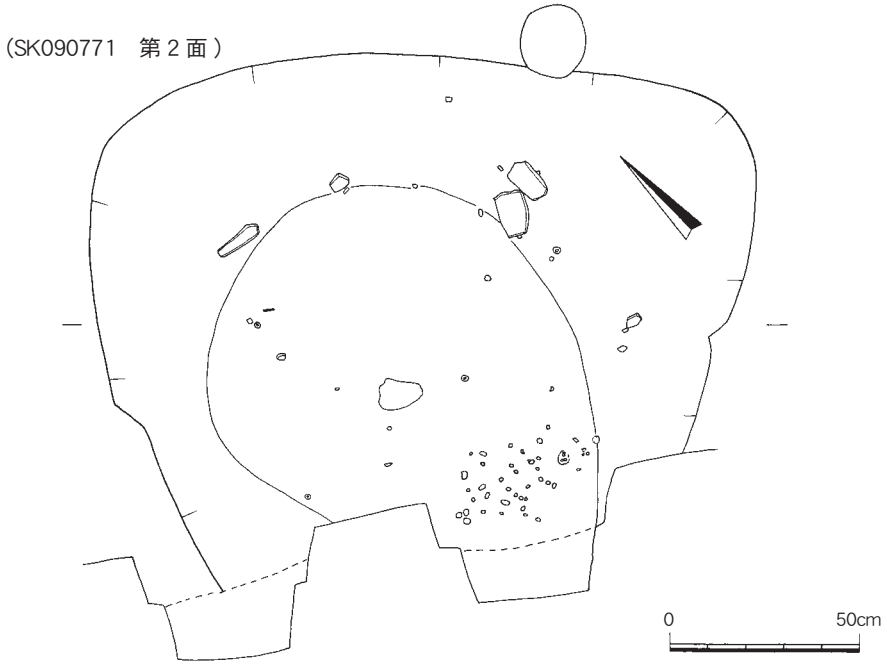


Fig.48　SK090771 第２面実測図（1/20）

Ph.64　SK090771 第２面（北東から）

Ph.65　SK090771 第２面南東側（北東から）

Ph.66　SK090771 第２面南側（北東から）

Ph.67　SK090771 第 2 面焼土・ガラス（北東から）

Ph.68　SK090771 第 2 面焼土・ガラス（北東から）

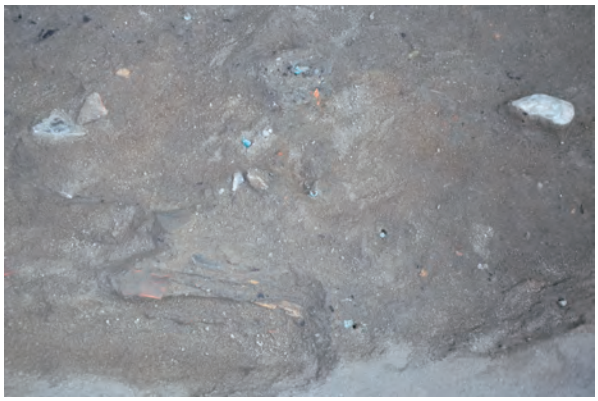
Ph.69　SK090771 第 2 面焼土・ガラス（北東から）

Ph.70　SK090771 第 2 面ガラス小玉（北東から）

Ph.71　SK090771 第 2 面陶磁器（北東から）

Ph.72　SK090771 第 3 面（北東から）

Ph.73　SK090771 第 3 面南側（北東から）



Ph.74　SK090771 第 3 面ガラス小玉（北東から）

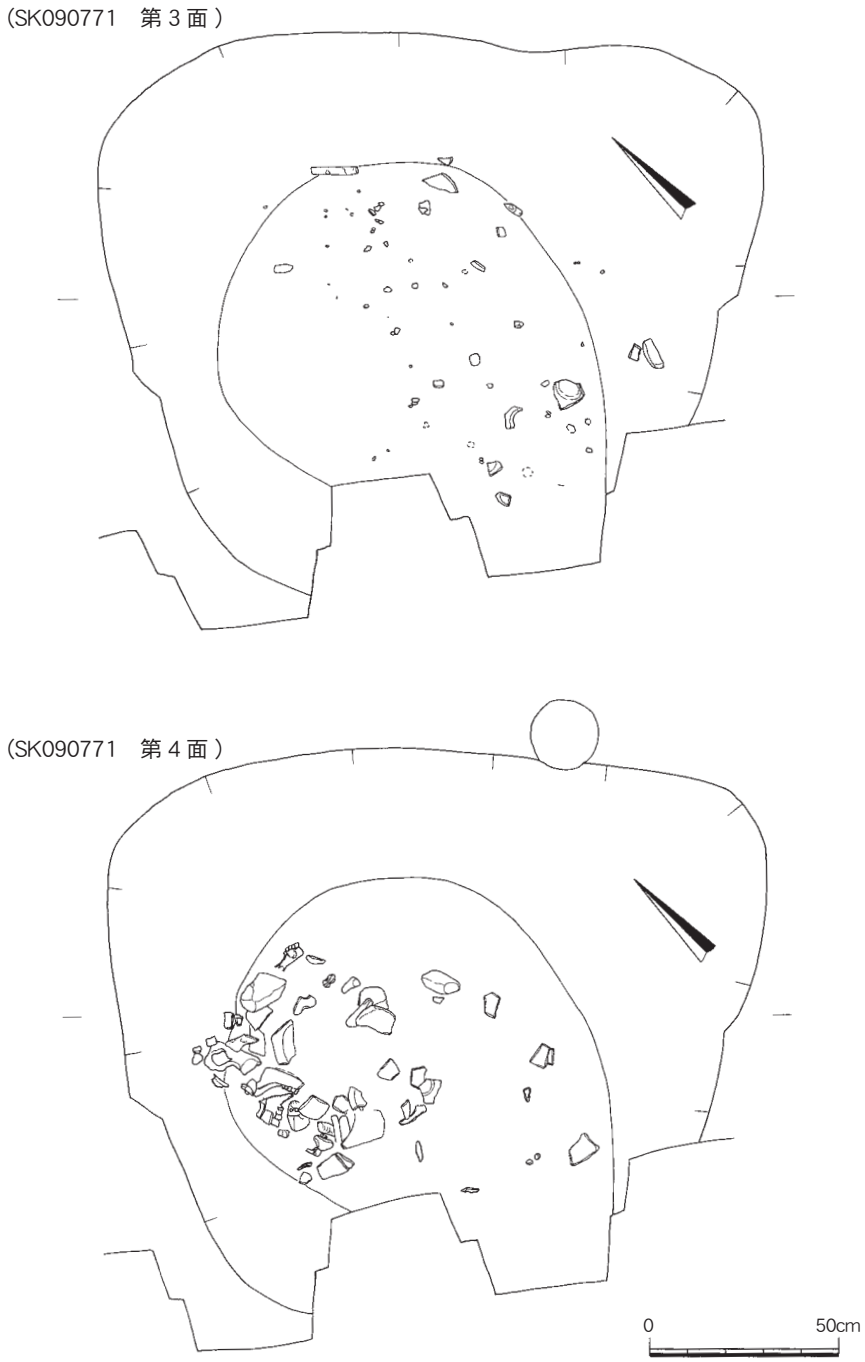


Fig.49　SK090771 第 3・4 面実測図（1/20）

たことを示す。なおガラス製品としては小玉、連玉、容器蓋、容器片、細棒、不定形の形状を示すもの等、約 330 点がみつかっている。色調は青、緑を基本とし、黄緑、白、褐色等あまり出土しない色味も含まれる。SE090879・091125 からも同様のガラス関連遺物が出土している。土坑の時期であるが、層毎で大きな時期差はうかがえず、出土遺物から 12 世紀前半から中頃と考えられる。ガラス関連遺物、獣骨に関しては、後述のⅢ -34、Ⅲ -35 に詳細を記す。他に鉄釘、鉄滓、銅滓も出土する。また、大量の炭化物が出土していたため、樹種同定を行ったが、栽培植物として確認されたのは、中層から出土したイネの炭化種子だけであった（参照 : 付編 3. 炭化種実について）。なお AMS 法による放射性炭素年代測定を行い、付編 4 に掲載している。

出土遺物（Fig.50・51　Ph.83）　433~438 は土師器である。433・434 は回転ヘラ切り底の土

Ph.75　SK090771 第 4 面（南西から）

Ph.76　SK090771 第 4 面（西から）

Ph.77　SK090771 第 4 面獣骨（北東から）

Ph.78　SK090771 第 4 面獣骨（南西から）

Ph.79　SK090771 第 4 面獣骨（北東から）

Ph.80　SK090771 第 4 面獣骨（北東から）

Ph.81　SK090771 第 4 面獣骨（北東から）

Ph.82　SK090771 第 4 面獣骨（北東から）

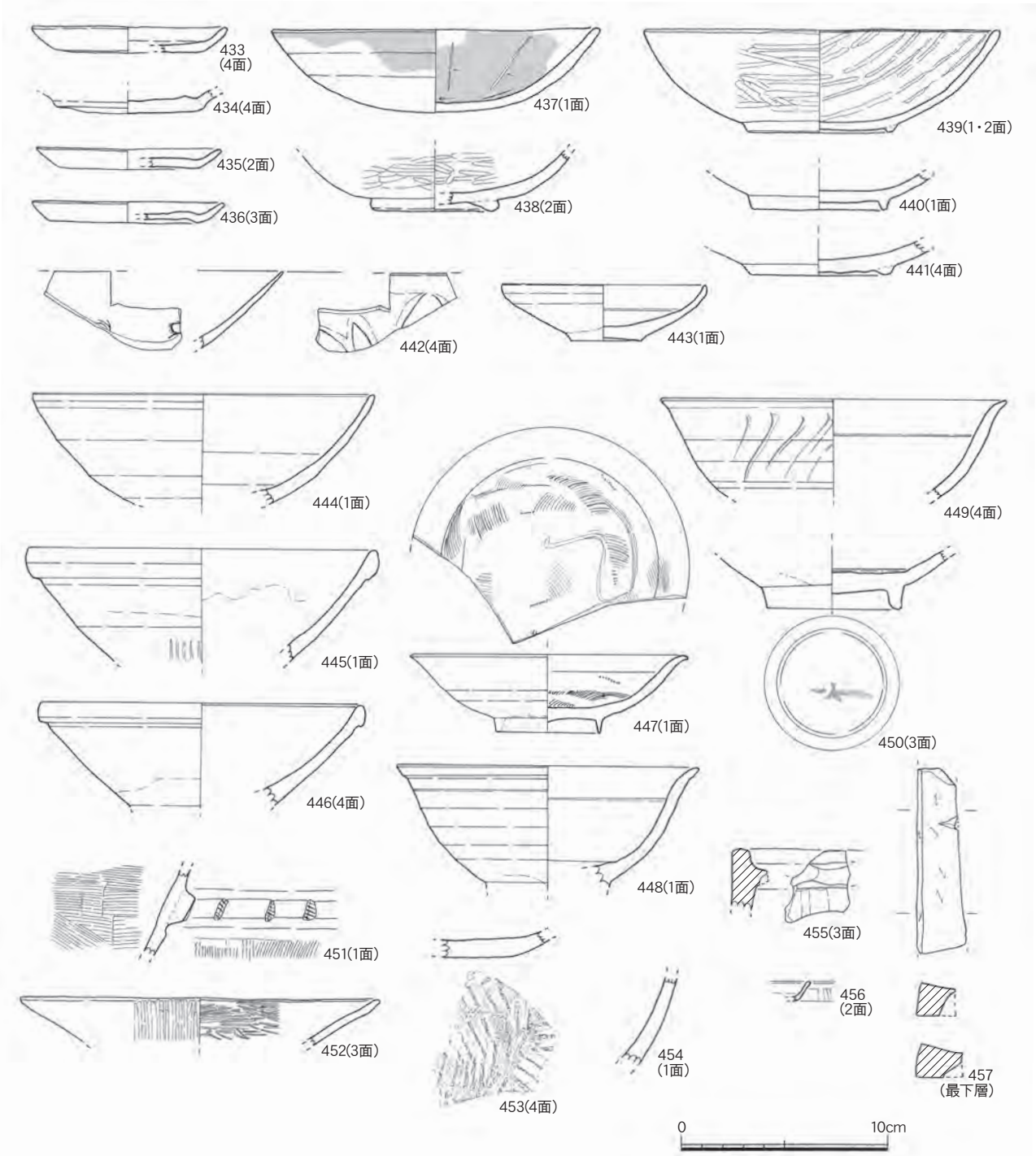
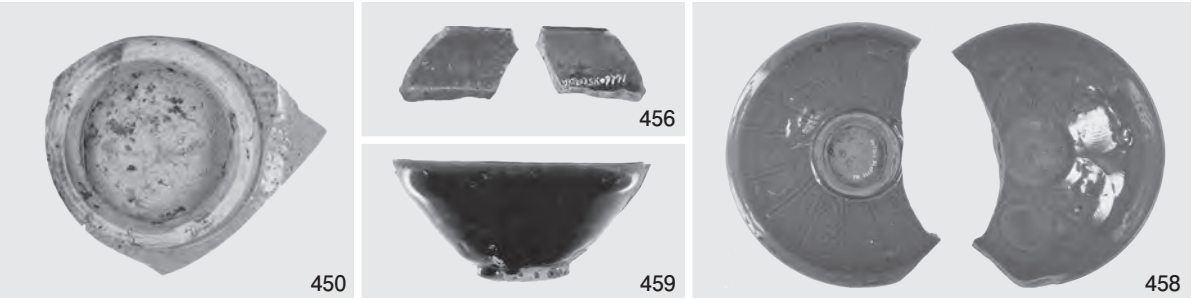


Fig.50　SK090771 出土遺物実測図①（1/3）



Ph.83　SK090771 出土遺物

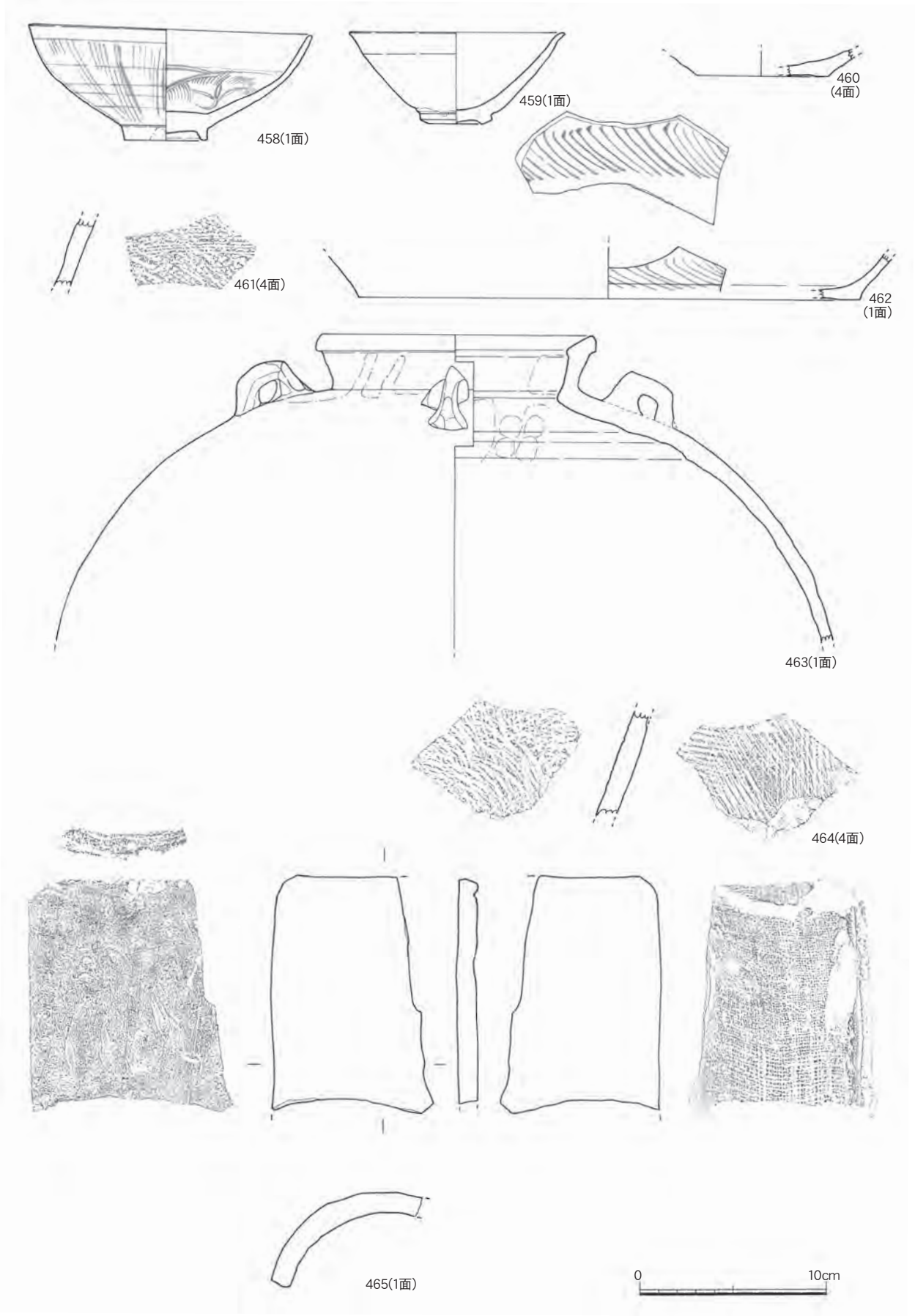
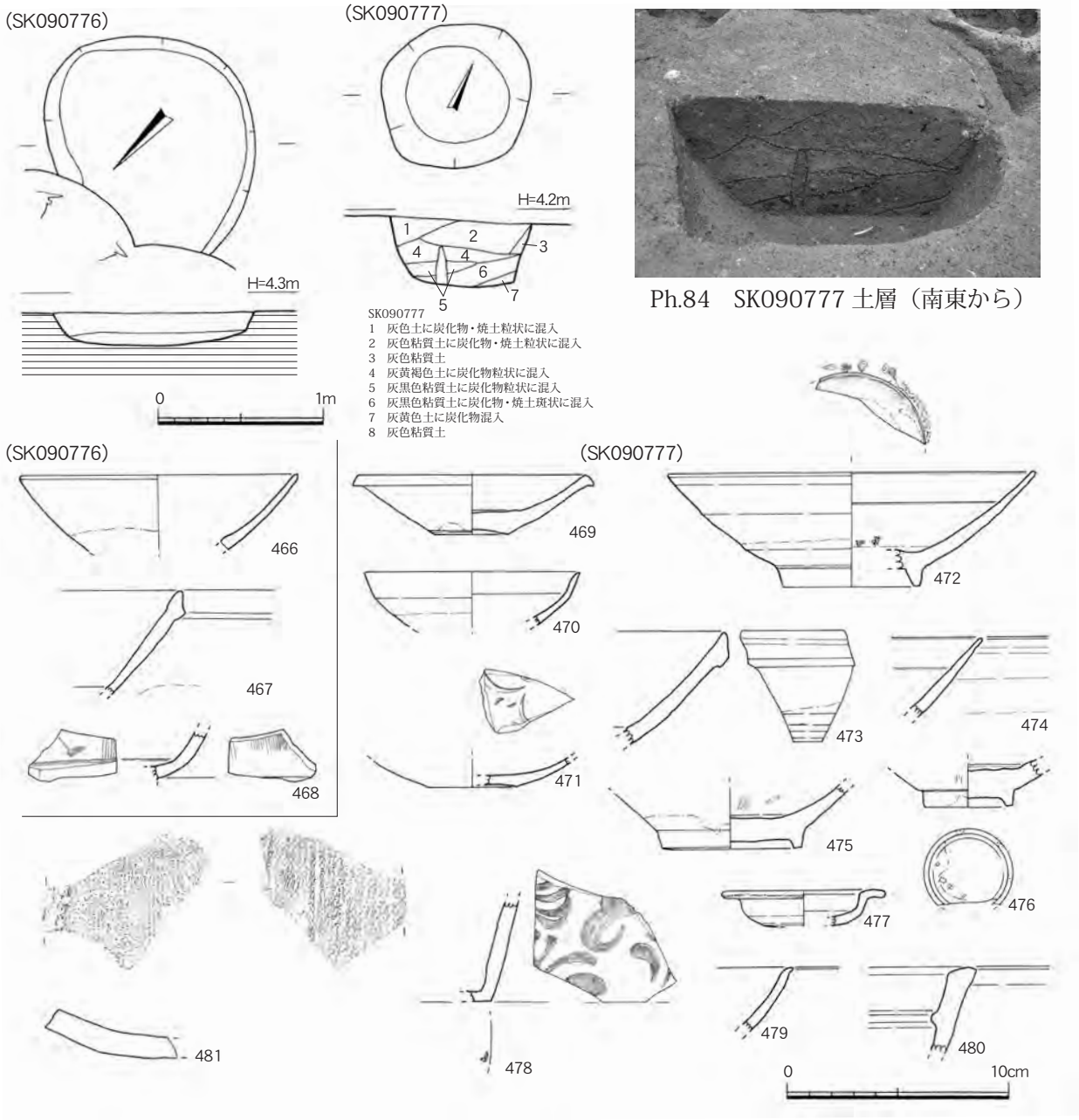


Fig.51　SK090771 出土遺物実測図②（1/3）

師器の小皿で、口径は 9.6cm を測る。胎土に金雲母、434 は赤褐色粒も含み、色調は明橙色を呈する。435・436 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 9.0~9.4cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土は少量の金雲母を含み、色調は橙色である。437 は丸底坏で、口径は 16.0cm、器高 4.2cm を測る。内面にはコテ当て痕が残り、丁寧なナデで仕上げられる。胎土に金雲母を多量に含み、色調は橙色である。灯明皿として使用されており、内面のほぼ全面と外面口縁部に煤が付着する。438 は椀の底部片で、小さく、低い高台を付ける。体部は内外面ともに横方向の磨きを施す。439~441 は瓦器椀で、ともに低い高台を付ける。439 の内面はジグザグ状、外面は横方向の疎らな磨きを施す。440・441 は内外面ともにナデで仕上げる。442 は青白磁の碗で、外面には片彫りによる蓮弁文、内面には櫛状及び箆状工具による花文が描かれる。胎土は精良で、やや青緑を帯びた透明釉がかかる。器面全体に細かい貫入が入る良品である。443~450 は白磁である。443 は皿Ⅵ -1a 類で、口縁部を一部欠損する。444 は碗で、内面体部中位に段を有する。灰白色の胎土に明白色の釉がかかる。445・446 は碗Ⅳ類、447 は碗Ⅴ -1b 類、448 は碗Ⅴ -2a 類、449 は碗Ⅴ -2b 類、450 は碗Ⅷ類の底部片で見込みの釉を輪状に掻き取る。高台内には墨書が残る。451~453 は下層の遺物の混入である。451 は弥生土器の甕の体部片で、断面台形の突帯に刻目を施す。内外面ともに刷毛目で調整される。452 は土師器の高坏の坏部片で、体部は口縁に向かって直線的に延びる。内面は横方向、外面は縦方向の細かい磨きを施す。胎土に金雲母を多量に含み、色調は明褐色を呈する。453 は軟質土器の甕の底部片と思われる。外面にはタタキが残り、内面はナデで整形される。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は暗橙色を呈する。454 は防長産の緑釉陶器で、灰橙色の軟質な胎土に淡緑色の釉がかかる。455 は小型の滑石製石鍋の小片で、再利用しており、破面は研磨されている。小片で、重さは 19.8g である。456 は蝋石製の小型容器の小片である。外面は縦方向にノミ痕が残る。色調は口縁端部が黒色、内外面は暗茶褐色を呈する。破面の色調は黄味を帯びた灰色で、光沢をもつ。457 は粘板岩製の砥石片で、細かい擦痕が多く残る。458 は同安窯系青磁碗で、体部を一部欠損する。459 は天目茶碗で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部で外反する。黒釉の地にやや不明瞭であるが、銀色の細い筋が多数現れる禾目天目である。内外面ともに長さ 5mm 程度の粘土が黒色釉の上に付着する。460 は褐釉陶器の底部片である。461 は瓦質土器の甕の体部片で、外面は叩き後、一部、横方向の刷毛目、内面はナデで調整する。462 は施釉陶器の盤の底部片で、内面には鉄絵を描く。463 は施釉陶器の四耳壺で、球状の体部に頸部が短く外反し、口縁を肥厚させ、端部は内傾させる。縦長の四耳が付く。胎土は黒色粒、白色粒を多く含み、灰色を呈する。内面露胎部の色調は暗褐色で、外面には暗褐色の釉がかかる。464 は高麗陶器の体部片である。外面は平行叩き、内面は当て具痕が残る。粘質を帯びた精良な胎土で、色調は灰黒色、暗紫色を呈する。465 は瓦質の丸瓦で、外面は工具によるナデで仕上げ、内面は細かい布目が残る。端部は未調整である。大量のガラス製品および製造に関する遺物については、後述の「Ⅲ -34. 金属製品・生産関連資料等について」、獣・魚骨等については「Ⅲ -35. 動物遺存体について」に詳細を記載する。他に鉄釘等が出土する。土坑の掘削時期は 12 世紀前半～中頃と考えられ、上層の 1~3 面は 12 世紀中頃である。

SK090776（Fig.52）　調査区東側に位置し、一部他の遺構に切られる。平面プランは略円形を呈し、直径 1.3~1.4m、深さは 0.2m を測る。覆土は炭化物を少量含む灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.52）　466・467 は白磁である。466 は小碗で、体部は直線的に開き、口縁部はそのまま丸くおさめる。黒色粒を多く含む灰白色の胎土に、白濁色の釉が厚くかかる。467 は碗Ⅳ類の口縁部片である。468 は龍泉窯系青磁碗で、外面に櫛目、内面に櫛と箆状工具で花文を描く。他に回転ヘラ切り底及び糸切り底の土師器、ガラス丸玉（Ⅲ -35 Fig.22-515）、ガラス坩堝、珪石、炉壁、鉄滓が出土する。土坑の時期は 12 世紀前半と考えらえる。



Ph.84　SK090777 土層（南東から）

Fig.52　SK090776・090777 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK090777（Fig.52　Ph.84）　調査区東側に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 0.9m、深さは 0.4m を測る。炭化物、焼土を多量に含む下層（6 層）は北側から南側へ、上層は南側から北側へと堆積する。中央の縦方向の灰色粘質土は木根等による土層の乱れと考えらえる。

出土遺物（Fig.52）　469~475 は白磁である。469 は皿Ⅳ -2a 類、470 は皿Ⅵ -1a 類、471 は皿Ⅵ -2a 類で、内面に花文を描く。472 は碗Ⅷ類で見込みの釉を輪状に掻き取り、砂目が残る。473 は碗Ⅳ類、474 は碗Ⅴ -1a 類、475 は碗Ⅵ -b 類である。476 は龍泉窯系青磁小碗の底部片で、高台付近まで釉がかかる。高台内には目跡を有する。477 は褐釉陶器の蓋の小片で、中央に摘みを有すると思われる。灰色の比較的精良な胎土で、露胎は暗褐色を呈する。上面には黄褐釉がかかる。478 は磁州窯系の陶器の盤で、体部外面に鉄絵を描く。胎土は白色粒を多く含み、灰色を呈する。内外面に灰緑色の釉がかかり、底部には砂目が残る。479 は天目茶碗の口縁部片で、口縁下にわずかな段

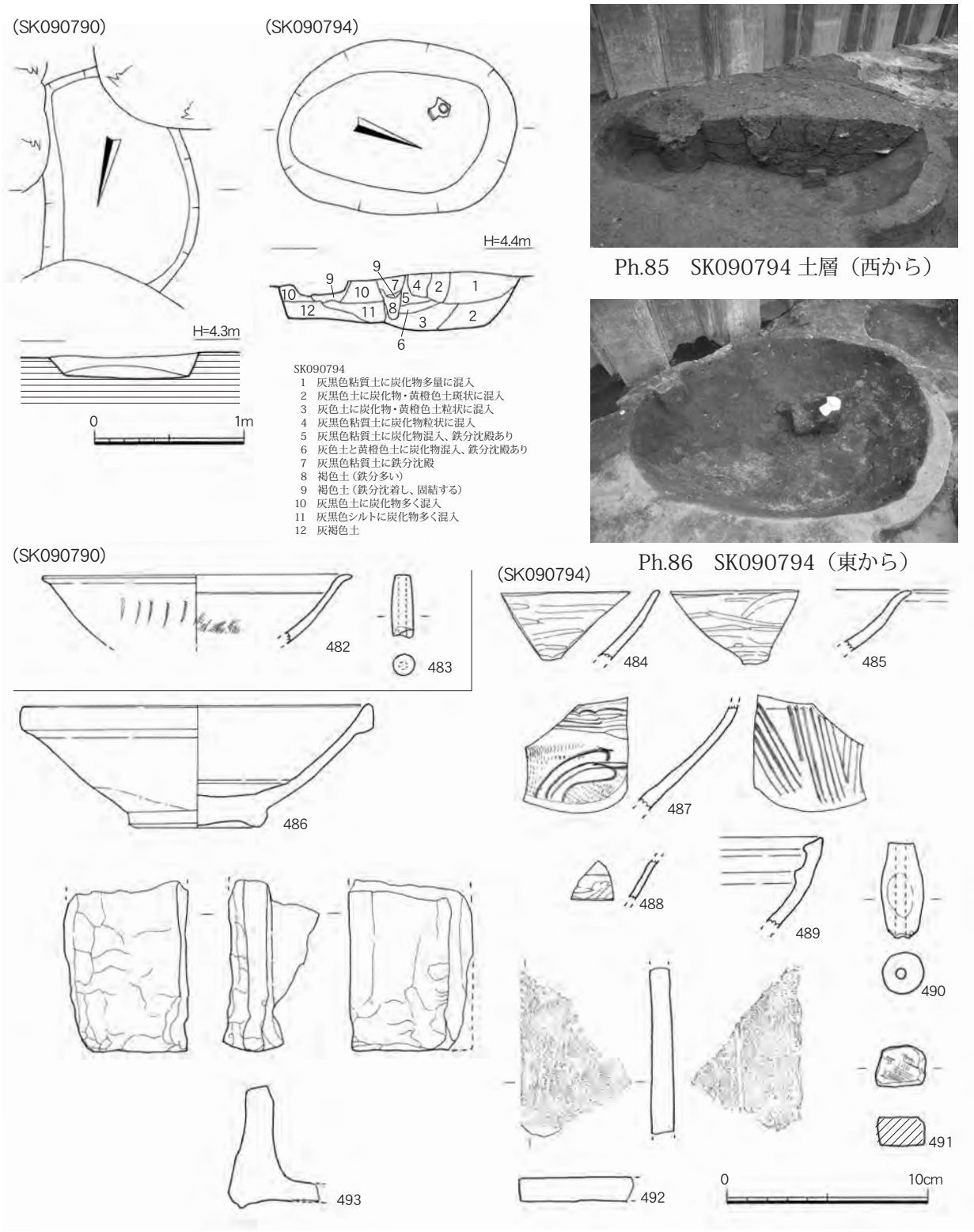


Fig.53 SK090790・090794 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

を有する。480 は無釉陶器の鉢で、内面に 1 条の突起をもつ。481 は瓦質の平瓦で、凸面は縄目叩きの後、縦方向の工具によるナデを施し、凹面には布目が残る。他に回転ヘラ切り底及び糸切り底の土師器、ガラス坩堝、粘土塊（Ⅲ -34 Fig.33-642）、珪石、鉄滓が出土する。以上の出土遺物から土坑の時期は 12 世紀中頃と考えらえる。

SK090790（Fig.53）　調査区東側に位置し、北側をSE090709、南側をSK090794に切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、長径1.5m以上、短径1.0m、深さは15cmを測る。底面は平坦で、覆土は炭化物を含む茶褐色土を主体とする。

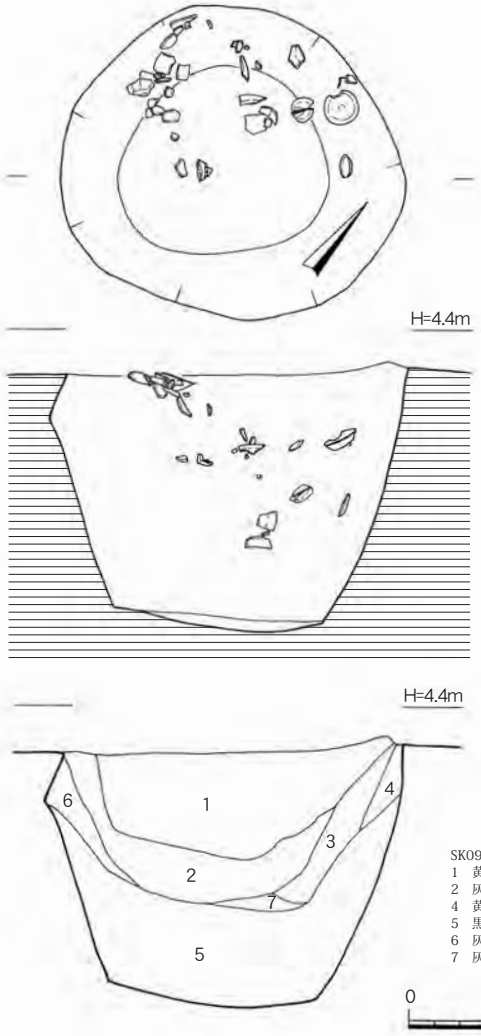
出土遺物（Fig.53）　482は白磁碗Ⅴ-4c類である。483は管状土錘で、エンタシス状を呈し、下半を欠損する。重さは現状で4.0gである。他に回転ヘラ切り底の土師器、ガラス坩堝、炉壁が出土する。土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

SK090794（Fig.53　Ph.85・86）　調査区東側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、南北方向1.6m、東西方向1.1mである。深さは最深で40cmを測る。覆土は2・12層が堆積したのち、一度中央部が掘削された状況を示す。上層では2か所に鉄分の沈着がみられる。

出土遺物(Fig.53)　484は瓦器椀の口縁部片で、疎らな磨きを行う。485は畿内系の緑釉陶器か。微粒の白色砂粒、金雲母を含む灰色の胎土で、明緑色の釉がかかる。口縁は端部でわずかに外反する。486は白磁碗Ⅳ-1b類、487は同安窯系青磁碗Ⅰ類で、外面に細かい縦の刷毛目、内面に箆状の施文具による花文と櫛の先端で押したジグザグ状の点描文を有する。488は龍泉窯系青磁の小片で、内面には箆で花文が描かれる。489は無釉陶器の鉢で、内面に2条の突起を有する。490は管状土錘で、下端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形品である。重さは15.7gである。491は滑石系の石材で、やや青味を帯びた灰黒色を呈する。擦痕が多く残り、砥石として使用されたものか。直方体で、重さは13.5gを量る。492は土師質の平瓦で、両面ともに工具による強いナデを行う。493は土師質の移動式竈の焚口部の基部である。他にガラス小玉3点（Ⅲ-34 Fig.26-586)、珪石、鉛が出土する。土坑の時期は12世紀中頃と考えられる。

SK090802（Fig.54　Ph.87・88）　調査区中央に位置し、南側は矢板に切られる。平面プランは円形を呈し、直径1.2m、深さは1.0mを測る。底面は東側がやや低く、壁の傾斜は急である。西側の壁はややオーバーハングする。覆土は上層が炭化物、焼土をブロック状に含む黄橙色粘質土、中層が黄灰色土、下層が黒褐色粘質土である。土師器を主とした遺物が大量に出土し、上層・中層 は図面のとおりであるが、下層からも図示できなかったが土師器がまとまって出土する。

出土遺物（Fig.54・55）　494~505は土師器である。494~502は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は9.0~9.9cmを測る。500以外は全て外底部に板状圧痕を有する。500・502の底部ヘラ切りは雑で、渦巻き状の沈線が入る。それ以外の494~499と501は調整等が類似することから、同一工人によって作られたものと思われる。口縁は内湾気味に立ち上がり、丁寧なヘラ切りが行われ、底部内面中央部は平行なナデで仕上げる。胎土に少量の金雲母を含み、色調は橙色である。500の胎土には多量の赤褐色粒が含まれ、色調は明橙色である。503~505は丸底坏で、口径は14.2~15.0cmを測り、505は外底部に板状圧痕を有する。色調はすべて橙色である。503の内面にはコテ当て痕が残る。506は黒色土器B類の椀で、内外面太い磨きを行う。507は防長産の緑釉陶器で、橙色の軟質な胎土に明緑色の釉がかかる。508は滑石製の容器の破片である。方形の形状で、厚さ2.0cmの素材の上面を深さ0.8cmほど凹状に窪ませる。509は瓦玉で、褐釉陶器の体部を使用する。丁寧に周縁部を打欠いて整形し、重さは6.3gである。510~518は白磁である。510は合子の身で、橙色の胎土に濃白色の光沢をもつ釉がかかる。受部から内面は露胎である。511は皿Ⅱ-1a類、512は小碗で、内面に箆で花文を描く。513~515は碗Ⅳ類、516・517は碗XIII-1b類、518は壺の底部片か。519~523は施釉陶器の壺である。519は口縁部で、口縁は粘土を折り曲げて肥厚させる。黒色粒、白色粒を多量に含む黒色の胎土に濃緑色の釉がかかる。520は軟質の灰橙色の胎土に黄味を帯びた濃緑色釉がかかる。521は肩部片で、外面に箆状の施文具で、花文が描かれる。濃緑色の釉がかかるが、被熱され、釉が飛んでいる。522



Ph.87　SK090802 遺物出土状況（南東から）

Ph.88　SK090802 土層（南東から）

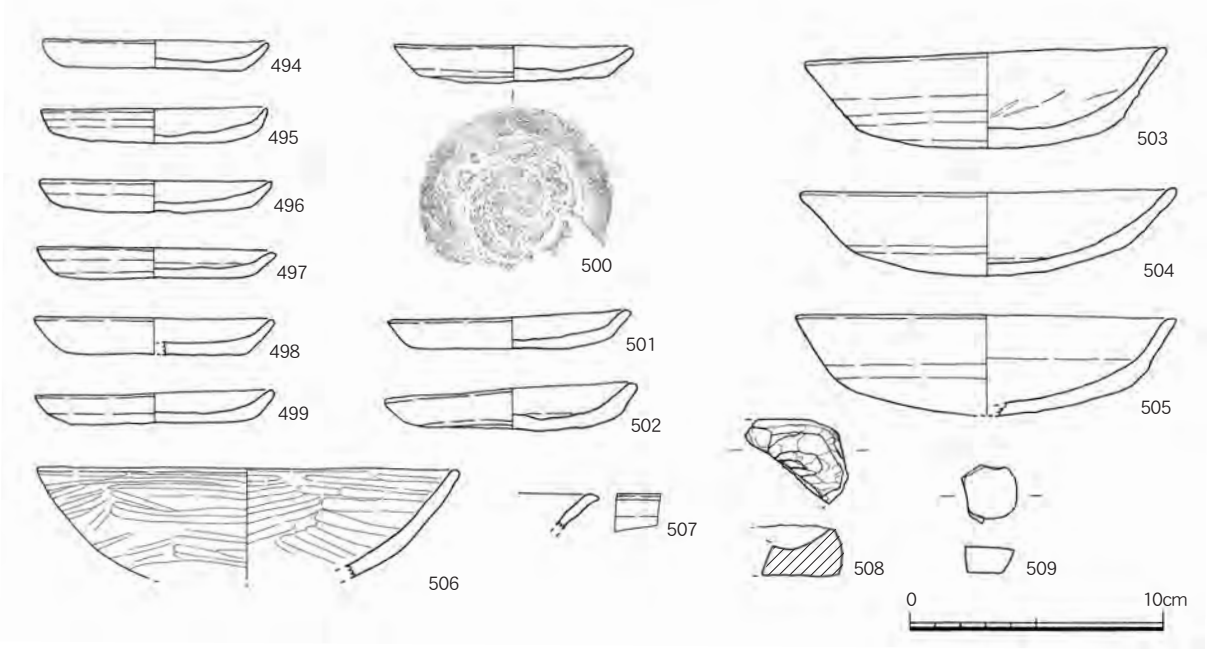


Fig.54　SK090802 実測図（1/30）および出土遺物実測図①（1/3）

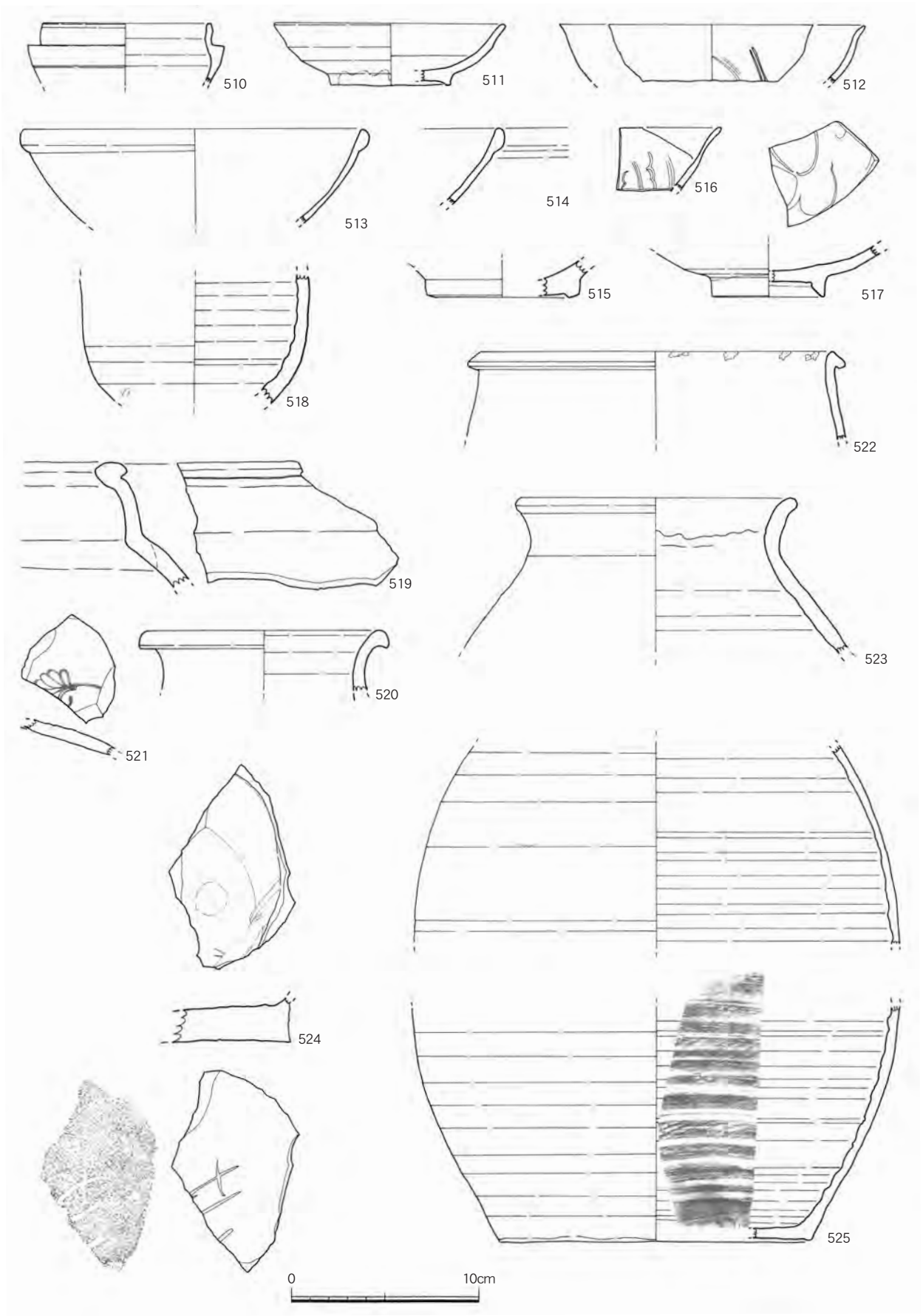


Fig.55　SK090802 出土遺物実測図②（1/3）

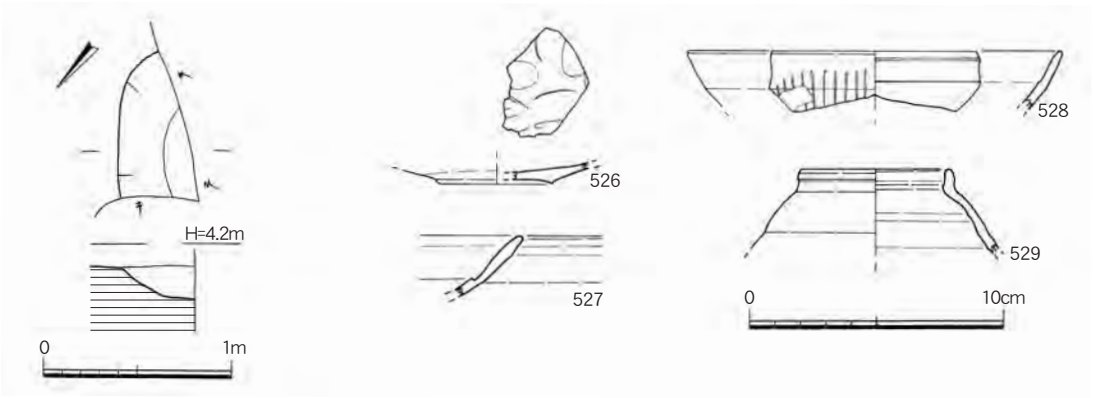


Fig.56　SK090814 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

は暗灰緑色の釉がかかり、口縁上部に砂目が残る。523 は多量の大粒の白色砂粒を含む暗紫色の胎土に緑色を帯びた黒色釉がかかる。524 は無釉陶器の底部片で、外底部にヘラ記号が残る。525 は高麗陶器の甕で、胎土は粘性を帯びた暗褐色を呈し、内外面ともに色調は暗灰色である。仕上げは横方向の強い回転ナデで行われるが、外面の叩き、内面の当て具痕がかすかに残る。他にガラス坩堝、不明鉄器が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半と考えらえる。

SK090814（Fig.56）　調査区東側に位置し、西側は SK090771 に切られ、南側は調査区外へ延びる。深さは 20cm を測る。覆土は灰褐色土を主体とする。

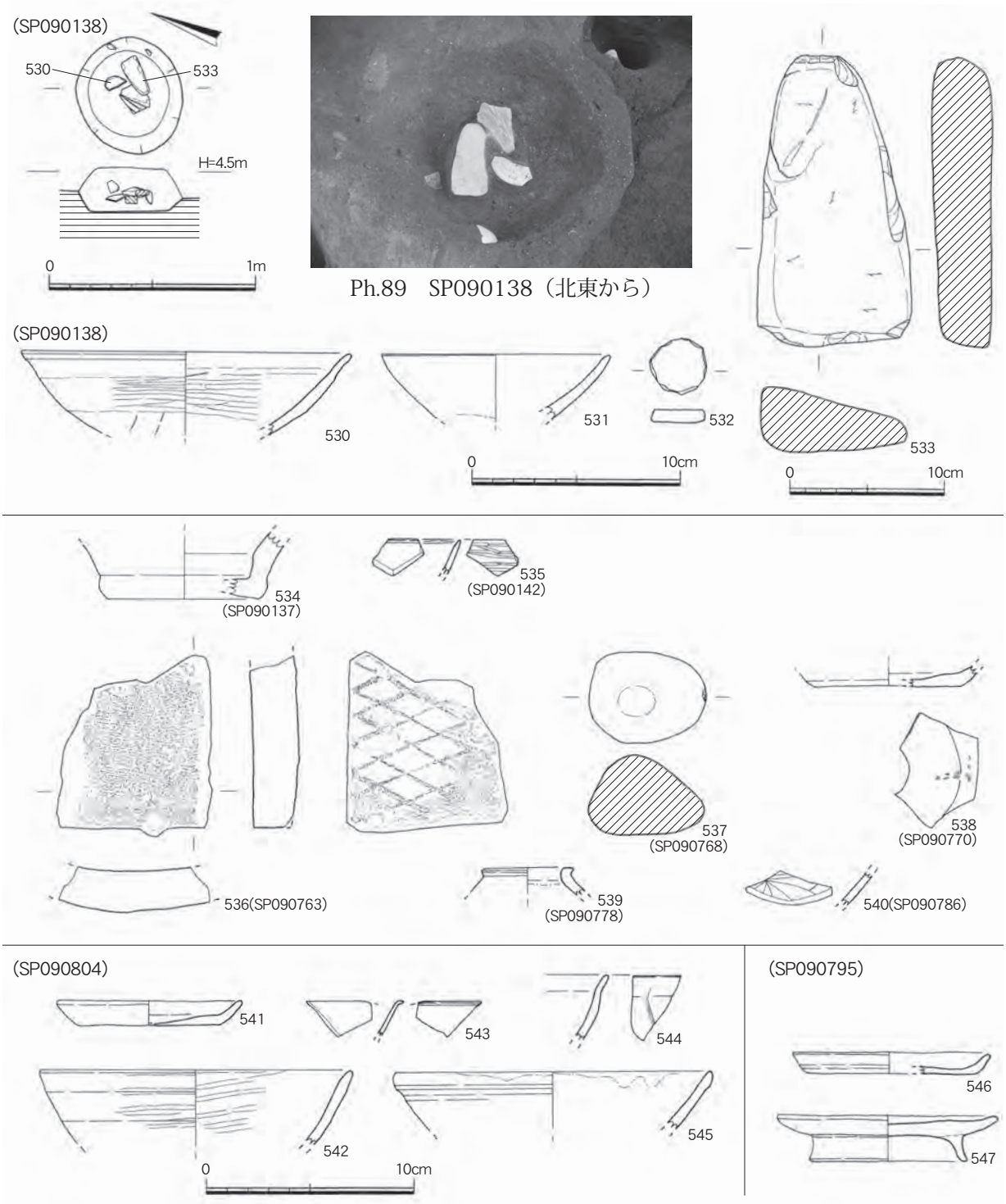
出土遺物（Fig.56）　526・527 は白磁である。526 は皿Ⅵ-2 類、527 は皿Ⅵ-1a 類である。528 は同安窯系青磁碗の口縁部片、529 は無釉陶器の小壺の口縁部片で、砂粒を含む暗橙色の胎土に、色調は暗紫褐色を呈する。他にガラスの坩堝、炉壁等が出土し、土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

（3）ピット（SP）

SP090138（Fig.57　Ph.89）　調査区西側に位置する。平面プランは直径 50cm の円形を呈し、深さは 22cm を測る。上層より敲石や瓦器椀が出土する。覆土は炭化物を含む灰褐色土である。

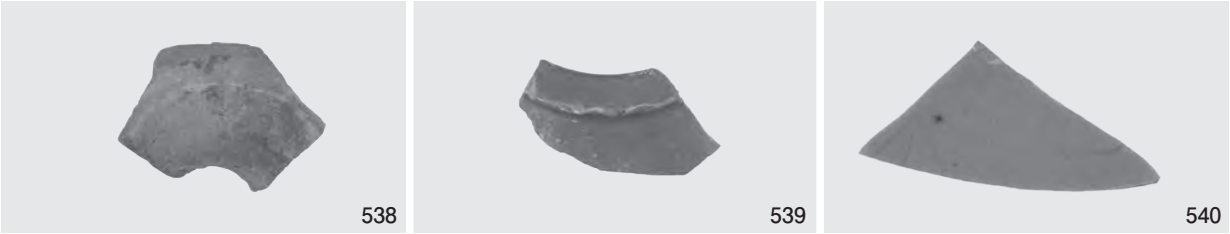
出土遺物（Fig.57）　530 は瓦器椀、531 は白磁の小碗で、細かい貫入が入る。532 は円盤状土製品で、土師器の破片を打ち欠いたものと思われる。重さは 5.0g を量る。533 は灰緑色の変成岩で、敲石、砥石として使用する。重量は 1264.65g である。

SP 出土遺物（Fig.57　Ph.90）　534 は SP090137 出土の無釉陶器の壺の底部片で、白色砂粒を多量に含む胎土で、色調は暗褐色を呈する。535 は SP090142 出土の楠葉型の黒色土器 B 類の椀で、口縁内面に沈線が巡る。内外面ともに細かい横方向の磨きを施す。536 は SP090763 出土の須恵質の平瓦で、凸面は格子目叩き、凹面には細かい布目が残り、側面はヘラナデを施す。537 は SP090768 出土の石英で、先端に敲打痕が残る。重さは 135.59g を量る。538 は SP090770 出土の回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、底部から体部下半にかけて、墨が付着する。539 は SP090778 出土の越州窯系青磁の無頸壺の口縁部片である。540 は SP090786 出土の龍泉窯系青磁の小片と思われる。内面には細線で文様が描かれる。541~545 は SP090804 出土で、541 は回転糸切り底の土師器の小皿である。542 は黒色土器 B 類の椀の口縁部片で、内外面ともに疎らな磨きを施す。543 は青白磁の碗、544 は白磁の小碗で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。外面に片彫りで文様を描く。545 は白磁碗Ⅳ類である。546・547 は SP090795 出土で、546 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿、547 は高台付皿で、高台は高く、細い。胎土は大粒の白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。



Ph.89　SP090138（北東から）

Fig.57　SP090138 実測図（1/30）および第 1 面 SP 出土遺物実測図①（1/3・1/4）



Ph.90　第 2 面 SP 出土遺物

4）第３面の調査（Fig.58　Ph.91・92）

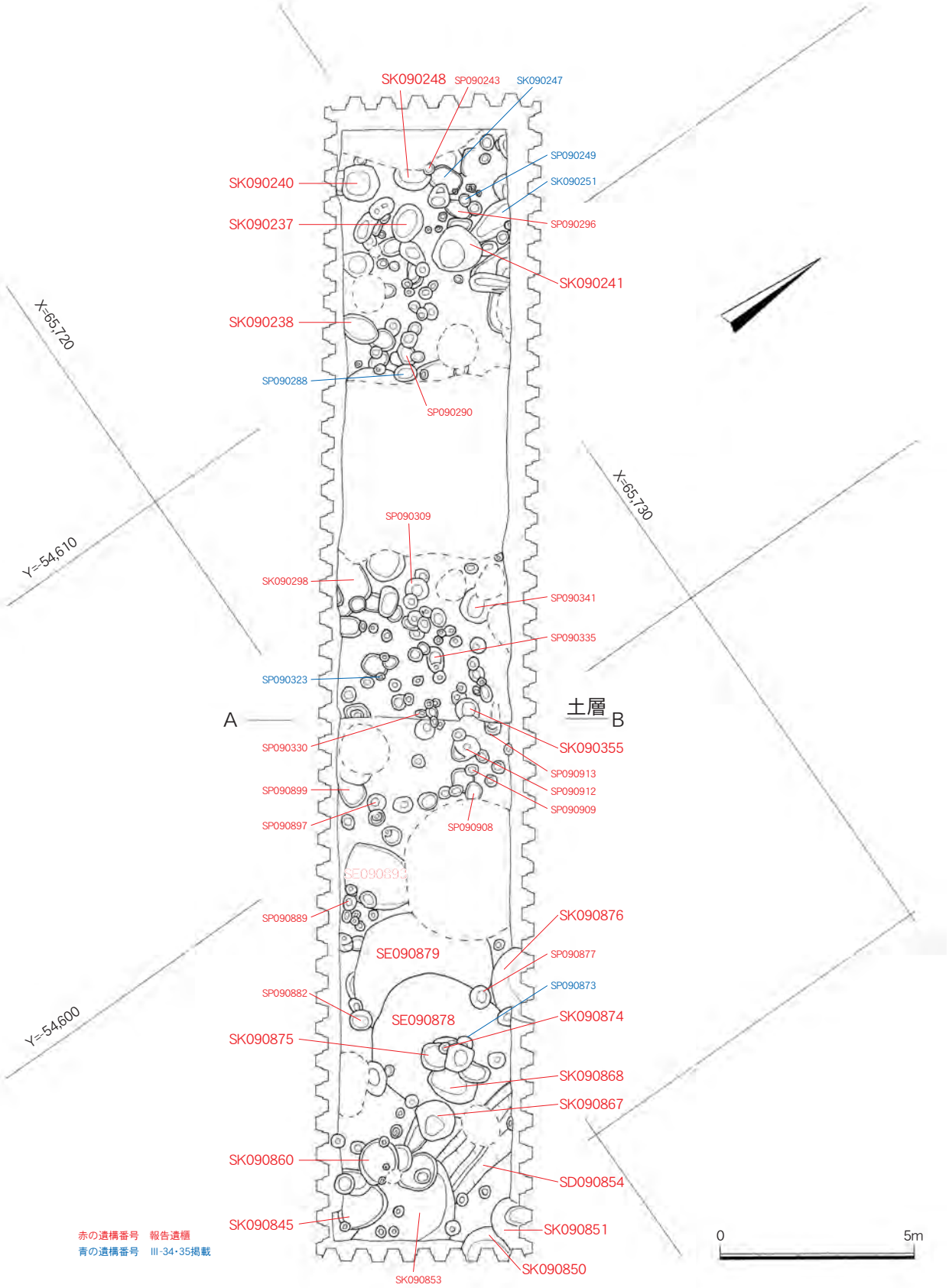
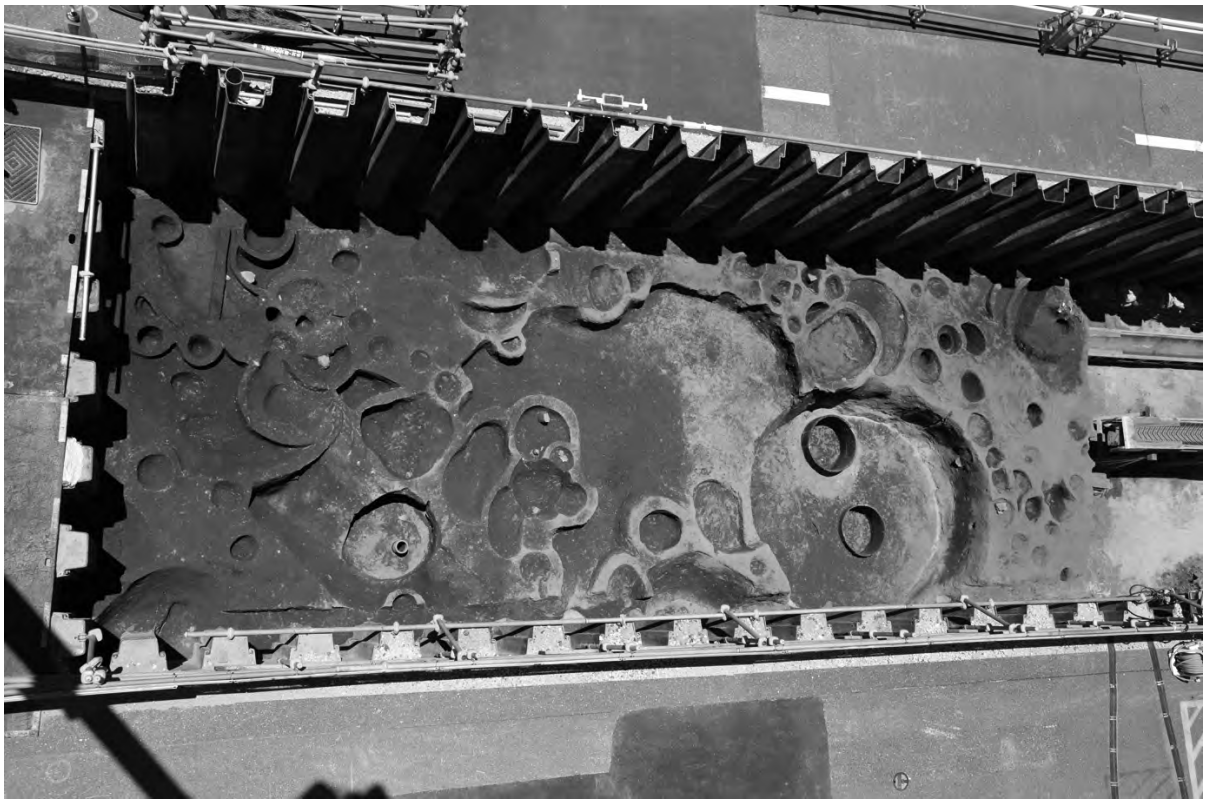
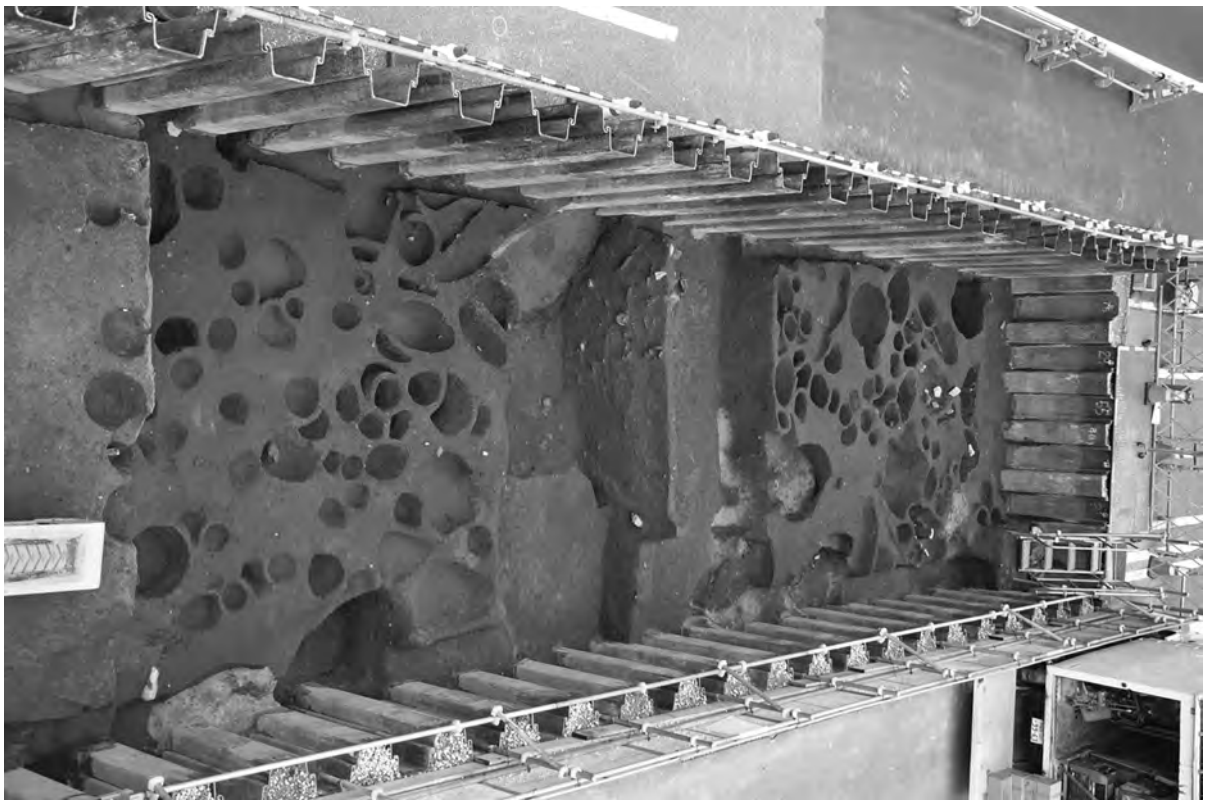


Fig.58　第３面全体図（1/150）



Ph.91　東側３面全景（南から）



Ph.92　西側３面全景（南西から）

第 3 面は道路面から約 1.4m 下の灰色粘土が混入する暗茶褐色土の上面で検出した。標高は西側が 4.0m、東側は 3.8m を測る。検出した主な遺構は井戸 2 基、溝 1 条、埋葬遺構 1 基、土坑 15 基、ピットである。遺構の中心は 11 世紀後半から 12 世紀前半にかけてで、井戸もこの時代のものである。井側に桶を用い、水溜に曲物を据える。また、古代の溝が 1 条と古墳時代前期の埋葬遺構を検出した。人骨は散乱した土器群とともに検出した。

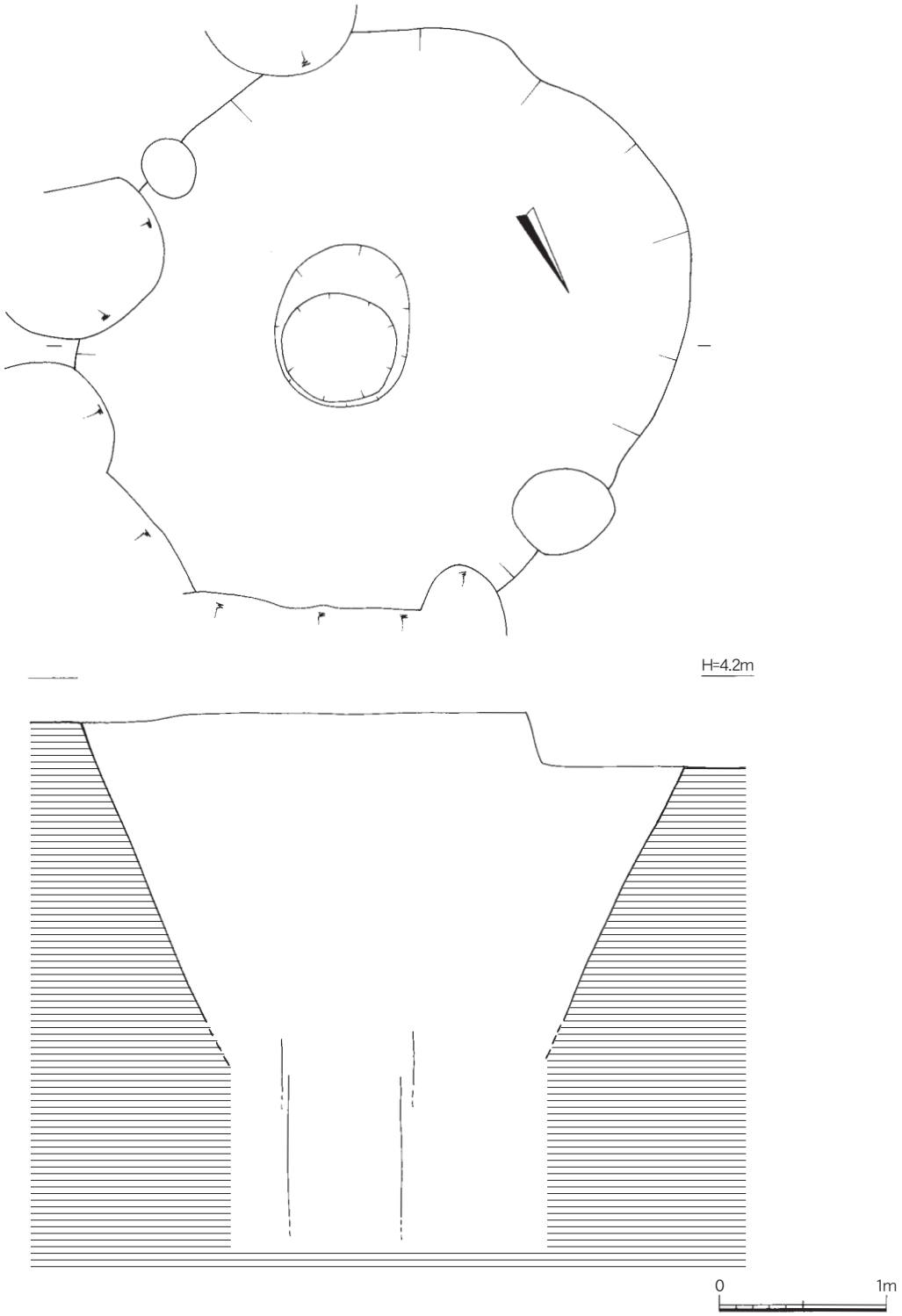
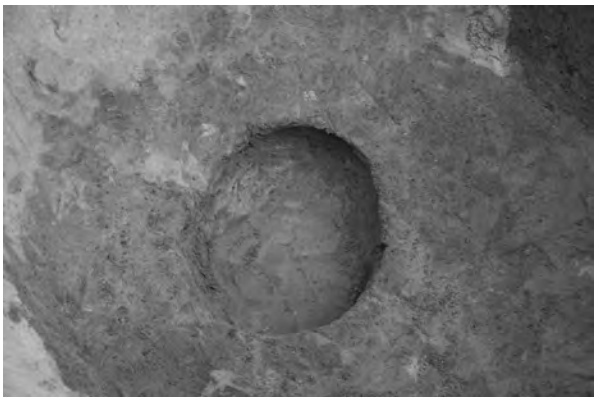


Fig.59　SE090878 実測図（1/40）

Ph.93　SE090878 井側（北東から）



Ph.94　SE090878 井側（北東から）

Ph.95　SE090878 井側内下層遺物（北から）

（1）井戸（SE）

SE090878（Fig.59　Ph.93~95）　調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延びる。掘方の平面形は直径 3.7m の円形を呈する。壁は傾斜を急にし、そのまま底面に到る。井側はやや東寄りに設置され、検出面より 2.0m 下、標高 2.0m で確認した。また、検出面では長径 1.0m、短径 0.8m の楕円形を呈するが、20cm ほど掘削すると、直径 65cm を測る円形となる。縦方向の板目を一部確認したので、井側には桶を使用したと考えられるが、遺存状況は非常に悪い。標高 0.8m まで掘削したが、それ以上は崩落の危険があるため、水溜等の確認までには至らなかった。井側からは、SK090771 同様、ガラスの製造関連遺物が多く出土する。なお、AMS 法による放射性炭素年代測定を行った（付編 4）。

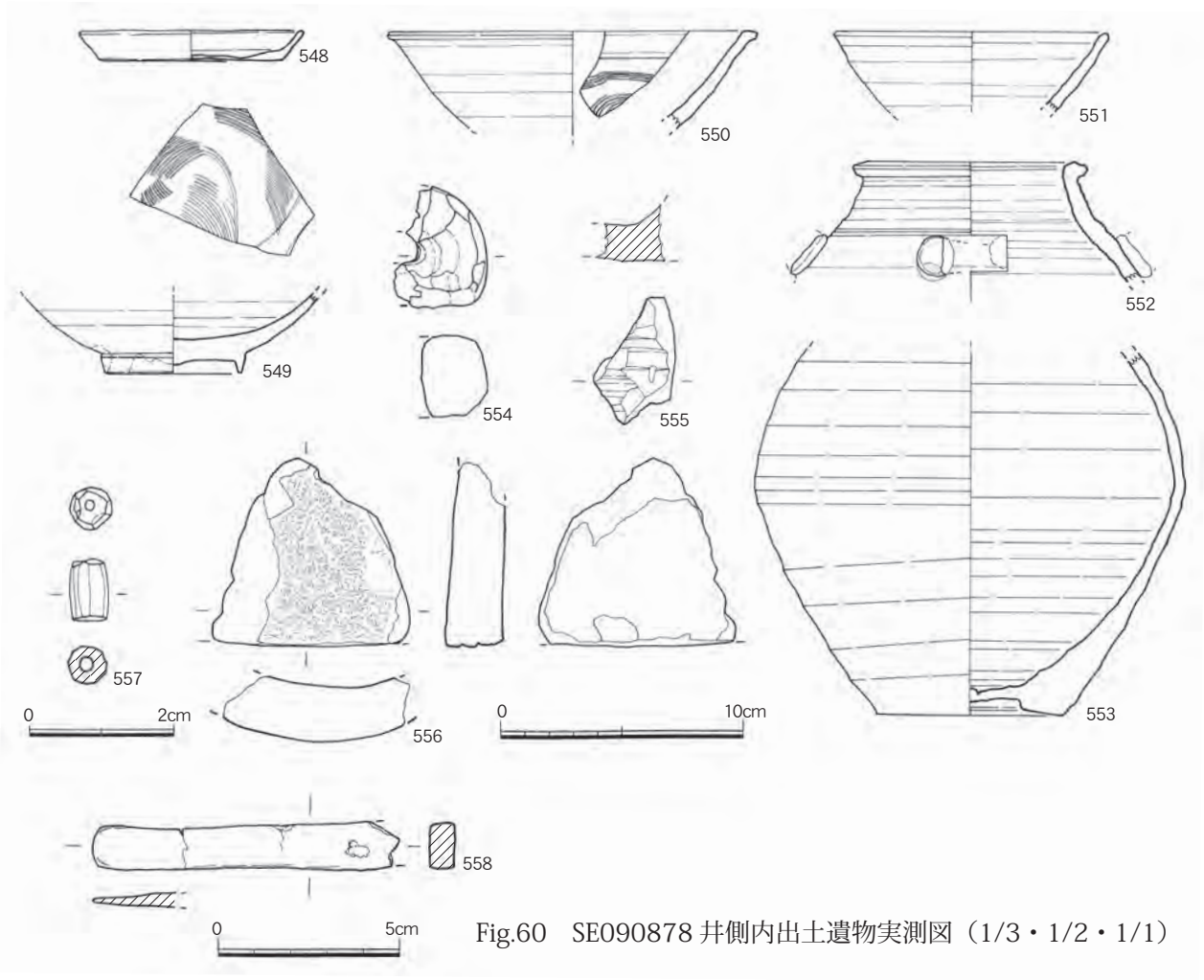


Fig.60　SE090878 井側内出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）

Ph.96　SE090878 出土遺物①

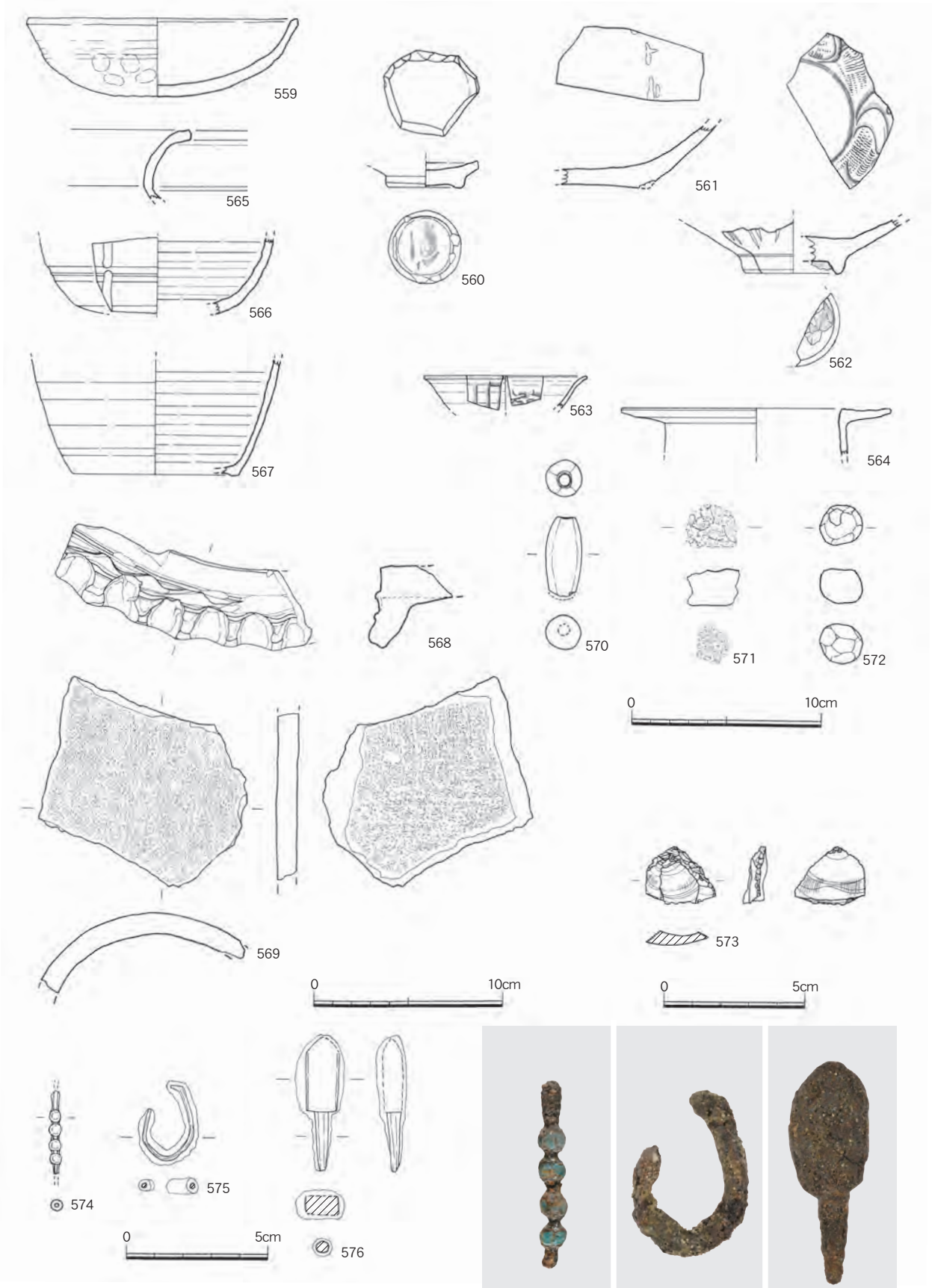


Fig.61　SE090878 掘方出土遺物実測図（1/3・1/2）

Ph.97　SE090878 出土遺物②

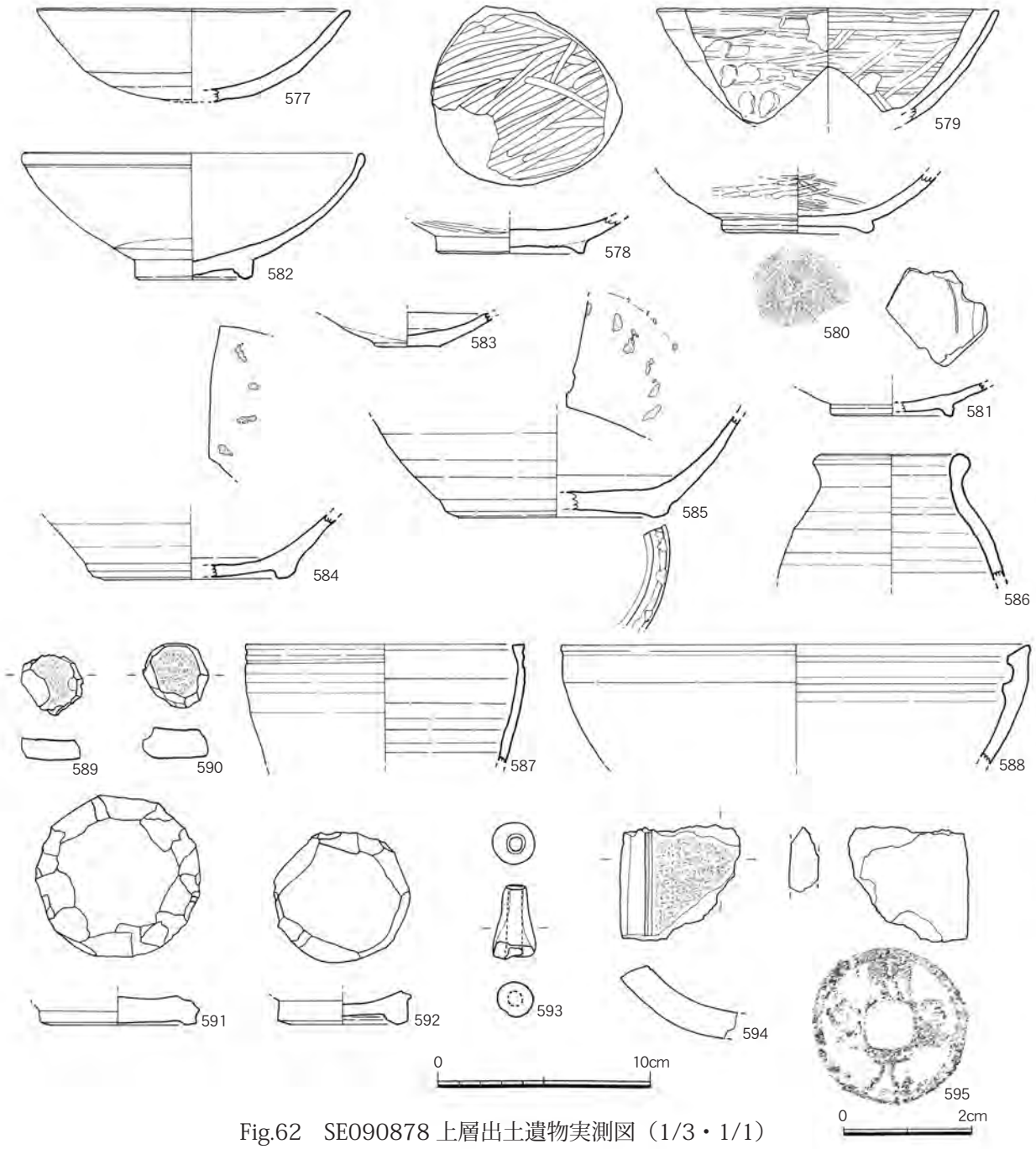


Fig.62　SE090878 上層出土遺物実測図（1/3・1/1）

出土遺物（Fig.60~62　Ph.96）　548~558 は井側内から出土した遺物である。548 は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径 9.0cm、器高 1.2cm を測る。胎土に赤褐色粒、金雲母を含み、色調は橙色である。549・550 は白磁碗Ⅴ -4b 類、551 は天目茶碗の口縁部片で、口縁下に段を有する。濃茶色の釉がかかり、段より下位は黒色を呈する。胎土は明褐色の軟質の粘土である。552・553 は施釉陶器である。552 は耳壺で、肩部に横形の耳を付ける。褐色の胎土に黄褐釉が破片の内外面にかかる。553 は壺の底部片で、底部は蛇ノ目状に削り出される。胎土は黒色粒を含む灰色の粘土で、内面と体部上半に黄味を帯びた濃緑色の釉がかかる。露胎は灰色および灰褐色に発色する。554 は土錘と思われ、1/2 を欠損する。現状で長さ 5.0cm、幅 2.8cm、厚さ 3.0cm を測る。重さは 57.05g である。555 は滑石製石鍋の底部片である。外面には縦方向のノミ痕が残る。556 は瓦質の平瓦で

ある。凸面はナデで仕上げ、凹面は磨滅が著しいが、布目痕がわずかに確認できる。557 は碧玉の管玉未成品である。長さ 0.7cm、幅 0.5cm を測り、ややエンタシス状を呈する。断面は六角形を呈しており、稜線が残る。片面穿孔で、孔径は 2.0mm と 1.0mm を測る。また、下面ではもう一か所、0.5mm の孔を深さ 2.0mm 程度穿つ。石材の色調は濃緑色を呈し、中に縦方向の白線ラインが多く見られる。重さは 0.4g である。558 は鉄製の鑿である。基部を欠損し、断面方形状の歯幅は 1.1cm を測る。559~576 は掘方出土の遺物である。559 は丸底坏で、復元口径 14.1cm、器高 4.1cm を測る。胎土は精良で、色調は白橙色を呈する。底部内外面に煤が付着する。560 は白磁の小碗の底部片を使用した瓦玉で、部分的に縁辺が丁寧に打ち欠かれる。打欠きが全周していないことから、未成品かと思われる。高台内には墨書が残る。重さは 29.3g を量る。561 は越州窯系青磁の碗である。見込みには目跡が残る。562 は初期の龍泉窯系青磁碗で、外面には片彫風の櫛刀で縦線を施し、内面には片彫花文と櫛先による点描文を密に入れる。濃緑色の釉が高台内までかかり、高台内には黄色の胎土目が残る。563 は耀州窯系青磁碗の口縁部片である。外面には片彫風の櫛刀で縦線を均等に施し、内面には片彫で唐草文を描く。564 は青白磁の壺の口縁部片である。微細な黒色粒を含む白色の胎土に青味を帯びた白色釉がかかる。565 は高麗陶器の口縁部片である。暗紫灰色の粘性のある胎土で、色調は灰黒色を呈する。566・567 は施釉陶器である。566 は壺の体部片で、縦方向に窪みが入り、瓜形になると思われる。褐色の胎土に濃茶褐色の釉が外面にかかる。567 は壺の底部片で、灰色の胎土に暗緑色の釉がかかる。露胎は明橙色を呈する。568 は押圧波状文の軒平瓦で、瓦当部のみ出土した。3 重の重弧文を作り出し、中央の弧文をヘラ状工具を用いて押圧し、波状とする。下端も波状に押圧を加えた後、四分割するため、側面には分割時の切断面が残る。瓦質で、灰色を呈する。569 は土師質の丸瓦で、明橙色を呈し、焼成は良好である。凸面はヘラ状工具による縦方向の強いナデで調整され、凹面には細かい布目が残る。570 は管状土錘で、一部欠損する。現状で重さ 12.09g を量る。571 は須恵質の平瓦を用いた瓦玉で、凸面は叩き、凹面には細かい布目が残る。重さは 15.01g である。572 は土玉で、球形とならず、面が残る。8.52g を量る。573 は黒曜石で、使用痕のある剥片である。不純物、白色砂粒を含み、漆黒色を呈する。長さ 2.05cm、幅 2.45cm、厚さ 0.5cm、重さは 2.8g を量る。背面右縁辺と下端に剥離を施す。574 は鉄の芯棒に溶けたガラスを巻き付けた製作工程の資料である。芯棒の断面は径 1.5mm の円形で、長さ 2.9cm が残る。ガラス小玉はカリ鉛ガラスで、青緑色を呈し、直径 4.0mm 程度のものが 1.5~2.0mm の間隔で、4 点巻き付く。詳細についてⅢ-34 Fig.12-330 を参照。575 は返りを有さない、鉄製の釣針で、断面は 1.5mm 程度の円形を呈する。576 は定角式鉄鏃で、身の断面は方形、茎の断面は円形を呈する。関の稜線は非常に明瞭である。577~595 は上層出土の遺物である。577 は丸底坏で、復元口径 14.6cm、器高 4.3cm を測る。578 は黒色土器 A 類の椀の底部片である。579・580 は瓦器椀で、579 の内面と外面上半は磨きを施し、下半には指オサエが残る。色調は灰黒色で、銀化する。580 は底部片で、高台内にヘラ記号が残る。581 は畿内産の緑釉陶器で、灰色の精良な胎土に明緑色の釉が内面と外面は高台付近までかかる。輪状高台を有し、回転ナデで調整される。582・583 は白磁で、582 は碗Ⅱ-1 類で、化粧土が施され、黄白色の釉がかかる。583 は皿Ⅵ-1a 類である。584・585 は越州窯系青磁で、584 は碗Ⅰ-2a ア類の底部片で見込みに目跡が細く環状に並ぶ。585 は壺の底部片で、高台は内面をわずかに削りだす。内面見込みに細い目跡が環状に並び、高台端部外面は釉を削り取る。586・587 は施釉陶器で、ともに濁緑色の釉がかかる。588 は無釉陶器の捏鉢で内面に 2 条の突起をもつ。589~592 は瓦玉である。589 は須恵質の平瓦、590 は土師質の平瓦、591 は白磁碗Ⅳ類、592 は白磁碗Ⅱ類の底部片を使用し、整形する。重さは 9.25g、12.62g、102.85g、63.18g である。593 は管状土錘で半分欠損する。現

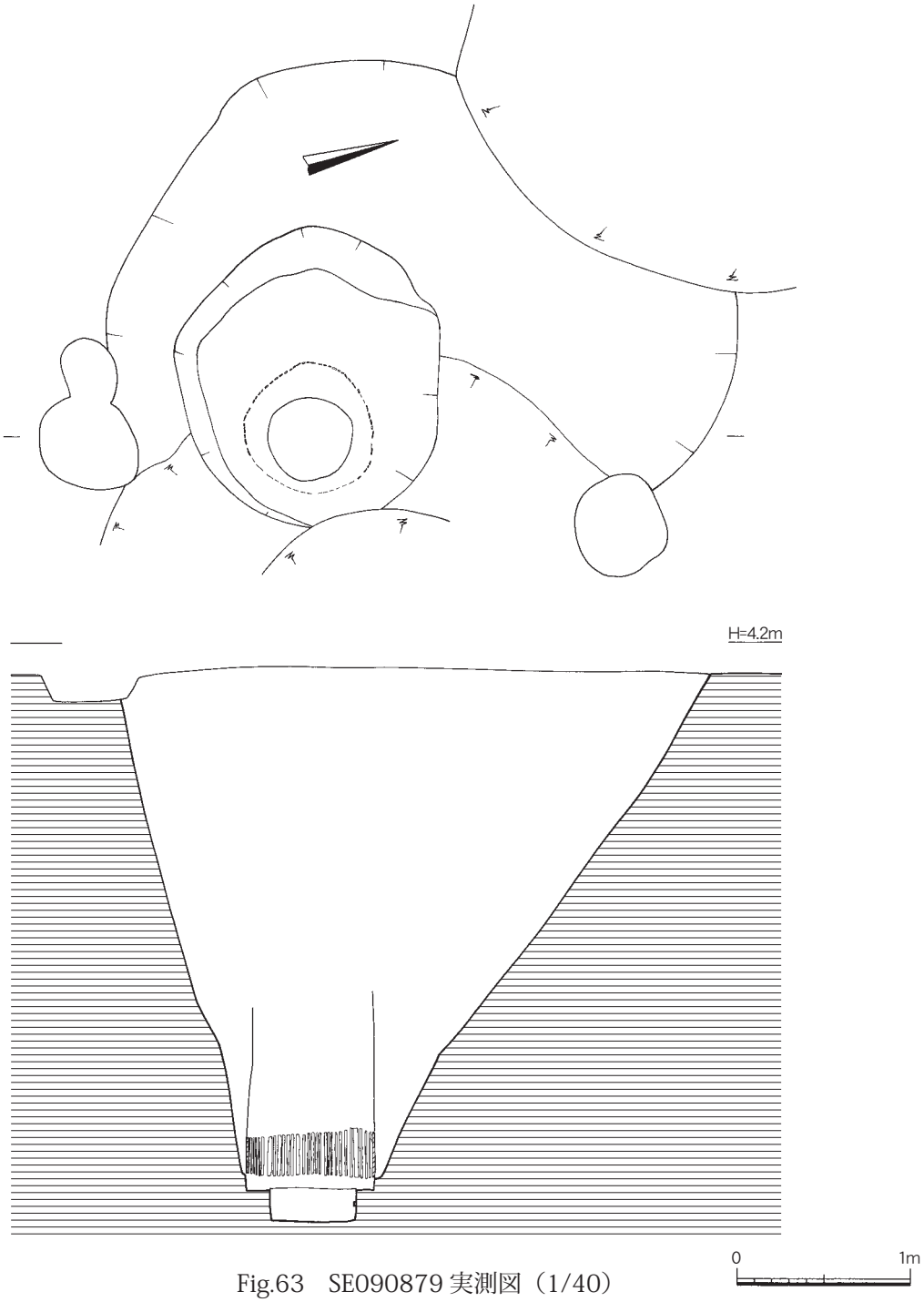


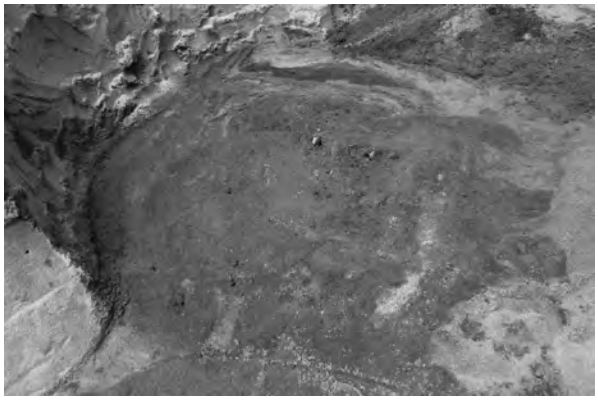
Fig.63　SE090879 実測図（1/40）

状で重さは 8.81g を量る。594 は土師質の平瓦で、明橙色を呈し、焼成は良好である。凸面はヘラ状工具による縦方向の強いナデで調整され、凹面には細かい布目が残る。595 は銅銭で、「開元通寳」（初鋳年：621 年）である。他にガラス玉、ガラス滓、ガラス坩堝、鉛、珪石、炉壁、粘土塊等、ガラスの製造に関する遺物が多量に出土する（Ⅲ -34 Fig.12）。井戸の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えらえる。

SE090879（Fig.63　Ph.98~105）　調査区西側に位置し、東側は SE090878、西側は SE090709 に切られる。掘方の平面プランは略円形を呈し、直径約 3.4m を測る。井側は南東寄りに作られ、そのため、南側と東側の壁の傾斜は急である。井側は標高 2.2m で直径 70cm の円形プランを確認した。覆

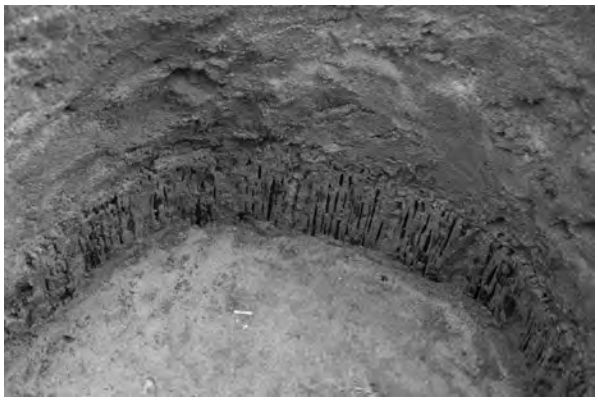
Ph.98　SE090879・091125 井側（北東から）

Ph.99　SE090879 井側（北東から）

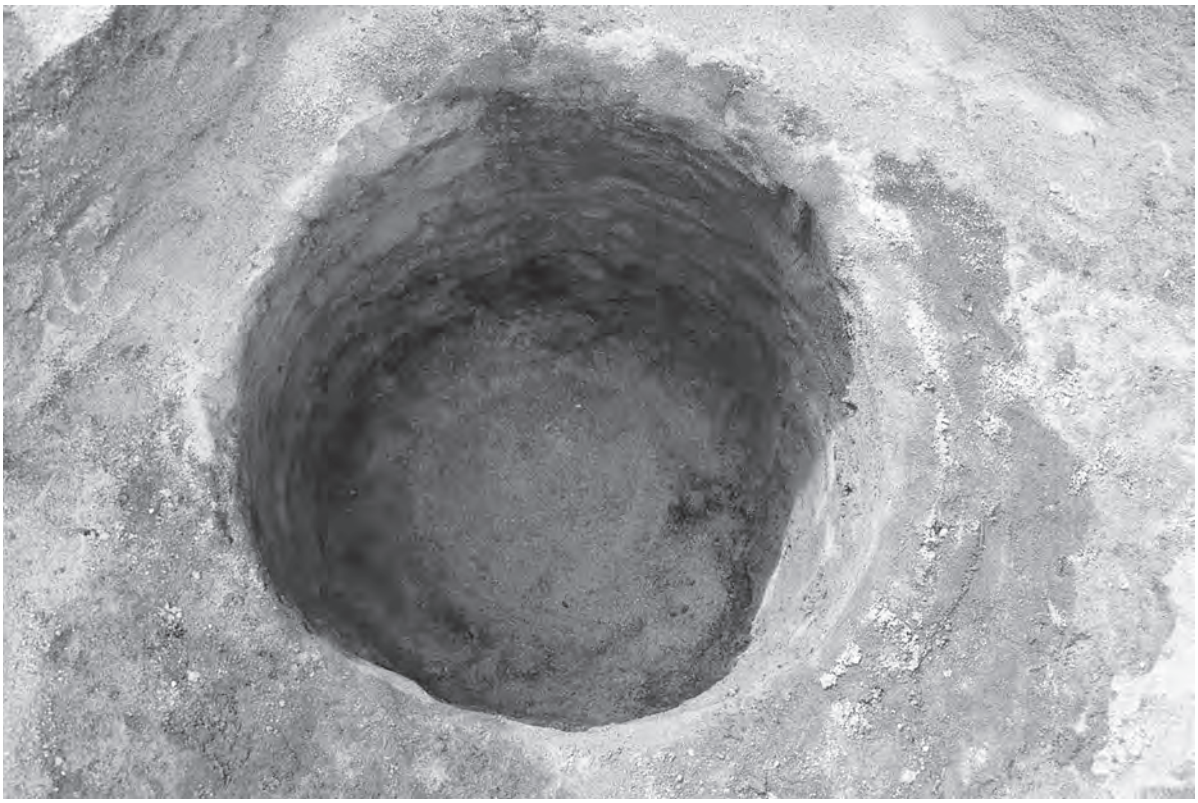


Ph.100　SE090879 井側確認状況（南東から）

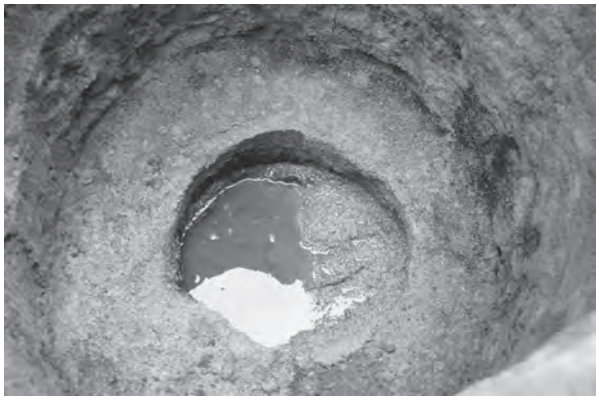
Ph.101　SE090879 井側桶木質（北東から）



Ph.102　SE090879 井側桶木質（北東から）



Ph.103　SE098079 井側内曲物（北西から）



Ph.104　SE090879 井側内曲物（南西から）

Ph.105　SE090879 井側内曲物（南西から）

Ph.106　SE090879 出土遺物①

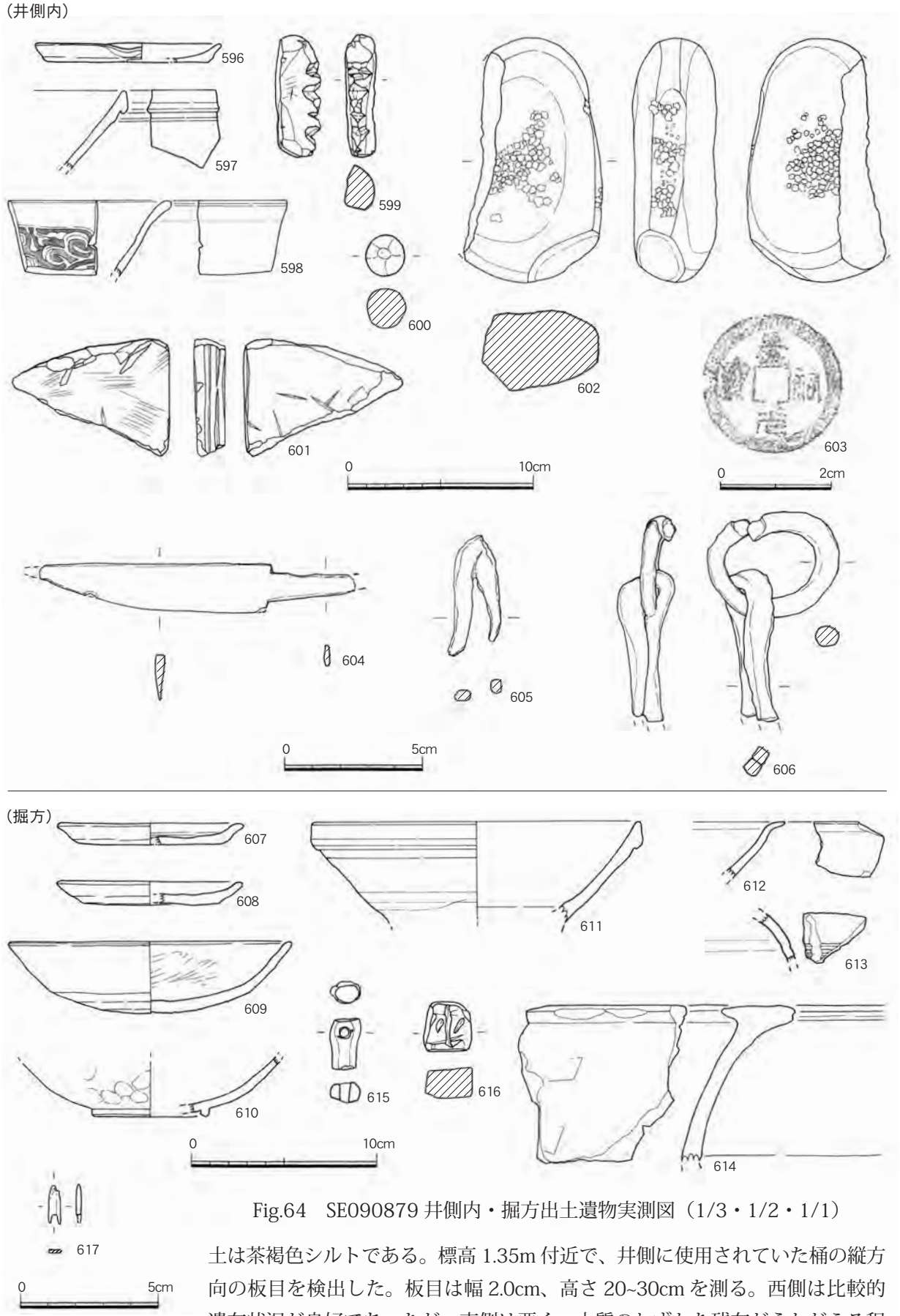


Fig.64　SE090879 井側内・掘方出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）

土は茶褐色シルトである。標高 1.35m 付近で、井側に使用されていた桶の縦方向の板目を検出した。板目は幅 2.0cm、高さ 20~30cm を測る。西側は比較的遺存状況が良好であったが、東側は悪く、木質のわずかな残存がうかがえる程度である。桶の直径は 75cm を測る。標高 1.0m 付近まで桶が設置され、その

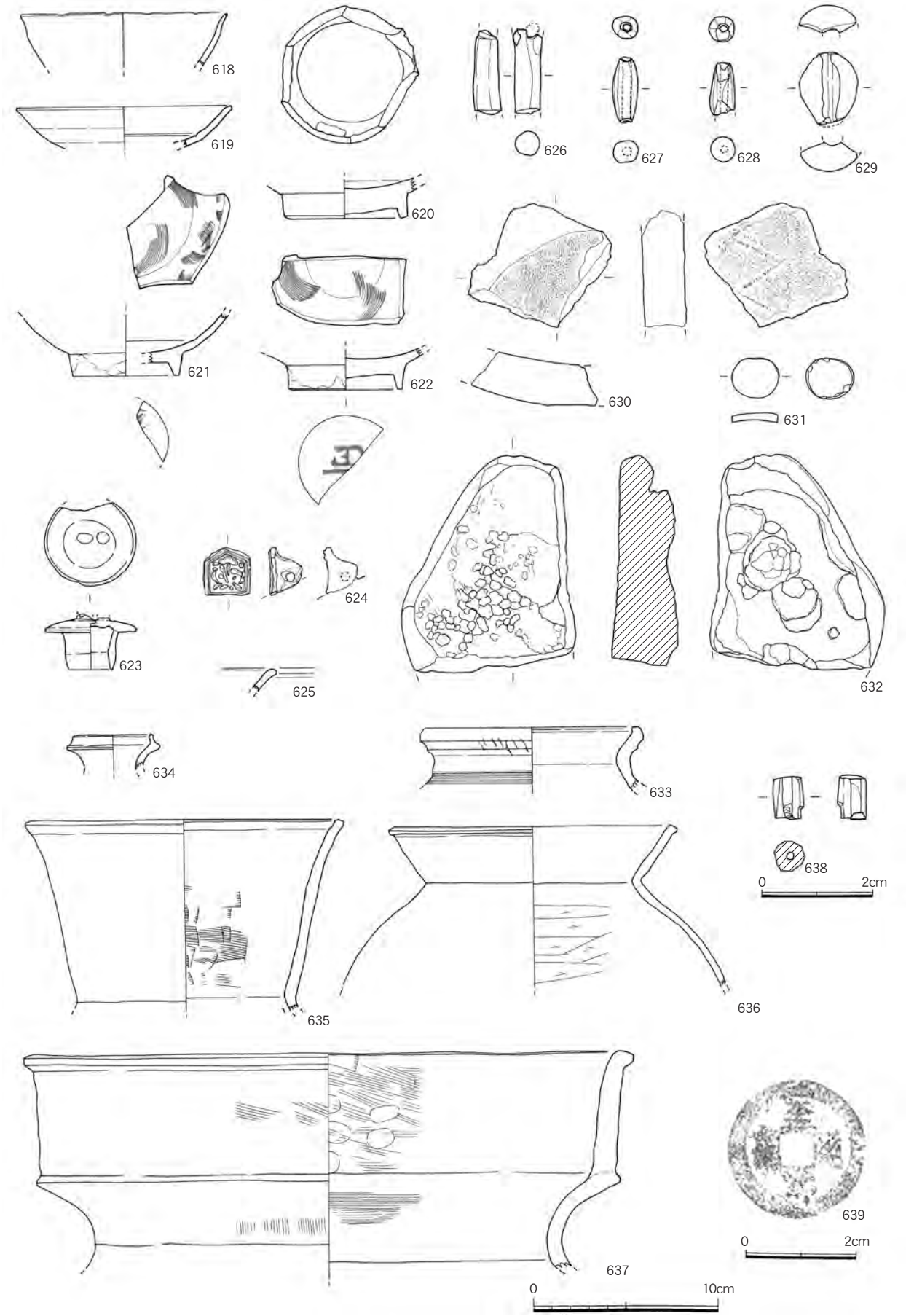


Fig.65　SE090879 上層出土遺物実測図①（1/3・1/1）

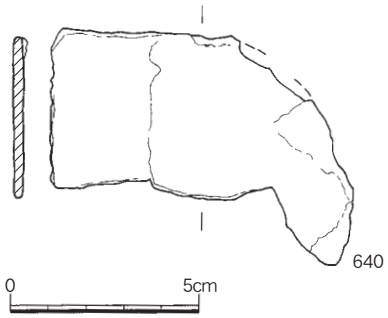


Fig.66　SE090879 上層出土遺物実測図②（1/2）

Ph.107　SE090879 出土遺物②

下から直径 48cm の円形の水溜を確認した。ここでは横方向の木質を検出したことから、直径 48cm、高さ 20cm の曲物が使用されたと考えらえる。覆土は灰色砂である。水溜を掘削すると、標高 0.9m で湧水した。水溜からは完形のガラスの丸玉、ガラスの製造関連遺物が多量に出土する（Ⅲ -34 Fig.13 ～ 16）。また、中層からはイネの炭化種子が出土した（付編 3）。なお、AMS 法による放射性炭素年代測定を行った（付編 4）。

出土遺物（Fig.64~66　Ph.106）　596~606 は井側内から出土した遺物である。596 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、復元口径 8.5cm、器高 1.0cm を測る。外底部に板状圧痕を有する。口縁部は片口状となるが、意図的かは不明である。胎土に細かい褐色粒を含み、色調は白橙色を呈する。597 は白磁碗Ⅳ類、598 は耀州窯系青磁碗の口縁部片である。外面口縁下に沈線を巡らせ、内面には片彫で唐草文を描く。599 は滑石製品で、1 側面を鋸歯状となす。鋸歯は三角形をなし、鋭利である。鉄器等を研いだ結果、鋸歯状となったものか、鋸歯状のものを作り出したかは不明である。他面には擦痕等はない。手持ち砥石として利用したものであれば、研磨によって稜を取り、持ちやすいように面取りを行っているともいえる。

直径 2.2cm を測り、重さは 43.04g である。600 は砂岩製の石球である。端正な球形で、稜、面は残っていない。13.21g を量る。601 は砂岩製の砥石で、砥面としては 2 面使用される。広い面は器面が滑らかとなり、擦痕が残る。側面は幅 2.5mm の断面「U」字状の溝を 2 条有する。602 は変成岩の敲石で、3 面中央に敲打痕を残す。手持ちとして使用されたと思われ、重さは 674.99g を量る。603 は北宋代の銅銭で、「嘉祐元寳または景祐元寳」（初鋳年：1057 か 1034 年）である。604~606 は鉄製品である。604 は鉄製の両関式の刀子で、両端部を欠損する。茎は偏平である。605 は断面方形状を呈する二股状に分かれた鉄棒である。606 は断面円形状の鉄環に断面方形状の鉄の棒を連結させる。607~617 は掘方出土の遺物で、607~609 は土師器である。607・608 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.7cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土は精良で、色調は白橙色を呈する。609 は丸底坏で、外底部に板状圧痕を有し、復元口径は 15.0cm を測る。610 は瓦器椀で、丸味を帯びた低い高台が付く。611 は白磁碗Ⅳ類である。612 は天目茶碗の口縁部片で、橙色の胎土に茶褐色、黒色の釉がかかる。613 は施釉陶器の壺の体部片で、縦方向に凹線が入る。SE090878 の掘方から出土した 566 に非常に類似しており、同一品である可能性が高い。614 は下層の遺物の混入で、弥生土器の広口壺の口縁部片である。615 は頭部に穿孔を有する土錘で、下位は欠損する。頭部は平坦に仕上げる。重さは 5.75g である。616 は滑石製石鍋の転用品である。方形に整形され、上面には加工痕が残る。下面は煤が多量に付着し、加工の痕跡はみられない。重量は 23.65g である。617 は銅製品である。無茎鏃状をなし、現状で長さ 1.35cm、幅 0.45cm、厚さ 0.16cm を測る。618~640 は上層出土の遺物である。618~622 は白磁で、618 は碗の口縁部片で、口縁に輪花を有する。精良な白色の胎土に化粧土を施し、白色釉がかかる。619 は皿Ⅵ-1b 類、620 は碗Ⅳ類の底部片で、高台のみ残し、打ち欠いていることから、瓦玉の未成品と考えられる。621・622 は碗Ⅴ類の底部片で、622 は高台内に墨書が残る。623 は施釉陶器の小壺の蓋で、摘み部を欠損する。やや緑を帯びた灰色釉がかかる。624 は青磁で、水注等に貼り付ける装飾品と思われる。背面の摘み状には横方向の穿孔が開けられる。625 は畿内産の緑釉陶器の口縁部片である。灰色の精良な胎土に淡緑色の釉が全面にかかる。626~629 は土錘である。626 は頭部に穿孔を有するもので、上下端を欠損する。627・628 は管状土錘で、627 は完形、628 は半分を欠損する。629 は投弾状で中央に穿孔を有するものだが、半分を欠損する。重さは現状で、11.80g、5.43g、4.47g、16.0g を量る。630 は土師質の平瓦で、厚さ 2.2cm を測る。凸面は大きな格子目叩きののち、部分的にナデ消し、凹面には細かい布目が残るが、工具で部分的にナデ消される。631 は円盤状土製品で、わずかなカーブが残ることから、土器片を使用したと考えらえる。丁寧に整形され、重さは 3.34g である。632 は砂岩製の台石の一部である。広い面の中央部を中心に敲打の痕跡が残り、凹状に窪んだ箇所も 2 箇所みられる。633 は高麗陶器の口縁部片である。634~637 は下層の混入遺物の土師器である。634 は二重口縁壺のミニチュア土器で、丁寧なナデで調整される。635 は広口壺で、内外面ともに横方向のナデで調整され、内面には刷毛目が残る。636 は布留系甕で、体部内面は削り、口縁部と体部外面は横方向のナデで調整される。637 は山陰系二重口縁壺の口縁部片である。638 は碧玉の管玉未成品と思われる。長さ 0.8cm、幅 0.5cm を測り、ややエンタシス状を呈する。断面は多角形を呈しており、稜線が残る。研磨を行う前段階のものと思われる。片面穿孔で、孔径は 1.0mm を測る。石材は前述の SE090878 出土の 557 と同一と考えられ、色調は濃緑色を呈し、中に縦方向の白線ラインが多く見られる。重さは 0.4g を量る。639 は銅銭で北宋代の銅銭で、「至元通寳」（初鋳年：1285 年）である。640 は厚さ 3.0mm、幅 4.3cm、高さ 8.0cm の不整形の鉄片である。他にガラスに関する小玉、丸玉、連玉、滓、坩堝、坩堝の蓋、鉛、珪石が多量に出土する（Ⅲ-34 Fig.13 ～ 16）。また、金属坩堝（Ⅲ-34 Fig.1-13）、炉壁も確認した。井戸の時期は 11 世紀後半から 12 世紀初頭と考えらえる。

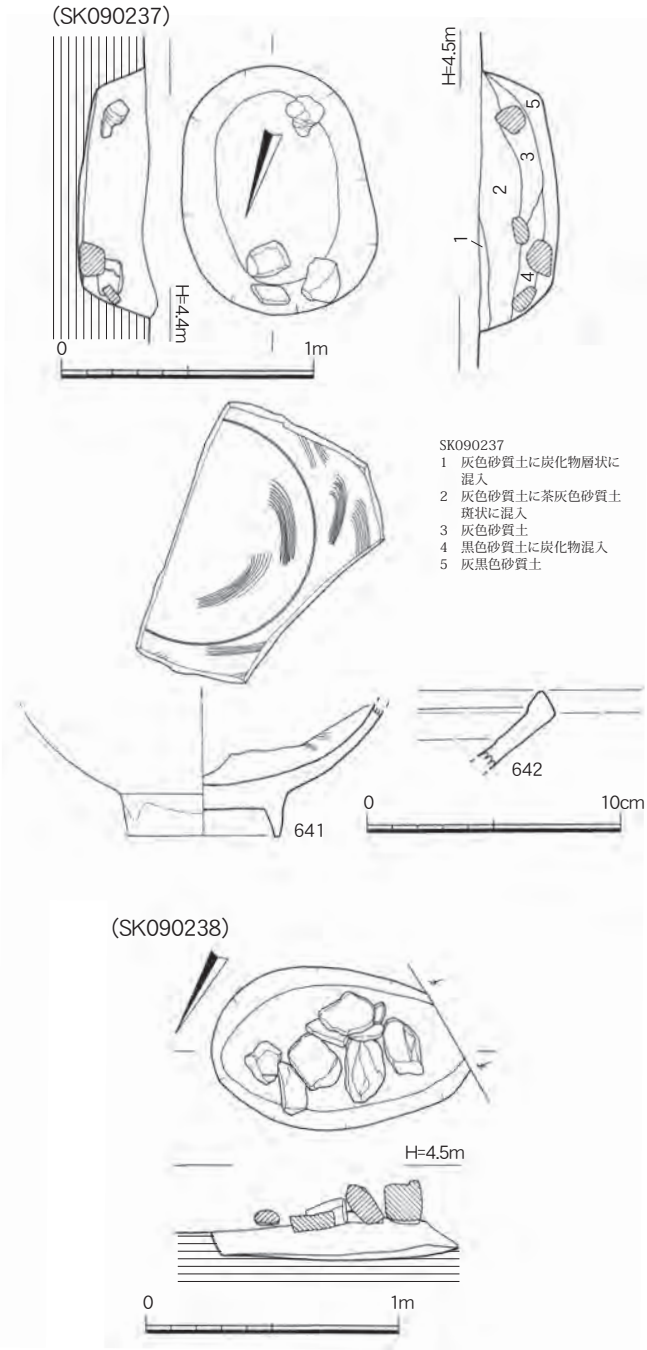
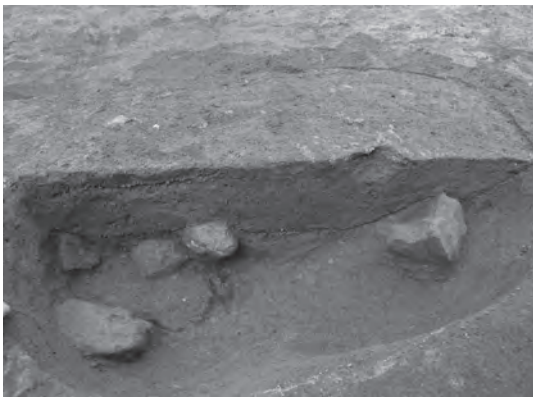


Fig.67　SK090237・090238 実測図（1/30）
および出土遺物実測図（1/3）



Ph.108　SK090237 土層（西から）

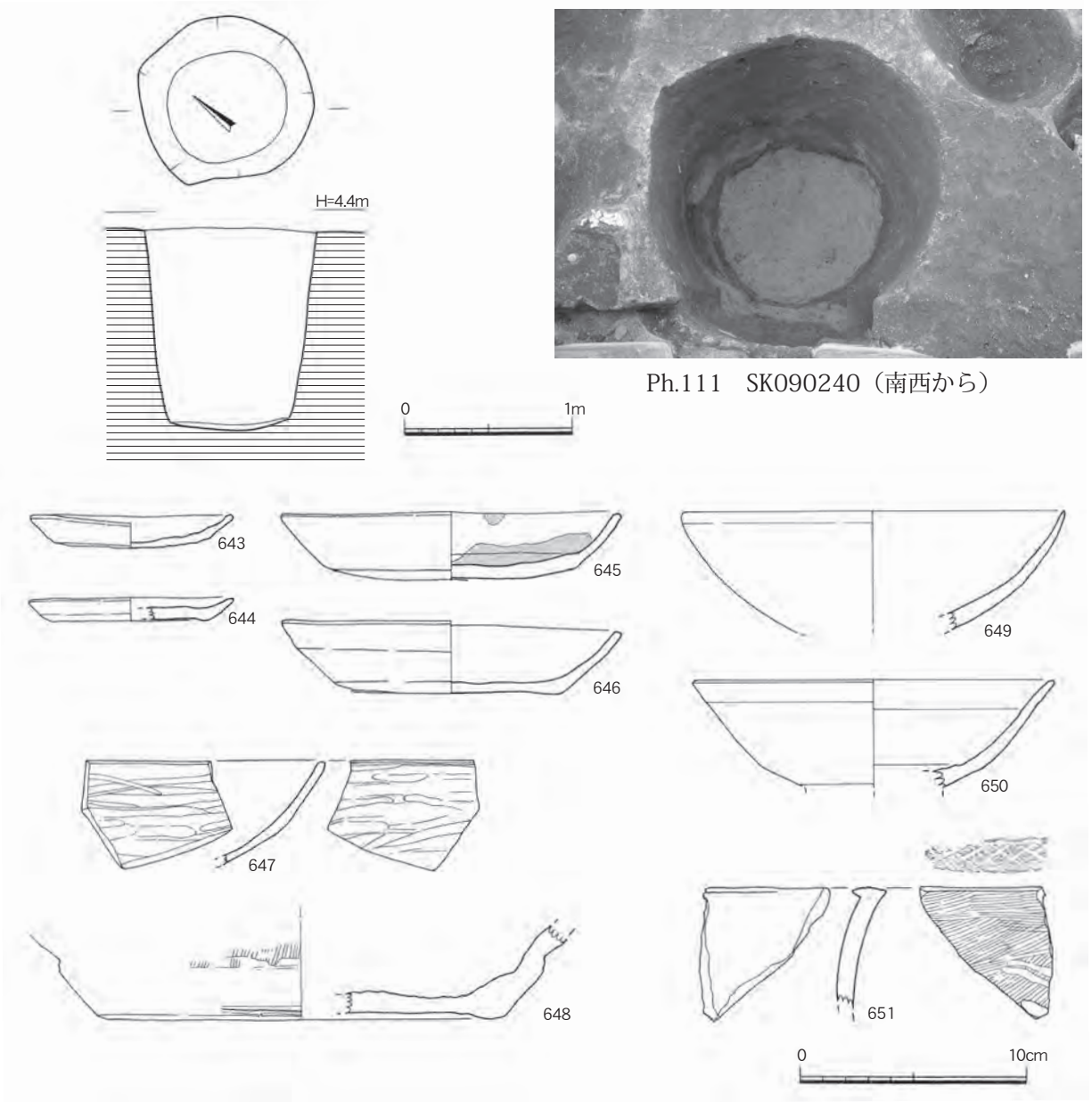
Ph.109　SK090237（東から）

Ph.110　SK090238 石（南東から）

（2）土坑（SK）

SK090237（Fig.67　Ph.108・109）　調査区西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.0m、短径 0.7m、深さは 25cm を測る。断面は逆台形を呈する。覆土は上層が灰色砂質土、下層が灰黒色砂質土を主体とし、炭化物を含む。なお、北側床面では花崗岩と粘板岩、南側中位では砂岩の自然石が出土した。

出土遺物（Fig.67）　641 は白磁碗Ⅴ -4b 類、642 は須恵質土器の口縁部片で、黒色粒を含む粗い灰黒色の胎土である。他に回転ヘラ切り底の土師器、瓦器、滑石片、ガラス坩堝、炉壁が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。



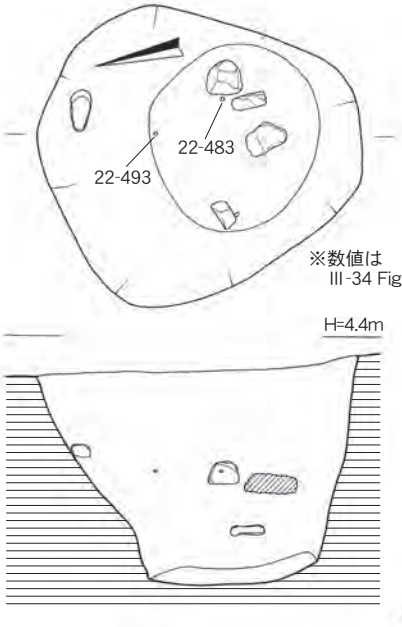
Ph.111　SK090240（南西から）

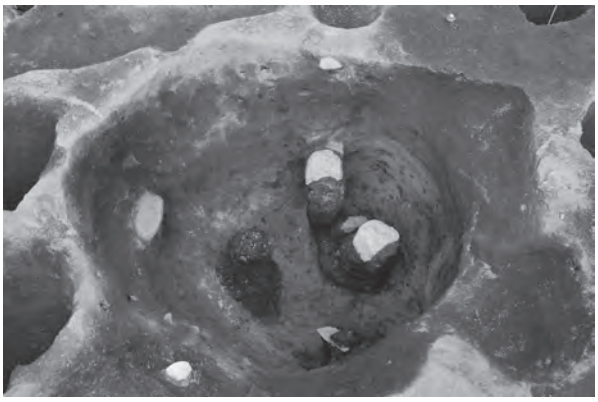
Fig.68　SK090240 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK090238（Fig.67　Ph.110）　調査区西側に位置し、南側は矢板に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.1m、短径 0.65m、深さは 20cm を測る。検出面では頭大の礫岩がまとまって出土した。いずれも加工の痕跡はなく、自然石である。覆土は灰褐色土を主体とする。遺物は小片ばかりで、回転ヘラ切底の土師器、黒色土器 A 類、白磁碗Ⅴ類等が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半と考えらえる。

SK090240（Fig.68　Ph.111）　調査区東側に位置する。平面プランは直径 1.0m の円形を呈し、深さは 1.2m を測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立する。覆土は炭化物を含む灰黒色土である。

出土遺物（Fig.68）　643~646 は土師器である。643 は回転ヘラ切り底の小皿の完形品で、9.0cm、器高 1.5cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土は精良で、色調は白橙色を呈する。644 は回転糸切り底の小皿で、復元口径 9.2cm、器高 1.0cm を測り、外底部に 643 に類似した板状圧痕を有する。胎土、色調も 643 と類似する。645・646 は回転糸切り底の坏で、口径 15.0cm、器高 2.9cm、3.3cm を測る。645 は外底部に板状圧痕を有し、内底部には煤が付着する。646 は 2 片に割れるが、接合





Ph.112　SK090241（西から）

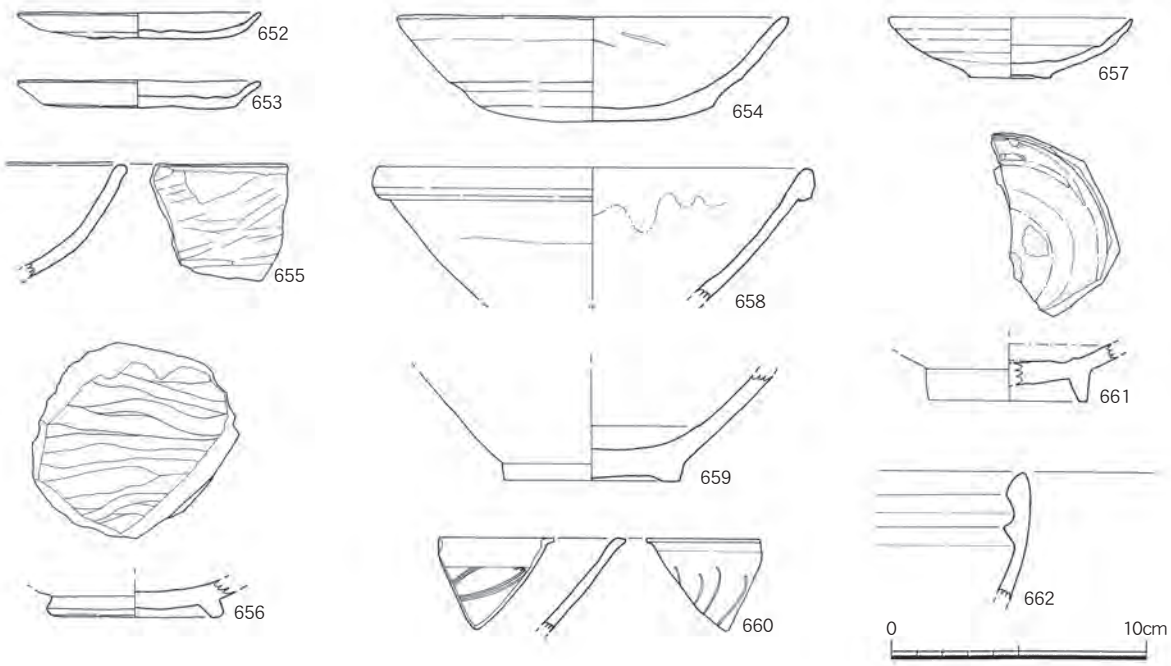
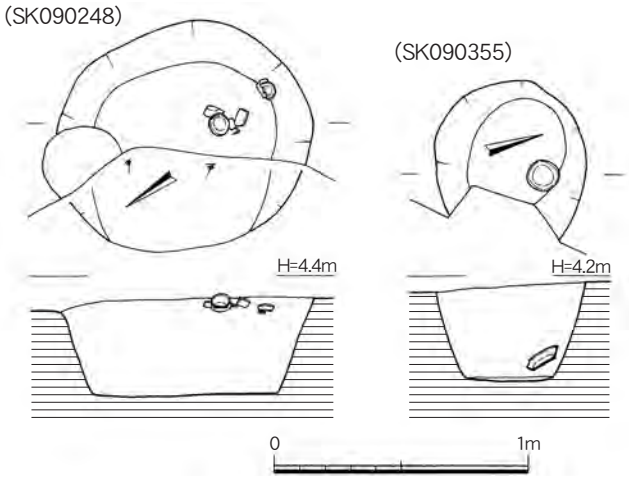


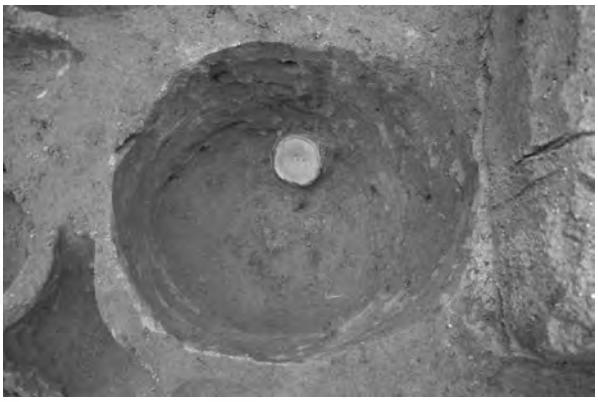
Fig.69　SK090241 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

すると完形となる。647 は瓦器椀で、体部は浅く、内外面の磨きは疎らである。648 は瓦質の鉢の底部片である。649･650 は白磁で、649 は碗Ⅱ類、650 は碗Ⅲ類である。651 は下層遺物の混入で、弥生土器の壺の口縁部片である。口縁部上面には箆で格子状に刻みを入れる。他に鉄釘、ガラス坩堝等が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK090241（Fig.69　Ph.112）　調査区東側に位置する。平面プランは北側がやや幅広の楕円形を呈し、長径 1.3m、短径 1.2m である。深さは 0.85m を測る。床面はほぼ平坦で、北側の壁は緩やかに傾斜する。中層からガラス小玉が 2 点、自然石の礫岩が出土した。覆土は灰黒色土である。

出土遺物（Fig.69）　652~654 は土師器である。652・653 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 9.6cm を測る。外底部に板状圧痕を有する。胎土に微量の金雲母を含み、色調は 652 が橙色、653





Ph.113　SK090355（南西から）

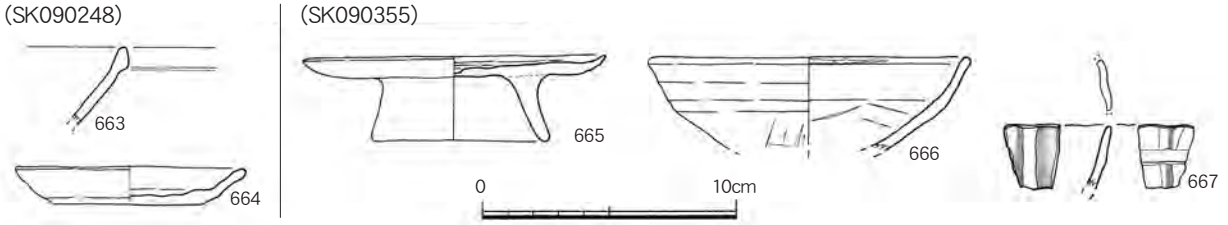


Fig.70　SK090248・090355 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

は明橙色を呈する。654 は丸底坏で、復元口径は 15.4cm を測る。内外面、丁寧なナデで調整される。655・656 は瓦器椀で、幅の広い磨きが施される。657~661 は白磁である。657 は皿Ⅵ-1a 類、658・659 は碗Ⅳ類、660 はⅤ-4c 類、661 は碗Ⅷ類で、内面見込みの釉が輪状に掻き取られ、その周囲に目跡が残る。662 は無釉陶器の鉢である。他にガラス小玉（Ⅲ-34 Fig.22-483・493）、ガラス坩堝、粘土塊、滑石片が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK090248（Fig.70）　調査区西側に位置し、東側を SK090193 に切られる。平面プランは楕円形で、長径 2.0m、短径 1.8m を測る。断面は逆台形を呈する。深さは 0.75m を測り、床面は平坦である。南側上層で土師器がまとまって出土した。覆土は炭化物を含み、灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.70）　663 は白磁碗Ⅳ類、664 は完形の回転糸切り底の土師器の小皿である。口径 9.1cm、器高 1.5cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を多く含み、色調は暗橙色である。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK090355（Fig.70　Ph.113）　調査区中央に位置する。東端部分が調査区内の切換ラインにかかり、検出することができなかった。平面プランは円形を呈し、直径約 1.2m を測る。断面は逆台形で、深さは 0.75m である。覆土はやや粘質を帯びた灰色土である。

出土遺物（Fig.70）　665・666 は土師器である。665 は高台付皿で、外に開く高い高台が付く。回転ナデで仕上げられ、胎土に金雲母を含み、橙色を呈する。666 は丸底坏の小片である。667 は龍泉窯系青磁碗の口縁部の小片である。口縁は波打ち、内外面ともに文様が描かれる。青味を帯びた緑色の釉が厚くかかる。土坑は 13 世紀中頃から 14 世紀初頭前後と考えらえる。

SK090845（Fig.71）　調査区東側に位置し、西側は他の遺構に切られる。平面プランはやや歪な楕円形を呈し、長径 1.3m、短径 1.0m 以上を測る。深さは 12cm と浅く、床面は南側へ向かってやや深くなる。覆土は少量の炭化物を含み、粘質を帯びた灰色土を主体とする。

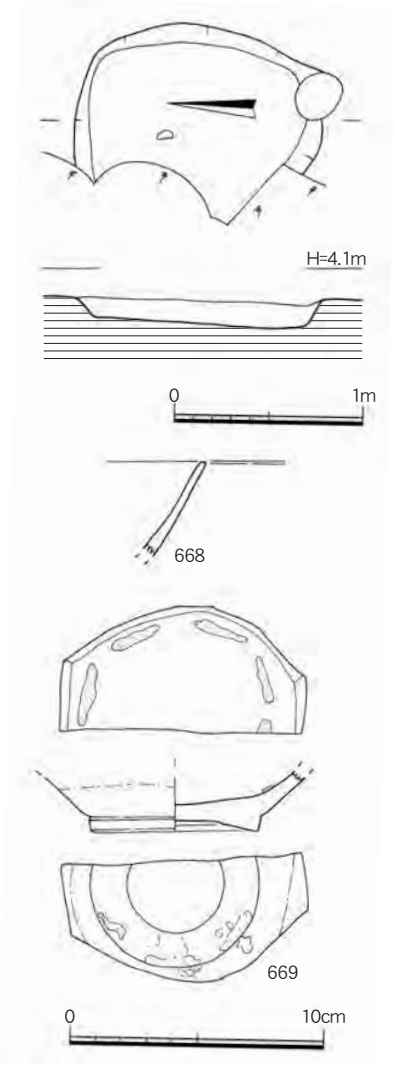


Fig.71　SK090845 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.71）　668・669 は越州窯系青磁の碗である。669 は碗Ⅱ類で、底部内外面に重ね焼きの目跡を有する。土坑の時期は 8 世紀末から 10 世紀中頃と考えられる。

SK090850（Fig.72・73　Ph.114~124）　調査区北東端に位置し、東側は調査区外へ延びる。平面プランは直径約 1.3m の円形を呈する。断面は逆台形で、深さは 1.4m である。遺物の出土状況により、4 面に分けて、記録をとった。土層については、遺物が多量に出土し、壁際の狭い範囲であったので、ベルトを残して確認することはできなかった。覆土は上層から下層まで大きな変化はなく、炭化物を塊で含む茶褐色土を主体とするが、上層は、部分的に粘質を帯び、焼土の塊が多く出土した。最下層の 4 面からは主に陶磁器が出土し、他の遺物は獣骨 1 点である。上層の第 1~3 面はガラス関連遺物、獣骨、焼けた石材が多く出土した。また、第 1・2 面では粘土塊が多く出土することから、使用されなくなった炉等が廃棄されたものと考えらえる。なお、出土した礫岩等の石材については、被熱を受け、赤色に変色したものが多く見られた。このようなガラス製造関連の遺物出土状況は SE090879・SK090771 と類似しており、同様の廃棄土坑であったと考えらえる。土坑の時期であるが、層毎で大きな時期差はうかがえず、出土遺物から 12 世紀中頃と考えられる。ガラス関連遺物については、後述の「Ⅲ -34 生産関連資料」に詳細を記す。

出土遺物（Fig.74・75　Ph.125・126）　670~675 は土師器である。670 は回転糸切り底の小皿で口縁を一部、欠損する。口径は 9.0cm を測る。胎土に金雲母を多量に含み、色調は橙色を呈する。671~673 は回転ヘラ切り底の小皿で、672 は口縁を一部欠損するが、ほぼ完形である。口径は 8.5~9.6cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を少量含み、色調は橙色である。674・675 は回転糸切り底の坏で、口径は 16.8cm、14.4cm を測る。外底部に板状圧痕を有する。胎土は少量の金雲母を含み、色調は 674 が橙色、675 は明橙色を呈する。676 は割れた状態で出土するが、接合すると完形となった。内面はジグザグ状、外面は横方向に疎らな研磨を施す。677 は青白磁の合子の蓋である。型作りで体部を菊花状とし、天井部に文様を描く。678~688 は白磁である。678 は碗Ⅲ -2 類、679 は碗 XIV-b 類で、口縁部は外側に大きく屈曲し、体部は丸みをもって立ち上がる。高台は細くて高い。体部内面に白堆線を有する。680 は皿Ⅳ類で、黒色粒を含む白色の胎土にやや灰色を帯びた透明釉がかかる。器面には細かい貫入が多く入り、底部には目跡が残る。681~683 は碗Ⅳ -1a 類であるが、色調は異なり、681 は灰白色、682 は灰橙色、683 は黄味を帯びた橙色である。681 は熱を受け、釉が細かく発砲する。684・685 は碗Ⅴ -4 類、686 は碗Ⅵ -1b 類で、ともに内面に短い櫛目で花文を描く。687・688 は碗Ⅷ類で、見込みの釉を輪状に掻き取り、目跡が環状に残る。689 は同安窯系青磁碗Ⅲ -2 類で、内面見込み部分の釉を輪状に掻き取る。内面上位には沈線

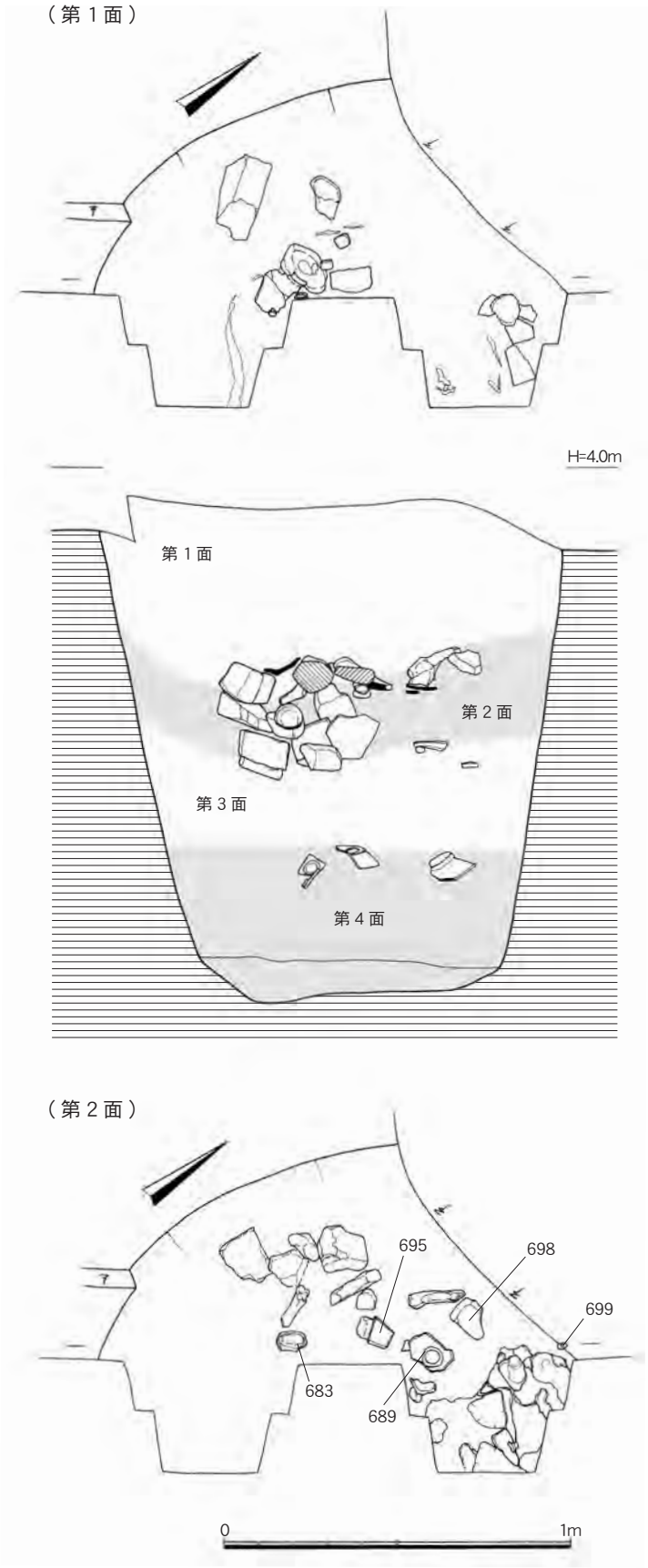


Fig.72　SK090850 第１面・第２面実測図（1/20）

Ph.114　SK090850 第１面（北西から）

Ph.115　SK090850 第１面（北西から）

Ph.116　SK090850 第２面（北西から）

Ph.117　SK090850 第２面（北西から）

Ph.118　SK090850 第２面焼土（北西から）

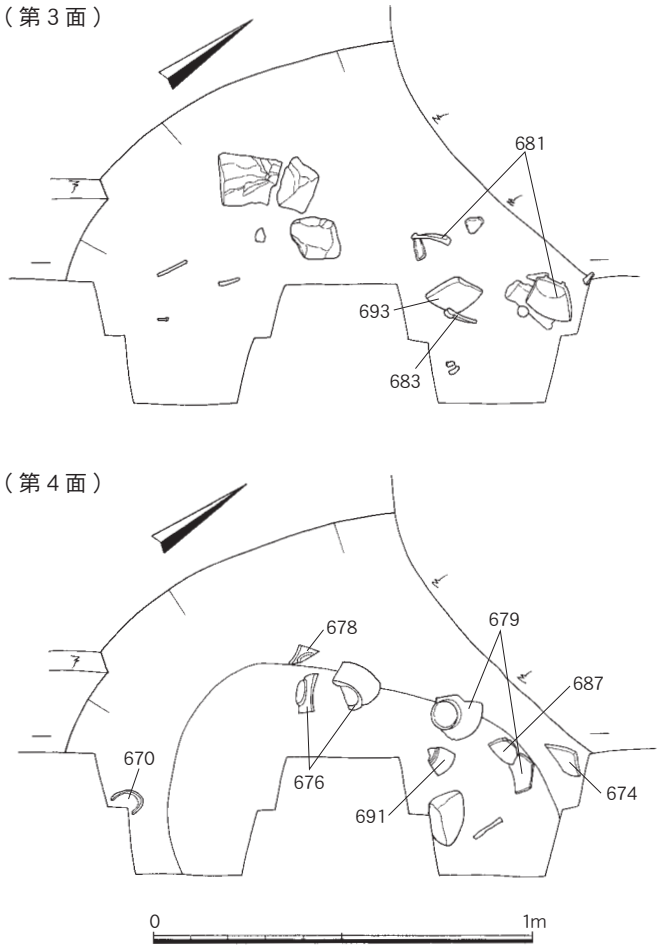


Fig.73　SK090850 第３面・第４面実測図（1/20）

Ph.121　SK090850 第３面（北西から）

Ph.122　SK090850 第３面東側（西から）

Ph.119　SK090850 完掘（北西から）

Ph.123　SK090850 第３面西側（北西から）

Ph.120　SK090850 第３面ガラス製品（北西から）

Ph.124　SK090850 第３面東側ガラス製品（北西から）

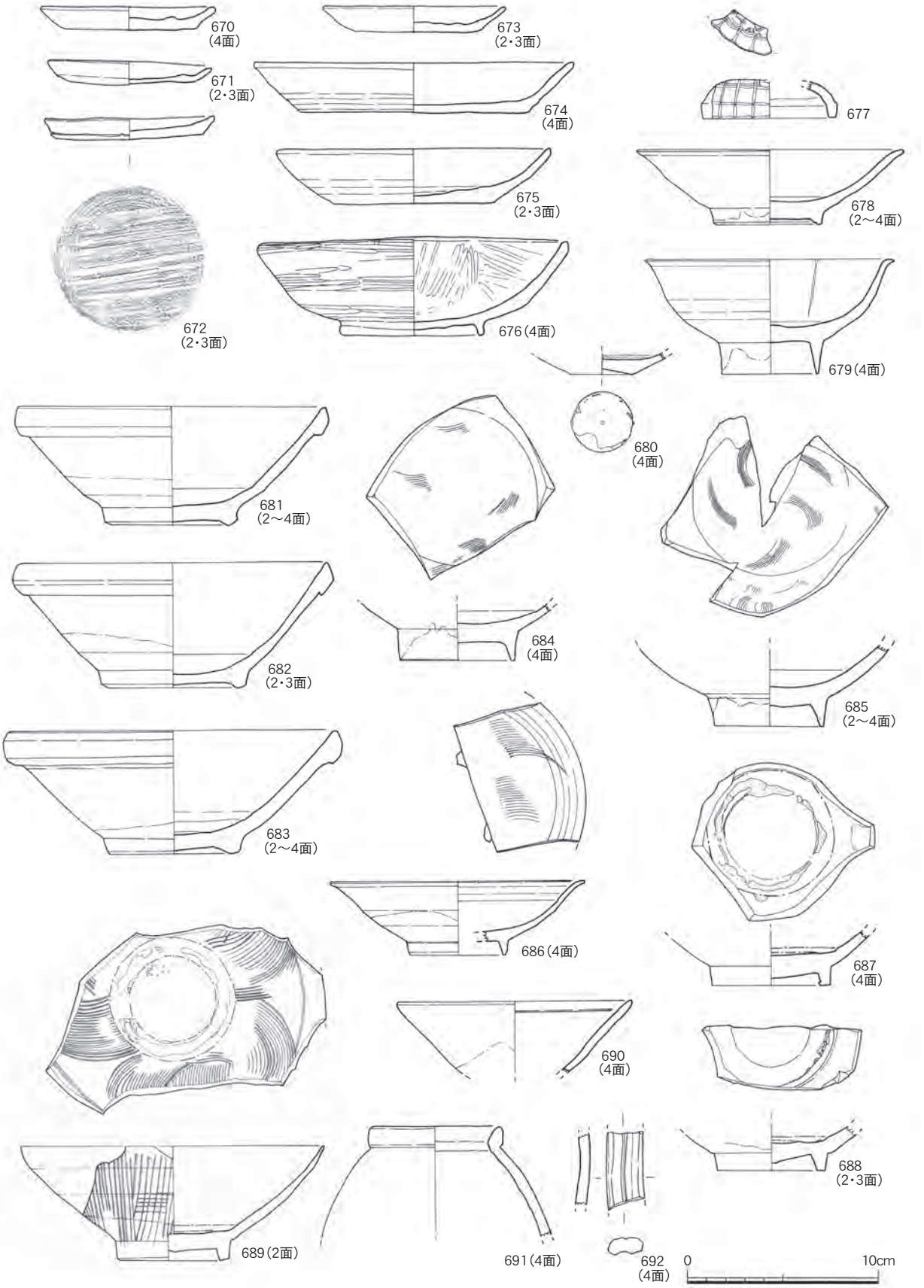


Fig.74　SK090850 出土遺物実測図①（1/3）

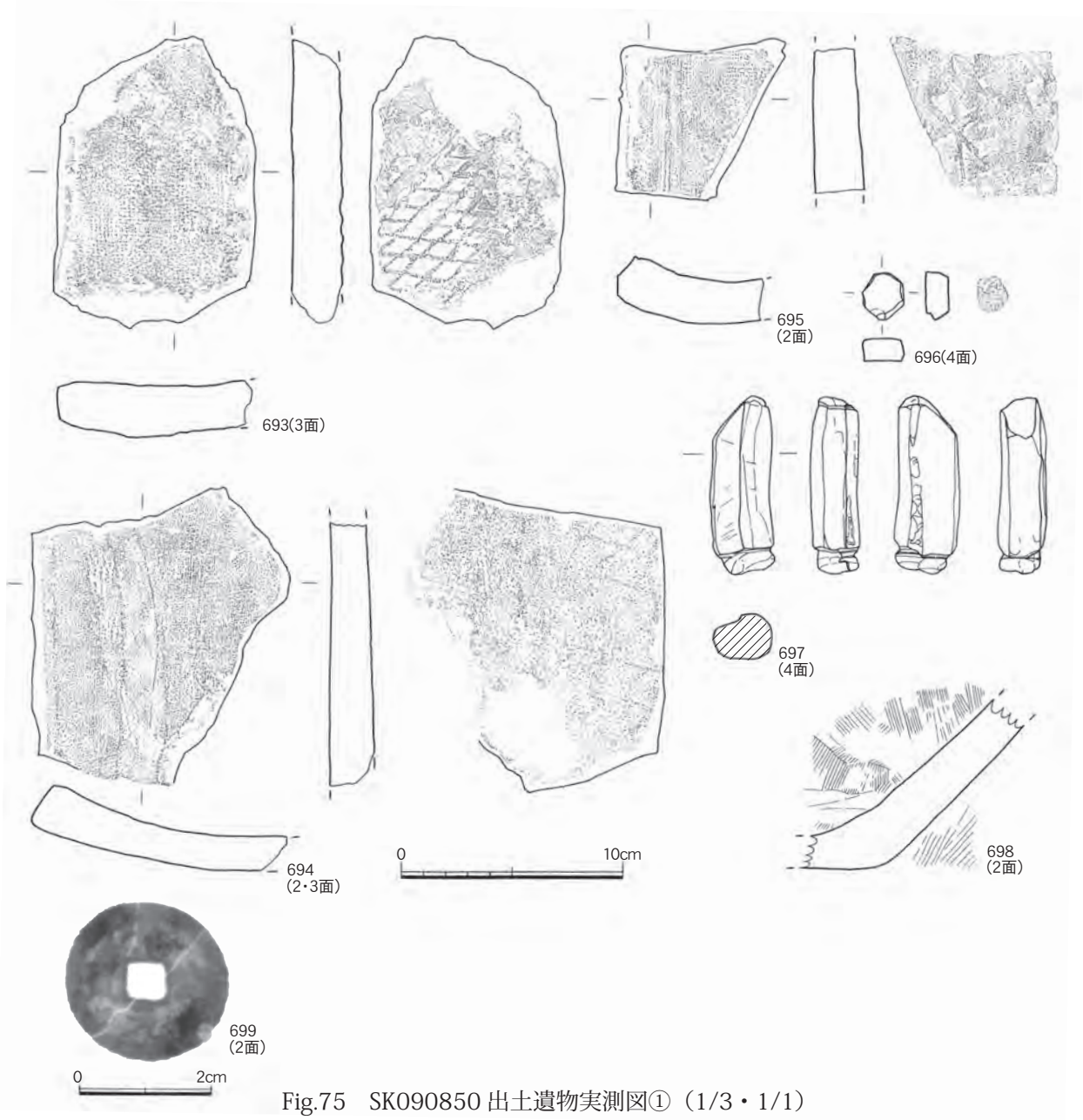
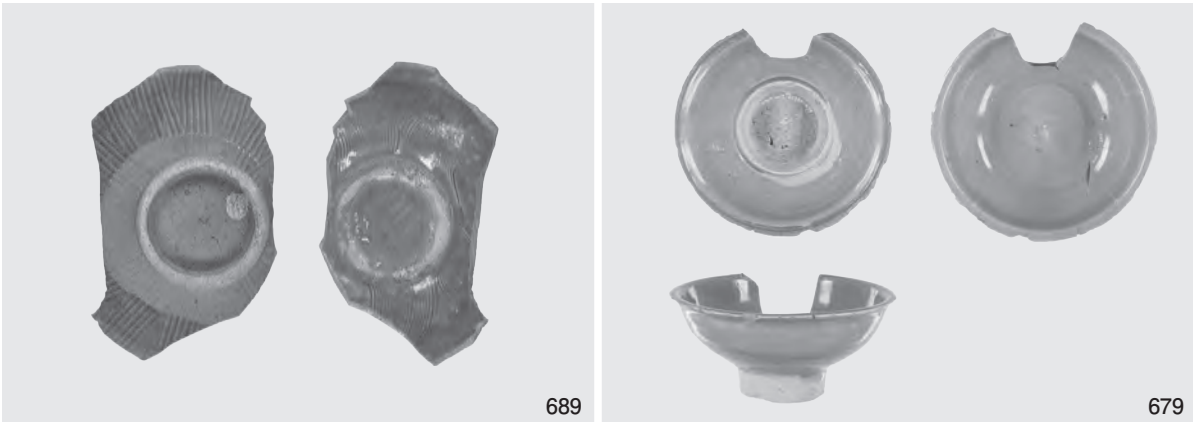
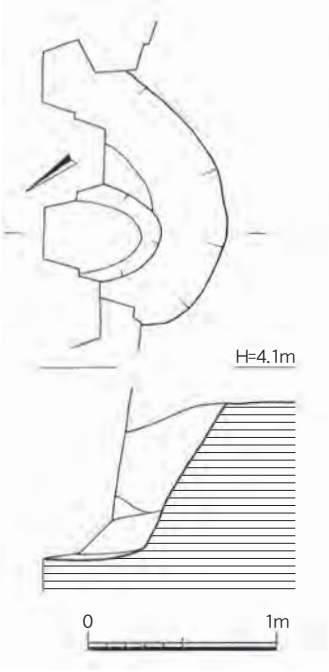


Fig.75　SK090850 出土遺物実測図①（1/3・1/1）



Ph.125　SK090850 出土遺物①



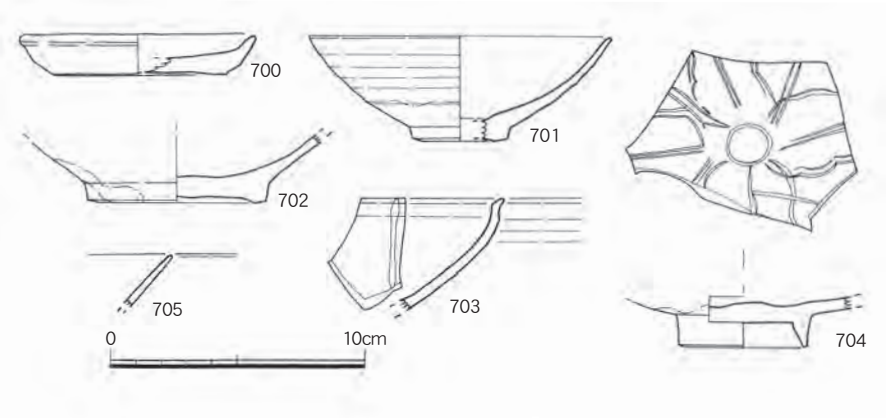


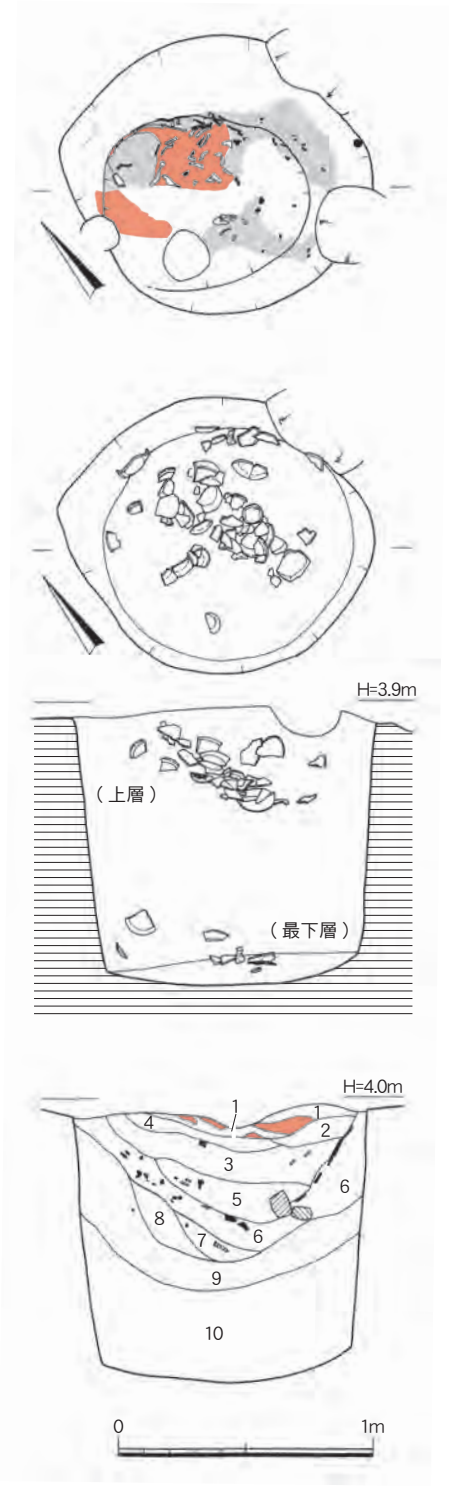
Fig.76　SK090851 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

Ph.126　SK090850 ②・SK090851 出土遺物

が入り、櫛状の施文具で文様を描く。外面には粗い櫛目文を施す。690 は天目茶碗で、白橙色の胎土に茶褐色の釉がかかるが、口縁部は黄橙色を呈する。691 は施釉陶器の壺の口縁部片で、黒色粒を含む灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。692 は水注の把手で、ガラス坩堝に使用された器種である。693 は瓦質。694 は土師質の平瓦である。695 は土師質の平瓦で、凸面は格子目、凹面は布目が残り、部分的にナデを施す。696 は小型の瓦玉で、土師質の平瓦を用いる。凸面はナデ、凹面には布目が残る。重さは 4.9g を量る。697 は滑石製の錘を欠損後、研磨したものと思われる。もともと両端に紐で結ぶため抉りを一周させていたが、上部はその箇所が欠損したため、斜め方向に整形し、研磨している。重さは 78.1g である。698 は下層の遺物の混入で、弥生土器の大甕の底部片である。内外面ともに刷毛目で調整される。699 は銅銭であるが、銹化が著しく、「□□元寳」のみ判読できる。他にガラス関連では小玉（Ⅲ -34 Fig.310・311）、おはじき状（Ⅲ -34 Fig.11-312）、坩堝、滓、炉壁（Ⅲ -34 Fig.11-322）、珪石、鉄釘、ウシ、ウマ、イノシシ、シカ、イヌ等の骨（Ⅲ -35 参照）が出土する。遺物は 2~4 面のものが接合することから、ほとんど時期差はなく、土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK090851（Fig.76）　調査区北東端に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈すると思われ、東西方向は 1.3m 以上を測る。東側にテラスを有し、深さは 0.8m である。覆土は炭化物を含んだ灰褐色土である。

出土遺物（Fig.76　Ph.126）　700 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口径 9.2cm を測る。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。701~705 は白磁である。701 は皿Ⅱ -1a 類、702 は碗Ⅱ類で化粧土を施し、灰白色の釉がかかる。703 は碗 XII 類か。内面に白黄色の釉垂れがある。704 は碗の底部片で、細く、高い高台が付く。見込みは広く、中央に直径 1.6cm の円を陽刻し、その周囲に箆状工具で文様を描く。良質な灰白色の胎土に灰白色を帯びた釉が内面と外面体部下半までかかる。器面には細かい貫入が入る。705 は越州窯系青磁碗の口縁部片である。他に回転糸切り底の土師器、瓦器、滑石片、ガラス関連の鉛、珪石が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えらえる。



SK090860
1　灰色粘質土に焼土・炭化物の塊混入（上層）
2　灰色粘質土に少量の焼土、炭化物粒状に混入（上層）
3　灰黄色粘質土に炭化物・焼土粒状に混入（上層）
4　灰色粘質土に少量の黄色土、炭化物混入（上層）
5　黄色をおびた灰色土に炭化物、少量の黄色土混入（上層）
6　灰黒色粘質土に多量の炭化物層状に混入（上層）
7　黄灰色土に少量の炭化物混入（上層）
8　灰色土に少量の炭化物混入（上層）
9　暗灰色粘質土に少量の炭化物粒状、焼土混入（下層）
10　灰色砂質土に少量の炭化物混入（最下層）

Fig.77　SK090860 実測図（1/30）

Ph.127　SK090860 焼土検出状況（西から）

Ph.128　SK090860 上層（南西から）

Ph.129　SK090860 最下層（西から）

Ph.130　SK090860 土層（南西から）

SK090860（Fig.77　Ph.127~130）　調査区東側に位置する。平面プランは略円形を呈し、直径1.1~1.25m、深さは1.1mを測る。断面は円筒形で、壁はほぼ直立する。大量の土師器や陶磁器が廃棄されていた。遺物は1~8層を上層、9層を下層、10層を最下層とし、取り上げた。上層は厚さ10cm前後の層が互層となって堆積する。1層は焼土と炭化物の層で、5cm程度の塊も含まれる。その下の3・5層は、北側から南側へ向かって土師器の坏、小皿が投入される。1~8層と9・10層の堆積状況は異なり、9層の堆積後、一度掘削され、再度廃棄した可能性がうかがえる。下層の遺物を記録することができなかったが、上層から下層にかけて、大量の遺物が炭化物、焼土とともに廃棄されていた。

出土遺物（Fig.78~80　Ph.131）　706~725は上層出土遺物で、706~716は土師器である。706~710は回転ヘラ切り底の小皿で、口径9.6~10.6cmを測る。すべて、外底部に幅広の板状圧痕を有する。調整は回転ナデで調整した後、手持ちで底部内面の平行ナデを行い、口縁に沿って横方向になでて仕上げる。711は回転ヘラ切り底の坏で、復元口径15.0cmを測る。712~716は丸底坏で、口径14.9~16.0cmを測り、外底部に板状圧痕を有する。712・713・715の内面には当て具痕が残る。外面はナデで調整されるが、715・716には指オサエの痕跡が明瞭である。717は黒色土器A類の椀で、外面はナデ、内面は幅広の磨きを施す。718は瓦器椀の底部片で、高台内に断面三角形の粘土を円形に貼り付ける。底部内面は丁寧なナデで調整した後、弧状、ジグザグ状の磨きを施す。719は青白磁の小碗で、口縁は玉縁状におさめる。胎土は白色で、青味を帯びた透明釉がかかり、細かい貫入が入る。720は白磁の小碗で、外面に片彫りで花文を描く。721は白磁の碗で、口縁はわずかに外反する。灰白色の胎土に化粧土が施され、白色の釉がかかる。722は越州窯系青磁碗の底部片で、輪状高台を有し、高台内に目跡が残る。内面見込みには沈線が巡る。723・725は無釉陶器の鉢で、砂粒を多く含む胎土で、褐色を呈する。723は口縁上部に砂目を有する。724は施釉陶器の鉢で、口縁は波打つ。白色を含む胎土に、褐色釉がかかる。口縁部外面には白色の砂目が付着する。726~745は下層出土遺物である。726~738は土師器で、726~732は回転ヘラ切り底の小皿である。口径は9.1~9.8cmを測り、726・727・731は外底部に細いすだれ状の板状圧痕を有する。726~728、730・731は同一工人の手によるものか、底部から外方向に体部を引き出し、回転ナデで調整した後、手持ちで内部を平行にナデて仕上げる。また、727・731は接合すると完形になることから、破損後、時間をおかずに廃棄されたと考えらえる。732は内外面に墨書が残るが、詳細は不明である。733は高台付皿で、復元口径11.3cmを測る。734~736は丸底坏で、復元口径15.0~16.2cmを測る。735はコテ当て痕、734・736は工具によるナデが明瞭に残る。734は火を受けたのか、口縁部は赤変し、内面は黒変する。737・738は椀で、内面から口縁部外面にかけては、横方向の磨きを施し、体部下半はヘラ削り未調整である。738は底部片で、低く外に開く高台で、端部は踏ん張る。739・740は管状土錘で、一部欠損する。重さは9.9g、6.0gである。741は白磁碗XIII-1b類で、内面には箆と櫛で花文を描く。白色の精良な胎土に化粧土を施し、やや青味がかる白色釉をかける。742は白磁碗IV類である。743は龍泉窯系青磁壺の口縁部片、744は越州窯系青磁碗の底部片である。745は施釉陶器の無頸壺で、口縁は折り曲げて丸く仕上げる。黒色粒を含む灰色の胎土にやや緑色を帯びた灰色釉がかかる。746~768は最下層の出土遺物である。746~765は土師器で、746~751は回転ヘラ切り底の小皿で、口径9.2~10.0cmを測る。746~748、751は外底部に板状圧痕を有する。748・749の底部は「の」の字状のヘラ切り痕が残る。752~764は丸底坏で、口径は14.9~15.4cmを測る。753~761は外底部に板状圧痕を有する。748・763の外底部はヘラ切り後、丁寧なナデを施す。760の内面には当て具痕、763の内面には斜方向の工具によるナデが残る。753・759・761は灯明皿として使用され、内外面に煤が付着する。752は熱を受けているのか、器面が剥離する。765は椀で内外面ともに細く丁寧な横方向の研磨が施される。766は黒色

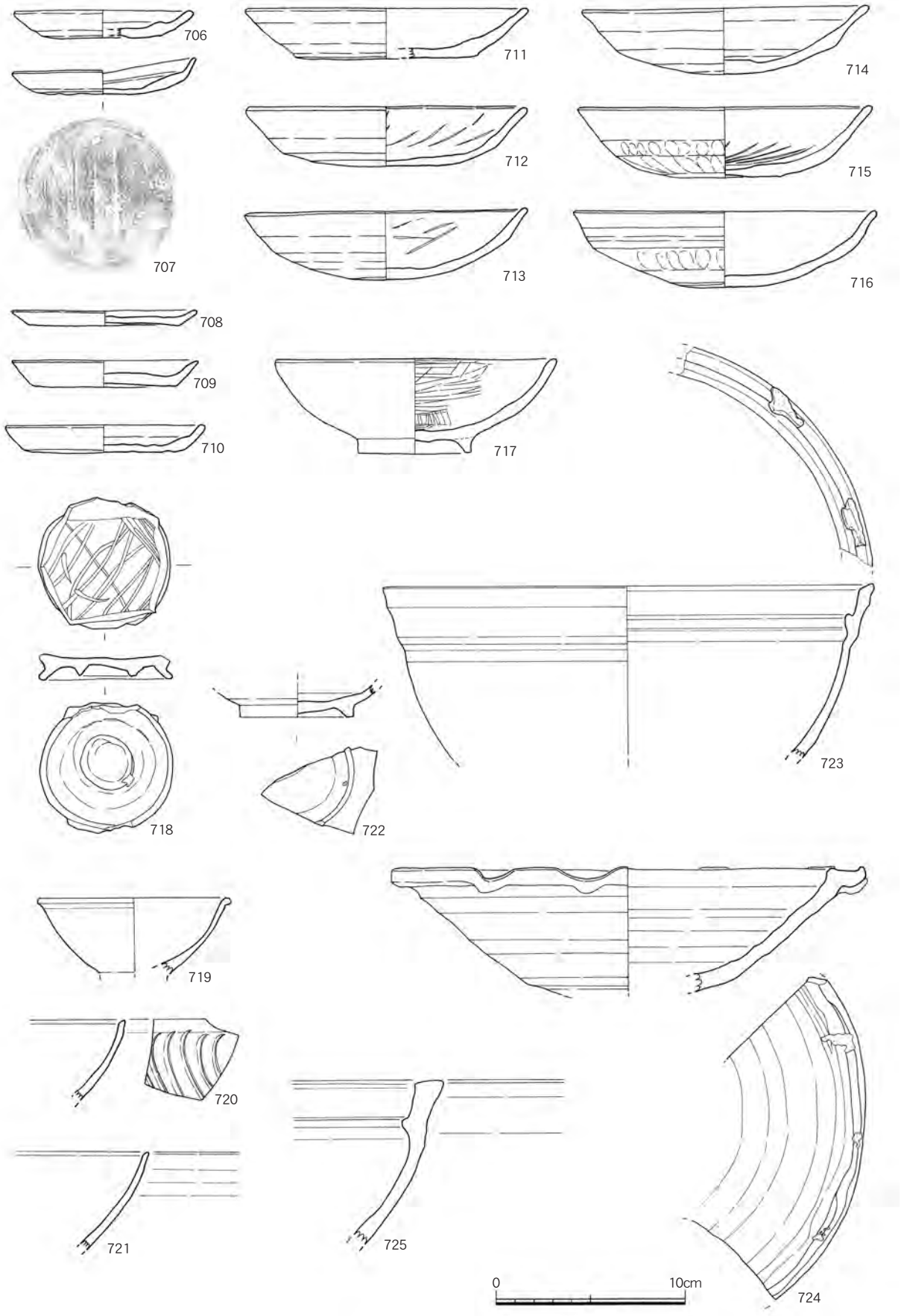


Fig.78　SK090860 上層出土遺物実測図（1/3）

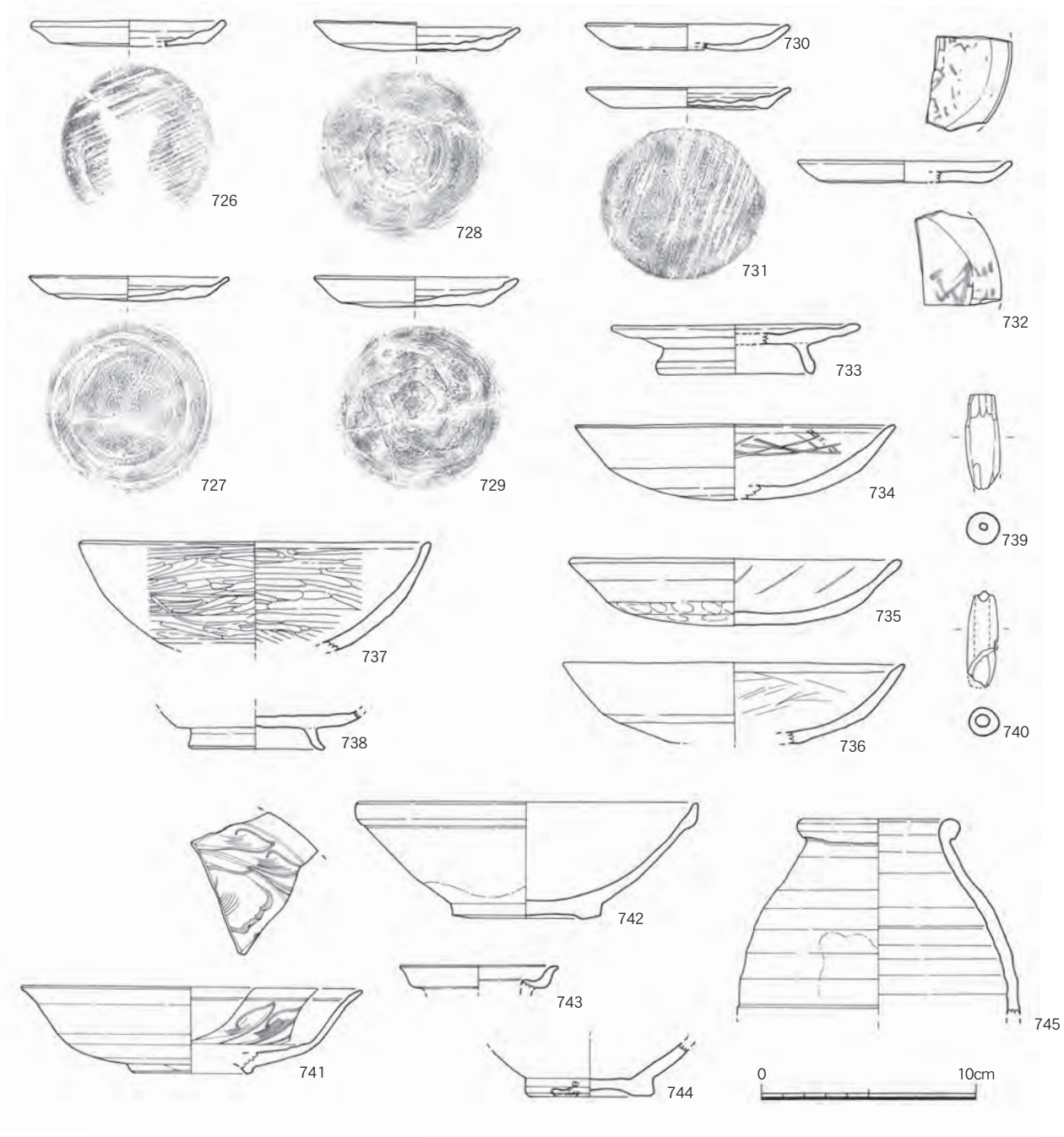
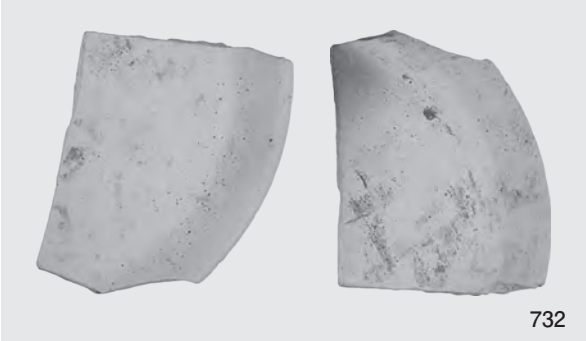


Fig.79　SK090860 下層出土遺物実測図（1/3）



Ph.131　SK090860 出土遺物

土器 B 類で、やや幅広の研磨調整をし、外面下半には箆削りが残る。767 は瓦器椀で、体部は丸味をもつ。疎らな磨きが施され、色調は灰黒色を呈する。768 は白磁碗Ⅳ-1b 類である。他に滑石石鍋、ガラス容器の破片が出土する。回転糸切りの土師器は出土しておらず、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。遺物は下層、最下層は接合するが、上層とは接合するものがないため、時期差があると思われる。

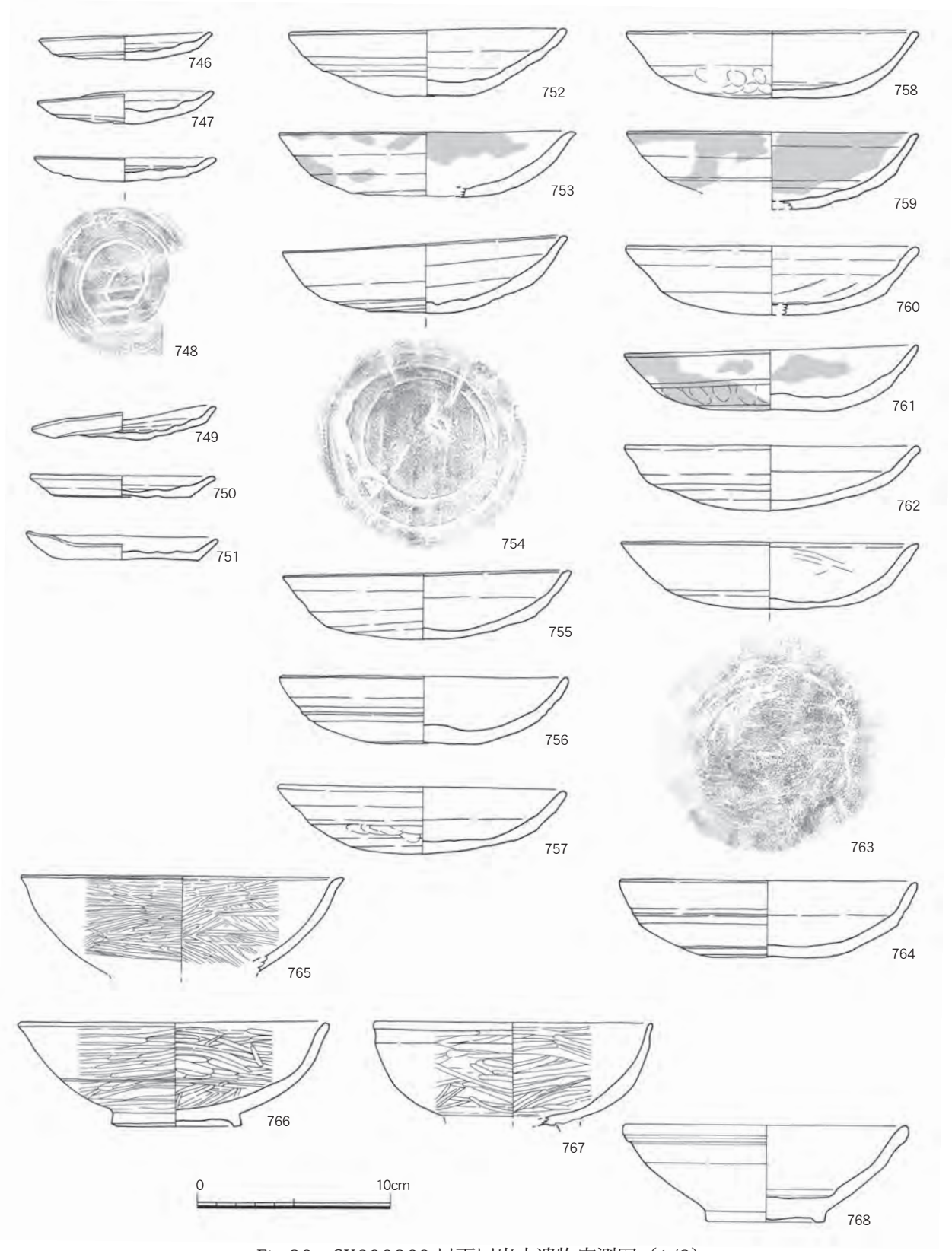
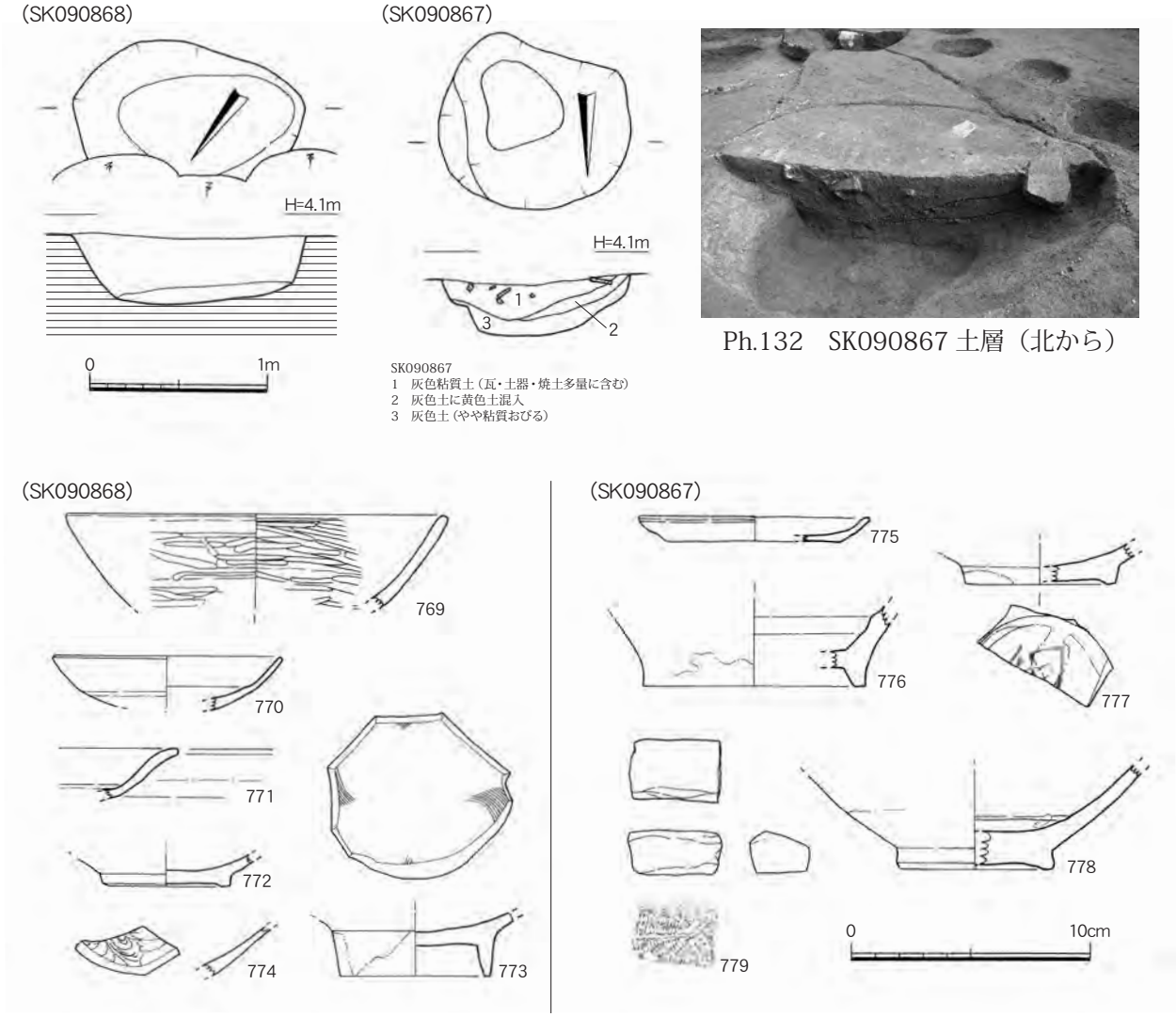


Fig.80　SK090860 最下層出土遺物実測図（1/3）

SK090867（Fig.81　Ph.132）　調査区東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.1m、短径 0.9m を測る。断面は船底状で、深さは 30cm である。覆土は上層が瓦、土師器、焼土を多量に含んだ灰色粘質土、下層が灰色土である。



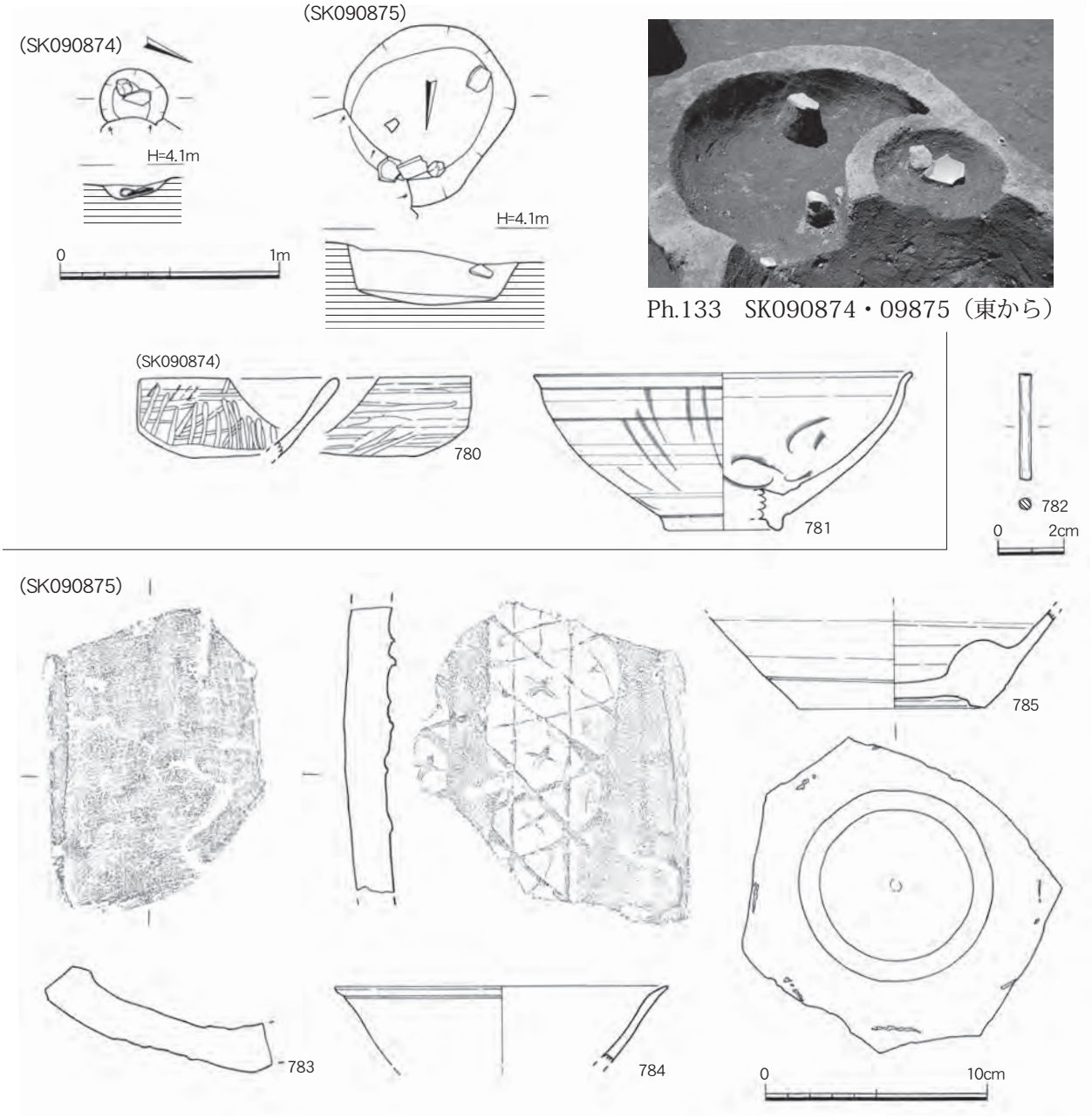
Ph.132　SK090867 土層（北から）

Fig.81　SK090867・090868 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.81）　775 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、復元口径は 9.8cm を測る。金雲母を少量含み、色調は白橙色である。776~778 は白磁で、776 は壺の底部片で、灰白色の胎土に、灰緑色の釉が底部付近までかかる。露胎部は灰色および明橙色を呈する。777 は小碗で、橙色の胎土に乳白色の釉がかかる。高台内には「綱」の墨書が残る。778 は碗Ⅳ類で、内面見込みに沈線を有する。胎土は黒色粒を含む白色の胎土で、透明感のある白色釉がかかる。779 は棒状の粘土塊で、断面方形を呈し、下面には布目のような痕跡が残る。他に黒色土器、瓦質土器の擂鉢等が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半と考えらえる。

SK090868（Fig.81）　調査区東側に位置する。平面プランは楕円形で、長径 1.3m、短径 0.8m 以上、深さは 40cm である。断面は逆台形で、覆土は炭化物を含む灰色土である。

出土遺物（Fig.81）　769 は瓦器椀の口縁部片で、口縁部は密な磨きを施すが、体部は疎らとなる。770~773 は白磁である。770 は皿Ⅵ類、771 は皿Ⅲ類で、内面見込み部の釉を輪状に掻き取る。772 は皿Ⅱ類、773 は碗Ⅴ類で、内面に短い櫛目文を有する。774 は越州窯系青磁碗の体部片で、内面に箆による草花文を描く。他に回転糸切り・ヘラ切り底の土師器、黒色土器 A 類、龍泉窯系青磁、施釉陶器、黒色土器 A 類、変成岩の磨石、ガラス坩堝が出土し、土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

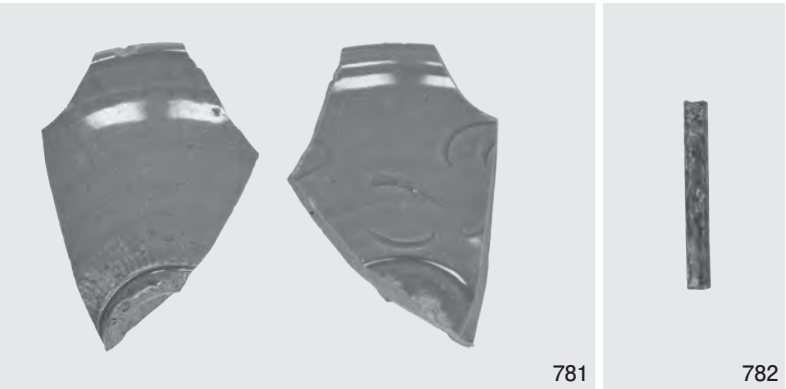


Ph.133　SK090874・09875（東から）

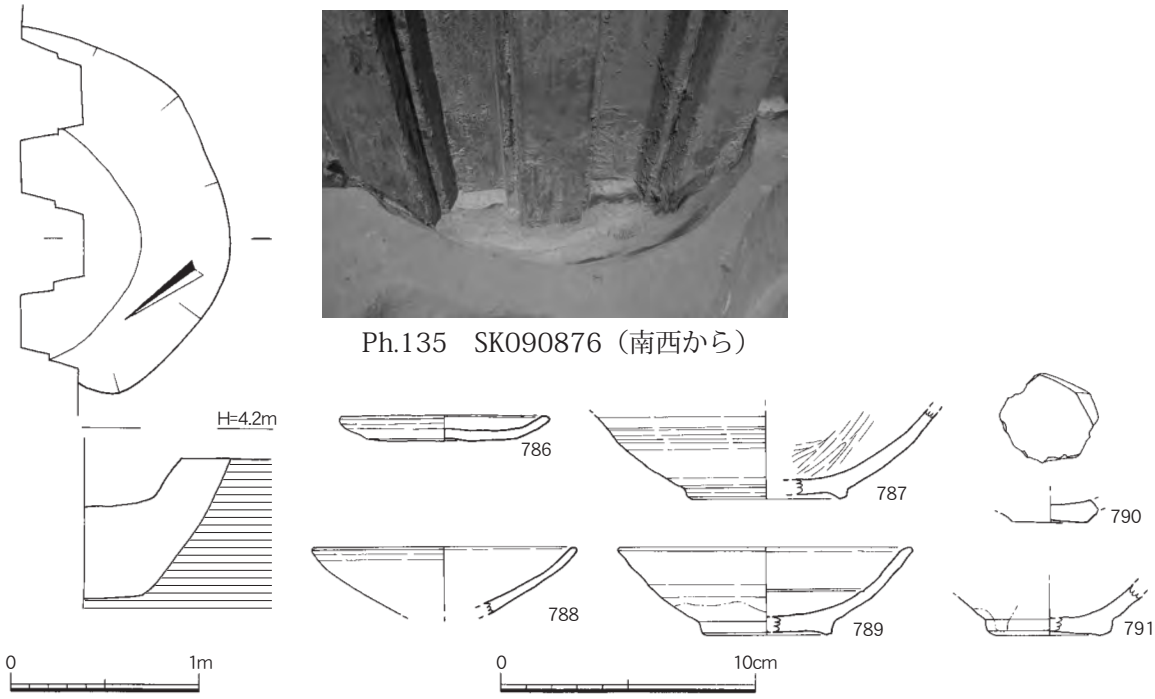
Fig.82　SK090874・090875 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/2）

SK090874（Fig.82　Ph.133）

調査区東側に位置する。平面プランは円形を呈し、直径0.6m を測る。深さは 15cm、礫岩が出土する。覆土は焼土、炭化物を含んだ灰褐色土を主体とする。



Ph.134　SK090874・090875 出土遺物



Ph.135　SK090876（南西から）

Fig.83　SK090876 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

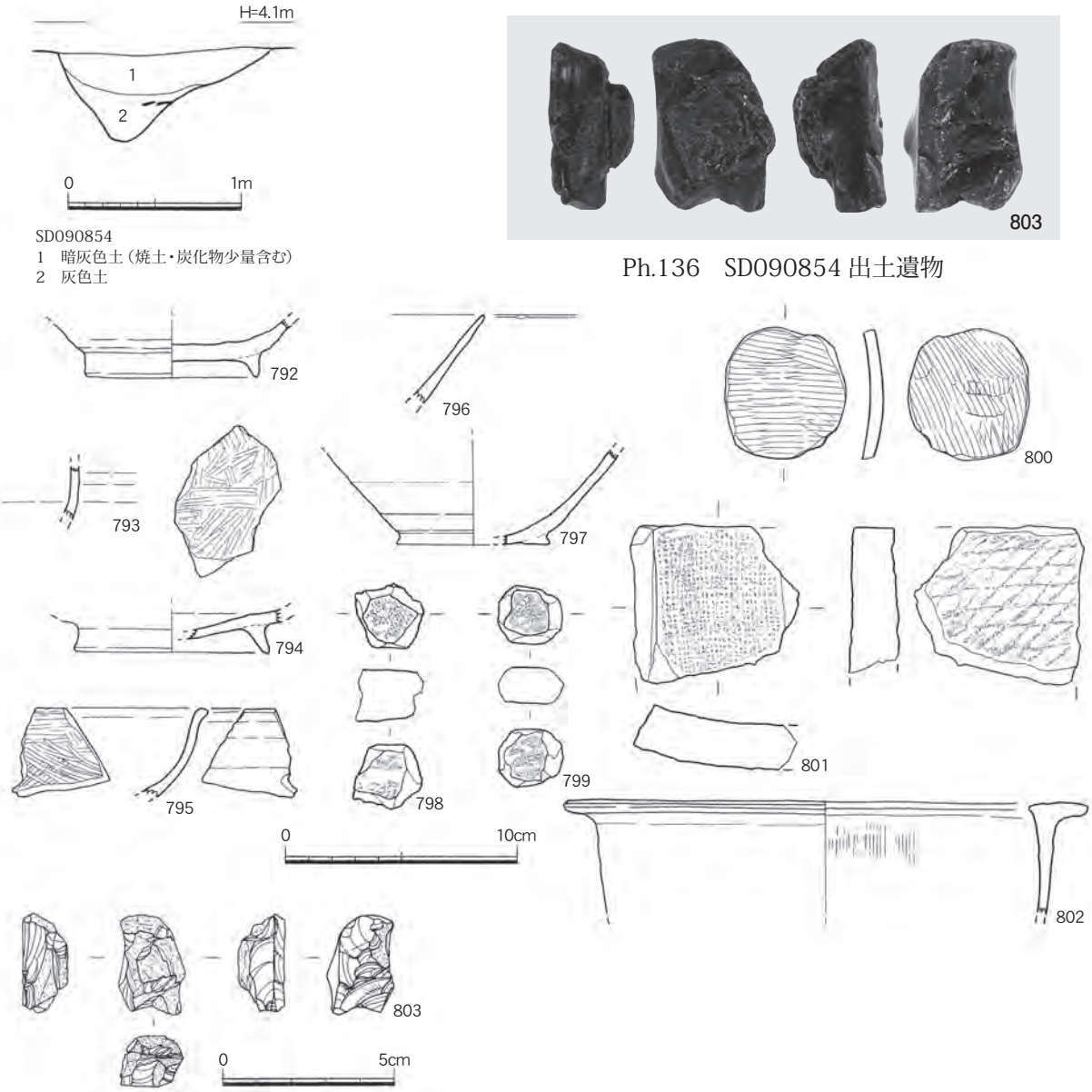
出土遺物（Fig.82　Ph.134）　780 は瓦器椀で、外面は回転ナデで調整した後、部分的に横方向の研磨を施す。内面は横方向の研磨調整をした後、縦方向に疎らな磨きを行う。781 は初期龍泉窯系青磁の碗である。口縁部下に鈍い屈曲点をもち、体部はラッパ状に開く。外面に片彫風の縦刀で縦線を施し、内面には片彫花文を描く。高台畳付部は釉を掻き取る。他に回転ヘラ切り底の土師器、珪石等が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK090875（Fig.82　Ph.133）　調査区東側に位置し、SK090874 に北側を切られる。平面プランは楕円形で、長径 1.7m、短径 1.4m、深さは 50cm を測る。断面は逆台形を呈し、覆土は焼土を含む灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.82　Ph.134）　782 は円筒形の銅芯である。断面は直径 0.4cm 、長さは 3.2cm を測る。783 は須恵質の平瓦で、焼成は良好である。凸面は格子目叩き、凹面には細かい布目が残る。側面は工具によるナデを施し、面取りを行う。784 は白磁の小碗で、口縁は緩やかに外反し、口縁下に沈線が巡る。785 は施釉陶器の四耳壺の底部片で、碁笥底の底部をもち、体部下半に細長い胎土目が残る。胎土は砂粒を含む灰色の粘性土で、灰緑色の釉がかかる。他にヘラ切り底の土師器、青白磁片、連玉（Ⅲ -34 Fig.22-511）、不明ガラス製品（Ⅲ -34 Fig.23・24）、ガラス坩堝、珪石、炉壁が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK090876（Fig.83　Ph.135）　調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延びる。東西方向 1.8m 以上、南北方向 1.1m 以上を測る。深さは 0.75m で、ほぼ平坦な床面から壁は緩やかに立ち上がる。覆土は炭化物を少量含む灰色土である。

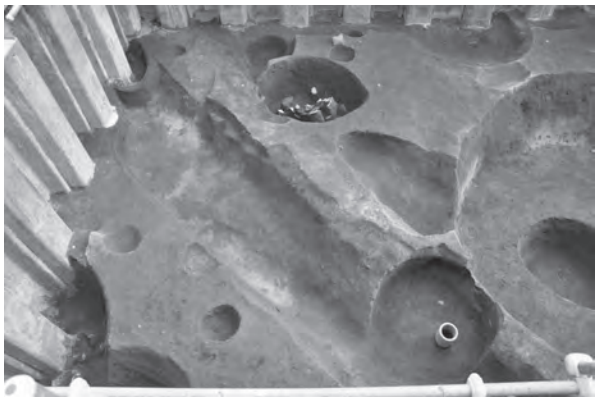
出土遺物（Fig.83）　786 は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径は 8.3cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を少量含み、色調は明橙色を呈する。787 は瓦器椀で、内面は縦方向の磨きを施す。外面体部下半は回転ヘラ削りののち、回転ナデで調整する。788 は白磁皿Ⅵ -1b 類、789 は白磁碗Ⅵ -1a 類、790 は白磁皿の底部片を使用した瓦玉で、高台周縁を丁寧に打ち欠



Ph.136　SD090854 出土遺物

Fig.84　SD090854 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/2）

Ph.137　SD090854 土層（北から）



Ph.138　SD090854（北東から）

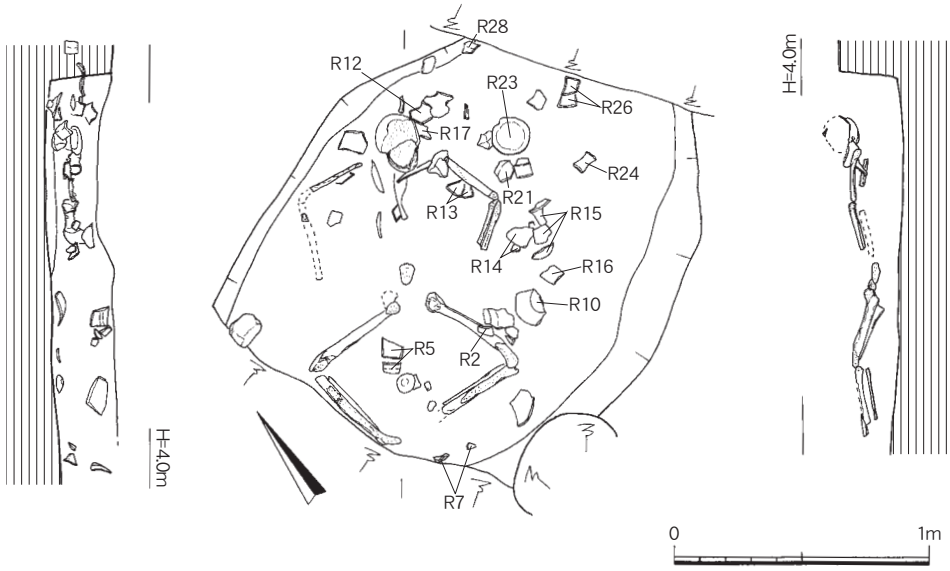


Fig.85　SX090893 実測図（1/30）

く。重さは 14.98g である。791 は天目茶碗の底部片で、明褐色の軟質な胎土に黒色釉がかかる。他に回転ヘラ切り底の土師器、瓦器、白磁碗Ⅳ類、Ⅴ類、青白磁、ガラスの小玉（Ⅲ -34 Fig.22-492）、棒状のガラス（Ⅲ -34 Fig.22-534）、ガラス坩堝が出土する。土坑の時期は 12 世紀前半と考えらえる。

（3）溝（SD）

SD090854（Fig.84　Ph.137・138）　調査区東側に位置し、北側と南側は査区外へ延びる。直線的に延び、主軸方位は N-6°-W である。長さ 4.5m を検出し、幅は 1.2m、最深部 0.5m を測る。底面は南側で標高 3.55m、北側で標高 3.4m と北側へ向かってわずかに傾斜する。断面「V」字状を呈し、土層は大きく 2 層に分かれる。上層は炭化物、焼土をわずかに含む暗灰色土、下層は灰色土である。

出土遺物（Fig.84　Ph.136）　792 は土師器の椀で、高台は細く、外に開く。微細な金雲母を多量に含み、色調は明橙色を呈する。793 は畿内産の緑釉陶器で、灰色の良質な胎土に明緑色の釉がかかる。794・795 は黒色土器 A 類で、幅の細い磨きが施される。796・797 は越州窯系青磁碗で、796 の口縁部は輪花を有する。797 はⅡ -1b 類で、蛇ノ目高台を有し、内面見込みと高台畳付けに目跡が残る。798 は須恵質、799 は土師質の瓦玉で、798 の凸面は叩き、凹面は布目が残る。799 は磨滅が著しい。重さは 798 が 17.49g、799 が 10.44g を量る。800 は弥生土器を使用した円盤状土製品である。内外面ともに刷毛目が施される。重さは 21.88g である。801 は瓦質の平瓦で、外面は格子目叩き、内面は細かい布目が残る。側面は切り離し後、未調整である。802・803 は下層の遺物の混入で、802 は須玖式土器の甕である。803 は黒曜石で、風化した剥離面をもつ原石である。不純物、白色砂粒を含み、漆黒色を呈する。重さは 8.6g を量る。自然面の状況から角礫と思われる。他にヘラ切り底の土師器、滑石片、砂岩製の砥石が出土する。土坑の時期は出土遺物から 10 世紀後半と考えらえる。

（4）土壙墓（SX）

SX090893（Fig.85　Ph.139~146）　調査区中央南側に位置する。北側を SE090709 に切られる。

Ph.139　SX090893 人骨検出状況（南西から）

Ph.140　S090893 人骨検出状況（北西から）

Ph.141　SX090893 上肢検出状況（南西から）

Ph.142　SX090893 人骨検出状況（東から）

Ph.143　SX090893 頭蓋骨検出状況（南西から）

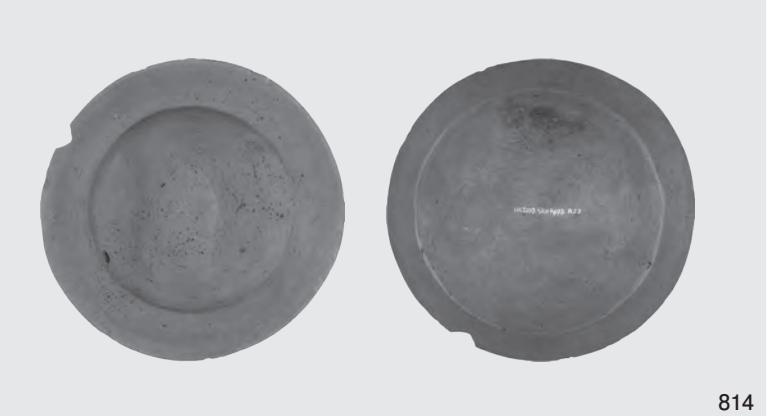
Ph.144　SX090893 頭蓋骨検出状況（東から）

Ph.145　SX090893 左上肢検出状況（北西から）

Ph.146　SX90893 下肢検出状況（南西から）

土坑の東西方向の長さは1.6m以上、南北方向は1.6mである。深さは約25cmを測り、床面はほぼ水平、壁は垂直に立ち上がる。遺構のほぼ中央に人骨を検出した。人骨の埋置方向は土坑の長軸方向ではなく、斜め45°短辺方向に振れる。上肢は左右ともに外に開き、下肢は膝を曲げ、左右外側に倒した姿勢で埋置されていた。人骨の遺存状況は悪く、取り上げる際にはもろく、砕けてしまう状態であった。性別は、四肢のサイズから男性の可能性が高く、年齢は頭蓋縫合および歯牙咬耗度から熟年と推定されるとのことであった（付編5参照）。覆土は茶褐色砂質土で、炭化物も少量混入する。周辺から出土した土器も完形に近いものも含まれるが、大多数は割れた破片であり、それが人骨の周囲、上、下に散乱した状況であった。廃棄土坑に人骨が置かれた状態で、きちんと埋葬されたとは考えられない状況である。

出土遺物（Fig.86　Ph.147）　804~807は弥生時代終末の甕である。804・805の口縁は頸部で外反し、端部は平坦におさめる。内外面ともに刷毛目で調整し、胎土には金雲母、白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。806は大型の甕で、口縁外面下には指オサエの痕跡が残る。807は近畿Ⅴ様式系の甕の底部片で、底部内面は放射状の刷毛目で調整される。808・809は土師器の甕で、808は布留系の口縁部片で、体部内面はヘラ削りで調整される。809の体部内面下半はヘラ削り、上半は刷毛目の後、ナデ、外面は刷毛目で調整するが、下半は疎らな横方向の磨きで仕上げる。810は短頸広口壺で、口縁部外面は刷毛目調整の後、縦方向の磨きを行う。811は東四国系の二重口縁壺か。肩部内面の指ナデ、指オサエが顕著である。812は鉢で、口縁は内湾する。内面は簾状の板ナデで調整する。813・814は小型丸底鉢で、813は内外面ともに刷毛目、内底部には812と同じ簾状の板ナデを行う。814はほぼ完形品で、体部下半は箆削りの後、斜方向の磨き、体部上半から口縁部内外面は横方向の磨き、体部内面はナデで仕上げる。内面頸部下には工具痕が残る。胎土は精良で、雲母が多量にみられる。色調は明橙色である。815は屈曲口縁鉢で、口縁部外面中位に段を有する。内外面ともに細かい横方向の研磨が施される。816・817は近畿Ⅴ様式系の高坏である。816は内外面ともに刷毛目で調整した後、疎らな磨きを施す。818は布留系の高坏で、坏部は丸みを帯び、口縁端部は外反する。胎土は精良で、色調は明橙色を呈する。坏部内外面は横方向のナデの後、縦方向の磨きを暗文風に施す。脚部と裾部の境には3箇所穿孔を有する。819は小型器台で、外面上半は指オサエ、内面上半は箆削りを行う。820は蛸壺で、横方向のナデで調整する。他にも弥生土器、土師器の小片が出土する。出土遺物は弥生時代終末と古墳時代前期の2時期があり、混在している。弥生時代終末の廃棄土坑を古墳時代前期に掘り返し、人骨を埋置した可能性も考えられるが、多量の土器とともに土を埋め戻すことは通常の墓としては考え難い。



Ph.147　SX090893出土遺物

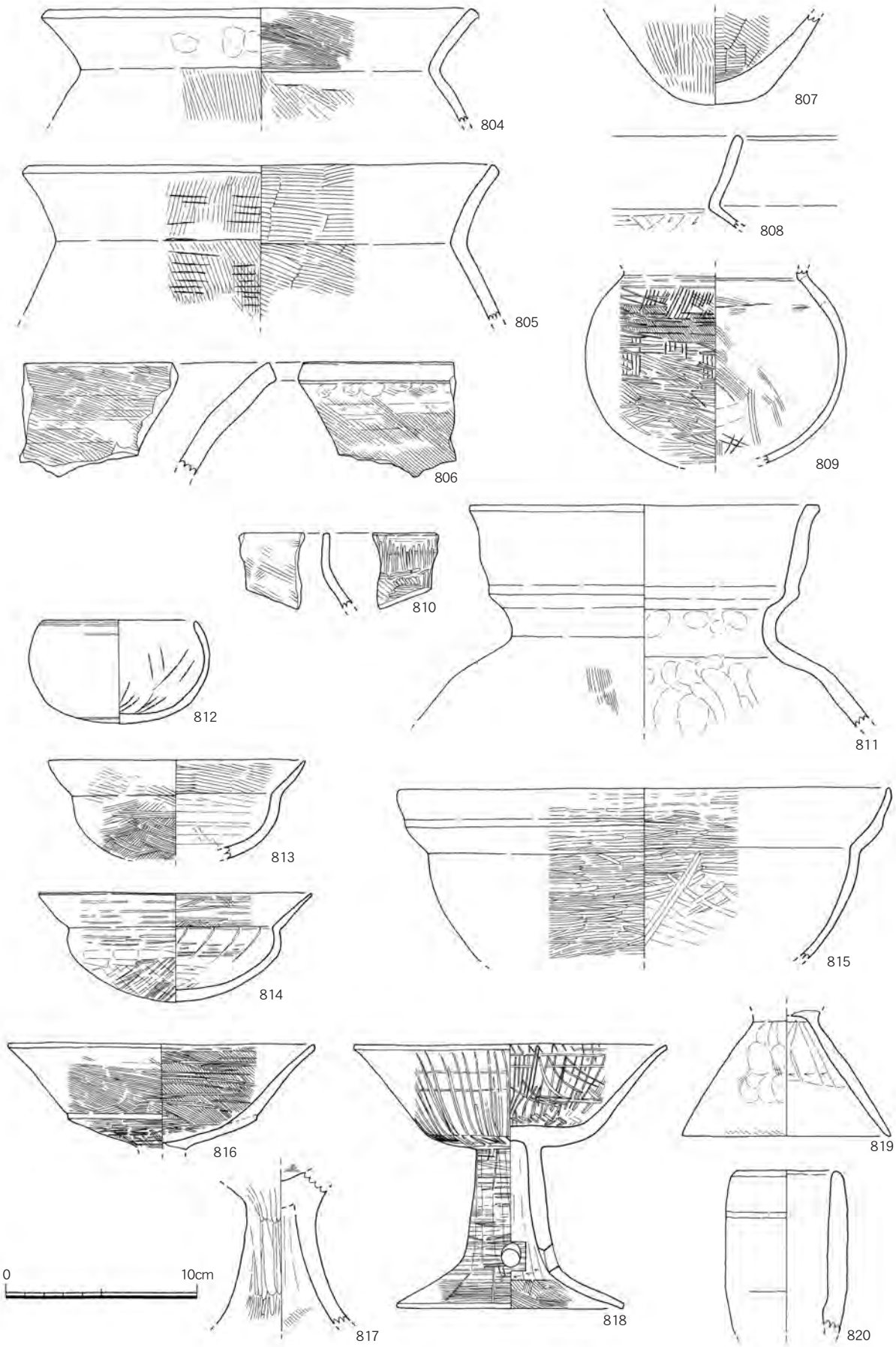


Fig.86　SX090893 出土遺物実測図（1/3）

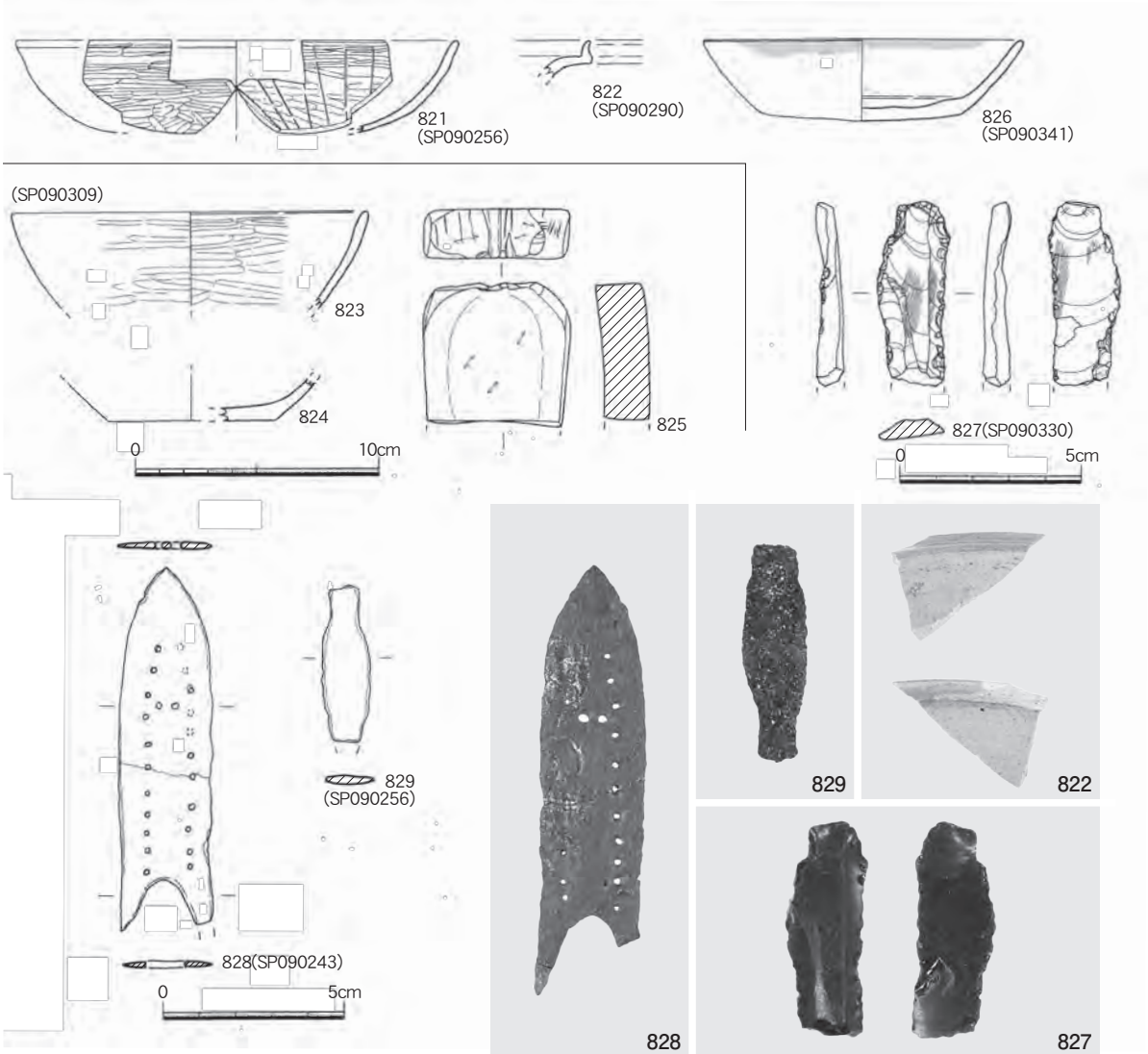


Fig.87　第 3 面 SP 出土遺物実測図①（1/3・1/2）

Ph.148　第 3 面 SP 出土遺物

（5）柱穴（SP）

SP 出土遺物（Fig.87・88　Ph.148）　821・829 は SP090256 出土遺物である。821 は土師器の鉢、829 は方形状の鉄片で、厚さ 0.3cm を測る。822 は SP090290 出土の防長産緑釉陶器の小壺の口縁部片で、胎土は灰橙色を呈し、淡緑色の釉がかかる。823~825 は SP090309 出土の遺物である。823 は土師器の椀、824 は回転ヘラ切り底の土師器の坏、825 は粘板岩製の砥石で、上下面、両側面ともによく使用され、器面は滑らかである。上端の面は幅 3.0~6.0mm の溝が残る。826 は SP090341 出土の土師器の坏で、底部は回転ヘラ切りで調整し、外底部に板状圧痕を有する。口縁部と内面底部に少量の煤が付着する。827 は SP090330 出土の縄文時代後期の黒曜石の石刃で、下端を欠損する。現存長 5.05cm、幅 2.0cm、厚さ 0.6cm、重さ 6.1g である。腹面中央左はガジリである。打圧面にはわずかに自然面を残す。不純物、白色砂粒を少量含み、漆黒色を呈する。背面基部の左側面は抉り状となり、右側面は斜めに調整する。剥離は背面の右側は主に背面から、左側の基端部周辺も背面からであるが、遠端部については背面と腹面の両側から行う。828 は長さ 10.0cm、身巾 2.6cm

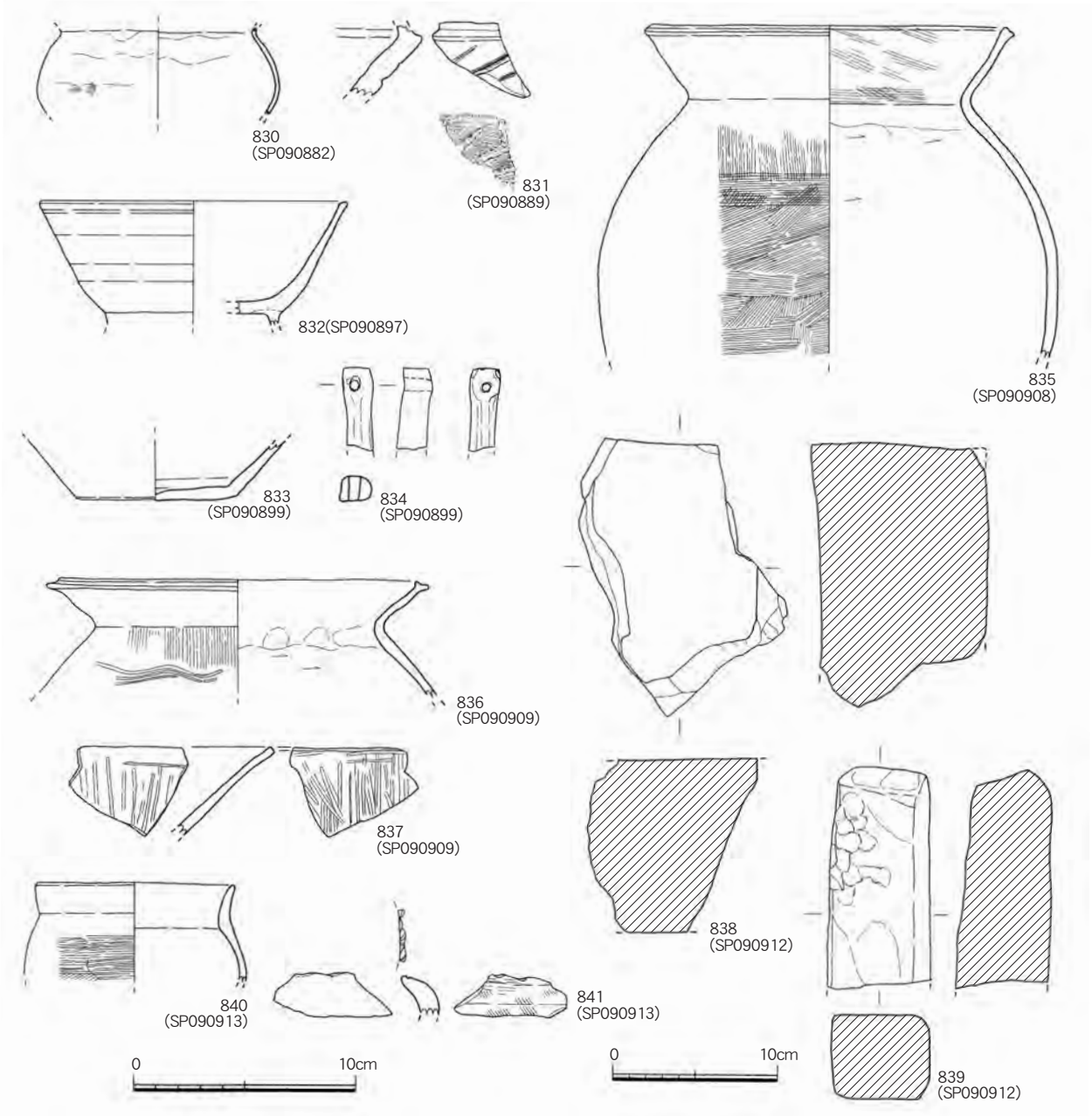


Fig.88　第 3 面 SP 出土遺物実測図②（1/3・1/4）

を測る無茎式の鉄鏃で、右脚を一部欠損する。鏨切り偏平なもので、身に径 1.0mm 未満の小孔が並ぶ。830 は SP090882 出土の手捏ねで作られた小型丸底壺である。831 は SP090889 出土の大型壺の口縁部片で、外面に工具による刻みが施される。832 は SP090897 出土の土師器の椀、833・834 は SP090899 出土で、833 は回転ヘラ切り底の土師器の坏、834 は上部に穿孔を有する土錘で、重さは 7.99g を量る。835 SP090908 出土の布留系甕で、外面に煤、内面に焦げが付着する。836・837 は SP090909 出土で、836 は布留系甕の口縁部で、端部は平坦におさめ、肩部に波状文を描く。837 は土師器の高坏坏部で、内外面に縦方向の疎らな磨きを施す。838・839 は SP090912 出土で、838 は砂岩製の大型の砥石の破片で、2 面が研磨面として残存する。839 は片岩製の敲石である。ともに被熱のためか、赤褐色を呈する。840・841 は SP090913 出土の弥生土器で、840 は小型の甕、841 は袋状口縁壺の口縁部で、口縁端部に刻みを施す。

5）第 4 面の調査（Fig.89　Ph.149・150）

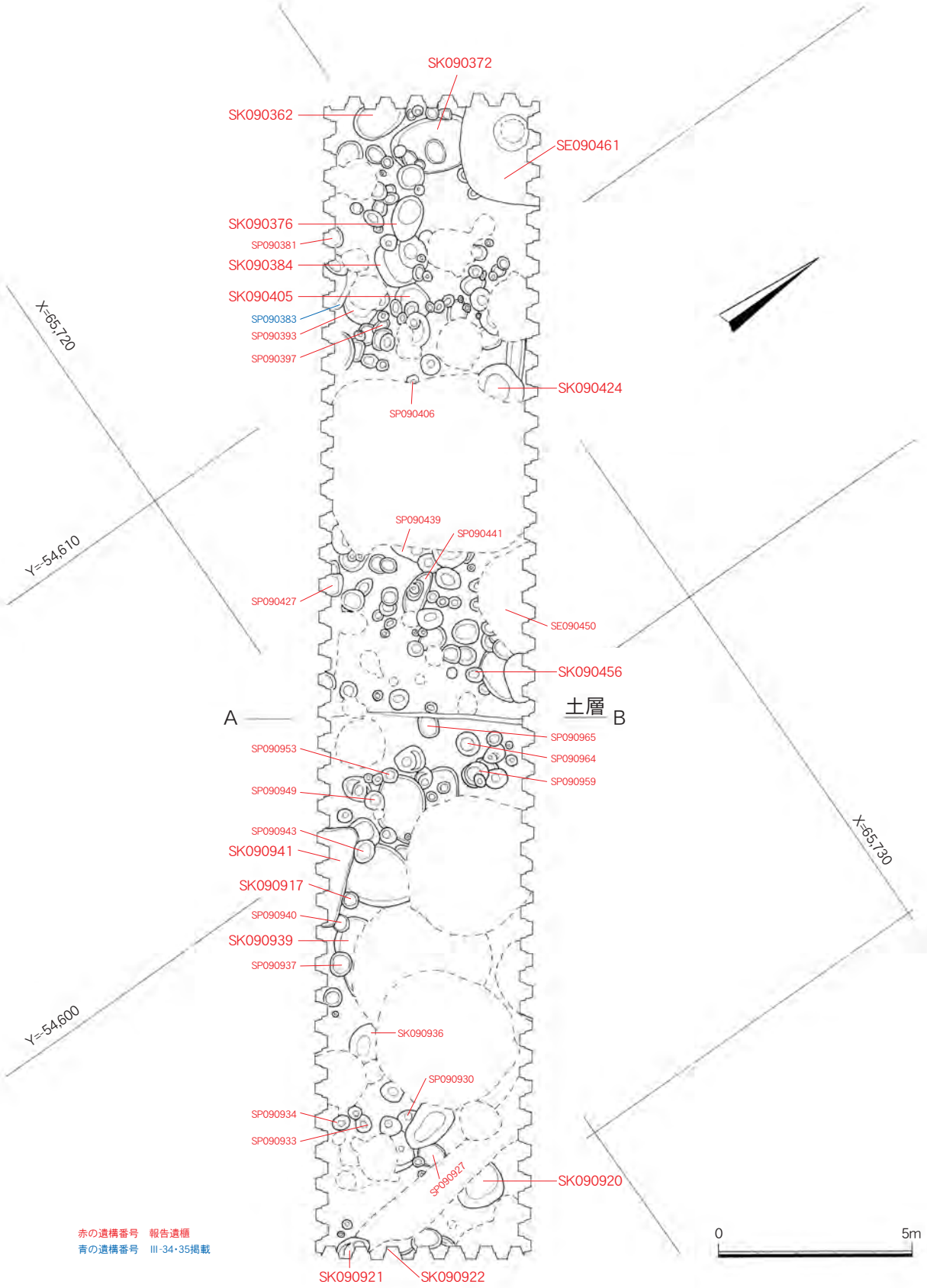
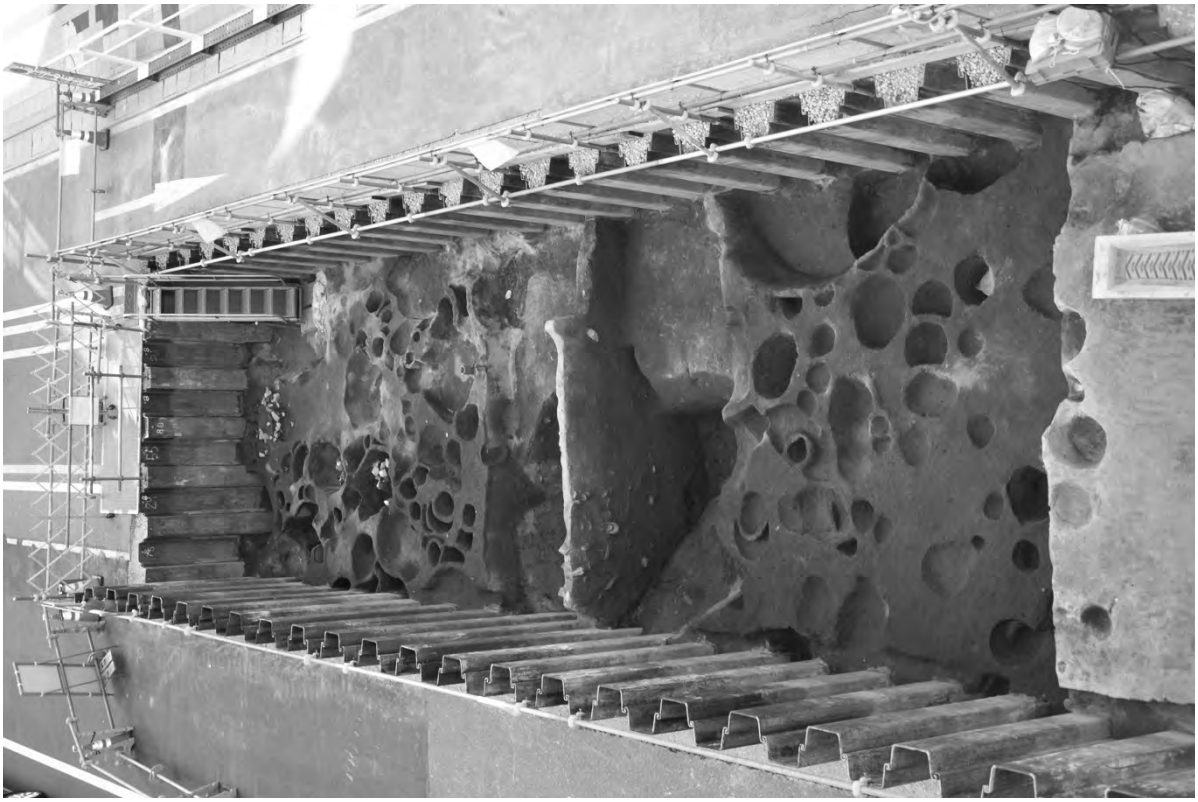
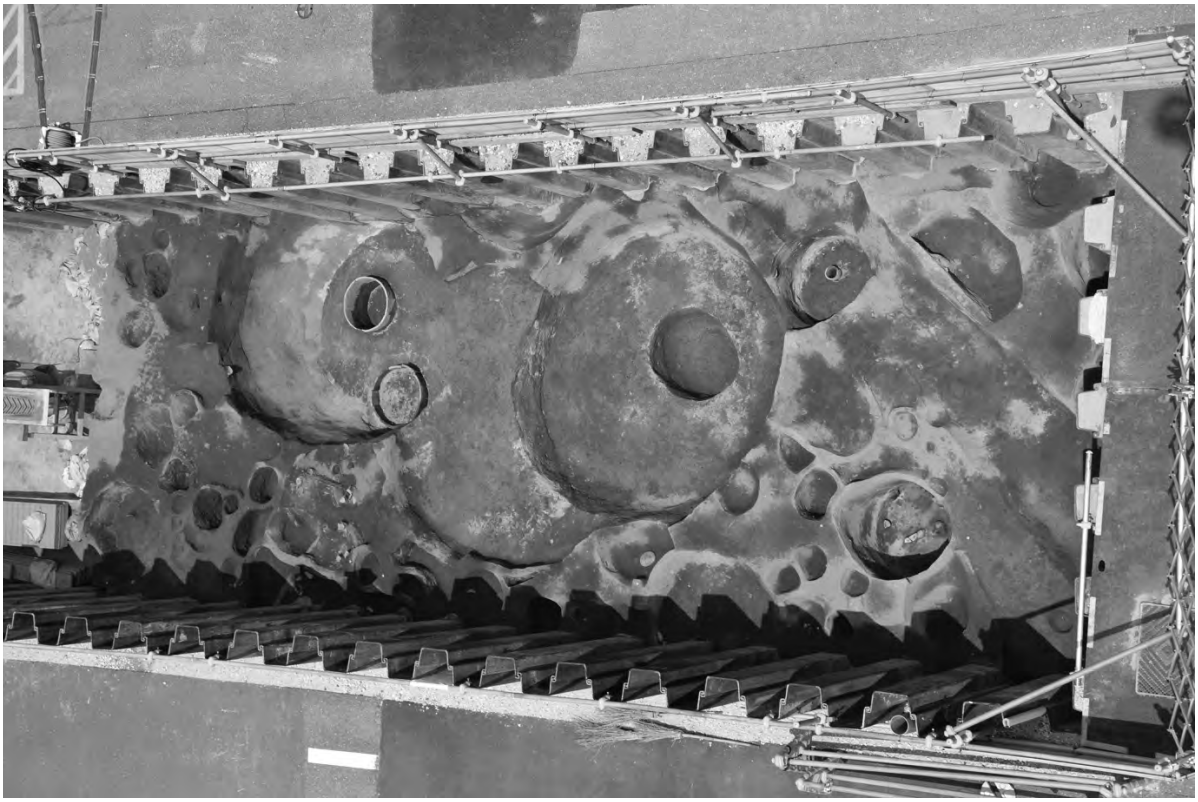


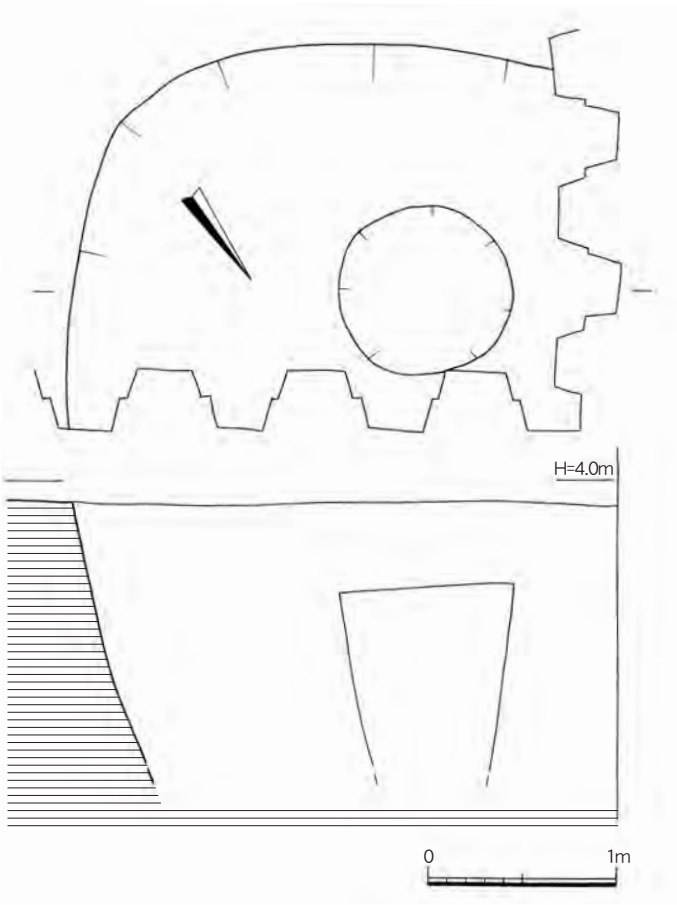
Fig.89　第 4 面全体図（1/150）



Ph.149　西側 4 面全景（南東から）



Ph.150　東側 4 面全景（南東から）



Ph.151　SE090461（北西から）

Ph.152　SE090461（南東から）

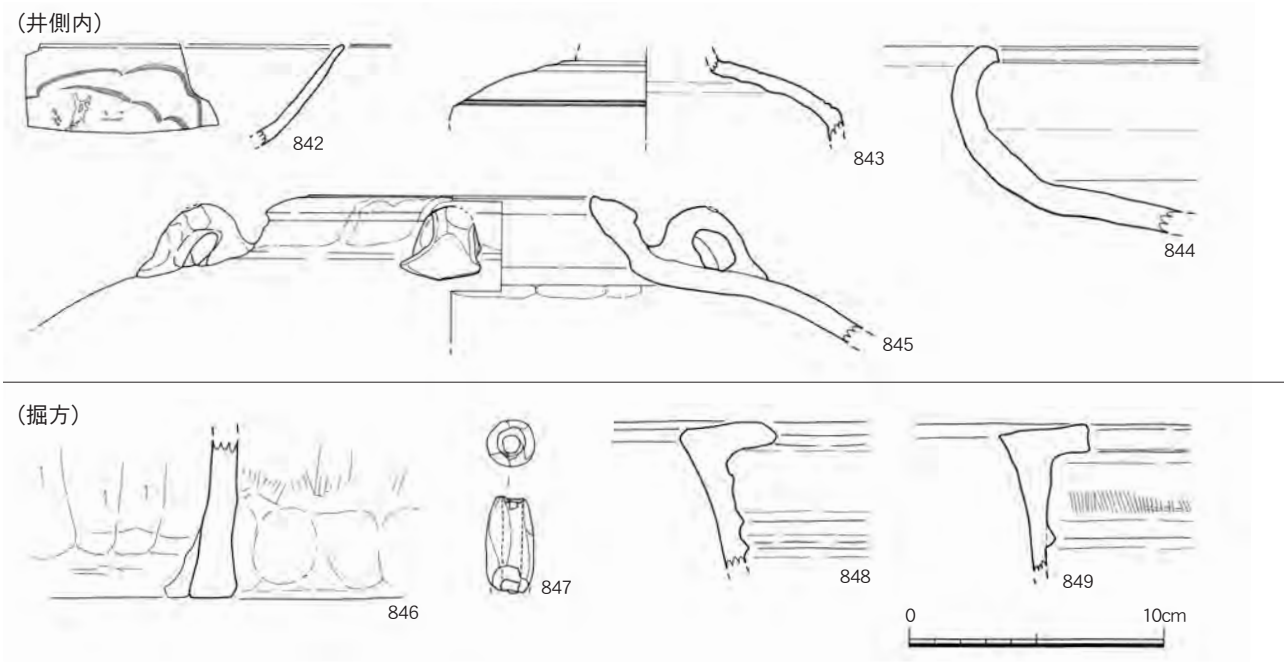


Fig.90　SE090461 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

第 4 面は道路面から約 1.6m 下の暗黄褐色シルトの上面で検出し、標高は東側が 3.8m、西側は 4.0m を測り、西側に向かってわずかに傾斜する。検出した主な遺構は井戸 1 基、土坑 12 基、柱穴である。上層に引き続き 11 世紀後半から 12 世紀前半の井戸や土坑を検出するが、上層で散見された古代や弥生時代終末から古墳時代前期にかけての遺構も多く見られるようになる。また古墳時代中期の土坑も 1 基確認した。

（1）井戸（SE）

SE090461（Fig.90　Ph.151・152）　調査区北西端に位置し、北側は調査区外へ延びる。掘方の平面は隅丸方形を呈すると思われる。調査区内で検出した壁面は、傾斜を急にする。井側は、検出面より 0.4m 下、標高 3.4m で確認した。直径 0.9m の円形で、標高 2.4m 付近になると直径 0.6m の円形となる。それより下は崩落の危険があるため、掘削しなかった。なお、井側等の木質は確認できなかった。

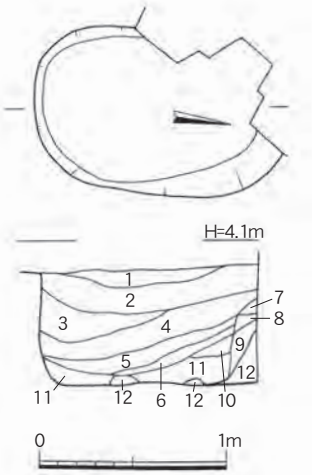
出土遺物（Fig.90）　842~845 は井側内から出土した遺物である。842・843 は越州窯系青磁、842 は碗の口縁部片で、内面に箆彫りで文様を描く。内面と外面に胎土目が付着する。843 は壺の肩部片で、頸部付近に 2 本の細い沈線が巡り、最大胴部径付近にはやや太めの 2 本の沈線を巡らす。844・845 は施釉陶器で、844 は壺である。頸部は短く、口縁は外反する。白色砂粒を多く含む胎土に、濁緑色の釉がかかる。845 は四耳壺で、縦位の耳が付く。砂粒を多量に含む軟質の胎土に、濁緑色の釉が体部外面下半にかかる。846~849 は掘方から出土した遺物である。846 は移動式竈の基底部で、外面は指オサエと縦方向の刷毛目、内面は縦方向の削りで調整される。847 は管状土錘で、一部欠損する。現状で重さは 12.3g である。848・849 は須玖式土器の甕である。逆「L」字状の口縁で、848 は口縁下に 2 条の三角突帯、849 は 1 条の三角突帯を有する。掘方からは他に白磁碗Ⅳ類、炉壁、鉄滓が出土する。井戸の時期は 11 世紀後半に掘削され、使用されたと考えらえる。

（2）土坑（SK）

SK090362（Fig.91　Ph.153・154）　調査区西側に位置し、西側は矢板に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.35m、短径 0.85m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で、深さは 60cm である。1・2 層は自然堆積の状況を呈し、灰色粘質土を主体とする。3 層は南側、4 層より下は北側から流れ込む。覆土は灰色粘質土、灰黒色粘質土、黄灰色砂質土、炭化物が細かく堆積する。

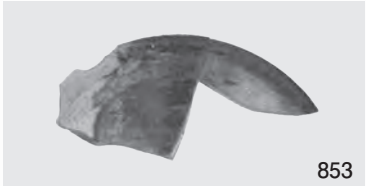
出土遺物（Fig .91　Ph.155）　850~852 は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径は 9.0~10.8cm を測る。851・852 は外底部に板状圧痕を有する。胎土は 850 が赤褐色粒を含み、851 は金雲母を多量に含む。色調はすべて橙色である。850 は口縁部から底部付近まで煤が付着し、燈明皿として利用される。853・854 は瓦器である。853 は小皿で、体部外面から内面にかけては磨きで調整され、内面底部にはジグザグ状の暗文が施される。焼成は良好であるが、部分的に黒色、茶灰色、橙色を呈する。854 は椀で、断面逆台形の低い高台が付く。体部外面上半から内面にかけては幅広の磨きで調整する。855~858 は白磁である。855 は皿Ⅵ -1a 類、856 は小碗で、径が小さく低い高台が付く。胎土は灰色を呈し、化粧土が施され、暗黄灰色の釉が体部下半までかかる。857 は白磁碗Ⅱ類で、小さな玉縁を有する。858 は碗Ⅳ -1a 類で、内面見込みに沈線を巡らす。859 は土師質の磚で、工具によるナデで調整される。他に金属坩堝（Ⅲ -34 Fig.3-35）が出土する。土坑の時期は 12 世紀前半と考えらえる。

SK090372（Fig.92　Ph.156~160）　調査区西側に位置し、北側は SE090461、西側もピットに切られる。遺物は集中して出土するが、掘り込み面を確認できなかったため、約 15cm 下げた段階で遺構プランを検出した。平面プランは楕円形を呈し、長径約 1.75m 以上、短径 1.4m を測る。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。大量の土器とともに頭大の砂岩、玄武岩が出土する。



SK090362
1　灰色粘質土
2　灰色粘質土に灰色シルト混入
3　灰色粘質土に褐色砂混入
4　灰色粘質土に黄褐色砂、褐色砂層状に混入
5　黄灰色砂質土に褐色砂層状に混入
6　炭化物層
7　灰黒色粘質土
8　灰色粘質土
9　灰黒色粘質土
10　褐色砂
11　暗灰色粘質土に褐色砂斑状に混入
12　黄褐色砂

Ph.153　SK090362 土層（東から）



Ph.155　SK090362 出土遺物

Ph.154　SK090362 完掘状況（東から）

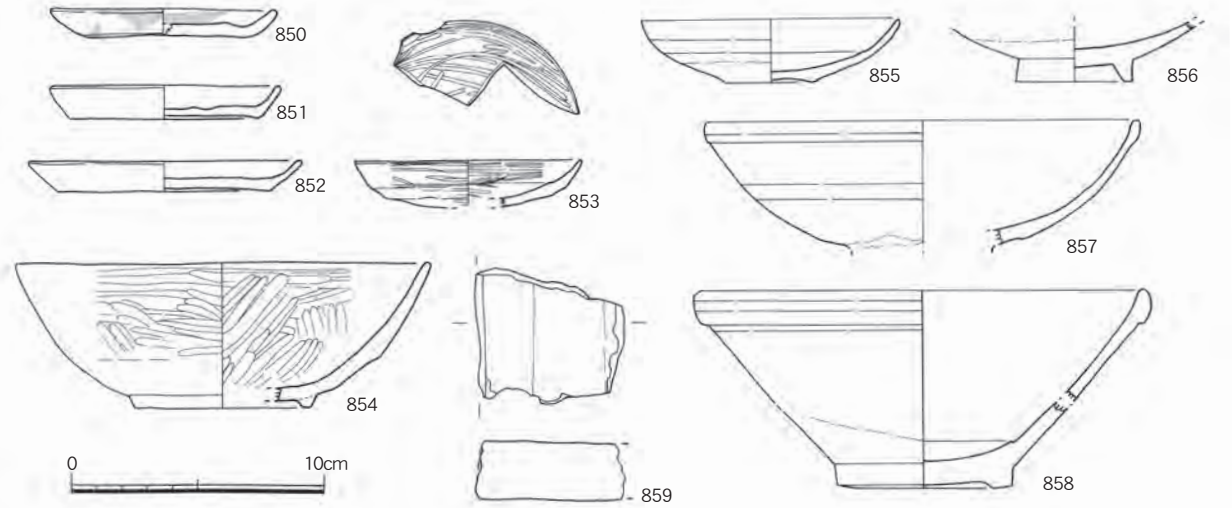


Fig.91　SK090362 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.93・94）　860・861 は土師器の甕で、860 の口縁は端部上面を強くナデるため中央が凹状に窪み、内面に突出する。体部から口縁への屈曲は緩く、不明瞭な稜線が入る。体部外面は刷毛目の後、叩き、内面は刷毛目の後、一部指オサエで調整される。胎土に金雲母を多量に含む。861 は丸底の底部で、内外面ともに刷毛目で調整され、底部内面の刷毛目は放射状となる。外面には多量の煤が付着する。862~864 は弥生土器の甕である。862・863 の口縁は体部から大きく外反し、口縁端部は方形に仕上げる。外面は縦方向、内面は横方向から斜方向の刷毛目で調整する。864 は凸レンズ状の底部をもち、胎土に多量の雲母を含む。底部外面に黒斑を有する。865・866 は大型の甕の体部片で、865 は断面台形の 2 条の突帯に工具による刻目を施す。866 は体部下半に 1 条の突帯を有する。内外面ともに刷毛目で調整する。867~870 は器台である。867 は受部と脚部の屈曲が比較的明瞭で、脚端部は工具によるナデを施す。868 は円筒形のタイプで、受部内面は横方向の細かい刷毛目で調整され、脚部内面は工具による縦方向のナデで仕上げる。胎土は白色砂粒、金雲母

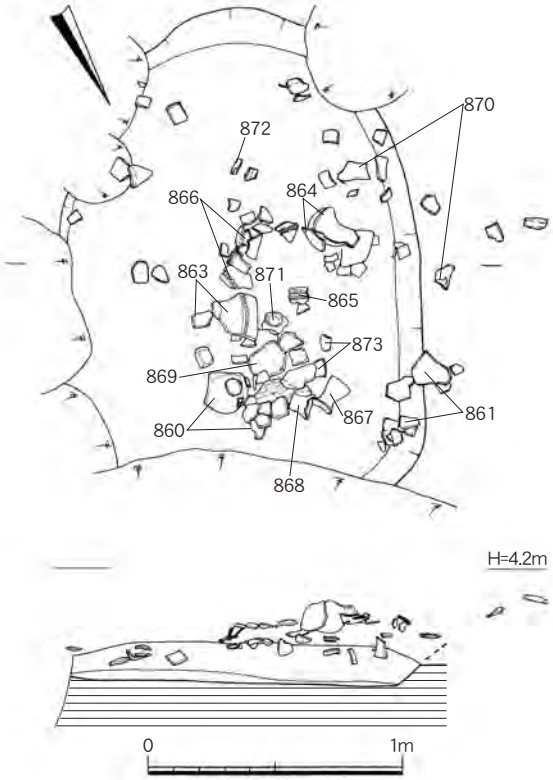


Fig.92　SK090372 実測図（1/30）

Ph.156　SK090372（北西から）

Ph.157　SK090372 北側（南東から）

Ph.158　SK090372 北側（北東から）

Ph.159　SK090372 北側（南西から）

Ph.160　SK090372 土器出土状況（南東から）

を多量に含み、色調は明褐色を呈する。869 は受部と脚部の境に明瞭な稜線が入り、受部内面は放射状の刷毛目で調整する。口縁端部には斜方向の刻みを施文する。脚部上位には焼成後の穿孔があり、外面から直径約 3.0cm 程度打ち欠き、直径 5.0mm の孔を開ける。外面の調整は縦方向の粗い刷毛目

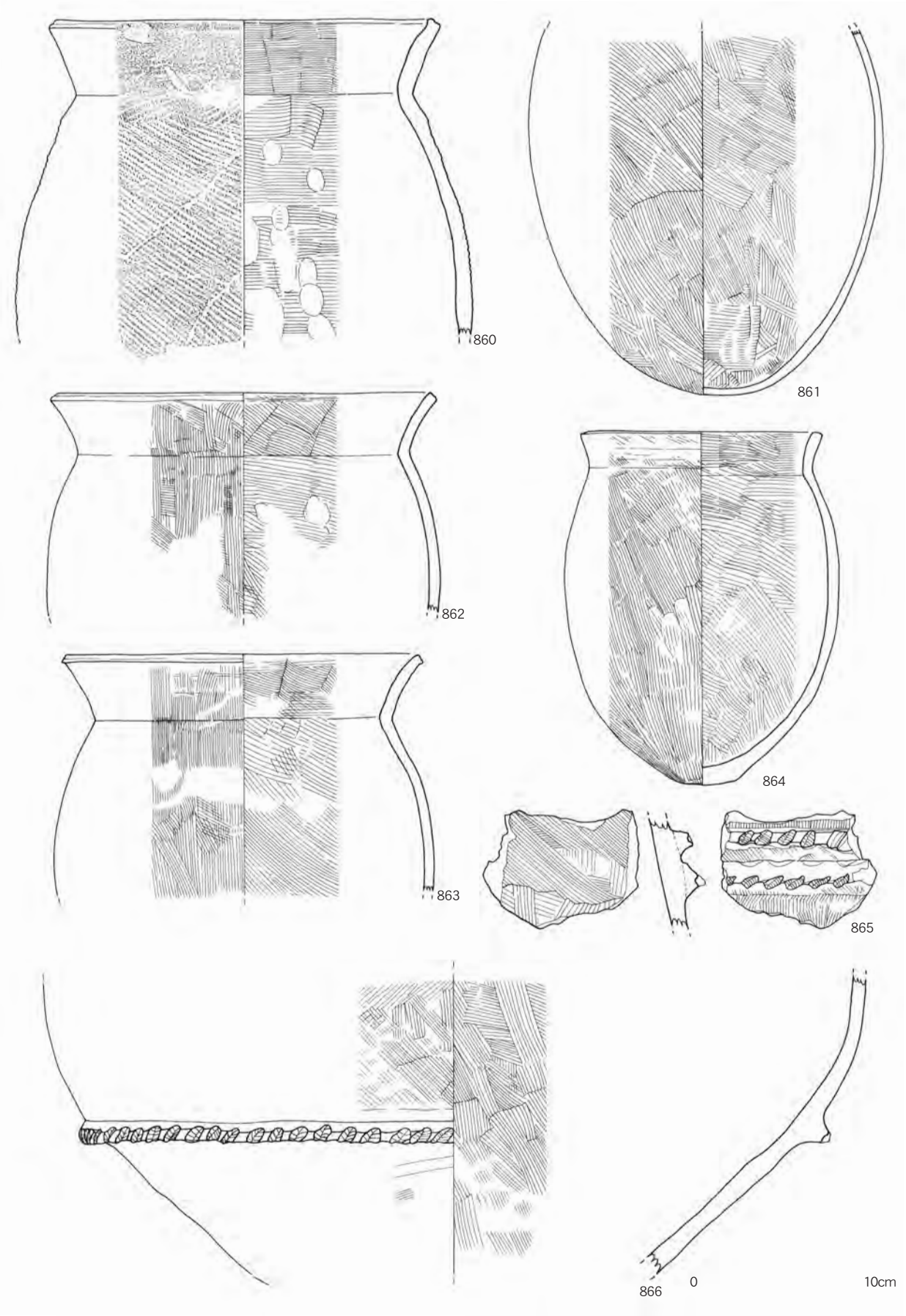


Fig.93　SK090372 出土遺物実測図①（1/3）

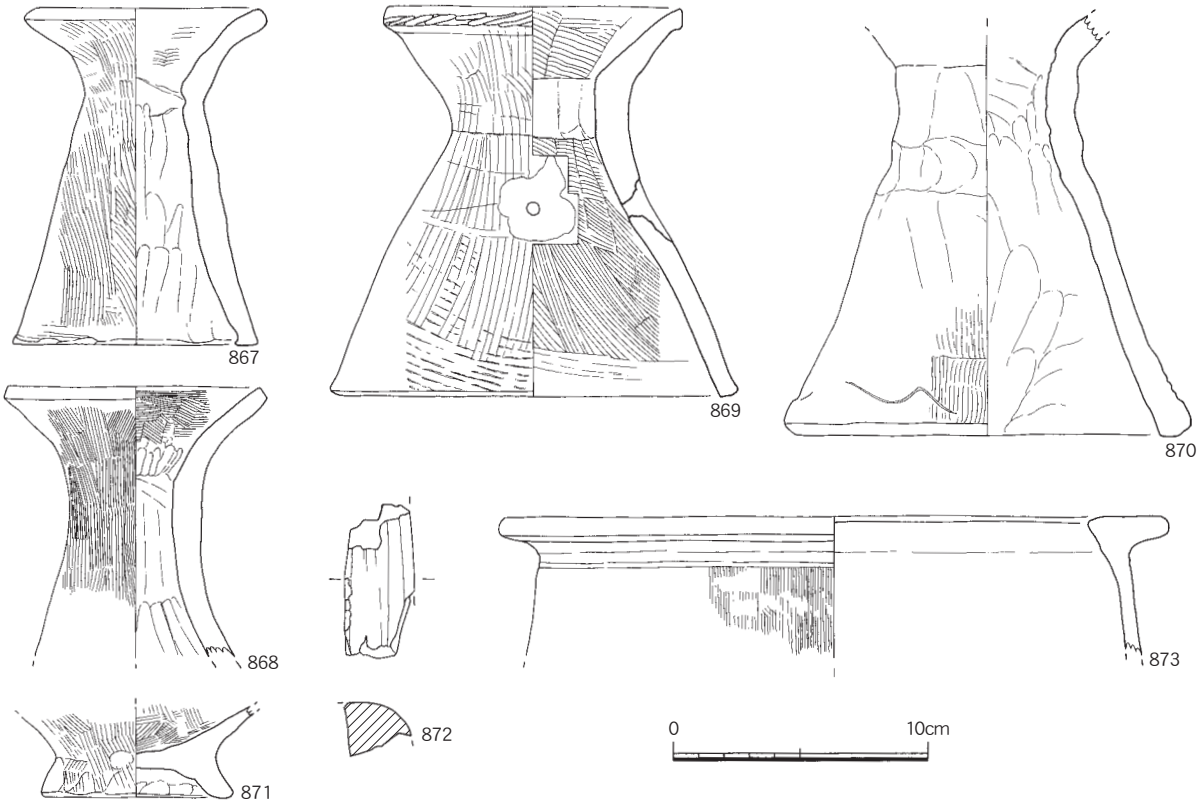


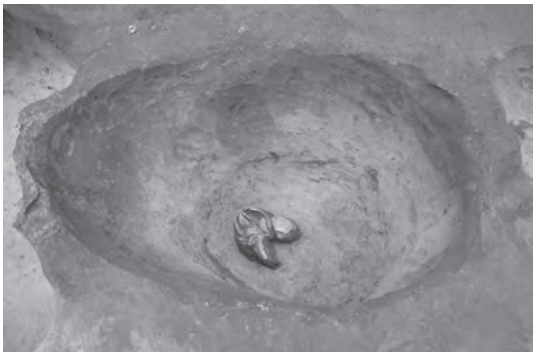
Fig.94　SK090372 出土遺物実測図②（1/3）

である。870 は受部と脚部の境は不明瞭で、脚部中位は指オサエにより凹状に窪む。調整は工具による縦方向のナデを主体とし、部分的に指ナデを行う。871 は脚付鉢で、内外面ともに刷毛目で調整する。872 は粘板岩製の砥石の小片である。研磨により、稜線が器面に入る。873 は下層の遺物の混入で、須玖式土器の甕である。口縁下端に煤が付着する。出土遺物より土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭である。

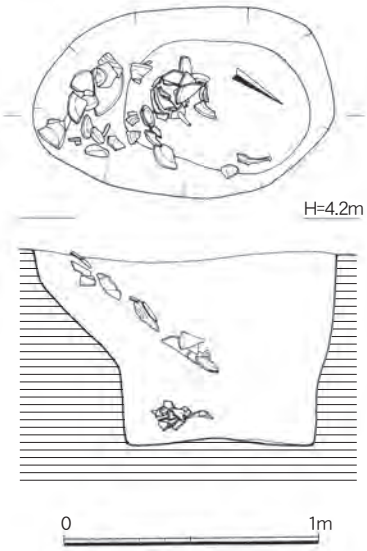
SK090376（Fig.95　Ph.161・162）　調査区西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.2m、短径 0.75m、深さは 0.7m を測る。底面はほぼ水平で、西側の壁はほぼ垂直である。東側の壁は床面から約 30cm 程度、垂直に立ち上がり、それより上は緩やかとなる。覆土は茶灰色シルトで、炭化物が多量に混入する。大量の土師器、陶磁器が廃棄され、床面近くでは水注（909）が、一部破損はするが、ほぼ完形に近い形で出土した。土層からは東から西側へ向かって、遺物が投入される状況が窺える。

出土遺物（Fig.95・96　Ph.163）　874~890 は土師器である。874~876 は回転ヘラ切り底の小皿である。874・875 は成形、胎土、色調とも非常に類似しており、口径は 8.6cm を測る。内底部は明瞭な回転ナデにより凸凹状を呈し、中央部分を平行にナデて仕上げる。外底部もヘラ切り後、ナデを行う。胎土は少量の金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。876 は口径 9.4cm を測り、接合するとほぼ完形となる。外底部に板状圧痕を有する。877~882 は回転糸切り底の小皿で、口径は 8.8~10.6cm を測る。882 以外は外底部に板状圧痕を有し、色調は明橙色である。882 は暗橙色を呈する。880 は口縁をわずかに欠損するが、ほぼ完形で、口縁内面に煤が付着する。883 はヘラ切り底の高台付皿である。884~889 は回転糸切り底の坏で、口径 15.0~16.0cm を測る。884・886・888 は外底部に板状圧痕を有し、885 の底部はナデで仕上げられる。884 の内外面と 887 の内面に煤が付着し、灯明皿として利用される。890~894 は瓦器で、890 は小皿である。891~894 は椀で、

Ph.161　SK090376 上層（南西から）



Ph.162　SK090376 下層（北東から）



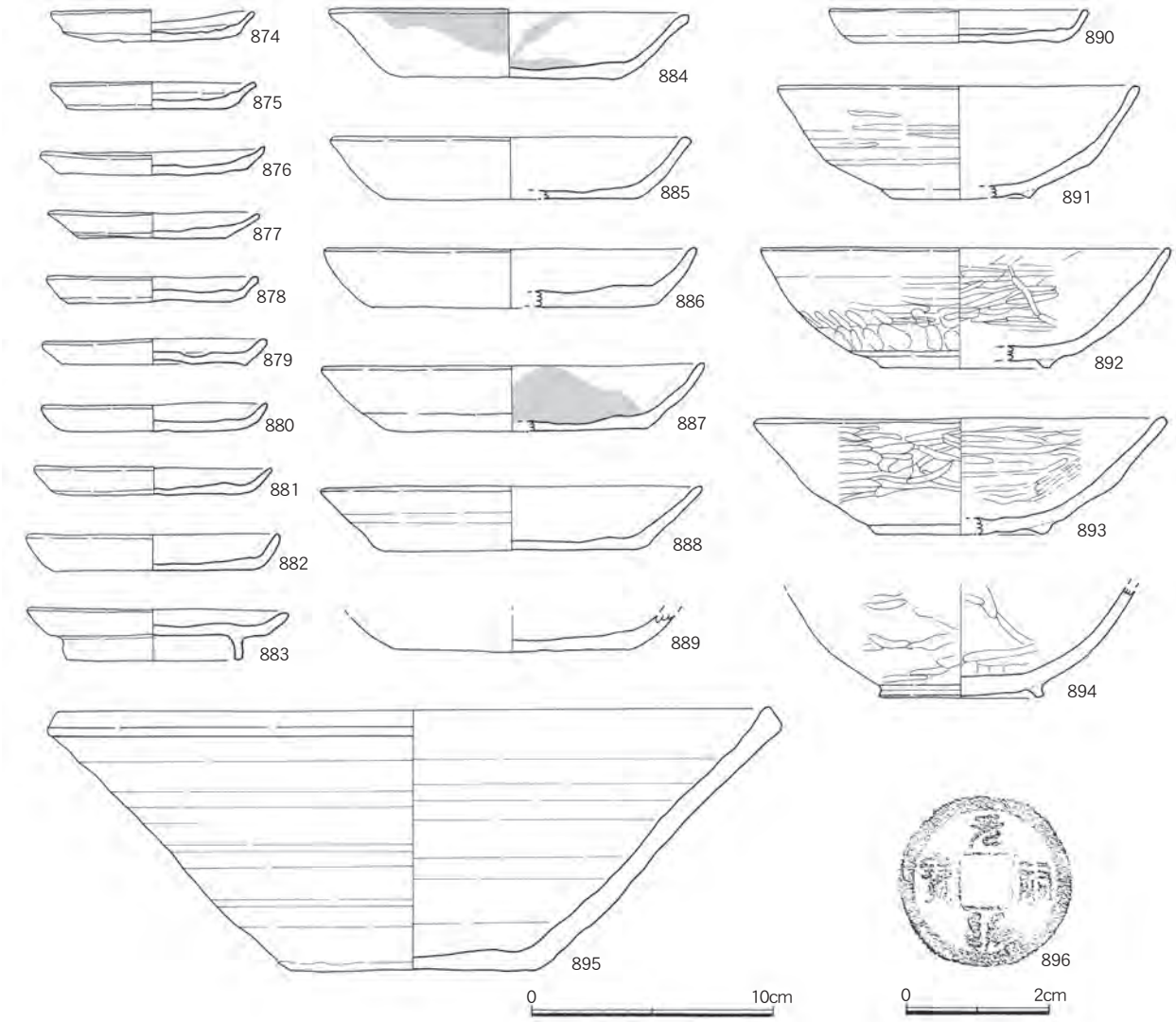


Fig.95　SK090376 実測図（1/30）および出土遺物実測図①（1/3・1/1）

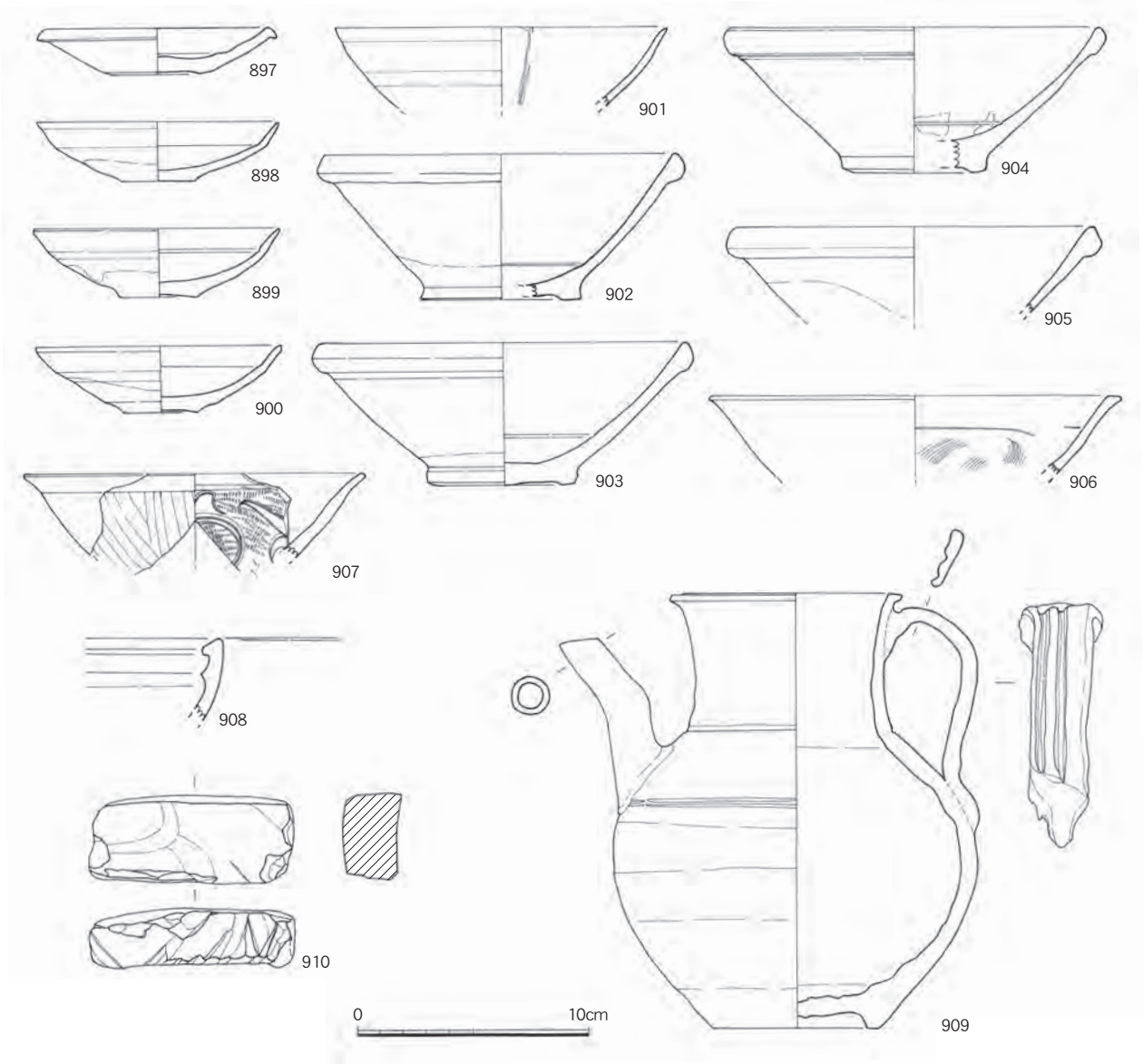


Fig.96　SK090376 出土遺物実測図②（1/3）

891~893 は浅く、低い三角形の高台を付す。894 の体部は丸みをもって立ち上がり、高台は前者に較べると高く、断面も方形を呈し、外に踏ん張る。895 は東播系須恵器の鉢で、回転糸切りの底部をもつ。896 は北宋代の銅銭で、「元符通寳」（初鋳年：1098 年）である。897 ～ 906 は白磁である。897 は皿Ⅳ -2a 類、898~900 は Ⅵ -1a 類、901 は碗Ⅱ -3b 類で、内面を白堆線で分割する。902~905 は碗Ⅳ -1a 類で内面見込みに沈線を有する。906 は碗Ⅴ -4b 類で、内面に短い櫛目で花文を描く。907

Ph.163　SK090376 出土遺物

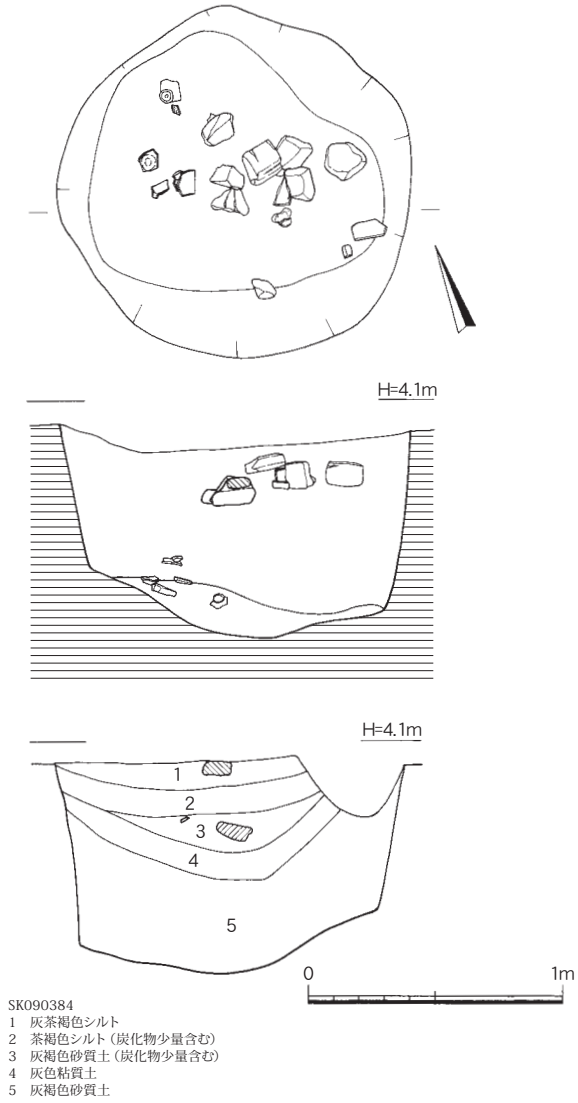
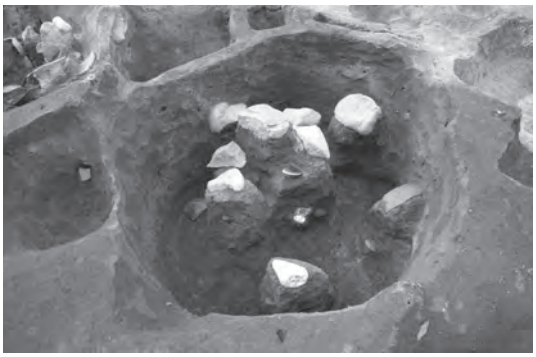


Fig.97　SK090384 実測図（1/30）



Ph.164　SK090384 上層（南から）

Ph.165　SK090384 下層（東から）

Ph.166　SK090384 土層（北から）

は初期龍泉窯系青磁の碗である。体部はラッパ状に開き、外面に片彫風の縦刀で縦線を施し、内面には片彫花文を描く。908 は無釉陶器の鉢である。909 は下層出土の施釉陶器の水注で、底部を一部欠損する。体部は球状で、輪状高台が付く。体部中位よりやや上に 2 条の沈線が巡る。やや茶色を帯びた濃緑色釉が全面にかかり、高台畳付には目跡が残る。910 は滑石製石鍋の転用品で、全面研磨される。重さは 127.9g を量る。他に鉄滓が出土する。土坑の時期は 12 世紀前半と考えらえる。

SK090384（Fig.97　Ph.164~166）　調査区西側に位置する。平面プランは直径 1.4m の円形を呈する。底面は中央部が最も深くなり、深さは 0.8m である。覆土は 1~4 層と 5 層の大きく 2 つに分かれる。別の遺構かとも考えたが、平面プランや出土遺物から一つの遺構と捉えた。上層からは礫岩、砂岩等とともに少量の陶磁器が、西側床面付近からはまとまって陶磁器が出土した。

出土遺物（Fig.98）　911~913 は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径は 9.0~9.6cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に多量の金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。914 は須恵質土器の平底の鉢で、底部は箆で切り離し、未調整である。915 は黒色土器 A 類の椀で、内面は横方向の密な研磨を施す。916 は土師器の椀で、器壁が厚く、高台は底部と体部の境に付く。917~920 は白

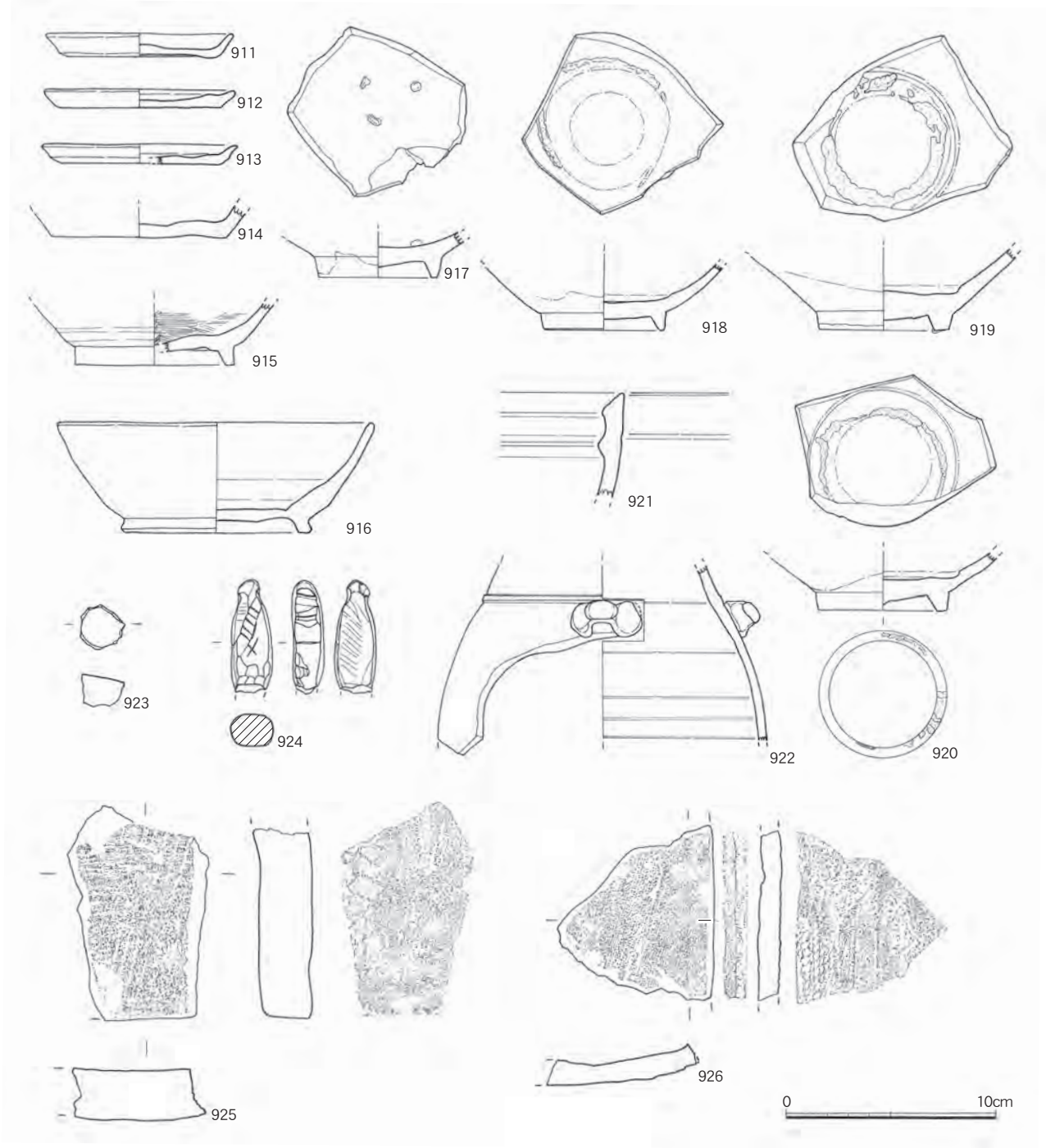
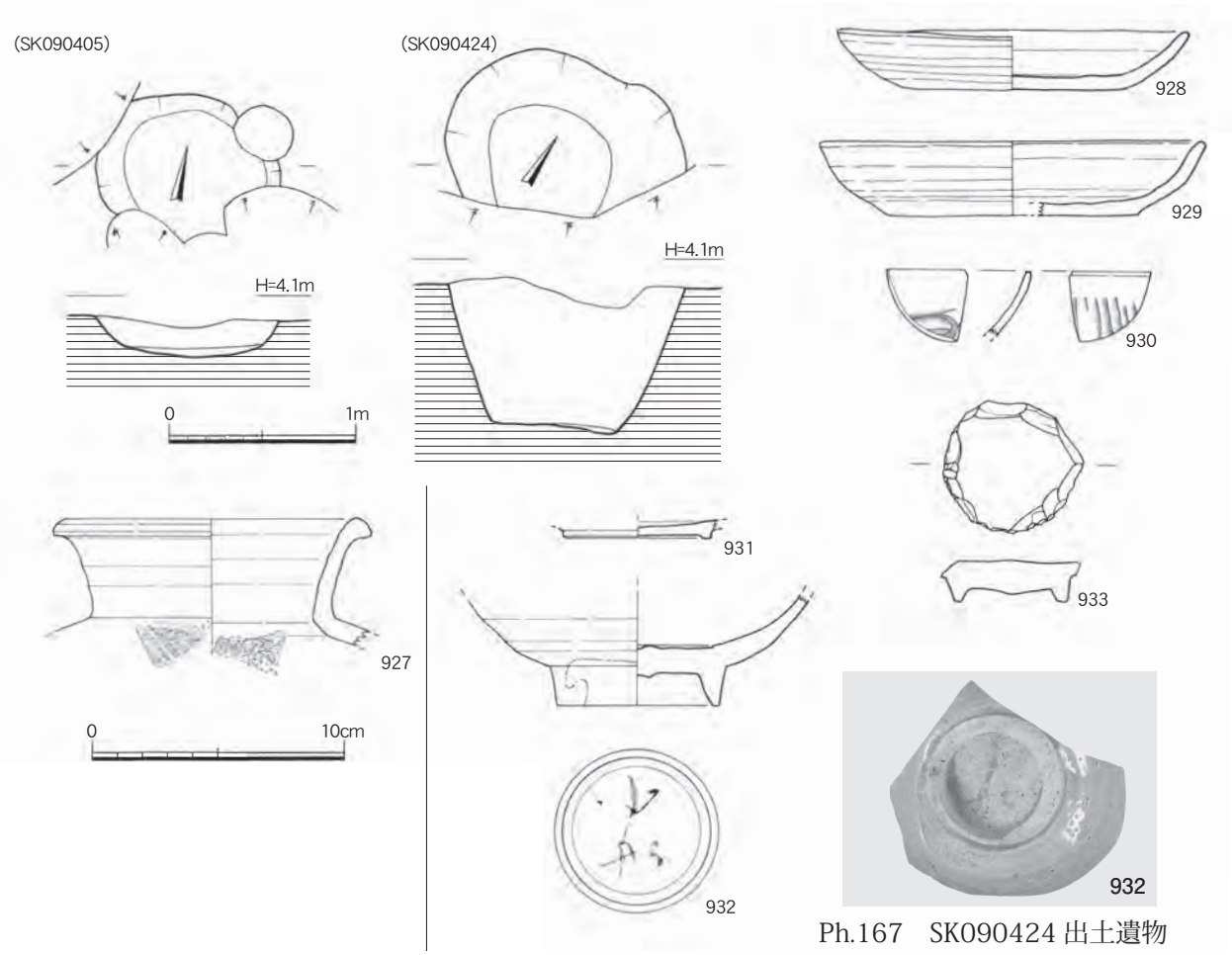


Fig.98　SK090384 出土遺物実測図（1/3）

磁である。917 は碗Ⅷ-0 類で、見込みは広く平坦で、見込みの釉を掻き取らない。内面見込みと高台内に胎土目が残る。918~920 は碗Ⅷ類で、内面見込みの釉を輪状に掻きとる。921 は無釉陶器の鉢の口縁部片、922 は施釉陶器の四耳壺で、横方向の耳が付く。灰色の胎土に濃緑色の釉がかかる。923 は施釉陶器を使用した瓦玉で、灰黒色の胎土に灰色釉がかかる。重さは 7.6g である。924 は滑石製の錘か。上端は茎状に抉りを入れ、下端は欠損するが、欠損部でわずかに凹状となる。現状で 28.8g である。925 は須恵質の平瓦で、凸面は格子目叩き、凹面には細かい布目が残り、部分的に工具によるナデを施す。凹面には多量の煤が付着する。926 は須恵質の平瓦で、凸面は縄目叩き、凹面には布目が残り、側面は切り離し後、未調整である。他に滑石製石鍋片、ガラス製品（Ⅲ-34 Fig.23-528）、ガラス坩堝（Ⅲ-34 Fig.25-555）、リシア（含紅雲母）雲母（Ⅲ-34 Fig.31-620）が出土する。土坑の時期は、12 世紀中頃と考えらえる。



Ph.167　SK090424 出土遺物

Fig.99　SK090405・090424（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK090405（Fig.99）　調査区西側に位置し、東側は他の遺構に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径約 1.0m、短径約 0.8m を測る。底面は中央がやや深くなる。深さは 20cm で、覆土は灰褐色シルトを主体とし、炭化物を含む。

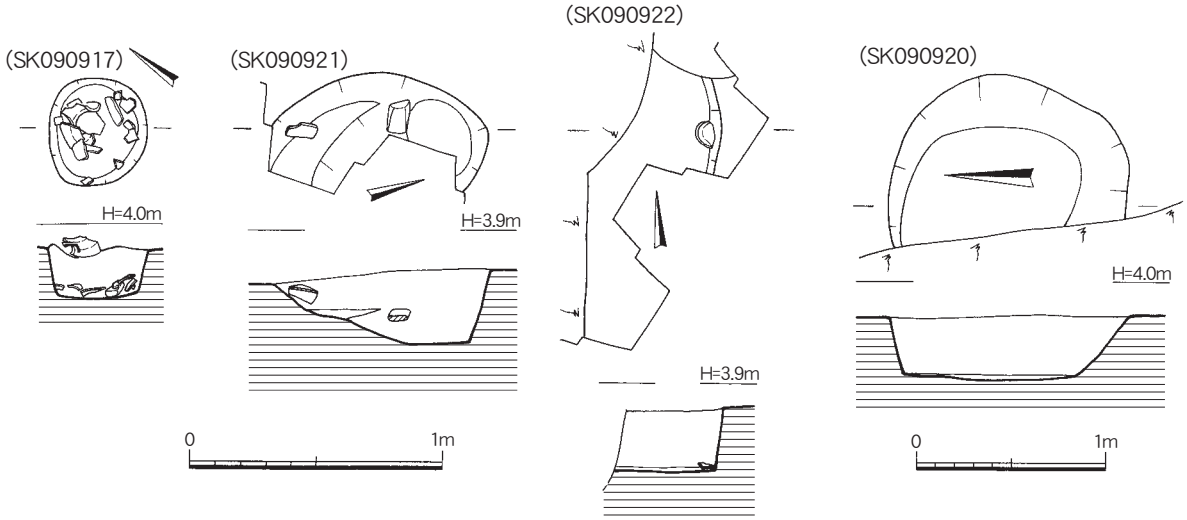
出土遺物（Fig.99）　927 は赤焼土の甕である。体部外面は叩き、内面は当て具痕がわずかに残る。胎土に白色砂粒を含み、色調は褐色である。他に土師器片が出土し、土坑の時期は 6 世紀末から 7 世紀初頭と考えられる。

SK090424（Fig.99）　調査区西側に位置し、東側を SE090094 に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.3m、短径 0.8m 以上を測る。断面は逆台形で、深さは 80cm である。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.99　Ph.167）　928・929 は回転糸切り底の土師器の坏で、口径 14.0cm、15.4cm を測る。929 は外底部に板状圧痕を有する。930 は同安窯系青磁碗の口縁部片、931 は白磁の小碗の底部片で、化粧土を施し、やや青緑色を帯びた白色釉がかかる。932 は白磁碗Ⅴ類の底部片で、高台内に「小舩」墨書が残る。933 は龍泉窯系青磁碗の高台を使用した瓦玉で、重さは 54.0g を量る。他にガラス坩堝等が出土し、土坑の時期は 12 世紀中頃である。

SK090917（Fig.100　Ph.168）　調査区中央に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 0.4m、深さ 0.2m を測る。遺物は下層から小片、上層から壺の口縁部が出土した。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.100）　934 は山陰系二重口縁壺で、外面には羽状文を施す。935 は土師器の高坏の脚部である。出土遺物より土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。



Ph.168　SK090917（北東から）

Ph.169　SK090920（東から）

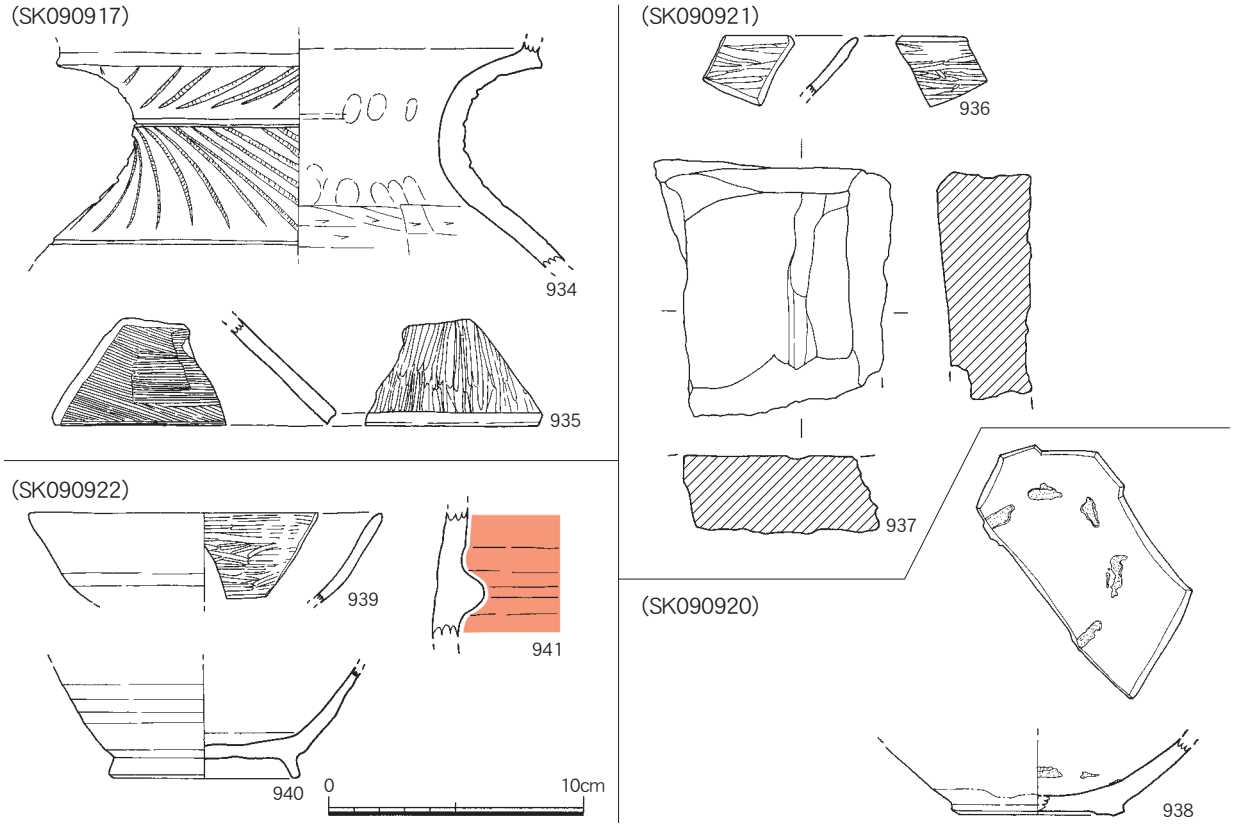


Fig.100　SK090917・090921・090922・090920 実測図（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK090920（Fig.100　Ph.169）　調査区東側に位置し、西側をSD090854に切られる。南北方向の長さは1.2mを測る。床面はほぼ水平で、深さは30cmである。覆土は灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.100）　938は素質な越州窯系青磁碗Ⅱ類で、釉の発色が悪く、ムラがある。胎土も黒色の斑点を含む。内面見込みには輪状に胎土目が付着する。内外面に煤が付着し、二次焼成を受ける。他にヘラ切り底の土師器が出土する。土坑の時期は古代末と思われる。

SK090921（Fig.100）　調査区東側に位置し、遺構の大半は東側の調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.1mである。南側にテラスを有し、北側が一段低くなり、深さは0.6mを測る。覆土は茶褐色シルトを主体とし、炭化物と橙色土が斑状に混入する。

出土遺物（Fig.100）　936は黒色土器B類の椀で、胎土に微細な銀雲母を多量に含む。937は砂岩製の砥石で、1面のみ砥面が遺存する。土坑の時期は出土遺物から古代末と考えらえる。

SK090922（Fig.100）　調査区東側に位置し、西側はSD090854に切られ、東側は調査区外へ延びる。深さは50cmを測り、床面はほぼ水平である。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.100）　939は黒色土器A類の椀の口縁部片、940は須恵器の高台付坏で、底部内面は器面が滑らかであり、研磨されたと思われる。941は下層の遺物の混入であるが、円筒埴輪の小片である。内外面に赤色顔料が付着する。出土遺物から9世紀後半と考えられる。

SK090939（Fig.101）　調査区中央に位置し、北側をSE090879に切られる。深さは25cmを測り、底面はほぼ水平である。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.101）　942は土師器の小型甕で、口縁は頸部から大きく外反する。943は布留系の甕と思われるが、調整が異なり、内面はナデを施す。外面は横方向の刷毛目調整の後、頸部下は縦方向の刷毛目、その下は斜め方向の刷毛目、ヘラ削りで仕上げられる。外面には煤が付着する。944は土師器の精製の鉢で、器面の厚さから底部と思われる。底部を安定させるためか、直径1.5cmと直径1.0cmの剥離が焼成後に行われる。945は山陰系の二重口縁壺で、口縁下端の稜は明瞭である。946は土師器の長頸壺で、頸部に突帯を巡らす。胎土は精良で、色調は明橙色を呈する。947はミニチュア土器の二重口縁壺である。出土遺物の大半は古墳時代前期のものであるが、942は古墳時代中期であり、土坑はこの時期と考えられる。

SK090941（Fig.101）　調査区中央に位置し、南側が調査区外へ延びる。平面プランは方形を呈し、東西方向は長さ2.6mを測る。深さは0.25mで、底面は遺物がまとまって出土する東側が最も深い。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.101）　948・950は弥生土器の甕、949は土師器の甕で体部内面は削りで調整する。951・952は精製の小型丸底壺で、細い横方向の磨きが施される。953は布留系の高坏で、刷毛目調整の後、細く密な磨きが全面に施され、丁寧なつくりである。954は精製の小型直口鉢で、内外面ともに研磨調整を行う。955は鉢の口縁部で、外面は粗い叩きが残る。土坑からは破片であるが、精製の土器が多く出土する。時期は古墳時代前期と考えられる。

（3）ピット（SP）

SP090456（Fig.102　Ph.170）　調査区中央に位置する。平面プランは直径0.4~0.5mの略円形を呈し、深さは30cmである。厚さ18cmの偏平な変成岩を床面に置き、根石として使用したと考えられる。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が出土する。

SP出土遺物（Fig.102・103　Ph.171）　956はSP090381出土の土師器の高坏で、横方向の疎らな磨きのため、刷毛目が残る。957~960はSP090393出土である。957・958は回転ヘラ切り底

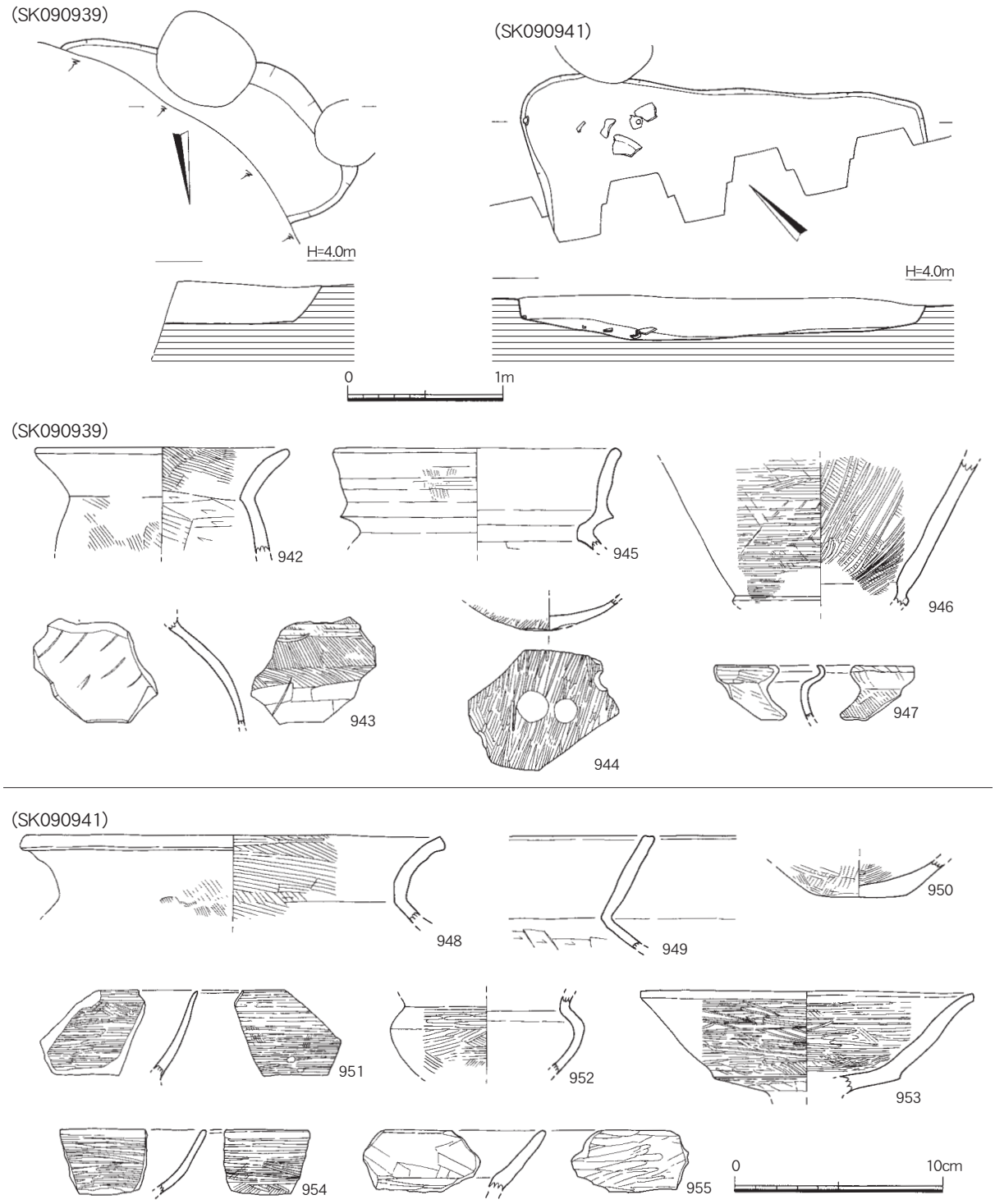
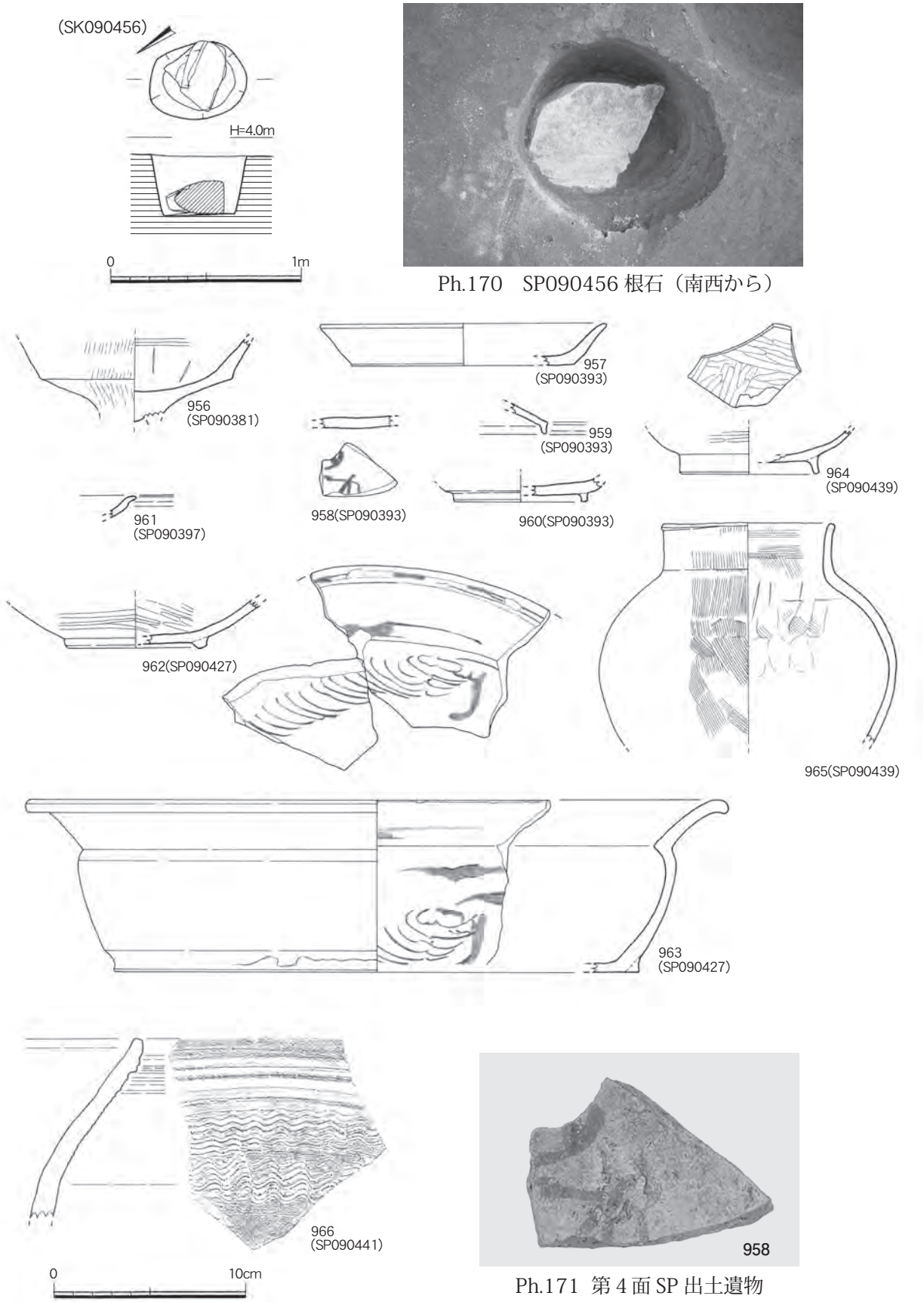


Fig.101　SK090939・090941 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

の土師器の坏で、958 の外底部には墨書が残る。959 は須恵器の坏蓋で、口縁は端部でわずかに折り曲げる。960 は須恵器の高台付坏である。961 は SP090397 出土の灰釉陶器の皿である。白色砂粒、黒色粒を含む灰色の胎土に灰色の釉がかかる。962・963 は SP090427 出土で、962 は瓦器椀、963 は施釉陶器の盤で、内面に鉄絵が描かれ、黄味を帯びた灰緑色の釉がかかる。口縁上面には胎土目が残る。964・965 は SP090439 出土で、964 は黒色土器 B 類の椀、965 は弥生土器の広口短頸壺で、内外面ともに刷毛目、体部内目指オサエで調整する。966 は SP090441 出土の須恵器の大甕で、外面には沈線と波状文を施す。967・968 は SP090927 出土の弥生土器で、967 は高坏で内面にジグザグ状の暗文を施す。968 は中期の壺の底部片で、外底部は一部剥落する。969・970 は SP090930



Ph.170　SP090456 根石（南西から）

Ph.171　第 4 面 SP 出土遺物

Fig.102　SP090456 実測図（1/30）および
第 4 面 SP 出土遺物実測図①（1/3）

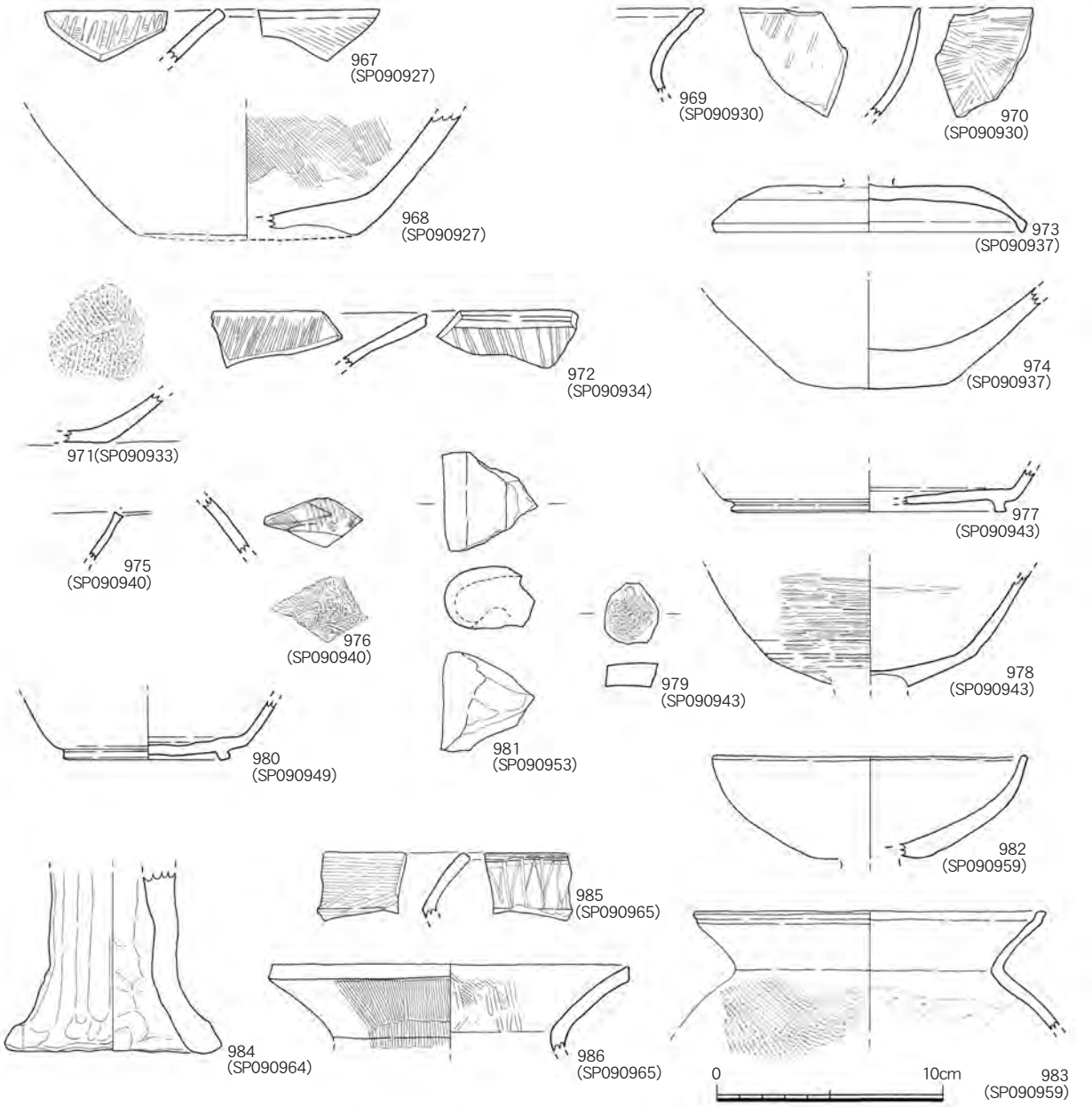


Fig.103　第 4 面 SP 出土遺物実測図②（1/3）

出土の土師器で、969 は布留系の甕、970 は鉢で、細く、疎らな磨きを施す。971 は SP090933 出土の近畿Ⅴ様式系の甕の底部片である。972 は SP090934 出土の弥生土器の高坏で、内外面に暗文風の磨きを施す。973・974 は SP090937 出土で、973 は須恵器の坏蓋で、天井部は回転ヘラ削りである。974 は弥生後期後半の甕の底部片である。975・976 は SP090940 出土で、975 は布留系の甕、976 は壺の肩部片か。外面は刷毛目調整の後、縦方向の磨き、線刻を施す。977~979 は SP090943 出土で、977 は須恵器の高台付坏身、978 は布留系の高坏、979 は須恵器を使用した瓦玉で、重さは 7.35g である。980 は SP090949 出土の須恵器の高台付坏身、981 は SP090953 出土の土製品で、下面は平坦であるが、上面はやや丸味を帯びる。982・983 は SP090959 出土で、982 は脚付鉢、983 は庄内系の甕である。984 は SP090964 出土の支脚、985・986 は SP090965 出土の広口壺で、985 の外面はナデの後、三角状の暗文を施す。

6）第 5 面の調査（Fig.104　Ph.172・173）

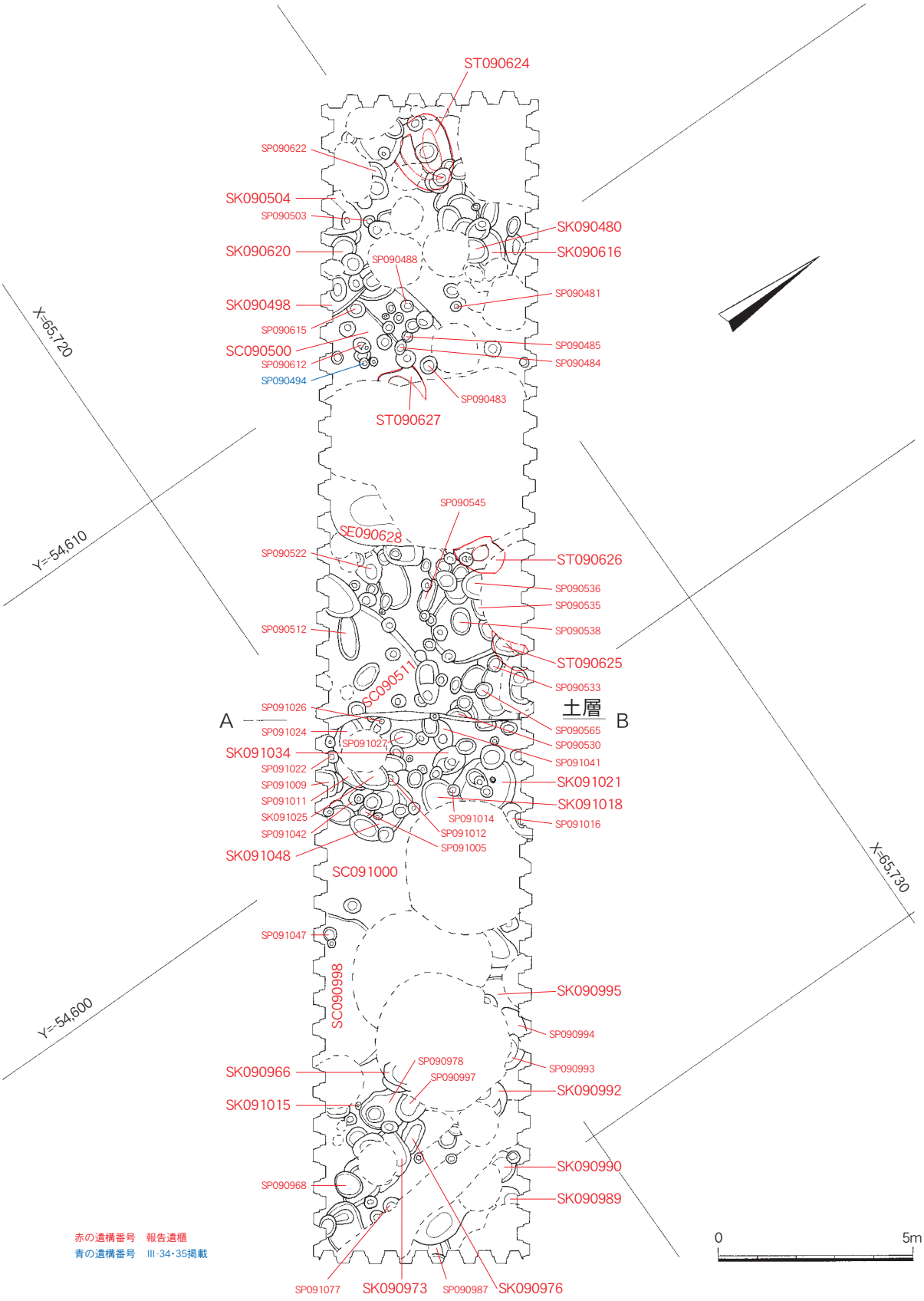
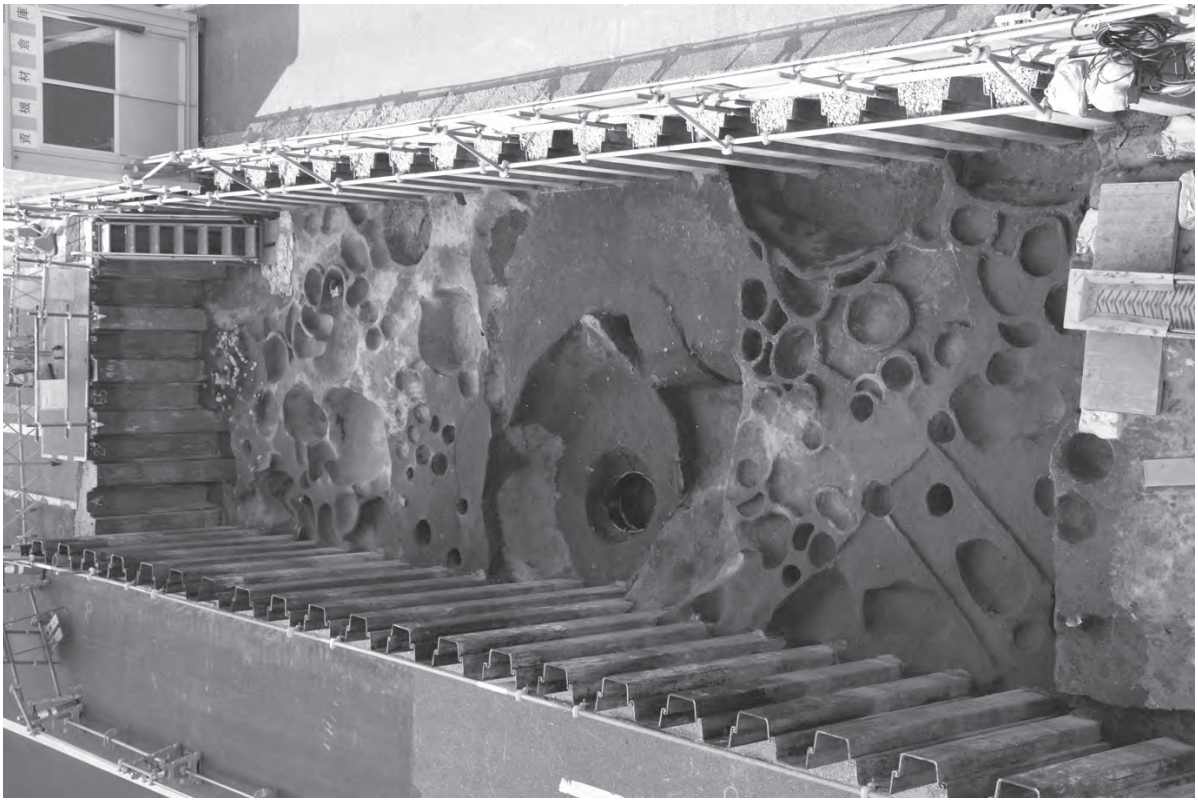
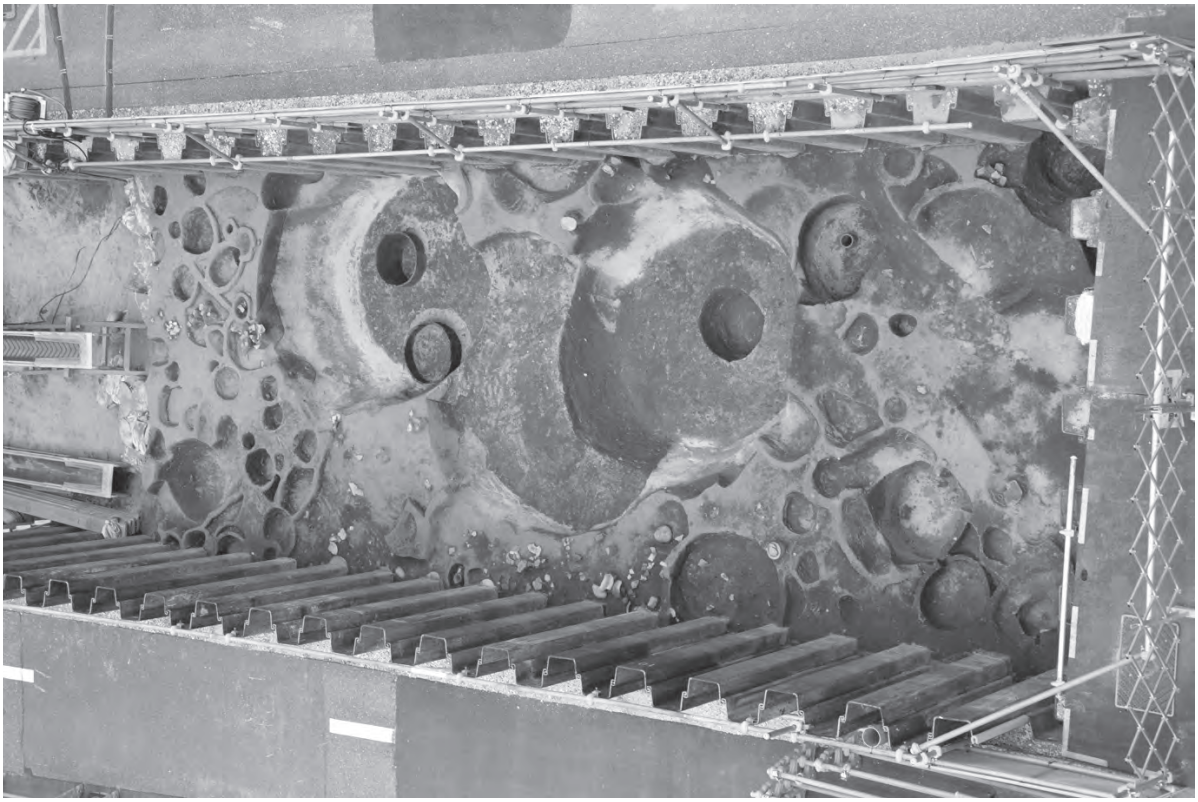


Fig.104　第 5 面全体図（1/150）



Ph.172　西側 5 面全景（南東から）



Ph.173　東側 5 面全景（南東から）

第５面は道路面から約 1.8m 下の明黄褐色シルトの上面で検出し、標高は東側が 3.7m、西側は 3.9m を測る。検出した主な遺構は竪穴住居跡４軒、井戸１基、甕棺墓３基、壺棺墓１基、土坑 17 基、柱穴である。第５面では、弥生時代中期の甕棺墓と壺棺墓が、砂丘頂部からやや南側に下る調査区に点在する。そして、弥生時代終末から古墳時代前期にかけて、竪穴住居跡や土坑が多く検出され調査区全面に拡がる。この時期の遺構は、上層の遺構に削平され、遺存状況は悪いが、いずれの遺構からも大量の遺物が出土する。竪穴住居跡は、大量の遺物が出土する箇所を集中的に精査することで、遺構プランを確認した。土器の中には他地域からの搬入土器も多くみられた。また、１軒のみであるが古代の竪穴住居跡も検出している。なお、中世や古代の遺構は、上層で確認できなかったものを確認した。

（1）竪穴住居跡（SC）

SC090500（Fig.105　Ph.174）　調査区西側に位置し、南側は調査区外へ延び、東側は

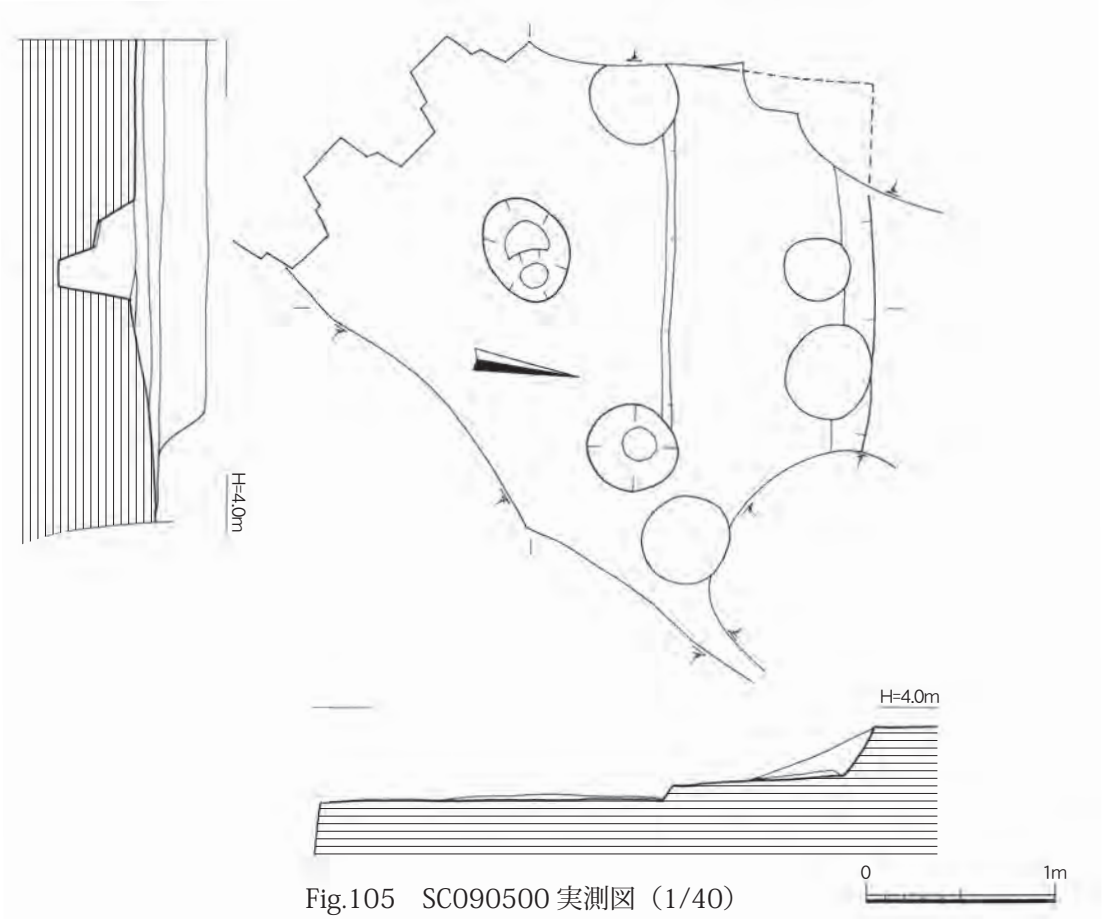


Fig.105　SC090500 実測図（1/40）

Ph.174　SC090500（東から）

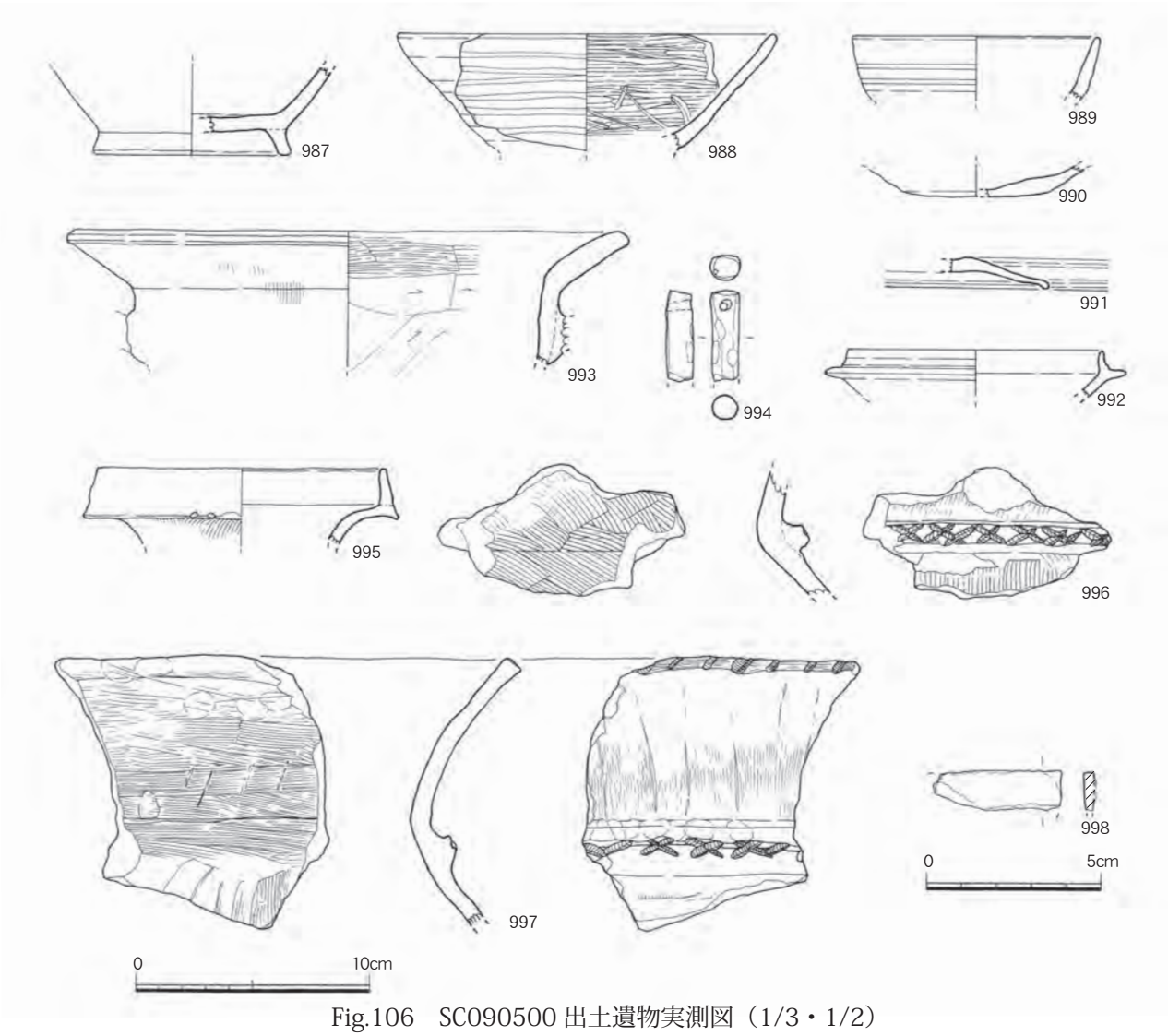
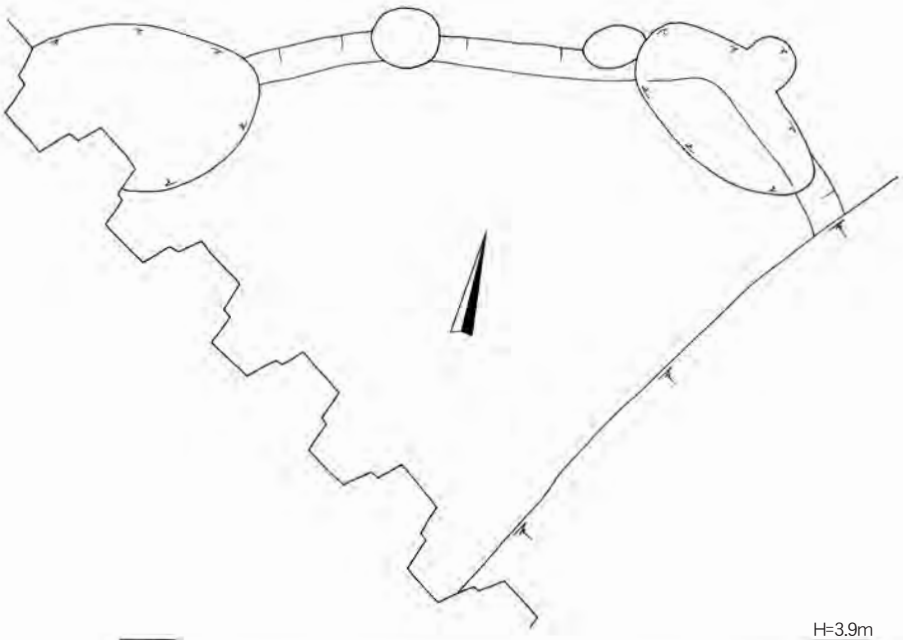
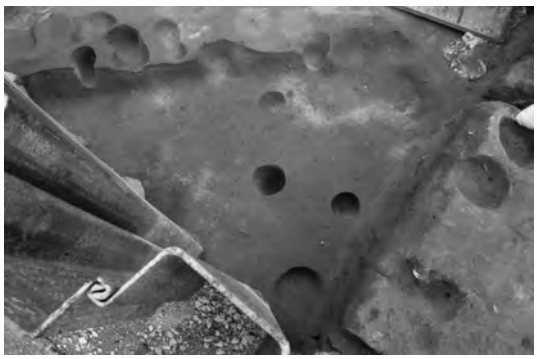


Fig.106　SC090500 出土遺物実測図（1/3・1/2）

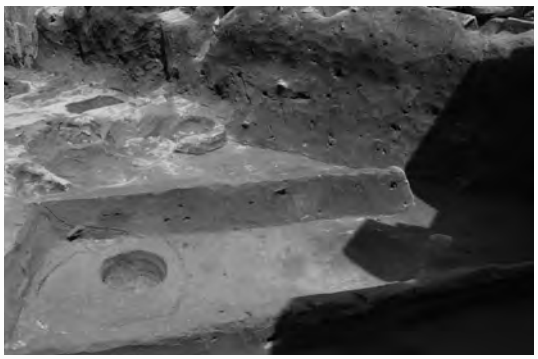
SE090161 に、西側も他の遺構に切られる。確認できたのは、北側の壁のみで、高さ 25cm である。竪穴住居の平面プランは方形を呈し、南北、東西方向ともに一辺 3.0m 以上を測る。主軸方位は N-10°-W である。北側が 1 段高くなっており、プランは幅 1.0m、床面からの高さは 10cm である。柱穴は床面で 1 本確認でき、平面プランは長径 55cm、短径 40cm の楕円形を呈し、深さは 40cm である。覆土は茶褐色砂質土で、炭化物をわずかに含む。

出土遺物（Fig.106）　987 は土師器の椀で、底部と体部の境に高台が付く。988 は黒色土器 A 類の椀の口縁部片で、内面は横方向の密な研磨を施したのち、下半に縦方向の磨きを暗文風に入れる。外面は疎らな研磨を施す。989~992 は須恵器、989 は坏身で、体部に 2 条の沈線が巡る。白色砂粒を多く含む胎土で、色調は暗紫灰色を呈する。990 は平底の坏身で、底部はヘラ切りで調整する。991 は坏蓋で、口縁端部をわずかに折り曲げる。赤焼土器で、色調は明橙色を呈する。992 は返りをもつ坏身で、返りは短く内傾する。993 は土師器の把手付甕で、長い口縁が外に大きく開く。体部内面は削り、外面は縦方向の刷毛目で調整する。口縁部内外面に煤が付着する。994 は上端に穿孔を有する土錘で、断面は円形を呈し、下端は欠損する。現状で、重さは 6.47g を量る。995~997 は弥生時代終末の土器である。995 は複合口縁壺の小片で、口縁下端には刻みを巡らす。996 は大型の壺の頸部片で、断面台形の突帯に工具による刻みを施す。内外面ともに刷毛目で調整する。997





Ph.175　SC090511（南から）



Ph.176　SC090511 土層（南西から）

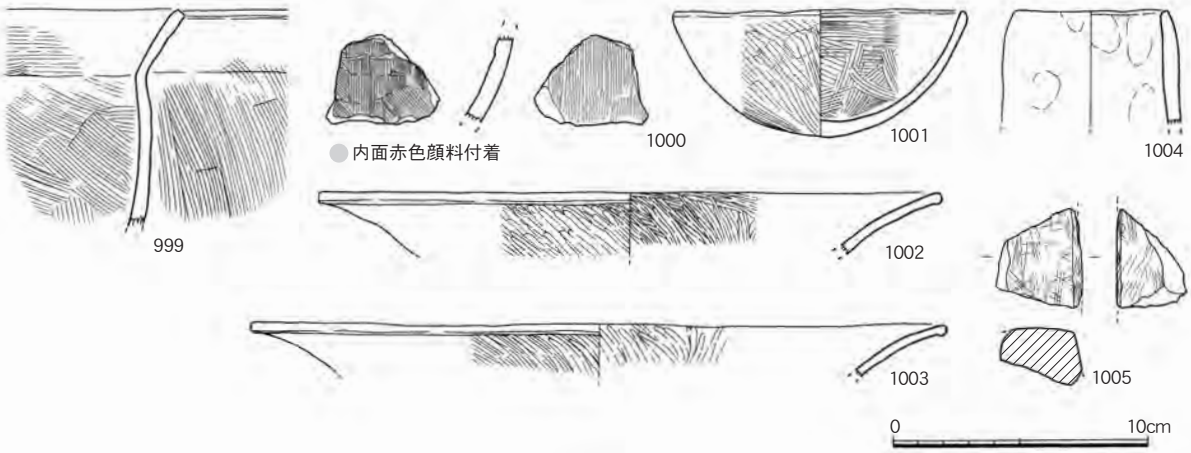


Fig.107　SC090511 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

は大甕の口縁部で頸部に 996 と同様の突帯を巡らす。998 は断面方形状の鉄片である。長さ 3.6cm、幅 1.1cm、厚さ 0.3cm を測る。他に金属坩堝片等が出土する。出土遺物は弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代の 3 時期が確認できる。竪穴住居の平面プランは古墳時代初頭によくみられるベッド状遺構に類似しており、弥生時代終末から古墳時代前期の他の竪穴住居と主軸方向を同じにするなど、弥生時代終末期の様相を呈している。ただし、古代の遺物は竪穴住居跡全面から点在するように出土しており、他遺構からの混入とは考え難いため、竪穴住居の時期は 9 世紀と考えられる。

SC090511（Fig.107　Ph.175・176）　調査区中央に位置し、南側は調査区外へ延びる。東側は調査区を反転した際、中世の遺構が密集しており、削平されていた。北側と西側の壁は高さ 30cm を測り、平面プランは方形を呈する。南北方向の一辺は 4.0m 以上である。主軸方位は、前述の SC090500 と類似する。残存状況は悪く、柱穴や壁溝等は確認できなかった。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.107）　999 は弥生土器の甕の口縁部で、端部は平坦に仕上げる。内外面ともに刷毛目で調整する。1000 は体部片で、内面に赤色顔料が付着する。1001 は近畿Ⅴ様式系の鉢で、底部はナデを行い、わずかに平底ぎみである。内面と外面上半は刷毛目、外面下半はナデで調整する。1002・1003 は高坏の坏部片、内外面ともに縦方向の細かい磨きを施す。色調は明橙色を呈する。1004 は蛸壺、1005 は砂岩製の砥石片で、砥面は 2 面残り、滑らかである。以上の出土遺物から竪穴住居の時期は弥生時代終末と考えられる。

SC090998（Fig.108　Ph.177~179）　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延び、北側は SE090878・SE090879 に切られる。西側と東側コーナーの壁の一部を確認した。西側の壁は高さ 25cm、北東コーナーは 40cm を測る。東西方向の長さは約 3.8m 以上、南北方向は 1.6m 以上である。床面から 20cm ほど浮いた状況で、古墳時代前期の土器が多量に出土した。土器とともに砂岩、変成岩の石材もみられる。竪穴住居が廃絶され、時間を経て、遺物が廃棄されたと思われる。現状で、柱穴等は確認できなかった。覆土は多量の遺物を含む層が茶褐色砂質土、その下層は黄褐色砂質土となる。ともに炭化物を含む。

出土遺物（Fig.109~112　Ph.180・181）　1006~1011 は布留系の甕で、1006~1009 の口縁は内湾ぎみに立ち上がり、1010・1011 は直線的に延びる。口縁端部は内側に肥厚する。1006 は他と比べ、器壁が厚く、肩部に波状文を巡らせる。1007 は端正な楕円形の胴部で、器壁は薄く仕上げる。体部中位から底部にかけて大量の煤が付着する。1009 は小型の甕で、肩部に 1 条の沈線が巡る。細片となって割れていたが、接合するとほぼ完形となる。外面には大量の煤、内面胴部下半には焦げが付着する。1010 は口縁が一部欠損した状況で出土した。体部外面は縦方向の刷毛目ののち、横方向に刷毛目を入れる。体部外面下半に煤が付着する。1008・1011 の外面にも煤が付着する。1012~1015 は土師器の小型丸底壺、1012 は器壁が厚く、内外面刷毛目で調整される。1013・1014 は精製器種で、内外面ともに細く密な研磨を全面に行う。1015 は扁球形の体部に頸部がしまり、口縁は大きく外に延びる。精製器種で、1013 同様、密な研磨調整を行う。1016~1018 は土師器の高坏である。1016 は精製器種で、外面は縦方向、内面は斜方向が交差するような細く密な研磨を行う。1017 は坏部で、脚部との接合は付加法がとられる。外面は縦方向の磨きの間に刷毛目調整が残る。1018 は近畿Ⅴ様式系の脚部で、中実である。1019 は庄内系の精製の小型器台である。外面は縦方向の刷毛目の後、上半は横方向の磨きを等間隔で行い、暗文風とする。下半は密な磨きを行う。1020 は布留系の直口広口壺で、内外面ともに粗い刷毛目で調整する。1021~1024 は山陰系二重口縁壺で、口縁下の稜線は明瞭である。外面と口縁部は横方向のナデで仕上げるが、部分的に刷毛目調整がうかがえる。内面には指オサエの痕跡があり、1023・1024 の頸部内面には工具痕が残る。

Fig.108　SC090998 実測図（1/40）

Ph.177　SC090998（北西から）

Ph.178　SC090998 東側（北西から）

Ph.179　SC090998 西側（北東から）

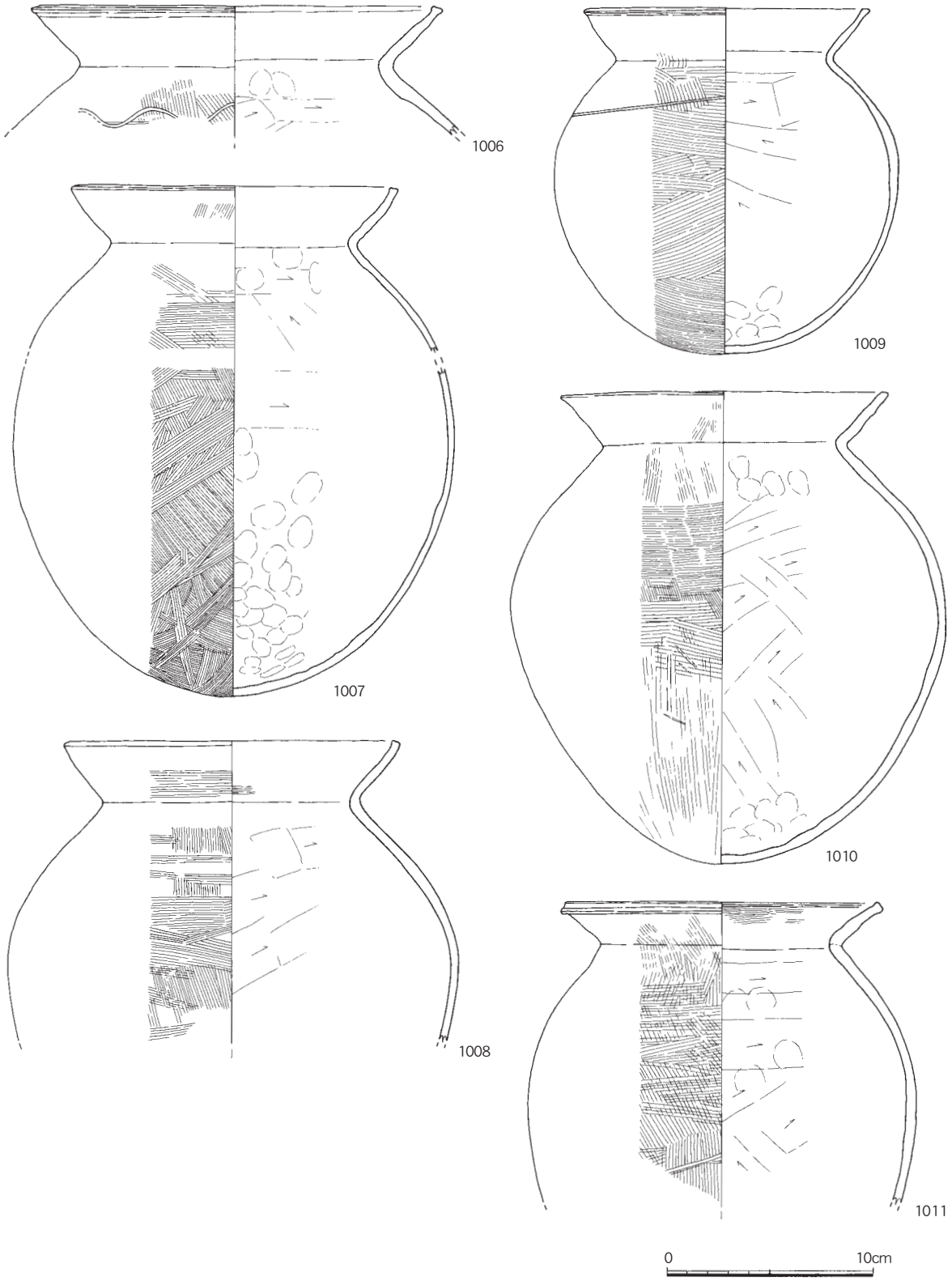


Fig.109　SC090998 出土遺物実測図①（1/3）

1025 は近畿Ⅴ様式系の二重口縁壺の小片である。内外面に複線山形波状文を巡らせる。口縁部下は横方向の研磨を施す。胎土は白色砂粒、金雲母を多く含み、色調は明橙色を呈する。1026 は凸レンズ状の底部片である。外面は縦方向の刷毛目およびナデ、内面は削りで調整する。外面には煤の付

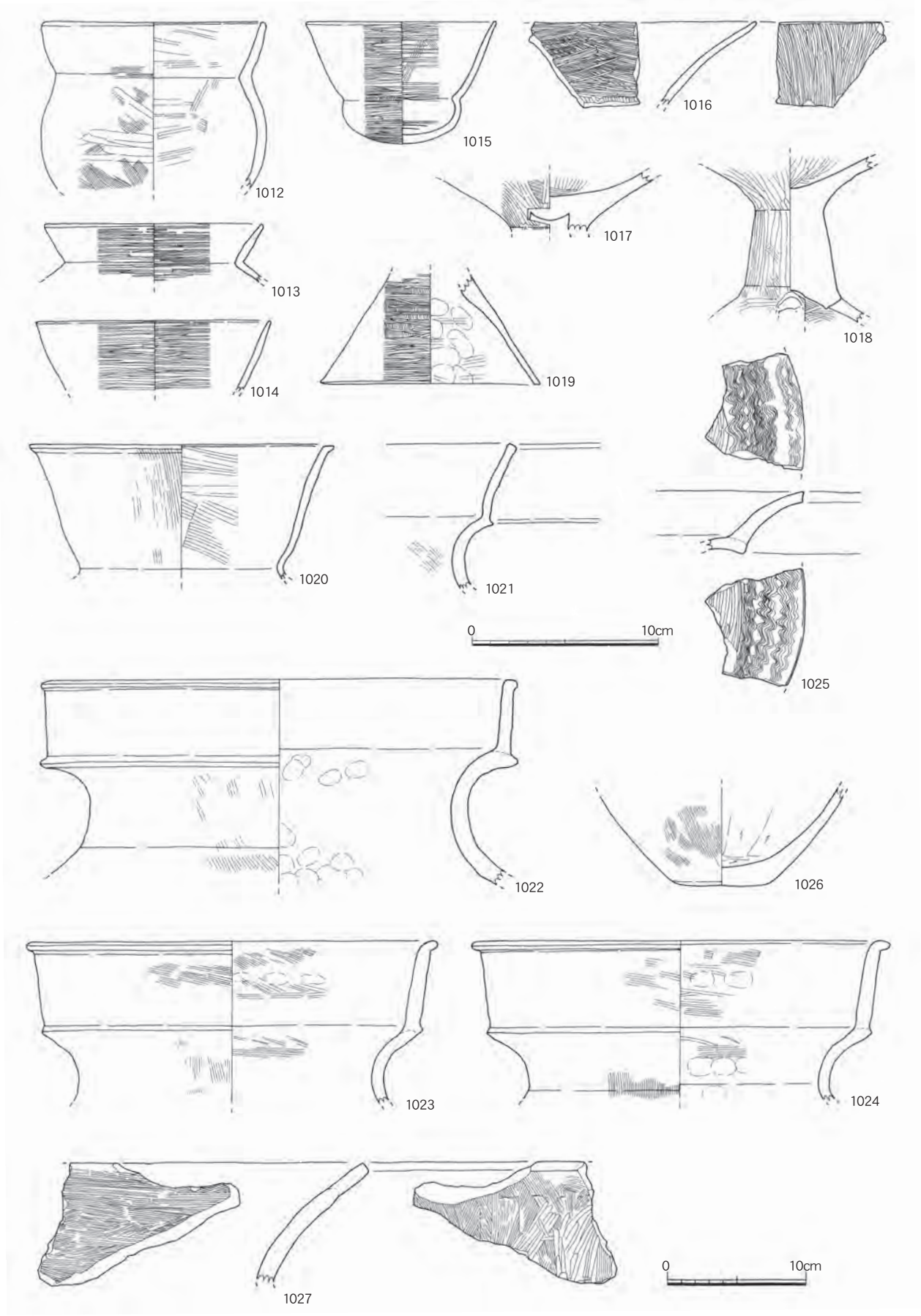


Fig.110　SC090998 出土遺物実測図②（1/3・1/4）

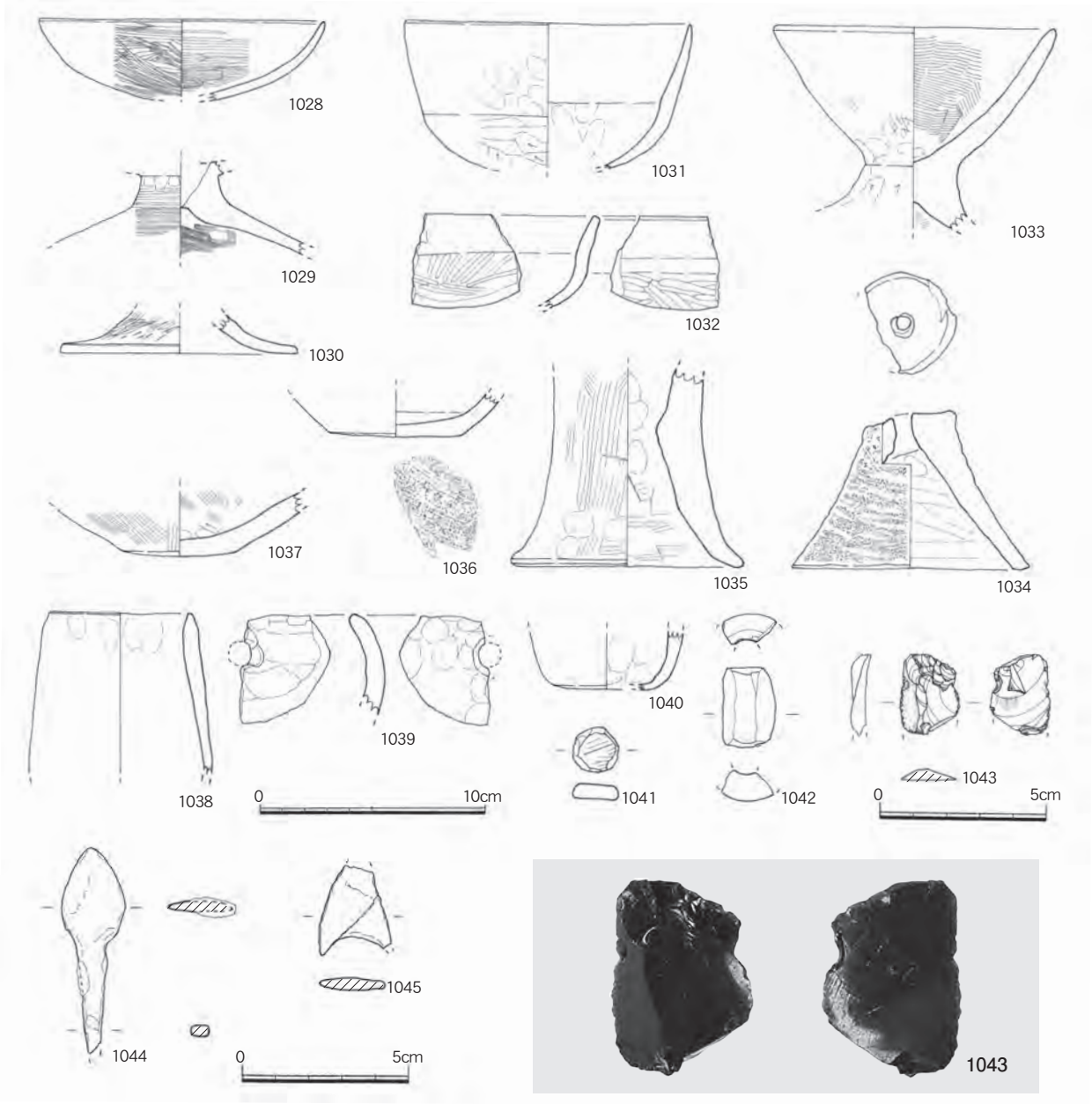


Fig.111　SC090998 出土遺物実測図③（1/3・1/2）

Ph.180　SC090998 出土遺物①

着がみられる。1027 は大甕の口縁部で、粗い刷毛目で調整する。1028 は精製の浅鉢で、内外面に細く密な研磨調整を行う。1029 は精製の脚部で、外面は密な研磨、内面は刷毛目で調整し、脚部上端には赤色顔料が付着する。1030 は近畿Ⅴ様式系の脚付鉢で、外面には刷毛工具の小口で、文様状に刻みを入れる。また、薄く赤色顔料が付着する。1031 は土師器の鉢で、内面はナデ、外面は体部上半に一部、研磨調整が認められるが、下半には削りが残る。胎土、色調ともに精製であるが、調整はやや雑である。1032 は近畿Ⅴ様式系の小型の鉢で、体部内外面に磨きが残る。1033 は近畿Ⅴ様式系の脚付鉢で、鉢部内面は放射状の刷毛目、外面はナデで調整する。1034 は支脚で、外面は粗い叩き、内面は工具によるナデで調整される。頂部には直径 0.8cm の穿孔を有する。1035 は弥生時代後期の器台で、刷毛目と指オサエが残る。1036 は弥生時代後期の底部片で、外底部に刻みを有する。1037 は壺の底部片である。1038~1040 は蛸壺、1041 は土器片を円盤状土製品としたもので、刷毛目調整が残る。重さは 3.76g である。1042 は大型の管状土錘で、1/6 の残存である。現状で重

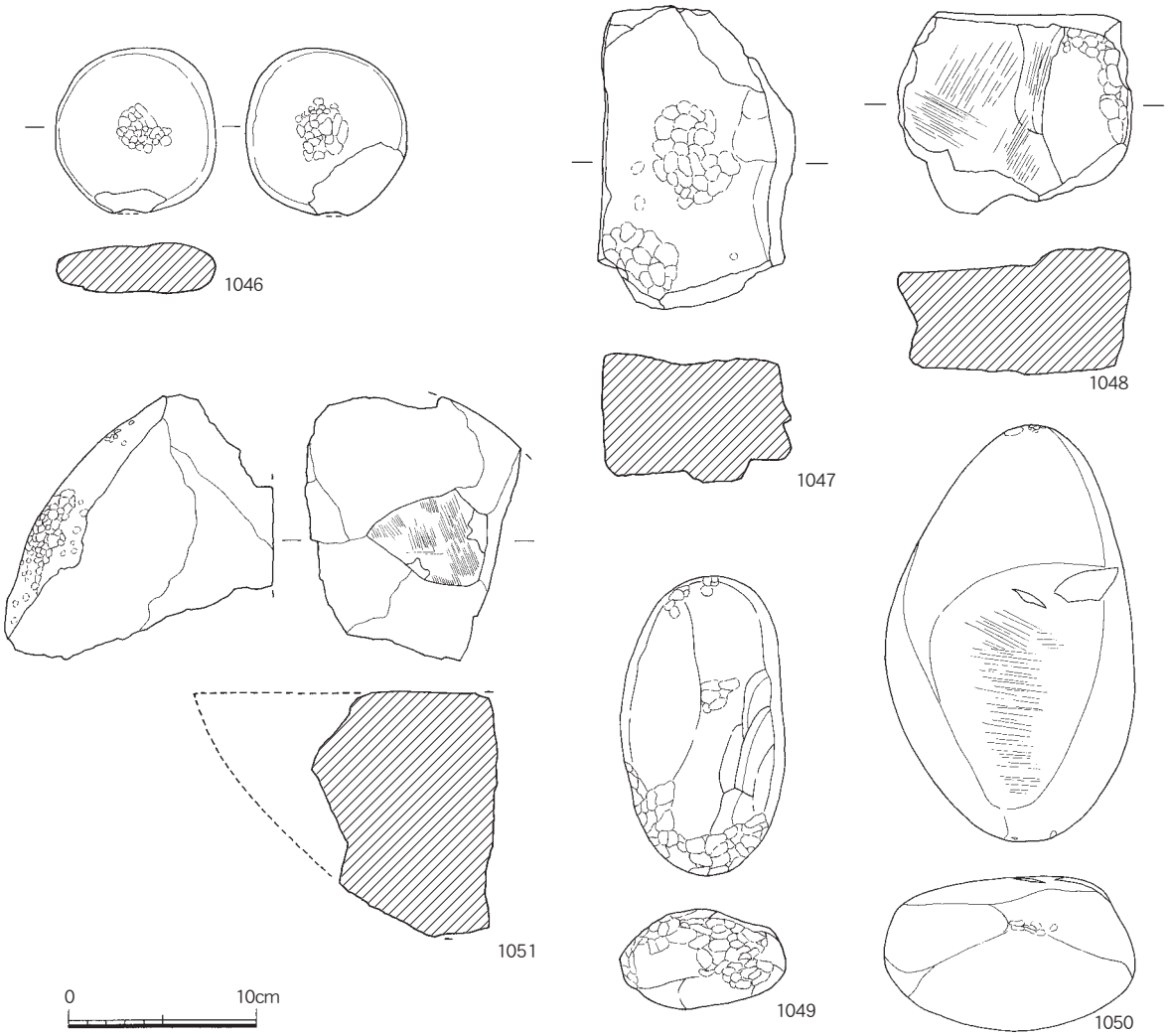
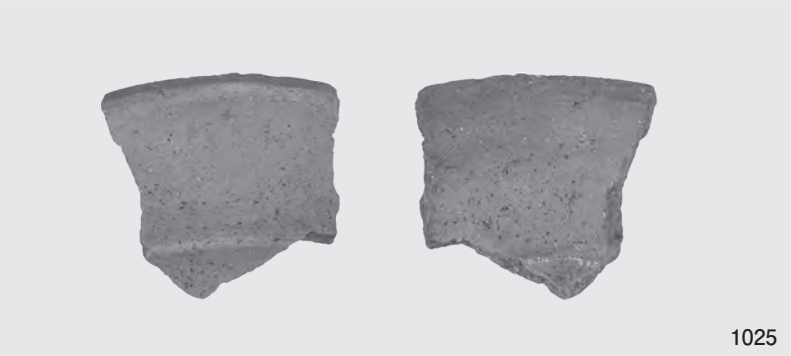
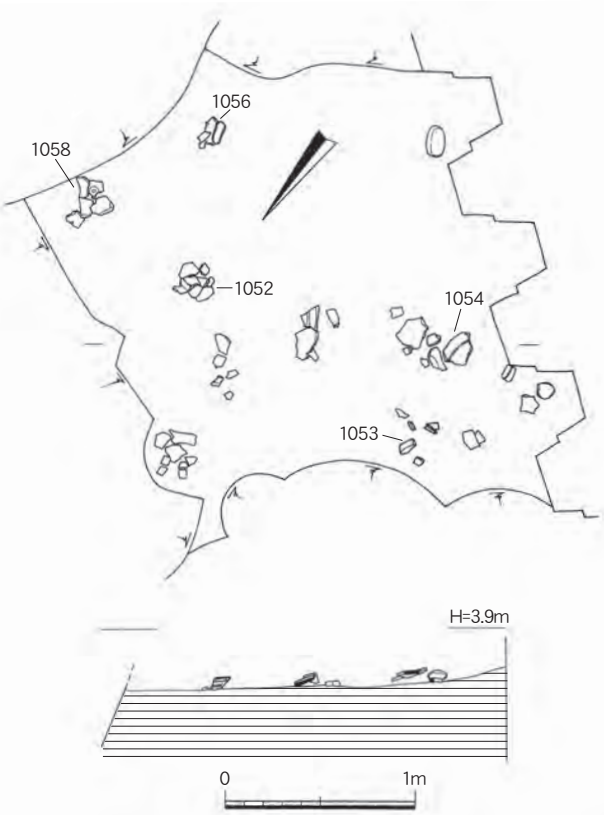


Fig.112　SC090998 出土遺物実測図④（1/4）

さは 11.65g を量る。1043 は黒曜石で、使用痕のある剥片である。不純物、白色砂粒を含み、漆黒色を呈する。下部を欠損し、現状で 1.8g を量る。上端と背面左側に自然面が残り、自然面の状況から角礫と思われる。背面左側面に使用痕が残る。1044 は柳葉系の有茎式の鉄鏃で、茎端部を欠損する。1045 は無茎式の鉄鏃で、先端部を欠損する。厚さ 0.4cm を測る。1046 は変成岩製の敲石で、325.98g である。上下面の中央部に直径 3.0cm の範囲で敲打されており、凹状に窪む。下端の欠損は使用によるものかは不明である。1047 は砂岩製の台石の破片である。1 面に敲打痕が残り、凹状に窪む。また、下面と左側面は熱を受け、赤変する。1048 も砂岩製の台石である。上面のみ砥石として使用される。他は自然面で、部分的に赤変する。1049 は花崗岩の敲石で、981.84g を量る。上下端、上面中央に敲打痕がある。1050 は玄武岩の自然石をそのまま利用する。図面上面中央部のみ、面が滑らかとなり、砥石として使用したと考えらえる。また上下端部に敲打痕がみられる。重さは 3330g である。1051 は砂岩製の台石の小片である。上面は水平で、砥面として使用される。擦痕が多く残り、滑らかである。下面は弧を描いており、側面にあたる箇所で一部、敲打された箇所が見られた。熱をうけており、赤変し、亀裂も入る。弥生時代後期の土器の混入がみられるが、竪穴住居の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。



Ph.181　SC090998 出土遺物②



Ph.182　SC091000 遺物出土状況（北西から）

Ph.183　SC091000 遺物出土状況（北東から）

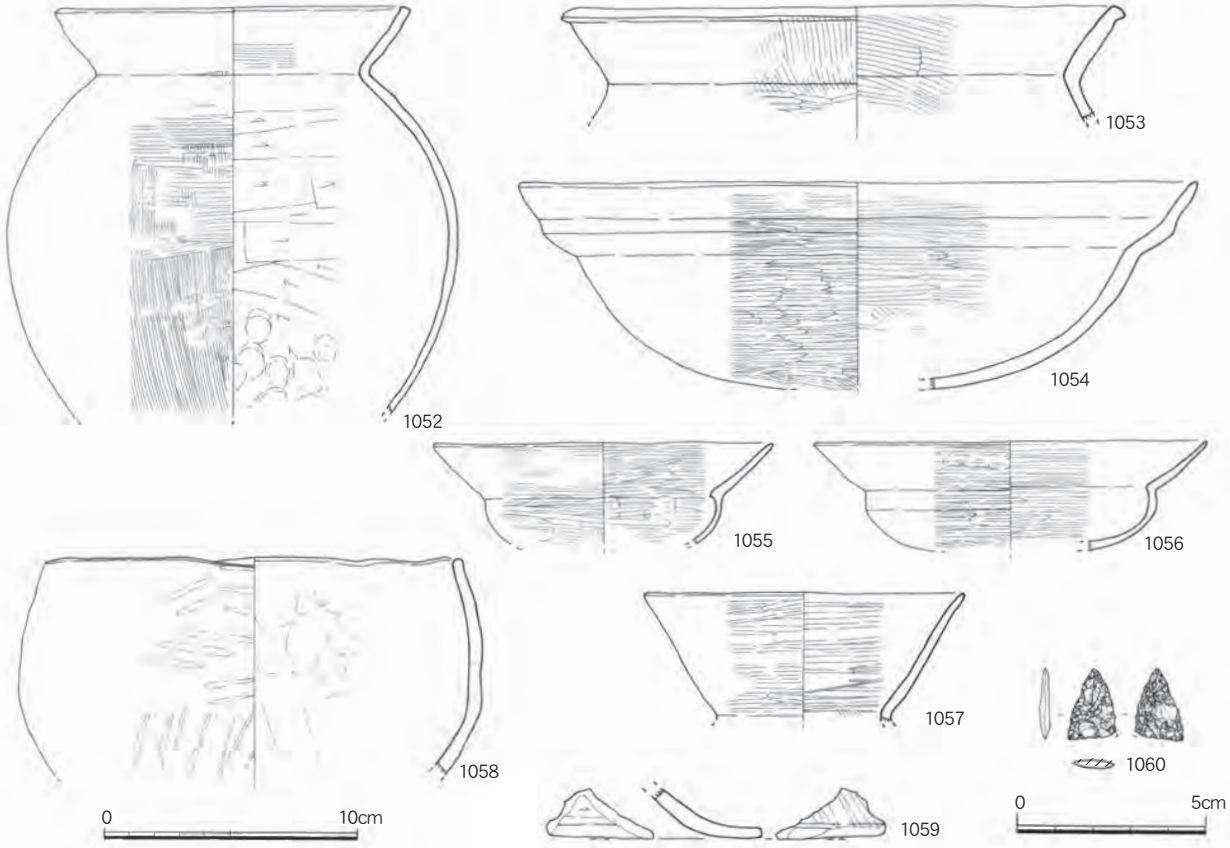


Fig.113　SC091000 実測図（1/40）および出土遺物実測図①（1/3・1/2）

SC091000（Fig.113　Ph.182・183）　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延び、東側はSC090998に、西側も他の遺構に切られる。壁や柱穴等は確認できなかったが、SC090998と同様に多量の遺物が含まれていたため竪穴住居として報告する。東西方向2.7m以上、南北方向2.3m以上を測り、床面はほぼ平坦である。覆土も他の竪穴住居跡と同様、茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.113　Ph.184・185）　1052は布留系の甕で、削りによって、器壁は非常に薄い。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は平坦に仕上げ、内に肥厚する。1053は土師器の甕で、内外面ともに刷毛目で調整する。1054は大型の鉢で、口縁部は屈曲する。内外面ともに細く密な研磨調整を施すが、体部内面はナデ、外底部は削りが残る。色調は内面が橙色、一部明橙色を呈する。1055・1056は精製の小型丸底鉢である。内外面ともに横方向の細く密な研磨を施す。色調は明橙色である。1057は精製の小型丸底壺で、研磨調整で仕上げる。胎土は多量の金雲母を含み、色調は黄褐色を呈する。1058は土師器の鉢で、外面は叩きの痕跡がわずかに残る。内面上半は指オサエ、下半は板状圧痕工具によるナデを施す。1059は土師器の底部片で、胎土は白色、金雲母を多く含み、色調は白橙色を呈する。外面はナデの後、縦方向に暗文が入る。内面端部はナデ、他は削りで調整する。1060は黒曜石製の石鏃で、黒色を呈し、不純物が混ざる。基部に抉りが入らず、三角形を呈し、脚部をわずかに欠損する。長さ1.9cm、幅1.25cm、厚さ0.25cm、重さは0.6gである。1061・1062は山陰系二重口縁壺で、口縁下の屈曲は明瞭で、頸部が短い。口縁部内外面はナデ、体部内面は削り、外面は刷毛目で調整される。1063は布留系広口壺の肩部片で、1条の沈線が巡り、その直下には叩きの痕跡が残る。外面は叩きの後、刷毛目、内面はケズリの後、一部指オサエを施す。1064は駿河の大廓式壺の口縁部片で、口縁端部を内側に折り曲げ、肥厚させる。外面は刷毛目調整後、磨きを行う。内面も刷毛目調整後、口縁は指オサエ、体部は不規則な磨きを施す。胎土には3mm程度の赤褐色粒を含み、色調は明橙色である。外面に一部煤が付着する。1165は大型甕の口縁部片で、口縁端部には×の刻目が入る。内外面ともに刷毛目調整である。1066~1068は高坏である。1066は山陰系の精製器種で、接合部は充填式となる。内外面ともに研磨で調整した後、縦方向に暗文風の磨きを程す。1067は脚部で、裾部との境に対となるよう2箇所に穿孔を行う。また、0.6cmの穿孔の下に、欠損するが、約1.0cm離れて、もう1箇所穿孔する。1068は布留系の高坏脚部の精製品である。1069は器台、1070は近畿Ⅴ様式系壺の底部片である。1071は変成岩性の台石で、上面のみ器面が滑らかとなっており、砥石として使用している。1072は砂岩の自然石を台石として使用する。上面のみ器面が滑らかであり、他は自然面である。また右縁辺にわずかに敲打痕が残る。以上の出土遺物から竪穴住居の時期は古墳時代前期中葉と考えらえる。

Ph.184　SC091000出土遺物①

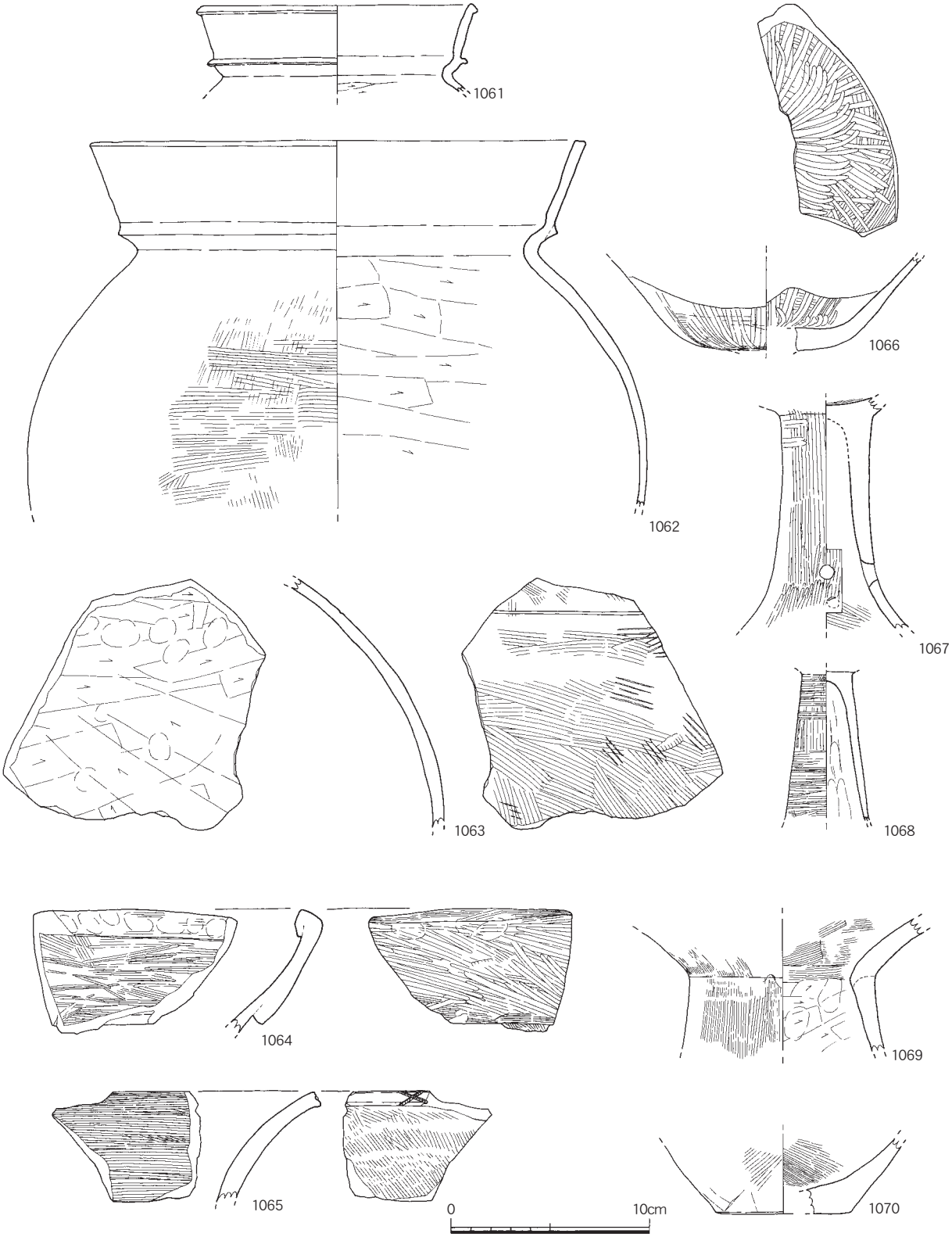


Fig.114　SC091000 出土遺物実測図②（1/3）

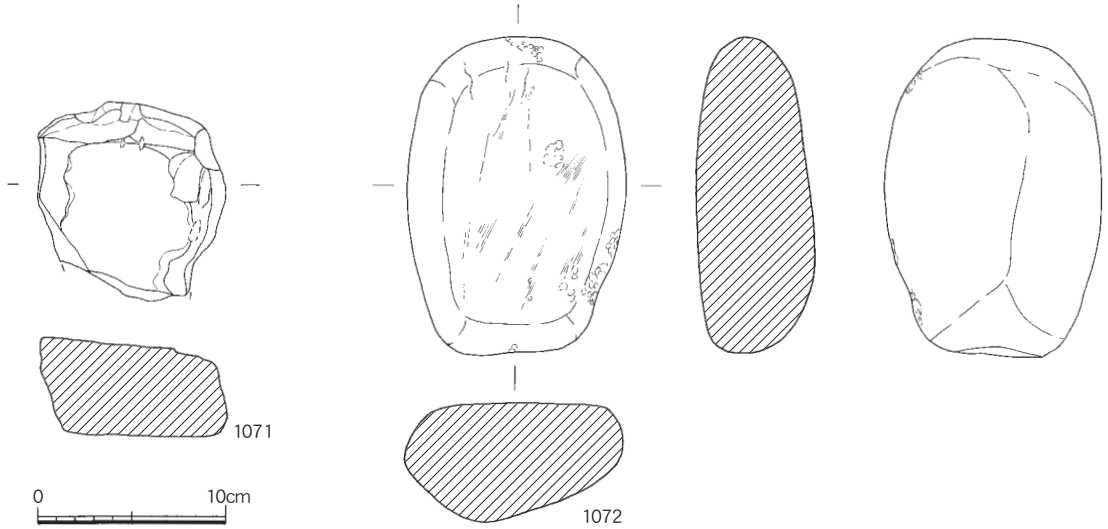
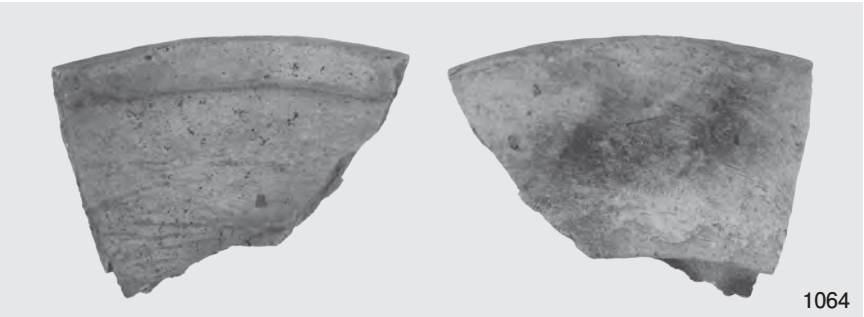


Fig.115　SC091000 出土遺物実測図③（1/4）

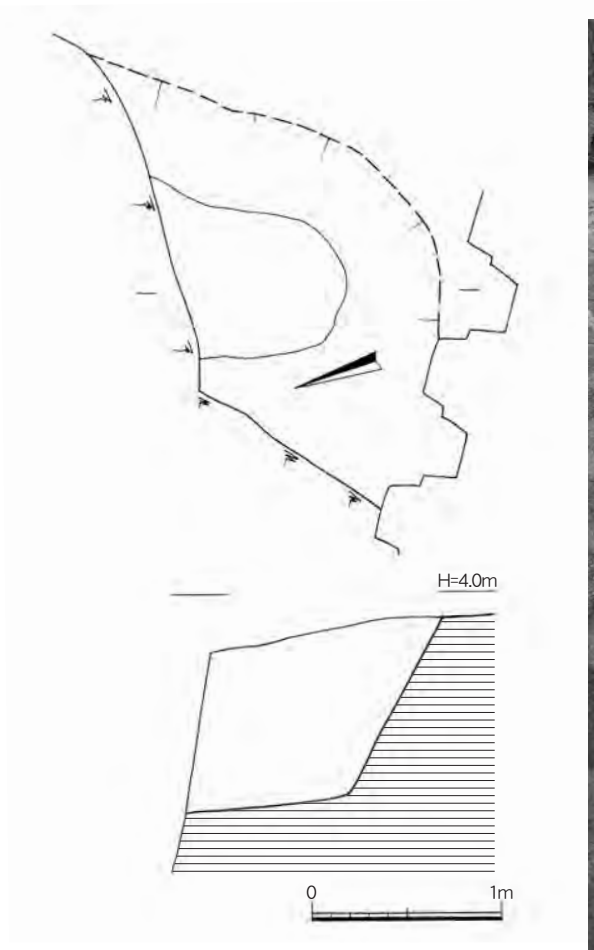
（2）井戸（SE）

SE090628（Fig.116　Ph.186）　調査区中央に位置し、北西側の大半を SE090094 と SE090161 に切られる。南側から西側にかけての平面プランを確認したが、南北に長い楕円形を呈すると思われる。井側等を検出することはできなかった。掘方からは古墳時代前期の完形の鉢が出土する。なお、上層より出土した鉄滓について、金属的調査を行った（付編 2）。

出土遺物（Fig.116）　1073 は白磁碗Ⅳ -1a 類、1074 は同安窯系青磁碗の口縁部片で、外面に細かい縦の櫛目文、内面に箆状の施文具による花文と櫛の先端で押した点描文を有する。1075 は龍泉窯系青磁の小碗で外面に鎬蓮弁文を有する。1076 は口縁が波状の青白磁の小碗で、外面は沈線が巡り、その下に櫛目文、内面は箆状工具による文様が描かれる。1077 は施釉陶器の壺の口縁部片で、灰緑色の釉がかかり、口縁上部に目跡が残る。1078 は須恵質の丸瓦で、玉縁を有する。凸面は工具によるナデ、凹面は細かい布目が残る。1079 は完形の管状土錘で、長さ 3.6cm、最大幅 1.4cm を測り、重さ 5.6g である。1080 は土師器の丸底坏で、体部内面は縦方向の磨き、口縁部は横方向のナデ、底部はヘラ切り未調整である。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は白橙色である。1081 は下層の遺物の混入で、土師器の鉢である。小さな平底をもち、体部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面ともにやや幅広の疎らな磨きを縦方向に行うため、刷毛目調整が残る。胎土は白色砂粒、金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。他に鉄滓、回転糸切りおよびヘラ切り底の土師器が出土する。出土遺物より井戸の時期は 13 世紀中頃と考えらえる。



Ph.185　SC091000 出土遺物②



Ph.186　SE09628 遺物出土状況（南西から）

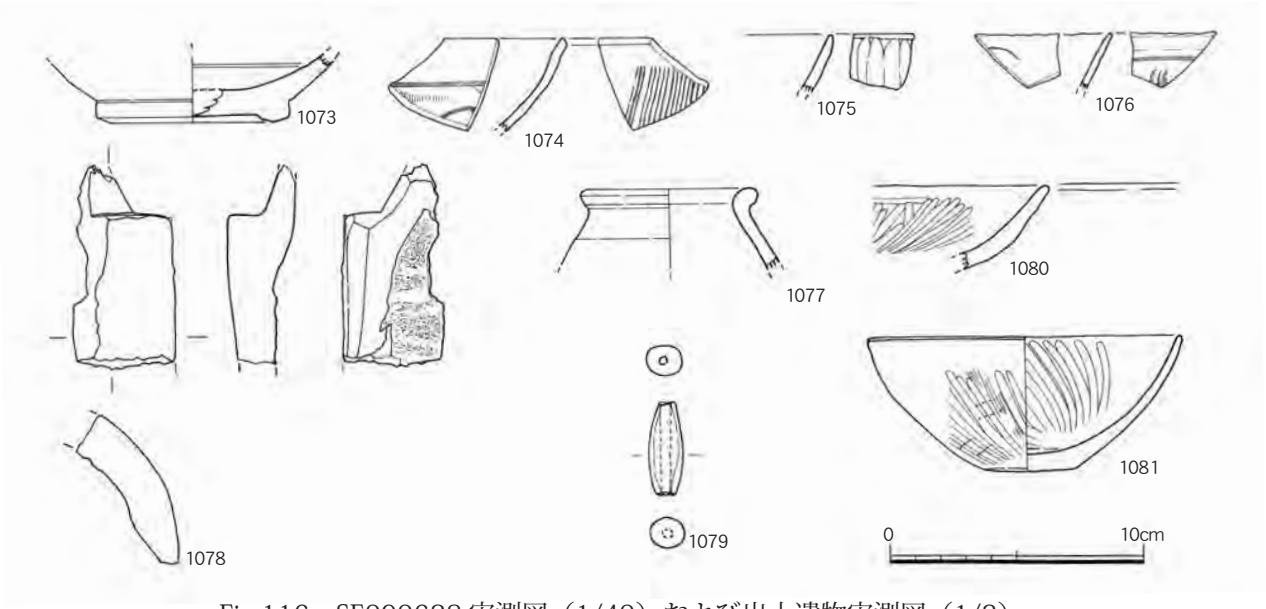
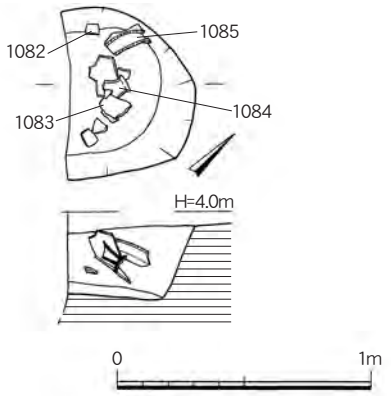


Fig.116　SE090628 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.187　SK09480（南西から）

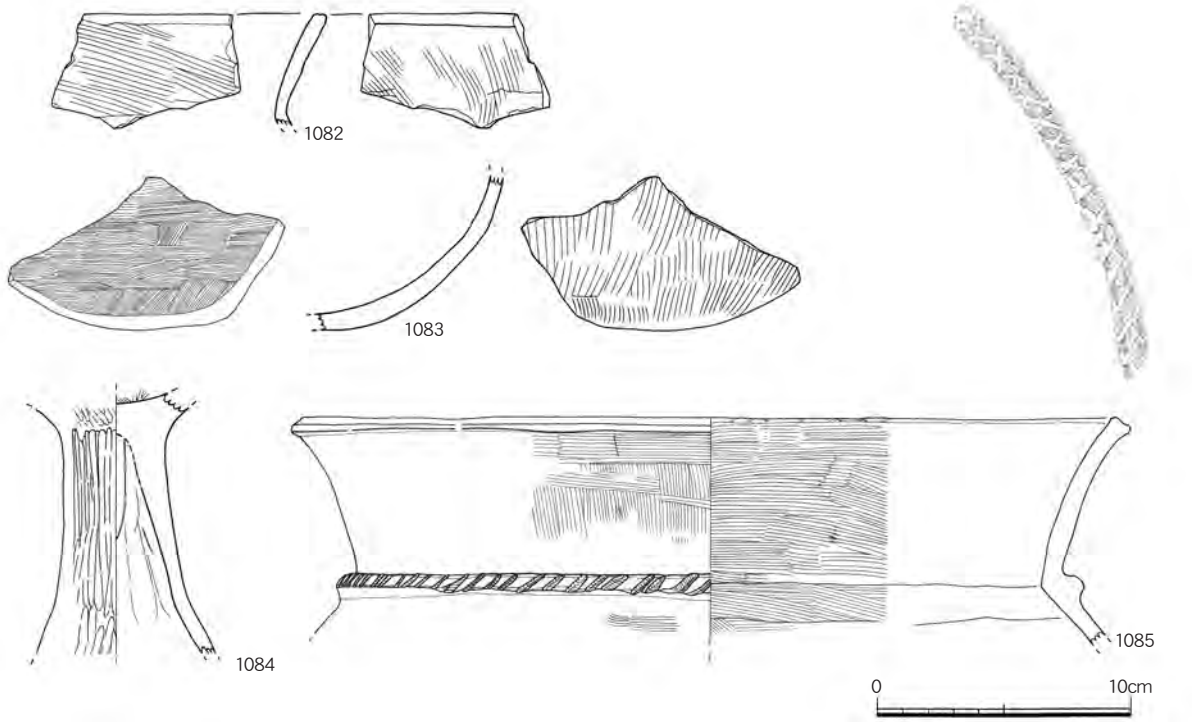


Fig.117　SK090480 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

（3）土坑（SK）

SK090480（Fig.117　Ph.187）　調査区西側に位置し、南側を SK090241 に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.5m 以上、幅 0.67m を測る。断面は逆台形で、深さは 30cm、覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.117）　1082 は土師器の甕の口縁部片で、内外面ともに刷毛目で調整する。胎土に金雲母、赤褐色粒を含む。口縁部外面に煤が付着する。1083 は土師器の壺の底部片で、丸底を呈し、内外面ともに刷毛目で調整する。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は褐色を呈する。1084 は高坏の脚部で、内面はしぼり痕が残る。脚部外面は縦方向の磨き、坏部内面は細い磨きで調整される。1085 は弥生土器の甕の口縁部片で、全面刷毛目で調整される。頸部には断面台形の突帯が巡り、突帯と口縁部上端に工具による刻目が施される。土坑の時期は弥生時代終末である。

SK090498（Fig.118）　調査区西側に位置し、東側の壁面のみ確認できた。深さは 10cm を測り、

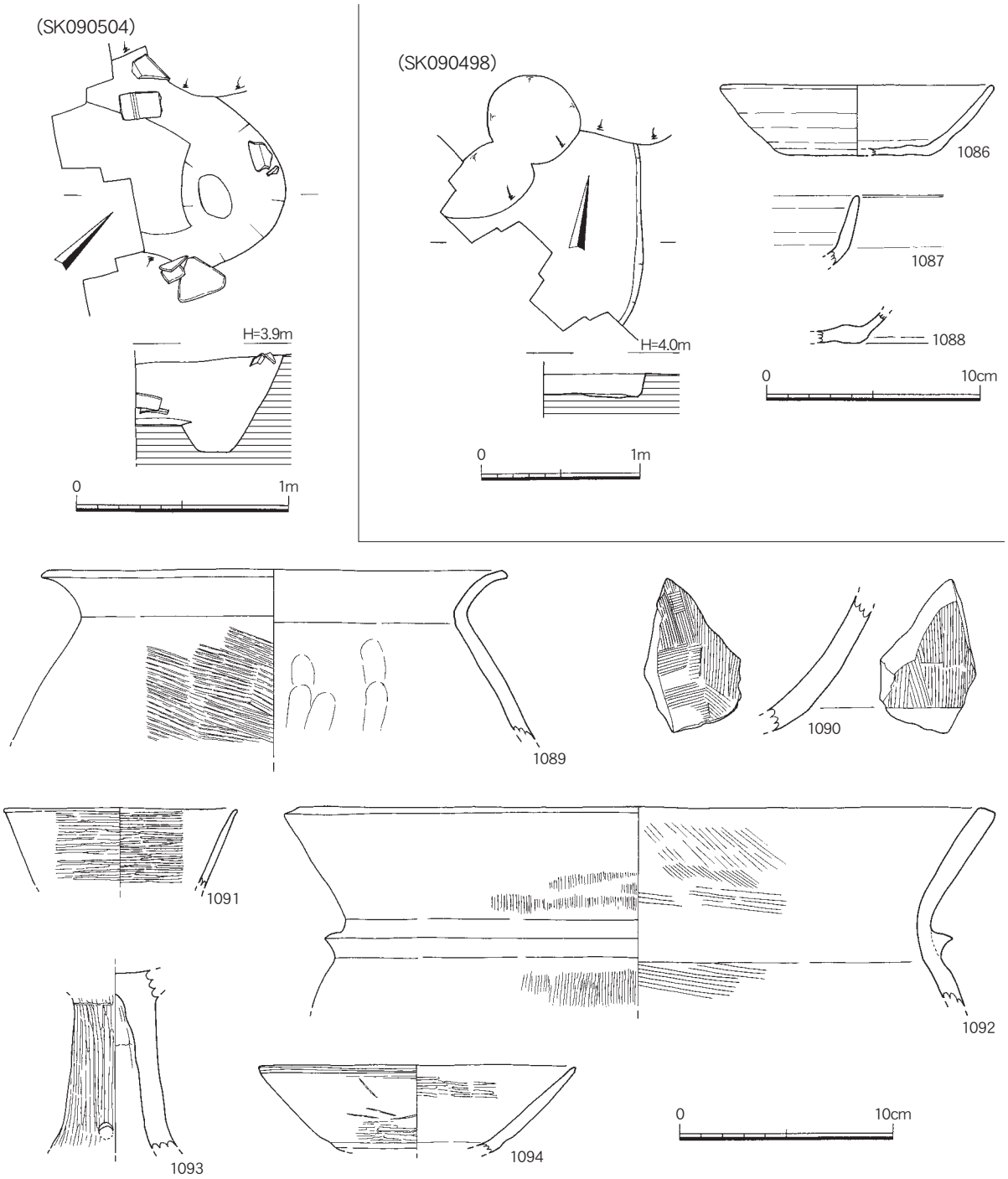
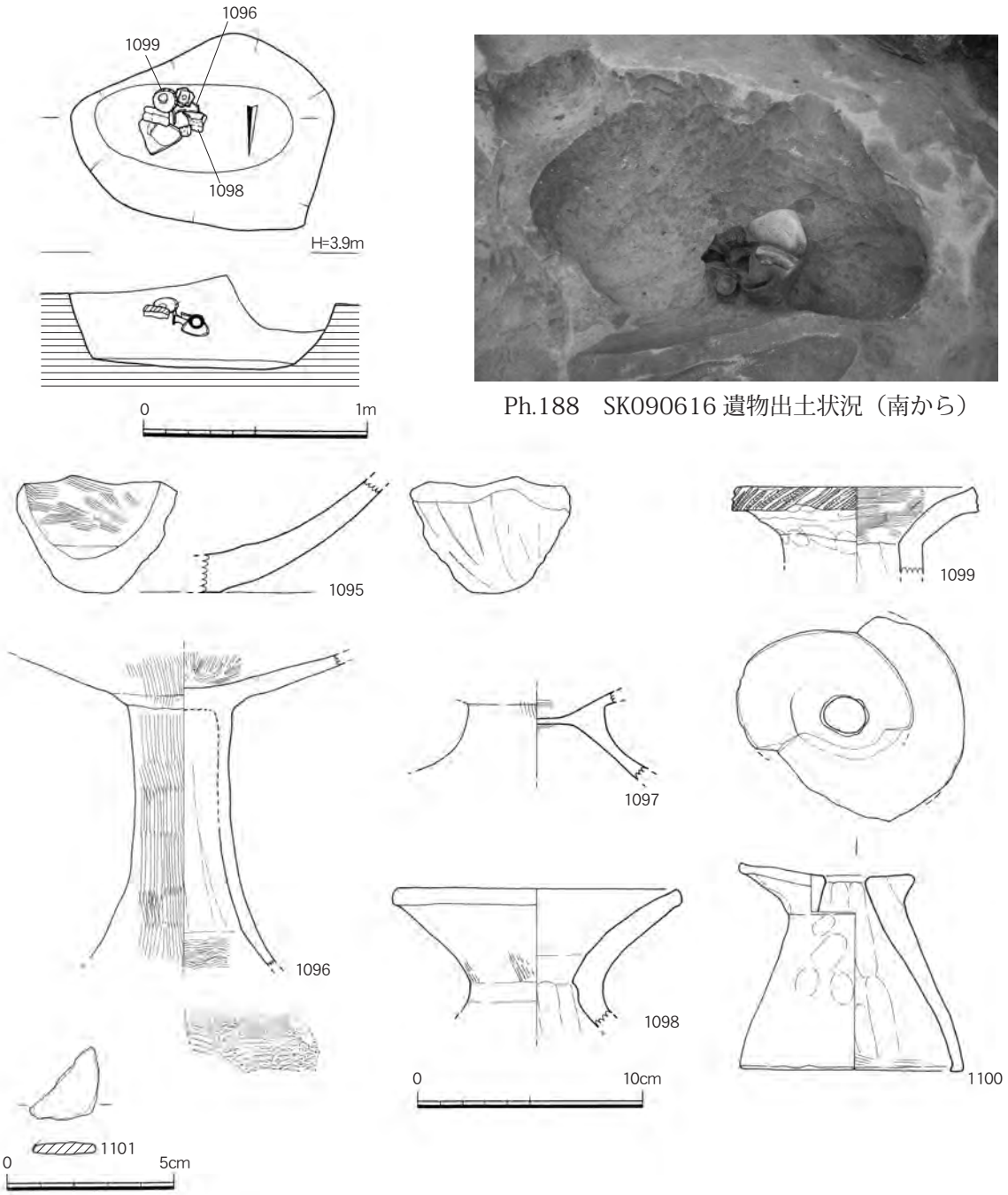


Fig.118　SK090498・090504 実測図（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/3）

底面はほぼ平坦である。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.118）　1086 は土師器の坏身で、復元口径 12.8cm を測る。底部はヘラ切り未調整で、底部と体部の境は丸みを帯びる。体部は内外面ともに回転ナデで仕上げる。胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、色調は外面が赤褐色、内面は黄橙色を呈する。1087・1088 は須恵器の坏身である。1087 は口縁部片で、回転ナデで調整する。1088 は底部ヘラ切り未調整で、体部は回転ナデを行う。胎土に白色砂粒を多く含む。土坑の時期は出土遺物から 9 世紀前半と考えられる。

SK090504（Fig.118）　調査区西側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.4m 以上、短径約 1.7m を測る。南西側にテラスを有し、最深部は 0.9m である。覆土



Ph.188　SK090616 遺物出土状況（南から）

Fig.119　SK090616 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/2）

は茶褐色砂質土を主体とし、炭化物がわずかに含まれる。

出土遺物（Fig.118）　1089 は土師器の甕で、口縁部内外面はナデ、外面は叩き、内面は指ナデ、指オサエで調整する。胎土に金雲母を含む。1090 は弥生土器の甕の底部片で、凸レンズ状を呈する。内外面ともに刷毛目で調整する。1091 は精製の小型の直口壺で、内外面ともに細い磨きを密に行う。1092 は弥生土器の大甕の口縁部片で、口縁は緩やかに外反し、端部は平坦におさめる。頸部には三角突帯を巡らす。体部外面は縦方向、内面は斜方向の刷毛目で仕上げ、口縁部はナデを施すが、刷毛目調整が残る。内面の頸部下には多量の焦げが付着する。1093・1094 は土師器の高坏である。1093 は脚部で、器壁が厚く、外面は縦方向の細かい磨きで調整する。裾部との境には穿孔を有する。

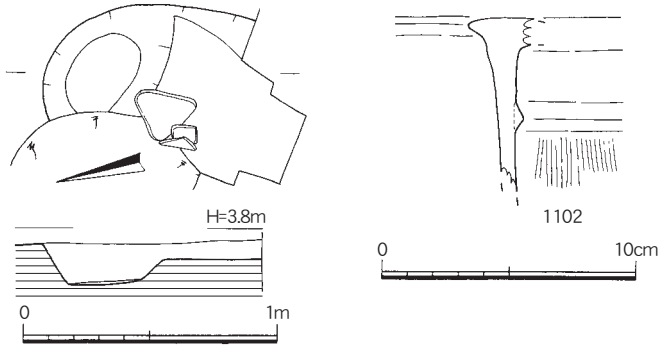


Fig.120　SK090620 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）　Ph.189　SK090620 遺物出土状況（北から）

1094 は精製の坏部で、丸味を帯び、色調は明褐色を呈する。坏部上面は横方向の磨き、下半はやや磨滅する。外面は坏部下半が磨き、上半はナデで調整する。他に砥石片が出土する。土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

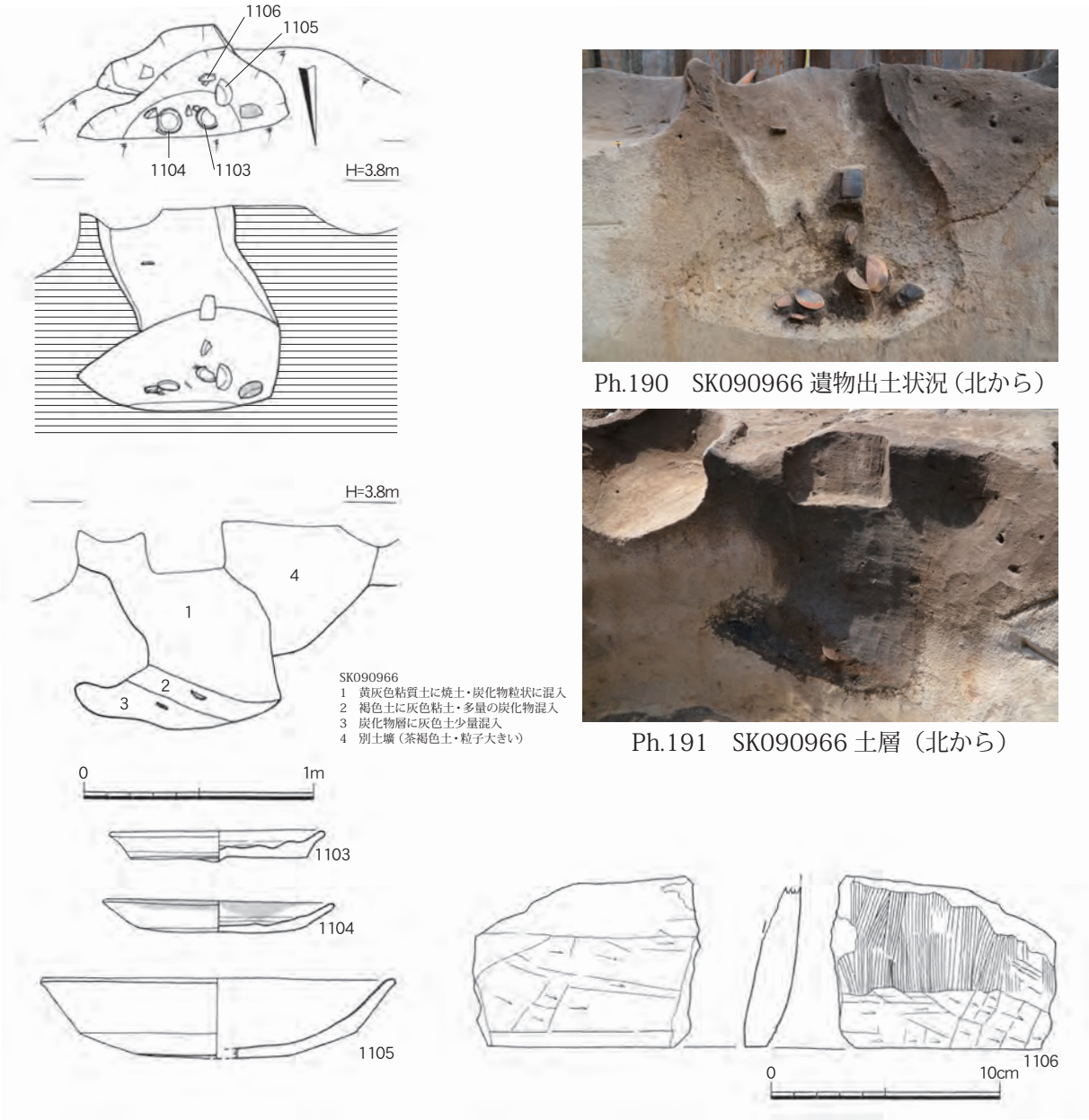
SK090616（Fig.119　Ph.188）　調査区西側に位置し、他の遺構に切られ、やや歪な楕円形を呈する。現存で長径 1.13m、幅 0.75m を測り、深さは 0.4m である。土坑からは砂岩の自然石とともに弥生土器の器台や高坏がまとまって出土した。覆土は茶褐色砂質土で、炭化物、焼土を少量含む。

出土遺物（Fig.119）　1095 は弥生土器の大甕の底部片で、丸底を呈する。底部内外面はナデ、体部は内面が刷毛目、外面は工具によるナデをおこなう。1096 は弥生土器の高坏で、脚部内面は縦方向のナデ、裾部は横方向の短い単位の刷毛目、外面は縦方向の刷毛目で調整する。坏部内面は暗文風に縦方向の細い磨きを施す。1097 は土師器の脚付鉢で、器面は磨滅するが、かすかに刷毛目調整が確認できる。1098・1099 は筒型器台である。1098 はナデで調整されるが、外面に刷毛目がうかがえる。1099 は受部と脚部の境が明瞭で、受部端部には斜め方向に工具で密な刻目を施す。受部内面は刷毛目、他は指ナデで調整する。1100 は沓形の支脚で、高さ 9.1cm、底径 10.0cm、受部の長径 8.0cm、短径 6.0cm を測る。脚部内面に横方向の刷毛目調整がみられるが、全面、指ナデ、指オサエで調整する。頂部に円孔をもつ。1101 は平面三角形上の鉄片で、厚さ 0.2cm を測る。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

SK090620（Fig.120　Ph.189）　調査区西側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面は楕円形を呈すると思われ、南側にテラスを有し、最深部は 30cm を測る。テラス部分からは弥生時代中期の甕が出土し、覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.120）　1102 は下層遺物の混入で、須玖式土器の甕の口縁部片である。口縁下に突出の強い三角突帯を巡らせる。突帯下の調整は縦方向の刷毛目、他はナデで行う。外面には多量の煤が付着する。他に弥生土器や布留系の甕が出土し、土坑の時期は古墳時代初頭と考えらえる。

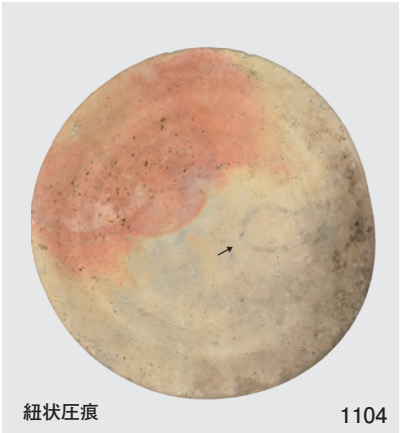
SK090966（Fig.121　Ph.190・191）　調査区東側に位置し、北側は SE090878 に切られる。井戸の斜面で検出したため、上端のラインはきれいな弧を描かず、凸凹状となる。また、西側底面は 30cm ほど地山を掘り込み、オーバーハングする。砂質土の土壌でこのような空間が存在するとは考え難い。埋没したのち、何らかの事情で、このような堆積になったものと思われるが、土壌に大きな乱れは確認できなかった。深さは検出面から 0.9m を測る。最下層の 3 層は炭化物層で、灰色土が少量混ざる。多くの土師器が出土する。その上の 2 層は褐色土で、下層ほどではないが、炭化物を含み、灰色粘土が斑状に混ざる。この層からも下層と大きく時期を違えない土師器が出土した。上層の



Ph.190　SK090966 遺物出土状況（北から）

Ph.191　SK090966 土層（北から）

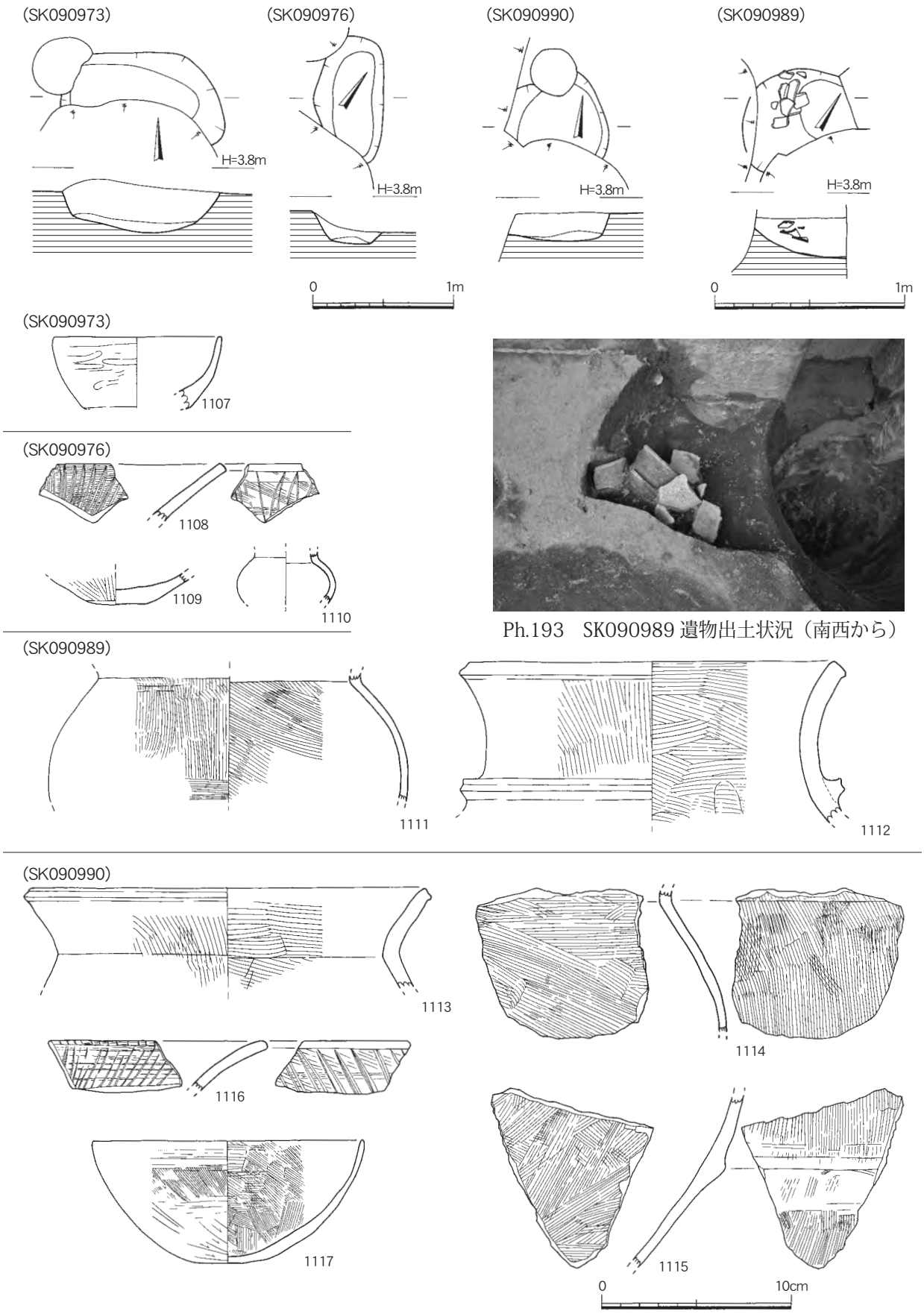
Fig.121　SP090966 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.192　SK090966 出土遺物

1 層は遺物が少なく、焼土、炭化物を粒状に含む茶灰色粘質土である。

出土遺物（Fig.121　Ph.192）　1103・1104 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、1104 は完形品である。口径は 9.5cm、10.0cm を測る。1103 は外底部に板状圧痕を有する厚い底部である。底部と体部は明瞭な稜線をもち、口縁は外反し、端部は丸くおさめる。胎土に白色砂粒、赤褐色粒、金雲母を含み、色調は橙色である。1104 は底部と体部の境は丸く仕上げ、外底部はナデで調整され、板状圧痕が残る。胎土に白色砂粒を含み、色調は橙色、一部明橙色を呈する。口縁部周辺には煤の付着がみられ、灯明皿として使用される。内底部に黒色の紐状の痕跡が見られ、火をつ



Ph.193　SK090989 遺物出土状況（南西から）

Fig.122　SK090973・090976・090989・090990 実測図（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/3）

ける芯ではないかと考えられる。1105 は土師器の丸底坏で、復元口径 15.6cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。内面にはコテ当て痕が残るが、丁寧なナデで調整される。色調は橙色を呈する。1106 は土師器の甑の底部片である。端部は工具による強いナデで整形され、内面と端部外面は横方向のケズリで調整される。他に黒色土器 A 類、鉄釘が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えらえる。

SK090973（Fig.122）　調査区東側に位置し、南側を SK090860 に切られる。平面プランは、楕円形を呈すると思われ、長径 1.1m、短径約 0.7m を測る。断面は船底状を呈し、深さは 35cm である。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.122）　1107 は土師器の鉢で、復元口径 9.0cm、器高 3.8cm を測る。外面はヘラ削り後、横方向の磨き、内面は丁寧なナデを施す。胎土に白色砂粒を含み、色調は橙色である。他に布留系の甕が出土し、土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

SK090976（Fig.122）　調査区西側に位置し、南側を SK090973 に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径約 1.9m、短径 0.5m を測る。断面は逆台形をなし、深さは 20cm である。覆土は茶褐色砂質土である。

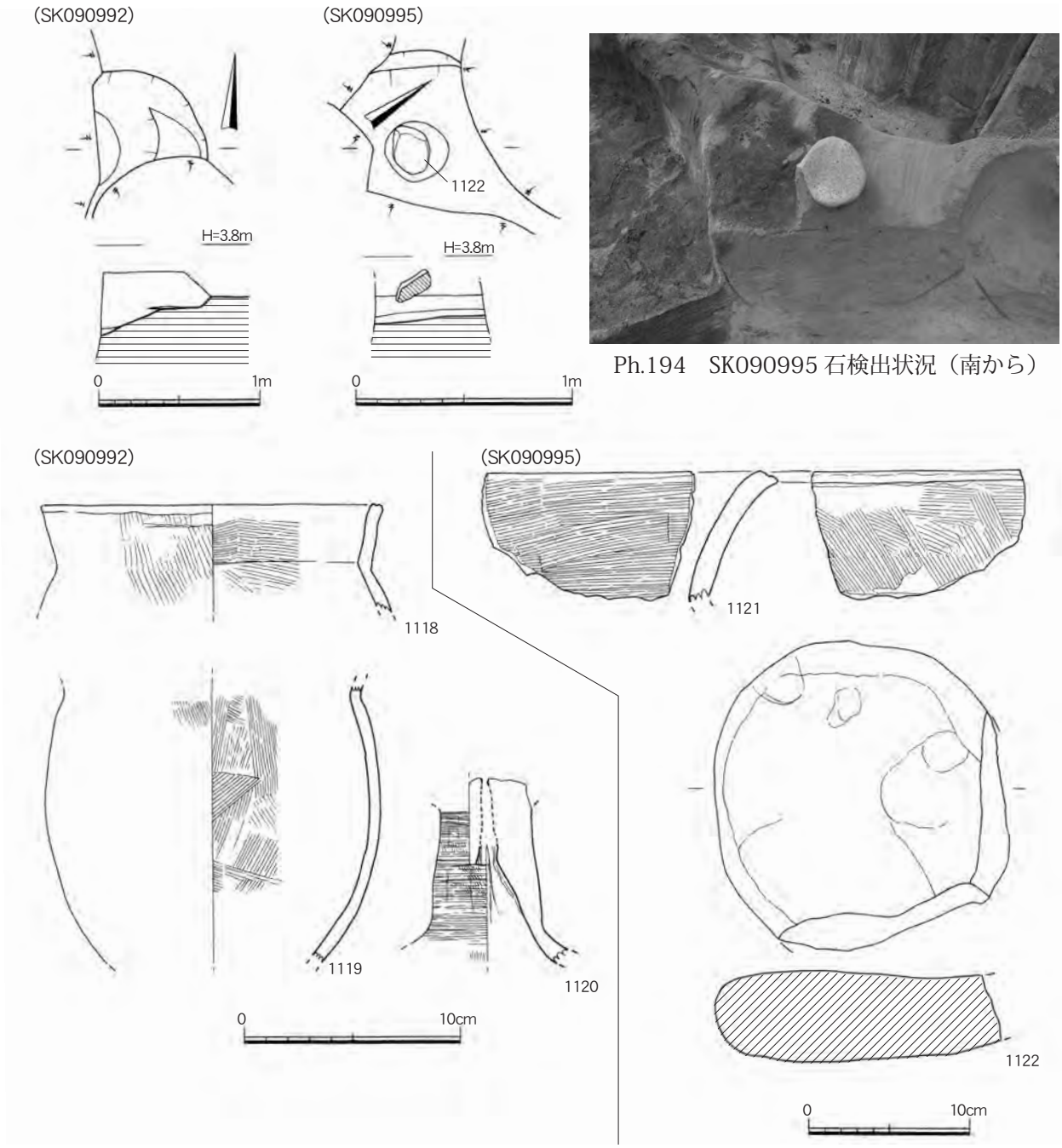
出土遺物（Fig.122）　1108 は弥生土器の高坏の坏部片で、口縁端部は平坦に仕上げる。内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目調整の後、内外面ともに縦方向のジグザグ状の暗文を施す。胎土に金雲母、白色砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。1109 は弥生土器の甕の底部片で、凸レンズ状を呈する。内面はナデ、外面は刷毛目の後、部分的にナデる。1110 はミニチュアの小型丸底壺の体部片で、内外面ナデで調整する。胎土に白色砂粒を含み、色調は橙色である。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

SK090989（Fig.122　Ph.193）　調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延び、東側と南側も他の遺構に削平される。平面は円形を呈し、直径約 0.6m を測る。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは 20cm である。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.122）　1111 は弥生土器の甕の体部片で、内外面ともに刷毛目で調整する。胎土に白色砂粒を含み、色調は橙色を呈する。1112 は弥生土器の壺の口縁部片で、端部は平坦に仕上げる。頸部に断面台形の突帯が巡る。口縁部内面は斜方向、外面は縦方向の刷毛目で調整する。胎土に多量の白色砂粒と金雲母を含み、色調は橙色を呈する。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

SK090990（Fig.122）　調査区西側に位置し、北側と東側の壁面のみ残存する。直径約 0.8m の円形を呈すると考えられる。底面はレンズ状をなし、深さは 20cm である。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.122）　1113 は弥生土器の口縁部片で、端部は角張り、上面はやや凹状に窪む。内外面ともに粗い刷毛目で調整される。口縁部外面には煤が付着する。1114 は弥生土器の甕の頸部片で、内外面ともに密な刷毛目が施される。胎土に多量の金雲母を含み、色調は褐色を呈する。1115 は弥生土器の壺の体部片で、鈍い三角突帯が巡る。内外面密な刷毛目を施す。1116 は高坏の坏部片で、口縁端部は丸く仕上げる。外面は刷毛目調整の後、ヨコナデを行い、縦方向のジグザグ状の暗文を施す。内面は横方向の刷毛目、ナデの後、斜方向の細い磨きを行い、頂部も短く細い刻みがかすかに入る。胎土は金雲母を含み、精良で、色調は明橙色である。1117 は土師器の鉢で、底部は丸底を呈する。内面は刷毛目、外面上半は刷毛目、下半は削りで調整する。胎土に白色砂粒を多く含み、色調は明橙色を呈する。出土遺物より土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭である。



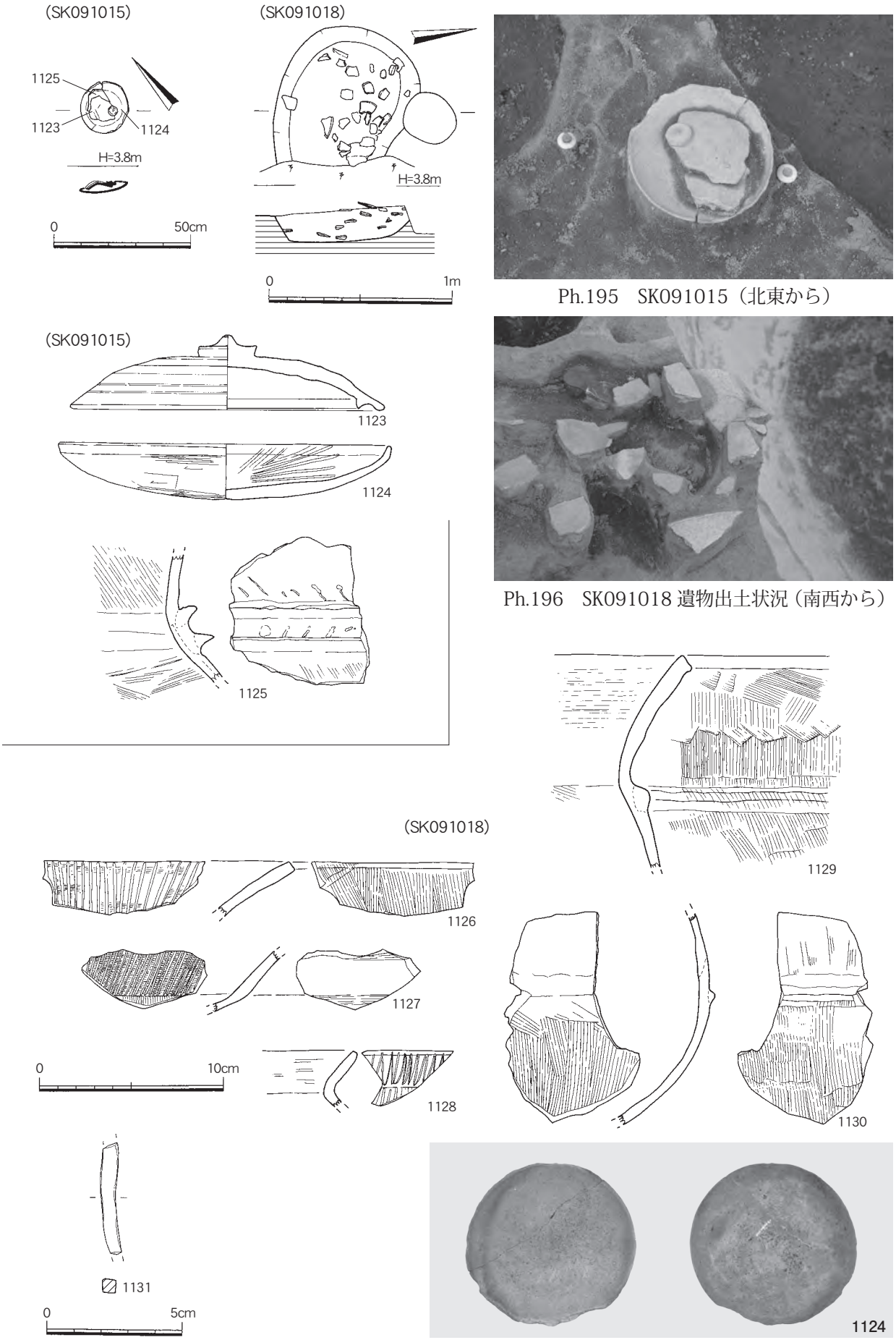
Ph.194　SK090995 石検出状況（南から）

Fig.123　SK090992・090995 実測図（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

SK090992（Fig.123）　調査区西側に位置し、西側は SE090878 に、南側は現代の井戸に切られる。土坑は東側に平坦なテラスを有し、深さは現状で 40cm を測る。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.123）　1118・1119 は弥生土器の甕で、1118 は口縁が直立気味に立ち上がる。外面は粗い縦方向の刷毛目、内面は横および斜方向の刷毛目で調整される。1119 は体部片で、口縁と体部の内面の境は不明瞭である。内外面ともに細かい刷毛目で調整され、その後、外面の刷毛は丁寧にナデ消される。1120 は土師器の高坏脚部で、肉厚な器壁で、頂部には直径 3.0mm の穿孔を有する。内面はしぼり、外面は斜方向の刷毛目の後、横方向の細かい磨きを施す。出土遺物から土坑の時期は古墳時代初頭と考えらえる。

SK090995（Fig.123　Ph.194）　調査区西側に位置し、大部分を他の遺構に切られる。上層から



Ph.195　SK091015（北東から）

Ph.196　SK091018 遺物出土状況（南西から）

Ph.197　SK091015 出土遺物

Fig.124　SK091015・091018 実測図（1/20・1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/2）

は赤変した偏平な砂岩の自然石が出土する。根石に用いられた可能性もあるが、現状では傾いた状況で出土しており、廃棄されたものと考えられる。覆土は灰褐色砂質土で、粒状の炭化物を含む。

出土遺物（Fig.123）　1121 は弥生土器の甕の口縁部片で、内外面ともに刷毛目で調整し、端部は雑な横方向のナデで仕上げる。胎土に多量の角閃石と金雲母を含み、色調は褐色を呈する。1122 は厚さ約 5.0cm 前後の偏平な花崗岩である。上面のみ使用され、器面は滑らかである。全面が赤変する。他に布留系土器の甕が出土し、土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭である。

SK091015（Fig.124　Ph.195）　調査区西側に位置する。掘り込み等の平面プランを確認することができなかった。都城系の土師器の皿の中に、弥生土器の体部片、その上に須恵器の坏蓋の小片が重なっていた。土師器と須恵器は、密着した状況であったが、砂は入り込んでいた。土師器の皿と須恵器の坏蓋は 7 世紀末のものであるが、その間の土器は弥生時代終末期のものである。意図的に埋めたものかは不明である。

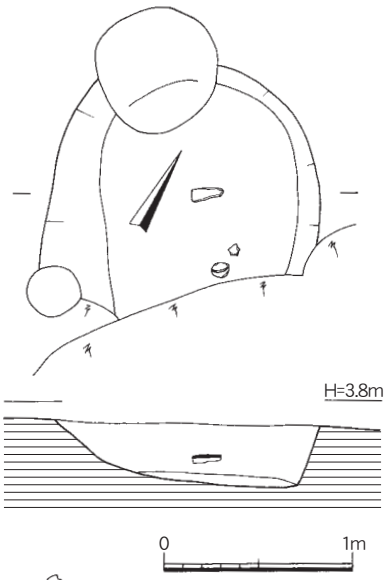
出土遺物（Fig.124　Ph.197）　1123 は宝珠形の摘みを有する須恵器の坏蓋で、復元口径 17.2cm、器高 4.0cm、摘み径 3.2cm を測る。口縁に返りをもち、天井部は回転ヘラ削りで調整する。赤焼け土器で、色調は暗紫灰色、胎土は金雲母と白色砂粒を含む。1124 は都城系の土師器の皿で、口縁部を部分的に欠損する。口径 18.2cm、器高 3.0cm を測る。器壁の厚い底部から体部はゆるやかに立ち上がり、口縁は上方に延び、端部は丸く仕上げる。内面の調整はナデののち、放射状の暗文を描くが、部分的に磨滅する。外面はヘラ削りの後、ナデで丁寧に仕上げる。口縁部付近には細かい横方向の磨きが残る。胎土に白色砂粒を多量に含み、色調は明橙色、部分的に明褐色を呈する。1125 は弥生土器の壺の頸部片で、2 条の三角突帯を巡らす。突帯の上部と間には箆の当て具痕が残る。外面は縦方向、内面は斜方向の刷毛目で調整される。胎土に白色砂粒、石英を含み、色調は明褐色を呈する。

SK091018（Fig.124　Ph.196）　調査区中央に位置し、東側を SE090709 に切られる。平面は楕円形を呈し、長径 0.8m 以上、短径 0.7m を測る。断面は逆台形で、深さは 20cm である。覆土は茶褐色砂質土を主体とし、灰褐色粘質土を斑状に含む。土師器の破片が散乱した状況で出土した。

出土遺物（Fig.124）　1126・1127 は弥生土器の高坏の小片である。1126 の坏部上面は平坦に仕上げ、外面は刷毛目、内面は横方向の刷毛目の後、縦方向の磨きを施す。器面は内外面ともに、部分的に磨滅する。細かい赤褐色粒、石英、白色砂粒を含み、色調は橙色を呈する。1127 の坏部の屈曲部上面は横方向のナデ、その上下は横方向の刷毛目で調整し、内面は横方向の刷毛目の後、やや斜方向の細い磨きを施す。胎土は石英をわずかに含み、色調は暗褐色を呈する。1128 は短頸壺の口縁部片で、内面に横方向の刷毛目がかすかに残る。外面はナデで調整され、口縁と体部にジグザグ状の暗文を施す。胎土に金雲母、白色砂粒を含み、色調は暗褐色である。1129 は弥生土器の甕の口縁部で、口縁上面は平坦に仕上げる。頸部に台形の突帯を巡らし、外面は刷毛目、内面はナデで調整する。胎土に大粒の金雲母を含み、色調は外面が明褐色、内面は橙色を呈する。1130 は壺の体部片で、最大胴部径に小さい断面台形状の突帯を有する。外面と内面下半は刷毛目、他はナデで調整する。胎土に石英を含み、色調は橙色である。1131 は断面方形の棒状の鉄製品である。土坑の時期は出土遺物から弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

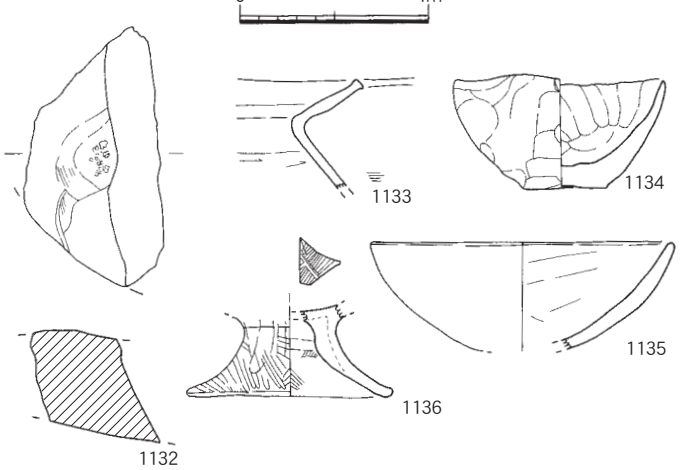
SK091021（Fig.125　Ph.198・199）　調査区中央に位置し、西側は SE090709 に切られる。平面は楕円形を呈し、長径 1.3m 以上、短径 1.4m を測る。底面は西側から東側へ向かってわずかに傾斜する。東側の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西側の壁は緩やかで、深さは 30cm を測る。覆土は茶褐色砂質土で、ほぼ完形の手捏ね土器の鉢が出土する。

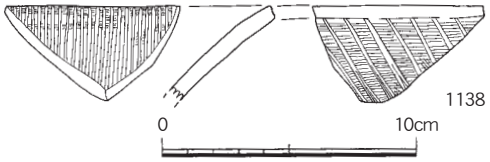
出土遺物（Fig.125　Ph.200）　1132 は変成岩の台石の小片で、上下面が使用され、上面は凹状

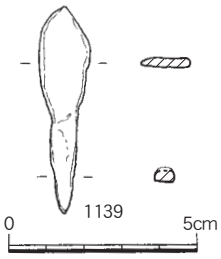


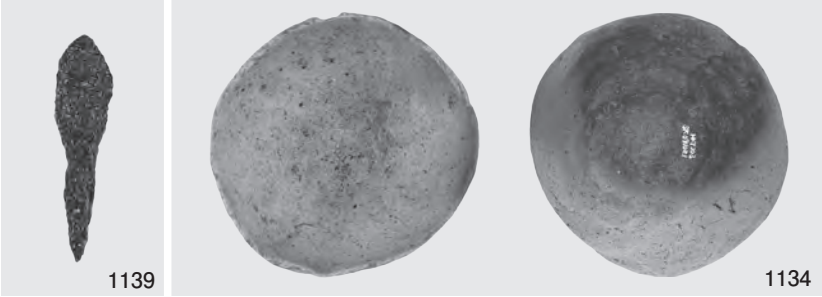
Ph.198　SK091021 遺物出土状況（北西から）

Ph.199　SK091021 遺物出土状況（西から）







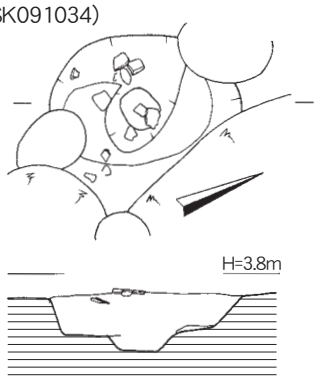


Ph.200　SK091021 出土遺物

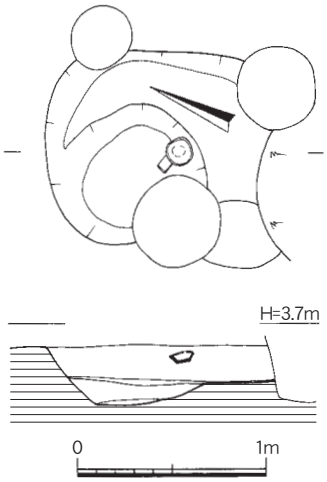
Fig.125　SK091021 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/2）

に窪む。1133 は布留系の甕で体部内面は箆ケズリ、外面は刷毛目で調整される。1134 は口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形の手捏ね土器の鉢である。底部は平底で、口径 8.0~8.4cm、器高 4.1~4.5cm、底径 3.2~3.5cm を測る。内外面ともに指オサエの痕跡が残る。胎土は石英、赤褐色粒を含み、色調は橙色である。1135 は土師器の鉢で復元口径 12.0cm を測る。内外面ともに工具によるナデで調整する。胎土に白色砂粒、石英、金雲母を含み、色調は褐色である。1136 は精製の脚付鉢の脚部片である。内面は横方向のナデ、外面は細く、密な磨きを施す。坏部底面も細かい磨きを行う。色調は脚

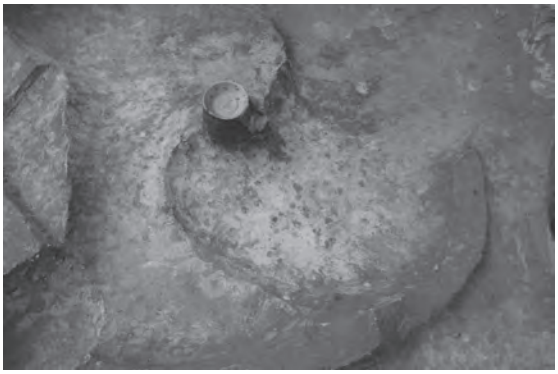
(SK091034)



(SK091048)

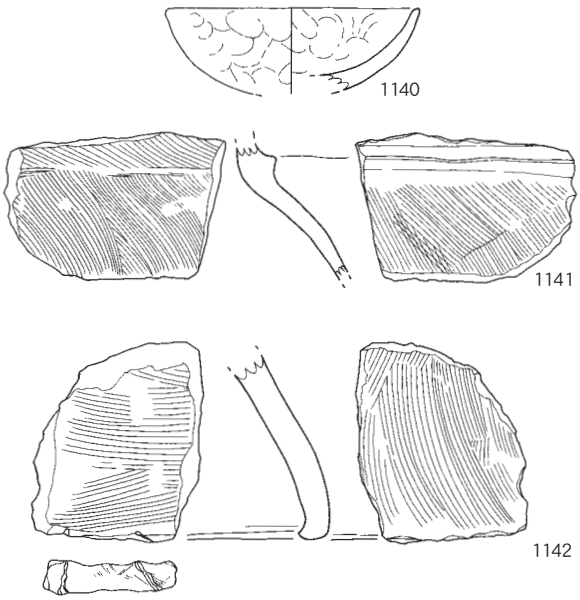


Ph.201　SK091034（北東から）



Ph.202　SK091048（北から）

(SK091034)



(SK091048)

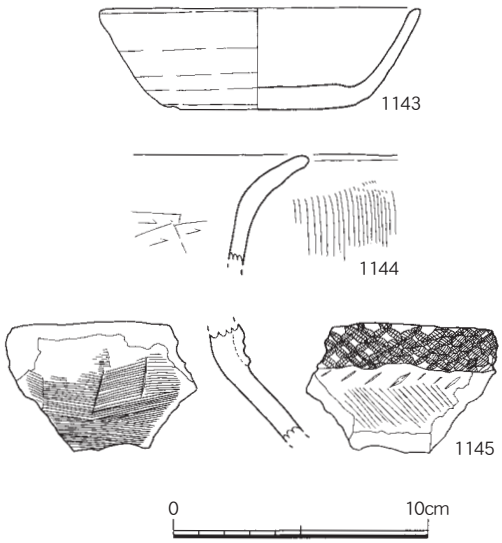
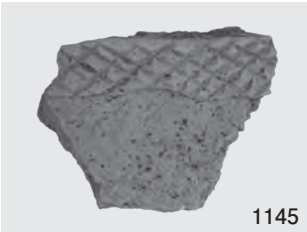


Fig.126　SK091034・091048 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）



Ph.203　SK091048 出土遺物

部外面が明褐色、内面は黒色、坏部内面は暗黄灰色を呈する。1137・1138 は弥生土器の高坏の坏部片で、ともに色調は明橙色を呈する。1137 の底部内面は横方向の刷毛目の後、縦方向の磨き、屈曲部から口縁にかけては斜方向の磨きを施す。外面は横方向の刷毛目の後、縦方向の磨きを暗文風に行う。1138 の口縁端部は平坦に仕上げ、内外面ともに横方向の刷毛目の後、内面は縦方向の密な磨き、外面は斜方向のジグザグ状の磨きを施す。1139 は柳葉系の有茎式の鉄鏃で、長さ 5.0cm を測る。他に肩部に波状文を有する布留系の甕が出土し、土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

SK091034（Fig.126　Ph.201）　調査区中央に位置し、東側を他の遺構に切られる。平面は楕円形を呈し、南北方向の直径は 1.05m を測る。北側、東側、南側に平坦なテラスをもち、遺構面からの深さは 20cm である。そこから中央部は約 10cm 下がり、底面は直径約 20cm の円形を呈する。上層には土師器が散乱した状況で出土した。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.126）　1140 は手捏ね土器の鉢の口縁部片で、復元口径 10.0cm を測る。胎土に白色砂粒を含み、色調は明褐色である。1141 は弥生土器の壺の体部片で、頸部に三角突帯を巡らす。内外面ともに刷毛目で調整し、色調は橙色を呈する。1142 は弥生土器の器台で、脚部端面は平坦に整形し、工具による刻みを入れる。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目を施す。他に暗文が施された高坏の坏部片が出土する。土坑の時期は出土遺物から弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

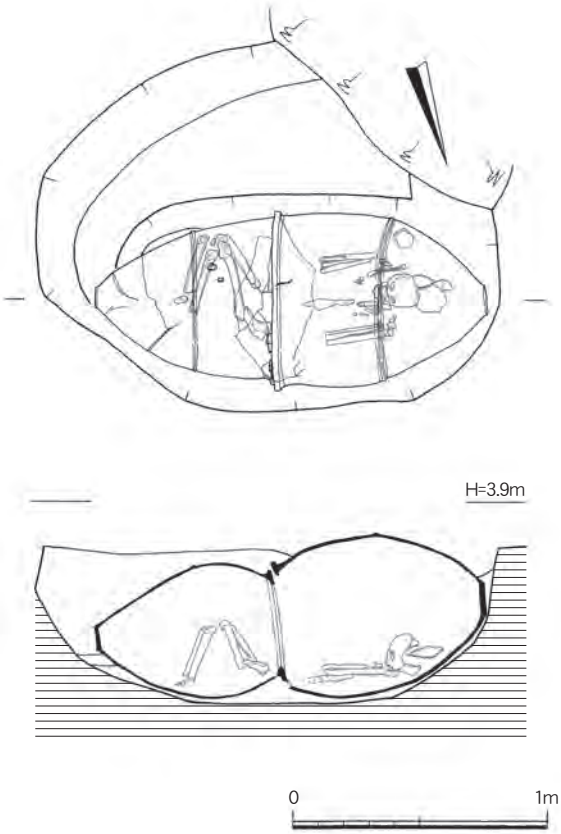
SK091048（Fig.126　Ph.202）　調査区中央に位置し、南側は他の遺構に切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、長径 1.2m 以上、短径 1.05m を測る。東側と南側にテラスを有し、深さは 20cm であり、そこから約 10cm 下がった北西部が最も深くなる。覆土は灰黒色シルトで、炭化物を含む。上層から完形の土師器の坏が出土する。

出土遺物（Fig.126）　1143 は土師器の坏で、口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形品である。口径 12.6cm、器高 4.0cm、底径 7.8cm を測る。体部下半から底部にかけてはヘラ削りで仕上げる。胎土に赤褐色粒、白色砂粒を含み、色調は赤褐色を呈する。1144 は土師器の甕の口縁部片で、外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の削りで調整される。白色砂粒、石英を多く胎土に含み、色調は暗褐色を呈する。1145 は下層の遺物の混入で、弥生土器の西部瀬戸内系の複合口縁壺である。頸部片で、幅広の突帯を巡らせ、格子状の刻みを入れる。突帯下には工具痕が残り、体部は斜方向の刷毛目で調整する。内面は細かい刷毛目調整である。土坑の時期は出土遺物から 8 世紀後半と考えられる。

（4）甕棺（ST）

東西幅 15m の間に 4 基の甕棺墓を検出した。弥生時代中期初頭の壺棺墓 1 基と弥生時代中期前葉の成人棺 3 基である。最も高い砂丘の頂部とその南側背面に並列して分布し、調査区南側の 3 区から連続する。後世の遺構に削平されるものの甕棺の遺存状況はよく、成人棺においては人骨も良好な検出状況であった。しかし、骨自体は脆く、取り上げる段階で、砕けるものも多かった。掘方は、地山である砂丘とほぼ同色、同質の黄褐色砂であったため、検出が困難で、掘り過ぎ等があるかと思われる。

ST090624（Fig.127　Ph.205~218）　調査区西側に位置する。接口式の成人用甕棺墓で、上甕、下甕ともに甕を用いる。墓壙は南西側を大きく削平されるが、比較的良好に遺存しており、平面プランは楕円形を呈する。長径 1.8m、短径 1.45m、深さ 0.7m を測る。南側に 10cm ほどのテラスを有し、甕棺を据えた部分は一段低くなる。甕棺は北壁面に 7°の角度で据え、主軸方位は N-73°-W である。良好な遺存状況で、土圧で口縁部付近と上甕の底部は割れていたが、他はひびが入る程度であった。人骨の検出状況もよく、下甕に頭部を挿入し、手は上方に折り、体に密着させ、足はひざを折り、右側に倒して、埋葬されていた。ほとんどの骨が正置であったが、右側頭蓋骨のみが 10cm ほど右側



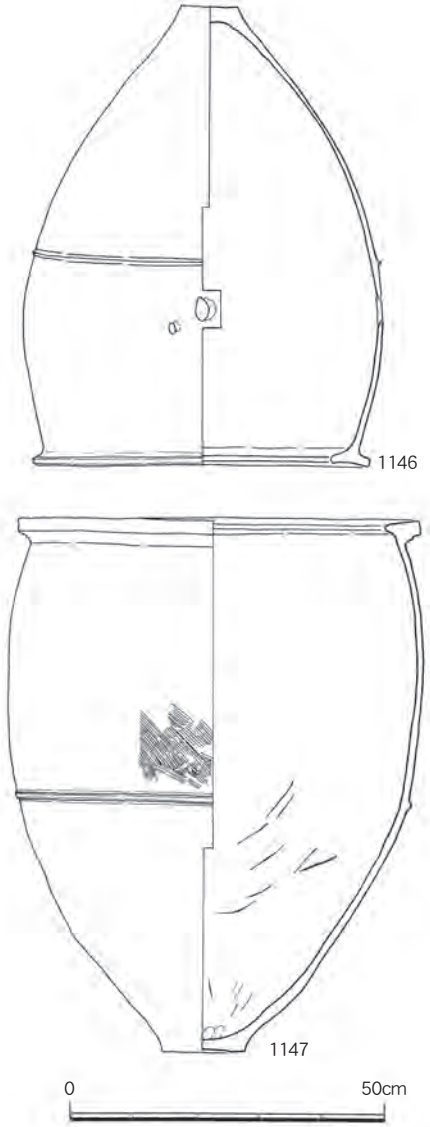


Fig.127　ST090624 実測図（1/30）
および出土遺物実測図（1/12）

Ph.204　ST090624 出土遺物

Ph.205　ST090624（北西から）

Ph.206　ST090624（北東から）

Ph.207　ST090624（西から）

Ph.208　ST090624（東から）

Ph.209　ST090624（北東から）

Ph.210　ST090624 掘方（北東から）

に離れた状況で出土した。人骨から被葬者は成年男性と考えられる（付編 5 参照）。上甕は最大胴部径付近に 2 個の穿孔を有し、穿孔は上方に位置するように置かれていた。甕棺墓は弥生時代中期前葉に位置付けられる。

出土遺物（Fig.127　Ph.204）　1146 は上甕に使用された甕で、口径 55.8cm、器高 72.2cm を測る。口縁部は内面側に伸びる「T」字状を呈し、上面はわずかにくぼむ。胴部は口縁下ですぼまり、中位にシャープな断面三角形の突帯を貼付する。内外面を丁寧にナデ調整し、胴部下半には黒色の顔料が焼成後に塗布される。また、焼成後の穿孔が胴部上半に 2 箇所、下半部に 1 箇所、計 3 箇所認められる。1147 は下甕に用いられた甕で、内傾する口縁部は逆「L」字状を呈し、内面へわずかに突出する。面をなす口唇部は厚みがある。口縁下はすぼまり、鈍い稜線が巡る。胴部中位には台形状の突

Ph.211　ST090624 人骨検出状況（南東から）

Ph.212　ST090624 人骨検出状況（南東から）

Ph.213　ST090624 上肢検出状況（北東から）

Ph.214　ST090624 肋骨検出状況（南東から）

Ph.215　ST090624 頭蓋骨検出状況（南西から）

Ph.216　ST090624 肩甲骨周辺検出状況（北東から）

Ph.217　ST090624 下肢検出状況（北東から）

Ph.218　ST090624 人骨取り上げ状況（北から）

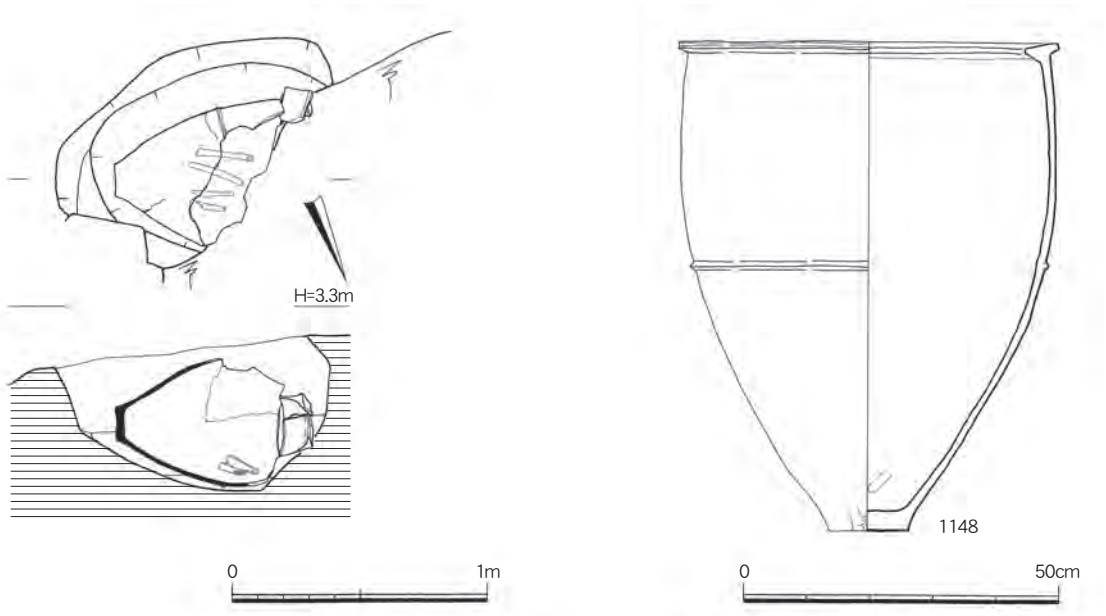


Fig.128　ST090625 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/12）

Ph.219　ST090625（南東から）

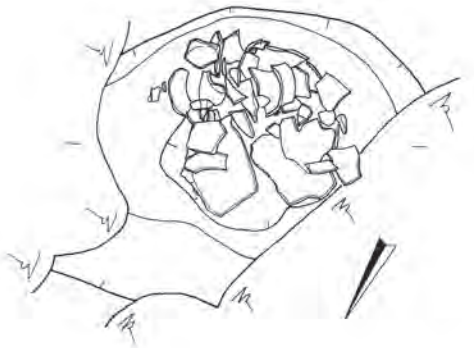
Ph.220　ST090625 下肢出土状況（南から）

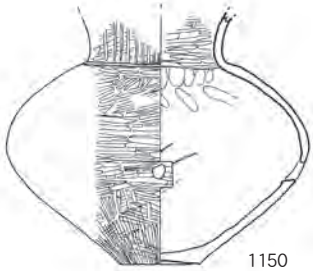
Ph.221　ST090625（西から）

Ph.222　ST090625 下肢出土状況（西から）

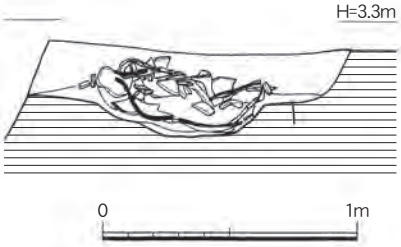
Ph.223　ST090625 出土遺物

帯を貼付するが、上面を強くヨコナデし、凹面をなす。器面はナデ調整により仕上げるが、胴部外面の中位に刷毛目、内面には工具痕が残る。口径 64.8cm、器高 83.8cm を測る。





Ph.224　ST090626
出土遺物①



Ph.225　ST090626 出土遺物②

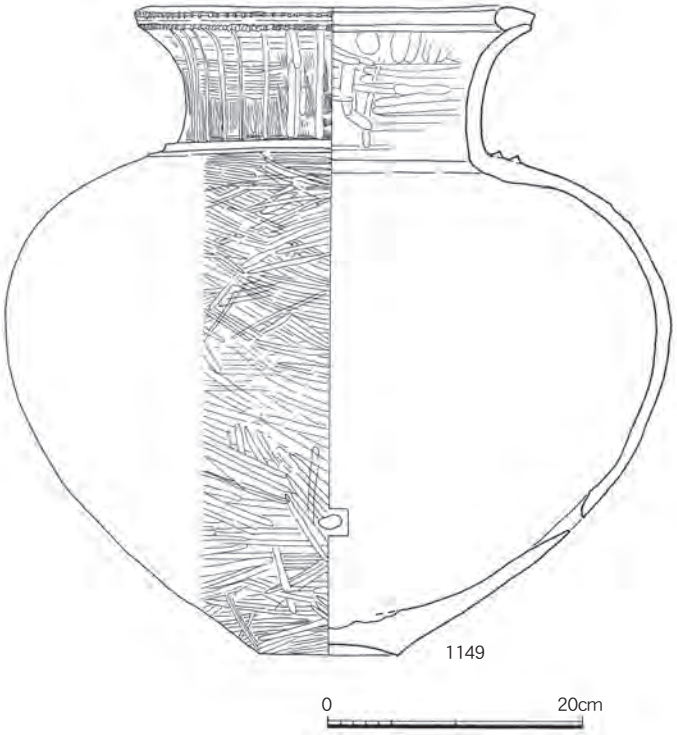


Fig.129　ST090626 実測図（1/30）
および出土遺物実測図（1/6）

ST090625（Fig.128　Ph.219~222）　調査区中央に位置し、大部分を SE090450 に削平される。下甕だけが残存し、足の部分の骨が折り曲げられた状態で出土した。掘方の平面プランは楕円形を呈すると思われ、長径は 1.2m 以上、短径 0.8m 以上を測る。深さは 0.6m を検出した。下甕はほぼ水平に据えられ、主軸方位は N67°-W である。甕棺墓は弥生時代中期前葉に位置付けられる。

出土遺物（Fig.128　Ph.223）　1148 は棺に使用された甕で、復元口径 59.6cm、器高 76.6cm を測る。内傾する口縁部は「T」字状を呈するが、内面への突出は鈍い。砲弾形の胴部の中位には、断面三角形の突帯が巡り、そこから厚みのある底部に直線的にすぼむ。器面の大半は丁寧なナデを施す。

ST090626（Fig.129　Ph.226~229）　調査区中央に位置し、北東側は SE090450、北側は ST090625、西側は SE090094 に切られる。単棺で、広口壺を用いた壺棺墓である。墓壙は大部分を削平され、平面プランは楕円形を呈すると思われる。現状で、長径 1.4m 以上、短径 1.2m 以上、深さ 0.35m を測る。壺棺と小壺は割れ、小壺は壺棺の北東側から壺棺の破片と混在した状況で出土

Ph.226　ST090626（北から）

Ph.227　ST090626（北西から）

Ph.228　ST090626（西から）

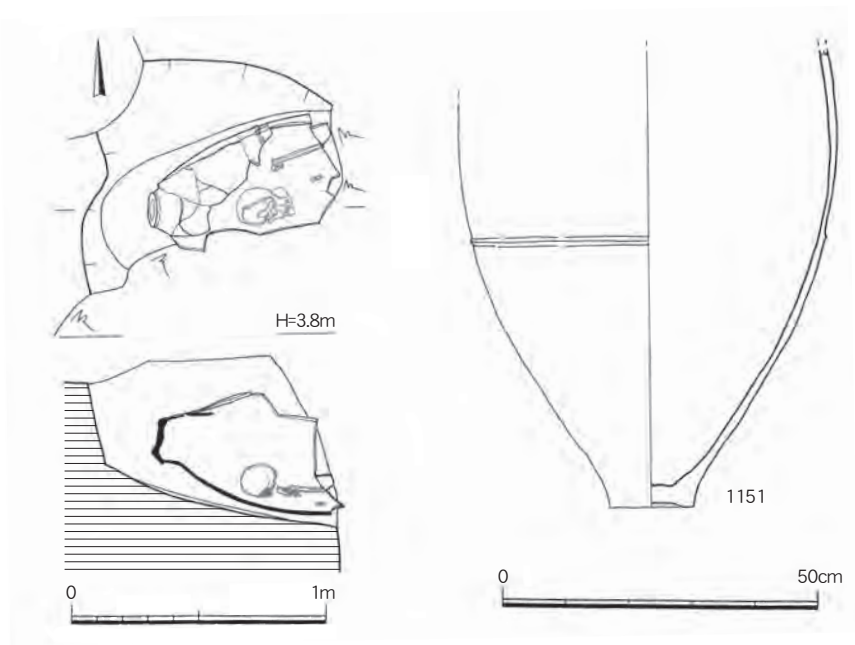
Ph.229　ST090626 棺底（南西から）

する。後世の削平時に、壺棺と小壺は割れ壊され、破片が集められたと考えられる。ただし、砂丘面に接した壺の胴部は本来の位置での出土状況であった。出土状況から壺は口縁を北東側に向けた状況で倒置され、小壺も北東側に置かれていたと考えられる。壺棺墓は弥生時代中期初頭に位置付けられる。

出土遺物（Fig.129　Ph.224・225）　1149 は棺として使用された大形の壺で、接合により全容が判明する。口縁部内面に台形状の粘土を貼付して肥厚させ、口唇部の上下にヘラ状工具による刻目を施す。直立気味の頸部はヘラ研磨で仕上げ、外面には縦方向の暗文磨きを配する。外面には下地の刷毛目を残す。頸部下に断面三角形状のシャープな突帯を 2 条配し、球状の胴部に続く。底部はわずかに上げ底状をなす。外面はヘラ研磨、内面は丁寧なナデを施す。胴部の下半には焼成後の穿孔が認められる。口径 31.8㎝、器高 51.4㎝を測る。1150 は伴献された壺で、口縁部を欠損する。器面の調整は 1149 に類似するが、頸部下の突帯は 1 条で、頸部はやや開き気味である。胴部は扁球状を呈し、同様に焼成跡の穿孔を有する。底部はわずかに上げ底を呈する。器高 19.4㎝が残る。

ST090627（Fig.130　Ph.231~234）　調査区東側に位置し、大部分を SE090161 に削平される。深さ 0.7m の墓壙から下甕だけを検出した。下甕も井戸の削平を受け、底部だけが残存する。中からは頭蓋骨と左腕の骨が出土した。骨の遺存状況は悪く、脆いため、そのままの形状で取り上げることはできなかった。被葬者は成年の女性である（付編 5 参照）。甕棺墓は弥生時代中期前葉に位置付けられる。

出土遺物（Fig.130　Ph.230）　1151 は棺として利用された甕で、口縁部を欠失する。砲弾形を呈する胴部最大径位置のやや下位に低い断面三角形に突帯が巡る。器面の大半はナデ調整が施される。底部はやや厚みがあり、わずかに上げ底となる。器高 72.0㎝が残る。



Ph.230　ST090627
出土遺物

Fig.130　ST090627 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/12）

Ph.231　ST090627（西から）

Ph.232　ST090627 人骨出土状況（南から）

Ph.233　ST090627 頭蓋骨出土状況（南から）

Ph.234　ST090627 頭蓋骨出土状況（南東から）

（5）ピット（SP）

SP 出土遺物（Fig.131~134　Ph.236）　1152 は SP090481 出土の須恵器の坏蓋で、口縁部は下方へわずかに引き伸ばし、天井部はヘラ削りで調整する。1153 は SP090483 出土の完形の管状土錘で、重さは 18.37g を量る。1154・1155 は SP090488 出土で、1154 は底部ヘラ切りの土師器の坏である。1155 は土師器の甕で、器壁は厚く、口縁部外面に煤が付着する。1156 は SP090533 出土の土師器の皿で、底部はヘラ切りで調整する。1157 は SP090535 出土で、回転ヘラ切り底の土師器の坏である。体部と底部の境は丸みをもつ。1158~1160 は SP090536 出土である。1158 は土師器の椀で、体部は直線的に立ち上がり、口縁は外反する。1159 は須恵器の高台付坏で、底部はヘラ切りで調整する。1160 は須恵器の坏蓋で、口縁端部を下方へわずかに折る。1161 は SP090538 出土の土師器の椀で、器面はやや凸凹で、内湾気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。1162 は SP090545 出土の須恵器の瓶で、

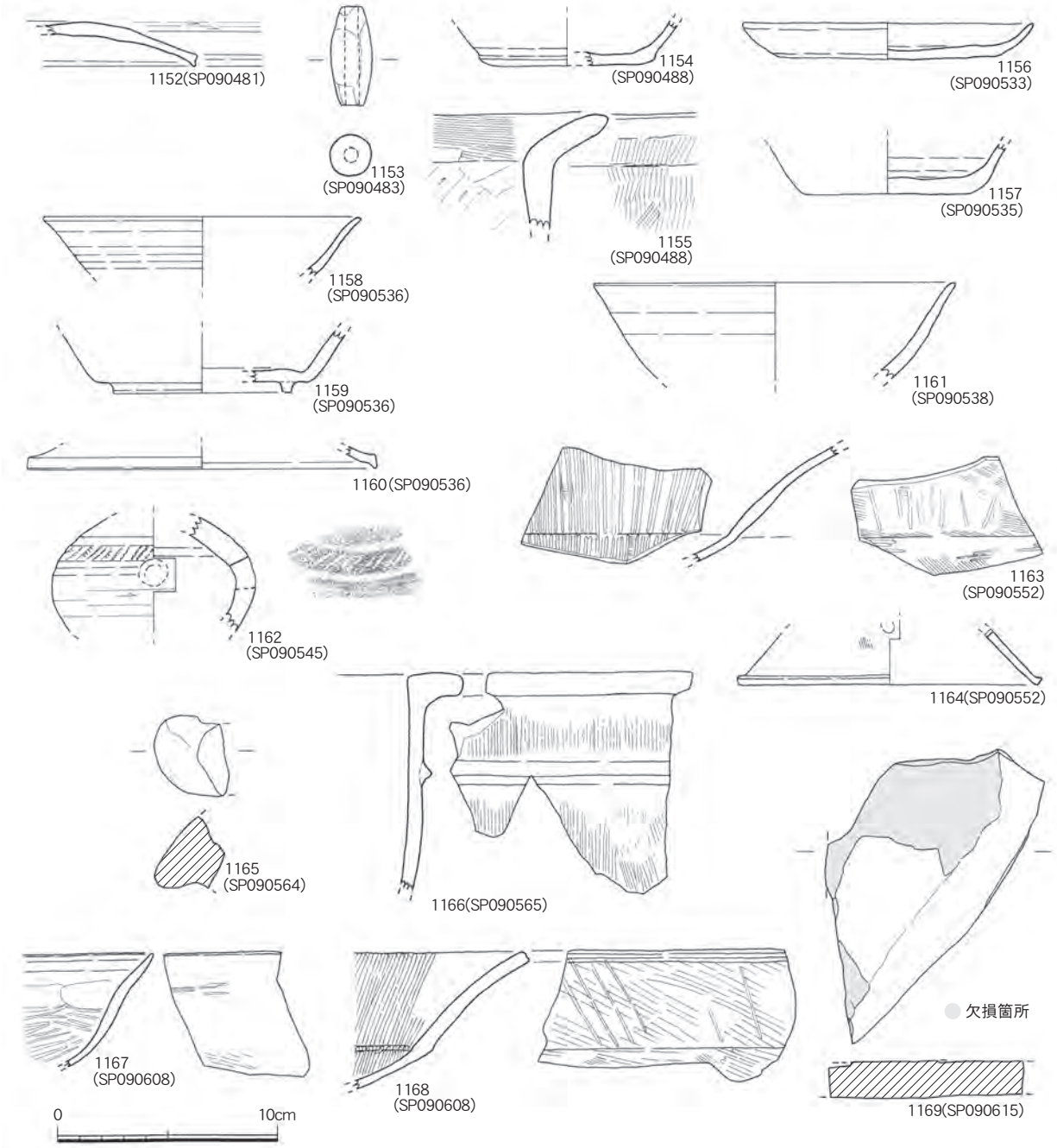


Fig.131　第 5 面 SP 出土遺物①（1/3）

体部上半に 2 条の浅い沈線を巡らせ、その間に工具による刻目を施す。体部下半はヘラ削りで調整する。1163・1164 は SP090552 出土で、1163 は弥生土器の高坏の坏部片で、外面上半は横方向の刷毛目の後、疎らな縦方向の磨き、下半は斜め方向の刷毛目の後、部分的な横方向の磨きを施す。内面は密な縦方向の磨きで調整する。1164 は土師器の脚部片で、穿孔を有する。1165 は SP090564 出土の軽石の破片で、磨石として利用している。重さは現状で 6.50g である。1166 は SP090565 出土の弥生土器の甕で、逆「L」字状の口縁部を有し、口唇部は丸くおさめる。口縁下に断面三角形の低い突帯を貼付する。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで調整する。1167・1168 は SP090608 出土で、1167 は土師器の鉢で、口縁は段を有する。体部内面と外面は磨きで調整し、口縁部は横方向のナデを施す。1168 は弥生土器の高坏で、口縁端部は平坦に仕上げる。外面上半は粗い刷毛目で調整した後、かすかに縦方向の細い磨きが残る。外面下半は横、斜め方向の磨きで調整する。内面は細い縦方向の磨きを暗文風に施す。1169 は SP090615 出土の砂岩の砥石である。側面は全て欠損し、上下面の砥面だけ残る。1170 は SP090968 出土の近畿Ⅴ様式系の鉢で、底部内面は簾状の刷毛目が残る。外面の上半は刷毛目、下半は削りの後、磨きを行う。胎土に赤褐色粒、石英を含み、色調は褐色である。1171・1172 は SP090977 出土で、1171 は弥生土器の大甕の口縁部片で、端部を平坦に仕上げ、刻目を施す。1172 は弥生土器の甕で、やや丸味をもつ平底である。外底面には叩きの痕跡がわずかに残り、内面は粗い刷毛目調整を施す。1173 は SP090978 出土の弥生土器の甕の口縁部片で、口縁は体部からわずかに外反し、端部はやや外面に肥厚させ丸くおさめる。1174~1177 は SP090987 出土である。1174・1175 は弥生土器の高坏である。1174 は坏部片で、外面は横方向の刷毛目の後、縦、斜め方向の磨きを行う。内面は横方向の刷毛目の後、暗文風の磨きを施す。1175 は脚部片で、端部は平坦に仕上げ、外面は縦方向の磨き、内面下半は縦方向の刷毛目、上半はナデで調整する。1176 は近畿Ⅴ様式系の壺の底部片で、外底部には輪台充填の痕跡が残る。内面は工具によるナデ、外面は削りで調整する。1177 は SP090987 出土の玄武岩製の磨製石斧の刃部片か。残存部は使用され、滑らかである。1178 は SP091005 出土の土師器の把手である。器壁の厚さが約 0.8cm の容器に長さが約 2.4cm の把手がつく。把手は削りで調整され、断面多角形を呈する。胎土は精良で、色調は明褐色である。1179 は SP091006 出土の須恵器の坏蓋である。宝珠形の摘みを有し、天井部は回転ヘラ削りを行う。1180・1181 は SP090993 出土で、1180 は弥生土器の鉢で、口縁は段を有し、内外面ともに刷毛目で調整する。1181 は弥生土器の甕の体部片で、下半に 1 条の三角突帯を巡らせ、断続的に突帯を指でナデ、刻目風とする。胎土に石英、雲母、角閃石を多量に含み、色調は褐色を呈する。1182~1185 は SP090994 出土である。1182 は土師器の鉢で、外面にかすかに磨きが残る。1183 は弥生後期の壺の口縁部片で、頸部に三角突帯を巡らす。外面は部分的に刷毛目が残るが、ナデで調整し、内面は粗い刷毛目を施す。1184 は小型の甕で、短い口縁が体部から緩やかに立ち上がる。口縁部内面は細かい刷毛目、体部内外面は粗い刷毛目で調整する。1185 は弥生土器の壺で、頸部に断面台形の突帯を巡らせ、刻みを入れる。1186~1188 は SP091009 出土である。1186 は弥生土器の高坏の坏部片で、内外面ともに横方向の刷毛目調整を行った後、縦方向の磨きを施す。1187 は脚付鉢の脚部片である。1188 は剥離面を有する水晶である。不定形で、約 1.0cm の厚みがあり、不純物を多く含み、白く濁る。1189 は SP091011 出土の近畿Ⅴ様式系の鉢で、口縁部内面は刷毛目調整を残すが、他はすべて細い研磨で調整される。胎土は精良で、色調は暗赤褐色を呈する。1190~1192 は SP091012 出土である。1190 は土師器の甕の把手である。半円状で、端部は上方にまげる。やや軟質の胎土で、色調は明橙色である。1191 は近畿Ⅴ様式系の甕の底部片で、底部輪台充填の痕跡が残り、外面底部付近は叩きで調整される。1192 は大甕の体部片で、偏平な突帯が胴部を巡り、細い工具で刻みを施す。胎土に大粒の白色砂粒を含み、色調は明褐色を呈する。1193・1194 は

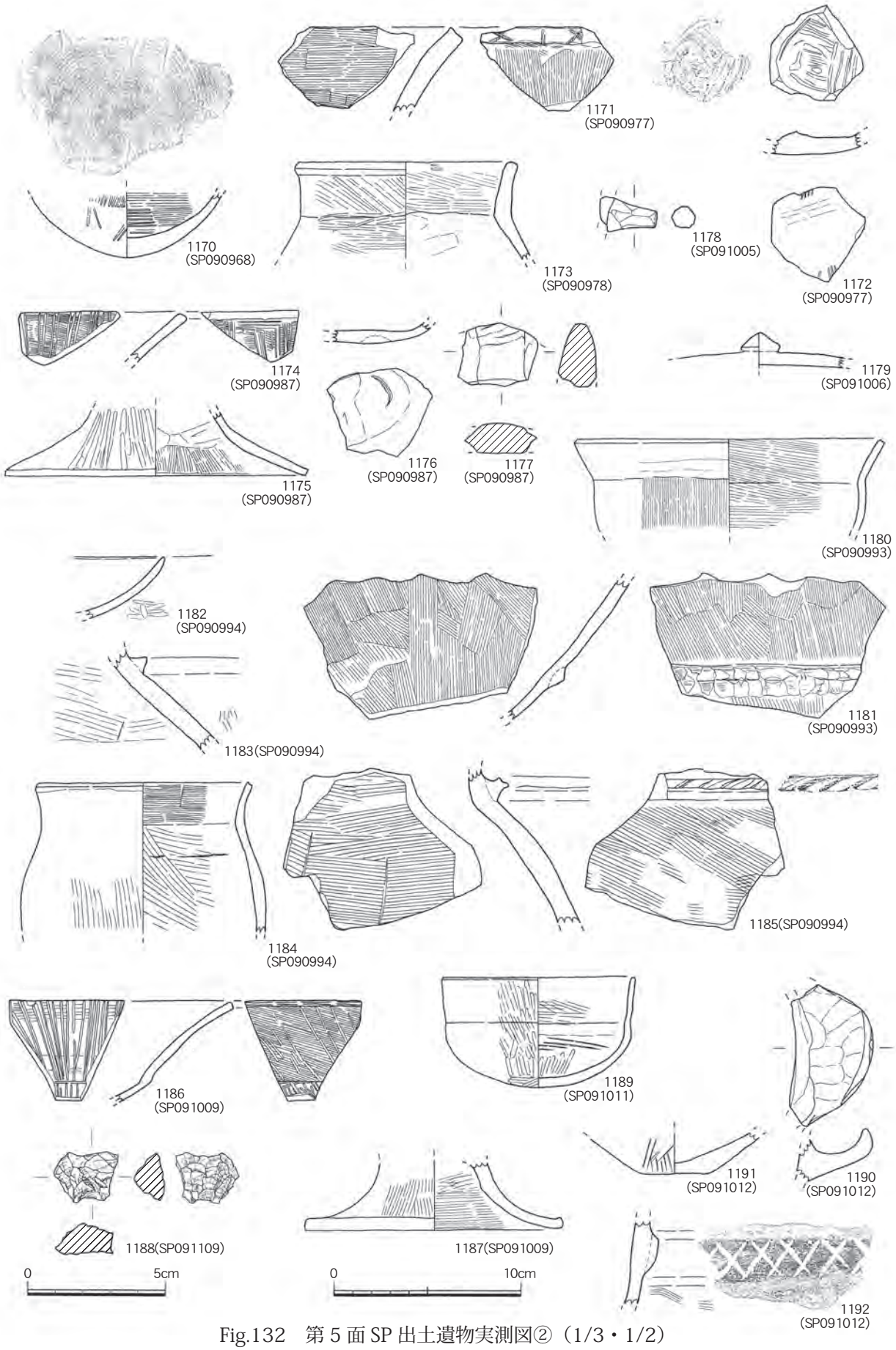
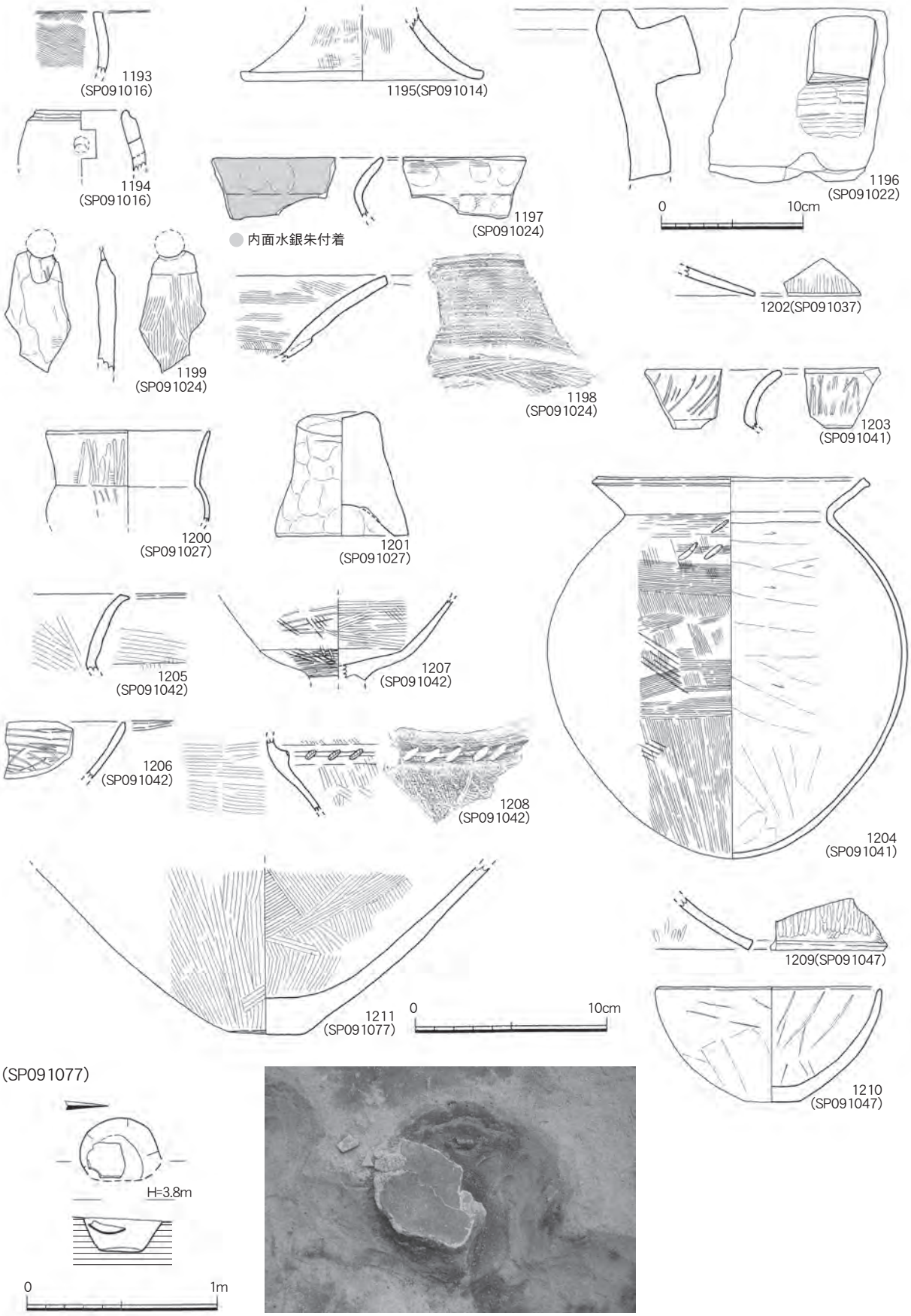


Fig.132　第 5 面 SP 出土遺物実測図②（1/3・1/2）



Ph.235　SP091077（南東から）

Fig.133　第 5 面 SP 出土遺物実測図③（1/3・1/4）および SP091077 実測図（1/30）

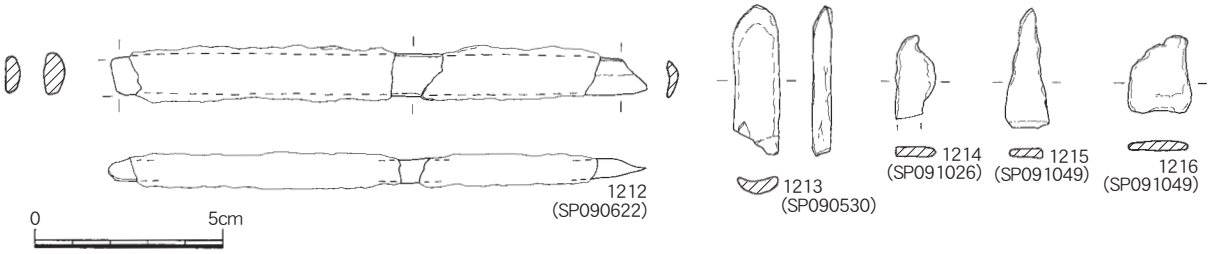
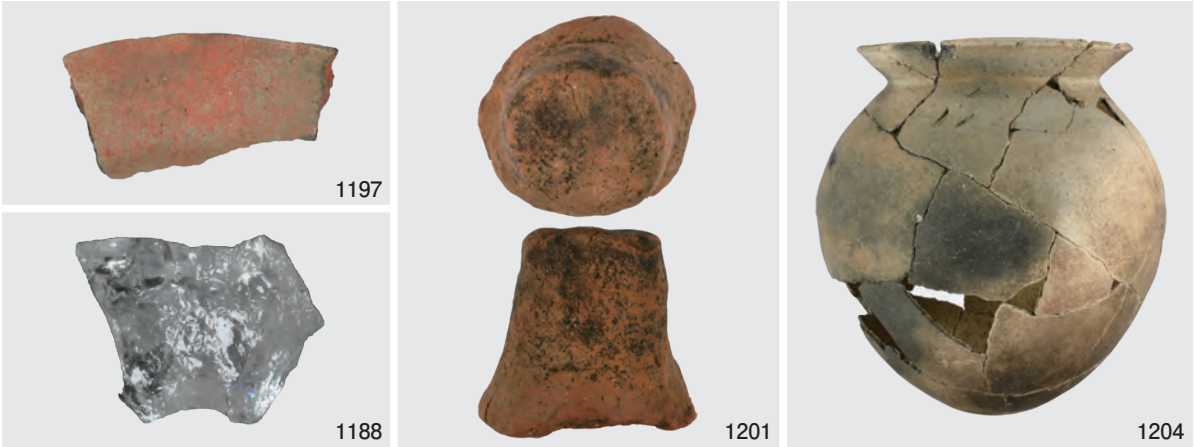


Fig.134　第 5 面 SP 出土遺物実測図④（1/2）

SP091016 出土である。1193 は土師器の鉢で、内面の刷毛目は細かい。1194 は蛸壺で、口縁部外面に段を有し、上方に穿孔をもつ。1195 は SP091014 出土の土師器の脚付鉢で、刷毛目で調整する。1196 は SP091022 出土の大型の滑石製石鍋で、断面方形の把手が付く。1197~1199 は SP091024 出土である。1197 は布留系の甕の口縁部片で、内面に多量の赤色顔料が付着する。鮮やかな朱色に発色し、分析の結果、水銀朱であった（Ⅲ -34 参照）。意図的であるのか不明だが、片口状を呈する。1198 は弥生土器の高坏、1199 は不明土製品で、上方に穿孔を有し、穿孔の下に段をもつ。段より上はナデ、下は刷毛目で調整される。1200・1201 は SP091027 出土で、1200 は土師器の小型の直口壺で、外面は縦方向の磨きを施す。1201 は支脚で、脚端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形である。1202 は SP091037 出土の土師器の脚部片で、色調は白橙色を呈する。1203・1204 は SP091041 出土で、1203 は土師器の短頸壺で、内外面ともに暗文風の磨きを施す。1204 は布留系甕で、細かく割れ、部分的に欠損するが、底部から口縁まで立ち上がる。肩部に 3 つの深い列点文が施される。1205~1208 は SP091042 出土である。1205 は弥生土器の甕の口縁部で外面に煤が付着する。1206 は土師器の鉢、1207 は土師器の高坏、1208 は弥生土器の壺の頸部片で、頸部に幅広の刻目突帯を巡らす。1209・1210 は SP091047 出土で、1209 は弥生土器の高坏脚部、1210 は近畿Ⅴ様式系の小さな平底をもつ鉢である。胎土に大きめの暗赤褐色粒、黒色粒を含む。1211 は SP091077（Fig.133　Ph.235）の中層から出土した弥生土器の大型の甕の底部片で、小さな凸レンズ状を呈する。SP091077 は調査区東側に位置し、東側を SD090854 に切られる。平面プランは直径約 0.4m の円形を呈し、深さは 18cm である。ピットの時期は弥生時代終末から古墳時代初頭である。1212 は SP090622 出土の長さ 14.2cm 以上を測る鉄製の鉈である。錆化が著しいが、刃部には裏すきが認められ、身は断面方形状を呈する。1213 は SP090530 出土の幅広の鉄製鉈で、基部の大半を欠損する。刃部の先端はコテ状を呈し、裏すきを有する。1214 は SP091026 出土の厚さ 0.3cm の小型の鉄片である。1215・1216 は SP091049 出土の鉄片で、1215 は三角形状、1216 は小型の台形状を呈し、ともに厚さは 0.3cm である。



Ph.236　第 5 面 SP 出土遺物

7）第 6 面の調査（Fig.135　Ph.237・238）

周辺の調査から砂丘面の標高は約 3.7m と考えられ、第 5 面がほぼこの高さにあたるが、調査区東側は遺構の切り合いが著しく、第 5 面で検出することができなかった遺構をこの第 6 面の砂丘面で確認した。砂丘面は道路面から中央部が約 2.3m、東側が約 2.1m 下の標高約 3.4m である。検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡 2 軒、土坑 9 基、柱穴である。中世の井戸は削平を受け、下層のみが残ったもので、大量のガラス関連遺物が出土した。

（1）竪穴住居跡（SC）

SC091092（Fig.136　Ph.239）　調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延び、上層の遺構に大部分を削平される。確認できたのは、北西側と南側の落ち込みと 2 本の柱穴である。竪穴住居の平

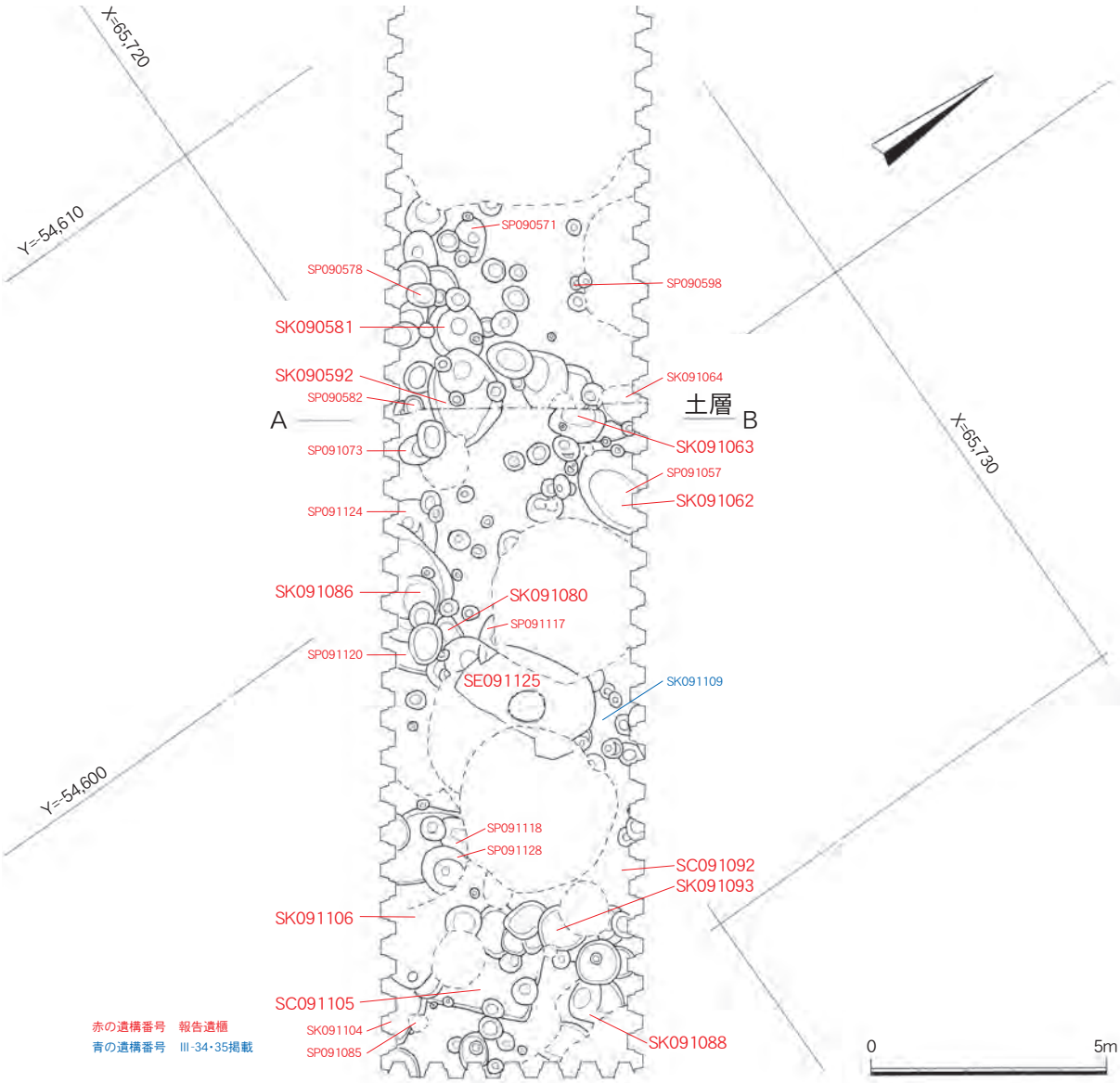
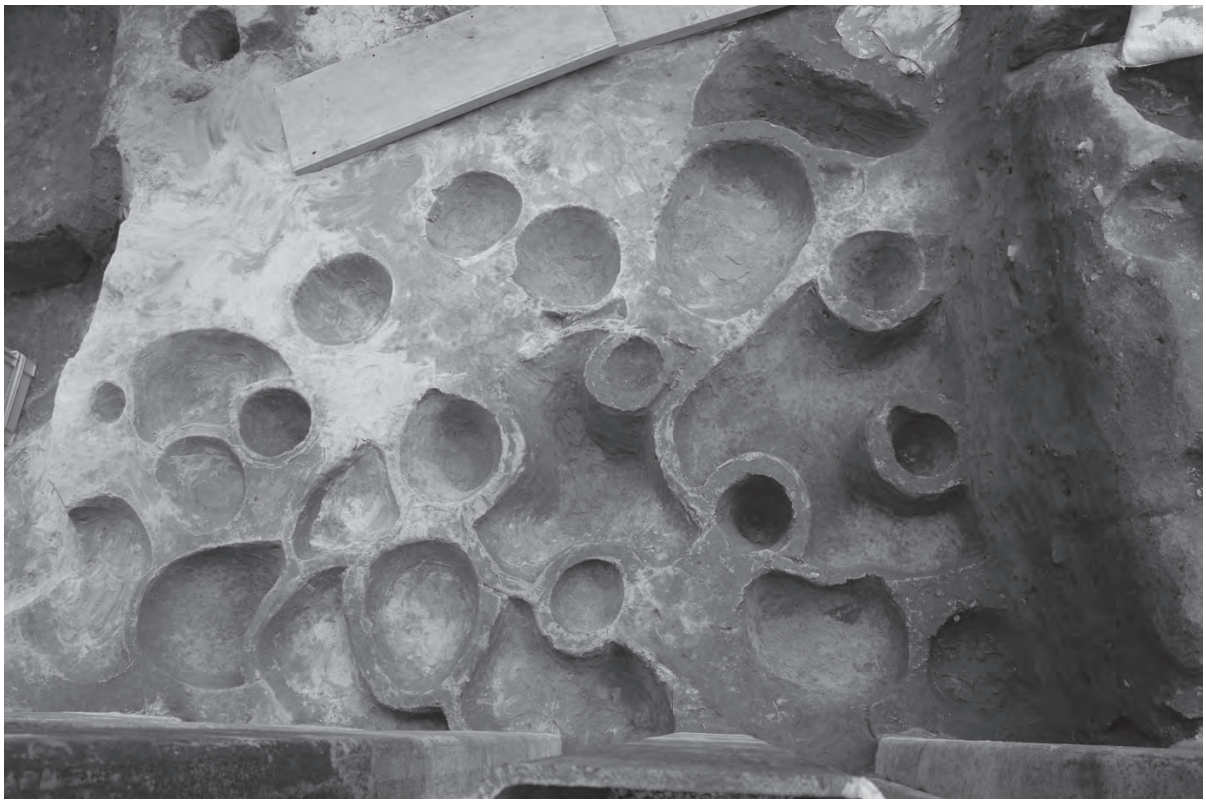


Fig.135　第 6 面全体図（1/150）



Ph.237　6 面中央南側（南西から）

Ph.238　6 面東端（西から）

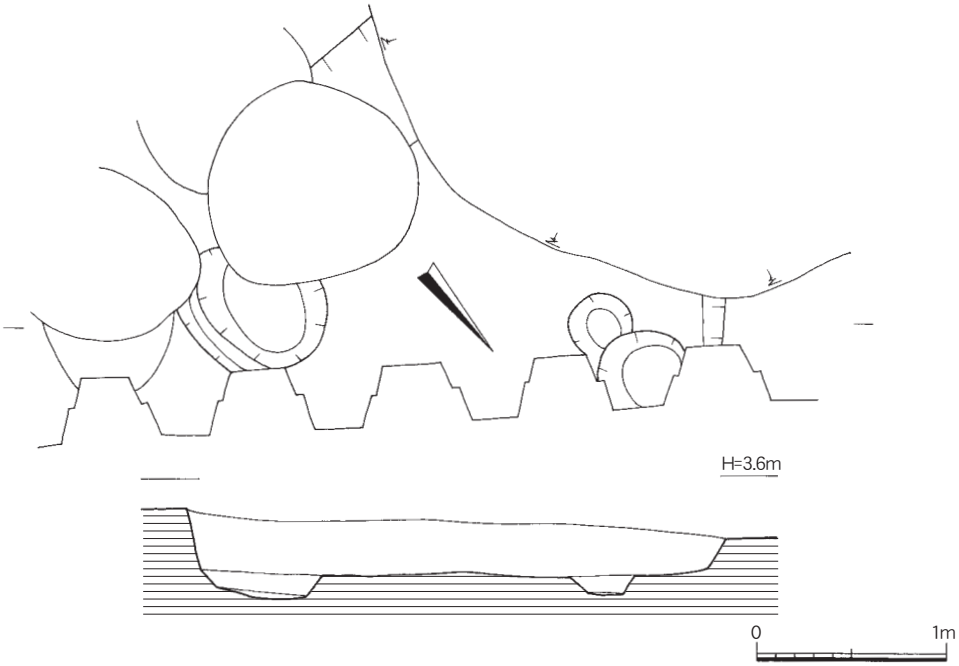


Fig.136　SC091092 実測図（1/40）

Ph.239　SC091092（南西から）

面プランは方形を呈すると思われるが、確認した落ち込みでは歪な形状を示すことから、ほとんど壁面も残っていないと考える。本来の壁面はもっと外側であった可能性が高い。遺構検出面から床面までの深さは東側が最深で 30cm を測り、他はわずか 10cm 程度である。柱穴間の距離は芯々で 1.8m を測り、ともに底面は標高 2.98m である。覆土は茶褐色砂質土で、炭化物をわずかに含み、土器が比較的まとまって出土した。

出土遺物（Fig.137）　1217・1218 は土師器の甕の口縁で、端部は平坦に仕上げ、内外面ともに刷毛目で調整する。1217 の外面の器面の磨滅は著しく、部分的に煤が付着する。1219 は土師器の小型の長頸壺で、外面は刷毛目、内面は指ナデ、指オサエを施す。胎土に石英、雲母、白色砂粒を含む。1220 は土師器の小型丸底壺である。胎土は精良で、色調は明褐色を呈し、外面に黒斑を有する。調整は、口縁部内面は横方向の研磨、体部内面は工具によるナデ、外面は口縁部から体部にかけて連続する縦方向の研磨である。1221 は弥生土器の大型壺の体部片で、体部下半に三角突帯を巡らせ、突帯頂部に刻目を施す。内外面ともに刷毛目で調整する。1222 は土師器の鉢で、胎土に大粒の石英、白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。外面は刷毛目、内面は指オサエで調整する。1223

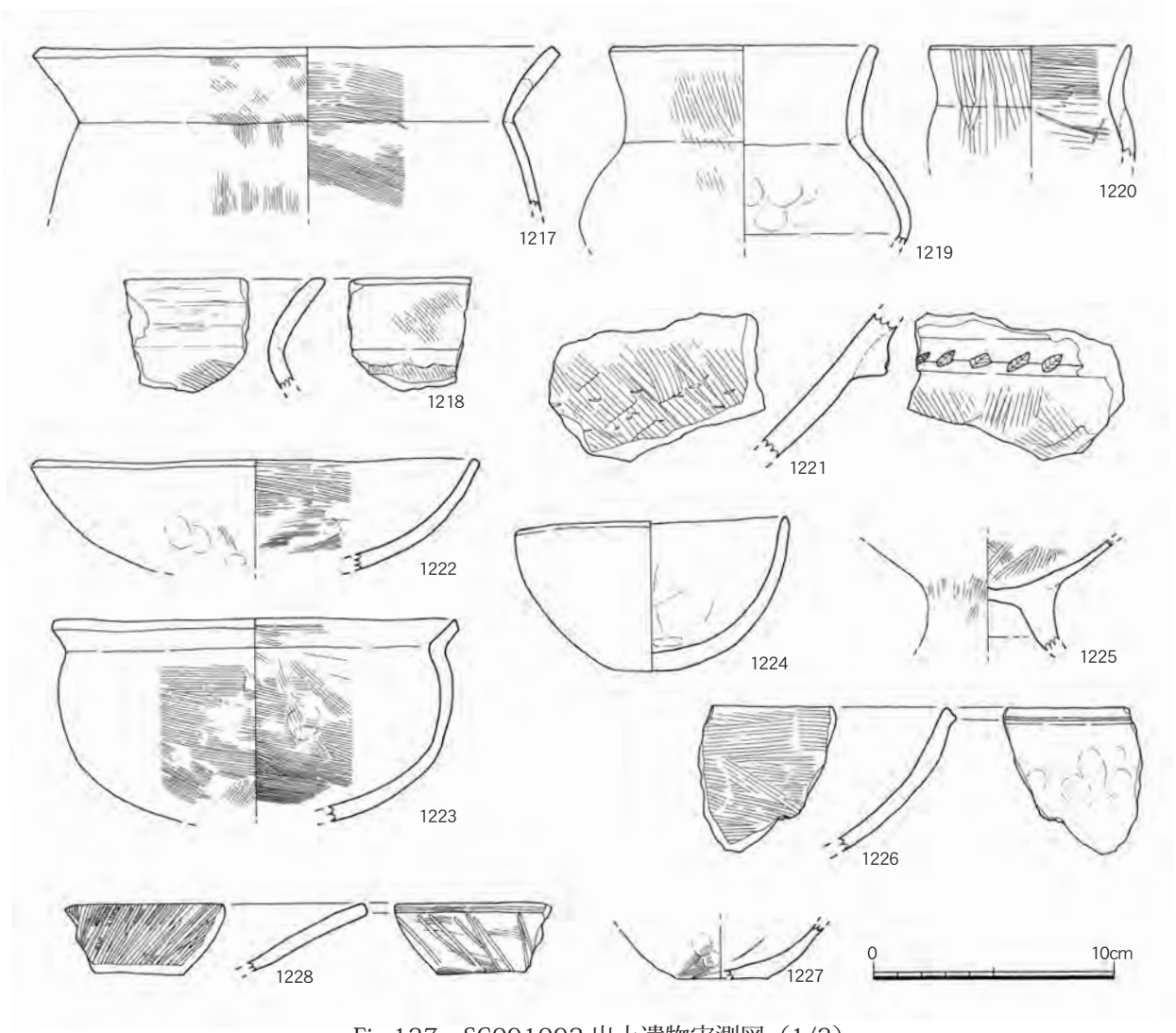
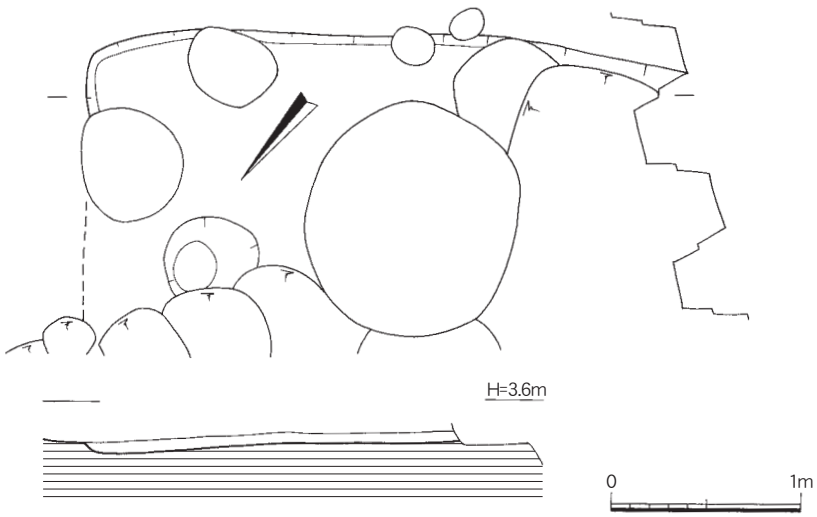


Fig.137　SC091092 出土遺物実測図（1/3）

は土師器の鉢で、丸味をもつ体部に短く外反する口縁をもつ。内外面を刷毛目で調整した後、体部内面は部分的に指オサエ、口縁部外面はナデで仕上げる。胎土に赤褐色粒を多く含み、色調は暗橙色を呈する。1224 は近畿Ⅴ様式系の鉢で、底部はやや丸味を帯びた平底を呈する。口径 11.2cm、器高 6.4cm、底径 2.9cm を測る。器面は磨滅するが、外面はナデ、内面は工具によるナデ調整がうかがえる。1225 は土師器の脚付鉢の小片である。胎土に白色砂粒、角閃石を含み、色調は橙色である。1226 は土師器の鉢で、口縁外面下に段を有する。外面は指ナデ、指オサエ、内面は刷毛目調整である。1227 は土師器の平底の鉢で、内面には工具による簾状のナデの痕跡が残る。胎土に赤褐色粒、黒色粒、石英を含み、色調は明橙色を呈する。1228 は土師器の高坏の口縁部片で、内面は細い縦方向の密な磨きを施し、外面も同様の細い縦方向の磨きを行うが、疎らなため、横方向の刷毛目調整が顕著に残る。他に鉄片が 2 点出土する。出土遺物から竪穴住居の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭である。

SC091105（Fig.138　Ph.240）　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延び、西側は他の遺構に削平される。検出したのは東側と北東側コーナーの壁面で、深さは 10cm 程度である。黄褐色砂の砂丘に茶褐色砂質土の覆土であった。柱穴の可能性があるのは、北東側に位置するピットで、直径 50cm の円形で、底面は直径約 25cm を測る。深さは 30cm で、底面の標高は 3.1m である。主軸方位は N-50°-E である。



Ph.240　SC091105（南西から）

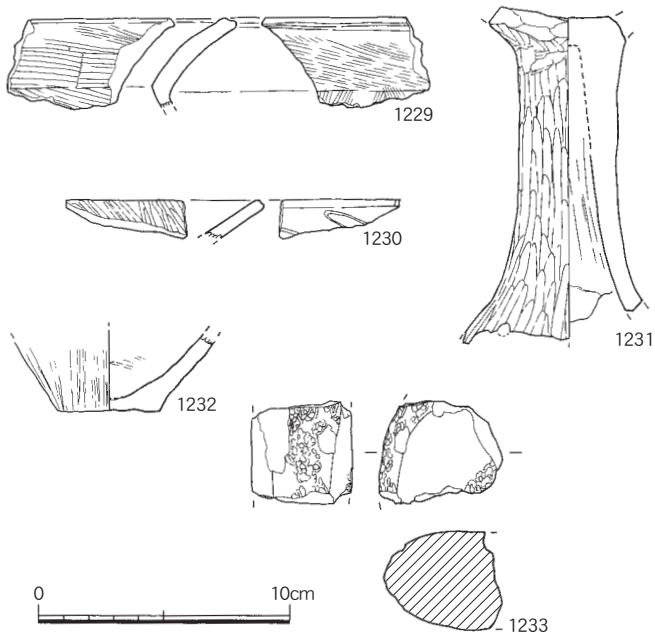


Fig.138　SC091105 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.138）　1229 は土師器の甕の口縁部片で、内外面ともに刷毛目で調整する。胎土に石英を含み、色調は暗橙色である。1230・1231 は土師器の高坏である。1230 は外面に波状文、内面に縦方向の暗文風磨きを施す。1231 は脚部片で、外面は細く短い縦方向の磨きで調整する。脚部と裾部の境には 3 箇所の穿孔を有する。1232 は近畿Ⅴ様式系の甕の底部片で、輪台充填の痕跡が確認できる。外面は叩きの後、粗い縦方向の刷毛目を施す。内面はやや崩れるが、簾状の工具によるナデが残る。胎土に多量の大粒の白色砂粒を含み、色調は暗褐色である。1233 は砂岩製の磨石の小片である。広い上下面は砥面として使用され、側面および上面の中央には敲打の痕跡が残る。出土遺物から竪穴住居の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えらえる。

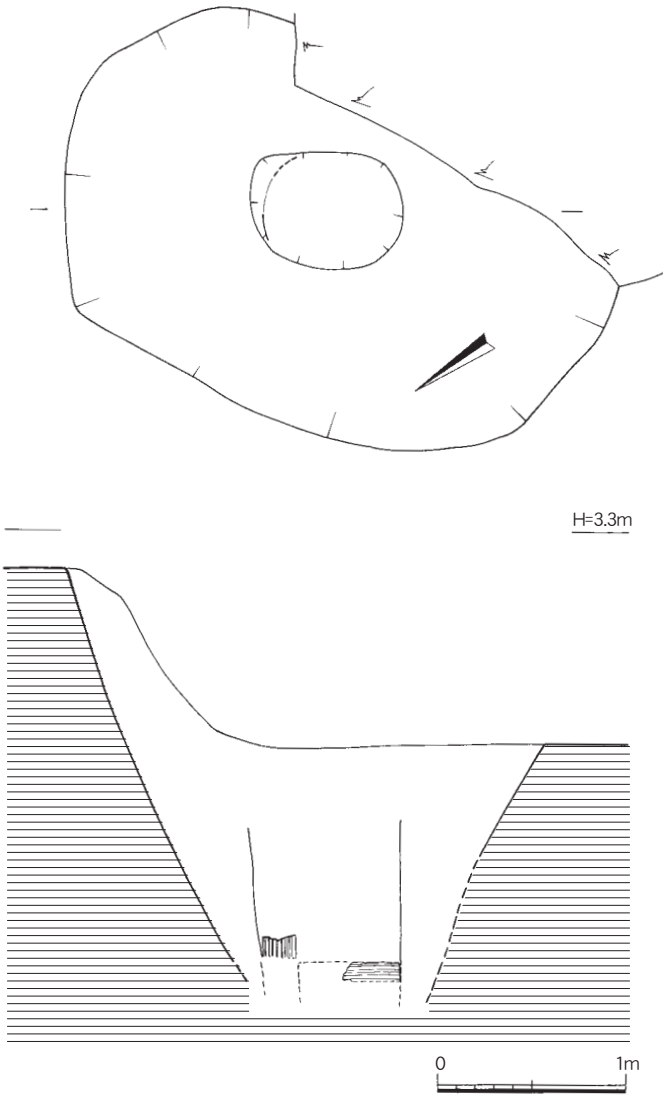


Fig.139　SE091125 実測図（1/40）

Ph.241　SE091125 井側（北東から）

Ph.242　SE091125 井側桶木質（北から）

Ph.243　SE091125 井側桶木質（北から）

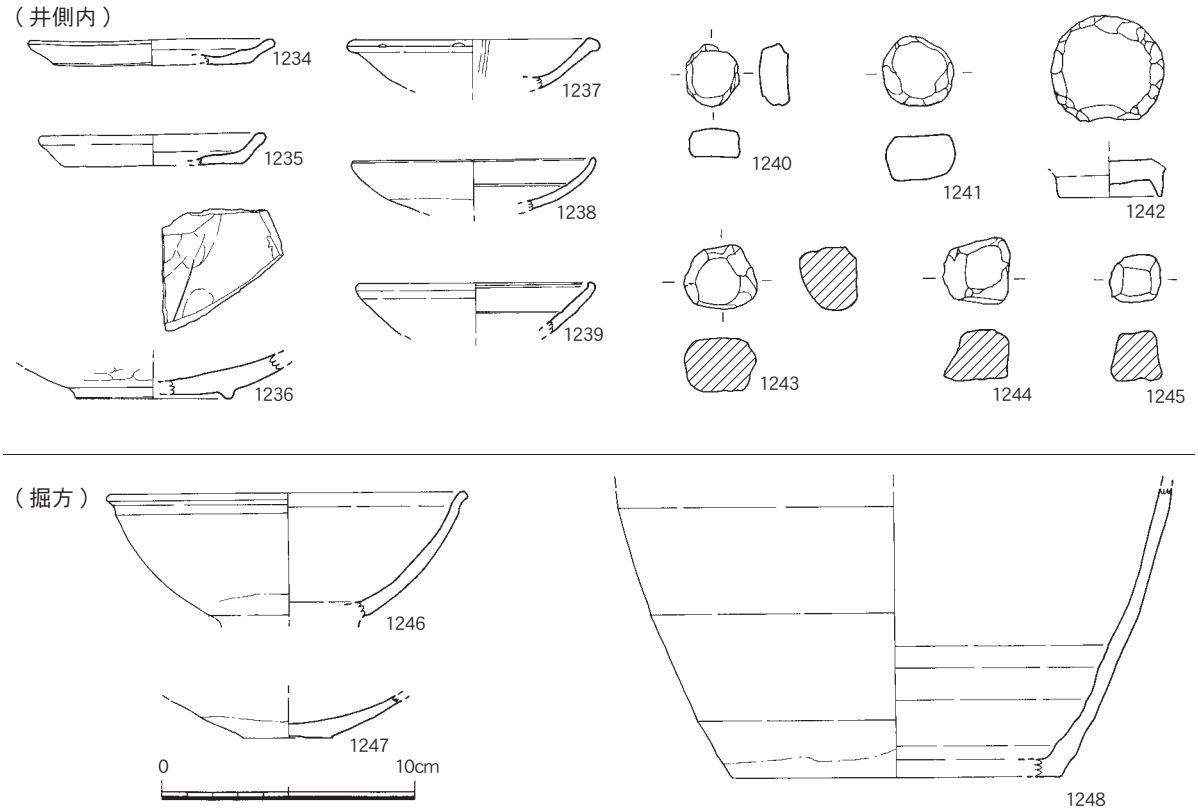
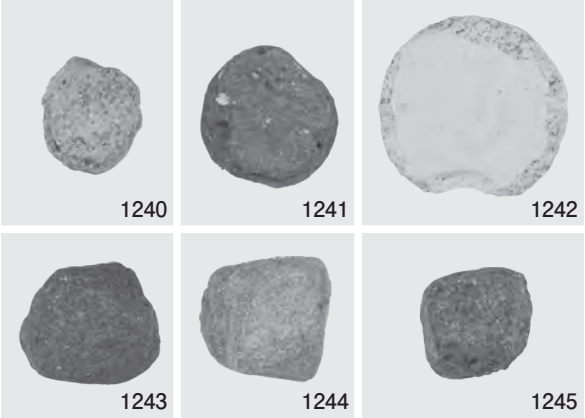


Fig.140　SE091125 出土遺物実測図（1/3）

（2）井戸（SE）

SE091125（Fig.139　Ph.241~243）　調査区中央に位置し、東側を SE090878・090879 に、西側を SE090709 に切られる。掘方の平面プランは楕円形を呈し、現状で長径 3.0m、短径 2.0m を測る。井側はほぼ中央、標高 1.8m 付近で確認できた。掘方同様、やや南北方向に長い楕円形を呈し、長径 0.8m、短径 0.6m である。掘り下げると、標高 1.2m 付近で、井側に使用されていた桶の縦方向の板目を検出した。板目は幅 1cm、高さ 12cm 前後である。木質は東側と北側の一部で確認し、桶の直径は 75cm を測る。その下、標高 1.0m 付近で、灰色粘質土とともに横方向に走る板目を確認した。曲物を利用した水溜で、やや西寄りに設置され、直径 55cm、高さ 20cm を測る。水溜を掘削すると、標高 0.8m で湧水し、それ以上掘ることはできなかった。ここからは大量のガラス製造関連遺物が出土する（Ⅲ -34 Fig.17）。また、放射性炭素年代測定を行った（付編 4）。



Ph.244　SE091125 出土遺物

出土遺物（Fig.140）　1234~1245 は井側内から出土したものである。1234 は回転ヘラ切り底の土師器の皿で、外底部に板状圧痕を有する。胎土に赤褐色粒を含み、色調は淡橙色である。1235 は回転糸切り底の土師器の皿で、色調は明橙色を呈する。1236 は瓦器椀で、三角形の低い高台を付す。体部内面は丁寧なナデ、外面は指オサエで調整する。1237~1239 は白磁である。1237 は皿Ⅳ -2b 類で、口縁部は横方向に屈曲し、口縁端部に輪花、体部内面に白堆線をもつ。1238・1239 は皿Ⅶ -1a 類で、化粧土を施す。1240~1242 は瓦玉で、1240 は土師質の平瓦、1241 は須恵質の平瓦を使用し、と

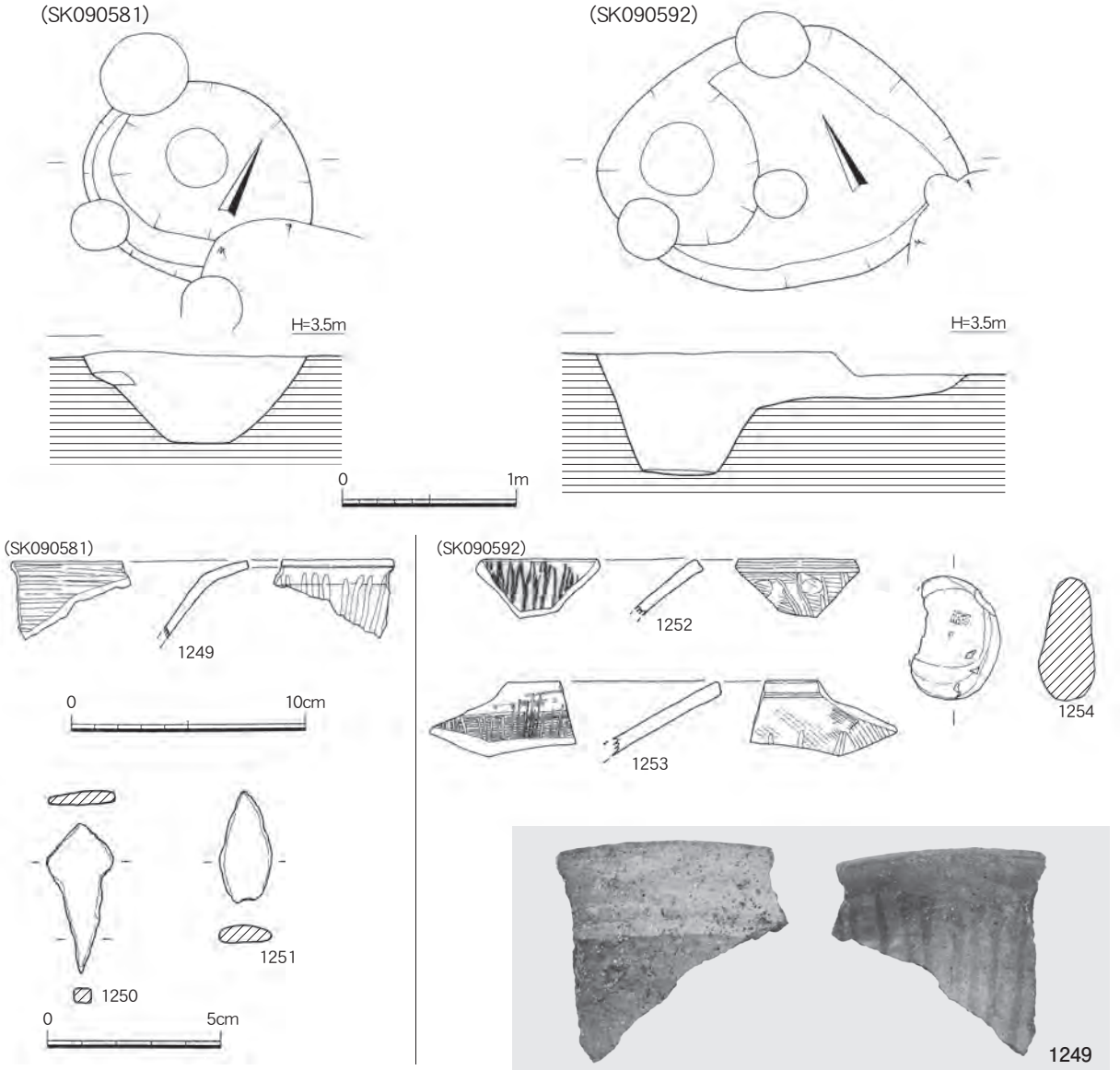


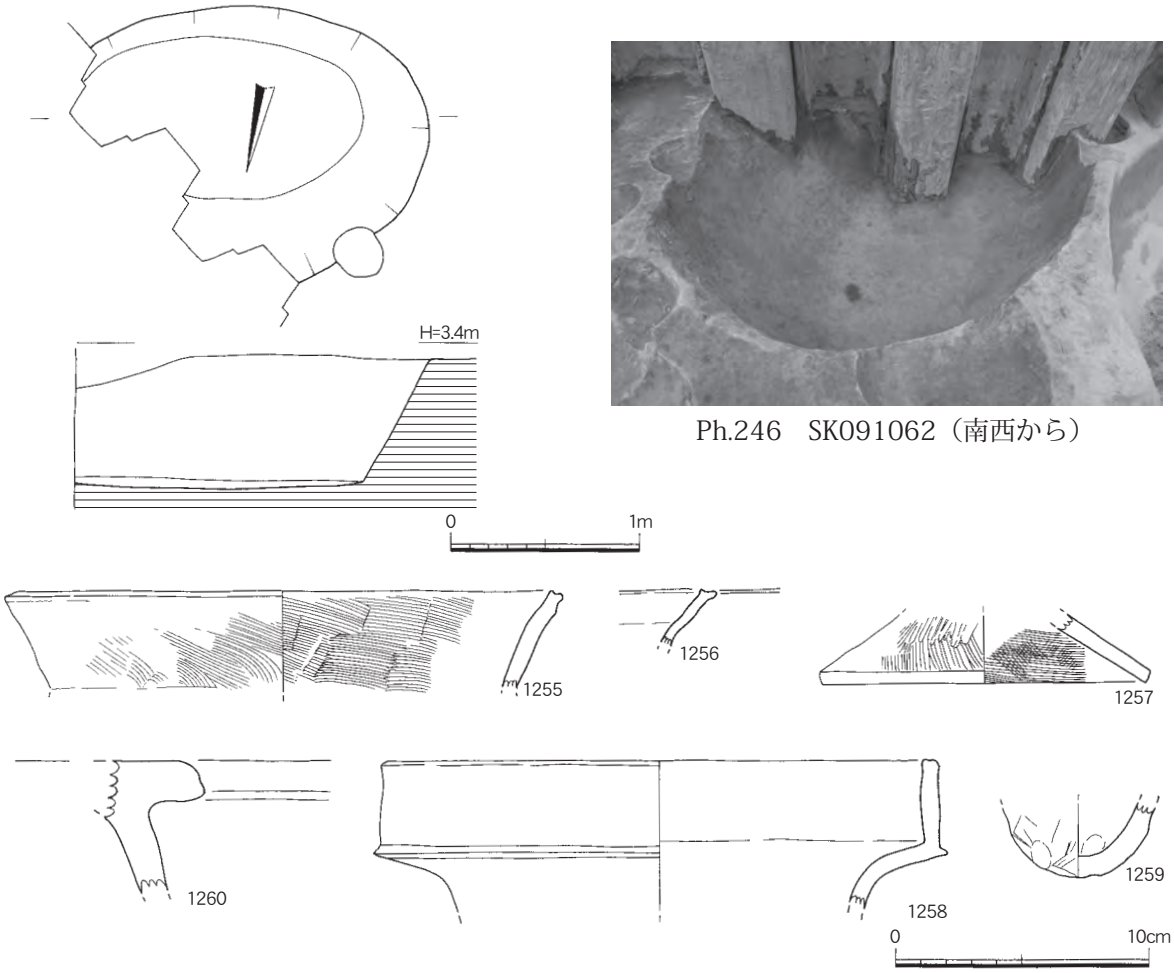
Fig.141　SK090581・090592 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3・1/2）

Ph.245　SK090581 出土遺物

もに凹面はナデ、凸面は磨滅する。1242 は青白磁の小碗を使用したもので、体部縁辺を丁寧に打ち欠く。重さはそれぞれ 6.56g、16.46g、26.47g を量る。1243~1245 は石球である。1243 は灰色の砂岩、1244 は赤色の砂岩、1245 は褐色の礫岩を使用し、方形に打ち欠き、まだ面が残るものである。重さはそれぞれ、21.33g、18.26g、10.33g である。1246~1248 は掘方から出土し、1246 は白磁碗Ⅴ -3a 類、1247 は白磁皿Ⅵ類、1248 は施釉陶器の壺の底部片で、体部外面には黄褐釉がかけられる。胎土に黒色粒、白色砂粒を多量に含み、外面露胎は暗褐色を呈する。他にガラスの丸玉、連玉、小玉（Ⅲ -34 Fig.17）、ガラス製造に関する坩堝（Ⅲ -34 Fig.17-442）、鉛（Ⅲ -34 Fig.17-441）、方解石、炉壁等が出土する。井戸の時期は 11 世紀後半には掘削され、12 世紀初頭には廃絶されたと考えられる。

（3）土坑（SK）

SK090581（Fig.141）　調査区西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.35m、幅 1.15m を測る。断面は逆台形をなし、西側から南側にかけて幅 15cm の狭いテラスを有し、最深部は 50cm



Ph.246　SK091062（南西から）

Fig.142　SK0901062 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

である。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.141　Ph.245）　1249 は土師器の高坏か鉢の口縁部片で、口縁は強く外反し、端部は平坦に仕上げる。体部と口縁の屈曲部から口縁端部まで白橙色を呈する。調整は口縁内面から外面にかけてはナデ、体部内面は削りである。また、外面は縦方向の暗文風の磨きを行う。胎土は軟質で、細かい赤褐色、白色の砂粒、金雲母を含む。1250 は有茎式の鉄鏃で、身は断面方形状をなし顕著に刃部が認められる。先尖りとなる茎は断面、方形状を呈する。1251 は柳葉系の有茎式の鉄鏃で、茎端部を欠損する。他に二重口縁壺や、体部外面をタタキで調整した土師器の甕、鉄片、敲石の小片が出土する。出土遺物から土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

SK090592（Fig.141）　調査区西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 2.1m、短径 1.5m を測る。東側にテラスを有し、西側が一段低くなり、深さは 70cm となる。覆土は茶褐色シルトを主体とし、炭化物を含む。

出土遺物（Fig.141）　1252・1253 は弥生土器の高坏の坏部片である。1252 の外面は斜め方向の刷毛目で調整した後、部分的に指オサエを行い、疎らな縦方向の磨きを施す。内面は横ナデの後、ジグザグ状の暗文を入れる。1253 は外面を斜め方向の刷毛目の後、ジグザグ状の暗文を入れ、内面は横方向の丁寧な刷毛目を施したのち、縦方向の細い磨きを行う。1254 は玄武岩製の敲石で、1/3 を欠損する。側面と上面に敲打痕が残る。重さは現状で、51.6g を量る。出土遺物から土坑の時期は弥生時代終末と考えられる。

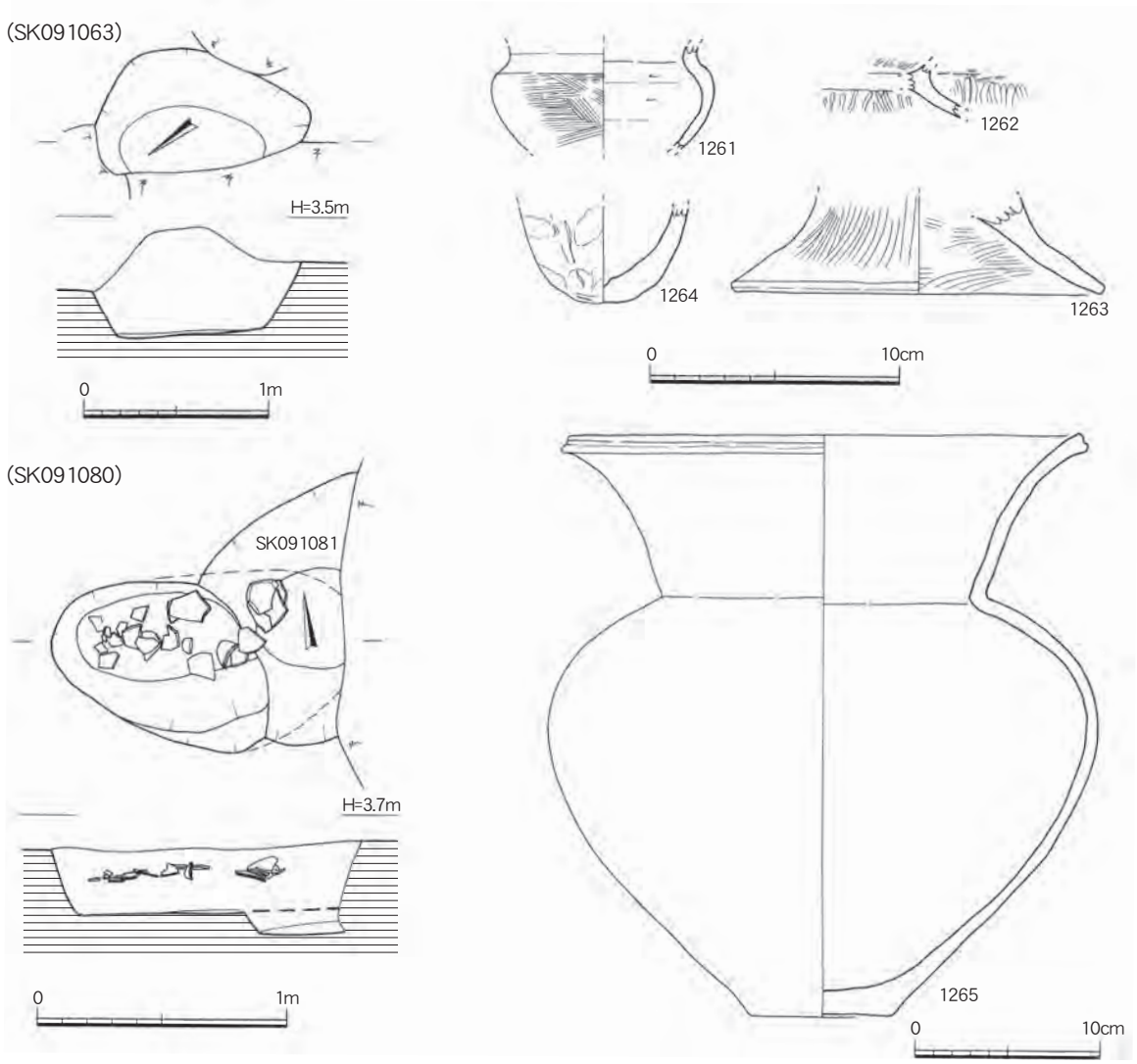


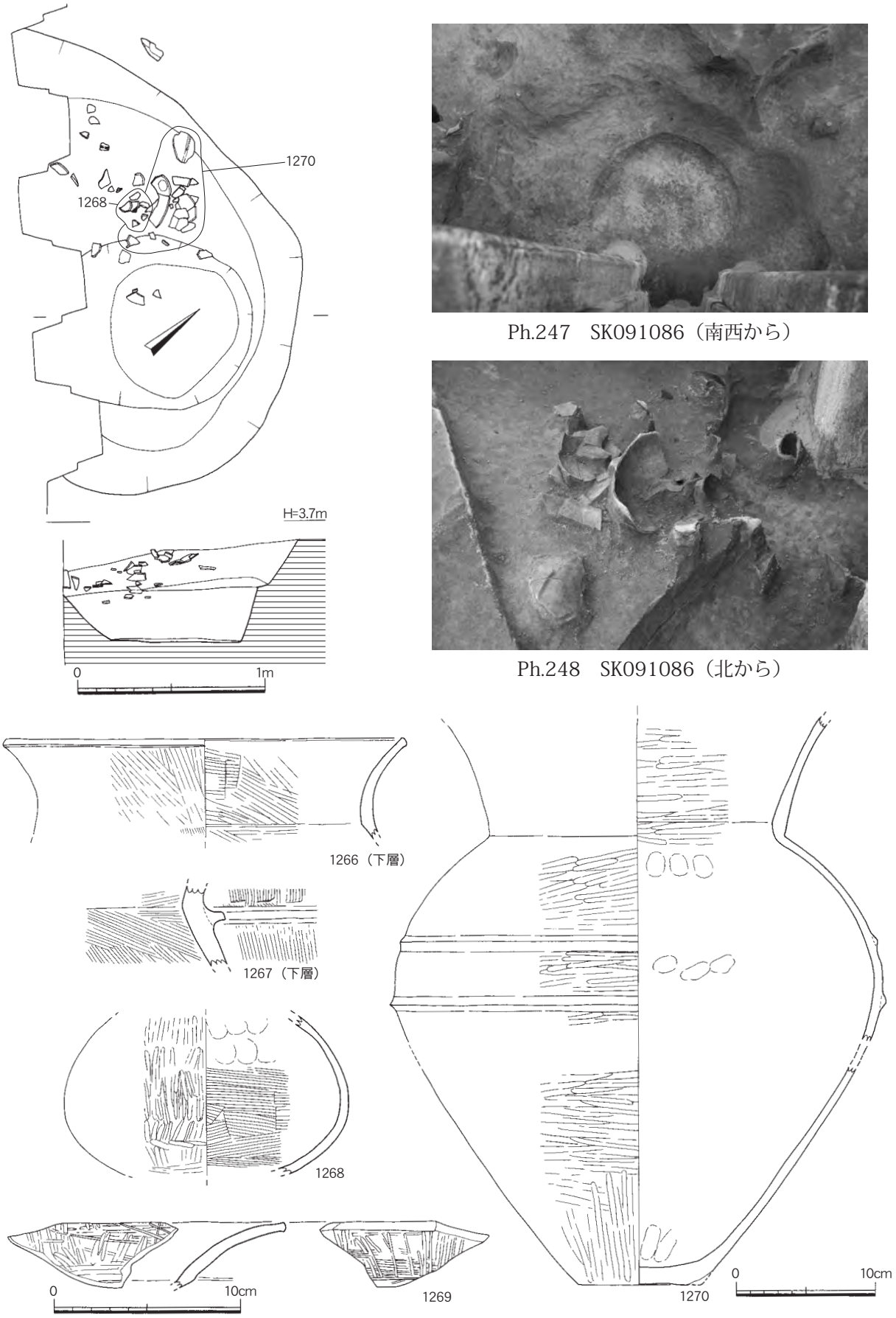
Fig.143　SK091063・091080 実測図（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

SK091062（Fig.142　Ph.246）　調査区中央に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.8m 以上、短径 1.5m を測る。床面は平坦で、深さは 70cm である。覆土は茶褐色砂質土を主体とし、炭化物、灰色粘質土が少量混入する。

出土遺物（Fig.142）　1255 は弥生土器の甕の口縁部片で、外面に多量の煤が付着する。1256 は土師器の甕で、口縁端部は強いナデが施され、凹状に窪む。外面には煤が付着する。1257 は小型の高坏の脚部片で、内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目で調整される。1258 は山陰系二重口縁壺で、口縁下の稜線は明瞭である。口縁外面には煤、内面には多量の焦げが付着する。1259 は蛸壺の底部片である。1260 は下層遺物の混入で、汲田式の甕棺の小片である。出土遺物から土坑の時期は古墳時代前期と考えらえる。

SK091063（Fig.143）　調査区中央に位置し、西側は調査区を反転した際、検出することができなかった。平面プランは卵形を呈し、長径 1.15m、最大幅 0.65m 以上、最深部で 0.55m を測る。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.143）　1261 は土師器の小型丸底壺で、外面は刷毛目、内面は削りで調整される。胎土に赤褐色粒、金雲母を多量に含み、色調は白橙色を呈する。1262 は土師器の精製の脚付鉢と思



Ph.247　SK091086（南西から）

Ph.248　SK091086（北から）

Fig.144　SK091086 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

われる。坏部底面は刷毛目調整の後、細い研磨、外面は幅広の縦方向の磨きを施す。内面も横方向のナデの後、縦方向のやや疎らな研磨調整を行う。1263 は土師器の脚付鉢で、内外面ともに粗い刷毛目で調整する。1264 は蛸壺の底部片である。土坑の時期は古墳時代前期である。

SK091080（Fig.143）　調査区中央に位置する。遺構検出時に東側の SK091081 と覆土が類似しており、同一遺構として掘削してしまった。途中で、SK091080 と SK091081 の境を検出したので、再度精査し、切り合い関係から SK091080 のほうが新しいと判断した。平面プランは楕円形を呈し、長径約 1.1m、短径 0.6m、深さ 25cm を測る。弥生土器の壺が床面から約 10cm 浮いた状況で出土する。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.143）　1265 は弥生土器の広口壺で、1/3 程度を欠損する。復元口径 28.0cm、器高 31.2cm、底径 7.8cm を測る。胴部は中位より上方で張り、頸部で屈曲して、口縁は大きく外に開く。口縁端部は横方向のナデにより凹状に窪む。全面丁寧なナデで調整される。胎土は精良で、色調は橙色を呈する。出土遺物より土坑の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

SK091086（Fig.144　Ph.247・248）　調査区中央に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは、楕円形を呈し、長径 2.5m 以上、短径約 1.8m を測る。2 段掘りとなっており、西側に幅広のテラスをもつ。1 段目の深さは遺構面から 25cm、2 段目の最下層までは 1 段目から 30cm を測る。底面は平坦である。土器が 1 段目に集中しており、覆土はやや粘質を帯びた灰黒色土で、炭化物を含む。2 段目は茶褐色砂質土で、遺物量も少ない。

出土遺物（Fig.144）　1266 は弥生土器の甕の口縁部片で、内外面ともに粗い刷毛目で調整する。1267 は弥生土器の大甕の頸部片で、頸部に断面台形の突出した突帯を 1 条巡らす。外面は縦方向、口縁部内面は横方向、体部内面は斜め方向の刷毛目を施す。胎土に白色、赤褐色砂粒を多量に含み、色調は暗茶灰色を呈する。1268 は精製の短頸広口壺の体部片である。外面は縦方向の丁寧な研磨、内面は下半が横方向の細かい刷毛目、上半は指オサエで調整する。胎土に赤褐色、白色の砂粒を含み、外面は明褐色を呈し、下半に黒斑を有する。1269 は高坏の坏部片で、内外面ともに横方向の刷毛目で調整した後、縦方向の疎らな磨きを施す。胎土に赤褐色粒、白色砂粒を含み、色調は白橙色である。1270 は弥生土器の広口壺である。大きな破片 3 個体を図上復元したものである。底径 8.8cm を測る平底の底部に最大胴部径を中位より上方にもち、口縁が頸部より大きく外反する。体部上方に 2 条の三角突帯を巡らせる。体部外面の底部付近は縦方向の磨き、下半から頸部にかけては横方向の丁寧な磨きを施す。口縁部外面はナデ、内面は工具によるナデの後、横方向の研磨で調整する。体部内面はナデ、部分的に指オサエを行う。底部外面と内面は磨滅する。下層出土の遺物は弥生時代後期後葉の土器が主体となるが、古墳時代初頭のものも含まれる。また上層からは弥生時代中期の壺がまとまって出土するが、こちらも古墳時代初頭までの遺物が混在する。以上のことから、土坑は古墳時代初頭の廃絶に伴い、下層の遺物が混入したと考えらえる。

SK091088（Fig.145）　調査区東側に位置し、南側を SK090973 に切られる。平面プランは略円形を呈し、直径 0.95~1.15m である。北側にテラスを有し、南側が最も深く、35cm を測る。覆土は茶褐色砂質土で、中層より弥生土器の鉢（1271）が出土する。

出土遺物（Fig.145　Ph.249）　1271 は弥生土器の鉢で、器壁は厚く、底部は丸底を呈する。完形品で、口径 12.5cm、器高 6.0~7.0cm を測る。外面は粗い刷毛目で調整するが、縦方向のシワがほぼ表面に残る。内面は指ナデ、指オサエで仕上げる。口縁は波打ち、器壁の厚さも一定ではない。胎土に白色砂粒を多量に含み、色調は橙色を呈する。1272 は弥生土器の甕の口縁部で、端部は平坦に仕上げる。体部と口縁部の境は明瞭で、全面刷毛目で調整する。1273 は弥生土器の複合口縁壺の口

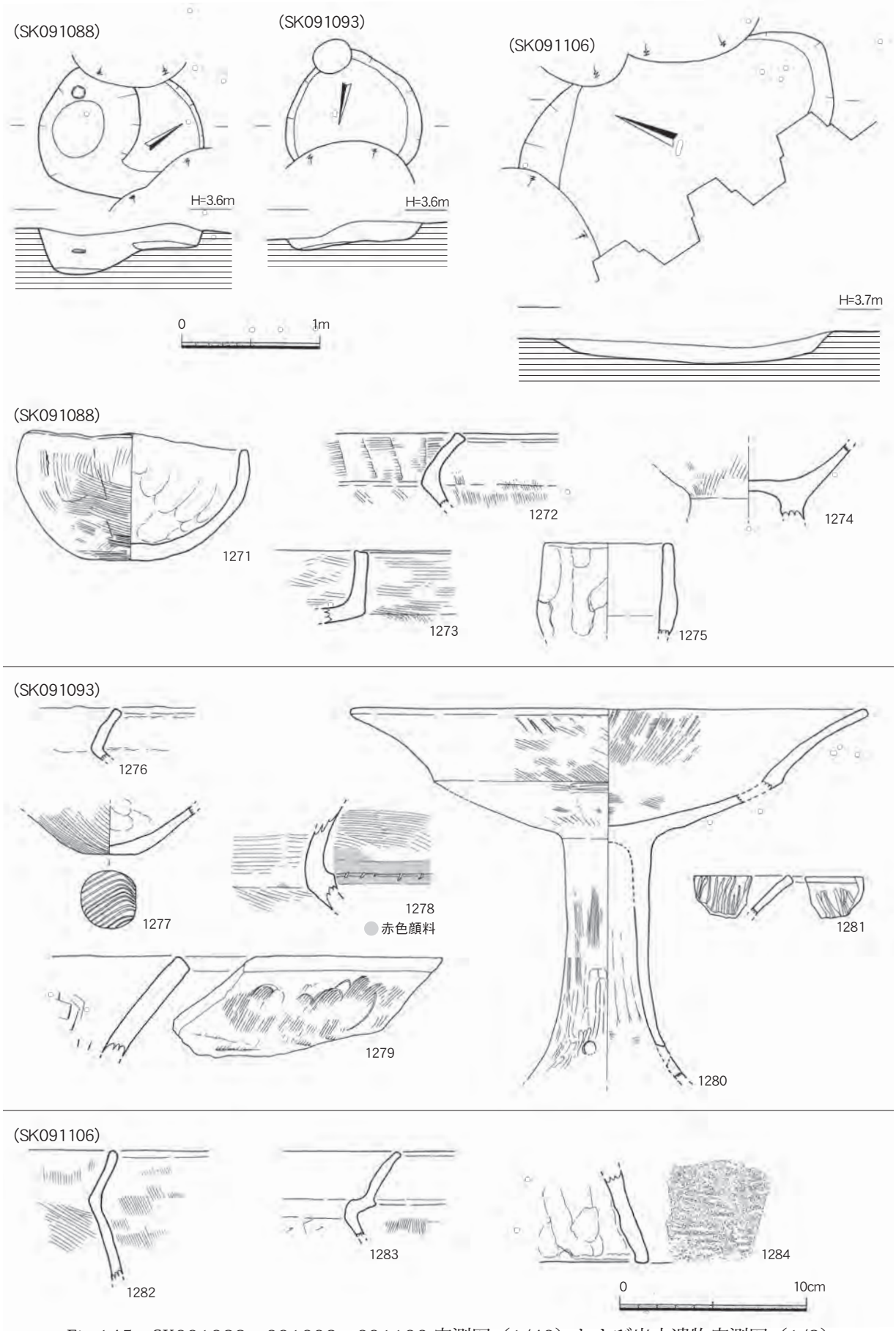


Fig.145　SK091088・091093・091106 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

縁部片で、粗い刷毛目で調整する。1274 は弥生土器の台付甕か。外面は刷毛目の後、ナデ、内面は丁寧なナデで調整する。胎土は石英、白色砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。1275 は蛸壺の口縁部片である。外面は指オサエ、内面は横方向のナデで調整する。以上の出土遺物から土坑の時期は弥生時代終末と考えらえる。

SK091093（Fig.145）　調査区東側に位置する。直径約 1.0m の円形を呈し、深さは 15cm を測る。床面は東側がやや下がるが、東側の古い遺構の底面を掘削してしまった可能性がある。本来は標高 3.4m 付近が床面であったと考えらえる。覆土は茶褐色砂質土である。

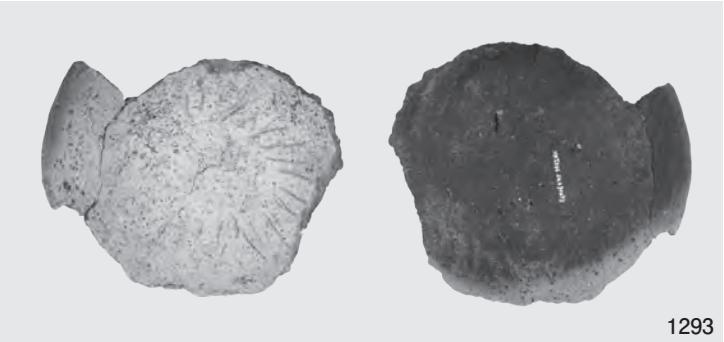
出土遺物（Fig.145）　1276 は土師器の甕の口縁部片で、指ナデ、指オサエで調整し、口縁は波打つ。胎土に白色砂粒を含み、色調は明褐色である。1277 は弥生土器の甕の底部片で、直径 3.0cm の小さな平底をもつ。外面は全て粗い刷毛目で調整される。1278 は弥生土器の壺の頸部片で、頸部に刻目突帯を 1 条巡らす。内面は刷毛目で調整するが、口縁部外面も横方向の刷毛目を施す。頸部突帯付近には赤色顔料の付着がみられる。1279 は弥生土器の大甕の口縁部片で、内面下端には煤が付着する。1280・1281 は弥生土器の高坏である。1280 の坏部内外面は細かい刷毛目の後に行った縦方向の磨きがかすかに残る。脚部外面は刷毛目調整後、下半のみ縦方向の磨きを行う。内面にはシボリ痕が残る。脚部と裾部の境付近に 3 箇所の穿孔を有する。1281 の胎土は精良で、色調は褐色を呈する。内外面ともに横方向のナデを行った後、縦方向の研磨を施す。出土遺物から土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

SK091106（Fig.145）　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延びる。検出したのはごく一部であるが、平面プランは方形を呈すると考えられる。東西方向の一辺は 2.1m を測り、底面は中央部が最も深く、壁は緩やかに立ち上がる。遺存状況は悪く、深さは 15cm である。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.145）　1282 は弥生土器の小型の甕の口縁部片で、口縁はやや内湾する。体部外面は器面の磨滅が著しい。1283 は山陰系土師器の甕の口縁部片である。口縁下部の稜線が突出し、体部は外面が縦方向の刷毛目、内面は削りで調整する。胎土は雲母や白色粒を含み、色調は白橙色である。1284 は弥生土器の器台の裾部である。外面にはタタキが残る。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭である。

（4）ピット（SP）

SP091085（Fig.135　Ph.250・251）　調査区東側に位置し、北側を他のピットに切られる。平面プランは直径 25cm の円形を呈し、深さは 10cm である。南端から馬の歯が 2 本出土した（Ⅲ -35



Ph.249　SK091088・SP091073 出土遺物

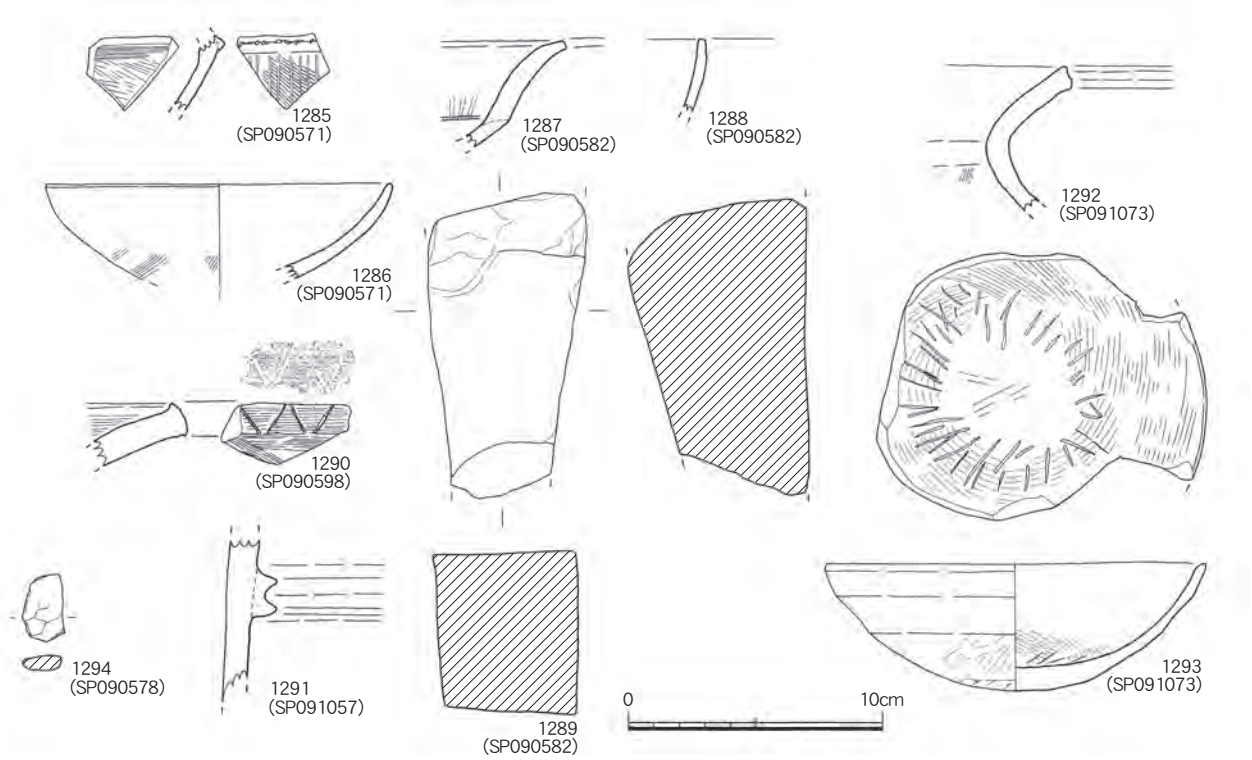
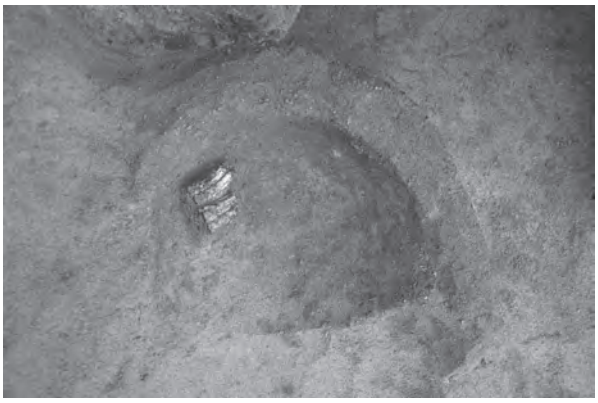
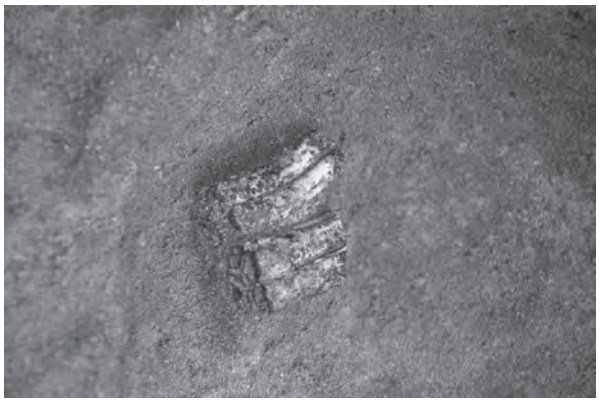


Fig.146　第 6 面 SP 出土遺物実測図①（1/3）



Ph.250　SP091085 馬歯出土状況（北東から）



Ph.251　SP091085 馬歯出土状況（北東から）

参照）。覆土は茶褐色砂に微細な炭化物が含まれる。出土遺物は古墳時代初頭の甕の小片が出土するのみである。

SP 出土遺物（Fig.146・147　Ph.249）　1285・1286 は SP090571 出土で、1285 は小型壺の体部片で三角突帯を巡らす。1286 は土師器の鉢である。1287~1289 は SP090582 出土で、1287 は弥生土器の高坏坏部、1288 は弥生土器の鉢、1289 は砂岩製の粗砥石で、上下端は欠損するが、側面はよく使用され、滑らかとなる。一部、火を受け、赤変する。重さは現状で 688.97g である。1290 は SP090598 出土の弥生土器の広口壺である。口縁端部に三角状の刻みを入れる。1291 は SP091057 出土の弥生土器の大甕の胴部片である。断面「M」字状の突帯を 1 条巡らす。1292・1293 は SP091073 出土で、1292 は土師器の甕の口縁部片で、端部は凹状に窪む。体部内面は削りで調整される。1293 は近畿Ⅴ様式系の鉢で、外面下半は削り、上半は指ナデ、内面は簾状の刷毛目

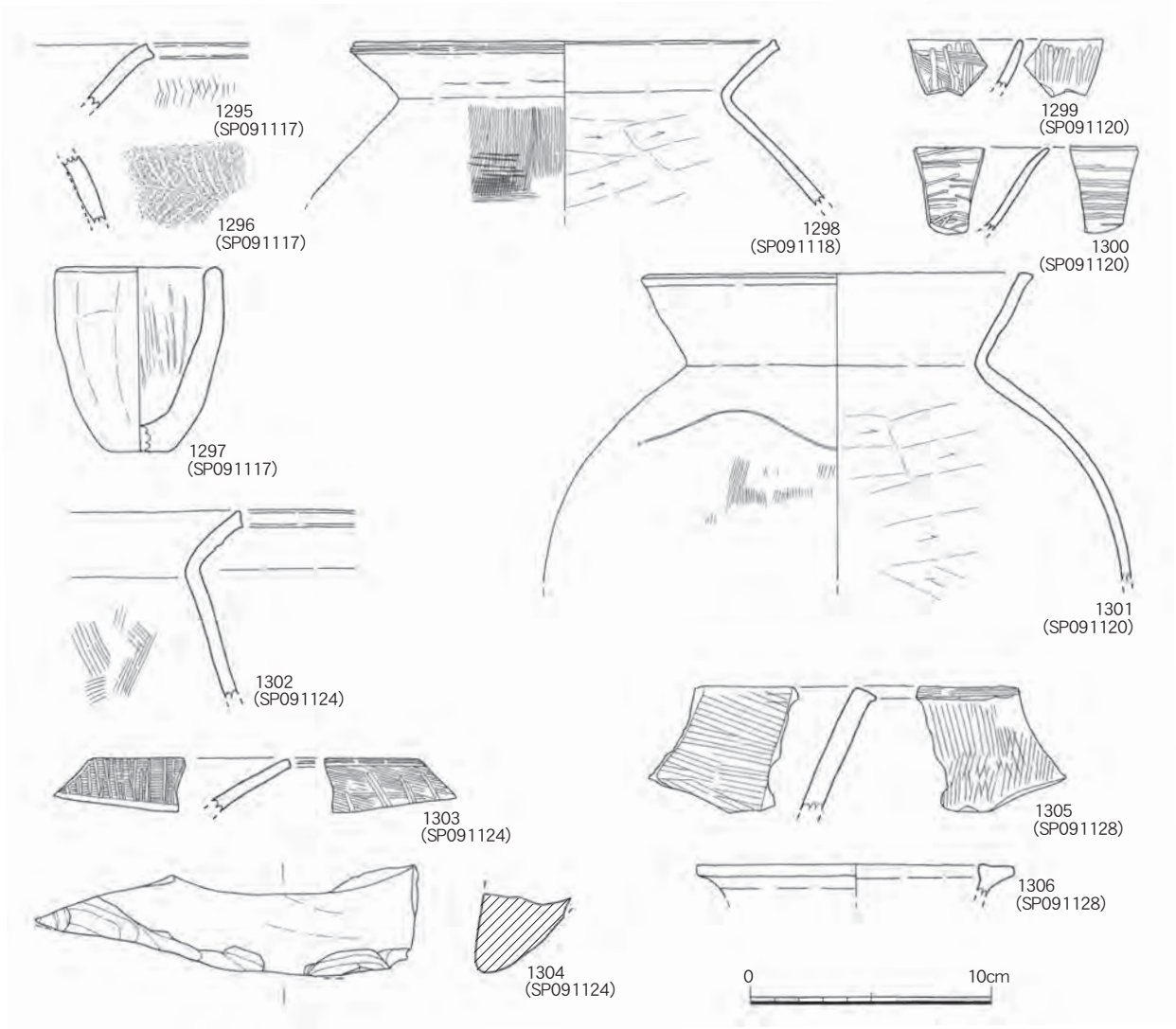


Fig.147　第 6 面 SP 出土遺物実測図②（1/3）

の後、工具による刺突を施す。1294 は SP090578 出土の鉄片で、長さ 2.7cm、幅 1.7cm、厚さ 0.6cm を測る。1295~1297 は SP091117 出土で、1295 は弥生土器の甕の口縁部片で、外面は粗い刷毛目を施す。1296 は弥生前期の小壺の体部片で、釉軸の羽状文が刻まれる。胎土は赤褐色、白色の砂粒、雲母を含み、色調は白橙色を呈する。1297 は蛸壺で、丸味をもった平底を有し、やや小型である。1298 は SP091118 出土の布留系土師器の甕で、口縁部内外面はナデ、体部外面は縦方向の刷毛目調整を行うが、部分的に叩きの痕跡が残る。1299~1301 は SP091120 出土である。1299 は小型の鉢の口縁部片で、内外面ともに縦方向の磨きを施す。1300 は小型器台の受部で、丁寧なナデを行った後、横方向の疎らな磨きで調整する。1301 は布留系土師器の甕である。体部内面は削り、口縁部内外面は横方向のナデ、体部は細かい縦方向の刷毛目調整の後、肩部付近は横方向のナデを施す。薄く、細い波状文が描かれる。胎土に白色、赤褐色の砂粒を含み、色調は白橙色である。1302~1304 は SP091124 出土である。1302 は弥生後期後半の甕、1303 は弥生土器の高坏、1304 は玄武岩の破片であるが、剥離した痕跡が残る。1305・1306 は SP091128 出土で、1305 は弥生土器の大甕の口縁部片、1306 は須玖式土器の小型の広口壺である。

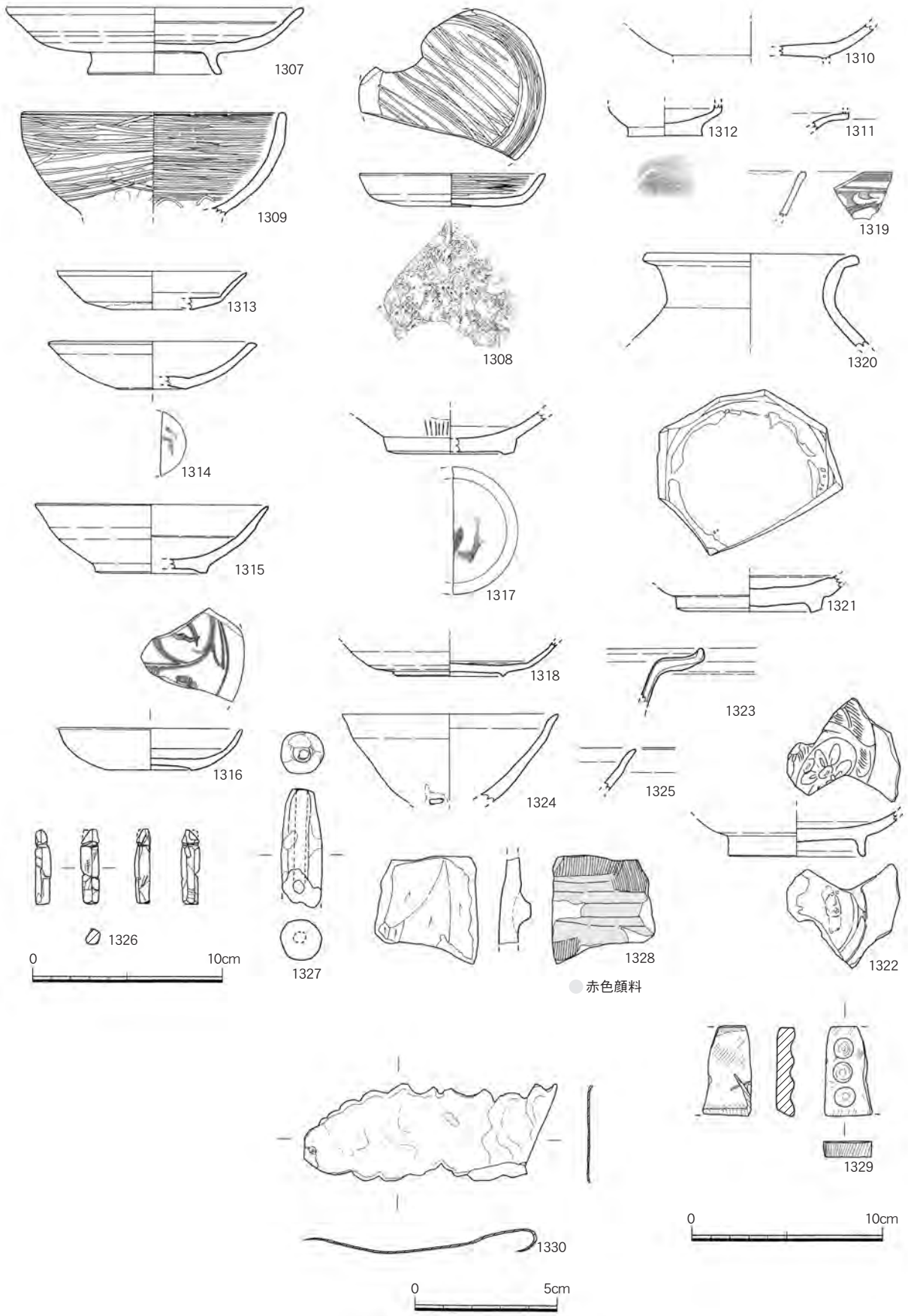


Fig.148　第 1~2 面包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）

8）包含層・その他の出土遺物（Fig.148~160　Ph.252~257）

1307~1330 は 1~2 面の包含層出土遺物である。1307 は土師器の高台付皿で、回転ヘラ削りの底部に、高く、外に踏ん張る高台が付く、1308 は楠葉型の瓦器皿で、赤褐色粒を多く含む胎土で、色調は橙色を呈する。口縁内面はナデの後、部分的に磨き、底部内面はジグザグ状の暗文風磨きを行う。口縁外面はナデ、底部は指オサエで調整する。1309 は楠葉型瓦器椀の口縁部片で、口縁内面の端部付近に浅い沈線をもつ。内面は細く密な研磨、外面は指オサエで調整した後、疎らな研磨調整を行う。1310・1311 は防長産の緑釉陶器である。1310 は高台を欠損する。胎土は精良で、灰色を呈し、内外面に淡緑色の釉がかかる。部分的に黄緑色を呈する。内面見込みに目跡が残る。1311 は蓋で、口縁端部は上方へ折れる。白灰色の軟質の胎土に淡緑色の釉がかかる。1312 は畿内産の緑釉陶器で、灰色の硬質な胎土に濃緑色の釉がかかる。底部は回転糸切りである。1313~1318 は白磁である。1313 は皿Ⅵ-1a 類、1314 は皿Ⅴ-2a 類、1315 は皿Ⅲ-2 類、1316 は皿Ⅵ-2a 類、1317 は碗Ⅳ類の底部片で、1314・1317 は高台内に墨書が残る。1318 は青白磁で、三角形の低い高台が付く。1319 は磁州窯系の陶器の壺の口縁部片で、細かい黒色粒を含む暗灰色の胎土の内外面に化粧土を施し、口縁上面から外面にかけて、明濃緑色の釉をかける。外面には花文を描く。1320 は中国産の陶器の壺である。灰色の胎土に濃緑色の釉がかかる。1321・1322 は越州窯系青磁である。1321 は碗Ⅰ-2 エ類で、高台端部と内面見込みに目跡を残す。1322 は碗Ⅲ-1b 類で、高台内に目跡が付く。内面見込みに箆で、花文を描く。1323 は龍泉窯系青磁の盤の口縁部で、淡青色の釉が厚くかかる。1324・1325 は天目茶碗で口縁下に段を有し、黒釉の地に銀色の細い筋が多数現れる禾目天目である。1326 は滑石製の石錘で、下端は欠損する。上部に紐を結ぶための切れ目を有する。断面は不整な五角形を呈し、側面には擦痕、溝状の凹線が残る。重さは 4.6g である。1327 は管状土錘で、1/4 を欠損する。現状で、23.17g を量る。1328 は円筒埴輪で、断面方形の突帯を巡らせ、外面は縦刷毛、内面は削りで調整する。外面に赤色顔料が残る。1329 は滑石製品で、上・下・左面は直線をなすが、右面は波打ち、破断面を呈することから、二次加工品と思われる。上面に 3 個の直径 1.0~1.2cm、

Ph.252　第 1~2 面包含層出土遺物

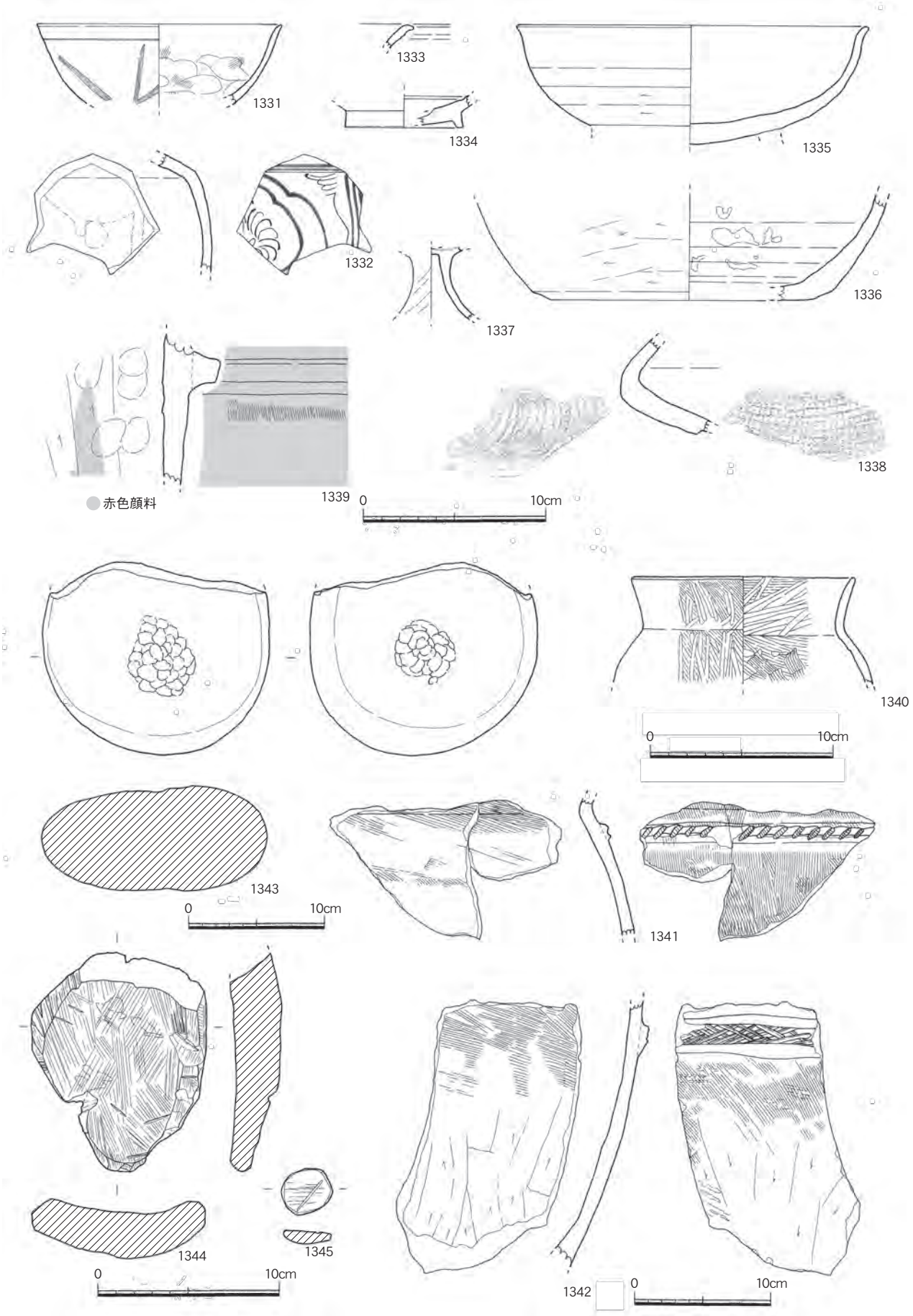


Fig.149　第 2~3 面包含層出土遺物実測図①（1/3・1/4）

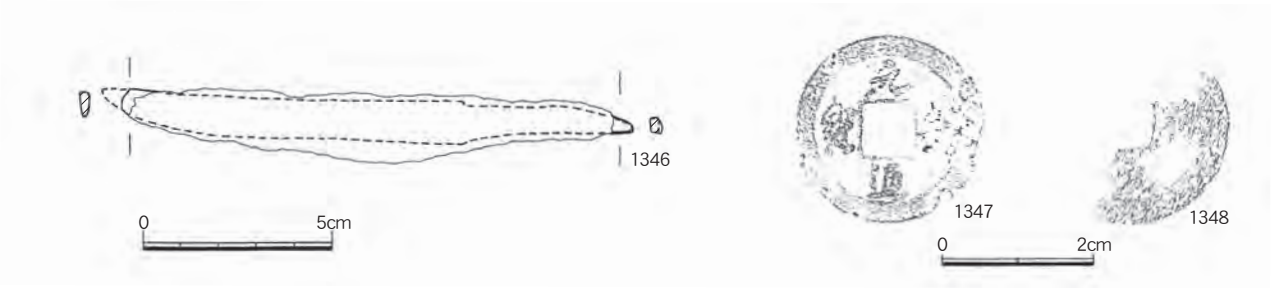


Fig.150　第 2~3 面包含層出土遺物実測図②（1/2・1/1）

Ph.253　第 2~3 面包含層出土遺物

深さ 3.0mm の窪みを設ける。重さは 19.4g である。1330 は銅製品で、飾り金具と考えられる。

1331~1348 は 2~3 面の包含層出土遺物である。1331 は青白磁の小碗で、外面は口縁下に沈線と、分割線の箆押圧縦線をもち、内面は櫛目と箆による花文が描かれる。白色の胎土に青白色の釉が掛かり、細かい貫入がみられる。1332 は越州窯系青磁の壺の肩部片である。外面に箆による片彫りと細線で文様を描く。1333・1334 は防長産の緑釉陶器である。1333 は小椀の口縁部片で、橙色の軟質な胎土に淡緑色の釉がかかる。1334 は椀の底部片で、内面見込みに沈線を巡らせる。黒色粒を多く含む灰橙色の軟質な胎土に濃緑色の釉が全面にかかる。見込みと高台内に目跡が残る。1335 は土師器の椀で、高台を欠損する。1336~1338 は須恵器である。1336 は平底壺で、外面下半は削りで調整される。1337 は小型高坏の脚部、1338 は大甕の肩部片である。1339 は円筒埴輪の小片で、外面に赤色顔料が施され、内面に垂れる。1340・1341 は弥生土器である。1340 は壺で、内外面ともに刷毛目で調整した後、外面は縦方向、口縁部内面は横方向の磨きを施す。1341 は大甕の頸部片で、断面台形の低い突帯に刻目を施す。1342 は土師器の壺の体部片で、偏平な突帯に刻目を施す。外面は叩きの後、斜方向の刷毛目、下半は縦方向の削り、内面は上半が刷毛目、下半は削りで調整する。1343 は変成岩系の台石で、偏平な楕円形を呈し、厚さ 7.6cm を測る。両面の中央に径 4.0~5.5cm の敲打痕が残る。1/3 を欠損し、重さは 3005g を量る。1344 は滑石製石鍋の底部片で、二次加工の未成品である。破面は一部研磨調整される。重さは現状で 419.06g である。1345 は円盤状滑石製品である。稜線のもつ楕円形を呈し、内外面ともに研磨痕が残る。重さは 8.70g である。1346 は推定の長さ 14.1cm を測る鉄製の刀子で、著しい錆化により詳細な形態は不明である。1347 は北宋代の銅銭で、「元祐通寶」（初鋳年：1093 年）

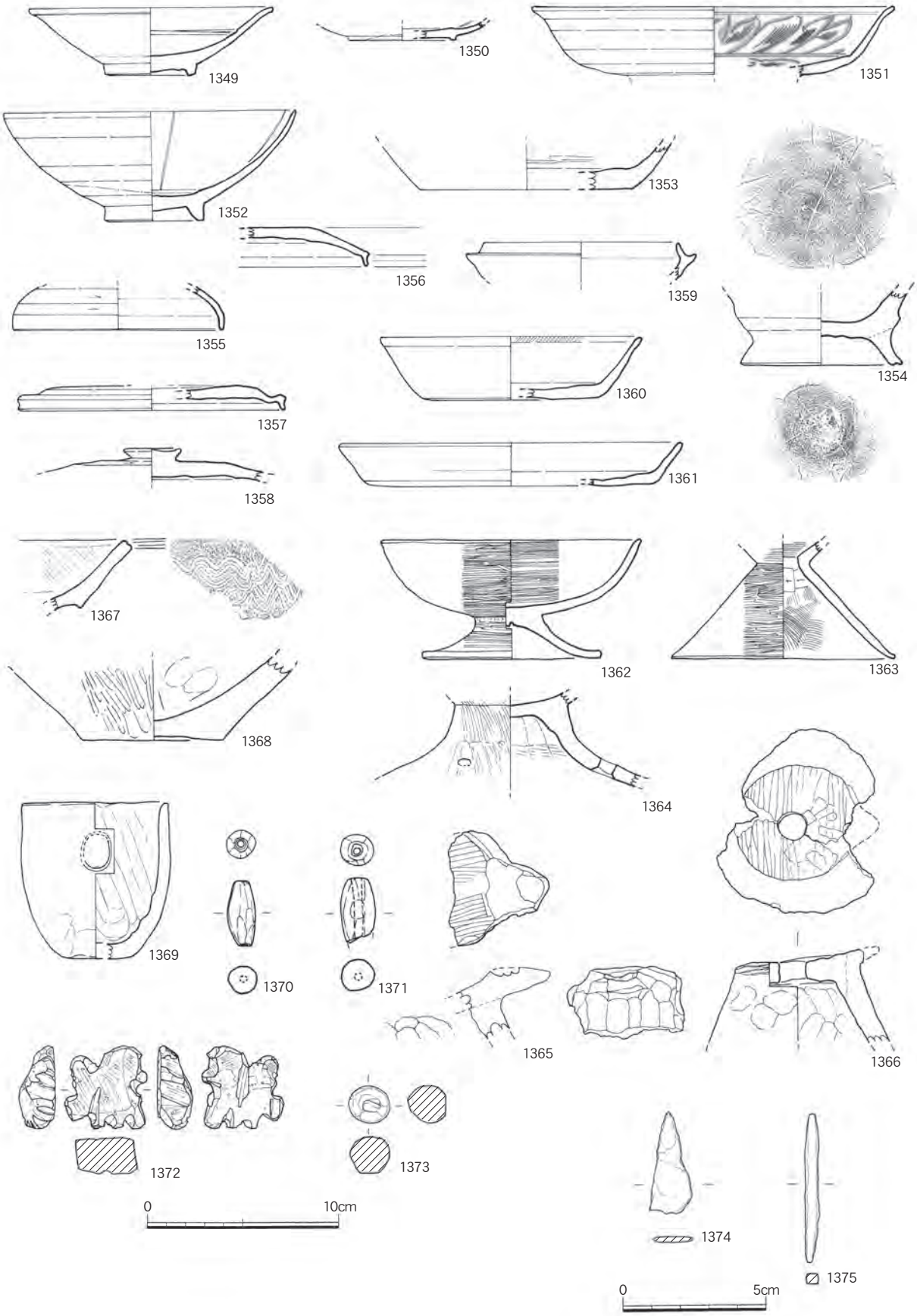


Fig.151　第 3~4 面包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）

である。1348 は銅銭であるが、1/4 を欠損し、銹化が進み銭文は不明である。

1349~1375 は 3~4 面の包含層出土遺物である。1349~1352 は白磁である。1349 は皿Ⅲ -2 類、1350 は皿で、低い高台を削り出す。1351 は皿で、高台は欠損し、内面には箆と櫛で花文を描く。1352 は碗Ⅱ -4b 類で、内面見込みに段を有し、内面を白堆線で分割する。1353 は黒色土器 A 類の平底の鉢か。胎土に金雲母、赤褐色粒を多量に含む。1354 は土師器の高台付椀の底部片である。底部と体部の境に高い高台を付し、内面見込みと高台内に同じ箆記号を有する。1355~1361 は須恵器である。1355~1358 は坏蓋で、1355 は復元口径 10.5cm を測り、天井部はヘラ削りで仕上げる。1356・1357 は天井が低く、口縁端部を折り曲げ、天井部はヘラ削りを行う。1358 は偏平な摘みを有する。1359 は返りを有する坏身で、復元口径 10.2cm を測る。1360 は坏身で、底部はナデで調整する。1361 は皿で、底部はヘラ削りを行う。1362・1363 は土師器である。1362 は精製の脚付鉢で、外面と鉢内面は横方向の細い磨きを施す。1363 は精製の小型器台の脚部で、外面は 1362 同様、細い磨きを施す。1364~1368 は弥生土器である。1364 は脚付鉢で、脚部中位に穿孔を有する。脚部外面は粗い磨き、内面は刷毛目の後、ナデを行う。1365・1366 は沓形の支脚で、上面は粗い刷毛目、体部内外面は指オサエで調整する。1366 は中央部に穿孔を有する。1367 は二重口縁壺で、口縁部外面に波状文を有する。1368 は平底の底部をもつ壺である。内面はナデ、外面は研磨を行う。1369 は蛸壺、1370・1371 は管状土錘で、1371 は下端を欠損する。重さは 1370 が 6.29g、1371 が現状で 9.70g を量る。1372 は粘板岩製の砥石で、全ての面に溝状の窪みが残る。1373 は砂岩製の石球で、稜線は残るが、球状に整えられる。重さは 9.8g である。1374 は、幅 1.5cm、長さ 3.5cm を測る三角形状の鉄片で、厚さ 0.2cm である。1375 は長さ 5.2cm を測る鉄芯で、一辺 0.8cm の断面方形状を呈する。

1376~1413 は 4~5 面の包含層出土遺物である。1376~1380 は須恵器で、1376・1377 は坏蓋である。1376 は端部を下方に折り曲げるが、1377 はわずかにつまみ出す。天井部はともにナデを行う。1378 は坏で、ナデで調整する。1379 は高台付坏で、低い高台が底部と体部の境に付く。底部付近はヘラ削りが残る。1380 は平底の底部片で外面は削りの後、粗いナデで調整する。1381~1384 は古代の土師器である。1381 は坏で、回転ナデで調整する。色調は下半が明橙色、上半は橙色を呈する。1382 は回転ヘラ削りの底部を有する坏である。色調は明褐色を呈する。1383 は皿で、器壁が厚く、底部はヘラ削りの後、部分的にナデを行う。色調は明褐色である。1384 は甕の口縁部片で、口縁は大きく外反する。体部外面には煤が付着する。1385 は防長産の緑釉陶器の底部片で、灰橙色の軟質な胎土に、淡緑色の釉が掛かる。高台内に目跡が残る。1386 は土師器の小型丸底壺で、内外面ともに粗い横方向の磨きを施す。胎土は精良で、色調は褐色である。1387~1389 は沓形の支脚である。1389 は中央に穿孔を有し、外面は叩きで調整する。1390 は庄内系土師器の甕で、体部外面は叩き、内面は削りで調整する。1391 は土師器の甕で、口縁は短く、上部で屈曲する。内外面ナデで調整し、外面には多量の煤が付着する。1392 は底部に穿孔を有する土師器の甕である。外面は叩き、内面は刷毛目とナデで調整する。1393・1394 は弥生土器の大甕の破片である。1393 は口縁部片で、口縁端部に刻み目を施す。1394 は体部片で、偏平な突帯に箆で格子状の文様を入れる。1395 は弥生土器の鉢で、口縁端部は平坦に仕上げる。内面は細く密な刷毛目、外面は指オサエで調整する。1396 は弥生土器の高坏で、内外面刷毛目で調整した後、粗いジグザグ状の暗文を施す。1397 は土師器の高坏で、脚部はエンタシス状を呈し、裾は大きく開く。脚部外面は縦方向の面取りを行い、横方向の磨きで仕上げる。胎土は精良で、暗褐色を呈する。1398 は土師器の小型鉢で、外面は叩き、内面は工具によるナデを施す。1399 は手捏ねで作られた把手か。持ち手部分は断面円形を呈し、接合部

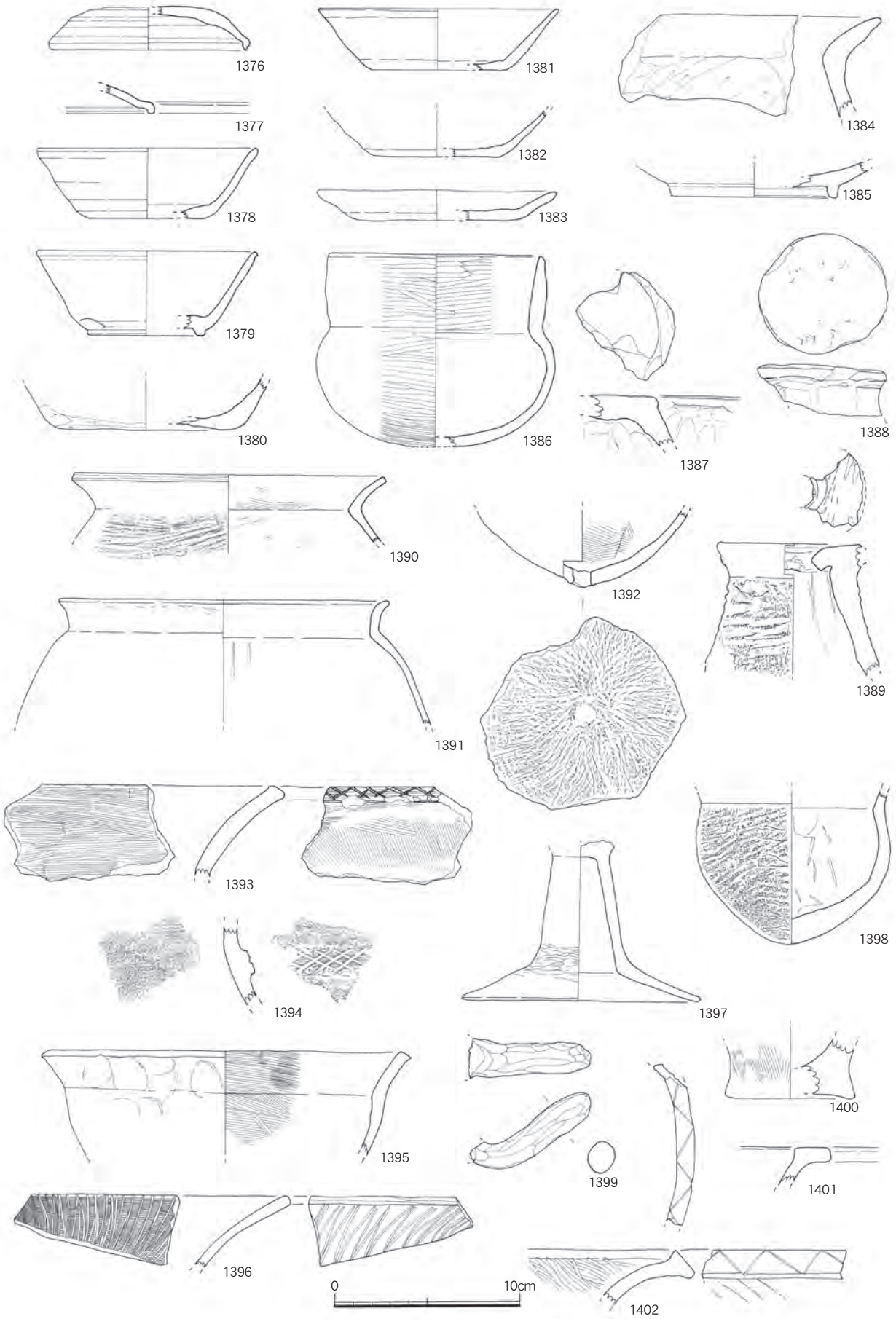


Fig.152　第 4~5 面包含層出土遺物実測図①（1/3）

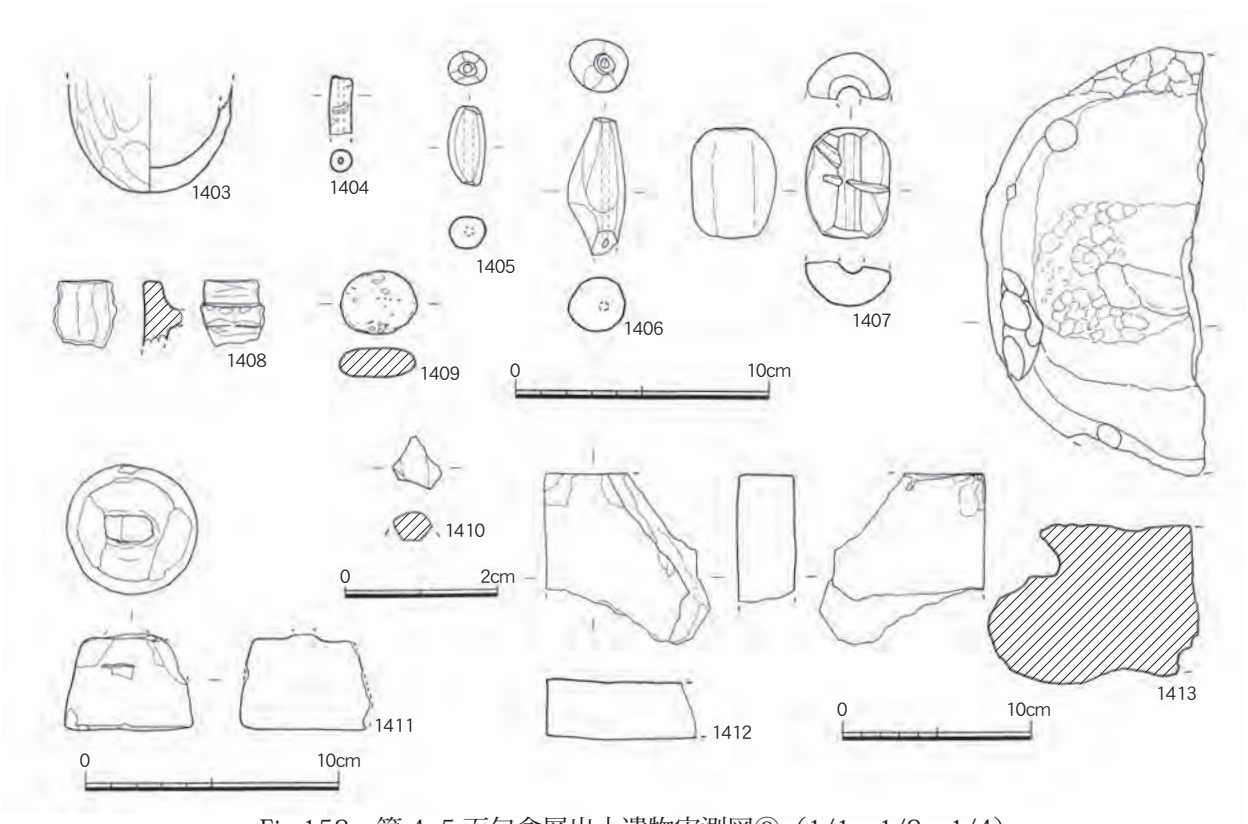


Fig.153　第 4~5 面包含層出土遺物実測図②（1/1・1/3・1/4）

Ph.254　第 4~5 面包含層出土遺物

は偏平となる。1400~1402 は弥生時代中期の土器である。1400 は上げ底気味の甕の底部片である。1401 は口縁部片、1402 は高坏の坏部片で、端部は細い山形の線刻を入れ、内面は太い磨き、外面は工具による斜方向のナデで調整する。胎土に石英、白色砂粒、赤褐色粒、雲母を含み、色調は褐色を呈する。1403 は蛸壺の底部片である。1404 は管状の土製品で、下半を欠損し、色調は茶褐色を呈する。土錘としては、重さ 1.85g と軽く、用途不明である。1405~1407 は土錘である。1406 は下端部をわずかに欠損し、1407 はほぼ 1/2 の残存である。1405 と 1407 の器面は荒れ、粒子が剥がれ、凸凹状となる。重さは現状で、それぞれ 5.27g、19.19g、25.07g である。1408 は小型の滑石製石鍋である。1409 は軽石である。一部欠損するが、使用痕はみられない。重さは 1.93g を量る。1410 は碧玉の欠損品である。研磨調整され、光沢を帯び、濃緑色を呈する。重さは 0.1g である。1411 は鐸状土製品である。上面中央は突起状となり、摘みを有していたと思われる。上面の径 4.0cm、高さ 3.8cm、底径 5.2cm を測り、部分的に欠損するが、現状で重さ

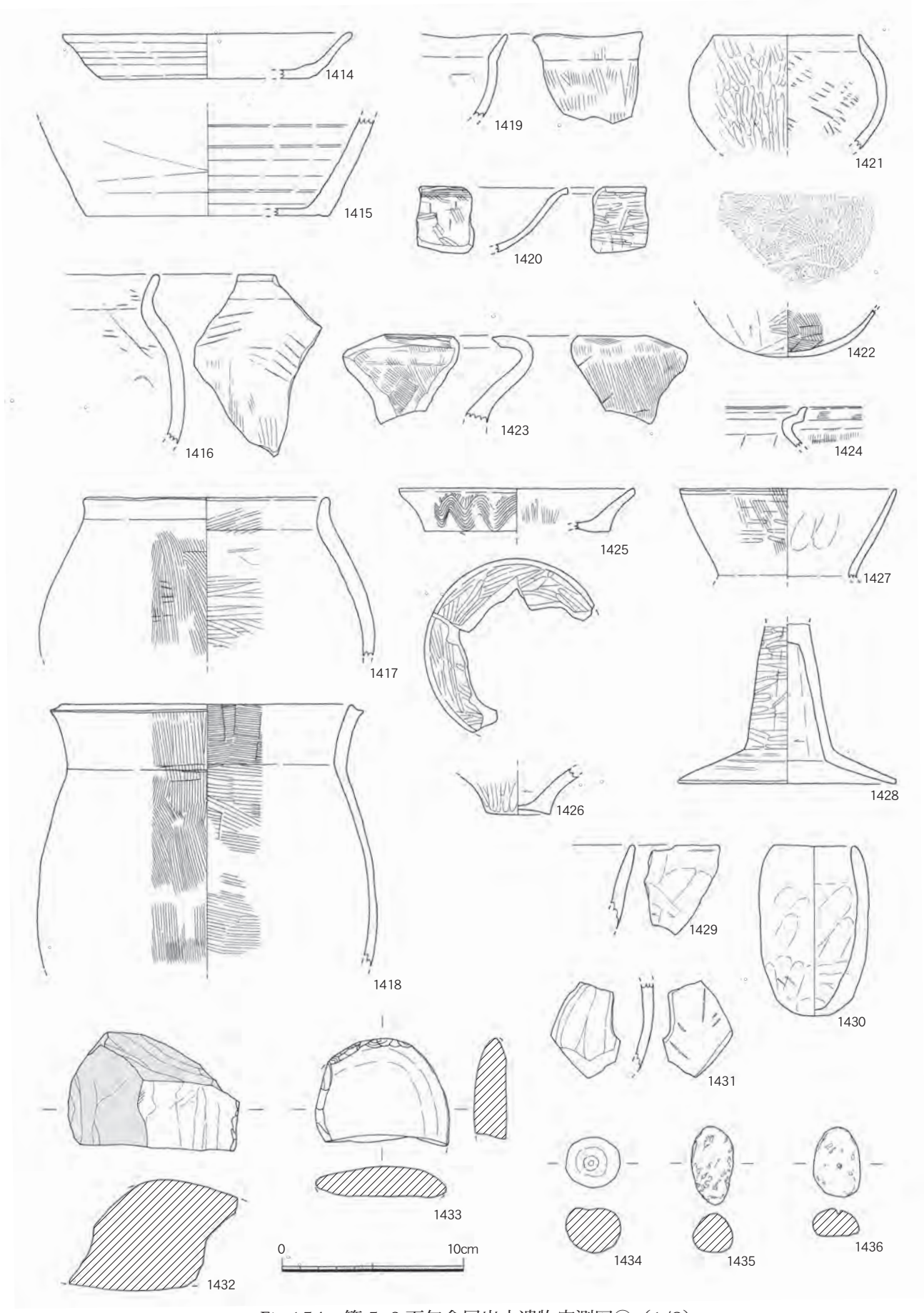


Fig.154　第 5~6 面包含層出土遺物実測図①（1/3）

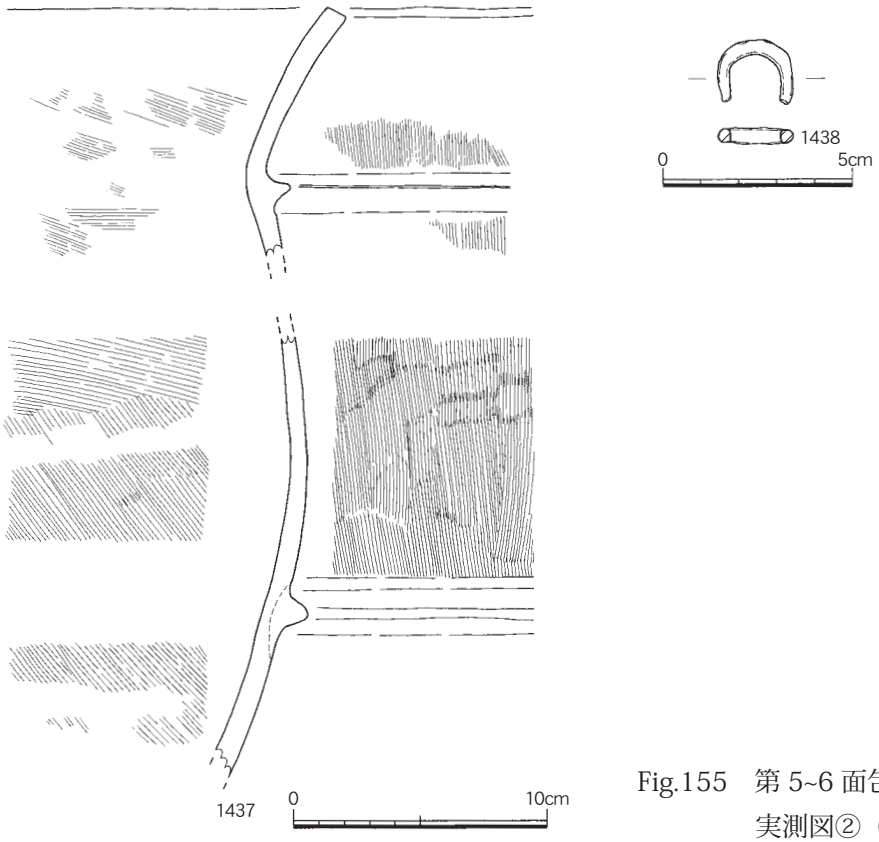


Fig.155　第 5~6 面包含層出土遺物
実測図②（1/3・1/2）

Ph.255　第 5~6 面包含層出土遺物

は 104.1g である。調整は指オサエの後、ナデを施す。胎土には多量の白色、赤褐色の砂粒、石英を含み、大粒なもので 5.0mm を測る。色調は橙色を呈する。1412 は厚さ 2.8cm の須恵質の磚である。1413 は礫岩の台石で、1/2 を欠損する。上面中央に敲打痕が残る。

1414~1438 は 5~6 面の包含層出土遺物である。1414 は回転糸切り底の土師器の坏である。1415 は中国の施釉陶器の壺の底部片で、外面に濁緑色の釉がかかる。1416~1418 は弥生土器の甕である。1416 の外面は刷毛目とナデで調整されるが、かすかに叩きが残る。内面は板ナデである。1417 の外面は 1416 同様、粗い刷毛の下に叩きの痕跡がある。外面は細かい刷毛目を施す。1418 の口縁は頸部から緩やかに外反し、肥厚した端部に強いナデを施し、上端を凹状とする。1419 は弥生土器の鉢で、外面は粗い刷毛目、内面は板ナデで調整する。1420~1422 は近畿Ⅴ様式系の鉢である。1421 の外面は細かい縦方向の磨き、内面は粗い斜め方向の刷毛目を施す。1422 の外面は削りの後、

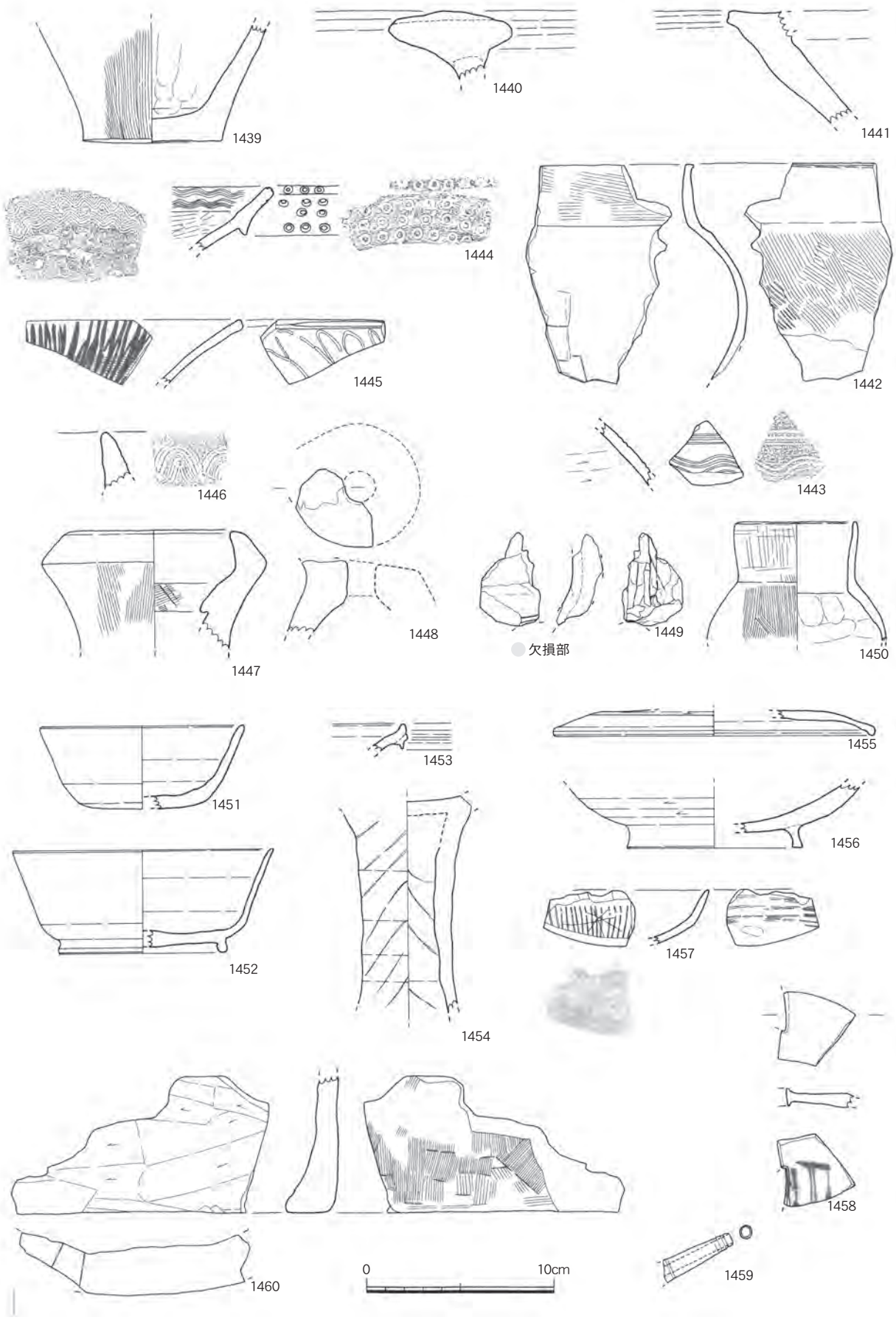


Fig.156　攪乱・その他出土遺物実測図①（1/3）

磨き、内面は斜方向の短い刷毛目を施し、簾状とする。1423 は弥生土器の袋状口縁壺で、口縁はやや波打ち、内外面に粗い刷毛目が残る。1424 は東海系 S 字状口縁台付き甕の口縁部片である。口縁部外面に刷毛工具による押し引きを行う。体部外面は縦方向の刷毛目、内面は工具による縦方向のナデを施す。胎土に白色、赤褐色の砂粒、石英を含み、色調は橙色である。外面には煤の付着がみられる。1425 は庄内系の二重口縁壺の口縁部片で、外面は丁寧な磨きを施したのち、櫛による山形文を施す。内面は縦方向の磨きが残る。胎土に微細な赤褐色、白色の砂粒、金雲母を含み、色調は淡橙色を呈する。1426 は近畿Ⅴ様式系の壺の底部片である。1427 は土師器の長頸壺である。1428 は布留系の高坏の脚部で、脚はエンタシス状を呈し、裾部へは明瞭な稜線をもって、下方で折れる。脚外面は縦方向の面取りを行った後、磨き、脚部内面は削り、裾部内面はナデで調整する。1429~1431 は蛸壺である。1432 は頁岩の台石の小片である。大半は破面であるが、自然面が残る 2 面には擦痕が確認できる。1433 は変成岩の敲石である。大部分を欠損するが、側面に敲打痕が残る。1434 は砂岩製の石球である。丁寧に整形され、球体に仕上げているが、一面のみ平坦面状で、中央に窪みを有する。重さは 24.66g である。1435・1436 は軽石である。すべて自然面で、使用痕等はみられない。砥石として集めてきたものか。重さはそれぞれ、4.97g、4.07g を量る。1437 は弥生土器の大甕の破片である。口縁は頸部より緩やかに外反し、端部は平坦に仕上げる。頸部と胴部下半には三角突帯を巡らせる。頸部下半には多量の焦げが付着する。1438 は径 2.0cm を測る円環状の鉄製品、断面は不正な円形状

Ph.256　攪乱・その他出土遺物①

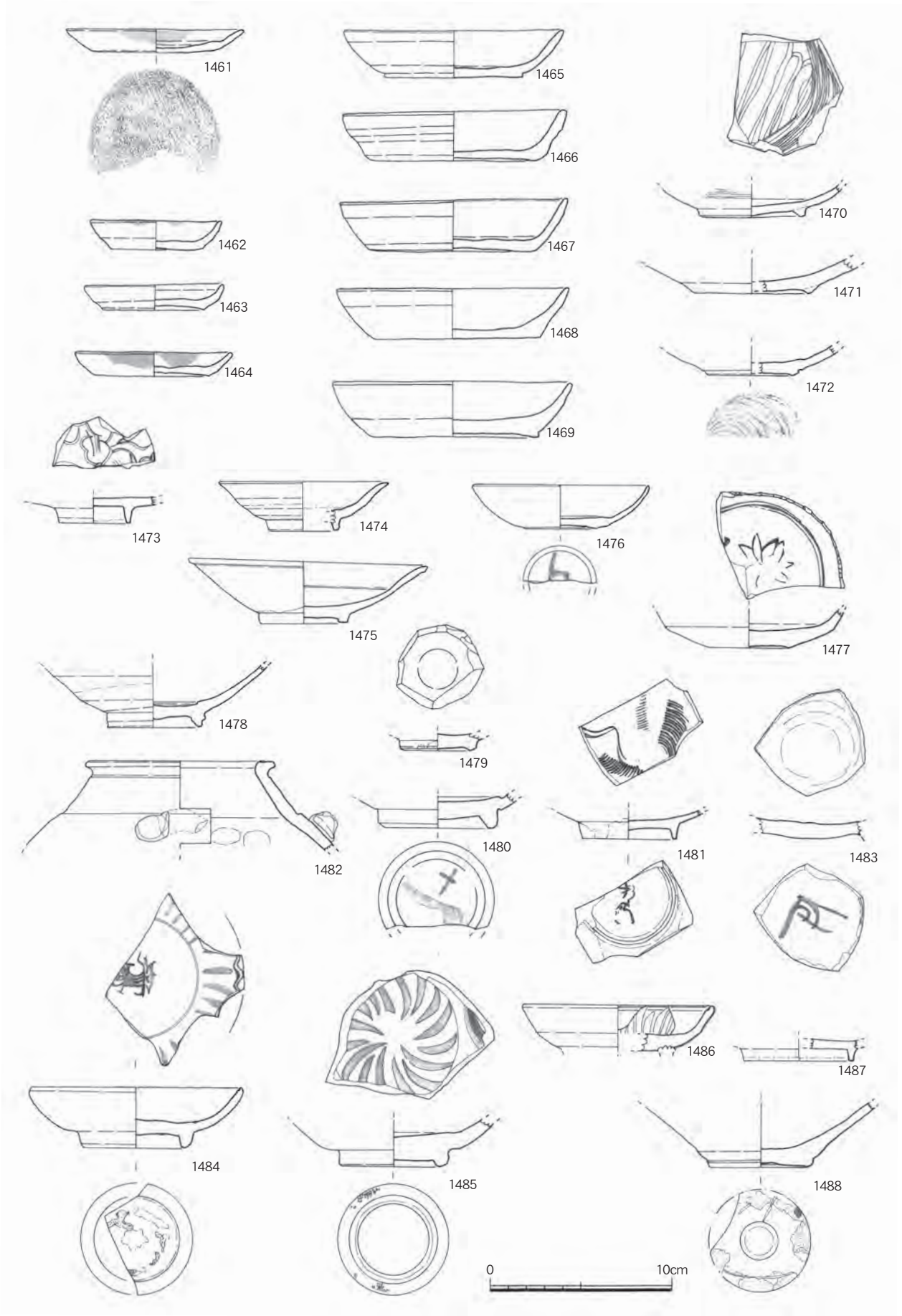
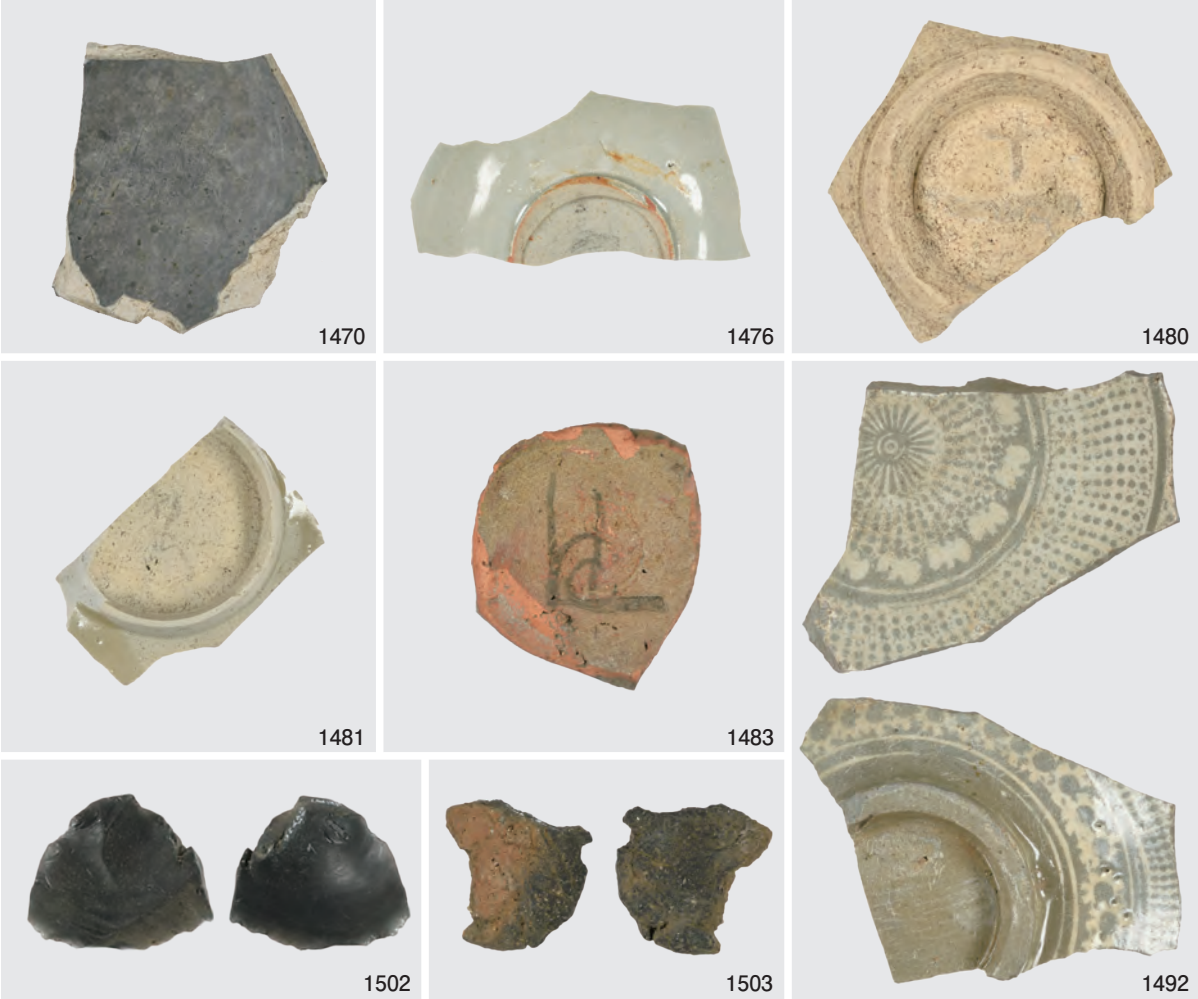


Fig.157　攪乱・その他出土遺物実測図②（1/3）

で、内面に鈍い面を有する。

1439~1515 はその他の遺構や撹乱から出土した遺物である。1439 は須玖式土器の甕の底部片である。1440・1441 は甕棺の口縁部片である。1440 は汲田式の T 字形の口縁部を有する。SE090450 から出土し、この井戸は汲田式甕棺を埋葬する ST090625 を削平していることからこの甕棺墓の下甕であった可能性がある。1441 の口縁部は水平で、胴部は丸みを帯びるものである。内外面ともにナデで調整する。1442 は弥生土器の短頸広口壺である。1443 は山陰系土師器の壺の体部片で、肩部に櫛で、3 条の沈線と波状文を施す。内面は削りで調整される。1444 は東海系の壺の口縁部片で、外面で粘土帯を折り返し、段を付ける。口縁端部に 1 段と外面上半に 3 段の円形竹管文を施す。内面端部付近には櫛で 2 列の波状文を描く。内外面下半は横方向の磨きを行う。胎土に赤褐色、白色の砂粒、雲母、黒色の角閃石が含まれる。色調は暗橙色である。1445 は土師器の高坏で、外面はナデ、内面は指オサエとナデで調整した後、縦方向のジグザグ状の暗文を施す。1446 は西部瀬戸内系の複合口縁壺で、外面に櫛状工具で波状文を描く。1447 は弥生土器の器台である。1448 は沓形の支脚で、頂部に穿孔を有する。1449 は不明土製品である。内面は中位で稜線をもって、直立気味に立ち上がる。外面は縦方向の摘み状の粘土が貼り付けられる。また、下方に穿孔を有する。胎土は赤褐色粒、白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。1450 は土師器の小型丸底壺である。口縁部外面は縦方向の粗い刷毛目、内面はナデ、体部外面は細かい縦方向の刷毛目、内面は指ナデ



Ph.257　撹乱・その他出土遺物②

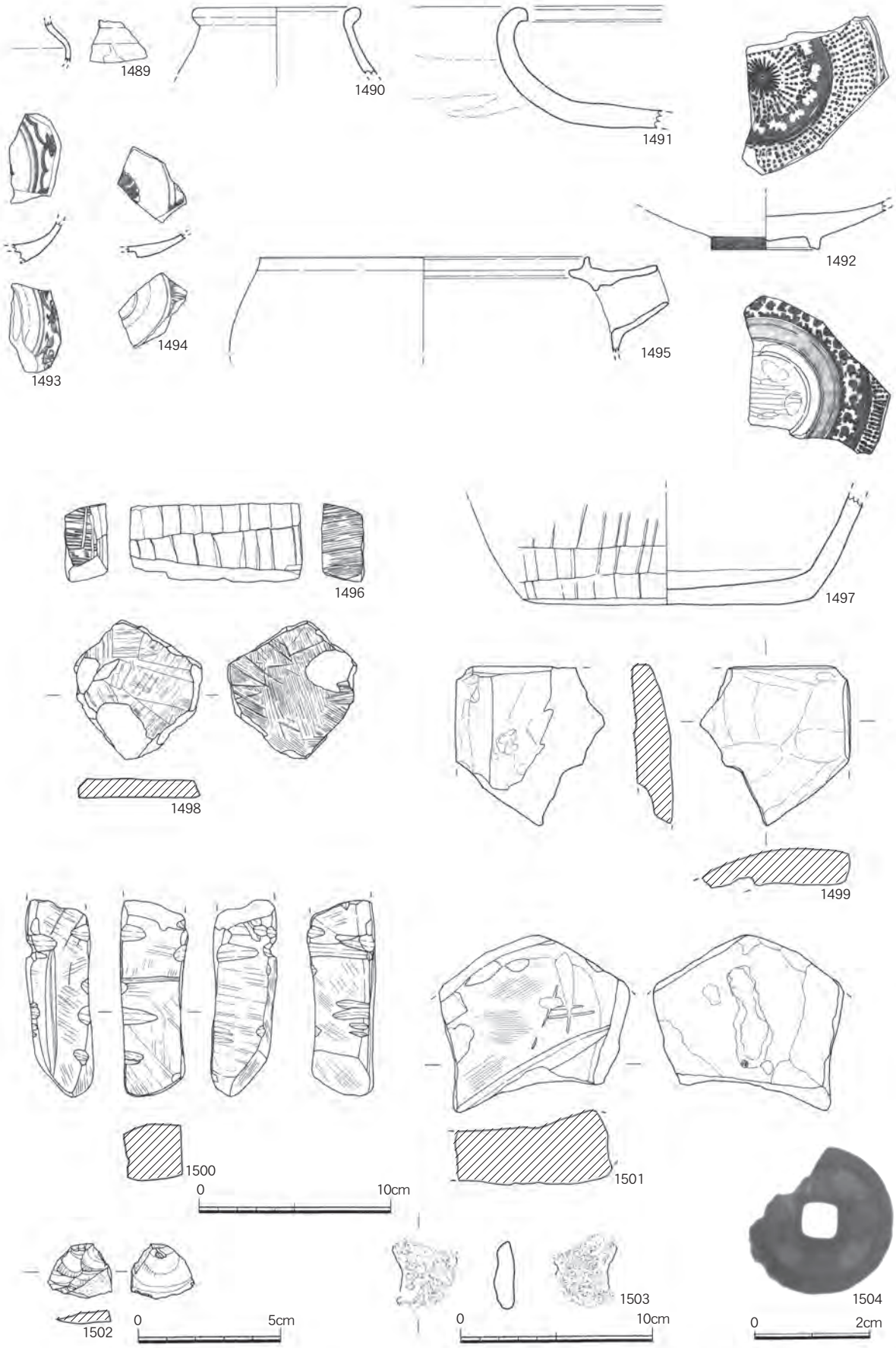


Fig.158　攪乱・その他出土遺物実測図③（1/3・1/2・1/1）

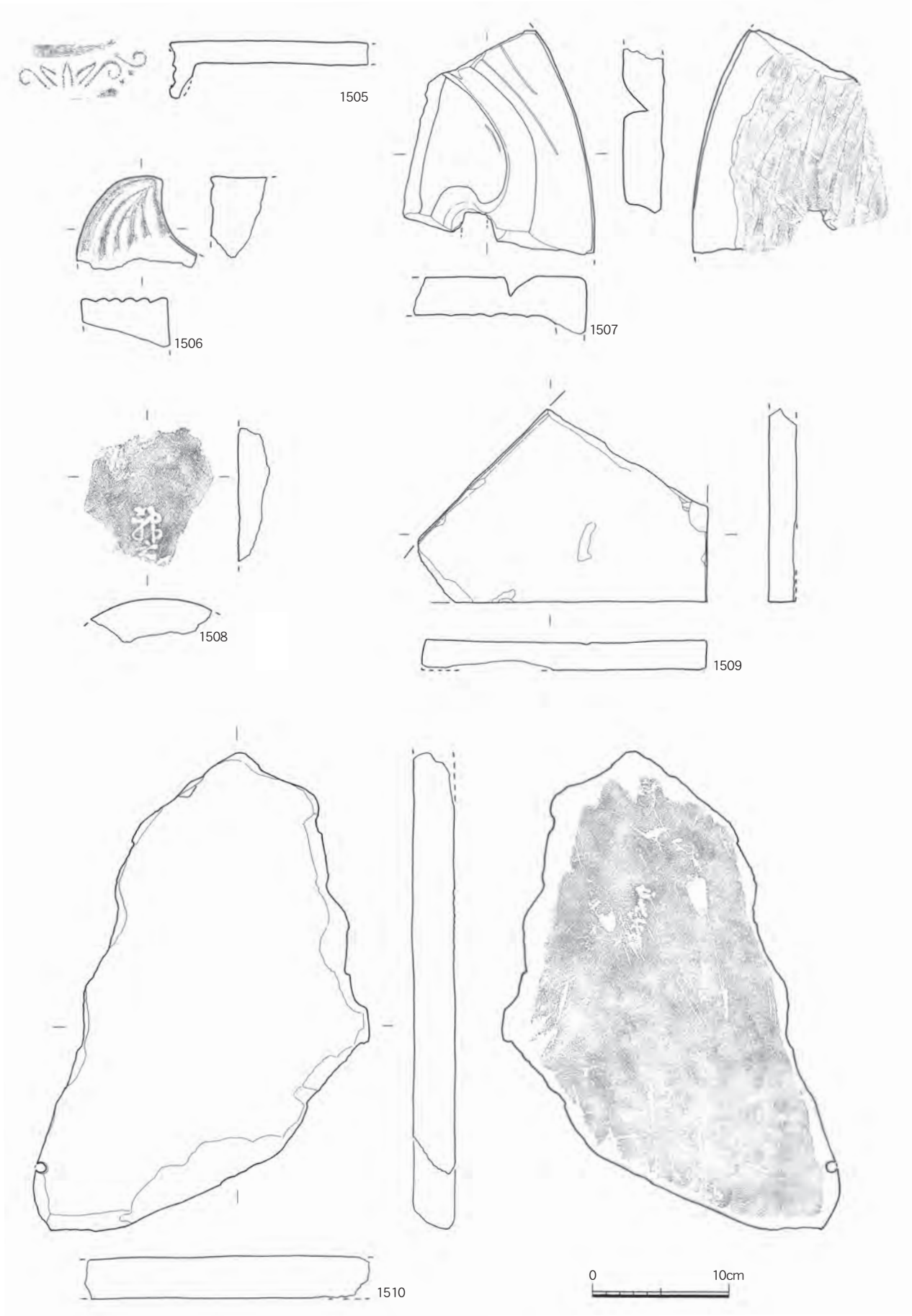


Fig.159　攪乱・その他出土遺物実測図④（1/4）

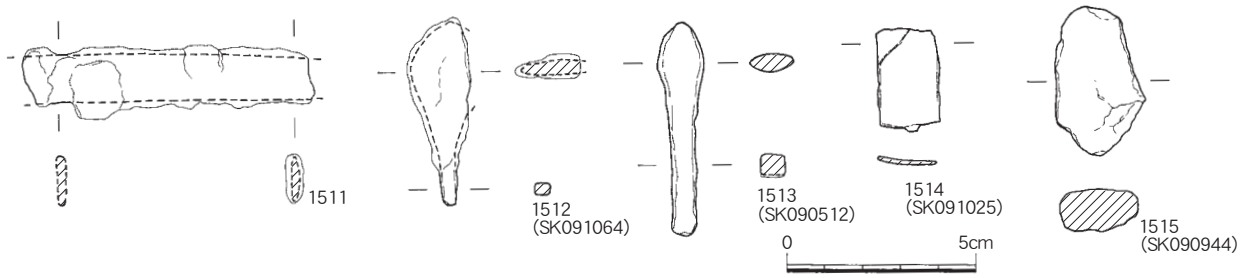


Fig.160　撹乱・その他出土遺物実測図⑤（1/2）

で調整される。1451~1454 は須恵器である。1451 は丸みを帯びた平底をもつ坏で、外底部はヘラ切り未調整である。1452 は赤焼土器の高台付坏で、色調は暗褐色を呈する。1453 は壺の口縁部片で、端部に 2 条の沈線を巡らす。1454 は高坏脚部で、内外面にシボリ痕が残る。1455 は土師器の坏蓋で、天井部はヘラ削りで調整する。1456 は椀で、外面はヘラ削り、内面はナデを施す。1457・1458 は古代の土師器である。1457 は坏で、口縁部内面はわずかに段を有する。内面は横方向のナデの後、縦方向の細い暗文を描き、ヘラ記号を刻む。外面上半は横方向の細かい磨き、下半は指オサエとナデで調整する。1458 は底部片で、底部に方形の穿孔を有すると考えられる。外底部に墨書が残る。1459 は緑釉陶器の注口部分である。端部と欠損部付近に沈線を巡らせる。胎土は灰橙色を呈し、濃緑色の釉がかかる。1460 は移動式竈の基部片である。1461~1469 は土師器である。1461 は回転ヘラ切り底の小皿で、外底部は工具によるナデで仕上げる。1462~1464 は回転糸切り底の小皿である。1461・1462・1464 は煤の付着があり、灯明皿として使用している。1465~1469 は回転糸切り底の坏で、1467 は外底部に板状圧痕を有する。1470 は楠葉型の瓦器椀で、断面台形の低い高台を付け、体部外面は横方向の磨きを行う。内面はナデを行った後、見込みに条痕状、内部にジグザグ状の暗文を施す。1471 は瓦器椀で、内外面ともに丁寧なナデで調整する。1472 は東播系須恵器の底部片で、外底部に回転糸切りが残る。1473 は青白磁の碗である。細く高い高台で、見込みは広く平坦で、箆と櫛による文様を描く。やや灰色を帯びる白色の胎土に、青味がかる透明釉が高台内面中位までかかる。1474~1482 は白磁である。1474 は皿Ⅲ -1 類、1475 は皿Ⅱ -1b 類、1476・1477 は皿Ⅵ -1b 類である。1476 は高台内に墨書が残る。1477 の体部中位は丁寧な打ち欠きを行っている。1478・1479 は小碗である。1478 は見込みに段を有し、1479 は、瓦玉の製作途中で、体部縁辺を丁寧に打ち欠く。1480 は碗Ⅳ類、1481 は碗Ⅴ類で、高台内に墨書が残る。1482 は四耳壺で、肩部に横耳が付く。1483 は陶器の碗の底部片で、高台と体部縁辺を打ち欠く。高台内には墨書が残る。1484~1487 は龍泉窯系青磁である。1484 は直口口縁皿で、内面に縦沈線を施し、その上に山状の線刻を入れて蓮弁文をつくる。内面見込みに印花文を施す。釉は厚く、高台内までかかり、高台内には目跡が残る。1485 は碗の底部片で、見込みに片彫りで花文を描き、体部には櫛目による文様が施される。1486 は直口口縁皿の破片で、内面に縦沈線が入る。1487 は小碗の底部片で、全面に施釉される。1488 は越州窯系青磁の碗で、蛇ノ目高台を有する。高台には目跡が残る。1489 は施釉陶器の小壺の肩部片で、黄灰色の胎土に茶緑色の釉がかかる。部分的に青色に発色する。1490・1491 は施釉陶器の壺である。1492 は朝鮮の粉青沙器である。内外面全面に印花文を施す。1493・1494 は明代の染付皿で、碁笥底の底部をもつ。1493 は内外面にねじ花、1494 は外面に芭蕉葉文を描く。1495 は施釉陶器の行平で、内面に茶褐色の釉がかかる。1496~1499 は滑石である。1496 は石鍋の二次加工品で、破面は丁寧に研磨される。外面にはノミ痕が残り、煤が付着する。重さは 144.52g である。1497 は小型の石鍋の破片である。外面に多量の煤が付着する。1498

は厚さ約 0.8cm の板状のもので、内外面ともに丁寧に面取りし、研磨を施す。重さは 65.95g である。1499 は温石の破片か。現存では方形を呈し、角は全て面取りされる。凸面は丁寧に研磨され、丸味を有する。現状で重さは 168.4g を量る。1500 は砂岩製の手持ち砥石で、上端を欠損するが、他は全て使用される。砥面は、研磨により凹状となり、凹状の溝も 10 本有する。1501 は砂岩製の台石の破片である。上面には幅約 1.0cm の溝が長さ 9.0cm 残る。1502 は黒曜石で、使用痕のある剥片である。不純物、白色砂粒を含み、漆黒色を呈する。現状で重さ 1.8g である。基端部と背面右側、右下端に自然面が残り、自然面の状況から角礫と思われる。背面左側に剥離を施し、縁端部に使用痕が残る。1503 は粘土塊で、用途は不明である。楕円形を呈すると思われ、最大で、厚さ 1.0cm を測る。上下面ともに工具による擦痕が残る。1504 は銅銭で、「元□□寳」、銹化が進み銭文は不明である。1505~1510 は燻された瓦である。1505 は軒平瓦で、中心に三葉文、左右に唐草文を配する。1506・1507 は鬼瓦の小片で、1507 は中央下端に目釘穴を有する。1508 は丸瓦で、胴部に刻印を有する。1509・1510 は磚である。1509 は厚さ 2.0cm を測り、多角形を呈する。1510 は厚さ 3.0cm を測り、中央に刻印を有する。1511 は長さ 7.7cm 以上、幅約 1.3cm、厚さ約 0.3cm 測る板状の鉄製品であるが、錆化が著しく、詳細は不明である。鉈であろうか。1512 は柳葉系の有茎式の鉄鏃で、錆化と欠損のため、全容は不明である。1513 は長さ 5.7cm を測り、身の小ぶりな鉄鏃である。茎は 1 片 0.6cm の方形を呈する。1514 は長さ 2.7cm、幅 1.7cm を測る長方形状の鉄片で厚さ 0.1cm、わずかに反る。1515 は長さ 4.0cm、幅 2.3cm の不整形を呈し、厚さ 1.1cm を測る鉄塊である。 9）

9）小結

9 区は 203 次調査において、最も標高が高く、旧地形の砂丘Ⅰ（博多濱南側砂丘列）の頂部から南斜面に立地する。砂丘Ⅰは縄文時代晩期中葉、北側の砂丘Ⅱは弥生時代前期末前後に形成されたと考えられている。砂丘Ⅰが安定した環境となるのは、前列の砂丘Ⅱがある程度形成されて以降であり、本調査区より北へ約 130m 内陸の第 172 次調査では、弥生時代前期後半の遺構が確認され、現段階ではこれが博多遺跡群の遺構の初現となっている。

9 区で最も古い遺物は縄文時代後期の黒曜石の石刃である。遺構の初現は、弥生時代中期の甕棺墓群であり、中期初頭の壺棺墓 1 基と中期前葉の甕棺墓 3 基を検出している。他に南側の 3 区と 24 区、北側の 12 区と 15 区、西側の 8 区で、弥生時代中期前葉から中期中葉にかけて総数 20 基の甕棺墓を確認しており、列埋葬の状況を示す。旧地形では砂丘Ⅰの頂部とその南斜面にかけて営まれている状況である。その後、埋葬遺構としては、弥生時代後期中葉の甕棺墓 1 基、古墳時代前期の土壙墓 1 基を検出している。集落遺構としては、中期の土坑 1 基と後期の土坑が散見される程度である。

弥生時代終末から古墳時代にかけては、調査区全域で遺構が確認され、大量の遺物が出土する状況である。 9 区では 5 基の竪穴住居、土坑、ピットを検出した。しかし、いずれも後世の削平により、遺存状況は悪く、竪穴住居については、明確な平面プランを確認できたものは少ない。大量に出土した土器には、山陰系、畿内系、瀬戸内系、東海系など他地域の土器が含まれ、博多湾沿岸の地の利を活かした活発な交流が行われていたことを示す。また、碧玉製管玉の未成品や剥片素材 3 点が出土している。ここで特筆すべきこととして、前にも触れたが、古墳時代前期の土壙墓（SX090893）が挙げられる。方形の墓壙に、破損した土師器が散乱した状況下で人骨を検出した。埋葬されたとは考え難い状況である。この人骨と弥生時代中期の甕棺墓より出土した人骨のクリーニング、形質的特徴や病変の観察、ストロンチウム同位体分析を委託したところ、興味深い結果が得られた。SX090893 人骨は熟年の男性であり、本遺跡周辺とは異なる基盤地質出身の可能性が伺え、外来者の遺棄葬の可

能性が指摘されたのである。土壙墓から出土した土器の中には東四国系の二重口縁壺があり、また、SC091000からは駿河の大廓式壺も出土しており、被葬者との関係性が窺われる。また、DNA分析も試みたが、サンプルに十分な量のDNAが残っていなかった。他地域との交流が盛んであった博多遺跡群で、人々がどのように移動し、どのような営みを経て、埋葬されたのか、今後の資料の増加を待ちたい。古墳時代中期・後期になると、遺物は激減し、遺構も中期の土坑1基を確認したに留まる。

8世紀後半から9世紀にかけて、徐々に遺物量も増え、土坑やピットを検出した。9世紀代と考えられる竪穴住居1軒も確認している。これらの遺構からは、都城系土師器や緑釉陶器が出土し、越州窯系青磁についても小壺など、特殊な器形のものがみられる。これは調査区から北へ約300m離れた地点で比定されている官衙域があり、それを囲む集落域の一つが調査区域にも広がっていたと考えられる。また、この時期の遺構から青銅の金属坩堝が出土しており、炉跡等の遺構は確認できなかったが、この付近で工房が構えられていたことがうかがえる。その後、10世紀の溝SD090854が検出されるなど、集落は細々とながら継続する。

11世紀後半から12世紀前半にかけて、博多遺跡群は最も濃密に遺構が展開する時期であり、調査区からも4基の井戸と多くの土師器、陶磁器等の廃棄土坑が検出された。また、様々な貿易陶磁器が宋商人より博多へ商品として持ち込まれている。一方で、合子、小壺等の珍しい器種も少数であるが出土しており、これは、商人たちが宋から博多へ持ち込んだ生活必需品もしくは嗜好品であった可能性が高い。また、波状押圧文の軒平瓦や草花文を配する軒丸瓦が出土しており、宋商人との深い関わりがうかがえる。さて、203次調査の最大の成果として、11世紀後半から12世紀中頃にかけてのガラスの生産に関する遺物の出土がある。ガラス坩堝の出土量はこれまでの博多遺跡群全体量をはるかに超えており、同時に原料と考えられる珪石や鉛塊の出土は、すでに一次生産が行われていた可能性を示すものであった。残念ながら炉や工房等の遺構は確認できなかったが、9区では、この時期の井戸や土坑、ピットなどほとんどすべての遺構から、これらガラス関連遺物が出土する状況であった。特にSE090878、SE090879、SE091125の井戸やSK090771、SK090850の土坑からは大量の遺物がまとまって出土した。容器、容器蓋、小玉、丸玉、連玉、平玉等の製品および未成品、棒状のガラス素材（二次生産）、ガラス滓、ガラス坩堝、原料となる珪石や鉛塊、炭化物、炉壁、羽口など作業に関わる一連のものが廃棄されていた。また、SE090878からは、ガラス小玉の製作途中で、針金に溶けたガラスを巻きつけた状況のものが出土しており、中世のガラス製作痕跡が少ない現状で、製造工程を示す大変貴重な資料である。なお、原料である珪石とともにリシア雲母が出土しており、これは国の天然記念物に指定されている西区長垂から持ち込まれた可能性が高い。岸壁から珪石を含む花崗岩を採取し、舟で博多まで搬送することは、容易であったと考えられる。また、鉛塊については、同位体比分析の結果、対州鉱山のものと近似しており、対馬から持ち込まれたと考えられる。これまでのガラス製作は、中国から輸入した素材を使用し、博多遺跡群では二次生産から行われていたと考えられていたが、今回の遺物の発見は原料からカリウム鉛ガラスを製造する一次生産が行われていたことを示唆する貴重な成果であった。

13世紀中ごろから14世紀初頭にかけては井戸1基と土坑を検出したに留まり、その後、遺構は断絶する。13世紀中頃から14世紀初頭の土坑（SK090162）から小札が出土しており、その当時の博多遺跡群の状況を示すと考えられる。13世紀末から14世紀前半に鎮西探題が設置され、その後、博多は幾度も被災することとなる。調査区付近が、再び生活空間とし利用されるのは16世紀代となってからであり、それに符合するように、調査区では16世紀の土坑を確認し、17世紀の井戸、溝も検出している。

博　多　170

〈第２分冊〉

―博多遺跡群 第203次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1405集

2021年（令和3年）3月5日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
印　刷　株式会社トータルプルーフ
福岡市南区清水4丁目6－3